

転生者無双 奪う者と奪わる者

nonota

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

天（現代）の御使いが、乱世の大陸に現れた。

だが、御使いのいる陣営には、転生した人間も混じっていた。

ひそかに動く転生者は御使いを狂わせていく。

♥と♡を多様しますので、苦手な方を付けてください。

また、超ご都合主義で即落ち系です。

エロは初めてですので、温かい目で見守っていただけると幸いです。

追伸1. タイトルはミスではありません。

追伸2. 各タイトルは ○話（転生者sideヒロイン／転移者sideヒロイン） となっています。

追伸3. 章ごとに主人公が変わります。

第一章 蜀編

目次

一話 (愛紗／愛紗)	1
二話 (愛紗・鈴々／鈴々)	21
三話 (愛紗・鈴々・桃香／愛紗・鈴々・桃香)	42
四話 (朱里&雛里／朱里&雛里)	64
五話 (鈴々・朱里・愛紗・雛里・桃香／なし)	78
六話 (なし／愛紗・朱里&雛里・鈴々・桃香)	93
七話 (星／星)	102
八話 (月&詠・朱里&雛里／詠&月)	121
九話 (楓(オリヒロ) &月&星・愛紗&鈴々・詠・桃香・朱里&雛里／楓(オリヒロ))	133
十話 (白蓮／白蓮)	163
十一話 (星・詠・白蓮・楓・月／なし)	170
十二話 (なし／月&詠・白蓮&楓・星)	196
十三話 (音々音・恋／恋&音々音)	204
十四話 (斗詩／斗詩)	219
十五話 (猪々子・斗詩／猪々子)	229
十六話 (麗羽／麗羽)	239
十七話 (恋・音々音・猪々子&斗詩&麗羽／なし)	251
十八話 (なし／恋&音々音・麗羽&猪々子&斗詩)	266
十九話 (蒲公英・翠／翠&蒲公英)	272
二十話 (紫苑・朱里&雛里／紫苑)	293
二十一話 (焰耶&蒲公英&桃香&鈴々&朱里&雛里・音々音&猪々子&詠／焰耶)	307

二十二話 (桔梗&紫苑/桔梗)	321
二十三話 (翠&蒲公英・焰耶・桔梗・紫苑/なし)	338
二十四話 (なし/翠&蒲公英・焰耶・紫苑・桔梗)	361
二十五話 (シヤム・トラ・ミケ・美以/美以&シヤム&トラ&ミケ)	374
区切	389
一話	393
二話	412
三話	437
四話	474
五話	493
六話	514
七話	537
八話	554
最終話	580
番外編	
番外編 アンケート結果発表!	586
二話 (なし/桔梗&月&詠)	593
一話 (なし/紫苑&朱里&雛里)	603
三話 (なし/美以&シヤム&トラ&ミケ)	613
四話 (恋/なし)	623
五話 (月&詠/なし)	640
六話 (愛紗/なし)	655

第一章 蜀編

一話（愛紗／愛紗）

〈周倉Side〉

俺は、周倉。

転生者である。

望んだ力は、〝状態異常を受け付けられない身体〝 マジカルチンポ〝

〝最強じゃないけど、2番目に強い身体〝。

何故、これを選んだかというところ、〝状態異常を受け付けられない身体〝

は『真・恋姫無双』に転生すると聞いたから、不作とかで食べられる物がなくなつた時、雑草とか食つても平気でありたいから。

次のは、前世で寝取られを経験したから…

〝マジカルチンポ〝の効果は、セックスした相手はこれの虜となり、これ以外でのセックスでは満足できなくなってしまう。精液には能力者への好感度アップ効果がある。また、能力者を他者と共有することに寛容になる。つまり、寝取られの心配がなくなるということだ。

最後の〝最強じゃないけど、2番目に強い身体〝とは、読んで字のごとく、その世界で最強な奴ほどではないが、強い部類に入る身体能力が持てる身体ということだ。

そして転生した俺は、当初、戦とかに参加する気など一切なく、農民として一生を終える気満々でいたが、盗賊に村を襲われた際、無双出来てしまった。

死にたくない一心で斧を振り回していたら、死体の山が出来ていった。

初めて人を殺したけど、特に心を病むとかはなかった。たぶん、
状態異常を受け付けない身体”の効果だと思う。

それからは、農民をやる傍らで、村の防衛をやることになった。
世間が段々と黄巾党とか、そういう面倒くさそうな奴らが現われる
ようになった頃、幼馴染と一緒に戦ってきた相棒（恋人）に、こんな
世だからこそ、一旗あげようと言われて村を出た。

安定した暮らしが出来るようになるまで、性交はしないと約束させ
られているため、まだ、童貞だ（前世では、経験があるから、通算童
貞歴何十年ってことはないぞ）。

俺たちは、劉備軍に入った。そこには、天の遣い・北郷一刀がいた。
そして、速攻で気付いた。

北郷一刀は、転生者だと…
だって、ゲート・オブ・バビロン”使ってたぜ？ 転生者じゃ
なきや何なんだよ。

だが、俺はこの時、奴を甘く見ていた。
俺が3つも能力を与えてもらったのに、奴だけ一つなわけがなかつ
たのだ。

劉備軍に入って俺と相棒は、別の隊に分けられてしまった。俺は関
羽の最前線で戦う部隊に、相棒は劉備の後方の部隊に、この時は、恋
人が危険な最前線ではなく後方に下がってくれたと安心していった。
その一週間後、俺は相棒に別れを告げられた。

理由がわからなかった。

戦闘が続いた為、部隊の違いで会えなくなっていたが、僅か一週間でなんて……

問いつめた結果、北郷が好きになったと言われ、また、すでに閨を共にしているとも告げられた。

そこで理解した、北郷の与えられた能力は、何らかの精神に作用するモノ”だと。

それから、俺は奴を観察し、その”何らかの精神に作用するモノ”が”ニコポ”であることを突き止めた。

奴が俺と同じく3つの能力を与えられたとしたら、”ゲートオブバビロン””ニコポ”そして最後がおそらく”北郷一刀に転生”だと思われる。

前世でも今世でも寝取られたことに呆然となったが、”状態異常を受け付けない身体”で精神崩壊することはなかった。

だが、だからと言って心穏やかというわけではない。

く人の女を寝取った以上、自分も奪われるかもしれないということを理解しているか？

奪ってやろう、おまえが笑顔を振りまいて奪った分だけのモノをくそう、決意した。

劉備軍は、公孫賛の下（すでに義姉妹と公孫賛、趙雲は北郷の餌食の様だ）で兵を集めながら、周辺の黄巾党を狩っている。

俺の地位は、能力の恩恵と、前世で培った能力と、生来の与えられた仕事はキッチリとこなさないと気が済まない性格のお陰で関羽隊の副長まで上っていた。

真面目な勤務態度に関羽からの信頼もある。まあ、真名を預けられるほどではないが。

そうやって地道に信頼関係を構築していったある日、いつものように黄巾党を狩りに行き、俺が集めた情報を元に、俺が作戦を練り、関羽の号令の影で俺が指揮を取り（彼女の指揮はかなり大雑把なのだ）、こちらの被害0で完勝した。

街に帰って報告を行ってから、部下たちの労いと親睦を兼ねて祝勝会をしようと関羽に提案した。

最初は渋っていた関羽だったが、俺の説得で納得してくれたように、俺と関羽のポケットマネーで酒場を貸し切り、祝勝会を行うことになった。

参加したいと言いだした北郷と劉備には、関羽に入れ知恵して部下が緊張して楽しめなくなってしまう為と言って遠慮してもらった（その代わり、忠誠心を生む為と言って金は出してもらった）。

現在、酒場で飲んでいるのだが、俺のそばには、関羽しかいない。部下たちは、向こうで騒いでいる。

なんでこうなったのかというと、

祝勝会、開始。

←

みんな好きに飲み、お互いをたたえ合う。関羽も部下たちを褒めてねぎらった。

←

酒がだいぶ入り、愚痴等がこぼれ始めた。関羽が北郷や劉備の愚痴

を話し始めた。

← 関羽が北郷や劉備の愚痴から自慢に移行し始めた。部下達のテンションが下がり始める。

← 部下たちに関羽は俺が相手するから、離れて騒いでいろと指示。部下達が離れる。

以上だ。

正直言つて北郷は人気がない。何せ、戦闘では宝具の弾幕でワンサイドして兵の活躍の場を奪っているし、常に女を侍らせている。俺と同じように寝取られたという奴も何人かいる。

俺は能力故に全く酔わない為、水を飲むように酒を飲み、関羽にもほぼ同等のペースで飲ませ、さらに睡眠薬を混ぜた酒も飲ませた。

完全に潰れた関羽を背負い、部下達に金を渡して、騒ぎ過ぎないように注意してから、酒場を出る。

さあ、ここからが、策の本番だ。

俺は、関羽を担いだまま、城ではなく、あらかじめ調べておいた防音性と誰を連れてきても見て見ぬフリをしてくれる宿へと向かう。

女将がチラツと関羽を見たが、代金を水増しして払うと特に何かを言うこともなく、部屋へ案内してくれた。

「ん〜」

寝台におろされた関羽は起きる様子もなく、寝息を立てていた。

慎重に服を脱がせていく。

ブラを外し、ほっそりとした身体に圧倒的な存在感を主張する巨乳に思わず喉が鳴った。

体格のいい俺の手にも余るその胸を揉むと、あれだけの戦場を駆け

抜けながらも、瑞々しさを失わない肌と、何とも言えない柔らかさが手に伝わる。

「あ……んん」

「ッ!？」

関羽からもれたかすかな声に、思わず、身構える。関羽が目覚まして状況を認識すれば、俺に待つのは確実に死だ。

しばし様子を見たが、起きる様子はない。なので、再び関羽の胸に手を伸ばす、ゆつくりと感触を確かめるように触る。起きる様子がないことを確認しながら、段々と、大胆に触っていく。

「ふう、はあ、ああああん♥」

この柔らかな谷間に自分のチンポを入れてみたい衝動に駆られる。だが、それは、後でいくらでもできると自身に言い聞かせる。

胸を堪能した次は、パンツを脱がすと、糸が引いていた。

月明かりの中、恥部を見ると、北郷とセックスしている割にしては、閉じていて綺麗だった。

そこで、ふと思い出すと、奴は手あたり次第に女を食いまくっている。

つまり、北郷一刀は、女を自分色に染めるよりも、手に入れることに満足感を覚えるタイプだということか…

こちらとしては、その方がやりやすいなと考えながら、マンコに手を這わせる。

クチュツという音が聞こえた。

「んんんんんんんんんんんん♥♥♥♥♥」

乳首を吸いながら、クリトリスを弄ると、ビクンツと腰が浮いた。どうやらイッたみたいだ。でも、俺は手を止めない。

「はあ、はあ……んっ、あっ、あああん♥」

一時間ほど、ひたすら、愛撫し続けた。乳首とクリトリスは、ビンビンに立ち、呼吸も速くなり、相当ご無沙汰らしく、マンコは大洪水になっている。

これなら、行けそうだと判断し、チンポをマンコに押し当てる。前世ぶりにふれた感触に腰がふるえた。

マンコを味わうようにゆっくりとチンポを突っ込んでいく。

「あうううん……はっ、はひ、んああ♥」

チンポでぴっちり閉じた膣肉をズブズブと割り裂いていく。肉棒で突き込むと、全体に蕩けた秘肉が絡みついてくる。

前世で経験したことがない名器の具合におもわず、声が漏れる。

「くうッ」

「ああああ♥ ひぐうう……あひいひい♥」

関羽が目を覚ましたかもしれないが、20年近くセックスしてなくて溜まりに溜まっている性欲は、止められない。

「あふ、あん、あはあ、ひいひいひいひい♥♥♥♥♥♥」

〈関羽Side〉

温かい…

なんだろう？

私は、ボーツとしたまま、無意識にその温かなモノを抱きしめた。すると、それも私を優しく抱きしめてくれた。

二度寝の誘惑に耐えながら目を開けるとそこには、ご主人様ではない男がいた。

「ッ!? キヤアアア!!」

「っ!? な、なんだよ、朝っぱらから」

思わず、悲鳴を上げた私は、すぐに寝台から飛び出した。そこではたと気づいた、自分が裸であることと、寝台にいる男も裸であること

に。そして、その男が、自分の隊の副官である周倉であることに。

周倉は、のっそりと起き上ってから、こちらを見た。

「愛紗さま、どうなさいました」

その瞬間、私は、完全に目の前の男を殺すつもりで飛びかかった。

「貴様あー！」

「つと、どうしたんですか？」

繰り出した拳を受け止められ、ならばと、反対の拳を放つがそれも受け止められた。

「どうしたもこうしたもあるか！ 我が真名を勝手に呼んだこと、死ぬ覚悟はできているな！」

「勝手になって、愛紗さまがご自分でそう呼べとおっしゃったんですよ？」

「そんなわけあるか！」

「とりあえず、落ち着いて！ 服を着てから、話し合しましょう」

そう言っつて奴は手を離すと、私に背を向けて自分の服を着始めた。

この男は、武人としてとても誠実だし、こういうことでウソを言うようにも思えない。ならば、奴の話とやらを聞いてから判断するとしてしよう。

そして、服を着てから改めて話を聞き、私は、自分の情けなさに、死にたい思いだった。

周倉の話を要約するところだ。

酒場で酔いつぶれた私を周倉が連れて帰ろうとした。

私が疲れた休みたいと騒いだため、仕方なく、この宿へ。

最近、閨に呼ばれないこと等を愚痴り、そのまま、周倉を誘った。

←
最初は拒否したが、恋人と別れたり、忙しかったりで色々たまって
いた周倉は、わ、私の色気に負けていたしてしまった。

←
溜まっていた為、一度で終わらず、何回もしてしまった(その際に
真名で呼べと言ったらしい)。

←
二人ともつかれてそのまま、寝てしまった。

今 ←

「しゅ、周倉、その、ほ、本当に、わ、私たちは、してしまったのか？」
「はい。愛紗さまの美しさに我慢が出来ず、申し訳ありませんでした」
そう言つて深々と頭を下げる。さつきは慌てていて、はつきりとみ
なかつたが、あ、アレはご主人様よりも大きかった気がする。

「愛紗さまはおぼえていらっしやらないんですか？」

「ッ！」

「どうすれば、北郷さまにもつとかまってもらえるか、考えろと怒鳴ら
れたから、必死に考えたんですが…」

「わ、私は、そんなことまで言ったのか!？」

「はい」

もう、お酒は飲まない…

「い、一応、その案とやらを教えてもらおう。も、もしかしたら、昨日
のことを何か思い出せるかもしれないしな」

〈周倉Side〉

朝、目を覚ました関羽、いや、愛紗とひと悶着あつたが、いくら強
くとも二日酔いで弱体化しているのならば、簡単に無力化できた。

そして、口先で彼女の思考を誘導する。ついでに、真名はもらっていない。〃酔っていたとはいえ、真名を許した相手〃と認識させることで、心のガードを削る。

容姿をほめられ慣れていないが故に、そのことを何度も口にすることで、心のガードがより開く。

予想以上にうまくいっている現状に気が緩みそうになるが、まだまだこれからが大事なところだ。

油断はしてられない。

この後、少し話してから、関羽は申し訳なさそうに、酔った勢いで真名を渡すのは…と言いくそうにしていた為、こちらから察したように、なかったことにしようと言うと、あからさまにホツとしたような顔をして、礼を言われた。

〈北郷Side〉

北郷一刀に転生し、俺は今、大いに楽しんでいた。恋姫の世界に転生すると言われ、〃北郷一刀に転生〃 〃ニコポ〃 ゲートオブバビロン〃の三つの特典を望んだ。

〃北郷一刀に転生〃は、主人公でだし、美女たちに会える立場だから。

〃ニコポ〃は、転生したことで、俺を嫌う奴が出てくるかもしれないから。

〃ゲートオブバビロン〃は、言うまでもなく、絶対的な力を得る為。

転生後は、〃ニコポ〃で遊びまくり、フランチエスカ学園に入学後は、春恋*乙女のヒロインたちを早坂章仁から寝取ってやった。

いやあ、縛られて呆然となっている奴の前での、ヒロインたちとのハーレムセックスはマジで気持ちよかった。

外史に来たのが少し惜しいくらいだった。

転移した先は、蜀√だったけど、誰も死なないで終わる一番良い√だし、ま、いつかと考えている。

最初に桃香たち三姉妹を頂き、幽州についてからは、白蓮と星を頂き、さらに、美女を集めた親衛隊を作って酒池肉林の日々を送っている。

そして、今日も、街に出て美女としっぽりやろうと思っていたが、朝起きるとそこには、愛紗がいた。

正直、愛紗は身体こそ最高だが、性格が真面目すぎてウザい。仕事とうるさくてしょうがない。

そのくせ、俺とセックスしたいとか思っているわがままな奴だった。

愛紗とは、いつだってできるし、幽州にはいつまでもいられないんだしってことで、おねだりされても、断って街の女とやりまくってるんだけどな！

「愛紗？ 朝からどうしたんだ？ 今日、休みの日だぞ」

「ええ、わかっています。休みの日だから来たんです」

そういうと、愛紗は服を脱いで下着姿になった。なんだ、いつものおねだりか。

まあ、たまにはいいかと思って愛紗に手を伸ばそうとすると、突き飛ばされ、ベッドに倒れた。

「ご主人様は、毎日お疲れでしょう？ 今日、私がしますから、横になっ

ていてください♡」
普段、セックスする時は、受けになっている愛紗にしては珍しいな
と思い、了承すると、見せつけるようにゆっくりと四つんばいになっ
てベッドに乗ってきた。

二つの大きな果実が重力に引かれて揺れるのに思わず目が行って
しまう。

「ご主人様、腰を上げてください」

言われるがままに、腰を上げてズボンとパンツを脱がされる。

半勃ちのチンコを優しくゆるゆると撫でられる。こそばゆい感じ
が妙に気持ちいい。フル勃起したチンコを見て愛紗は、笑みを浮かべ

た。

「実は、ある人に相談をしました」

「相談?」

「どうすれば、ご主人様もつと私を見てくださるのかを、です。」

そして、ある技を教えてもらいました♡」

そう言いながら、愛紗は髪留めを外した。何をするのかと見ていると、チンコに髪を巻きつけてシゴいてきた。属に言う髪コキ。

「ッ!」

一瞬、意識が飛びかけた。さらさらとした愛紗の綺麗な黒髪が、手コキで触れない全体をコスって、その辺の女のマンコよりも遥かに気持ちいい。

何よりも美髪公とまで呼ばれるほどの美しい髪が、俺のチンコや我慢汁で汚れていくさまが精神的に来る!

「だ、ダメだ!・愛紗、出る!!」

我慢する間もなく、射精した。俺のスペルマが愛紗の黒髪を白く汚す。

愛紗に髪コキを教えた奴、グツジョブだ!

「まったく、ご主人様だったら♡いきなりなんですから♡」

尿道に残っている分を絞り出すようにシゴきながら、あまった片手でブラを外した。拘束から解放され、柔らかそうなふくらみがフルフルと揺れる。思わず手を伸ばしたが、愛紗にその手を掴まれた。

「ダメですよ♡今日は、私がしてあげるんです♡」

まるで、年下の子供に言い聞かせる様に言うと、まだ、髪が絡まったままのチンコを胸で挟んだ。

「今度は、こっちでしますね♡」

竿を覆う柔らかい感触と、その合間合間にあるさらさらとした髪が、とんでもない快感を俺に与える。

「ああ、凄い。愛紗!・凄く気持ちいいよ!」

「フフ……ご主人様、もっと気持ちよくなってください♡」

そういうと、おっぱいを両手でつかんで上下に動かしました。

「うわあッ!」

挟まれただけでも凄かったのに、動き出した途端、我慢する間もなく、軽くイッた。

その汁がローション代わりになって、更に気持ちよくしてくる。

「あ、愛紗！出る！また出ちやう!!」

「いいですよ。いっぱい出して下さいね♡」

そういうと同時に、左右のおっぱいを上下別々に動かしました。

「あッああああ!!」

こらえきれず、二回目とは思えないほど、射精した。

ヤバイ、今日一日で出せる分、全部出した気がする……

「ッ!」

鈴口に突然、今まで感じたことない、刺激を受け、思わず、ビクツとなった。あわてて、顔を上げると、愛紗が、毛先を筆の様にして龟头を撫でていた。

「あ、愛紗、そ、それやめてくれ……」

「どうしてですか？ ご主人様♡ ここはとても気持ちよさそうにピクピクしていますよ」

「い、いいから」

「じゃあ、これはどうですか?」

毛先を弄って口にくわえた。唾液で髪の毛をひとまとめにすると、

鈴口に近づけていった。

「ちよっ、あ、愛紗!」

「えい♡」

髪の毛が鈴口に押し込まれた。

「ひああああ!!」

自分でどんな声を出しているのかもわからなかった。

片手で髪コキシながら、もう片方の手による尿道髪の毛責め。

「うひひひひ!」

外と中を同時髪の毛責めされ、目の前が真っ白になるような射精感と共に俺は意識を失った。

〈関羽Side〉

周倉の言っていた通りにやったら、ご主人様が何かと私を気にかけてくれるようになった。今まで、すぐに政務から逃げ出していたのに私が、同じ部屋にいれば、ちゃんとやってくれるようになった。

それに、私が、髪をいじる仕草をすると、ご主人様は、面白いくらい、赤面して前屈みになる。その様子が何だか、可愛くて、ご主人様の前でワザと毛先を触ったりして反応を楽しんでしまう私は悪くない。

ただ、不満を上げるとするならば、ご主人様に閨に呼ばれても髪でしてばかりで、私に入れようとしさない。

そのことをご主人様に言っても、髪でした後、入れてくれるって言うけれど、髪でご主人様が満足して寝てしまい、悶々としたものが身体に渦巻いている。

桃香さまに「愛紗ちゃんだけ、いいなあ」と言われたけれど、正直言って私だって満足していません。

〈周倉Side〉

この間、ご機嫌だった関羽がしばらくすると、不満そうになっているのを見かけるようになった。

色々な女とつかえひつかえやりまくっている北郷を見て考えていた俺の予想は正しかったらしい。

あの男は、自分が満足すれば、それで良しなのだろう。だから、関羽が性欲を持てあましていることに気付いていない。

最近の関羽は、訓練で持てあました性欲を発散しようとしていた

為、俺が相手をしている（並の兵だと怪我人を出しまくって支障をきたす恐れがある為）。

それでもおさまらないようで、現在、俺と二人で書類をさばいているのだが、落ち着かず、書き損じが目立つ。

北郷は劉備と一緒に街の人々の声を聞いてくるという名のサボリに出ている。たぶんまた、女あさりだろう。

「関羽さま」

「なんだ!？」

ギロツと睨まれた。どうやら俺の想像通り溜まっているらしい。

「なんだか、落ち着かない様子ですし、今日のところは、この辺りで切り上げて、飲みに行きませんか？　自分がお付き合いますから」

関羽は、少し考える仕草をしてから、了承した。

「そうだな。気を使わせてすまない、周倉」

「いえ、副官として、当然です」

手にしていた分を終わらせ、財布を手にした日陰りだした街に繰り出した。

城下の安すぎず高すぎずで中々美味しい店に入り、食事をしながら、酒を飲む。今回は、酌をしまくって酔いつぶすつもりもないので、お互い手酌だ。延々と関羽の愚痴を聞きながら、飲んでいた。

そして、辺りが完全に暗くなった頃、関羽が酔い潰れた。

以前のように関羽を背負い、城に戻ろうとしたら、突然、関羽が、「道が違う」と言い出した。いや、間違ってるねえんだけどなあと思うが、酔っ払いに逆らうと面倒だしとも思い、関羽が言う通りに進んで行く。

「ハハー…」

「ハハハって…」

関羽が示した場所は、俺が関羽を連れ込んだ宿だった。俺の背からぴよんと降りると、手を引いてグイグイと宿へと入り、女将に金を渡して、部屋をとると、再び俺の手を引いて部屋に連れ込まれた。

…まさかこいつ。

「関羽さま、あなた、酔ってませんか?」

「ッ!」

ベッドに腰掛けた関羽の肩がビクンと揺れた。

俺の計画では、もう少し時間をかけて関羽が焦れに焦れたところで、頂くつもりだったが、関羽の持てあました性欲は、酔った振りして一度やったことがある俺を誘ってやろうとするほどとは、予想以上だ。

しばらくお互いに黙っていると、関羽が観念したようにポツリポツリと話し始めた。

「…………ご主人様が、最近よく閨に呼んでくれるようになった。だが、いつもいつも髪ばかり望んで、少しも私に触ろうとしない。ご自分だけ満足されて寝てしまう。

私だつて気持ちよくなりたいのに……

自分で慰めてみても、全然、物足りなくて、身体の中に悶々としたものが溜まっていて……

周倉に誘われた時、もうどうしようもないほど、私は……」

俺が黙って関羽の隣に座ると、俺の肩に頭を預けて寄りかかってきた。

「すまん。どうやら、私は淫乱だったらしい。ご主人様という者がありながらも、私の身体がお前を求めているんだ……」

俺は、関羽の肩に手を回して抱き寄せた。

「関羽さまにそのようなことを言われ、我慢できる者などおりません」顔を近づけていくと、関羽は眼を閉じて唇を突き出した。唇を重ねると、そのまま、舌を口内へ這わせる。

「んちゅ…………れる…………れる…………あふう♥ あむつ、ちゅ…………ぢゆるる…………」

最初こそ、驚いたような顔をした関羽だったが、すぐに、応えるよ

うに自分から舌を伸ばして俺の舌と絡め合う。

ディープリキスをしながら、体制を変え、両手で関羽を抱きしめ、背中を撫でる。そして、段々と背中から腰へと下ろしていく。

「ぷは……しゅうそう♥」

「可愛いですよ。関羽さま」

「今一度、私の真名を受け取ってくれ。私の真名は、愛紗だ」

「ありがとうございます。ならば、自分の真名も受け取ってください。刃という名を」

返礼として真名を教えると、愛紗は嬉しそうに笑みを浮かべた。

「刃」

「なんですか、愛紗さま？」

「そのしゃべり方、二人の時は止めてくれ。お前を遠く感じる」

「…わかったよ。愛紗」

「ああ……刃♥」

「愛紗」

再び、唇を合わせ、互いの身体を撫でまわす。

背や腰、脇を撫でていくと、もじもじと愛紗の尻が揺れていた。何度か、腰を撫でながら、尻に行くそぶりを見せつつ、スルーすると、愛紗はうらみがましく、睨んでくる。そして、何の前振りもなく、尻をガシツと掴み、その柔らかさを堪能するように揉むと、愛紗の身体はビクツと震えた。

「んっ、ちゅぶ、れるる、んちゅう♥ むんん♥ ぷはっ、ハアハア

……」

「愛紗、脱がせるぞ」

「あ、あああ……」

耳や、首筋をついばみながら、服を脱がしていく。時折、きつく、吸いつくとかわいらしい声を上げる。

「ふあ、あん♥ コ、コラ、あんまり強く吸うな。後が残ったら、マズイ♥」

「北郷さまは、愛紗を脱がさないんだろう？ なら、愛紗が脱がなければ、大丈夫だよ」

そう言いながら、服を脱がし、下着だけにする。胸元に舌を這わせながら、ブラ越しにその巨乳を揉むと、勃起した乳首が指に引っかかった。

ブラを外し、そこを重点的に攻めると、愛紗は、大きくのけぞった。

「はうツ、んああああ♥♥♥♥♥」

軽くイツタらしい愛紗にキスしてから、指をパンツに入れる。グチュツと濡れに濡れていた。

「濡れてるな」

「お、おまえが上手すぎるんだあつ、あふう、ああん♥」

「北郷さまよりも？」

「ツ……そ、それは……あつ、んふ、はああん♥」

クチュクチュとマンコを弄りながら聞くと、喘ぎながらも、言いくそそうに視線をそらす。

「答えないのが答えと受け取ろう」

自分も服を脱ぐ為、いったん離れると、愛紗は、「あつ」と声を上げて俺の方に手を伸ばしてきた。どうやら、俺が問いに答えなかったから、気分を害してやめたと感じたようだ。

「自分も服を脱ぐだけだ」

そう言つて優しくキスをする、恥ずかしそうに顔を赤く染めた。俺はすぐに服を脱ぎ捨てた。

「大きい……」

愛紗の視線は、まっすぐに俺の股間に注がれていた。

再び、ベッドの上に上がり、彼女にキスをしてから、彼女の手をとって、俺のチンポへと導いた。

「これが、私の中に入るのか？」

愛紗は、俺のを撫でながら、不安そうに聞いてきた。優しくしごかれ、俺のはより一層に硬度を増した。

「大丈夫だ。前にも、入ったんだから」

優しく押し倒し、パンツを脱がせ、マンコに当てる。

「あん、く、来るのか♥」

「ああ」

わざと、亀頭で入り口をコスってすぐには入れない。熱っぽい吐息を上げていた愛紗が段々とじれつたくなり、涙でうるんだ瞳で俺を睨む。

「は、早く、はふう……入れろお、これ以上焦らすなあ♥ もう我慢できな……ん♥」

普段の凛々しきなど、どこへやら、可愛らしい少女と化した愛紗の頬にキスしてから、亀頭をゆっくりと侵入させる。

「あ、ああ♥ はいって♥」

どこけた声を上げる愛紗を無視して、次の瞬間、一気に根元まで突き刺す。

「はひっ、ひぐうううううううううううううううううううううう」

愛紗の身体が、大きくのぞけた。それと同時に、下腹部に温かな水がかかった。

「あああ、イちゃったあ♥ じんでイひやった♥」

アへ顔をさらして、痙攣する愛紗。ビクンビクンと震える度に、膣内が俺を物理的に刺激し、仰向けに寝転んでもたれることない巨乳が揺れ、視的にも刺激してくる。

愛紗の意識が戻ってくるまで、我慢するつもりだったが、刺激に我慢できなくなり、小刻みに腰を動かし始めた。

「あつ、ああつ、ああん♥ じ、刃……」

「愛紗」

「刃、もつと、もつと動いてくれえ♥ こんなんじゃ足りない♥♥♥」

「ああ、本気で動くぞ！」

「すつ、すごいッ、あん……き、気持ちイイ♥ キモチイイ♥ あひいん♥♥」

本気で、腰を動かし始めると、だらりと下げられていた愛紗の両手と両足が俺の身体に巻きついてきた。俗に言うだいしゆきホールドというやつだ。

「ご、ご主人様なんかじゃ比べ物にならない……ひいいッ♥ また、またあ、イクうううううううう♥♥♥♥♥♥」

淫らにゆるんだ愛紗と目が合うと、どちらともなく貪るようにキス

する。

「ちゅぶぶ……ちゅぶぶぶ、んぢゅっ、れろれろ ♡ ちゅぱ ♡」

「愛紗、そろそろ、出る……」

「出して ♡ 私の中に、刃のあついのをいっぱい出してくれえ ♡ ♡ ♡」

出来てはまずいと腰を引こうとしたタイミングで、愛紗の足に力がこもり、今までで、一番深くつながつた。

「あひいいい……イクうううううううううううううう ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡」

膣内すべてで、絞り上げられ、俺は耐え切れず、射精した。

「で、出るー！」

びゅっ、びゆるびゆくっ、びゅぶぶっ、びゆるるるっ、びゅーびゅー

「ああああああああ ♡ あついいい……あついいい ♡ またイっちやう ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡」

めいいっぱい絞られた俺のイチモツだったが、まだ、なえない。

まあ、まだ一度しか、出してないから当然と言えば、当然だ。

硬度を失っていない為、このまま、連戦に移行する。

「う、ウソ ♡ 刃の、まだ固いのオ……死んじゃう、死んでしまうう ♡ 待ってえ ♡ ♡」

拒否の声を上げながらも俺をつかんで離さない愛紗との夜はまだまだ続く。

二話（愛紗・鈴々／鈴々）

〈周倉Side〉

「ん、んちゅ、れる…」

幽州の城内、俺たちに貸し与えられた執務室で、俺と愛紗は、抱き合って口づけを交わしていた。

「ぶは……刃♥」

「ダメだ。愛紗、北郷さまに呼ばれているんだろ？」

セックスを求めてくる愛紗を押しとどめる。

「ああ。」

まったく、ご主人様は……仕事もせずに、毎日毎日遊んでばかりで……

少しはお前を見習ってもらいたいモノだ」

椅子に座る俺に甘えるように寄りかかってくる愛紗を受け止める。

執務室は、一応、劉備と北郷の仕事場なのだが、二人ともサボリ癖があり、いや、北郷のサボリ癖が劉備にうつつたと言うべきか、とりあえず、本当ならば、その二人が仕事をしていなければならぬのだが、サボっている為、そのしわ寄せが、俺と愛紗にきている。

今日、北郷は公孫賛のところと呼ばれているが、その内容は……あまり深く考えないようにしよう。

張飛ははつきり言って、デスクワークについてはまったく、期待が
出来ない。

まあ、そのおかげで、基本的にここにいるのは、俺たち二人である為、いちやいちや出来るのだ。時折、愛紗をからかいに来る趙雲がいるが、近づいてくれば、気配を感じる為、今のところ、バレてはいない。

「二刻…いや、一刻もあれば、絞り切れるから、待っていてくれ」

そう言ってキスして愛紗は、執務室を出ていった。

最近、愛紗は北郷に閨に呼ばれても、あまり嬉しそうにしない。むしろ、仕方なくやってやるといった感じだ。

当然の変化と言えるかもしれない。彼らは主従関係を結んでいる。

人間の関係とは、お互いに利益を得られるからこそ、円満な関係を結んでいられるのだ。

だが、北郷と愛紗はどうだろうか？

原作ならば、未熟ながらも主としてふさわしくあろうとし、武将として結果を示していたし、男女の仲としても、お互いに支え合っていたと言えよう。

しかし、今の北郷は、与えられた責務をまっとうしようと思わず、愛紗が一人武功を示すだけ。

男女の仲でも、北郷は、自分の性欲を優先し、相手を見ていない。結果、北郷だけが得をする関係になるし、愛紗の心境も無意識のうちであるが、お仕えさせていただくではなく仕えてやっているへと、閨に呼んでいただくではなく閨に呼ばせてやっているへと変化してきている。

北郷に天の遣いとしての価値がなくならない限り、愛紗が北郷を見限ることはないだろうし、一応ニコポの影響下にある為、笑顔を向けられると、好意を抱いてしまうようだ。

で、一人残された俺は、黙々と書類を片付けていく。

〈愛紗Side〉

「はあ… ちょっと先の方を毛先で掘っただけで、すぐ漏らすとは、本当にこらえ性のないお方だ」

思わず、先ほどまで絞っていたご主人様への苦言を口にしてしまう。副官である刃と一緒にいる所をご主人様に見られてから（その時は普通に一緒にご飯を食べていただけ）、やたらと、私を呼ぶようになった。嫉妬しているんだろうと刃が笑って教えてくれた。

その分、刃と一緒にいられないのが、寂しいなあとか、考えていると、建物の陰で膝を抱えている我が義妹・鈴々がいた。

「鈴々どうしたんだ？　こんなところで」

「愛紗あ…」

泣きそうな声を出す義妹を慰め、話を聞いた。

内容を簡単にまとめると、ご主人様が構ってくれないし、閨にも一度呼ばれて以来、呼んでくれない。というものだった。

鈴々は、自分が何かご主人様が怒るようなことをしてしまったのではないか？　でも、自分では何がいけなかったのかわからないと、悩んでしまっていたらしい。

ご主人様は我々とあまりせず、行きずりの女とばかりしているのは、いつまで幽州にいられるかわからないから、幽州にいられるうちに幽州の女と多くやりたいたい。我々とは、道中でたくさんできるだろうし、と考えていたそうだ。（髪で焦らして吐かせた）

さてと、どうしたものか。

私が、ご主人様に鈴々とちゃんと接しなければ、髪でしませんとも言えば、相手をするようになるだろう。しかし、カンの良い我が義妹は、すぐにそれに気付いてより一層に落ち込んでしまうだろう。

「鈴々、ご主人様と一緒にいる為なら、何でもするか？」

「にや？」

「なんとかできるかもしれないが、その為には、一度、大変な苦勞をすることになる。それでもいいか？」

鈴々は、しばらく考え込んでから、顔を上げた。

「お兄ちゃんと一緒にいる為なら、鈴々は頑張るのだ！」

元氣を取り戻した、鈴々は、何をすればいいと空に拳を練り出しながら聞いてきた。

「少し待ってくれ、話をつけておく」

そう、話して鈴々と別れた。

〈周倉Side〉

「張飛さまを引き入れる？」

「ああ、おまえなら、私の時のようにご主人様を夢中にする何かを見つけてくれるだろう？」

執務室に戻ってきた愛紗は開口一番、張飛を寝取れと言ってきた。わけがわからず、問いただすと、張飛が寂しそうにしている所に遭遇して話を聞いたなら、張飛がないがしろにされて寂しがっているとか、何とかしよう。ついでに寝取ってしまえと言いだした。

なんでそういう話になるんだと、聞くと、愛紗は頬を紅くして伏していった。

「お、おまえと聞て共にしても私ばかりイッてしまつて、刃は満足できるほどしていかないだろう。」

鈴々は体力だけなら、私よりも上だし、あいつが加われれば、おまえも満足できるようになると思うんだ」

んなことを、言われちまつたら、やるしかないと思つたが、問題は、どうやってするかだ。

愛紗の時は、俺が彼女の副官という立場だったからこそ、できたといえる。

張飛とは、ほとんどかわりがない為、急に接触しても不自然であり、趙雲あたりがそこから、俺たちのことに気付くかもしれない。

さてどうしたものかと、思考を巡らせる俺に、愛紗は得意げに「良い考えがある」と言いだした。

どこその総司令官の様なオチにならなければいいと思いつつ、任せることにした。

あれから、数日が過ぎ、今日も今日とてサボった上司達（北郷&劉備）にかわつて書類に追われていると、愛紗が張飛を連れて現れた。

「あ！ 愛紗のところの怪力の兄ちゃん！」

怪力の兄ちゃんって…

確かに、技術とか武芸とか身につけているわけでもないんで、パワー重視で戦ってますがね…

「周倉です。張飛さま」

「兄ちゃんが、鈴々を助けてくれる人なのか？」

何故、こつちではなく、愛紗に聞くんだ？

俺の思ったことを理解してか、苦笑して愛紗は話す。

「ああ、ただし、条件がある。もう一度聞くぞ、鈴々、ご主人様と仲良くなる為には、一時とても大変な思いをすることになる。それでもいいか？」

「愛紗は心配性なのだ。大丈夫なのだ！」

早く条件を言えという張飛をじつと見つめてから、愛紗はその条件を口にした。

「そこにいる周倉と閨を共にすること。それが条件だ」

「あ、愛紗!？」

目玉が落ちるんじゃないかというくらい目を見開き、張飛は俺と愛紗を交互に何度も見る。

「先に言っておくが、冗談ではない」

そう言いながら、愛紗は、張飛のもとを離れ、俺の隣に立った。

「で、でも、そういうのは、好きな人としかやっっちゃダメだってお姉ちゃんが言っていたのだ」

「そうだな。でも、それだけの対価を払わないといけないんだ。

それにこれは、おまえの為でもあるんだぞ」

「鈴々のため？」

「そうだ。周倉を頼ってご主人様と仲良くなれても絶対にお前は不満を感じるようになる。そうなった時、周倉が必要になるんだ」

あのお、俺は道具か何かですか？

思わず、愛紗をにらむが、無視された。

張飛は、いつもの元氣ツ子がなりを潜め、オロオロとしていた心なしか、虎の髪止めも困り顔をしているように見える。

しばらくかかりそうなので、二人に断りを入れ、席を外す。湯呑みを三つと茶がないので白湯の入った急須を持って戻ると、張飛がこっちをキツと見た。

「？」

「怪力の兄ちゃん、鈴々、頑張るから、どうすれば、お兄ちゃんともつと仲良くなれるか教えてほしいのだ」

「どうやら、俺がいない間に覚悟を決めたらしい。」

「わかりました。お手伝いしましょう」

「そういうと、張飛の表情がぱあつと明るくなった。」

「ですが…」

つと続けると、今度は、しゅんつと悲しそうな顔にか変わった。正直、ちよつと面白い。

「ですが、今は仕事の時間、今日の仕事が終わった後でよろしいですか？」

「良いのだー！」

再びぱあつと明るくなった。本当に面白い娘だ。

その後、「手伝うのだ！」と言ってきたが、邪魔にしかならず、結局、愛紗と二人で頑張ったが、書類仕事が終わったのは、日が暮れて辺りが暗くなってからだった。

一緒についてくるかと思われた愛紗だったが、劉備に用事があるとかで仕事が終わるとすぐに出て行ってしまった。たぶん、サボったことに対する説教でもしに行ったのだろう。

そんな話を話しながら、張飛とラーメン屋に入り、夕食を済ませたが、俺も大食いな部類に入ると思うが、張飛の食事は、とんでもない量だった。満腹中枢が機能してないんじゃないかと心配してしまった。

その後、例の宿へ向かった。

宿が近付くにつれ、張飛は明らかに緊張しているようで、動きがぎこちなくなつた。俺が今からでも遅くないからやめるかと聞くと、彼女は首を振つた。決意は固いらしい。

宿に着くと、毎度同じように女将に金を払い、部屋に案内される。

「張飛さま、これから、するわけですが、これだけはやめてほしいということはありますか？」

「にや？」

「例えば、服は脱がされたくないとか、やってほしくないことです」

「うくん…じゃあ、ちゅうだけはやめてほしいのだ」

「わかりました」

服はお互いそれぞれで脱いだ。張飛の身体は、凹凸こそ乏しいが、発展途上であることを考えると、年相応で、悪くない。特にぷりつとした尻がいい。

ベッドに座る俺の上に背面で座らせ、脇から手を回して、僅かに膨らんでいる胸をさわる。

「兄ちゃん、愛紗みたいにバインバインじゃないけど、触つてて楽しいのか？」

「ええ、楽しいですよ」

愛紗の巨乳とは違った柔らかくも固い貧乳の感触は、それはそれでいいものだ。

触り方を変え、指先で乳首を転がす様にする。

「ひやつ、あん…：…なんなのだ？ 今、身体がピリッとしたのだ」

おいおい北郷、まさか、この娘つて感じたことなかったのか？

すでに北郷とやっていたんだから、最低限の土台はできていると思つたのに。

「その感覚に集中してください」

感じているらしい乳首を中心に攻めていく。

「あつ、あひつ ♥ んひい ♥ にやあ……」

片手を離して、マンコへ伸ばす。クチュツと濡れているようだが、まださほどだ。指入れず、入り口を撫でるように触って行く。

「ひあん♥ あああ……あひつ、あうつ、あはあ♥ そ、そ……あつ、んはああああああ♥♥♥♥」

ビクンビクンと張飛の身体が反り返り、続いてクテツと俺に体を預けた。

「ハアハア……今の、頭の中が真っ白になったのだあ」

「それがイクというものです」

「イク？」

「絶頂とも言いますね。快感が頂点に達した時にいたるモノです」

「鈴々、初めてイツたのだ……」

「北郷さまとした時には、イかなかったのですか？」

「お兄ちゃんとした時は、痛かったただけなのだ。段々気持ちよくなるって言ってたけど、ならなくて……」

「初めてでイクのは、難しいですし、仕方ないですよ」

一応、男としてフォローはしておこう。

マンコを浅く指で突き具合を確かめていく。

「あふ、あふうん……」

幼さの残る少女の痴態に俺のチンポが勃起した。丁度、張飛のまたの間から顔を出す形で姿を現したそれを見て、張飛は驚きの声を上げた。

「兄ちゃんのお兄ちゃんよりも凄くおっきいのだ！」

この子、無意識だと思うけど、さつきから、北郷を下げ過ぎじゃないか？

それから、不安そうに俺を振り返った。

「本当に鈴々に入るのか？」

「全部はさすがに無理だと思いますけどね」

マジマジと俺のを見つめ、つんつんと指先でつついてくる。暴発するような刺激ではないが、おもちゃにしないほしい。

「もう少し、馴らさないと、厳しいですね」

「ふにゃ？」

張飛を抱き上げてベッドに寝かせ、彼女の股の間に頭を入れる。そして、指をマンコに入れゆつくりとピストンしながら、入り口周囲に

舌を這わせる。

「はうつ、にやあつ♥ に、兄ちゃん♥ 兄ちゃん♥」

指の数を一から二に、二から三へと少しずつ増やす。増やす度に、張飛の身体はそりかえり、悲鳴にも似た喘ぎ声を上げる。

「にや、にやあ… んにやああああああああ♥♥♥♥♥♥♥♥」

十分にほぐれたところで、手を止めて張飛の顔を見ると、顔から、涎と涙と鼻水を垂らして喘いでいた。

「いきますよ?」

「ま、まだするのか?」

「ここからが本番です」

「ほ、本番?」

「ええ、これが入ります」

そう言つてチンポを見せつけるように振ると、張飛はゴクンと唾を飲み込んだ。

「では、改めて、いきますよ」

「うん」

時間をかけてほぐしただけあつて張飛のマンコは、俺のを飲み込んで行き、2/3くらいで一番奥に当たった。

「ぜ、全部入ったのか?」

「全部ではありませんが、一番奥まで入りましたよ」

ほらつと俺ので軽く奥をゆすつて見せる。

「ひゃうつ♥ に、兄ちゃん、悪戯したらダメなのだ♥」

「すみません。張飛さまが可愛くてつい。

ですが、そろそろ、動きますよ。

俺も、入れているだけというのはつらいので」

「わ、わかったのだああああん♥ いきなりはひい…:…ひどいのだあ♥」

言い終わる前に腰を動かし始めた。ほぐしてや柔らかくなつたとはいえ、その中はきつい。

「あひつ、あうつ♥ うぐう…:…あふうう、お、奥、すごい♥ ガンガン叩いてるのだあ♥♥♥」

幼さを残している少女を犯しているという背徳感が、その少女を喘がせているという状況が、俺を精神的に高めていく。

「あうっ、あひ、あひいっ♥ 奥まで来てるのだった♥」

開いた手で、勃起した乳首をつねった。

「ひああああああああああ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

「ッ！」

張飛がイクと同時に、俺も射精した。

「ふぁ…おなかがあついのだぁ♥」

アへ顔の張飛を抱き、耳元で囁くように、彼女が望んでいたことを話した。

〈北郷Side〉

「ご主人様、今日という今日はお仕事をしていただきます」

自室を出た俺の前に腕を組んだ愛紗がいた。何とか逃げられないかと思っただが、ガシツと腕を掴まれ、執務室へと引っ張られた。

「終わったら、また、髪でしてあげますから、頑張ってください♡」

そう言っただけで耳をくすぐられ、俺は無意識のうちに了解の返事をしてしまった。

恐るべし、美髪公！

愛紗がほとんどの書類をさばき、残っているのは、俺のサインが必要なモノだけだと言われたけれど、部屋に入って、量を見た時、一気にやる気が減少した。

だが、ご褒美の為！ 気合いを入れ直し、席について書類を手にとった。

そこでふと、違和感を覚え、机の下をちらつとのぞくと、鈴々がいた。思わず、声を上げようとした俺にしーっ唇に指を当てた。

ヒロインだしってことで、一度だけ、セックスしたけど、終始イタ

イイタイ言つて全然楽しくなかったから、アレ以来、セックスもしていないし、あまり会っていなかった。

何をやっているんだと、見やると、鈴々は、ニッコリ笑つてズボンのチャックを下ろしてチンコをぺろぺろと舐めはじめた。

「ッ!？」

「れる……ちゅ……れるれる……」

チンコは先端にキスしたり、舐められ、俺の意志とは関係なく、勃起していく。

「ご主人様、手が止まっていますよ」

「あ、ああ、ごめ「ちゅぶ」ッ!」

愛紗の声に応えようとした時、勃起したチンコを吸われ、声が上がった。愛紗にばれたんじゃないかと、ヒヤヒヤしたが、愛紗は、困惑気な顔をしてから、自分の仕事（本来は北郷と劉備の仕事）の続きを始めた。

「んちゅ、れるろろろ♡」

根元から、裏筋を時間をかけてペロが通過していく刺激に、腰が浮きそうになる。

「ご主人様?」

「だ、大丈夫、ちゃんとやるから!」

「ちゅちゅちゅ……」

続いて亀頭へのキス攻撃! 声を上げるのを必死で我慢する。近くに愛紗がいるという状況が、いけないことをしているんだと思わせ、余計感じでしまう。

「んちゅ、ちゅむ……れるろ♡」

射精しそうになったその時、突然、刺激が弱くなった。

「え?」

「どうかしましたか? ご主人様」

「あ、いや、何でもないよ」

顔を上げた愛紗をごまかし、下をのぞくと、鈴々は舌先でちよんちよんとチンコを刺激するだけでそれ以上をしようとしなない。

じれったい感触だけが続く。

「んちゅっ、れろ、れるる♡」

射精感がおさまってくると、再び、舌と唇による攻撃が始まった。そこから何度も、イキそうになる度に弱い刺激になり、射精感がおさまるとまた、刺激されるということを何度も繰り返し返された。

段々と、意識がもうろうとして来て、射精することしか考えられなくなってきた。

サインもおざなりになってきて愛紗に睨まれることも増えていく。

「ふう、ご主人様、少し休憩にしましょう。今、お茶をお持ちします」
そう言つて愛紗が部屋から出ていった。

すぐに下をのぞいた。

「鈴々ー」

「愛紗がいなくなったから、出させてあげるのだ♡」

んふう……うん……うぐ……むぐ……あむ、ちゅぶ……」

「ああ…鈴々、いい、凄く気持ちいい。もう、イクー」

心待ちにしていた射精の瞬間を迎えるその時、鈴々が、チンコを口にくわえた。

「はぶ……んちゅっじゅるるるるるるるるるる♡」

「ひあああああ!!」

物凄勢いでバキュームされ、まるで、チンコから精子を吸い出されているような錯覚を覚えた。

「じゅるるるるる♡」

「り、鈴々ー！ も、もうやめてくれえ!!」

尿道に残った精子だけでなく、精巢にある分まで吸い出そうとするようなバキュームに思わず、叫んだ。

射精したばかりで敏感なチンコは、その刺激に耐えきれず、再び射精した。

「じゅるるるる♡」

「ああああ!!」

それでも止まらないバキュームに俺は声を上げることしかできなかった。

「てろ……れろ……ちゅう……」

バキュームが止まり再び、鈴々はおしゃぶりを始めた。その後すぐに愛紗が現れ、お茶をくれた。

鈴々は愛紗の気配を察知してやめてくれたようだ。

「すみません、お茶菓子を持ってくるのを忘れてしまいました」

愛紗が再び立ち上がって、部屋を出ていった。その直後、

「あむ……じゅ、じゅるるるるるるるる♡」

「あひいいいいいいいいいいいい!!」

再び、バキュームが俺を襲った。強烈な刺激の中で思い出した。

——「愛紗がいなくなつたから、出させてあげるのだ」——

つまり、愛紗がいない時は、このバキュームで強制絶頂させられるということだ!

「じゅるるるるるるるるるる♡」

まるでラーメンをすすめるかの如く、吸われるその刺激に溜まらず射精していた。

「んん……ちゅっ、ちゅぶっ」

また、バキュームが止まった。そのすぐ後に愛紗が現れた。

「すみません、用意しておいたお茶菓子なんですけど、鈴々が盗み食いしたらしくて、残っていませんでした」

「ちゅっ、ちゅぶ……れろ♡」

「ま、まあ、なくなつちやつたものはしょうがないし、今度、また、よ、用意してくればいいから」

「じゅる……じゅぶっ、じゅる」

「フフ、ご主人様は、鈴々には甘いんですから」

「れる……れろれろ♡」

休むことなく舐められて、もう出せないと思つたのに、俺のチンコは、俺を裏切つて勃起してしまつた。そして、そのまま、さつきと同じ、焦らしプレイ。

そこでようやく、完全に理解した。鈴々は、俺たち以外の誰かがいる間は、俺をイかせてくれない。二人つきりになったら、逆にイかせて続ける。

「ちゅば、ちゅぶ……ちゅぶず♡」

また、いきそうになつてきた…

当然、愛紗がいるから、そのまま、舌先だけで、弱い刺激のペロペロ攻撃へ変化。

チラツと愛紗の様子を窺うけど、手もとの書類に集中しているらしく、立ち上がる気配はまるでない。

「てろてろ…ペろ、ペろろ」

いきそうでいけない微弱な刺激。こみ上げてくるものがあるのに、解放されないもどかしさ。

「あ、愛紗、飲み物がなくなっちゃったから、とつてきてくれないか？」

「え!? す、すみません! 手元に集中していました」

ついに、俺は我慢できなくなって、愛紗を追い出すことにした。

「すぐにとつてきます」

愛紗が、席を立ち、扉に向かって歩いていく。そうだ、そのまま出ていってくれ!

だが、愛紗は「あっ」と声を上げて戻ってきた。

「急須を持っていくのを忘れる所でした」

恥ずかしそうに笑っているが、今の俺はそれどころではない。

「んちゅっ、ちゅ…れるる♡」

思わず、腰を前に出して鈴々の口にチンコを突っ込んだが、鈴々のバキュームはなく、逆に銜えたまま、舌先で、鈴口をチロチロと責められ、更なる生殺しのめに合ってしまった。

「き、気をつけてね」

「はい」

「ちゅぶう、ちゅぶぶ、んぐ…」

こんどこそ、扉へ向かっていき、手をかけたところで、また、「あっ」と声を上げた。

「少し、隊の様子も見てきますから、戻ってくるのが遅くなるかもしれませんが、逃げないでくださいよ」

逃げない! 逃げないから、早く行ってくれ!

愛紗が扉に手をかけ、そのまま出ていくまでの数秒が、何時間にも感じた。

はやく、早く出てっくれ、早く！

バタンと、扉が閉まり、愛紗が十分に部屋から離れるまでの間、俺の心臓は、物凄い勢いでバクバクと音を立てていた。

「鈴々、たの「じゅるるるるるるるるるるるる」 おほおおおおおおお おおおお!!」

「じゅるるるるるるるるるるるる」

「り、鈴タン!! おわああああああああああ!!」

暗くなる意識の中、愛紗の言った言葉を思い出していた。

——「戻ってくるのが遅くなるかもしれない」——

愛紗が戻ってくるまで、俺は生きているだろうか？

頭が真っ白になる快樂の中で、俺は意識を手放した。

〈張飛Side〉

大きな声を上げながら、白いのを出していたお兄ちゃんが、白目をむいて動かなくなったのだ。

どうしようって焦っていると、愛紗が戻ってきた。

「やっぱりそうになっていたか」

ハアっとため息をついた愛紗は、後は私がやっておくから、出ていくようにと言われて、鈴々は、部屋を出たのだ。

その日から、時々、お兄ちゃんにお呼ばれするようになったのだ。

お姉ちゃんはいいなあって、愛紗も良かったなって頭を撫でてくれたのだ。

でも、お兄ちゃんはいつもいつも、おクチでさせてばっかりで、ちつとも、鈴々の下に入れてくれないのだ。

入れてって言ってもまた今度って言われて、おクチばかりなのだ。

お兄ちゃんと仲良くなれたのは、良かったけど、なんだかつまらな

いのだ。

今日も、お兄ちゃんに頼まれて、いっぱい白いのを吸い出してきた帰り道、愛紗と怪力の兄ちゃんが仲良さそうにお仕事をする部屋に入って行くのを見たのだ。

なんとなく気になって覗くと、愛紗と兄ちゃんが抱き合ってちゅうしてたのだ。

それで、そのまま、兄ちゃんは、愛紗のおっぱいを触ったけど、愛紗は怒ったりしないので、逆に気持ちよさそうに押し付けていたのだ。何だか悔しくなつて鈴々、すぐに自分の部屋に帰ったけど、頭の中でずっと愛紗と兄ちゃんのちゅうが、離れない。

それから何日も、兄ちゃんにしてもらった時みたく、自分でおっぱいとか下をさわってみただけど、兄ちゃんみたいに気持ち良くならなかったのだ。

なんだか、鈴々の身体の中でもやもやしたモノがあふれて来て、気がついたら、兄ちゃんのところに行って行ってたのだ。

〈周倉Side〉

「兄ちゃん！」

「張飛さま、どうしました?」

久しぶりに訓練所で部下達を相手に模擬戦をしていると、張飛が走ってきた。

部下達に訓練の指示を出して張飛のもとへ行くと、泣きそうな顔をして訴えてくる。

北郷への愚痴とか、愛紗と俺の様子を見て羨ましかったとか（みられているのには気づいていた）、色々飛び火して結局、要約すると、「抱いてほしい」の一言で終わる。

部下達と離れていてよかった。もし聞かれたら、俺は確実に死んで

たな。

「わかりました。ですが、今は仕事の時間なので、今日の夜に」

周囲に誰もいないことを確認してから、張飛を抱きしめて耳元で囁くようにすぐぐつたように首をすくめて小さく頷いた。

仕事の後、待ち合わせの場所を確認して張飛はきたときと同じように走り去って行った。

俺も、訓練の続きに戻ろうと思ったら、今度は、愛紗が現れた。

愛紗は、周囲に誰もいないことを確認すると、俺に抱きつき、キスをした。

「刃、今日の夜、いいか？」

「すみません、先ほど、張飛さまとツ！」

耳に痛みが走った。血が出るほどではないが、噛まれた。

「やつぱり、鈴々もおまえとしくなっちゃったか……」

鈴々が、ご主人様の相手をするようになれば、私が呼ばれる時間が減っておまえとたくさんできるようになると思っただけ……」

ああ、本心はそういうわけだったんだ……

「なら、何故、抱かせたんですか？」

「フフ、気に入った男の自慢がしたかったんだ♥」

愛紗はもう一度キスしてから、放れた。

「鈴々を、義妹を頼むぞ」

「はい」

「張飛さま、一つ聞いてもよろしいですか？」

「にや？」

「何故、宿ではなく、ここなのですか？」

現在、俺と張飛がいるのは、仕事部屋である執務室だった。

待ち合わせ場所に行くと、張飛が宿ではなく、別の場所でいたいと

言い出した。

二人でしていることがバレると俺が北郷に殺されること、あの宿は口が堅く、金さえ払えば安全なこと等を話したが、どうしてもというので、仕方なく、彼女のいうがままについていくと、執務室だった。「ここで、お兄ちゃんと愛紗がちゅうしてるの見たのだ。そしたら、鈴々もしたかって思ったのだ」

「だったら、ここでなくても」

「ごこつて、お兄ちゃんが普段いる場所だから、そのお…」

何となく理解した。好きな男が普段いる（つとということになっている）場所（サボっていないことの方が多い）でするといふ悪いことをしているという背徳感とか、性に疎い張飛でも思うことがあるということなのだろう。

「わかりました」

「あ、あと、兄ちゃん」

「はい？」

「鈴々の真名は鈴々なのだ。受け取ってほしいのだ」

「ありがとうございます。自分の真名は刃です」

「それと、敬語はやめてほしいのだ」

「ああ、わかった」

頷くと、鈴々は嬉しそうに笑って飛びついてきた。それを受け止めると、唇に軽く触れるだけのキスをしてきた。

「…良かったのか？」

「愛紗が、刃兄いとしてたのを見て、鈴々、羨ましいって、鈴々もしたかって思ったのだ」

「そうか」

今度は俺からキスする。何度か唇を合わせてから、舌先で鈴々の唇を舐めると、ビクツと震えた後、少しだけ、口を開いた為、強引に舌を鈴々の口内に入れる。

「あぶ…ちゅ、ちゅぱ…んふ、んふう…ちゅむむ、ちゅぱっ、ぱはっ ♡ 刃兄い ♡」

鈴々は腕から離れ、ズボンに手をかけた。

「前は、ずっと、刃兄いがしてくれたから、今日は鈴々もしてあげるのだ♥」

そう言つてズボンとパンツをおろして俺のを出すと、フェエラを始めた。

「んちゅっ、ちゅっ、れる……じゅるるる」

「ッ、鈴々、気持ちいいぞ」

「じゅぷ♥ じゅるるる♥」

教えたバキュームフェエラの威力は、凄い。気を抜けば、俺でもすぐに出してしまいそうだ。

だが、口で出すのはもったいない。

「じゅぽ……刃兄い、なんで止めるのだ？」

「気持ちよかったけど、口で出すのはもったいないからな。出すなら、鈴々のここを出したい」

スパッツ越しにマンコに触ると、くちゅつと濡れた感触がした。

鈴々を机に乗せ、上着とブラをずらして、胸を露出させ、舌を這わせる。つつましいふくらみの上で自己主張する乳首を重点的に攻める。

「あ、あっ、あううっ♥ おっぱいがキモチイイのだ♥ ふあ、ひやう♥」

俺の頭をかき抱きながら、喘ぐ鈴々にキスをしてから、スパッツとパンツを少し脱がしてマンコを出させる。

そして、今度は舌と指で愛撫する。

「ひぐうう……うあっ♥ 鈴々、ペロペロするのが好きだけど、あ、ああん♥ ペロペロされるのも好きい、んはあっ、あひいいいいいい♥♥♥♥♥」

大きいのでけて、鈴々はイッた。舐めるもの舐められるもの好きかあ…でも、俺とじゃ、体格差があり過ぎてシツクスナインは難しいなあ。

ぐったりとした鈴々を抱き起こし、かるく愛撫しながら、しばらく待つと、ある程度回復したようだ。

「鈴々、そろそろしようか？」

「う、うん♥」

普段、北郷が座る椅子に腰かけた俺の上に鈴々が対面で跨っていた。俺のに狙いを定め、鈴々は、ゆっくりと腰を下ろした。

「おっ、おほおほおほ♥　り、鈴々の中に響くうう♥♥♥♥♥♥♥♥」

入れただけでイッた鈴々は、だらしなないアへ顔を俺にさらし、力いっぱい、俺に抱きつく。

俺じゃ無かったら、鈴々ブリーカーで死んでたな。

「うくっ、う、うああっ♥　はひ、はひい♥　ん、んぐっ♥　あううう
う……」

普段の子供っぽい表情がなくなり、艶っぽいとろけた表情の鈴々を見てみると、もっと乱れさせたいという欲求がわき上がってくる。

「はひ、ん、んぐっ、あううっ♥　あひっ♥　はひいい……そ、そこす
ごいのだあ♥♥♥♥」

「つく、鈴々、そろそろ出そうだ!」

「はあんっ♥　あっ、あああ♥　鈴々もイキそうなのだ、刃兄イツ、一
緒に♥」

「ああ、一緒にイクぞ」

鈴々を俺のが抜けそうになるところまで持ちあげ、一気に振り下ろす様に下ろし、同時に突き上げる。

俺のが深々と突き刺さり、子宮口をこじ開け、子宮の奥に亀頭が突き刺さった。

「ひぎいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい
うううううううう♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥　イクううう

「出る!」

「あああ……あ、あつい……あついの、たくさんなのだ♥」

鈴々の膣内に入り切らなかつた分が、机を汚す。明日以降、北郷が仕事をする場所がこんな風に汚れたと思うと、愉快だった。

しめつけてくる膣が尿道に残った分を絞り出し、もっと出せとせがんでくる。

せがまれた以上、やらねばならない。

再び、腰を動かし始めた。

「あひいいつ、あああ♥♥♥　じ、刃兄い、休ませてほしいのおお、おほおお♥」

「まだまだ夜はこれからだぞ」

そう囁くと、鈴々は震えて、期待に満ちた目になった。

三話（愛紗・鈴々・桃香／愛紗・鈴々・桃香）

〈周倉Side〉

「刃」

「なんだ？」

「鈴々とも話したんだが、桃香さまを引き入れようと思うんだが、いいだろうか？」

黄巾党の討伐の帰りで、今回は少し離れていた為、途中にある町で一泊していたのだが、盛った愛紗との一戦終えた後、突然、こんなことを言い出した。

確かにいつか寝取ろうとは思っていたが、こんな早い段階では考えていなかった。

「何故、劉備さまを引き入れようと考えたんだ？」

「あの方は、ご主人様に乗せられてサボリ癖がつくまでは、真剣に民を思う素晴らしい心を持った方だったのだ。

まさか、あの方があれほど「楽」というモノに流されやすいとは……」

劉備を心酔している愛紗からそんなセリフが出てくるとは……

「だが、逆に考えれば、「楽」さえあれば、真面目に戻られることもあるということだ」

「つまり、俺との快樂という「楽」を餌にしてちゃんと仕事をするようにしようってことか？」

「そうだ。それと、桃香さまにご主人様の仲が良くなる方法を教えてほしい。そうすれば、ご主人様との面倒事も減ってもっとおまえとことうすることもできるしな」

悪戯っぽく微笑みながら、さつきまで、自分の中に入っていたイチモツを優しく撫でる。

「わかった。だけど、今はおまえとしたい」

「ああん♥ 私もだ♥」

〈劉備Side〉

最近、ご主人様が愛紗ちゃんや鈴々ちゃんを良く閨に呼ぶ。

私なんて、何日も呼ばれていないのに羨ましい。

どうやったのかを二人に聞いてみたけど、二人とも内緒って言われた。

ご主人様に聞いてみたけど、二人ともある人に聞いたと言っていたって言っていた。

そのある人とは、誰なのかを探してみたけど、わかんない。

でも、そういう話って親しい人としかできないよね？

だから、二人の様子を調べてみることにした。

まずは愛紗ちゃんから！

朝、頑張つて早起きをして愛紗ちゃんの部屋に行くと、もう起きていて、執務室にいた。

窓からこっそり覗いてみると、部下の人と今日の予定を確認していた。

それから、ご主人様と私が来ないことを怒ってから部下の人と二人で仕事を始めた。ごめんね、愛紗ちゃん、でも、これも大事なお仕事だから！

しばらく、書き物をしていると、侍女さんが来てご主人様が愛紗ちゃんを呼んでいるって呼びに来た。

愛紗ちゃんはため息をついてから、部下の人に謝って執務室を出ていった。私も追いかけてくつちゃ！

執務室を出た愛紗ちゃんは、ご主人様のお部屋へ。ご主人様の部屋

の窓の戸が閉まっていたから、ほんのちよつとだけ開けて中を覗く。
お部屋では、下だけ全部脱いでいるご主人様と、髪留めをといた愛紗ちゃんがいた。

「愛紗、いつものを頼む」

「わかりました。ですが、その後、ちゃんとお仕事をしてくださいよ」
「わかっているわかってるって」

愛紗ちゃんは、寝台に座っているご主人様の股の間に座ると髪の毛を
ご主人様のおちんちんに巻きつけてから、手でしこしこする。

って、ええ!?

「あああ!! 愛紗の髪コキ、サイコーだ」

き、気持ちいいんだ…

ご主人様は、そのまま、気持ちよさそうにしこしこする愛紗ちゃん
を見つめていた。

「ご主人様の大好きな、毛先攻めですよ♡」

「あひひひひひひひひひ!!」

「ツ!?!」

しこしこしながら、毛先でおちんちんの亀の頭みたいなどころを箒
で掃くみたいにシュツシュツやってやった途端、ご主人様は、大きな声と
共に白いのをびゅつびゅつて出した。

愛紗ちゃんは、箒みたいに使っていた毛先を啜えて先を整えると、
おちんちんの先っぽにプスツと刺した。そして、そのまま、ぐりぐり
ゆと刺さったままの毛先を弄る。きつと、おちんちんの中で毛先が
暴れているんだ。

「ふおおおおおおお!!」

ご主人様は、また大声と共に腰をガクガク揺らしながら、白いのを
出した。

なんだか、愛紗ちゃんっていう蜘蛛の糸に絡め取られたご主人様つ
ていう蝶が翩り殺されているように思えてきた。

ご主人様ってああいうのが、好きなのかな?

でも、あれって愛紗ちゃんみたいに髪が艶やかで綺麗な人じゃない
とできないよね?

寝台に倒れ込んだご主人様に一声かけ、濡れた手拭いで髪を拭いて白いのおとしてから、愛紗ちゃんはお部屋を出ていった。

あ、私も行かなきゃ！

愛紗ちゃんは、執務室に戻って、部下の人とそのままお昼までお仕事をしてお昼からは、訓練場に行つて訓練をしていた。

それにしても、執務室から一緒に部下の人と愛紗ちゃんの模擬戦は凄かった。凄い力で攻撃してくる部下の人を愛紗ちゃんは技で迎え撃つ。最後は、愛紗ちゃんが勝つて、その日の訓練は終了となった。

愛紗ちゃんはそのまま部下の人と一緒にご飯を食べていた。

あれ？ 愛紗ちゃんって今日一日、ほとんどあの部下の人と一緒にいない？

二人は、食堂でご飯を食べた後、そのまま、執務室に向かつていった。

また、お仕事するのかな？

『あぁん♥』

「え？」

執務室の中から聞こえてきた声は、愛紗ちゃんの声だったと思う。でも、あんな声、今まで聞いたことがなかった。

ゾクツとするような色っぽい声。

私は恐る恐る執務室を覗くと、そこには、椅子に座った部下の人の上に服をはだけさせておっぱいをさらした愛紗ちゃんがいた。

部下の人が愛紗ちゃんのおっぱいを揉んでいて、愛紗ちゃんも部下の人のおちんちんを手でしこしこしていた。

「ひう、はぁん♥ 刃、そろそろ♥」

「まだ始めたばかりだろう？」

「おまえと思うと、私のここは、我慢できなくなつて、すぐに濡れてしまうんだ♥」

そう言いながら、愛紗ちゃんは下着をずらしてあそこを露出させた。

「愛紗が入れてくれ」

「ああ、わかった♥」

〈周倉Side〉

「劉備さまは、帰られたみたいだな」

「ちゅっ、ちゅむ♥ 私たちにあてられて、恐らく自室戻られた後、自慰でもなさるんだろうな」

愛紗は、その様子を想像したのか、楽しそうに笑った。

「本当に大丈夫なのか？ 一歩間違えば、この軍が崩壊するぞ」

「大丈夫だ。桃香さまの性格は熟知しているからな。」

それよりも、昼間の模擬戦、また、手加減をしただろうか？」

「この軍の最強は、愛紗と鈴々でないとダメだからな」

「……そんな風に気を使われる最強とは、情けないな」

「というよりも、こんなことしながらする話じゃないよな？」

「ああ、そうだな。邪魔者もいなくなったのだから、もっとして♥」

「自分の主を邪魔者って…」

まあ、良いだろう！」

「あああああっ♥♥♥」

〈劉備Side〉

部屋に帰った後、愛紗ちゃんたちのアレを思い出しちゃって、我慢できず、自分で慰めて、気がついたら、外が明るくなってた…

本当にどうしよう…

ご主人様に話すのは、論外だし…

鈴々ちゃんと話してみようかな？

どっちにしても、今日は、鈴々ちゃんの様子を見に行くつもりだったし。

鈴々ちゃんの今日の予定は、一日、街の警邏らしい。

街で悪いことをしている人を捕まえたり、困っている人を助けたりと、鈴々ちゃんは真面目に働いていた。

でも、お昼になって、お城に戻ると、侍女さんが、鈴々ちゃんに駆け寄って何か話した。鈴々ちゃんは、侍女さんに頷いてから、食堂とは逆の方へ歩いていった。

ついていくと、ご主人様のお部屋だった。

昨日と同じように窓から覗くと、下だけ全部脱いだご主人様と股の間に座った鈴々ちゃんがいた。

鈴々ちゃんは、ご主人様のおちんちんをペロペロと舐めたり、啜えたり、指でしこしこしたりする。

「鈴々、そろそろ…」

「ダメなのだ。お兄ちゃんは、我慢が足りないのだ。ちゆず、ちゆぱ♡」

「そんなあ」

おちんちんの先っぽを舌先でつんつんしている鈴々ちゃんに、ご主人様が情けない声を上げている。

「それに、れるれる…：ちゃんとお願いしないとダメなのだ。んじゅっ♡」

「で、でも、あれは…少し恥ずかしいんだけど」

「じゃあ、いつまでも、このままなのだ。」

あぶっ、んぶぶっ♡ んじゅ…：ちゆぶぶっ♡ れるる♡」

「くう！ わ、わかった！ 鈴々のお口で俺のをいっぱい吸い出してくれー！」

「わかったのだ♡」

鈴々ちゃんは、アーンと口を大きく開けておちんちんを銜えこん

だ。

「じゅるるるるるるるる♡」

凄い……ここからでも、おちんちんをすすする音が聞こえる。

「ふおおお!! す、吸いだされる!!」

ご主人様は、鈴々ちゃんのを頭を押さえながら、大きくのけぞって足をビクンビクンさせてる。たぶん、出してるんだ。

「じゅるるるるるる♡」

「おほおおおお、り、鈴々、もう、もう良いから!」

「じゅるるるるるる♡」

「あああああつ!」

ご主人様が鈴々ちゃんの頭を外そうともがいているけど、鈴々ちゃんのは、ご主人様の腰をがちりおさえて外せないようにしている。

まるで、魂を吸い出されたみたいに、段々、力が抜けて、ご主人様はぐったりと寝台に倒れ込んだ。

「お兄ちゃん、もう終りなのか?」

ちゅぱつと、ようやくご主人様を解放した鈴々ちゃんがきくけど、

「……」

ご主人様は答えない。まるで屍のようだ……

本当に死んじやつたりしていないよね?

「じゃあ、鈴々は、ご飯を食べに行くのだ!」

ご主人様にお布団をかけてから、鈴々ちゃんは、部屋を出ていった。それにしても、鈴々ちゃん、あんなことをしていたなんて……

私には、あんな凄い技、とてもまねできないよ……

ご主人様のお部屋を出た鈴々ちゃんは、ご主人様に言っていたようにご飯を食べて警邏の続きをしに行った。

そして、夕方になってお城に戻ってきた鈴々ちゃんは、執務室に

入って行った。今日の報告かな？

『あん♥』

「えッ!？」

執務室の中から、昨日の愛紗ちゃんみたいな声が聞こえた。

驚いて、執務室の中を覗くと、昨日、愛紗ちゃんとアレをしていた部下の人と鈴々ちゃんがいた。

ただ、鈴々ちゃんは下の服を全部脱いで机の上に乗っていて、部下の人が鈴々ちゃんの股の間に頭を入れていた。

「あん、んん……はああん♥ 刃兄いの舌に鈴々のおまめさん、食べられちゃうのだあ♥ ああん、あッ、ダメなのだ……イっちゃう♥ イク、イクイク、イククうううううううううううううううううううう♥

♥♥♥♥♥

鈴々ちゃんが、部下の人の頭をかき抱きながら、身体をビクンビクンさせた。

「ふああ♥ 刃兄い、鈴々の準備は、もう万全なのだあ……だから、刃兄い♥」

「挨拶は？」

「やんなきやダメなのか？」

上目づかいで部下の人を見上げる鈴々ちゃんは、とんでもなく可愛かった。

部下の人は、ちゅって、目元に接吻すると、黙って促した。
鈴々ちゃんは、恥ずかしそうに自分のアソコを指で広げた。

「鈴々のオマンコに刃兄いのおつきいオチンポを入れて、いっぱいズポズポしてください♥」

「よくできますし、た!」

「ひいひいひいひい♥♥♥♥♥」

部下の人の大きなおちんちんが鈴々ちゃんのアソコにずぶずぶと入って行く。

「きやあん♥ 刃兄い、急にするのはひどいのだあ♥ り、鈴々がしゃべって、ああん……るのに、ひあああん♥ 動くななんてひどいのだ」

「ううん、鈴々、気持ちよくなって、刃兄いのことしか考えられなくなつてたのだ♥」

可愛らしいその表情に、思わず、抱き上げ、キスしてしまった。

「んちゅ……刃兄イ、もつとお♥」

「ああ、俺も一度だけじゃ満足できないよ」

「ああああああ♥♥♥」

〈劉備Side〉

慌てて自分の部屋に帰って、そのまま、鈴々ちゃん達のことを思い出して、また、一晩中自分で慰めて、朝になってから、私は頭を抱えていた。

本当にどうしよう…

愛紗ちゃんだけじゃなくて、鈴々ちゃんまで、ご主人様を裏切つて不貞を働いていた。

誰かに相談できることじゃない…

自分で何とかするしかない！

私は、覚悟を決めて愛紗ちゃんと鈴々ちゃんを呼び出した。

私の部屋で、二人と対面した。

「二人とも、私に何か言うことはないかな？」

そういうと、二人はキョトンとした顔をした。

「それは、ちゃんと仕事をしてくださいとか」

「遊んでばかりじゃダメなのだってこと？」

「ツグウ… それはごめんなさい…」

って、そうじゃないよ！ 私、知っているんだよ。二人がご主人様以外の人と、いやらしい事をしていること！

ずばつと言ったのに、二人は、「ああ、なんだ、そんなことか」みたいな顔をしていた。

「あれには理由があるんです」

「理由？」

愛紗ちゃん曰く、私たちの軍は、あの部下の人こと周倉さんのおかげで形が保たれ、維持されているらしい。

戦闘では、事前の情報収集、兵糧の確保、作戦の立案。

戦闘時その戦力と状況を見抜き、的確な指揮をとる。

戦闘以外にも、私やご主人様の代わりに書類仕事をしたり、兵たちの訓練を行ったり、暇を見つけては、警邏をしたりと、周倉さんの存在はあまりにも大きいそうだ。(↑全て事実)

「で、でも、だからってなんで二人はあんなことをしていい理由にはならないよ」

「ヤツは、ここを発つ際に我らのもとを離れるつもりだったそうです」
「ッ!?!」

愛紗ちゃんの話が本当だったら、周倉さんがいなくなったら、大変なことになっちゃう。

「彼をつなぎとめる為に、金銭で何とかしようにも、我々にそんな余裕はありません。」

地位など、義勇軍の中ではあつてないようなものです。

後残っているモノは、私たちの身体くらいなのです。幸い、私や鈴々は、彼の好みだったようで、彼は今後も我々と共にいてくれると言ってくれています(↑後付け設定)

「ご主人様に悪いと思わないの?」

この事だけはどうしても聞きたかった。

「悪い? なにがですか?」

天の御遣いとなっていたいただいたことに感謝しています。

それ故、仕事をサボっても、小言は言えど、無理強いはしていません。どうしてもやって頂かないといけな最低限のものだけやって頂くという形にしています。

武人としても、武を示しています。

女としても、希望された際に、性欲の処理もお手伝いしています」
「そうなのだ。」

「お兄ちゃんの女遊びだって、鈴々、嫌だけど何も言わないし、お兄ちゃんがしてって言った時は、おちんちんじゅぽじゅぽしてあげているのだ」

「しゅ、周倉さんとの関係が続けるってことなのかな？」

「はい」「うん！」

目の前にいるのが、本当に私の義妹たちなのか、わからなくなってきた。

椅子に座りこんだ私の側に、愛紗ちゃんが、歩み寄ってきて囁く。

「我々の長は、桃香さまなのだから、本来ならば、桃香さまこそが、彼に身を捧げ、抱かれるべきなんですよ？」

「ッ!？」

ナニを言っているのかわからなかった。

「桃香さまは、ご主人様と、大分ご無沙汰なのでしよう？」

周倉に相談すれば、ご主人様が振り向いてくれる方法を教えてもらえますよ」

ご主人様に振り向いてもらえる？ どういうことなのかと、愛紗ちゃんの方を向くと、愛紗ちゃんは、ニツコリと笑った。

「本当ですよ。現に、私や鈴々が、ご主人様によく、呼ばれていますから。」

たった一度、周倉に抱かれるだけで、ご主人様との仲が発展するんですよ？

ご主人様だって女遊びをしているのですから、一度くらい大丈夫ですよ」

私の手に重ねられた愛紗ちゃんの手を振り払うことが出来なかった。

そして、最後に、愛紗ちゃんは、小さな声で、私に囁いた。

「周倉との交合いは、ご主人様とは比べ物にならないほどの快樂がありますので、ご注意を…」

私の喉が無意識のうちに鳴った。

〈周倉Side〉

本当に、劉備をこんな早期に抱けるとは思ってもみなかった。

愛紗に呼び出され、劉備と面会しました。

なんか、私を抱く代わりに私たちの軍にいてくださいとか言われませんでした。

意味がわからず、愛紗に視線を送ると、さっとそらされた。

一体なんて説明したんだ？

色々気になったけど、この時点で劉備を抱けることは、プラスになれどマイナスにはならないと判断し、了承した。

そして、定番の宿屋にきました。

いつものごとく、女将に宿代に色を付ける。女将は、渡された金をチラツと見てから、部屋に案内してくれた。あの一瞬で、どれくらい色を付けたか、チェックしやがったな…

部屋に入るまで、劉備はソワソワしていた。

鈴々のように、不安で緊張しているのとは違うように感じた。どちらかというと、期待感とか、そういう感じだ。

愛紗が、劉備は「楽」に弱いつて言っていたから、たぶん、SEXの事を話したんだろうな。

「周倉さん」

「なんででしょうか、劉備さま」

「その、私、あんまり慣れてなくて……ご主人様とも数回しかしたことなくて……」

「下手だったらごめんなさい」

恥ずかしそうに、不安そうに、劉備はそう言った。

「大丈夫ですよ。月並みな台詞ですが、誰だつて最初は不慣れなものですよ」

劉備を寝台に押し倒す。

「服を脱がせますよ」

「は、はい」

ボタンを一つ一つ外していく。愛紗と似た服を脱がすと、お椀型の巨乳が白いブラに包まれていた。

「接吻はしても?」

「だ、大丈夫ですよ!」

ガツチガチだな。本当に大丈夫だろうか? 最初は触れる程度のキスを。それを数回繰り返して柔らかくなってきたところで、舌を入れていく。

「んちゅ、ちゅ……ちゅっ、ちゅば、ちゅむ♥　ぷはっ、ハアハア……

ちゅ、ちゅうってこんな気持ちいモノだったんだあ♥」

「まだまだ、これからですよ」

さらにディープキスを続けながら、手で胸とマンコを愛撫する。

「はひ……あひいん……あうう……そこ、ダメえ♥」

「おや、劉備さま、まだ始めたばかりなのに、もう、こんなに」

そう言つて、マンコを弄つてマン汁がべとべとについた手を劉備に見せた。

「イヤあ♥」

恥ずかしそうに首を振るが、逃げようとはしない。乳首が触つてもいないのにブラ越しに自己主張をしている。ならば触つてあげなくては。

「劉備さま、すでに準備万端ということですか?」

「一々、言わないでえっ♥　ち、乳首、すごいのお……あひいん♥」

「劉備さまの反応が一々、可愛いからですよ」

「ひゃあうううっ♥　んひん、可愛いなんて、言わないでえ……」

「何故ですよ?」

「あん♥　か、可愛いなんて言われたら、あはあ……うれしくなって、

ふア……もつと、気持ちよくなっちゃうのオ♥」

「なら、もつと気持ちよくなってください。かわいい劉備さま」

狙いを定め、俺のを劉備の中に突き刺す。

「きやひいいいいいいっ♥♥♥♥♥♥♥♥」

劉備の膣内は、愛紗や鈴々のような搾り取るような締め付けではなく、柔らかく包み込んでくる。

「あああああっ♥ ご主人様と全然違うのお……へ、ヘンになるうんうっ、あふう♥」

腰を動かし始めると、その動きに合わせて、劉備の巨乳が激しく揺れ、思わず、それに手を伸ばし、揉みし抱く。

「あうっ、あひ、あひいい♥ お、おっぱいダメえ……あ、あはああああ♥♥♥♥♥」

真綿で絞めるがごとく、段々と射精感が高まっていく。

「あ、あひやあああっ♥ きちやう……きちやう♥ すごいのがきちやうのお♥」

「自分ももう、イキそうです」

「きてっ、きてきてきてえええ♥♥♥♥」

快樂にとろけきった劉備の瞳を見た瞬間、我慢の限界を迎えた。

「くう」

「あへえっ♥ 中が、中がイイツ、おなかの中しびれるうううううっ♥

♥♥ うあっ、あっ、あああ……ひぐうううううううっ♥♥♥♥♥♥♥♥」

〈劉備Side〉

身体がバラバラになるような衝撃だった。頭の中が真っ白になって何も考えられなくなって、身体がふわふわしたみたいになって…

「ハアハア…」

すごかった。

愛紗ちゃんや鈴々ちゃんがハマっっちゃうのも仕方ないよ。

だってこんな気持ちが良いんだもん。

「劉備さま、大丈夫ですか？」

私の横に寝転がった周倉さんが、優しく頭を撫でながら、気遣ってくれた。そう言えば、ご主人様にそういうことを言われたことってなかったなあ。

「う、うん、周倉さんは？」

「自分はまだまだ平気ですよ」

そう言つてチラツと、下を向いた。そこで、まだ、周倉さんのおちんちんが大きいままなことに気がついた。

「どうします？」

どうしよう、愛紗ちゃんには、一回って約束したけど……

でも、もう、一回しちやっただし、何度やっても同じだよね？

「お願いします」

「何をですか？」

周倉さんは、ニツコリと笑つて聞いてきた。やっぱり、この人はちよつと意地悪だ。

なんて言えばいいか、迷っていると、鈴々ちゃんの挨拶を思い出した。

「桃香のオマンコに周倉さんの極太チンポを入れて、いっぱいスポスポして気持ちよくしてください♥」

「わかりました。劉備さま」

そう言つて、私のマンコに極太チンポの先っぽを当てた時、私は、周倉さんの胸に手をついて待ったをかけた。

「ダメ♥ 劉備じゃなくて、桃香♥」

「それは、真名を預けてくださるといふことですか？」

「うん♥」

「ならば、自分の真名をお受け取りください、刃です」

「しゃべり方も愛紗ちゃんたちに話してみたいにして」

「…ふう、わかった。桃香、行くぞ？」

「刃さん、きてえ♥」

刃さんのチンポがグイグイ入ってくる。

「ああつ、いいのおおお♥♥♥」

〈北郷Side〉

最近、愛紗と鈴々の性技が凄い。

愛紗の髪コキとか、他の女にやらせてみたけど、あれは、愛紗の美髪あつてこそだつて、わかった。

鈴々のバキュームフェラは、他の奴にやらせるまでもなく、鈴々だからこそできるんだつて、わかつてる。

あの二人の技を受けた後じゃ、他の女を抱く気にもならないし、二人とも、ガチで赤玉出そうなくらい搾り取るから、最近、あんまり、女に手を出してないなあ…

もうそろそろ、ここをでることになったけど、みんなが俺に「ゲート・オブ・バビロン」を使うなって言ってくる。傍から見れば妖術にしか見えなくて、そんなものをポンポン使っているのが朝廷にバレたら、討伐対象にされかねないって言われた。せつかくのチートなんだけど、使えないとかマジかよつて気分だ。

その憂さ晴らしをしようにも、色々な準備の為に愛紗も鈴々もいないし、久しぶりに他の女でも頂こうかなあ。

人妻とか、彼氏持ちの女との寝取りセックスでもすれば、ちよつとはスツキリするかな？

つて考えてたら、桃香に呼び出された。

桃香って、良い身体しているし、SEXだって中々気持ちいいけど、愛紗や鈴々に比べると、正直言って劣る。

見た目が良いだけで、その他は、他の女とどっこいだ。

愛紗たちにアドバイスをしたっていうある人とやらがわかればなあ…

性技のアドバイスをするくらいだから、娼婦とかそっち系の女か、若い頃にやんちゃした爺さんだと思っただけど、それらしい人を見つけないことは出来ない。

二人も、その人のことは、話さないって約束だからって話してくれないし…

そんな事を考えながら、桃香の部屋につくと、桃香が出迎えてくれた。

「どうしたんだい？」

「うん、あのね、愛紗ちゃんたちが言っていたある人に私も会えたんだ！」

「本当か!？」

どこのだれなのかを聞いたが、やっぱり、桃香も口止めをされたらしい。誰が言ったか言わなければ大丈夫だと説得してみたけど、不義理だからと教えてくれなかった。

「それでね」

ベッドで並んで座っていた桃香の手が俺の手に重ねられ、耳元に寄せられた桃香の口から、艶っぽい声が聞こえた。

「私も、教えてもらったんだ♡」

その一言で、俺の股間が戦闘形態に移行した。

桃香に言われるがまま、服を脱いでベッドの淵に座る。

桃香の方も服を全部脱いだ。

「何をしてくれるんだ？」

「ご主人様は、そのまま座ってて」

桃香はベッドに上がると、俺の背後から俺の足に足をからませて足を開かせた。この時点で、背中から桃香の巨乳が押し付けられて、柔らかさの中に、乳首の固さがあり、何とも言えない気持ちよさがあった。

両脇から手が回されて左手で筒を作り、右手でその筒に蓋をするようにして俺のチンコの先にあてた。

「さ、ご主人様、腰を前に出してみて?」

耳元で桃香が囁く。

言われるがままに腰を前に突き出す。

「ッ!」

桃香の指の筒の中にチンコが入り、しごかれる。続いて、亀頭がふたの手に撫でられた。

これは、手でできたオナホか!

「ご主人様、もつと腰を動かして♡ 桃香のお手々マンコをご主人様のおちんちんでいっぱい犯して♡」

耳元でささやかれる桃香の声にぞくぞくしながら、腰を動かす。

腰を前に出せば、桃香の手マン。腰を後ろに下げれば、桃香の柔らかい肉のクツション。

まさに、前門の虎後門の狼! 前に出ても後ろに下がっても、気持ちイイ。まだ、この状態を味わっていたくて、動きを抑える。

「ご主人様、腰がゆっくりになってきてるよ。ほら、もつと♡ 動いて

♡ ホラホラ♡」

「うわっ」

後ろから、桃香の腰が打ち付けられ、強制的に手マンに勢いよくチンコを突っ込まさせられる。我慢汁で濡れてすべりが良くなった手マンの方からも、腰を突き出すと同時に、迫ってきて、より一層、刺激が強くなった。

「と、桃香、そんなに早くされたら、イツちやう!」

「いいよ、ご主人様♡ 早く白いのをピュツピュツして♡」

「ああああああ!!」

イク瞬間、桃香が、蓋をしていた方の手を外した。勢いよく、精子が飛び出し、床に落ちた。

「凄い、ご主人様の白いの、あんなに遠くに飛んだよ♡」

楽しそうに言いながら、ゆるゆるとチンコをさすりつつける。

「今度はどれくらい飛ぶかな?」

そう言いながら、桃香が腰を振り始めた。自分で動いていないから、コントロールが出来ない。

「うつくあ…」

まるで、自分自身が、桃香のチンコになったみたいなの気分になってきた。

「もお、ご主人様だったら、自分でも動いて♡ ほら、もつと腰をへここさせて♡」

「で、出る!!」

「キヤツ、手がべとべと♡」

今度は、蓋を外さず、手マンで射精を受け止めた。

「ハアハア…：桃香、ちよつと休ませて」

「えー、ご主人様、まだまだこれからだよ」

「そんな何度も連続なんて…」

「もう、しょうがないなあ」

そう言いながら、チンポが手マンから解放された。そして、その手で、俺の乳首をくりくりと弄りだした。

「うひゃっ」

「男の人も、おっぱいで感じるんだよ？ ほら、クリクリイ♡」

自分の精子がついた指で乳首を責められている現状に言いようのない妙な感覚を覚える。

「おちんちんの方も」

大股開きさせていた足が外され、その両足の足の裏でチンコが挟まれた。

「あうっ!？」

「今度は、足マンコですよ♡ 私の足マンコでおちんちん、いっぱい、しこしこしてね♡」

ろくろを回すみたいに足でチンコをコスられつつ、強制的に腰を振らされ、より一層、刺激を与えられる。我慢しようにも、さつきより、刺激される場所が増えて上手く我慢できない。さつきまで、背中の中から身体だけじゃなくて、乳首への攻撃、チンコへの二段攻撃。

「もう、出る、出るよ!!」

「出して、ご主人様♡ ほら、ピュッピュッ♡ レロ♡」
耳をなめられた瞬間、振り切れる限界まで上がっていた快樂ゲー
ジが振り切れた。

「はああああ!!」

〈桃香Side〉

イクのと同時に、ぐったりとして動かなくなったご主人様に服を着
せて、飛び散った白いのを拭きとってお部屋を換気してから、人を呼
んで、ご主人様をお部屋に連れていってもらった。

それにしても、物足りないなあ…

刃さんのところに行きたいけど、刃さんって今、お仕事で忙しいだ
ろうし、ちゃんとお仕事しないと、気持ちイイ事してくれないって言
われちゃっているなあ…

そうだ！ 今からでも、執務室に行って、お仕事して、それで刃さ
んにご褒美をもらおうと♡

四話（朱里&雛里／朱里&雛里）

〈孔明Side〉

桃香さまとご主人様が率いる義勇軍に、親友の雛里ちゃんと一緒に参加させて頂くことになりました。

義勇軍の皆さんは優しく、天の御遣いであるご主人様も笑顔が素敵なカッコイイ人でした。

ただ、軍について聞いたり、今度どのように動くかなどを聞くと、鈴々ちゃんがご主人様を「難しい話は愛紗たちに任せるのだ」って言って連れて出ていき、愛紗さんが自分の隊の副長である周倉さんと呼んできて説明させました。

周倉さんは、全軍の様子や今後の予定等を丁寧に教えてくれました。ただの副長である周倉さんが何でこんなに詳しいのか聞くと、困ったような笑みでごまかされてしまいました。

でも、すぐにわかりました。いや、わかってしまいました。この義勇軍の中心は、ご主人様でも、桃香さまでもなく、あの周倉さんであると。

一部隊の副長という立場にありながら、この義勇軍の全てを周倉さんが中心になって回っていたのです。

思わず、愛紗さんに聞いてみたところ、最初のころは、愛紗さんの補佐として周倉さんと二人でやっていたけど、気がついたら、周倉さんが中心となって切り盛りするようになっていたそうです。

周倉さんは、私や雛里ちゃんが参加したことを誰よりも喜んでいて、よう、「文官のまねごとは、これでおさらばできる！」と言っていましたが、義勇軍全体の状態を常に把握している周倉さんの能力を戦闘だけにするなんて、私たちにはできません。

だから、義勇軍の運営等のお話は、自然と私と雛里ちゃんと周倉さんが中心になって、桃香さまはそれを聞いて勉強をするって形が出来た。愛紗さんも手伝いに来てくれます。

ご主人様？ たぶん、おっぱいが大きい人と仲良くやってたんじやないですか？（怒）

「はわわっ ♥ あうっ、あっ、あああんっ ♥」

「朱里は、ここが弱いんだな」

「じ、刃さん、そこはあああん ♥」

いつも一緒にいる周倉さんと仲良くなるのに、そんなに時間はかかりませんでした。そして、刃さんに憧れを抱くものにも、時間はかかりませんでした。

「ああん、そこダメ、ダメえ、んうううん ♥」

「あわわ、朱里ちゃん、とつても気持ちよさそう……」

「雛里もこっちにおいで」

「は、はひ！ ちゅ、ちゅぼっ、んふう ♥」

二人で意を決して刃さんに告白したら、刃さんはめずらしく、ポカんとした顔をしていました。

ご主人様じゃないのかって聞かれたけど、私も雛里ちゃんもご主人様とは私的にはさほど会っていません。

ご主人様って、基本的に私たちみたいな小柄な女の子よりも、桃香さまや愛紗さんみたいなおっぱいがおっきい女の人たち（親衛隊）とばかりいっしょにいて、例外は、鈴々ちゃんくらいだとおもいます。

だから、気後れしちやって私や雛里ちゃんがご主人様と会っても事務的な会話しかしていませんし、ご主人様もあまり、私たちに積極的な話をしようとはしてきません。

笑顔は素敵だと思うけど、正直それまでなんです。むしろ、仕事とかをほとんどやらないからどちらかというと、悪い印象がほとんどです。

そう話すと刃さんは、意外そうな顔をしてから、おかしそうに笑いだした。ひとしきり、笑ってから、刃さんは、恋人だった幼馴染をご主人様に奪われたことを教えてくれました。それから、私たちの気持ち

ちは嬉しいと言ってくれました。

そして、好意を伝えてから、閨を共にする関係になるまで、さほどかかりませんでした。

「んちゅ、ちゅば♥ 刃しやんのちゅういいれしゅ……」

「ああああ♥ 雛里ちゃんズルい。刃しやん、私にも……」

服の留め具を外して、私の胸を愛撫しながら、雛里ちゃんとちゅうをしている刃さんにおねだりすると、刃さんは苦笑しながら、私にもちゅうをしてくれた。

私たちと刃さんは、本当の意味で閨を共にしたことはまだありません。初めての日、覚悟を決めた私たちに刃さんは、無理だと言った。私たちみたいな子供体形では、勃たないっていうんですかって叫んでしまったけど、刃さんは冷静に私たちに刃さんのアレを入れたら、私たちのアソコが裂けてしまうと言われた。

好きな人と、閨を共にできないなんてと、哀しくなっていると、刃さんは、少しずつ慣らしていけば、大丈夫だと言ってくれました。

実際に、刃さんのモノを見せてもらいましたが、刃さんの言う通り、無理やりやったら、私たち死んじゃいます。

男の人のモノを模した道具を使ってちよつとずつ慣らし、今日、ついに、本番となりました。

「はああん……あつ♥ あああつ♥」

刃さんが、私の下着を下ろして、秘部を舐めてくれます。何度もしてもらったことがある行為だけど、たまらなく気持ち良くて、身体がビクツてなつてしまいます。

「はむ……てろ……ちゅ……ちゅぶつ、んつ、んちゅつ♥」

雛里ちゃんが刃さんのチンポを舐めてます。私も参加したいけど、気持ち良くて動けない。

「はわつ、あつ、あああん……じんしやん♥ もう、もう、イツちやいますう♥♥♥」

「おっと」

「ふえ……な、なんでやめちやうんですか?」

刃さんの舌が離れていつちやいました。

「今日は、最後までですと言っただろう」

そう言つて刃さんは、見せつけるようにチンポを揺らす。雛里ちゃんのヨダレで濡れたチンポがゆっくりと私のアソコに……オマンコに近づけてきます。

「……ンク」

思わず、唾を飲み込んだしまいました。どうしよう……これからすることに期待している助平な女だと思われちゃったかも知れません。

「キツかったら、言ってくれ」

「は、はい」

入口に押し当てられたチンポがゆっくりと、膣内に入ってきてきます。

「んああ……かはっ」

苦しい。道具よりも大きくて熱いモノがどんどん私の中に入ってくる。でも、それ以上に待ちに待った時が来たことに喜びを感じていました。

「は、あはああ……あふ……」

「一番奥まで入ったけど、大丈夫か？」

「だ、だいじょうぶでふ♥」

ああ、ついに私は、刃さんと一つになれたんですね……

刃さんは、私をいたわるように腰を動かさず、おっぱいやおまめさを触り、気と散らしてくれます。

「あわわ、朱里ちゃん、すごい……刃さんがあんなに入ってる♥」

「あつ、ふわあんっ♥ 雛里ちゃん、そんなに入っているの？」

「う、うん、刃さんのチンポ、半分以上入ってるよお」

はわわ、私の身体って意外に凄いです。

「じ、刃さん、もう、動いて平気です」

「わかった。ちよつとずつな」

おでこにちゆうしてから刃さんはゆっくりと動き出した。

「あん……やあん♥」

チンポの先と私のオマンコの一番奥がちゆうする度に、頭にバチバチって火花が散る。

「しゅ、朱里ちゃん、どう？ どんな感じっ？」

「ひゃああん♥ すごい♥ 道具なんかとは、全然違うよお……ズンズンって突かれる度に、はあふう……幸せが広がるのお♥♥」

「雛里、こっちにおいで」
「ひゃ、ひゃい♥」

刃さんが、私を突きながら、雛里ちゃんのマンコを指でいじめ始めました。

「あつ、あつ、あつ、あつ♥」

雛里ちゃんは、刃さんの腕にギュツと抱きつきながら、小さな声で喘ぐ。なんだかともつてもカワイイ。

「あくつ、はつ、ああんツ♥」

刃さんのチンポが一番奥にゴリゴリって当たる度に、頭でバチツバチツて火花が散って段々わけがわからなくなってきました。

「はあつ、あうん、ああ、あはああん♥」

「慣れてきたみたいだな」

そう言つて、ニヤツと笑うと、突然、腰の動きが早くなった。

「あ、ああああ、あおおおつ、おかひくなるう♥ しゅごい♥ しゅごうでしゅ♥♥♥」

「ツ、そんなにしめつけられたら……クツ、出る!」

「あひいいいっ♥♥♥ あへえ、なにか、なにかきちやいまふうう……」

うあああああああああああああああああつ♥♥♥♥♥♥♥♥♥

頭が真っ白になって何考えられましえん……

〈魔統Side〉

「あひいいいっ♥♥♥ あへえ、なにか、なにかきちやいまふうう……」

うあああああああああああああああああつ♥♥♥♥♥♥♥♥♥

親友の朱里ちゃんが、大きく振り返って、絶叫した。苦痛の絶叫じゃなくて、喜びの絶叫……

羨ましい……

私にも早く欲しい。

そんな、私の視線に気がついた刃さんは、朱里ちゃんを寝台に寝かすと、私を抱き上げた。

「さあ、雛里の番だ」

「ひや、ひやい♥」

噛んじゃった……恥ずかしい。

でも、刃さんは、笑ったまま、私を抱きしめて、接吻をしました。それから、私をだっこして膝の上に乗せると、後ろからおっぱいを揉んでくれます。お尻にさつきまで朱里ちゃんの中にいたオチンポが当たって凄くドキドキします。

私のおっぱい、朱里ちゃんよりも少しだけ大きいのは、ちよつと自慢。前にポロツと言っちゃったら、朱里ちゃんが物凄い形相で睨んできて怖かったです。

「少し大きくなってきたんじゃないか？」

「刃さんが、いっぱい揉んでくれたから♥」

「なら、もつと揉んで大きくしないとな」

「あ、あひっ♥んあ……あはああああ♥」

おっぱい全体を揉まれたり、乳首をくりくりされただけで、自分でするよりも、とつても気持ち良くなつちやいます。

「ん……ちゅっ、れろレル、ちゅう♥」

「きやんっ、あああんっ♥しゅ、朱里ちゃん!？」

いつも間にか復活した朱里ちゃんが、私のアソコを舐めてきます。

「雛里ちゃんが、イツちゃえば、もう一回やつてもらえる……」

「あわわ、そんなのダメ、ダメだよオ……朱里ちゃん……あんっ、あ

ああんっ♥」

「イツちゃえ、いつちゃえ♥」

刃さんは、朱里ちゃんを止めることなく、おっぱいを攻め続けています。

「あ、ダメ……ダメ……ダメえ……あ、ああああああああああアア♥♥♥♥♥」

熱い物を感じながら、すうつと意識が遠のいていきましゅう♡

〈周倉Side〉

アへ顔をさらして失神した雛里から、イチモツを抜くと、すぐに朱里が飛びついてきた。

「んっ、ちゅぶ……んむむ……んふうん♡ 刃さん、今度こそ、私ですよね?」

「そうだな」

と、答えると、朱里は喜々として俺の上に跨ってきて、自分の中に俺の突き刺した。

「ひきいいいいいいっ♡ これコレこれがいいのお♡♡♡」

〈朱里Side〉

とても淫らで幸せな時間から一夜明け、私たちはいつものようにお仕事をしていると、桃香さまがこちらをじっと見ています。

「じいじいじいじい……」

「はわわ、どうかなきいましたか?」

「ううん……朱里ちゃん、雛里ちゃん、今日のお仕事が終わった後、ちよつと良いかな?」

ニツコリと笑って桃香さまは言ったけど、なんだか、断りがたい気迫みたいなのを感じます。

「えつと……大丈夫ですよ?」

「わ、私も平気です……」

私たちが応えると、桃香さまは「用事が出来た」と話されて執務室を出ていかれました。

そして、今、私と雛里ちゃんは、桃香さまを始め、愛紗さんと鈴々ちゃんに囲まれています。

物凄く怖いです。雛里ちゃんなんて真っ青になってガタガタ震えています。

「あ、あのお…」

「そんなにおびえなくても大丈夫なのだ」

「そうだ。ちよつと確認したいことがあるだけだ」

「ひゃ、ひゃい!!」

だったら、そんなに殺気を出さないでください!

「二人とも、刃さんとしちやっただの?」

「ツ!」

たぶん、私も雛里ちゃんみたいに真っ赤になっちゃっているんだと思います。

「その様子だと、したようだな」

「ああああああああ………」

雛里ちゃんはもう、涙目です。私もそうなってます。

「し、したから何だっというんですか?」

「うくん、どうしたってわけじゃないんだけど、二人とも、刃さんのこと好き?」

「しゅ、しゅきです!!」

桃香さまの問いに私も雛里ちゃんも即答しました。

三人は、私たちをジッと見てから、愛紗さんが口を開いた。

「なら、二人とも刃の為に何でもできるか?」

「……何をすればいいんですか?」

「刃兄いだけじゃなくて、お兄ちゃんともすればいいのだ」

……え

「あ、本番までやらなくていいよ」

「あ、あの、言っている意味がわからないんですけど……」

愛紗さんの説明によると、ご主人様を暴走させないためだそうです。刃さんは劉備軍に無くてはならない人であり、直接の上司である愛紗さんだけではなく、桃香さまや鈴々ちゃんとも親しくしています。その為、ご主人様に嫌われているらしいけど、三人がご主人様と閨を共にしている為、今のところは大丈夫だけど、もし、私と雛里ちゃんが刃さんを好いていることに気付かれ、閨を共にしたことがばれた場合、刃さんの身が危険にさらされてしまい、さらには、刃さんという支柱を失った劉備軍の存続さえも危うくなってしまうということです。

三人の話によれば、三人とも閨を共にしても最後までいたしてはいないそうです。

「…わかりました。刃さんの為にも頑張ります」

「わ、私も、がんばります！」

「うん、そう言ってくれて良かった」

桃香さまがニツコリと笑った。でも、驚きです。桃香さまも愛紗さんも鈴々ちゃんも刃さんと閨を共にしていたんだなんて…

裏切られたような気もしますが、刃さんの精力を思うと、私たち二人じゃとても受け止め切れないので、良かった気もします。

「あ、あの、それで、私たちはどうすればいいんですか？」

「えつとね、ここに書かれた通りにすればいいよ。目を通したら、焼いちやってね」

そう言っって差し出された物には、よく知った人の字が書かれています。

〈北郷Side〉

「ご主人様♡」

今日は仕事の日だ。新しく仲間になった朱里達のおかげで俺の捌かなくてはならない仕事はだいぶ減ったらしいけど、それでもこの量は多いと思う。

もうちよつと、がんばってくれないかなあとか思いつつ、サインしている、朱里と雛里が声をかけてきた。

何かと思つて顔を上げると、二人は、頬を赤らめてモジモジしていた。

この二人とは、あまり話をしていない。鈴々よりも小柄な二人とやっても、鈴々の時のようにギャアギャア騒がれるだけなんてことになりそうでさけていたんだけど、どうやら、ニコポは伊達じゃ無かつたようだ。

「あの、私たち、ある人とお話しできたんです」

「ツ!!」

もう、みんなの言うあの人つてお助けキャラだよ絶対に!

俺が期待に胸をふくらませていると、二人は、恥ずかしそうにスカートをまくってパンツを見せてきた。

朱里は白と青のシマパン、雛里は白でお尻にクマが書かれているキャラパン。

「私か朱里ちゃん、どっちが良いですか?」

ん? なんだ? どういう意味だ?

聞いても、どっちが良いかと聞き返された。

そうだなあ…

「朱里かな」

そう答えると、二人はおもむろに、パンツをおろし始めた。一体何をしてくれるのかとドキドキしていると、朱里が俺の前に立った。

「ご主人様、失礼します」

そして、脱ぎたてのシマパンを俺の顔に変態仮面みたくかぶせてきた。そつちに気を取られていると、今度は、雛里がズボンのファス

ナーを下ろして手を突っ込み、チンコを引つ張り出すと脱ぎたてのキヤラパンをチンコに巻きつけてテコキを、いや、パンコキを始めた。「おおお!?」

愛紗の髪コキや桃香の手マンとはまた違った気持ちよさに思わず、声を上げてしまった。さらに、朱里が俺の制服を脱がせ、シャツをたくしあげて、俺の乳首を舐めたり、指で刺激し始めた。

ヤバイ! ロリの乳首攻めとパンコキとか、視的にも、精神的にも、そして肉体的にもクル物がある。さらにかぶせられたパンツの匂いが追い打ちをかけてくる。

「れる、ぴちゃ……ちゅ、ご主人様、そんなにハアハアっと私の下着のにおいをかがれたら恥ずかしいです♡」

「あわわ、なんだか、ぬるぬるしたシミが出てきました♡」

悪いことをしてしまっているという背徳感まで感じる! ヤバイ、このロリツ子コンビ、略してロリコン。マジでヤバイ、さすが軍師だ!

「はわわ、ご主人様の乳首、ビンビンです。エイ♡」

「ひグー!」

突然、朱里に乳首を捻られた。

「しゅ、朱里、それ、痛いからやめてくれ」

「でも、ご主人様、気持ちよさそうですよ。ね、雛里ちゃん♡」

「う、うん。ご主人様のおちんちん、朱里ちゃんの手に合わせてビクンビクンツてします。それにぬるぬるもいっぱい出てきてます♡」

そう言っつて雛里はパンコキをしながら、鈴口の辺りをパンツ越しに指で擦り、一端手をはなしたと思ったら、今度は両手で掴んできた。

これは、パイ包みか!

「ご主人様つて痛いのがキモチイイ、変態さんなんですか♡」

「ち、ちが「ほらあ」ひぎぎ!」

否定しようとする、朱里が再び乳首をつねり、それに合わせて雛里がパイ包みでチンコ全体を気持ちよくしてくる。

痛みと快楽が同時に襲っつてきて何が何だか分からなくなっていく。

朱里と雛里というロリの姿に視覚が、パンツの匂いで嗅覚が、パン

ツの味で味覚が、朱里の言葉攻めで聴覚が、乳首攻めとパンコキで触覚が、五感すべてを犯されるような錯覚を覚える。

「う、うわあああああ!!!」

そして、その快樂の渦の中、射精した。

「あわわ、急に白いのが出て来てびっくりしました♡」

「もう、ご主人様、出す時はちゃんと行ってください♡」

息も絶え絶えな俺から、朱里はパンツを外した。取られるのが惜しくて、思わず、後を追うように顔を動かしてしまった。朱里は取ったパンツをそのまま、穿いた。さつきまで、俺がクンカしていたパンツを…

さらに雛里も俺の精子がべったりなパンツをそのまま、穿いた。

ヤバイ…ウチの軍師たちは、どこまで俺を追い詰めれば気が済むんだ…

「さ、ご主人様、スツキリしたところで、残りのお仕事をやってしまいましょう♡」

それから、二人の乳首攻めとパンコキを受けるようになった。雛里を選んだ時は、雛里のパンツをかぶって雛里が乳首攻め、朱里がパンコキだ。

朱里が強気な攻めに対して雛里は、優しいというか、ゆるやかな攻めだ。

そして、楽しいのは、その後だ。パンコキの後に会議がある時、精子が付いたパンツのまま出ているようで、時々、スカートに触れる仕事を草にする。これが精神的にクル。二人と仲が良いらしい男と話しながら、スカートを意識する仕草を見ると、とても気分が良い。

桃香達みたく、出しまくることがはないけど、これはこれで気分がよかった。

〈朱里Side〉

「ああん♥ そんな、あん♥ そ、そんなにされたら、すぐいつちゃうよお……はひいいん♥」

「ひああ♥ きもちイイ……イイのだあ♥」

刃さんの腰に跨って腰を振る桃香さまと顔の上に乗ってマンコを舐められている鈴々ちゃんが絶叫する。突かれる度にふるんふるん揺れる桃香さまのおっぱいが妬ましい。

「ほお、それで、ご主人様は今日の会議で雛里を見ていたわけだ」

「はい。今日は、私の下着に出されましたから。でも、すぐに着替えているんですけど」

一番最初に抱かれた愛紗さんは、休憩がてら一緒に抱かれた雛里ちゃんから、ご主人様のごことで報告を受けています。

今日のご主人様は、会議の後、親衛隊の皆さんと飲みに行かれています。その後、間違いなくどこかで乱交しているので、私たちもみんな一緒に刃さんに抱かれています。

刃さんに教えてもらったやり方。子供っぽい下着でご主人様を攻めるってやつです。

ご主人様は、私たちが子供っぽい物を穿いていると思っただけのようですけど、実は、あれは、ご主人様とする為だけに買った三枚いくらの安物で、ご主人様としたあと、すぐに脱いで捨てて、お股を洗ってから、普段つけている下着に交換しています。ご主人様は、私たちがずっと汚れた下着を付けていると思っただけで鼻の下を伸ばして喜んでみるみたいですけど、残念ながら、そんな物を付けていられるほど、私も雛里ちゃんも落ちぶれてはいけません。刃さんのなら平気ですけどね♥

「ああああ♥ イク、イク、イク、イク、イクううううううううううううううううううう♥♥♥♥♥」

「にはああああああああああああああああ♥♥♥♥♥」

桃香さまが大きくのぞけて倒れて鈴々ちゃんもくっつたりしました。

あ、雛里ちゃん、ずるい！ 次は、私がやってもらいます！

五話（鈴々・朱里・愛紗・雛里・桃香／なし）

「ちゅ♥　ちゅちゅ、じゅぼ……じゅるるるるっ♥♥♥」
「ッ」

下半身の気持ちよさに目を覚ますと、裸の鈴々がイチモツに吸いついていた。

「鈴々、何をやっているんだ」

「ちゅぱっ♥　あ、刃兄い、ようやく起きたのだ。今日は刃兄いが休みて聞いたから、一緒に遊ぼうと思ってきたのに刃兄いが全然起きないから、おしゃぶりしてたのだ♥」

「なんで起きないとおしゃぶりして良いになるんだよ…」

普段なら、部屋に人の気配を感じれば、どんなに眠りが深くてもすぐに目が覚めるのだが、一昨日まで盗賊の討伐に愛紗なしの関羽隊で行き、やっと仕留めたと思ったら、早馬がきて問題が発生したから、早く戻ってきてほしいと言われ、部下に指揮を任せ、単機で慌てて戻ってきたのが、夜。そこから、軍師二人と昨日の夕方まで北郷のやらかしたことの火消しの為に奔走していたので、さすがに疲れ果て、さらによく知った気配だった為、無意識のうちに受け入れていたのかもしれない。

とりあえず、やられっぱなしでいるのも癪なので、手を伸ばして鈴々のマンコに指を這わせる。

「ひああアっ♥　刃兄い、いきなりさわっちゃダメなのだあ。あはっ、あふう……あああん♥」

「そんなこと言いながら、ずぶぬれじゃないか。これなら、すぐ入れられそうだ」

鈴々をどかして寝かせると、これからの快樂への期待に目を輝かせてこちらを見上げてくる。いつもは、鈴々との体格差を考えてゆつくりと入れていくんだが、今日は不意打ちを食らったので、こちらも不意打ちをしようと思い、一気に突いた。

「ンああああっ♥♥♥」

そして、隙を与えずに突きまくる。

朝の運動を終えた俺は、適当に朝食を済ませる為に外に出た。仕事の合間をぬって見回りをしていた為、いろんなところから声がかけられるので、それに適当に応えていく。

ふと、目を向けると本屋に見知った後姿を見かけた。

「朱里」

「ッ!? はわわ、じ、刃さんどうしたんですか!?!」

なんか物凄く慌てて本を後ろに隠した。

……ああ、八百一本か。

「……趣味に関して色々言うつもりはないが、こういう往来でそういう本をこの国の軍師が立ち読みしているのは、ちよつと、頂けないぞ」「新しく出る本を買いに来たら、その、この本を見つけまして……どんな内容かなあつてちよつと覗いたら……」

「止まらなくなつて、立ち読みしていたと?」

「こ、今後は自重します……」

是非、そうして下さい。ウチの評判に傷か付きますから。

御小言はこの程度にして俺は朱里を誘って遅い朝飯兼早い昼飯に出かけた。

「あううん ♡ あふあ……あきゆん ♡ あひいんっ、きやああああん ♡」

俺と背面座位でつながった朱里が、腰を振っている。

俺たちの入った飯屋は、幽州で使っていた宿屋と同じタイプで、金

を払えば、個室で飯が食えて、その際に何やっても、文句はこない。
「あああつ♥ もつと、もつとしてくださいい……ああ、あんつ、ああああん♥」

「おいおい、飯を食いに来たのに、全然食べてないじゃないか」

「あん、ああん……た、食べてます♥ 下のお口で刃さんのオチンポ
いっぱい食べてますう♥ あ、あふう……ああああん♥♥♥」

餌かけを指すくって口に近づけると、すぐに吸いついてくる。

「んふん……ちゅうちゅう……はぶ♥ ちゅぱ♥ 美味しいい……
もつとくださあい♥」

更にすくって指をしゃぶらせながら、腰を突き上げる。

「んんんんんんんんんんんんんんん♥♥♥♥♥」

大きくのぞけて絶頂した朱里はぐったりと俺に身体を預けてくる
が、俺はまだイッていないので、更に突き上げる。

「ああああああ♥ ダメ、ダメえ……イク♥ イクイクイク♥ あひ
いいい♥ イ、イクの止まらない♥♥♥♥♥ ああああああ
ああ……イク、まだイク♥ おつ、おはああああああ♥♥♥♥♥
♥♥♥♥」

朱里が、舌を突き出し、あへ顔さらしながら、連続して絶頂し続ける。
る。

「なんて締め付けだ……もう、持たない」

「あああん♥ 来て、アツいの来てくださいい♥ 朱里の助平マンコ
に、刃さんのアツイの注ぎ込んでください♥ 欲しい、欲しいで
すうっ♥♥♥♥」

「出るぞー!」

俺の腕にしがみつく朱里の一番奥に射精した。

「ああああああああああ♥♥♥♥♥ すごい……アツいのすごい出て
ますウ♥ ああん……イキます、イキますうっ♥ 頭、真っ白になっ
てイグうううううううううう♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

白目をむいて涙とヨダレと鼻水をたらしながら、イキ狂った朱里は
痙攣していた。

意識が戻った朱里に飯を食べさせ（普通にあくんした）、城まで送ろうとしたが、大丈夫だと言ってきかない朱里を見送り、再び、街をぶらぶらと歩く。

「つと」

「わっ」

突然、横から現れた人とぶつかった。幸い、二人とも怪我するようなぶつかり方もしなかったのだが、ぶつかった相手は、愛紗だった。

「じ、じじ刃ー！」

「関羽さまじゃないですか、どうかなさいましたか？」

まあ、人前なので、プライベートの呼び方はやめておく。

「あ、いや、その……」

歯切れ悪く、手に持った物を弄っている。

「買い物ですか？」

「ツ!!」

手に持っていた袋を慌てて背後に隠したが、持っているのはすでに見ていたので、今更意味はない。

助け起こすフリをしながら、耳元で強めの口調で問う。

「何を買ったんだ？」

「し、下着だ」

「下着？」

「お、おまえとする時に着ようと思って……」

「へえ……」

「き、着替えてきたぞ」

服屋で試着するフリをして着替えてくるように言つて、少し待つと、しきりに周囲を気にしながら、服屋から出てきた愛紗は、歩く度にスカートを抑えている。

一体どんな下着を買ってきたのかとても楽しみだ。

目的地へ向かつて歩き出すと、いつもなら、隣を歩く愛紗が今日は、遅れ気味についてくる。

時折何度か立ち止まって待つこともしばしあった。

愛紗本人は自覚していないのだろうが、いつも凜とした愛紗が、今日の様などかさわそわして、恥ずかしそうに身を小さくしている姿は、いつもの美しいと言われるモノと違い、可愛らしく、人目を引きつける。

そして、人の目を気にする愛紗はその視線を受けて更に恥ずかしさに可愛らしさが上がってしまうという悪循環に陥っていた。

中々目的地に着かないが、愛紗の様子を見ているだけでも十分に楽しめた。

そして、ようやく目的地にたどり着いた。といっても、ただの路地裏だ。少々入り組んだ位置である為、早々、人が来ることはないだろう。更に言うと、周囲に窓もない為、のぞかれる心配もない。無計画に家が建てられた為にできた秘密基地の様なものだ。

「こ、ここですか?」

「ああ」

「いつもの宿じやダメなのか?」

「こんな明るい時間じや、誰の目があるかわからないからな」

「さあ、見せてくれ」

促すと、観念したららしい愛紗は恥ずかしそうに服のボタンを外して、胸をさらけ出した。

ブラのカップに縦の切れ目が入り、乳首と乳肉が見えていてとても卑猥だ。

「下は?」

「ッ……」

恐る恐ると言った感じにスカートをたくしあげると、パンティも切れ目が入り、マンコが隠れていなかった。後ろも上げさせると、なんとアナルまでさらしていた。確かにこれじゃ、恥ずかしいわけだ。

だが、ただ、恥ずかしかっただけではないらしい。

「濡れているな」

「そ、そんなわけが……ああん♥」

顔を真っ赤にして否定する愛紗のマンコを撫でてやるとしつかりとぬるつとした愛液が指についた。

「本当のことを言え、街を歩いていた時、おまえは、恥ずかしかつたんじゃないくて、いやらしい下着を付けていることがばれるかもしれない状況にドキドキして楽しんでたんだらう?」

「ち、ちがッ、あひい♥」

「違わないさ。おまえは、こんな淫らな下着を付けて街を歩いて楽しんでる変態なんだ」

「そ、そんなことお♥」

涙目になって必死に否定しようとする愛紗の顎を押さえて、強引にキスをする。舌を伸ばすと、少しためらってから、愛紗も舌をからめてきた。

「チュ……ちゅむむっ、ちゅぶ♥」

「でも、俺の為にそんな変態になった愛紗を俺は愛しく思うよ」

「ッ♥ い、いいのか? 私は変態でもいいのか?」

「ああ、いいよ。俺の助平で淫らな変態愛紗」

抱きしめると、愛紗も力いっぱい抱きついてきた。俺じゃ無かったら、愛紗ブリーカーで死んだんじゃないか?

「刃、してくれ♥ 今回の場で、してくれ♥」

俺から離れて壁に手をつくすと、後ろ手でスカートをめくり、エロティックに尻を振りながら、誘ってきた。

その誘いに応えるようにチンポをさらけ出し、腰を支えて、ゆつくりと突き入れる。

「あ、あっ、ああああああ……入ってくる♥ 刃が私の中に入ってくる♥ あ、ああああああ♥」

一番奥まで入ると、愛紗はクイクイと腰を振り始めた。

「あいいっ♥ いい…いい♥ おっぱいも、おっぱいも一緒に♥」
—と

なんだかんだ言っ受けて受け身が基本の愛紗が妙に積極的なので、言われるがまま、覆いかぶさって胸に手を伸ばし、切れ目からこぼれる乳首をつまむ。

「はひ…はひ♥ ああ、おっぱい、イイ♥ イイ♥ 感じるう…ああああ♥ 誰かに見られるかもしれないの…もつと、もつとモミモミして♥ ああ、おっぱいとマンコがあ…うああああああ♥♥♥」
「愛紗、こっちを向け」

振り向いた愛紗の唇をむさぼる。

「ふえ…あむ、ちゅっ、んっ、ちゅむっ♥ レロレロ…ちゅば…いい、これイイ♥ 全身が、刃にい…イク♥ イグ、イグううう♥♥♥ お、おああっ♥ おおっ、おほおおおおおおおおおおおおおおお♥♥♥♥♥♥♥♥」
「俺も、出すぞ！」

咆哮の様な声を上げてイク愛紗の締め付けに耐えきれず、一番奥にイチモツを突き出し、射精した。

「ああああ♥ 赤ちゃんの部屋に刃のが来てるう♥ 来てるう♥
いっ、いっ、いっぐうううううううううううううううううううううううう♥♥♥♥♥♥♥♥」

強烈な射精に足の力が抜けそうになるのをこらえて、愛紗と合体したまま、腰を下ろす。尻が地面についた時、「あひい♥」と愛紗が声を上げた。

「ハアハア…」

まだつながったまま、呼吸を整えていると、愛紗がもたれかかってくる。それを抱きとめ、どちらともなくキスをした。

まだ用事があるという下着を着替えた愛紗と別れ、城に戻った俺は、中庭に備え付けられた長椅子に腰をおろして一息つく。

今日は、鈴々に始まり、朱里、愛紗と立て続けに三人とした。三人それぞれと激しくいたした為、少し疲れた。

「あ、周倉さん！」

声に顔を上げると雛里がいた。大事そうに本を抱えて駆け寄ってくる。眺めていると、俺まで後、1mほどのところで、こけた。怪我はしていないけど、涙目になっているその姿にほほえましい物を感じた。

「ん？ 雛里もその本を買ったのか？」

「はい！ まだ全部は見てませんが、とても興味深いです……雛里も？」

「ああ、街で朱里がその本を買うのを見たんだ」

「へえ……それだけですか？」

「ん？ その後、一緒に飯を食いに行ったが「ずるいでしゅ！」」

俺の服を掴んで雛里が睨んでくるが、正直、ただ可愛らしいだけだった。

「なら、雛里も飯を食いに行くか？」

聞いてみると、雛里は少し考えるそぶりを見せてから、付いてきて下さいと、俺の手をとって歩き出した。

引つ張られるがままに歩くと、さほど離れていない場所へ案内された。桃香達がお茶会をしたり（北郷の目がある為、俺不参加）、軍師達が談義したり（俺参加）、酒盛りしたり（俺片付けに参加）している。テーブルと椅子のあるテラスのような場所へ引つ張ってこられた。

「そこに座ってください」

「ああ、わかった」

促されるままにいすに座ると、雛里はテーブルの下に潜り込んでズボンからイチモツを引つ張り出して、躊躇なく啜えた。

「ペろろ、れろ……ちゅ……れろお……ちゅ♥ 朱里ちゃんのことだ

から、ただ、ご飯を食べておしまいなはずありません。はむ……ん、ちゅぱ、ちゅ、ちゅる、ちゅじゅるるる♥　ちゅば……大きくなりました♥」

雛里は、反り返ったイチモツを撫でながらパンツを脱ぐと、俺に背面で跨り、イチモツにマンコを擦りつけてくる。

「あわわ、刃さんのを舐めているだけで私、助平なお汁があふれちゃいますう♥」

そして、亀頭にマンコをくつつけると、そのまま、イチモツを飲み込んで行く。

「あうう……あひ……コスれるウ♥」

「ここまで黙っていてあれだけど、大丈夫なのか？　ここは、みんなも通る場所だぞ」

「あふ、あひん♥　このまま、この本について話し合いましよう♥」

テーブルに置いた例の軍略の本を開いて俺に持たせると、小刻みに腰を振りながら、話し始めた。

「あ、いい……あ……うんっ♥　まずは、ここのところから……」

これはなかなか難しい。小刻みに動き、声を殺して喘ぐ雛里が本に集中させてくれない。

話がおざなりになると「ちゃんと聞いてくださいやい♥」と抗議され、かと言って俺が動こうとすると、「刃さんが動いたら、気付かれちゃいまふ♥」と叱られた。

とろ火でぐつつ煮込まれているようなじつくりとしたセックスにもどかしさと新鮮さを感じていたところに声をかけられた。

「あれ？　雛里じゃないか」

「ッー」

「あん♥」

北郷が珍しく一人で現れた。

まずい……一番ヤバイ奴とヤバイタイミングで会っちゃった。

「ご主人様、お疲れさまですう」

「あ、ああ、雛里は何をしているんだ？」

俺を射殺さんばかりの殺気を込めて睨んでから、雛里に笑いかけ

る。

「周倉さんと新しい軍略の本についてお話をしていました。あふ
♥」

雛里、腰を止めてくれ！ 見つかったら、間違いなく俺殺されます
から!!

「そ、そうか、でも、なんで、その人に乗っているんだ？」

「周倉さんは身体が大きいので、あ♥ こうしないと一緒に本も見れ
ないんでしゅ♥」

そんな話をしながら、座り直す様に腰を上げて勢いよく降ろした。

「ツうー!」

「ンンンン♥♥♥♥♥」

帽子で顔を隠していたが、雛里はこんな状況で絶頂した。強烈な締
め付けに思わず、俺も射精しそうになったが、ぐつとこらえる。

「どうかしたのかい？」

「な、なんれもないれしゅ♥」

「ハハハ、今日も雛里はカミカミだなあ」

「あわわ、笑うなんてひどいですう♥」

その時、遠くから、北郷を探す声が聞こえた。

「ご主人様ア♥ 今日は、街の視察の ンン♥ 日でしゅよね？ 頑
張ってくださいヒイ♥」

「もう、そんな時間か、じゃ、行ってくるよ」

最後に俺を再び殺気を込めて睨んでから、ふと、何かを思い出した
のか、勝ち誇った笑みを浮かべて北郷は去って行った。

「刃しゃん♥ 動いて、動いてください、あひ♥ ひいいん♥ ひあああ
ああつ♥♥♥♥♥」

もう、我慢の限界だった。

北郷が見えなくなつてしばし経つと、もう、見つかるかもとか、考
える余裕もなく、雛里に腰を打ち付ける。

「あつ、あうううつ、んひん、ひいいい♥ イイですつ、イキますつ♥

イクつ、イク♥ イククううううううううううううううううううう
♥♥♥♥♥」

「も、ダメだ！」

散々とろ火であぶられ、限界に達して、今日、初めて射精したんじゃないかってくらい出していた。

「クひいいっ♥ 出てます♥ まだ出てますウ♥♥♥ イッパイっ
イッパイい…あひやあああああん♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

痙攣しながらも膣内は、精を搾り取ろうと、絞まってくる。それを心地よく感じながら、ぐったりと、背もたれに身体を預けた。

「あちゅいのイッパイ…ああああ♥」

夕食を終え、軽く鍛錬をして汗を拭きとってから、部屋に戻ると、寝台が不自然に膨らんでいた。掛け布団からピンク色の髪が僅かに覗いていた。

寝台に座り、声をかけてみる。

「桃香、何をしているんだ？」

「え？　なんでばれたの？」

「…これで気付かなかったら、そいつの頭を疑うぞ」

「…ご主人様にはばれなかったのに」

「たぶん、わかって引っかけたんじやないか？」

もぞもぞと布団から出てきた桃香を見て、言葉を失った。

「ご主人様が、作らせた服で踊り子の衣装らしいんだけど、変かな？」

桃香はなんと、某竜探索の4番目に登場した褐色美女（姉）の格好をしていた。

「なんでまたそんな恰好を…」

「今日、愛紗ちゃんと服を買いに行ったんだけど、その時、愛紗ちゃんが助平な下着を買っているのが見えたから、私も負けていられないなあって思ってた」

「それでこれか…」

「うん。変かなあ？」

現在の劉備軍最大の巨乳の先端が何とか隠れている程度の大きさのブラ、下の正面は陰部をギリギリ隠す程度の高さから垂れている布と白く、ムチツとした太もも、後ろは尻肉をほとんどさらすほど食い込んでいてほぼTバックだ。

「いや、とても良いな」

「ホントに？」

「じゃ無かったら、ここはこうならない」

そう言つて桃香の姿に半勃起してズボンを押し上げていているイチモツを指差すと、彼女は目を輝かせる。

「私の姿に欲情してくれたんだあ♥」

ニコニコしながら、ズボンとパンツを脱がしてくるのを黙って受ける。何をするのかと眺めていると、俺の上に横座りになってイチモツを股で挟み、布越しにマンコで擦り上げてくる。

「あああん♥ 刃さん、こういうの、どうかなあ♥」

てつきり、手とか胸で何かやってくるのかと思つていたが、まさか、素股とは思わなかった。

しかも、衣装の股を隠している布が桃香の腰の動きで不規則に揺れて亀頭に擦り、何とも言えない気持ちよさがあった。

「あああん、あくうん……刃さん、喜んでくれたあ？」

「ああ、気持ちいいよ。もっと、淫らに踊ってくれ」

「うん♥ 今日の私は、刃さんだけの助平な踊り子なのお♥ ああつ♥

♥ ああああん♥」

桃香はうれしそうに、悩ましい吐息を上げながら、腰を振り立てていく。

「あん……あつ、あはア♥ 布越しに刃さんの熱いチンポ感じるのお♥ おつききてえ、固くてえ、すごいチンポ♥ ああん……また大きくなったよお♥ ダメえ、私もあつくなっちゃう♥♥♥」

胸を激しく振り乱して踊る桃香のマンコと太ももの柔らかさと布の感触が俺を高める。

「あああん……イイ♥ チンポ擦れてキモチイイ♥ あん、あふう

……あはあん♥ こんな恰好してチンポ擦るなんてえ……私、変態になっちやったあ♥♥♥

腰を振る自分自身を蔑んでさらに欲情して更に大胆に尻を振り立てていく。

「いつもと違った感じが、とても気持ちいいぞ」

「あはあ♥ 褒められちゃったあ……刃さんがもっと楽しめるようにがんばるう♥」

尻を弾ませながら、ブラに手を伸ばし、上にずらしてまろび出し。拘束がなくなつた胸を桃香は自分でつかみ、強く揉みしだく。

「あああつ♥ あんっ、あはあん♥ おっぱい、ちよつと揉んだだけなのに、いひい♥ すごく感じるのお……刃さん、こうした方がいやらしく見えるウ？」

自分で乳首を刺激しながら、媚びるような顔で尋ねてくる。

「ああ、変態でいやらしく見える。でも、ただ自分が気持ちよくなりたいただけじゃないのか？」

「それはあ……」

腰の動きが遅くなったので、軽く突き上げてやる。

「きやひい♥ そうなのお……おっぱいでも気持ちよくなりたかったのお♥」

少しついただけであつさり和白状した。

「あはあ……あああん♥ あっ、あひいん♥ もう、ダメ、ダメなの♥ 刃さん、入れていいよね♥ はう……入れるからねえ♥♥♥」

俺の許可も待たずに股間の布を外し、一気に根元まで挿入した。

「んはああああああ♥ 一番奥まで入っちゃったあ……奥にござりつてあたつてるう♥」

対面座位で俺に手と足を回してしがみつくと、尻を揺すりだした。

「んっ、あうん……あッ、ひあん♥ ねえ、刃さんも突いて♥ スズズンっっていっぱいマンコ突いてえ……足りないの、もっと激しくしてえ♥♥♥」

「ああ、イクぞー！」

「あひいい♥ チンポ、中をえぐりながら……ハア♥ 奥に、奥に

六話（なし／愛紗・朱里&雛里・鈴々・桃香）

「ご主人様！　ご主人様、起きてください！　ご主人様!!」

「んああ…」

怒鳴り声に目を覚まして顔を上げると、愛紗がいた。

「まったく、いつまでも寝ていられては困ります。今日は昼食後に大事な会議があるのでですから、それまでに朱里たちと話し合っておいてほしいと言っておいたではないですか!」

「あく、ゴメンゴメン」

口うるさい愛紗にうんざりしながら、着替えようとした時、ふと思いついた。

「ねえ、愛紗」

「はい?」

「このままじゃ、悶々として話し合いに集中できないから、してよ」

そう言つてチンコを指さす。愛紗は、一瞬、呆けたような顔をしたけど、ハアッと熱っぽい息を吐いて（北郷視点）股の間に座った。

基本全裸寝なので、ズボンを下ろす手間とかなない。楽でいいと思う!

「わかりました。でも、本当に時間がないので1回だけですよ♡」

（会議まで刃と鍛錬をしたり、仕事をしていたかったなあ）

「ああ、わかってるよ!」

愛紗は、髪をほどいてチンコに巻きつける。さらさらとした髪感触がこそばゆくも気持ちいい。髪ごと手で扱かれる感触は、気持ちよさに思わず、腰が浮くほどだ。

更に空いた手で、髪の毛を束ねて箒にすると、しゅっしゅつと亀頭やカリ首を掃除するみたいに掃く。さらさらでチクチクする感触がああ!!

「あひいいいい!!」

（早く出して頂きましょうか…）

ふいに、愛紗の顔がチンコに近づいてきた。え、もしかしてこれは

!?

「んむっ、ちゅぶ、れる……ちゅぶっ♡」

「うほおおお!!」

髪コキからの髪フェラ!

愛紗の舌が、チンコに絡む髪ごとしやぶりついてくる。

まるで舌と同時に髪までチンコをしゃぶりつくしているみたいだ!

き、気持ち良すぎる……す、す、す……すぎるうう!!

ヤバイ、出る! 出ちゃう! じゅぶじゅぶと顔を上下させてしゃぶりつく愛紗の口の中に……髪の毛のいいいい

「イクー イ、イクー 出る!! ひ、ひいいいいいい!!!」

「ッ」

精子を飲む愛紗の口内の動きに髪が連動してチンコを擦れて、それがまたイイ!

尿道に残った精子を吸い出して、愛紗は、顔を上げた。

「さ、着替えて執務室に来て下さい」

(髪を洗ってこなくては……)

そういうと、愛紗は部屋から出て言った。

でも、あまりの気持ちよさに、腰が抜けてすぐに行動できず、その後、また、愛紗に叱られることとなった。

「今回の会議では、これからの方針を決める会議です。絶対に寝たりしないでくださいね」

「資料を、ちゅ……れる、ご用意したので、目を通しておいってください

……ちゅちゅ♡」

執務室で、午後からの会議の話を聞きながら、朱里と雛里いつものパンコキをしてもらってる。

今日は、雛里のパンツをかぶって乳首攻めを受けつつ、朱里のパンツでチンコを扱ってもらってる。雛里のパンツの匂いは、朱里のパンツの匂いとまた違って、興奮する。

「ああ、わかったよお…」

この間、雛里を膝の上に乗せていやがった男がいた。その瞬間に殺そうかと思っただけ、俺に惚れてる雛里が男にエロいこと許すわけないってわかってるし、こんなプレイできるのは俺だけだって思えば、まあ、見逃してやった。

雛里の乳首攻めは、朱里みたいに攻撃的ではなく、優しく丁寧だ。おっぱいを揉むようにくすぐられ、乳首が勃起すると、その乳首を繊細なタッチでくしくしくしくとくすぐられ、勃起したチンコみたいに気持ちいい。

気持ち良さにまどろんでいると、朱里が、チンコを攻めてくる。

パンツでチンコを包んでシコシコするだけでなく、パンツの両端を持ってまるで風呂で背中を洗う時みたいにクロッチ部分で亀頭をこしごしと擦ってくる。摩擦で、若干の痛みがあるが先走りで濡れてくると、それもなくなり、キモチイイ！ 名づけるなら、亀頭磨きだ！ 「ご主人様、もう、助平なお汁が出てきましたよ♡ そんなに気持ち良かったですか？」

「朱里のパンコキも 雛里の乳首攻めも最高だよ！」

「じゃあ、もっと良くしてあげます」

そういうと、朱里は亀頭磨きを止めて、普通のパンコキに戻すと、開いた手で、玉袋をさすりだした。

「おおお!!」

チンコを強くシコシコする一方で玉袋はソフトにナデナデされる。その落差が、とんでもなくスゴイ！

雛里の乳首攻めも雛里の涎がローション代わりになって、小さな指でよりコリコリクリクリされて、乳首だけでも、イキそうになる。

「あ、ご主人様のタマタマがあがってきた。雛里ちゃん、ご主人様イキそうだよ」

「え、ご主人様、もうイクんですか？」

幼い少女たちに、攻められている背徳感に後押しされて、射精してしまつた。

「で、出るうー！」

朱里のいちごパンツが俺の精子で汚れていく。

射精して賢者タイムの俺の前で二人が恥ずかしそうに精子の付いたいちごパンツと俺がかぶっていた水玉パンツをはく姿は、賢者タイムを終了させ、再び欲情させるには十分だった。

「はわわ、私たち、会議の準備があるので失礼します」

（お股が気持ち悪い。早く洗わなきゃ）

「あわわ、会議の最後の挨拶を資料の最後に書いておいたので、覚えておいてください」

（早く、この下着変えたいよオ）

いそいそと出ていく二人を見送って俺は、資料の最後にあるという挨拶に目を通す。

どうせ、会議では、みんなの意見を聞き流して、最後にしめの挨拶をするだけだし、ここだけ覚えときゃ大丈夫だろう。

「ちゅぶっ、ちゅぶぶ ♡ ちゅちゅ ♡」

「以上がこれまでの……」

会議が始まり、上座に座った俺の足元には、鈴々がいた。

チンポに舌をからめて吸いたててくる。

「あぶっ、んぶぶっ、んじゅ、ちゅぶぶっ……んはあ……」

「ツと、いうことを今後は、検討していこうと思います」

朱里が立って説明をしている最中、内股になってスカートをおさええた。俺の精子が垂れそうになって慌てたんだと思うと、うれしくなる。

「あむっ、ちゅ、ちゅぼっ♡ ちゅぼっ、ペロペロ♡」
「ッ!!」

「ご主人様、どうかなさいましたか?」

不意打ちで、鈴口を舌先で掘られて、腰が浮いてしまった。その際にテーブルにぶつかって音を立ててしまい、みんながこつちを向いた。

「れろ……ちゅ、れる……んちゅ♡」

「い、いや、ゴメン何でもないよ」

「そうですか、では続けます」

言い訳をしている間も鈴々は、フェラを続ける。イケそうでイケない気持ち良いけどもどかしいフェラ天才に意識がいつて段々会議の声が聞こえなくなってきた。

「ちゅちゅ、じゅぶっ……ぷハッ」

鈴々の口がチンコから離れた。また、舌でのペロペロ攻撃かと身構えた。

「フウー♡ フウー♡」

「ひゃああ!!」

「ご主人様!?!」

舌じゃなくて、チンポに向かって息を吹きかけてきた! 予想外の技に思わず、声を上げて、またみんながこつちを注目してきた。

「ゴ、ゴメン。目の前に急に虫がきて驚いたんだ」

「ちゅぶ、んちゅ、れる、ちゅぼ」

「なんだあ、驚かさないですよ。ご主人様」

「レロレロ、ちゅぼっ、ちゅるるる」

「イツ、ゴメン」

「フウー♡ フウー♡」

「では、改めて、編成についてですが…」

「ぺちやつ、ぺちやつ、ペろろ……」

その後も、会議は続き、俺も鈴々に延々と生殺しにされた。

「最後に、ご主人様に一言頂きたいと思います」

「れろっ♡　じゆるる……」

「ツ、み、みんな、俺たちは、ようやくここまで来た。で、でも、ここが目的地じゃツツない。更なる上に向かう為……がんばって、い、いこうー!」

「んちゅ、ちゅぷつ　ぢゆるる♡」

「「「御意」」」」

会議が終わり、みんなが出ていく。ああ、早く、早く出てっしてくれ!!

「ご主人様、どうしたの？　みんないつちやうよ?」

「テロテロ、チロチロ……」

ああ!　そんな舌先で掠めるようなのじゃなくて、もっと舐めてくれ!

「ちよつと疲れたから、休んでから行くよ」

「チュツ、チュツ、ちゅうう♡」

足りない!　気持ち良いけど、それじゃ足りない!!

「そつか、じゃあ、先に行くね!」

「フウー♡　フウー♡　ハア〜♡」

最後尾の桃香を見送り、扉が閉まると同時にテーブル下の鈴々に懇願した。

「鈴々!　頼む!　早く、早くやってくれ!!」

「ええ〜、チロリ」

「いヒイツ!　鈴々さま、卑しい俺のチンコをイカせてください!!」

自分で何を言っているかもわからなくなっていたんだと思う。

「う〜ん、そこまで言うなら、やってあげるのだ」

「早く、早く!」

「はあああああ」

ゆっくりと口を開けてスローモーションで口をチンコに近づけてくる。もどかしさに腰を突き出そうにも鈴々にがっちり抑えられて動けない。

「ああああああ」

鈴々の口が!　口がチンコに!　あとちよつと、早く!　早く!!

して、制服とシャツを脱がしながら、太ももでチンコを刺激してくれる。ズボンとパンツを下ろす時は、手のひらで布越しに撫でまわして俺を楽しませてくれる。

俺が全裸になると、今度は、桃香の番だ。お礼に俺が脱がそうとしたことがあるけど、自分で脱ぐって言われた。まあ、桃香のストリップショーを見るのもいいもんだけどな。

靴を脱ぐ際に、パンツが見えそうで見えないギリギリのラインで俺を焦らしたり、ブラを外してぶるんとおっぱいが揺れる姿がたまらない！

裸になった桃香は、いつもなら俺の後ろに回って体を密着させてチンコの前にテマンを用意するんだけど、今日は違った。

何か口をもごもごさせてから、自分の手に涎を垂らしてそれを手になじませるようにしてから、いつもの態勢を取った。

「いいよ、ご主人様。今日もいっぱい、私のおててマンコを楽しんで♡」

耳元でささやかれて、腰を前に繰り出す。

ぬるっとした感触、柔らかい指の感触と、亀頭を撫でる手のひらの感触だけじゃ無い。桃香の涎でぬめりが出て、腰を引く時、指にカリ首が引つかかっても、ぬるりと抜ける。その気持ち良さに腰砕けになつてしまう。

「ご主人様だったら、すぐゆっくり突こうとするんだから、もっと勢いよくおちんちん擦りつけて♡ レロ♡」

「ひゃあー」

耳元でささやかだけじゃなく、耳を舐められてゾクツとした気持ち良さがあつた。

「腰が止まっているぞ♡」

桃香の肉クツションに押し出されて強制的に手マンに腰を突き出して、手マンの気持ち良さに腰が退けた所をまた、桃香に押し出されて……もう、俺は、完全に桃香にされるがままになっていた。でも、それがキモチイイ……

俺の背中に当たるマッシュマロみたいに柔らかい桃香のおっぱいが

キモチイイ!

俺の足を固定しつつ、さすってくる柔らかい桃香の足がキモチイイ!

俺の耳を舐めてくる桃香の舌がキモチイイ!

桃香の手の中に腰を突き出して俺のチンコを撫でられるのがキモチイイ!

手マンから腰を引く時に俺のカリ首が擦れる桃香の指がキモチイイ!

全てがキモチイイ!

「レろ、レル……ちゅ、ぴチャ♡ ご主人様、イキそう? 白いのピュッピュしちやうの? ほら、動いて、おちんちんガンバって♡」

「ああああ!!!」

快樂の渦の中、射精してそのまま、ねむりについた。

七話（星／星）

〈周倉Side〉

「刃さん、星さんも仲間にしませう！」

いつものように執務室で仕事をしていると、突然、朱里がそんな事を言い出した。

「でも、朱里ちゃん、星さんってああ見えて純粹だから、愛紗ちゃんのご主人様に閨に呼ばれる方法を教えるって誘ったらしいけど、自分で何とかするって断つたらしいよ」

星というのは、最近、仲間となった趙雲のことなのだが、俺的には、彼女にあまり良い感情を抱いてはいない。

俺の立場は未だに愛紗の隊の副長だ。

実は、俺も隊長に格上げされるといいう話があったのだが、劉備軍の中の主要メンバー北郷以外全員女（副長はカウントされず）であり、その中で、俺が隊長になった場合、確実に北郷がめんどくさい反応をするのは目に見えている為、未だに副長という身分で文武官をやっている。

副長の立場にいながら色々深い所に関わっている俺の存在が気に入らない者もいる。

趙雲はその代表だと言わんばかりに、俺に突っかかってくる。

朱里達がフォローしてくれるが、からかわれて煙に巻かれてしまう。

俺も朱里たちもストレスを溜めていた。

趙雲も愛しの北郷が自分に見向きもしないのに、桃香や愛紗のような自分と同じくらいの女性だけではなく鈴々や朱里や雛里と言った自分よりも幼い女の子までもが閨に呼ばれている現状にストレスを感じているのだろう。

だからと言って憂さ晴らしに八つ当たりされる身としては、迷惑極まりないのだが。

「…朱里、俺と趙雲なしで何時ぐらいまでここは平気だ？」

「はわわ。そうですねえ……刃さんが事前にどれくらい仕事をしてく

ださるかによりますけど、たぶん十四、五日くらいだと思います。

え？　もしかして刃さん……」

「ああ、たぶん、考えている通りだと思う」

「え？　どういうこと？」

「刃さんは、それだけの時間を使って星さんを仲間にしようとしているんです」

「ええー!!　星さんずるい!　そんなに刃さんを一人占めするなんてずるい!　ずるい!!」

桃香が騒ぐが、正直、今回に限っては、これ位必要だと思う。何故なら、今までの相手は全員俺を受け入れていたが、今回の趙雲に関しては、俺を否定しまくりだ。とてもじゃないが、今まで通りにいくとは思えない。

「わかったよ。同じ日数とはいかないけど、一日やりまくってやるから、すねるな」

「わーい!」

「刃さん!」

二人の目が輝いた。

「当然、別日に朱里も一日だ。愛紗たちにも連絡してくれていいぞ」
「はい♥」

そして、仕事を前倒しにして頑張り、その合間に桃香達を可愛がり、調教期間に入った。

趙雲は愛紗によって、酒盛りの際に睡眠薬を飲まされて現在爆睡中。その間に、不作等で捨てられ廃れた村へ移動した。事前に使用する建物の修繕や食料等の準備(すべて自腹で用意)もしてあるので、ギリギリまでできる。

寝ている趙雲に手枷と足枷を付けて固定する。暴れられても困る

しな。

寝たままの趙雲を観察する。胸元と深いスリットに目が行ってしまうのは、仕方ないことだろう。

さてと、移動や準備で疲れたので、目を覚ますまで、俺も一休みさせてもらうかな。

〈趙雲Side〉

どうなっているのか、訳がわからなかった。

夜、愛紗と二人で飲みに行った後の記憶がない。記憶をなくすほど飲んだ覚えもないし、大体にして酒にのまれたこともないのだが…

目が覚めたら、手枷と足枷を付けられて身動きが取れなくなっていた。力を込めてみるが、びくともしない。

周囲を見回すと、民家の中だろうか？ 私は綺麗に片づけられた部屋の寝台の上で拘束されていた。壁を叩いてみると、さほど厚くはないらしい。かと言って殴って壊せるというほどでもない。

ここはどこなのだろうか？

「誰か、いないのか!!」

「……ようやく目を覚ましたか」

そんな事を言いながらのっそりと部屋に入ってきた者を見て私は、目を見開いた。

愛紗の隊の副長をしている男だった。

副長という立場にいながら、領地の様々なことに首を突っ込んでいく。そして、誰もが、それを当然のように受け入れている姿が理解できなかった。

確かに、奴は有能だが、所詮は副長でしかないのだ。立場以上の事をさせていて、何かあった時、どうするのだろうか。

「きさま、周倉だったか。これはどうということだ？」

私の問いに周倉は、少し考える素振りをしてから答えた。

「簡単に言うと、あんたを調教しようと思っている」

「ハッ、調教だど？ バカバカしい。そんなくだらないことを言っていないで、私を解放しろ」

殺気を込めて睨みつけるが、奴はまるで気にする様子もなく、近づいてくる。

「来るな、外道!!」

「外道？ 俺もそう思う」

奴は無遠慮に私の胸を触ってきた。殴ろうにも蹴ろうにも手枷と足枷で動けない。

「フンッ！ こんなことをしなくては、女にも触れんとは、情けない奴め！」

「勘違いしているみたいだが、これは、あんたを傷つけない為だぞ？」

「私を傷つけない為？」

「抵抗されたら、当然応戦しなくちゃいけない。そしたら、怪我をさせてしまうだろうっ！」

「まるで、私では、お前に敵わないとでも言っているように聞こえるぞ」

「逆に聞く。訓練で勝てたことあったか？」

「ッ！」

この男と何度も訓練でやり合ったことはあったが、一度として勝てたと思っただけではない。この男の驚異的な怪力と頑丈さの前に私の槍は封じられてきた。

そんな会話をしながらも、周倉は、私の服を脱がしていく。必死に抵抗しようと身体を揺するが、奴は何の意にも返さない。

「そんなに胸を振って誘っているのか？」

「ツク！ 見るな！」

「そんな見せつけるように揺らしながら言われてもな」

やつの手が私の乳房に触れた。嫌悪感と主への罪悪感で胸がいっぱいになる。

「んん♥」

主のような力強く揉まず、優しく解すように触られた。

「ん？ 気持ちいいのか？」

「バ、バカなことを言うな！ 突然触られて驚いただけだ」

「そうか」

優しく触られたかと思ったら、強くしたり、乳房を揉んだかと思えば、乳首をつまんだり、変幻自在に変わる主とはまるで違う触り方に戸惑う。

「ああ……あく、あつ、あふう……」

「声が艶っぽくなってきたな」

「そ、そんなわけあるか。貴様の耳が腐っているのだ」

どうしてしまったんだ、私の身体は!? こんな男に触られて感じるなど……

戸惑う私をよそに、周倉は乳房に顔を近づけた。

「ひいひいッ♥」

乳首を舐められて私はらしくもない声を上げていた。

「や、やめ……あう……ああんっ、やめろ、舐めるなあ♥」

「この程度で感じるとは、中々敏感なんだな」

「こ、この程度!? まだ先があるのか!？」

「んああああ、ダ、ダメだッ いやあ……ふああん、そんなところまでえ……」

奴の舌が、まるで蛇のように私の乳房を這いまわる。

乳首をはなれた奴の舌が円を描きながら、乳房をはって谷間へ、今度は段々と乳首に近づいてくる。

「こんなっ、あつ、あくうん、あうう……くひいん あああっ♥ち、

乳首っ……ひゃッ、んあああ、もう舐めるなあ♥」

「どうした？ もう抵抗しないのか？」

周倉は乳房から手を放すと、今度は、下に手を入れてきた。力任せに下着を引き裂かれて、私の秘部を守る物は何もなくなった。

「濡れ濡れだな」

「バカな!？」

「バカなって言われてもな。ホラ」

「ッ、あああん♥」

無遠慮に秘部を触られ、私に見えるようにその手を見せてきた。その手は濡れていた。

「そ、そんな……」

「準備はできているみたいだし、入れるぞ」

そう言いながら、周倉は自分がきている物を脱いで裸になった。

股間にある物を見て目を見張った

大きい……主よりもはるかに……あんなものが私の中に入ったら

……

「い、入れるだど!? そんな大きな物が入るわけない!」

「大丈夫だ」

「大丈夫なわけあるか!!」

拒む私の秘部に陰茎を押し当て、一気に突き刺した。

「んああああああああああ♥♥♥♥♥」

あ、頭が真っ白になって何も考えられない……

主にも突かれたことのない奥に周倉のがズンって、ズンってぶつかった……

「あ、ああああ♥」

「呆けている所悪いが、動かさせてもらおうぞ」

うごく?

言葉の意味を理解する前に周倉の陰茎がずりずりと抜かれていき、またズンって突き刺さった!

「あひいいいい♥」

出て入って出て入って、奥をグリグリされて、私はただ、絶叫するしかなかった。

「あああつ♥ ダメ、ダメ、ダメ、ダメ……あひいい♥ あああ、もう、もう、あはあああつ♥ ちゅぶつ、ちゅぶぶ、んぢゅ、ちゅむむ、んちゅ……」

突然、接吻され、さらに舌を絡めてきた。すさまじい快楽に翻弄された私はそれに無意識のうちに応えて舌を絡めていた。

「そろそろ、出そうだ!」

出そう？ 何が？ ツ!?

その言葉にハツとなった。

「だ、ダメだあああつ、あうつ、あひい♥ 出すな、出すなあ♥」

「無理だ。こんな具合のいいマンコに出さない方がどうかしている」

「そ、そんな……んあああああつ♥♥♥ ダメえ、ああああ♥ わたしもイッてしまおうう♥ 動くなあ♥」

「ダメだ。出るぞ」

「あつ、あつ、あつ、イクうううううううううううううううううううううううう♥♥

♥♥♥♥」

熱い衝撃を受けながら、私は意識を失った。

〈周倉Side〉

失神した趙雲の身体を拭いて服を着せる。マジカルチンポの効果で俺の虜となっているだろうが、これはある意味麻薬だ。ただ一度使用するだけでは足りない。依存させなくては意味がないのだ。

目を覚ました趙雲に食事を与えて、今度は失神しないよう注意しながらセックスの快楽を教え込む。

夜になり、再び食事を与えて一日目は終了となった。

二日目と三日目

「あああ♥ あひっ、ひいひい♥ イクツ、もうイクう♥ ああああ
ああ……イっちやう、イっちやう♥ イいっちやう♥ イグううう
うううううううう♥♥♥♥♥」

矢のように反り返って趙雲が、絶頂を極めるが、俺は終わらせない。
「あひいいいっ♥ イったのっ、イったのにい……ひぎいっ、もうダメえ♥ お、おがじくなるううっ♥ あへっ、あへ、あへ♥ またイクう♥ あああああああ……イ、イ、イク♥ イクう♥ またイっちやううううう♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」
ひたすらイカせ続けて、イキ狂わせた。

四日目と五日目

「あ、あふん、はふいい♥ そんなに音を立て吸うなあ……あああああ♥」

趙雲は、顔を赤く染め、かぶりを振る。その動きに合わせて、胸がぶるんぶるんと左右に揺れる。

そんな趙雲のマンコを攻め続ける。

「あっ、あああー……ダ、ダメえ♥ あふ、はふう……あああああ♥……あひいいいっ♥」

舌で膣内の中をなぞり、ちろちろと舌尖でくすぐる。

さらには、ぷつくりと勃起した大粒のクリトリスを、舌で刺激し、音をたてて吸い上げる。

「あくっ、あふ、あひいん……そんな……ああああん……そ、そんなにされたら、イってしま、はひいいん……ああああん♥ ダメ、ダメ、ダメ……イ、イツクううううううううううう♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

ぷしやツ、と新たな愛液を溢れさせながら、趙雲は、背中を反らせて痙攣した。

そしてそのまま、何度も愛撫だけで絶頂させた。

六日目

「ひうつ ♥ うあ、ああああ……ま、待って……あううつ ♥ そこ、そこ、イったばかりですごく敏感なんだ……あううつうつうつうつうつうつ ♥♥♥♥♥♥」

悲鳴を上げる趙雲の重さを感じながら、俺はさらにイチモツを突き上げる。

結合部から、俺の精液と趙雲の愛液が混じり合った液が溢れ出る。

「ひああああ……ダ、ダメ、ダメえ ♥ あああああ ♥ またイク、イクつ、あつ、ああああ ♥♥♥♥♥♥ いいいい、イクうううううううううううう ♥♥♥♥♥♥」

趙雲の膣が締まり、絶頂にビクビクと震える。それを、イチモツで感じながら、俺はなおも突き続ける。

「んひいいいいいん ♥ お、おか、おかしくなるううつ ♥ ひいいつ、んひつ、イ、イ、イキすぎておかしくなるのお ♥ あああああ、イックうううううううううう ♥♥♥♥♥♥」

再び絶頂地獄へといざなつた。

〈趙雲Side〉

ここに連れてこられてどれくらい経つたのだろうか？ 正確な時間経過がわからない。

何度も失神し、周りに意識を向けられないほどの激しい性交で私の時間感覚は狂いきつっている。すでにまだ二三日の気もするし、十日以上経った気もする。

あれだけ叫び散らしても誰も現れないということとは、たぶん、この周囲には、誰もいないのだろう。

手足を拘束されている為、奴に食事を与えられ続け、最初は、匙を口まで運んで来ていたのに、途中から、性交をしながら、口移しで食べるようになり……

あの滾るおおきなチンポで♥

……ツハ!?

私は今、何を考えた!?

「おはようさん」

戸が開けられ、周倉が現れた。

奴の姿を見た瞬間、ドキドキと胸がなり、股が……ツ♥ そ、そんなわけがない!! 私には、主という絶対の御方がいるのだ!!

「きよ、今日は、何をするつもりだ」

精一杯、悟られぬように睨む。だが、相変わらず、奴は気にした様子もなく私の前に腰を下ろした。

「今日は話をしに来た」

「はなし?」

「なんでお前は俺を嫌うのか?」

「そんなもの決まっている。たかが一つの隊の副長の身でありながら、内政にまで口を挟み、貴様は何様のつもりだ?」

「だって、俺がやんなきゃ、領地が上手くいかないからだ」

「何?」

目の前の男の驕りきった物言いに苛立ちが募る。

「いいか、よく聞け。これは本当の話だ。孔明さまと龐統さまは優秀だが、あいつらはまだ、若すぎる。確かに天才だが、だからと言って無茶できるほどの体力があるわけじゃない。あいつらが上手くたち回れるよう、雑務をこなしたりして負担を減らせるようにしている。劉備さまは、若干の手助けが出来ても主動できるほどの能力はまだない」

周倉の話を聞くと納得してしまいそうになるが、必死に否定できる物を探す。

「主だっている!」

「御遣い様は、女遊びに忙しくて最低限の判子を押し仕事しかされな

い。関羽さまや軍師方がいくら言ってもその程度だ」

自分の見出した主をあつさり否定された。

「そ、そんな……」

「それに俺くらいだぞ。文と武の双方の事を完全に把握しているのは。だから、俺が双方の補佐をしているのさ。」

文武の衝突が無いように二つの間で緩和剤もやって結構大変なんだぞ？」

そのまま、周倉は私に触れることなく話をし、食事も最初の頃のように匙で与えられた。そして、夜になると、奴はさつさと部屋を出ていった。

何もされず、一日が終わった。よかったことのはずなのに物足りなさを感じるのはなぜだろう……

翌日も話だけをした。

奴の思考の深さには驚かされたが、やはり物足りない。

その次の日は、ぬれた布で身体を拭かれた。布が乳房や秘部に当たって思わず、声が漏れたが、奴は何もせず、身体を拭くだけだった。

私の中で、もやもやとしたものが、溜まっていた。

無性に自分の乳房や秘部を触りたい衝動にかられたが、手足が固定されている為、出来なかった。

その次の日は、食事の時間にしか現れなかった。
動けないこの状況がもどかしい。

その次の日、たまたま、食事の際にこぼしてしまい胸に汗がかかった。周倉はそれを舌でぬぐった。

次の時、わざとこぼすと、また、周倉は舌でぬぐった。
舌でベロツと舐められて……………キモチヨカッタ♥
でも、それ以上は何もなかった。

〈周倉Side〉

十二日目、部屋に入ると、趙雲は上気した瞳でこちらを見てきた。
放置プレイを始めてから、媚薬を少量ずつ飲ませているそうとうキ
ているはずだ。

俺の手に腕が無い為、何をしに来たのか感じたのか、頬を紅めらせ、
最初の時はギュツと閉じられていた足が、たぶん無意識だろう開いて
いた。

俺が黙って、趙雲の服に手をかけて脱がせるとついに来たか喜びの
表情をしていた。たぶん、自覚は無いな。

鏡がここに無いことが凄く悔やまれる。

服を脱がせ、自分も服を脱ぐと、趙雲の視線は、イチモツにくぎ付

けとなっていた。

そして最後に、足枷を外す。

「え?」

「ほしければ、自分でしろ」

彼女の目の前に座る。少し腰を動かせば、マンコを擦りつけられるくらいの位置。

しばしじつとしていた趙雲だったが、しばらくすると、僅かに腰を動かしてイチモツにマンコを押し当て始めた。そして更に待つと、その動きが段々と激しくなっていく。

「あ、あ、あん♥ アアツ、あひっ♥」

「あ、言い忘れていた」

「あ……」

夢中になって腰を振っていた趙雲から離れる。その際に趙雲のマンコがイチモツを追いかけようとした。

「今日、趙雲がなにせずにただ座っているだけだったら、明日、城に帰る」

「ッ!」

俺の発言に趙雲は、ハツとしてこちらを向いた。

「帰った後、俺のやったことを訴えるなり、なんなり好きにしてくれていい。」

だが、もし、俺のを欲したら、明日一日中やり続ける。いや、欲した時点から、やり続ける」

「……」

「それでは、選べ」

先ほどまで夢中で腰を振っていたのに趙雲は、イチモツから距離を取ろうとする。そして、ギユツと目を閉じて見ないようにした。

だが、少しすると、うつすら目を開けて俺の顔とイチモツを交互に見てまた眼を閉じる。

それをしばらく繰り返しているうち、段々と、腰がまたイチモツに近づいてきた。

「はあ……はあはあ……」

寝起きのブーツとした意識のまま、横を向くと周倉：いや、刃が寝ていた。

周倉との快楽を選んだ私は、本当に延々とやり続けた。

あまりの気持ち良さに意識が真っ白になっても、すぐに新たな快楽で叩き起こされた。

食事は、まるでヒナ鳥が親鳥から餌をもらうかのように口移しでもらった。

繋がったまま、膝を抱えられて放尿した。

その最中に私は、刃に真名を授け、私も真名を受け取った。

「んあ♥」

私の中に入ったままの刃のチンポがビクツと動いた。あんなにしたのにまだ、出来るとは、ほんとうにこ奴は人間なのだろうか？

手枷から解放された両手で刃の身体をなぞる。

「ん……星、起きていたのか？」

「ああ、おはよう」

「そうだな。おはよう、星」

そう言っただけは、接吻した。

それから、食事をとり、刃の用意した風呂に入ってから、帰還の途に就いた。街が見えてくるまで、私は片時も刃から離れず寄り添い続けた。刃は何も言わずにだまって、私を抱き寄せた。

きつと今の私は、他人に見せられない顔をしているに違いない。

城に戻ってから、刃の元へ行こうとしたが、盗賊の討伐に駆り出され、戻ってきて刃が仕事で忙しくてよりつくことが出来なかった。

そんなある日、私は、桃香さまに呼ばれた。

執務室に入ると、桃香さまに愛紗、鈴々、朱里と雛里がいた。

そして、ここにいる全員が、刃と肉体関係にあり、愛しているとい

うこと。

それが主に気付かれると、刃の身が危険な為、建て前的に全員が主を好いていて閨を共にしていること。

私も、刃に心奪われたわけだから、主と閨を共にしなくてはいけないこと。

その他いろいろなことを聞かされた。

刃との性交を経験して主の幼稚な性交で満足できるとも思えないのだが、愛紗曰く、主が満足すればよいとのことなので、最後までいたす必要はないそうだ。

〈北郷Side〉

この世界の曹操と対面する機会があつただけど、運悪く、鈴々のバキュームフェラされている最中で、共同戦線の間は、危ないからつて出られず、気が付いたら、曹操軍と、わかれていた。

まあ、今回はダメだったけど、次回があるさ！ 俺のニコポの前には、どんな女だつて抗えるわけないんだし、さあてと今日は仕事もないし、何をしようか？

親衛隊とアレな訓練するもヨシ！

街に出て秘かに作った俺の為だけの娼館（刃及び軍師たちは気づいていて色々と手が加えている）に行くもヨシ！

桃香たちに頼んでやってもらうもヨシ！

さて、どうしようかと考えていると、荷物を背負った星が窓から入ってきた。

星って格好がエロくて、それでいて初心で、楽しいんだけど、愛が重いのが難点なんだよなあ。しかも、おかしな方向に努力が向いているのが、さらにめんどくさい。

「星、頼むから普通に扉から入ってきてくれよ」

「そんなことよりも主、実は大事なお話が……」

「ん？ なんだ？」

「あまり大きな声では話せぬ話ゆえ、こちらに」

荷物を足下に降ろし、声を小さくして手招きをする星に近寄って口に耳を近づけた次の瞬間、俺は、両手両足を拘束されていた。

「な!?! 星、ほどけ! 悪戯にもほどがあるぞ!」

もがく俺を寝台にあげて小さな声で話しかけてきた。

「いたずらではございませぬ。実は、ある人に教えて頂いたワザを使うのに主を拘束する必要があったのです」

なんだと!?! ついに星もある人とやらから凄い技を!

「だが主よ、普通に説明して縛るのでは、なんの面白みもないので、その辺りを少々変えてみたのです」

「いや、そこは、普通に説明してくれよ!」

突然で驚くから! 突然縛られて楽しいなんて思う人そうそういないから!」

必死に叫ぶ俺を無視して星は荷物をあさり、蝶の形の仮面を取り出して装着した。

「悪の蓮花の咲くところ、正義の華蝶の姿あり、かよわき華を護るため、華蝶仮面参上!」

「せ、星?」

「星? 違う。我が名は華蝶仮面。名乗ったばかりだというのに、間違えられては困りますな。」

それにしても……」

いきなり、ズボン越しにチンコを掴まれた。

「うわっ」

「縛られただけで、こんなにも固くなっているとは♡」

チンコを撫でながら、華蝶仮面はニヤニヤと笑う。

じじじつと、ファスナーを下ろしてチンコを引っ張り出して鈴口を人差し指で撫でる。

それからその指と親指をくっつけて俺の目の前に持っていく、開いて見せた。

先走りがネバーつと糸を引く。

「おやおや、御遣い殿のここはもう許してくれと泣いていますなあ」
嘲笑い蔑むような華蝶仮面の言葉に言いようのない気恥かしさと高揚感を感じた。

華蝶仮面が、寝台に上がって片膝を立てて座り、手コキを再開する。そして、空いている方の手をシャツの下に入れて乳首をコリコリと刺激してくる。桃香や朱里たちに扱かれて敏感になっている乳首を触られただけで、腰が浮いてしまう。

「あひいッ」

「フフ、胸で感じるとは、まるで女のようなあ♡」

悔しくて言い返そうとした時、華蝶仮面の着物の裾がめくられて水色のパンティが覗いていることに気がついた。

パンチラを見ながらされる手コキもイイな。

「どこをみているのです?..」

「え、あつと...」

「私の目を見なさい」

じつと、俺の目を見ている華蝶仮面と視線を合わせるが、どうしてもパンチラに意識が行ってしまふ。視線が下に行くたびに叱咤される。

不意に乳首を攻めていた手が離れ、華蝶仮面の胸元へ行く。そして、グイッと、服を引っ張って片乳があらわになった。

「また、目が離れたぞ」

「で、でも...」

「言い訳するなあ♡」

ガリツと、親指の爪で手コキをしながら、亀頭を引っ搔かれた。

「ヒグッ!？」

必死に目を見ようとしてもどうしても片乳とパンチラに目が行ってしまい、そのたびに引っつかかれる。痛くない程度に手加減されたそれに、俺の我慢が限界を迎える。

「もう、イキそうになっているようですな。さあ、私の目を見ながらイクのです」

テコキの速度を上げながら、華蝶仮面がグイッと顔を近づけて、赤い瞳に俺がうつつていた。

「で、出るウ!!」

その瞳に魅入られたように射精した。

華蝶仮面に見られたまま、尿道に残る精子を絞り出されて彼女の手は離れた。

「フッフ、御遣い殿の情けないイキ顔、しつかりと見せて頂いた♡」

「ハアハア、せ、星、もういいから、ほどいてくれ」

「私の名は、華蝶仮面と何度言えかわかるのです？ これはもう少しお仕置きをしなくてはならないようですね♡」

そういうと、再び、チンコを抜き始めた。

「私の目から片時も離さずにいられたら、許してあげましょう♡」

「ひいひいひいひい」

華蝶仮面が自分の胸を揉む姿に目を向けてしまったり、パンティをなおす姿に目を向けてしまったりと、視線を外してしまい、その度に何度も目を合わせたまま射精させられた。

〈星Side〉

あれから、主は、私と視線を合わせるだけで、おちんちんをふくらませるようになった。

たまに相手をする際に、視線を外すよう誘導して叱咤するのも中々おもしろかった。

まあ、刃との性交に比べるとつまらないのだが……

八話（月&詠・朱里&雛里／詠&月）

〈周倉Side〉

デスクワークがようやく終わり、座っていた椅子に別れを告げて執務室を出た。

董卓軍を複数の軍でリンチしてからこっち、無茶やった為、怪我の治療や遠征をしている間に溜まった雑務、色々あつて月をものにして、その流れで詠まで手に入れる等々、挙げればきりのない用事に振り回された。ちよつと前まで「お荷物」だった桃香が「まあ、居たらそこそこ助かるかも？」くらいまで使えるようになってくれたのと、北郷が拾ってきた月と詠が書類仕事に中々使えたのがよかった。

月と詠だが、董卓軍の中心人物『董卓』その人とその筆頭軍師『賈☒』だったという過去を隠すために名を捨てたというのが、だからと言つて真名を名乗らせるわけにはいかないのです、俺が、二人の新しい名を用意した。

北郷の存在のせいとか、桃香たちは真名の大切さを忘れてしまつていたようだ。

だつて、真名つて、基本自分の親・伴侶・心許した友・主位にしか明かしてはならず、勝手に呼ぼうものなら、殺されても文句が言えないものである。そんな、大切なもん以外名乗れなくするなんて、ある意味、死刑よりも残酷な刑としか言いようがないと思う。

本人たちは、それでもかまわないとか言つてたけれど、そんな重罪人たちが天の御使いの侍女として傍に侍らせているなんて、桃香の評価に傷がつく。誰が好き好んで、そんなマイナスイメージ受け入れるんだよ。

さらに言わせてもらえば、彼女たちは、董卓と賈☒であることを隠すのなら別に罰を受ける必要はないんじゃないだろうか？

まあ、過ぎたことは置いておき、怪我が治るまで、訓練に参加させてもらえなかった為、大分鈍っている気がするし、訓練しようかなあ

）

「あ、刃さん！」

振り向くとそこには、月がいた。

軽く手を振ってこたえようとれしそうな顔をして小走りによつてくる。

さつと周囲の気配を探ってみると、運よく聞かれたらまずい相手はいなかった。

「誰に聞かれているかわからないんだから、こんな場所で真名は呼ぶな」

「へう……すみません」

「わかってくればいい。で、何かあつたのか？」

「いえ、じ……周倉さんが歩いているのが見えてつい、声をかけたくなつたんです」

口にしてから自分の行動が恥ずかしくなつたのか、赤くなる月は、おもわず、抱きしめたくなる可愛さがあつた。グツと我慢して頭を撫でるだけにしたけどな。

「月え、どこ行つたの!？」

和んでいると、月を探しに来た詠が現れた。

「あー」

詠はこちらに気が付くと、月のように駆け寄ってきて腰に抱きついてきた。

「つと」

「あ、詠ちゃんずるい!」

腰に顔を押し付けてグリグリとしてくる最初こそ、ツンツンしていた詠だが、交流を続けていたら、ツンツンがなくなった。ぞくに言うデレ期という奴だろうか。

「んフフ、刃の匂い♥」

「私も!」

少女二人に抱きつかれ、身動きが取れなくなつてしまった。

「はあ……二人とも、放してくれ。こんなところを見つかったらマズイ。」

あとで、可愛がつてやるから」

そう言うのと、二人はパツと離れて笑顔を向けてきた。これは、謀ら

れたか？

久しぶりに訓練に参加して愛紗や鈴々や星と模擬戦をやったが、三人とも、結構本気だったから焦った。なんとか、ドロ―に持ち込めたけどな。

「んんんっ♥ ん、んん……」

月が慣れた調子で、深く、浅く、口でイチモツを刺激する。時折、月は頭を動かすのをやめて口をもごもごと動かす。口内で舌が絡み付いてきて、気持ちが良い。

月は口で俺を攻めながら、俺のすねにマンコを擦りつけてオナっている。腰の動きと頭の動きが連動していて、イキそうになると、動きを止めて自分をイかせないように焦らしている。イクのは俺のイチモツと決めているようだ。

「ひううん……あっ、あっ、あう、んううん♥」

俺の顔の上に乗った詠のマンコを攻める。性知識がまるでなかった詠だが、セックスの気持ち良さにハマってからは、結構積極的になったと思う。

現在、俺たちがいるのは、城の庭の奥にある古びた倉庫だ。

昔使われていたようだが、今は放置されて誰もよりつかないし、存在を知っているのは、俺と俺の恋人たちだけだ。

バレないように注意しながら、内装を整え、ヤリ部屋に改装した(資金はみんなで出し合った)。

「あん、あはあっ♥ 月、ボクにも舐めさせてえ」

「いいよ、詠ちゃん」

月の舌が裏筋をつうーつと下がり、袋へと移動する。詠が俺の身体の上を寝そべるようにして亀頭を銜える。

「うぐぐ……ちゅぶう、ちゅぶぶ、んぐ♥」

亀頭と袋を舐められながら、20本の指が竿を愛撫してくる。

「刃さんのチンポ、ビクンビクンしてきた。気持ちいいですか♥」

「ああ、さすが、月と詠だ。奉仕の息がぴったりだ」

「えへへ、あん♥ ありがとうございます♥」

「あ、当たり前でしょ。ボクと月なんだから♥」

鈴々の様な吸い出すようなバキュームではなく、ほど良い加減のバキュームと舌が亀頭を、舌と唇で袋を、そして20本の指が竿を余すことなく刺激して射精を促してくる。

気持ちよくしてくれたお礼に、月がマンコを擦りつけている足を急上げてイかないように動きを抑えていた月のマンコを擦る。続いて目の前にある詠のクリを強めに舐め上げる。

「ああっ♥♥♥ そんな……ダメエ、イクううううううううううううウ♥♥♥♥♥」

「ちゅるるる……ひゃあ♥ きゃううううううううううううううううううウ♥♥♥♥♥」

「二人とも、出るぞ!」

詠の口の中にとっぷりと射精した。

「詠ちゃん、私にも……」

月がそう言うと、身を乗り出して、口いっぱい精子を貯め込んだ詠にキスした。

「んふう……んん……んちゅ♥」

美少女が自分の出した精子を舌で取り合う姿を見て勃起たない男がいるだろうか? 否!

こちらに尻を向けている詠のメイド服のスカートをめくると、俺にクンニされてビショビショになったマンコがあった。

「ひゃっ、ボクからしてくれるの?」

「ああ、詠みたいな美人がそんな風にお尻を振って誘われたら、男として我慢できるわけないだろう?」

「さ、誘ってなんて、ンン♥ 入ってくるう、刃のおっきいチンポがボクの中にイ♥ うああああ……あひいつ、すごいっ、すごいのお♥

あああん♥ チンポっ、刃のチンポすごいイ♥♥♥」

詠が、甘い悲鳴を上げながら、快楽に身悶えする。

「ハアハア、詠ちゃん、刃さんのチンポで突かれていいなあ……アあん♡」

俺と詠のセックスをおかずに月がオナニーを始めている。

「ああああああつ♡ あうっ、あうううう…… コスれるうっ♡ ボクのナカがこすれてるのお、あああん、イク、イク、イクっ、イクうううううううううううう♡♡♡♡♡」

四つん這いで獣のように叫ぶ詠は身体を逸らして絶叫するとぐつたりと倒れた。まだ射精していないチンポを引き抜くと、すぐに月が飛びついてきた。

「次は、次は、私ですよね!？」

「詠がイッてしまったしな。いくぞ、月」

「なら、前にやつてもらったアレをしてください」
「任せろ」

月は、うれしそうにM字開脚して、自分でマンコを開いて誘う。

「へっ、へう、す、すごく堅いイ♡ あうううううっ♡♡♡」

月の中にチンポを挿したまま、身体を持って立ち上がる駅弁と呼ばれる形。

「んあ、あああつ♡ 刃さんのチンポ、中でぐりぐりつてえ♡ ンあああつ、あ、あは、あはあ……気持ち良すぎますう♡」

俺の腰の動きに合わせて、くねくねと尻を動かしながら、月が快樂の声を上げる。

その扇情的な姿と、愛液まみれの膣がチンポに絡み付く感触が、俺のチンポをさらに膨らませる。

「ああああつ、あふうっ♡ あああん、いい、いいですう♡ チンポっ、チンポいいですう……あああああああ♡♡♡」

月の腰が大きくバウンドするたびに、愛液にまみれたチンポが子宮口に激突する。

詠の中で射精できないまま、月と始めてしまい、性を搾り取ろうとするマンコの締め付けを耐えながら、突き続ける。

「クウ……」

「刃さん、出そうなんですか？ あああん……出して、出して下さい♥
んくう♥ 私の中に、刃さんを注ぎ込んでください♥ はぁ、はぁ、
欲しい……刃さんのが欲しいです♥♥♥」

卑猥な言葉を繰り返しながら、月が、さらに腰を振り立てる。

「出すぞー！」

「へう、来て下さいい♥ ひあああああ……奥に、奥に来てるううう
うううううう♥♥♥ イク♥ イクイクウ♥ イ、イ、イツクううう
うううううううううううううううううううう♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

月の中に射精し、あふれた精子が足元で倒れていた詠の身体に滴り
落ちていった。

〈北郷Side〉

「ご主人様、朝ですよ。起きてください！ ご主人様！

……へうく、詠ちゃん、ご主人様、起きてくれないよお」

「まったく……月に手間をかけさせて、起きなさい!!」

「へブツ!？」

頭に衝撃を受けて目が覚めた。そこには、クッションを手にしている詠とオロオロとしている月のメイドコンビがいた。少し前まで敵だったけど、ウチで保護した。

結構いい拾い者をしたと思う。二人とも元々、敵勢力の最高権力者とその軍師だっただけあって政務に明るいから、俺の仕事が減って大助かりだ。さらに月は家事能力が高く、やりまくって汚くなった部屋もあつという間に掃除してくれる。

特に、二人を手に入れて良かったことは…

「今日は、詠に前をお願いしようかな?」

「へう、わかりました」

「はぁ、しょうがないわね」

俺の正面に詠が、後ろに月が移動してしゃがんだ。

「ちゅ、ちゅちゅちゅ……ちゅぶ、ちゅば♡」

詠が亀頭にキスしてそのままチンコ全体にキスしていく。

「失礼します。ちゅ、ペロ、れる……」

背後に回った月が礼儀正しくそう言ってケツに顔をよせて、ケツ穴を丁寧な舐め出す。そして、十分に舐めた途端……

「ちゅぶツ、ちゅぶぶつ、じゅぶ、じゅぶぶぶ♡　じゅじゅじゅじゅじゅじゅ♡」

「ひゃあああああ!!」

ぬるぬるした柔らかい舌がケツ穴を這いまわるのは言葉にできない気持ち良さだった。

普段おっとりとしている月からは考えられないような苛烈な攻めに思わず、腰が前に出す。

「てろてろ、れろろ……ぴちゅつ、ちゅぶつ♡」

突き出されたチンコを詠が舐めていく。普段の激しい性格とは一変して丁寧で優しい詠の攻め。柔と剛の攻めが前後から俺を挟み、攻めたてて来る。

「んっ、んあっ、んぐ……んんんんツ♡」

「うぐう……ちゅぶ、じゅぶぶぶつ、じゅぶず、じゅぼぼほ♡」

体の内側から性感帯を舐められるような不思議なゾクゾクする感触と、唇でチンコを扱きつつ、健気に舌を絡めながら、唾液と先走り汁の混じった体液を啜り上げるのコンビに、立っている事さえ、辛くなる。

「ふ、二人とも！　もう、出そうだ！」

「ちゅば……今日はどこに出すの？　口の中？　それとも顔？」

根元を扱きながら、詠が聞いてくる。

俺を罵倒する口の中に出す物魅力的だけど……

「顔に、顔に出したい」

「ふうん、レロ♡　いいわ、出さないよ。ボクの顔に……」

「ちゅぼつ、ちゅぼつ♡　じゅる……ちゅちゅううつ、ちゅぶ♡

ちゅぶずずずつ、じゅぶずずずつ♡」

「ゆ、月！ スゴイ!!」

「ほら、月ばかりじゃ無くて、こっちも集中して、せつかく、この賈馱がおちんちんシコシコしてあげてるんだから。ホラ、シコシコ♡
シコシコ♡」

「ダメだ、出るウ!!」

朝一番の精子が詠の顔に、メガネにふりかかる。脱力して座り込んだ俺は、メガネについた精子を嘗めとる詠の姿を見上げていた。

「ご主人様、いっぱい出しましたね」

「まったくよ。こんなべたべたにして…」

後始末をして服を着替えさせてもらい、食堂へ向かう。

彼女たちは、これから部屋の掃除がある為、一端ここでお別れだ。

彼女たちがきてから、起き抜けに適当な女といたすことはなくなつたけど、最高に気持ちが良い朝を迎えられるようになってとても満足だ!!

〈詠Side〉

あいつが出ていった後、ボクと月で部屋を掃除するんだけど、その前にまず、用意しておいた濡れた布で、顔と髪を洗う。まったく、口の中に出してくれれば、飲み込んで終わりなのに……あ、服にもかかってる……あいつう！ 着替えなきゃだめじゃないのよ!!

こんな汚れた格好で刃に会いたくないしね。

「がらがらがらがら……ペツ！ ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ……ペツ！

詠ちゃん、臭い取れたかなあ？ 刃さんに「月、口が臭くないか？」ツなんて言われたら、私、生きていけないよお！」

うがいをしていた月が泣きそうな顔でボクにすがってくる。頼られるのはうれしいけど、その頼る内容がなあ…

「だ、大丈夫だから、ほら、鈴々たちも使っているっていう口臭予防の丸薬用意してあるから」

「へうへう、さすが、詠ちゃん」

ボクの差し出した丸薬をうれしそうに口にする月を見ながら、思い出してしまう。

あの日、ボクは、月を探していた。

何時もなら一緒に、掃除をするか、政務の手伝いをしている頃なのに、見当たらない。

心配して探しまわっていると、月の後姿を見つけた。急いで追いかけると、月は部屋に入ってしまった。

確か、あの部屋は、愛紗の隊の副長の周倉とかいう奴の部屋よね？ そんなところに月が何の用があるのかしら。

確かに周倉は、文武官という立場で領地繁栄の為に毎日頑張っているけど、今は、先の戦いの怪我をした為、療養中で、部屋で簡単な書類仕事をしているって聞いていた。

こっそりと、扉を開けて中を覗き込んだ。そこには、周倉と接吻する月の姿があった。

訳がわからず、ボクは呆然となった。月は自分を助けてくれた北郷一刀に好意を持っていたはずなのに……

なんで、その男と接吻をしてうっとりとしてられるの!?

呆然とするボクを置き去りに、二人は朱里が持っている本のように互いを愛撫し合う。

服の隙間から手を入れて月の身体を愛撫する周倉と、喘ぎ声を上げながら周倉の男根を外に出して手で愛撫する月。

月が周倉に何か話してから、二人は離れた。

月が下着を下ろして、自分から周倉の上に跨って腰を振り始めた。

周倉の大きな手に支えられながら、腰を振る月を見つめながら、ボクは無意識のうちに自分を慰めていた。

月の上げる甘い声が段々と短くなり、そして、絶叫と共に月はぐつたりと周倉の胸に倒れ込んだ。ビクンビクンと痙攣しているからだから、イッたんだと否が応でも理解してしまう。

「おやおや、覗き見とは、あまり感心できませんなあ」

不意に背後から、声が聞こえ、振り向くと星がいた。

「せ、せい!？」

「大方、月と刃のまぐわいを見ながら己を慰めていたのだろうか?」

「ツ!? あんた、いつから!!」

楽しそうにこちらを見てくる星にくっつかかかると、星はニヤニヤとしながら、私の腕を掴んだ。

「ちよつと、放しなさい!」

「まあまあ、そう気を立てることはない」

星に引つ張られるがままに私は周倉の部屋に入った。

抵抗する間もなく、私は、月と星と共に周倉に犯された。さらに星や月以外にも桃香や愛紗たちまで加わって散々犯され続けた。

周倉や星たち曰く、徹底的に愛撫で焦らされて、おねだりを叫ばされたので、和姦だと言われた。

あいつに、報告しようかと思っただけ、周倉がいなくなった時の問題を朱里たちに説かれ、ボク自身もその話に納得できてしまったので、報告するのはやめた。

それにいつの間にか、ボクも月のように刃と話をしたり、閨を共にしているうちに、心を奪われてしまったみたいだ。

〈月Side〉

今日は、私と詠ちゃん、朱里と雛里の四人で刃さんとしてます。

「月、私たち無乳の素晴らしさを刃さんに体感してもらいましょう！」
「へう！」

朱里の手をがっちりとつかみます！

「ムニユウって音の響きだけ聞くと柔らかそうよね。まあ、実際は、柔らかいとかないんでしようけど」

「微乳の方が良いに決まっています！」

向こうも詠ちゃんと雛里ががっちりと手を握っています。

ビニユウって綺麗なおっぱいを想像しそうですけど、大きさに
は、私たちと大差ないですよ。

「おいおい、お前ら、ケンカはやめてくれよ」

「ケンカではありません。女の戦いです！」

寝台に座る刃さんの前で私と朱里が抱きしめあいます。

「さあ、刃さん、私たちのおっぱいにチンポを入れてみてください」

「あ、ああ」

朱里の気迫に負けた刃さんがチンポを私たちの間に突き入れる。

乳首がチンポに擦れてキモチイイです♥

「うお!? 桃香たちのパイズリとはまた違った気持ち良さが！」

「へう、たっぷり楽しんでください♥」

「そうです。そして、私たちのおっぱいの膚となるのです♥」

「たしかに、これは、中々いいものだな」

「クツ、雛里、私たちも行くわよ！」

「あわわ、刃さんが無乳から御救いするんです！」

詠ちゃんと雛里が刃さんの腰に左右から抱きついてそのささやかなふくらみを擦りつける。

「んん！ 小さな柔らかさがこそばゆくとこれもなかなか…」

へう、刃さんが気持ちよさそうな顔をしている!?

「はわわ、月、私たちももっと頑張らしましょう」

「へう！」

その時、パンツと勢いよく扉が開いた。

「刃、私も参加するぞ！」

入ってきた星さんが、勢いそのままに服を脱ぎ捨てた。ふくよかな

おっぱいが動きに合わせてぶるんって、ぶるんって……

「「ま、負けた」「」」

へう…所詮、無乳も微乳も巨乳の前には、塵も同じ……

九話（楓（オリヒロ）&月&星・愛紗&鈴々・詠・桃香・朱里&雛里／楓（オリヒロ））

〈周倉side〉

「え？」

なまった体も本調子に戻って、この間引き分けた愛紗たち相手に完勝できるようにもなった。武官であるはずなのになあとか思いながら、デスクワークをしている最中、突然の桃香の提案に俺は思わず、聞き返した。

「だから、刃さんの恋人だった人をこちらに引き入れようよって言ったの」

「いや、だが……」

正直、それを考えなかったのかと言われれば、考えた。だが、その一歩を踏み出せなかった。

北郷のニコポによって心酔し、かつての姿からかけ離れたあまりの醜態に、俺の中のあいつへの愛が冷めてしまったんだと思う。

そして、何よりも不安に感じているのは、もし、あいつを取り戻してしまった場合、俺は桃香たちとあいつを同じラインで見ることができかわからないことだ。

元々、愛していた女が戻ってきて、俺は桃香たちを大事にできるだろうか？

「刃さんの苦悩は、私たちには計り知れません。

なら、合理的に考えてはどうでしょうか？」

「合理的？」

「ご主人様の親衛隊の中にこちら側の人間を仕込むことができれば、今後のご主人様の行動制限もかけやすくなりますし、突発的な事態も事前に知ることができるようになります」

そばに来た朱里と雛里が、思い悩む俺の両手をそれぞれ握って、提案してくれた。

「あああつ！ また二人とも、そうやって刃さんといちやつくう!!」

私もお♥」

デスクを乗り越えて桃香が正面から抱き着いてくる。そして、いつの間にか後ろに回り込んでいた手伝いの詠が私を忘れるなど言わんばかりに後ろから抱きしめてくれた。

「へう、出遅れちゃいましたあ……あつ！」

一人取り残された月が、何かに気が付いたように駆け寄ってきて、俺の頭に手を回すと、そのまま、キスしてきた。

「んちゅ、ちゅうう♥」

「「「あああああああつ!!」」」

こんな仲間に囲まれたことに俺は幸せを感じ、さつき感じた不安はもう、俺の中にはなかった。

計画は、伏龍鳳雛と呼ばれ名高い孔明と龐統、魑魅魍魎が跋扈する洛陽で主をその知略で守り抜いた賈□の三人が中心となって策を練ってくれた。とは言っても、そこまで難しい話ではない。

北郷の親衛隊の練度を高める為と称して、愛紗と星が鬼のような訓練を行った。

あえて北郷に見学させ、エールを贈らせることで、親衛隊もいいところを見せようと必死で頑張った。

北郷の親衛隊のその大半は容姿で選ばれており、その実力は実はかなり低く、問題視されていた為、ちょうどよかった。

訓練後、訓練を頑張ったご褒美として愛紗と星が食事に連れて行き、そのまま、酒盛りへ移行。日中、消耗しまくった体に、アルコールはとても効き、あつという間に出来上がっていく。

何件も梯子してその途中途中で親衛隊のメンバーは脱落していき、最終的に残ったのは、星と、星に連れ回されている彼女だけになった。予定では、愛紗も残るはずだったが、酒を飲むペース配分に失敗して、

あえなく途中で撃沈した。

ついでに北郷は食事会に参加せず、桃香と鈴々に搾りつくされて、沈んでいるはずだ。

そして、今……

「んちゅ……ちゅう……れる……ん、れる……ちゅむう♥」

「んくう……はああ……あうう……はあつ♥ ああん……はぶん……

ああああ……あつ、あつ、あうつ、ああああ♥」

「あむ……ちゅぶ、れるっ、ちゅむむ……んちゅう……はふうん♥ ンンっ、ちゅぶう、ちゅぶぶ♥」

薄暗い部屋で、寝台で酔いつぶれて朦朧としたまま、月にクンニされ彼女を見つめながら、星にフェラされていた。

「ちゅぱっ♥ どうした？ 今更、後悔しているのか？」

「いや、後悔なんてしてない。ただ、おまえたちがいい女だなんて再確認していただけだ」

「フッフ、当然。れろ♥」

根元から先までを色っぽい流し目を送りながら舐め上げてくる星の頭に手を置き、撫でる。

「……刃さん、こちらも準備できました♥」

「ああ」

月の声にうなずいて、月と代わって寝台に上がる。いつも穿いているショートパンツとパンツを脱がされて、秘部をあらわにしている彼女・関平の股を開かせ、マンコにイチモツを押し当てた。

〈関平 side〉

私は、小さな村に生まれた。村での生活に、私は小さなころから不満があった。

もつと、自分にはできることがあるんじゃないかって。

それを確信したのは、賊に村を襲われた時だった。

幼馴染の周倉と二人で、襲ってきた賊を返り討ちにした。

小さな村だったから、同じくらいの年頃の男女がいれば自然と、将来結婚する相手として決められるようになっていた。

けっして、周倉が嫌いだったというわけじゃない。頼りになってくれよりも強い周倉に、憧れを持っていたし、隣にたてることを誇りに思っていた。

だから、一層に、凄い周倉が村での生活に不満に感じていないことを知っていたけど、こんな小さな村で終わっていいわけがない。私が周倉をふさわしい場所へ連れて行くんだと使命感さえ持っていた。

周倉に村を出て一旗あげようと誘った。

そして、たどり着いたのが、劉備さまと天の御使い様が率いる義勇軍だった。

周倉は、武勇に優れた関羽さまの隊に、私は御使い様の隊に配属された。

そこで、出会ったのが、御使い様だ。あの方を見た瞬間、私のすべてはこの人に出会うために存在したのだと感じた。

御使い様の寵愛を受け、私は、過去を捨てる為、周倉に別れを告げた。その時に、周倉から預けられた真名を返し、周倉に預けた私の真名も返してもらった。

御使い様の部隊は、いつの間にか、北郷親衛隊と呼ばれるようになっていた。

親衛隊の入れ替わりは激しい。御使い様に見初められた女子のみが入ることを許され、努力を怠れば、すぐに親衛隊から異動となる。だから、私たち親衛隊は、御使い様に捨てられないために、愛を振りまく御使い様のお零れを授かるため、必死になって自分を磨く。

御使い様の好きな紅があると聞けば、皆がそれを使用した。御使い様の気を引く仕草、衣装、そういったモノに手を伸ばした。

私たちがそうやって自分たちを必死に磨いているのに、劉備や、関羽たち武将、孔明たち軍師は、私たちが求めてやまない溺愛を当たり前のように受けていく姿に殺意さえ覚えた。

そんな武将の関羽と趙雲が私たちに訓練しに来ると言う。これ幸いと、事故に見せかけてあの綺麗な顔に消えない傷の一つでもつけて、見学に来ると言う御使い様の前で恥をかかせれば、御使い様も愛想をつかさすんじゃないかと思ひ、計画を練った。だが、その計画はすべて失敗し、私たち親衛隊は、二人に一撃も加えることもできずに、ロボロにされた。

二人は、訓練後に私たちを食事に誘ってきた。そこで、今度こそはと思つたけど、趙雲の身体はどうなっているんだ!? なんであんなに飲める!? おかしいんじゃないか!?

つてぐらいバカス力飲んでも酔いつぶれる気配なく、何故か気に入られた私は、引きずられるようにいくつもの店を梯子させられ、意識を失つた。

「つう……」

目が覚めると私は知らない部屋にいた。わずかに頭痛を感じるが、吐き気や胸焼けを感じるほどじゃない。自分の意外な丈夫さに驚きつつ、体を起こす。

どうやら、宿のようだ。ただ、広く、内装も豪華で、私にはとても泊まれそうにない水準だ。

寝台から降りて、部屋を見て回る。

だが、私をこんなところに連れてきたのだろうか?

普通に考えれば、意識がなくなる最後まで私を連れ回していた趙雲だろうか?

奥の扉の方から、かすかに人の気配がした。

恐る恐る中の様子をうかがう。

そこからかすかに聞こえてくる衣擦れのような音。

「ちゅう……れるれるっ♥ れろ……んふう……ちゅっ♥ あああ

♡

女の声が聞こえ、身体を震わせる。そのまま息を殺してジツとしてみると、扉の向こうではピチャピチャと水が撥ねるような音と、漏れ聞こえる甘い吐息のような声。

その意味することを想像して、顔と身体が火照っていく。気まずさからこのまま出て行こうと思うのに、何かが自分の心と身体を縛り上げてそこから動けなくなる。

「あはああ……オチンポ、すごいですう♡」

甘く蕩けきった声に誘われるように、私は足音を殺してゆつくり扉を少しだけ開けて、そつとその隙間から中を覗きこんだ。

「えっ!?!」

白い寝台の上に男が腰を掛け、大きく脚を開いている。その股間にはヌラヌラとぬめり光る黒い肉がそり立ち、その先端は股間に首を伸ばした美しい少女の赤い口の中にあつた。口をいっぱい広げてそれを啜えつつ、ゆつくりとした速さで上下に首を動かしている私よりも年下の少女。それに伴って卑猥な音が鳴り、その根元には白い指が巻き付いて口の動きに合わせてるように扱っている。

何よりも驚いたのは、それをしている美少女とさせている男だった。

銀色の髪を揺らし、その白い横顔を色欲に染めてうつとりと目を閉じたまま口腔奉仕をしているのは、間違いなく、御使い様の専属侍女である董氏だった。

そして、それを受けているのは、周倉だった。

見るからに董氏の熱心なその行為は、とても嫌がつているようには見えず、自分からすすんで積極的に行っているようだ。

「ちゅ、ちゅぶ、ちゅちゅう……れる、れるる♡ んむう……ちゅつ、ちゅぷつ、んちゅう♡」

小さな唇が凶悪な肉棒を這い、先端へ続く段差をねつとりと扱っている。そうしながら赤い舌が唇の隙間から現れて、愛おしげに舐め回すのがいやらしい。

私と同じように御使い様に心酔していたはずの少女が、他の男のモ

ノを嬉々として舐めしゃぶっている。

これを御使い様に報告すれば、董氏は御終いだ。きっと放逐され、あんな貧相な娘など簡単に野垂れ死ぬだろう。

今すぐにでも、御使い様の元へ走るべきなのに、私は、目の前の光景から目を話すことができなかつた。

「フフ……夢中だな」

「きッ!？」

突然、背後から声をかけられ、私は声を上げそうになったが、背後に現れた存在に口をふさがれ、声を封じられた。

周倉の手が、董氏の薄い胸を、我が物顔でまさぐりだした。

「刃のオチンポ、主のモノよりもはるかに大きいだろう?」

「ちよ、趙雲さまっ」

「シッ、気づかれる。静かに」

背後の人物は、趙雲だつた。趙雲は、後から私の身動きを封じてきた。もがこうとしたが、続く言葉に私は動くのを止めた。

再び、視線を部屋の中へとむけると、董氏が、周倉のモノに唇を被せていくと、童顔に似合わない激しきでジユブジユブと音を立て吸い付いていた。

「刃さん……私のオマンコにお情けをください♥」

刃のの先つぽをチロチロと舌で弄りながら、可愛らしい顔の美少女侍女がねだる。

いつものはかなげな表情ではなく、その顔は、男の媚びを売る娼婦のようなだつた。

「ちゅぱっ♥ 私のオマンコに、刃さんのオチンポ入れてください♥

ご主人様と比べ物にならないくらい大きな、巨根オチンポで、私のぐちよぐちよオマンコほじって、ずぼずぼしてください」

とても、あの可憐な少女が口にしたとは思えない卑猥な言葉の数々、目の前で見て聞いても、信じられなかつた。

可愛らしい顔と言葉の落差に、覗いている私は驚きと、身体の中の興奮がさらに高まっていくのを感じていた。

小さな唇で巨大な亀頭を扱きながら、卑猥な言葉を並べ立て周倉を

誘う。腰をくねくねと揺らせているのが凄くイヤらしい。

「そうだな……でも、その前に、覗きをしている奴に罰を与えないとな」

言葉と同時に扉の隙間から覗いている私を、周倉の眼光が射抜いた。

逃げようと思った。いや、逃げようとしたが、その眼光に捕えられ、私の身体は動けない。

そんな私を、趙雲が、部屋の中へと押し込んでいった。

そこで、今更ながら、趙雲もグルだったんだと気が付いた。

趙雲に乱暴に寝台に押し倒された。

「や、やめろ！ こんなこととして、御使い様に知られたらどうなるかわかってるのか!? 今なら、黙っててあげるから、やめなさい!!」

力いっぱい周倉たちを睨みつけて叫んだ。だけど、三人は、キョトンとした顔をしてから、クスクスと笑いだした。

「な、何がおかしい!!」

「クスクス、そんな恰好で、虚勢を張ってもダメですよ♪」

嘲笑する董氏を睨むけど、どこ吹く風だ。

「そんな恰好って何が!」

「おや、自覚がなかったようだ。月におしやぶりされていた周倉のオチンポを見つめながら、自慰をしていたことに」

「なっ!? そんなことするわけ「ならその手は何故濡れている?」え?」

言われてみた自分の手は濡れていた。ウソ……

茫然となった私の胸に周倉の手が伸びてきて、ムズツと掴んだ。

「やあぁっ! 触らないでっ!」

腕の上に董氏と趙雲が乗って動けない身体をよじって抵抗するも、周倉は一切気にも留めず、私の胸を揉みし抱く。

「あああああ、ダメ、ダメ、ダメえ……手を放してえ……うぐう……やあああ……ひいいいん♥ あああ……ひいいい♥ あうっ、うくう

ん、あうん、はああああ……」

「へえう、関平さんのおっぱいすごく大きいです」

「ム、だが、私よりは小さいな」

「え？」

「なんだ、その顔は？」

周倉に胸を好き勝手弄ばれる。だけど、その触り方は、御使い様のような力強いモノじゃなかった。でも、それが感じたことのない。ゾクゾクするモノがこみあげてきた。

「忠告しておくぞ、関平。刃とのまぐわいは、主ごときでは、けっして到達することのできない高みへと昇らせるほどの気持ちよさだ。主しか男を知らないおまえでは、絶対に耐えられない。さっさと抵抗を止めて、快樂を楽しめ」

「い、いやあ……はひっ、あああ、あひい♥ やめてえ……それだめ、だめっ、だめえ……あああ♥」

「本当に、やめて欲しいのか？」
「やめてえ……」

周倉の問い掛けに必死になっとうなずく。すると周倉はニヤツと笑って身体をずらすと、無遠慮に右手を私の服の中に潜り込ませた。拒否の声も出せないまま、あっという間に周倉の指が陰部へと達する。

「なんだ。こんなに濡れているじゃないか」

「きつと、関平さんは、嫌がつているフリをしてイジメられる感じが好きな変態さんなんですよ」

「あ、ああああ……いやあ、そんなことないいい♥」

「だが、事実、関平、おまえの濡れ方とはとてもではないが、嫌がつている女の濡れ方ではないぞ」

「ちがう、ちがう、そんなことお……私い……あはあ、か、感じてなんかあ♥ あっ、あああ♥……あひい♥ 指入れないでえ」

周倉の指が私の中を這い回って自分でしたとき以上の快樂を呼び出して、私を狂わせていく。

「星、月」

「はい♥」

周倉が二人に声をかけると、二人は心得たと言わんばかりに、私の

手に跨ったまま、手を伸ばして、私の上の服を脱がして、胸を露出させる、それぞれ片側ずつ、私の胸を弄り始めた。

「ひあああ……やめてえ……もうやめてえ♥ あああんっ、あひいんっ♥ あうっ、うぐう……ああああ……んひひひひひひ♥♥♥」

趙雲の繊細で優しい愛撫と、董氏の痛みさえ感じる荒々しい愛撫が私の中で混ざり合って、快楽になって広がる。

二人の愛撫でもだえている間に、私の下の服が周倉によって脱がされていた。

そこに、周倉は、顔を近づけていく。こんなこと、御使い様にもされたことがない。

「んああああっ♥ や、やめへえ……そ、それ、それやめえええっうっ、うあああっ、いいい……んひひひひひ……ああ、ひひひひ……あひ、あひいっ♥ あう、ああああああっ♥♥♥」

周倉の舌が私の中に入って動き回る。おぞましいはずなのに、私の身体は、それを快楽と受け取ってしまう。必死に腰をひねって逃げようとするも、両太腿をがっしりと掴まれているから動けない。舌が私の中でウネウネと蠢く。

御使い様との行為よりも数倍も感じてしまう。腰から下が溶けて無くなってしまうんじゃないかとさえ思えてしまう快楽。

周倉の下の侵略にあわせて、胸を攻める二人の愛撫もさらに熱が込められた。

「おああああああああ♥♥♥ イ、イイっ、オッパイとアソコがあっ、いいのお♥ ああああああ、ひぎいいいいいいいいいいいいいいいい♥♥♥♥♥」

目の前が真っ白に染まって体の中にあった快楽が破裂した。

そのすさまじい衝撃に、私の身体は反り返り、ビクビクと震えた。「おやおや、もうイってしまったのか。ここからが本番だと言うのになあ?」

「そうですね。関平さん、これからですよ」

身体を起こした周倉が腰を突き出すと、股間から隆々とそそり立つ董氏の塗り付けた唾液で又メ光る肉の剣とでも呼べそうなものが、目

の前に突き付けられた。

「ほら、良く見てみよ。これが、これからお前の中に入っていくのだ。主よりも何倍も太くて大きなチンポがな♥」

「ああああ……いやああああ……」

「ご主人様じゃ、届かないくらい奥まで突き入れられちゃうんですよ♥」

「いやっ、そんなっ、そんなの……」

「刃のチンポを受け入れた後に、主の貧弱チンチンを入れても、入れたと気づけないかもしれんなあ♥」

「オチンポから出てくる量だつて、ご主人様よりも多いんですよ♥」
「腹が破裂しそうなほど出してくれるぞ♥」

「しかも、何度もできちやうんです♥」

「あ、ああ、あああああ……」

左右から交互にささやかれる言葉に、私は、刃のチンポから目を反らすことができなくなっていた。

絶対の主である御使い様を裏切る行為が、罪悪感でいっぱいなのに、それがゾクゾクするような興奮と刺激に変わっていく。

かつては好きだった。でも、今は何でもないはずの相手。本当なら、私の初めてを奪うはずだった相手。そんな相手に犯されようとしている。嫌だと悲鳴を上げる自分の中に、それに歓喜して待ち望んでいるもう一人の自分がある。

その証拠であるかのように私のアソコは卑猥に口を開いて奥からひっきりなしに助平な汗を垂れ流して、刃のモノを欲しがっていた。

グイッと脚を大きく広げて、その間に刃が入り、位置を調節して私のアソコにチンポをあてがうと、一気にそそり立った怒張を叩き込んだ。

「ひぐぅうううううううううううううううううううううううううううっ♥♥♥♥♥♥♥♥」

私の中を巨大な肉剣が、一気に広げる。その衝撃と快樂、そしてわずかな痛みで私は、絶叫した。

董氏が言う通り、奥の奥まで突き入れられた。趙雲の言う通りこれを知ったら、御使い様に入れてもらっても、私は感じられないかもし

ンコも、おっぱいもきもちよくて……んああああああ♥♥♥

董氏が、私の首筋を舐めしゃぶり、耳たぶを甘く噛む。

その間も、刃は、腰を激しく動かし、趙雲は指を乳房に食い込ませ、私の快樂の炎を煽り続けた。

「んはあつ、ひうん……もうダメ……ダメダメえ……いつちやう、いつちやうううつ♥ あああああん♥ イ、イイツ、イクイク！ イクううううううううううううううううううううううううううううううう♥♥♥」

「出るぞっ」

「中に……中に出てるウ……ああああああああああああああああああああああああああああ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

絶頂を極めた中に大量に吐き出されたそれに、私は、到達したことの無いさらなる絶頂に達して、私は意識を手放した。

「関平、一つ、遊戯をしよう」

「遊戯？」

「そうだ。もし、それで、おまえが勝てば、俺たちはここを出ていく。二度とおまえたちの前に現れないことも誓う」

気が付いた私は、董氏によって体を拭かれ、服を着せられた。そして、周倉から考慮する価値もない提案をされた。

「フン、何を言っている？ 今回のことを私が御使い様に報告すれば、おまえはおしまいだ！」

「それはないな」

私の言葉を趙雲が否定した。

「なっ！ おまえたちだって人事じゃないぞ！ 御使い様におまえたちのことだって報告する。そうすれば、おまえたちだって！」

「我らはそれを否定する。そして、一言「親衛隊に私たちに嫉妬して虚

偽の報告を上げている者がいて困っている」と言えば、主は、おまえを切り捨てるさ」

「そんなことあるわけない!!」

「あるさ。何故なら、我らを切り捨てたら、我らとできなくなってしまうからな。クッククック」

「そんな理由で……」

「否定できるのか？ 頻回に闇に呼ばれる我らと、時々気が向いた時、たまにしか相手にされていないおまえ。」

主がどちらの意見を信じるかなど、火を見るよりも明らか。

これは、提案ではなく命令だ。勘違いするな。

それと刃とまぐわっている最中、おまえは周倉ではなく、真名である刃と呼んでいたな？ 預けられた真名を返したにもかかわらず、真名を呼んだのだ。この場で殺されても文句は言えんのだぞ」

私を殺気を込めて睨む趙雲の真名を周倉が呼ぶと、殺気は霧散し、趙雲は周倉の膝の上に乗って、身体を周倉に押し付け始めた。

「内容は大了ることないさ。明日から十日間、こちらの指示に従ってもらうだけだ」

「その指示とは？」

「日中、普段通りに生活すること。」

夜、指定した場所に一人で来てこちらの出す指示に従うこと。

この遊戯についてだれにも伝えないこと。

期間中の自慰禁止。

遊戯期間中、こちらの手の者がお前を監視しているが気にせず生活すること。

以上だ」

周倉は指を五本たてて、説明してきた。

「勝敗の分け方は？」

「期間中におまえが自慰をせず、俺を求めなければ、おまえの勝ち。おまえが自慰をするか俺を求めれば、おまえの負けだ」

どういうことだ？ 確かに、周倉とのまぐわいはすさまじいモノだった。だが、十日間ぐらい耐えられる。

「一つ言い忘れていた。遊戯期間中、俺は、おまえに故意に触れることは一切しない。」

故意とつけたのは、偶然ぶつかるといった場合を考慮してだ」

考える。これだけ自信満々に言うのだから、何らかの方法で、私にそれを言わせる手段を持っているということか？

「十日は長い。御使い様の夜間警護と何度かかぶってしまおう」

「ウソだな、夜間警護は不規則だろう？」

その言葉に、私は、夜間警護というモノが何の隠語か把握されていることにドキリとした。

「期間中、夜間警護につくことがあった場合には、夜間警護優先で構わない。また、夜間警護についていたからと言って日付を一日増やすこともしない。その時に限り、自慰行為も許可する」

私だってバカじゃない。何か秘策があるのかもしれないが、これだけ好条件なら、私が間違わなければ、勝てる。

私は、この勝負を受けることにした。

一日目。

日中はいつもと変わることなく、御使い様の警護。

夜、いつの間にか私の部屋に置かれていた指示書通り、指定された部屋に行くと、周倉と関羽と張飛がいた。

何をされるのかと身構える私に、周倉は椅子を指差し、良いと言われるまで、座っていると言われた。

椅子はとても柔らかく、何時までも座っていられそうだった。

「ああああん、あつ、あうううつ、んひいいイ……いい……はひいいいい♡♡♡」

「あ、あひいいいん……あん♡んにやああああ♡♡♡」

関羽と張飛が周倉とこんな関係だったことに驚いたが、そんなこと

よりも、私に見られているのに、二人はまるで気にした様子もなく、周倉との肉欲の宴に浸りきっている。

周倉の腰の動きに合わせるように、関羽と張飛が官能の悲鳴を上げる。

「ああああ ♡ はうううう……あひいいいい♡♡♡♡」

あの誇り高い武人があられもない表情で乱れている。

「あへえっ ♡ んあああああ……ああん ♡ きゃああああんっ ♡ ♡」

あの無邪気な張飛が、濃厚な女の色気を放っている。

部屋に充満した濃厚な性の香りに思わず、自分の秘部に手を伸ばしかけ、必死にこらえる。

こうして一日目が終わった。

二日目。

昨日のアレに当てられて、帰っていいと許可されて部屋に戻った後も、悶々としてほとんど眠ることができなかった。

今日の御使い様は、執務室で劉備や孔明たちと書類仕事をしている。警護の仕事はないので、これ幸いと体を動かして、身体に溜まったモノを吐き出す。

午後、部屋に戻って休み、気が付くと、昨日と同じように指示書がきていた。

書かれた場所に行くと、周倉と共にいたのは董氏と賈逵がいた。賈逵は董氏とあれだけ仲の良いのだから、こうなっていないわけがないかと納得すると同時に、御使い様の専属侍女の癖にと怒りを感じる。

昨日と同じように、椅子に座っているよう言われた。

「ああああ ♡ す、すご、すごすぎいい♡♡♡ ああん……お、おかしくっ、おかしくなるうっ ♡ あひいいいい♡♡♡」

何時も難しい顔をしていた賈逵が、だらしな雌の顔で周倉に縋り

ついている。

「あへえ♥ も、もう私……ああん♥ オマンコ、こわれちゃうのおっ♥ あ、ああああああッ♥♥♥」

はかなげな董氏が、見るかけもないほどに乱れて周倉の上で腰を振っている。

目をつむって顔をそむけても、声が聞こえてくる。耳を抑えても、この部屋に満ちた性臭が、逃避しようとする私を絡めとる。

昨日あれだけ、関羽たちを犯していたのに、いや、そのさらに前の日にも私をあれだけ犯している。あいつの精力はいつたいどうなっているんだ？

三日目。

昨日もやつぱり、悶々として眠ることができなかった。それを吐き出すため、訓練にいそしむ。訓練をしている間、そのことだけに集中して余計なことを考えなくて済む。無我夢中で体を動かして、部屋に戻り、休憩のつもりで、寝台に横になると、そのまま眠ってしまったが、趙雲にたたき起こされた。

そろそろ寝てすっぽかすだろうから、迎えに行けという周倉の指示だそうだ。

通された部屋には、周倉と劉備が待っていた。

まさか、劉備まで、周倉側だったとは……

そして、指示は今までと同じく椅子に座っているというモノだった。

「ああん、あっ、あひやああああ♥ んひひひひ……あん、あああ♥ ひ、あひいん♥ くひひひひ♥♥♥」

あの、趙雲が獣のように後ろから周倉に犯され、鳴いている。

「ひううっ、あ、ああああ♥♥♥ ダメ、ダメえ、おっぱい、気持ち

よすぎて、これ以上は、私い……んああ♥ あはあああああつ♥♥

御使い様の隣に唯一立つことを許されていたはずの、劉備が周倉の下で胸を弄ばれて喘ぎ声を上げる。

自分たちが御使い様とする肉欲の宴が、どれ程幼稚であるか、思い知らされた。

今、私が齒をくいしばって耐えているのは、そのことに気付かされた恥辱のはずだ……

四日目。

ひたすら無心で剣を振る。その一点だけに集中する。同僚に声をかけられて訓練時間が終わったことに気が付いた。

北郷親衛隊の隊員たちは、けっして仲は良くない。

この同僚だって、同じ班で御使い様の警護をする私がいつまでも、訓練を続けていて、他の同僚の班に取られるのが嫌で、声をかけただけ。

御使い様の前だけは、仲が良いフリをするのが、北郷親衛隊の暗黙の了解。

御使い様の指示で建てられたという建物への送り迎えの警護。運良く、馬車の中の警護担当になれば、建物につくまで御使い様と二人きりになれる。

今回は運悪く、私は、馬車の御者担当になった。

馬車の中から、聞こえてくる同僚の喘ぐ声以外、特に何もなく、送迎を終えて部屋に戻ると、もう、おなじみになった指示書が置かれていた。

指定された部屋に行くとそこにいたのは、周倉と、孔明と龐統だった。

御使い様のお気に入りに入り全員が、周倉と関係を持っていることに驚きを隠せなかった。

指示はいつも通りの椅子に座っているだけ。

「あつ、うああああ♥♥♥ き、気持ちよすぎますうつ、あつ、あひ、あひ♥」

小さな体で、周倉に縋りく孔明。

「はううつ♥ あつ、あはあ……はひひひひひ♥♥♥ イ、イクつ、イツちやいますうつ♥」

何時もの恥ずかしがり屋な姿などなく、女の私でもクラクラしてしまふ色気を放つ龐統。

「ちゅぶつ、ちゅつ、ちゅぶぶ……んちゅつ、ちゅつ、ちゅばつ♥」
周倉の凶暴な肉の剣を左右から顔が汚れることも気にせず舐めしやぶる二人。

私は、椅子の手すりに爪を立てて、必死にこらえる。そうしないと、自分の手がどこに向かってしまうか、わかっていたから……

五日目。

御使い様より、古参の親衛隊隊員八人が夜間警護に呼ばれた。私もその中の一人として呼ばれた。

部屋に戻り、汚れた体を清め、御使い様に見初めてもらうため、着飾り、御使い様の待つ部屋へ向かった。今日は、部屋に指示書はなかった。

同じように着飾った同僚たちと、御使い様の御情けを授かるべく、気を引こうとあの手この手で、迫る。

御使い様に身を寄せ、興奮を煽る。この中で、御情けを受けられるのは、三人だけ。

私は、その三人の中の一人に選ばれ、御使い様の御情けを受けた。

だが、今まで感じていたはずの幸福感も絶頂もなかった。
今まで、御使い様に与えられていたモノは、通過点でしかなく、それ以上を知ってしまった私には物足りないと感じてしまった。

御使い様に悟られるわけにはいかないため、必死に絶頂した演技をする。

私の番が終わり、同僚たちが次を得るために御使い様に縋りつく。その様子を冷めた私の中のもう一人の私が鼻で笑った……この程度で喜ぶ同僚、この程度のことしかできない御使いを。

六日目。

昨日の夜間警護の際、入れてもらうためという建前でした自慰でもイキることができなかった。

今日は、休みを与えられていたが、何もしないでいると、無意識のうちの自慰をしまいそうになるため、自主的に訓練場へ行き、剣を振る。

気が付けば、日が沈みかけていた。

空腹と疲れを感じる。それだけ動いたのに、私の中にある性欲は、解消しきることはできず、私の中でくすぶり続けていた。

食事をとって部屋に戻ると、今日は指示書があった。

部屋に行き、いつもと同じように椅子に座らされる。

何時もと違うのは、今日の面子は、一昨日迄の全員、奇しくも昨日御使い様が呼んだ人数と同じ八人だった。

だが、その内容はまるで違った。

私たち八人は、三つの席を奪い合っていたのに、目の前の八人は、席も八つある。

「い、いい、あんっ ♥ あ、あううう……んあ、あはああああああ
ああ ♥ ♥ ♥」

「それ、それえ……む、胸があ、あふう……あひいつ ♥ おっぱいがいいのお……い、いひい……ああん ♥」

「くひいいい……そこ、違う穴なのだ ♥ 鈴々、お尻なのに気持ちイイのだあ ♥ ♥ ♥」

「はふん ♥ んちゆう……ちゆつ、ちゆば、ちゆう……はあ……刃、もつと口をよこせえ……ちゆつ、ぴちゆつ ♥」

突き上げられて喘ぐ関羽、胸を鷲掴みにされた劉備、刃に縫りついて尻穴を攻めたてられる張飛、刃に後ろから抱き着いて口を吸い合う趙雲。

「ふあんつ ♥ ううつ、いいい……あ、あ、あん 朱里ちゃん ♥」

「あうつ、んくうう ♥ あ、あうつ、んひいん ♥ 雛里ちゃん、そこいいよお ♥」

「ゆ、月え、胸をそんなに……あああ、駄目え ♥ 駄目なのに……あふう……あつ、あつ、あああん ♥ このお……」

「あん ♥ ああああ……詠ちゃん、オマンコそんなにかき回したらあ……ああん、ひいいん ♥ あつ、あつ、イヤあん ♥」

百合行為に耽る孔明達、私たちだつてすることはある。でも、それは御使い様の気を引くためにする嫌悪感を持ちながらの見せかけ行為だが、彼女たちは、その行為を心の底から楽しんでいる。

私たちのように、見せかけだけの仲ではない。

入れ替わり立ち代わり犯される劉備たちの姿を見せつけられた。

お前たちのいる世界がどんな低次元であるかわかっただろうと言いたげに。

……

アレは、わたしが、私だけが受けることのできるモノだったのに

七日目。八日目。

仮病を使つて部屋に籠つた。

もう、勝負とかどうでもよかつた。十分に自分のオマンコを弄り、胸を揉みし抱き、乳首を抓る。淫欲に耽る。

でも、周倉とした時のような絶頂感を感じることはできなかつた。

なんで、こうなつてしまつたんだろう？

夜には、部屋に呼ばれて、刃と劉備たちのまぐわいを見せつけられる。女たちは、私に優越感のこもつた眼で嘲笑する。

こいつら、わかっているんだ。私が、性欲を持って余していることも、御使いとしてもイケなかつた、いや、感じられなかつたことも、自分で慰めてもダメだつたことも！

その上で、刃とのを見せつけてきているんだ。
しながら、刃へ愛していると叫んでいるんだ。

なんでこうなつたんだろう？

九日目。

もう、我慢できなかつた。

私は、不眠でふらつく体を引きずるようにして、刃のいるはずの執務室へと向かつた。

執務室につくまで、誰にも会うことがなかつたのは、奇跡だろう。執務室に入り、こちらに目を向けた刃を見たとき、もう、だめだつた。

全力で刃に抱き着き、周りの目など気にせず、口を合わせていた。

「もう、もう、私の負け！ 負けでいい!! だから、だからあ!!」

私も愛して……

「ああん、オ、オチ……オチンポお……入れてえ……はあ、オチンポ、マンコに入れてえ♥」

刃に部屋に連れてこられ、寝台に転がされると私は、尻を突き出して揺すりながら、叫んでいた。

「入れて、入れてえ♥ズブって、マンコにオチンポ入れてえ……ああんっ、お、奥まで……お、お願い……あつ、あああん♥」

自分でマンコを晒して指で広げて強請る。

刃が服を脱いで、大きく反り返ったオチンポを取り出した。それが、私のオマンコに押し当てられ、ずぶりと、一気に私を貫いた。

「あ、あああああああああああああああああああああああああああああああ♥♥♥♥♥」

その一突きで、私は、御使いごときでは達することのできなかった高みへと上り詰めた。

刃が腰をゆっくりと前後に動かし始める。

「ああん、いい、いい……はあん♥き、気持ちイイ……ああつ、あひつ、ああああ……」

刃の腰が前後するたびに、私の中で幸福感があふれ、私の中にいる御使い様を裏切ったと罪悪感を感じている私が消えていく。そして、私をここまで気持ちよくしてくれなかった御使いへの怒りと、こんな私をこんなに気持ちよくしてくれる刃への愛があふれていく。

「あああつ、す、すごい……あひつ、はうう……すごい……あん、あん、ああああ……奥にズンズンつてしてえ♥あうつ、あつ、あああああ♥♥♥」

刃の動きに合わせて、私の体が勝手に刃に媚びるようにくねる。

刃は、腰を動かしながら、片手で器用に私の服の前を開いて、下着をずり上げると、触られてもいないのにピンツと立った乳首を指先

で弾いた。

「あうっ ♥ やああん ♥ あああん……おっぱい、いい……もつと、おっぱいいじめてえ ♥」

刃の手に自分の手を重ねて、もつととせがむと、刃は腰を使い続けながら、私の乳房を両手で揉みしだいた。

「きやうん ♥ あううっ、あひいいいい……ああん、すごいっ、すぐくイイのお、体中キモチイイのお ♥ あっ、はひいいいい ♥ ♥」

私は、もつと刃と密着したくて、首を回して、唇を開き、舌を突き出して口付けをねだる。

刃は、笑みを浮かべてから、私の口に噛み付くように吸い付いた。「んっ、んちゅっ、ちゅぶぶ、んちゅっ ♥ あはあ ♥ もつとお、ちゅぶぶ、ちゅぶっ、んむむ、ちゅちゅ……」

私たちは、唇を吸い合い、舌を絡ませ合う。

刃が突き出す舌に、私は舌先を這い回らせ、口内に注ぎ込まれる唾液を啜り飲みながら、唇で扱き立てた。

「ちゅぱっ、はふうん ♥ は、はひい……ああん、も、もうっ、もうダメえ ♥ あひ、ああん、もう、もうイっちゃう ♥ あっ、ああん、あああああああっ ♥ ♥ イクノ、イクのお ♥」

「そう、かっ！」

刃が荒々しく腰を使います。

「あっ、おくうっ、奥に来てる ♥ あひっ、あああんっ、あひいいいいいい ♥ ♥ すごい、すごい ♥ 御使いじゃ絶対届かないところ、ズンズン来る ♥ あああああああ ♥ ♥」

「きてえ、奥にい……あっ、あひっ、あへえええ ♥ マンコいっちゃう ♥ ♥ あっ、ああああ……イ、イイっ、イイっ、イグ、イグ、イグ、いっぐうううううううううううううううううううううううううううううううう ♥ ♥ ♥ ♥」

深く突き上げられて、頭が真っ白になる快感に飲み込まれた。

「おっ、おっ、ンああああ……入ってくる……熱い、熱い……刃

しか行かないのだあ!!

同じ隊になったからって、毎日会えると思ったか、ばかめえ!!

……ふう。

でも、その程度の頻度でしか隊にいていないはずなのに、刃さんって物凄く兵士さんたちに慕われてて、他の隊の兵士さんも刃さんを慕っているんだよねえ……

愛紗ちゃんがご主人様を説得して、楓ちゃんの異動は完了したけど、そこで終わりにはしません。

だって、それだと、私たちみたいにご主人様の性欲処理しなくて済むようになっちゃう。面倒なお仕事しないで、美味しいところだけ持っていく事は許しません。

ってことで、頑張ってねえ♪

〈北郷side〉

愛紗の申し出と説得で、親衛隊から一人異動することになった。俺に依存しきった女が俺から離れるのかと思っただけど、本人曰く、「御使様の御傍で守るよりも、最前線で御使様へ迫るかもしれない脅威から御使様をお守りしたく思います」とのこと。なるほど、依存したままだけど、考え方を変えたって感じか。

まあ、もう二度と会わなくなるわけでもないし、他にも親衛隊の女はいるしいつかと思って、許可した。けっして、愛紗の焦らしに屈したわけじゃないぞ!

その異動する女が、最後ってことで今夜、これから俺のところに来ることになっている。

最後の記念みたいなもんだな。

扉がノックされて、返答したら、関平って名乗った。そうそう、そんな名前の奴だったな。入っていいと許可を出すと、小さな袋を持つ

たベリーショートの女が入ってきた。あれ？　こんな娘いたっけ？
えつと真名は何だったっけ？

「御使い様、本日はお時間を作っていただき、ありがとうございます」
そう言っ手て手を付いて頭を下げた。めんどくさいからさっさとし
ろって思うね。

「本日は、私にすべてを任せていただけないでしょうか？」

「あ？」

「関羽さまにある人を紹介されて、そこであるワザを教えていた
だきました」

「おお！　マジか、で、そのある人ってどんなやつだ!？」

桃香たちははぐらかされたけど、俺に依存している親衛隊の女な
ら、俺の質問をはぐらかしたりするわけない。

「はい。深く布をかぶっており、顔はわかりませんでした。声からそ
れなりに歳がいつているように感じましたが、男女どちらとも取れる
声だったため、正確にはわかりません」

んだよ。全然使えねえ。でも、ある人に教えてもらったワザは気に
なる！　楽しみだ!!

俺は促されるまま、ズボンとパンツを脱いで立った。

関平は、自分の服のボタンを上三つほど外すと、袋から瓶を取り出
して中身を自分の巨乳の谷間へ垂らした。

それから、ボタンを締めなおして、俺の目の前で、液をなじませる
ように服の上から、胸を揉んで、服の真ん中よりも少し上の、ちよう
ど巨乳によつて引つ張られている部分のボタンを外した。

「行きます」

そう言いながら、関平は俺のチンコを持って、ボタンを外すこと
でできた谷間への入り口に押し当て、そのまま谷間に飲み込んでいっ
た。

「うあつ、おおおっ!？」

関平のおっぱいは想像以上の柔らかさと気持ちよさでチンコを包
み込んだ。

気を抜けばすぐにでも発射してしまいそうな、圧倒的な快感。チン

コがとろけそうな感覚に、腰が震えるが、ぐっと下腹部に力を入れて堪える。

「御使い様、失礼します♡」

関平の手が俺の腰に回された。

「それでは、私のおっぱいマンコをお楽しみください♡」

「つく、はあっ!!」

根元まで包み込んでいたおっぱいが、亀頭がギリギリ隠れるぐらいまで下がって、次の瞬間に勢いよく、再び、全体を包み込んだ。

気持ちよすぎる。なんで俺は、こんな気持ちいいおっぱいの持ち主が親衛隊にいたことに気が付かなかったんだ!?

チンコを乳房で捕らえられ、いいように弄ばれる。下のはずの女に屈辱極まりない行為だけど、今の俺は快感を堪えるのに精一杯だった。

乳房が動かされ、本格的に着衣パイズリが始まる。待ち望んでいた感触に、歓喜の喘ぎ声を上げる。

「どうですか？ 私のおっぱいは？」

「あつ、ああああ……き、気持ちいいっ!!」

「それはよかったです♡ もっと気持ちよくなっていたただけるよう頑張ります♡」

「おおあああっ!!」

関平の亀頭から根本まで、全てを乳房で包み込むパイズリはまさに極上の快感だった。

硬くなったチンコが、マシユマロのような柔らかさに包まれて愛撫される。

「おちんちん、すごく硬くなって……おっぱいやケドしそうです♡」

「あつ、くおおっ!! うひいいい……おっぱい、気持ちいいっ!!」

関平のテクニクはすごかった。速度を変えたり、たまに腕を締め、乳圧を変えたり、角度を変えて服で亀頭をこすったり、俺はただ快樂の声を発するしかない。逃げようと腰をひいても、関平の手がそれを阻んでおっぱいの中へ引き戻される。

着衣パイズリのペースが早くなり、あつという間に射精感がこみあ

げてくるのを感じる。関平が一際強く乳圧をかけ、先端から根本までを擦りたてた瞬間、我慢は限界に達した。

「ああっ!! で、出るうっ!!」

「あん♡ おっぱいの中が熱い♡」

おっぱいマンコの中で、チンコが打ち震える。あまりの快樂に関平の手から解放された俺はそのまま、座り込んでしまった。

「はあはあ……」

「御使い様、たくさん出されましたね♡ こんなに出されたら、おっぱいもつとぬるぬるになってしまいます♡ きつと、もつと気持ちイイですよ?」

そう言って、突き出された快樂の穴に俺は、震える腰で、チンコを突き出していた。

〈愛紗 side〉

ご主人様が楓を親衛隊に戻せと言ってきたが、なんとか、納得させた。

光るものはあるが、腐らせていた長い期間がある。まずは、失ったものを取り戻させる必要がある。

楓は、刃が訓練してくれると思っていたようだが、残念だったな!

私だ!

何? 機嫌が悪くないか、だと?

けっして、刃と並んで執務室で仕事ができただけなのにおまえが途中半端に強いせいで適当な奴に任せられなくて、隊長として、おまえの面倒を見なければならなくなったことが不満とか、そんなわけないじゃないか。

はっはっはっはっは!!

「やっぱり不機嫌じゃないか!!」

「さあ、戦いのカンを取り戻すため、私と真剣勝負と行こうか？」
「いやああああああああああああああああああああ!!」

十話（白蓮／白蓮）

〈周倉Side〉

統治者が力を失い、時代は、乱世へと移り変わった。

その犠牲となり領地を失った公孫贇が劉備の元に逃げ込んできた。最初の頃に助けてもらった恩もある為、劉備は彼女を受け入れた。

「ほら、周倉、終わったぞ」

任せた仕事を終わらせた公孫贇がそれを俺に提出する。

「ありがとうございます。」

……大丈夫そうですね。

それにしても、不謹慎ですが、公孫贇さまがきてくれて、とても助かってますよ」

「そんなこと言ってくれるのは、お前くらいだよ、周倉。桃香も北郷も、「あれ？ 白蓮ちゃん、いたんだっけ？」とか、「あ、白蓮いたんだ」とか、影薄いみたいに言うし、みんな寄ってたかって私の事を普通普通って…」

「自分から見れば、様々なことをこなすことのできる公孫贇さまは、すごいと思いますよ」

「周倉、おまえって、本つつつ当に良い奴だな!!」

これはマジで思っていることなんだけど、公孫贇、涙目になって俺の手を握り締めてぶんぶん振り回す。たしかに、彼女は武も文も一番ではないがどちらも平均以上にできる。悪く言えば器用貧乏だが、よく言えばオールラウンダーである。いかなる場所でも能力を発揮できるのはとても頼りになる。特に馬術に関しては、現時点で劉備軍一番の使い手である為、とても助かっております。おかげ様で俺の仕事も大分楽になった。あまりにも俺が公孫贇を褒めるものだから、愛紗たちが嫉妬したほどだ。

でも、公孫贇自身は現状が許せないらしい。北郷がこっちに來てから一度も公孫贇を抱いていないのも、理由の一つのようだ。

「じゃあ、何とかしてみますか?」

そんな彼女に手を差し伸べた。

〈公孫賛 Side〉

「あああ…………や、やああん♥ 周倉、やめろお…………」

強すぎず、弱すぎず、憎たらしくなるほどの確かな動きで、周倉の指が私の快樂を高めていく。

あの時、周倉の手をとって、仕事終わりに二人で食事をして、話の内容が内容だしって言われて、宿に入って、しばらく酒を飲みながら愚痴を聞いてもらって、気がついたら私も周倉も裸になっていた。

「はひいい♥ 周倉、冗談はよせ♥ やめろよお…………」

「どうしてですか？ 気持ちいいでしょ？」

「だ、だって…………だって、こんなの、普通じゃない…………あん、ああん、あひっ♥」

胸を、お尻を、足を、腕を、腹を、周倉の手が指が触れる度に、今まで感じたことのない気持ち良さが沸き起こる。

必死に逃げようとしても、身体を撫でられるだけで力が抜ける。

「あっ♥ あああっ♥ わ、私…………もう…………あっ、ああああ♥♥♥」

「イクんですね、公孫賛さま…………」

「そ、そんな…………わ、私は…………あうっ、あん、ああああ…………」

「恐がらないで、イクって言ってください。さあ…………」

周倉の指が、わたしのあそこをぞろりと撫でる。

その残酷なまでに甘美な刺激が、私を別の世界に跳ばした……

「あ、ああああ♥ あああ♥ 私、イクっ、イク、イク、イク、イク、イク、イク……………」

頭の中が真っ白になって何も考えられなくなった。

「はああ…………」

ピクリとも動けない私を周倉は寝台に乗せると、覆いかぶさってきた。

ああ、入れられるんだと、どこか他人事のように感じていた。入れられるまでは……

「あ……あああう♥ ああああああ♥♥♥」
中を押し広げるようにながら、周倉が私の中に侵入してくる。押し広げられるような痛みが、どうしてかたまらなく快感だった。

「あううう……しゅ、周倉……うわああああああ♥」

どこまでも、どこまでも、周倉のが入り込んでくるような感覚。とうとう、一番奥にまで到達して、さらに押し上げられる感覚。

固くて熱いそれは、私の中に確かな存在主張をしていた。

「動きますよ」

「ま、待あああ……あく……ああん……ひああん♥」

ずりずりと、私の中にいる周倉が動く。

「可愛いですよ。すごく可愛い声だ。俺ので感じてるんですね」

「あうう♥ そ、そんなわけ……あうつ、あん、あはあつ♥ やああん♥」

周倉は私の顔に接吻の雨を降らせてきた。そして、背中を丸めるようにして、首筋に舌を這わせ、乳首を口に咥えた。

「あひいいいいいんっ♥♥♥」

今まで以上の快楽に思わず、絶叫した。

「公孫贄さまの中、動いて俺のを一生懸命こすってるみたいで、とても気持ちいいですよ」

「あああ♥ いやあ……そ、そんないやらしいこと言うなあ♥ あん、

ああひいん♥♥♥」

「公孫贄さま、気持ちいいのなら、きちんとそう言ってほしいんですけど」

「あああ……ば、バカ♥ そ、そんな、こと言えるかあ♥ あうつ、あ、あん……あああああ♥」

「そうですか、ですが、公孫贄さまの顔を見れば、聞くまでもないことでしたね」

「いやああん♥ 見るな……見るなあ♥」

ようやく動くようになった手で顔を隠すと、その手を掴まれて、こ

〈北郷Side〉

いつものように朝は月たちに抜いてもらい、判子を押し仕事をして朱里たちに抜いてもらった。今日は、夕方には終わった。俺のデスクワークの速度も上がってきているらしい。(普段の1/2、周倉&文官なら2時間、桃香で半日で終わる仕事)

今日はロリばつかだなあって思いながら、部屋へと戻るとする途中、白蓮にあった。

公孫賛・白蓮には、幽州時代に色々世話になった。セックスしたり、お小遣い(大金)もらったりした。だからこそ、逃げてきた時は受け入れたけど、正直、そこからパツとしない。文武両道みたいだけど、ぱつとしない。いてもいなくても正直変わんないと思う。いや、マジで。

そんな彼女に誘われて、彼女の部屋に来た。誘われた際に、「ある人から教えてもらったことがある」って言ったからな！ すっげえ楽しみです!!

促されて、椅子に座る。

「急にわるいな北郷」

「いや、大丈夫だよ。でも、白蓮の方こそ大丈夫か？ 汗が凄いけど」

「ああ、訓練してたからな」

そう言いながら、白蓮は、上着のボタンを外して胸元を開いた。大きすぎず、小さすぎずの並乳・普通おっぱいがみえる。

そのまま、頭を抱きしめられて顔におっぱいをおしつけられた。

訓練をしていたというだけあって、汗の匂いと、女の子の匂いが、鼻孔をくすぐる。朱里や雛里の匂いとはまた違った、ロリではない女の子の匂い…

「すごい鼻息だな♡ フフ、そんなに私の匂いが気に入ったのか？

ここをこんなふうにしてしまうほど……」

白蓮の膝が、パンツとズボンの上からチンコをグリグリと刺激して

くる。

「ち、ちが…」

「そんなに、鼻息を荒くしておいて、違うも何もないだろう?」

逃げようとするも、椅子と、白蓮に挟まれて身動きが取れない。いくら動いても、白蓮の匂いと、膝電気アンマから逃れられない。

白蓮の匂いが、まるで媚薬のお香のように俺を昂らせていく。

「うゝあゝあゝあゝあゝ」

俺は刺激に耐えきれず、パンツの中で射精した。

続いて、射精して脱力していた俺は床に寝かされ、レスリングのヘッドロックのように頭を抱え込まれた。頬に当たるおっぱいの柔らかさと、丁度脇に鼻が当たり、再び、白蓮の匂いに勃起してしまっ

た。
「やっぱり、北郷は、匂いで大きくする変態なんだな♡」

俺の身体を折りたたむようにして、白蓮は自由な方の手を伸ばしてズボンとパンツの中から、チンコを出して扱き始める。自分の精液でぬるぬるになって滑りが良くなっていて、ただの手コキなのに気持ちが良い。緩やかな手コキと、白蓮の匂い…

「アハハハ…そんなに鼻息を荒くして、くすぐりたいじゃないか♡」
汗の酸っぱい匂いと女の子の甘い匂いがミックスされた匂いなんだん頭がぼーっとしてきて、我慢する間もなく射精した。

「うわっ♡ 出す時は、出すって言ってくれ。クスクス…」

でもすぐに、胸一杯に白蓮の匂いを吸いこんでチンコは回復する。

「ふあああ…」

白蓮の声を遠くで聞きながら、匂いとソフトタッチの手コキに酔いしれる。

それから、何度も白蓮の手の中で射精を繰り返し、気がついたら自

分の部屋で寝ていた。

〈白蓮Side〉

刃といたした日から、何度もあいつに呼ばれてダメだと思っ
ても、断れば、北郷にバラされるかもしれないと思い、嫌だが
閨を共にした。そうするうちに真名を交わし、気がついたら、
北郷の事を忘れてあいつとするのを心待ちにしている自分が
いた。

北郷がどうか、嫌だとかは、自分で自分を騙す言い訳で
しかなく、そんな時、桃香たちに呼び出され、話しを聞き、
北郷の性処理を行った。

その日から、訓練をしていると、北郷に呼ばれるようになった。
必死に私の匂いを嗅ぐ様子は、犬の様に可愛いなあと思うのが
ここ最近だ。

「あう♥ イイっ♥ あはああああ…キ、キモチイイ♥♥♥」
ズンズンって刃のチンポが私の一番奥を突き上げるたびに
たまらない気持ち良さが身体を駆け巡る。

この間聞いた話だと、私が刃にあまりにも褒められている
から、それが悔しくて桃香や朱里たちは運動を、鈴々たちは
勉強を頑張っているらしい。

そういった優越感が、私を更に気持ちよくさせる♥

「あ、あへ、あへえええ♥♥♥ いいいいいい、いっぐううう
ううううううううううううううううううううううううッ♥♥

♥♥♥」

熱い刺激を受けながら、この座を奪われない為、もっと頑
張ろうと薄れゆく意識の中、私は決意した。

十一話（星・詠・白蓮・楓・月／なし）

久しぶりにまとまった休みが5日取れた。

乱世となり、周囲があわただしくなったこともあり、俺は寝る間も惜しんで働いていたら、桃香たちに働き過ぎだから、休んでくれと言われて休みをとることにした。まあ、休む為に更に激務になったのは言うまでもないが……

「おかえりなさいませ、旦那さま♥ もう少して夕餉が出来るので、おまちください♥」

扉を開けて家に入ると、裸割烹着の星がいた。

同じタイミングで休みを取った星と共に、星を調教するのに使った廃村の家に行き、夫婦ごっこをしているのだった。

大人しく椅子に座って楽しそうに料理をする星を眺める。きゅつと引き締まったヒップが揺れて俺を誘う。

「あん……ダメですよ。旦那さま♥」

そつと背後に忍び寄り、魅惑のヒップを触った俺を非難する星を抱きしめてキスをする。

「んんんん、ちゅぱ……旦那さまあ、もつと♥」

持っていた包丁を置いて抱きついてくる星を、抱き上げて寝台に降ろす。

「キャツ♥」

キスをして割烹着を脱がそうと手を伸ばすと、その手を掴まれた。

「今日は、私にお任せください♥」

そう言うと、俺との位置を入れ替え、俺のズボンを脱がしてイチモツを取り出す。

「ああ……素敵です」

熱っぽい視線を向けながら、星は口を開き、ぱっくりと赤黒い亀頭を咥え込んだ。ぬるりとした口腔の感触が、俺の脳に響く。

星は、唾液を塗りつけるように、俺のイチモツ全体に舌を這わせた。最近忙しくてご無沙汰だった為、血管が浮き上がるほど反り返ったイチモツに口だけで奉仕しながら、星は割烹着の首の後ろにある紐を外して、胸元を緩めてノーブラの豊かな乳房を解放する。

何度見ても、見事な形と大きさだ。

「はぶっ ♡ ちゅぶ、ちゅぶぶっ、んむむ ♡ ちゅ、ちゅばっ、ちゅぶっ ♡」

星が、唾液にほどよく濡れたイチモツを咥え、唇を規則的に上下させ始めたのだ。さらには両手で俺の太腿の内側を撫で、袋を優しくもみほぐす。

予想外の巧みに俺の呼吸が荒くなっていく。

いよいよイチモツに欲望がこみあげてきたとき、まるでそれを察したように、星は唇を離した。亀頭と唇の間に、唾液と先走りの汁で、橋が一瞬できあがる。

星は股間への愛撫を完全にやめたわけではない。ぬるぬるになった竿をゆるゆるとしごき、俺の欲望を巧みに操る。

「今度は、この胸で ♡」

上目遣いで見つめ、悪戯っぽく微笑みながら、星は言う、その宣言通りにその豊かな乳房でイチモツを挟む。

体ごと胸を上下させる。何とも言えない柔らかな感触に包まれたイチモツは、そのたびに、胸の谷間から頭を出し入れしている。

「ク……」

その、柔らかくきめの細かい乳房の肌触りに、不覚にも俺は声をあげてしまった。

そんな俺に星は目を細め、少し疲れたのか体を動かすのを止め、口から大量の唾液をてろーっと自分の胸元に滴らせる。

潤滑油を補充し、さらにすべりをよくしたところで、星は動きを再開させた。

前よりもさらに動きを大きくし、チンポの先端が星の口元に届く。

「ちゅッ、ちゅぱ♥ちゅちゅ……」

そして星は、亀頭が近付いてくるたびにキスをして、刺激を与える。

「ちゅぶぶっ、ちゅむ、んちゅ、ちゅむう♥」

時々、こらえきれなくなったように、竿を乳房に挟んだまま、亀頭全体を口に含み、舌と動かして情熱的に刺激する。俺の限界は、もう、すぐそこまで来ていた。

「ハアハア♥旦那さま♥」

唇をチンポから離し、ぬらぬらと濡れ光る竿をその巨乳で揉みつぶすようにしながら、星は言った。

「旦那さま、下さい……私に、ご主人様の熱いのを、いっぱい♥」

そう言って、また何度も亀頭にキスの雨を降らす。

「うッ！」

その刺激がトリガーとなって射精した。

びくん、びくんとしゃくりあげているイチモツに、星は文字通りむしゃぶりついた。

「はむ……ん、んちゅ……ちゅるるるっ……んく、ジュール……ゴクツ♥」

久しぶりということもあり、驚くほど大量の精を放ち、ようやくイチモツは律動を止めた。

「星、気持ち良かった。何時の間に……」

「フッフ、好いた男の為に、女は、たくさん努力できるのですよ」

艶っぽい笑みを浮かべて星は、割烹着の裾をめくる。

「旦那さまのを銜えていたら、我慢が出来なくなってしまうました♥」
「なら、責任を持って、慰めてやらないとな」

充分すぎるほど濡れたマンコに俺のイチモツは滑らかに侵入していった。

「ああア♥すごい……どんどん入ってくるウ♥」

亀頭と膣内がこすれ、ヒダが絡み付いてくる。チンポが星の中に完全に納まったとき、二人は動きを止め、互いの体を抱きしめた。そして、ゆっくりと腰を動かし始める。

「は、はふ♥んふう……んあ、あっ、あくう♥」

少しずつ腰の動きがスムーズになっていく。

「はあああ♥ ああん……あう……ああアツ♥」

いつしか、スピードは、MAXになって激しく腰を動かしていた。視線を下にやると、ぶるんぶるんと踊る胸が目に入った。俺の動きに合わせて、星の胸が激しく揺れていた。迷わず掴む。

「あ、あ、あ……いい♥ んくう、すっごくいい♥ いい、いい、いい♥♥♥」

そう言いながら、星は俺を求めるように、手を宙に伸ばす。俺は上体を倒して星にかぶり、その姿勢で、腰を動かしたまま、唇を重ねる。それから耳朶をしゃぶり、首筋に舌を這わせ、顎といわず頬といわず、星の顔中にキスの雨を降らせた。

「旦那さまのチンポ……ごりごりつてなつて……あ、あは、ははふうん、んんんん♥♥♥ ああッ、ひいッ♥ すごい、すごい♥」

星の膣内が、俺に負けじと、まるで別の生き物のように蠢動した。ヒダの一枚一枚がざわめき、すでに臨界に達している俺のイチモツをさらに攻めたてる。

「あつ、ああつ、あああん♥ はひやあああ……チンポイイ、チンポ

チンポオ♥♥♥」

俺は抱きしめる腕に力を込めてくる。

俺は、星の奥を突き上げると同時に欲望を解放した。

「あううううっ♥ い、いっぱい、いっぱい……あつ、あああん♥

はあん♥♥♥ いく、いっく、いっくうううううううう♥♥♥ん

ひいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい♥♥♥♥♥♥♥♥♥

「星、料理もできたんだな」

「当然だ。どこかの誰かと違って、ちゃんと食べられる物を作れる」

フフンと笑う星を見てから、出されている料理に目を向ける。メンマの炒飯、メンマの中華スープ、箸休めのメンマ。

メンマ尽くしであるが、食べられるものであることには変わりはない。状態異常にならない能力を持つ俺だから何とか食べられるというものを作るどこかの誰かよりは、趣向が偏っているだけなのでマシというものだ。

「……このまま、ここで、夫婦にでもなりませぬか？」

「ん？ 何か言ったか？」

「いや、たまには、こうやってゆつくりとするのもいいのだと言ったのだ♥」

「フフ、今の状況ではなれないが、いつかはなりたいたいものだな」

「なっ!? き、聞こえているではないかっ!!」

顔を真っ赤にして叫ぶ星という面白いモノを見れて、笑った俺だが、この後、ブチギレた星が槍まで持って暴れ出し、やりすぎたと反省するのだった。

中々有意義な休日一日目を過ごして街に帰ると、扉の前に月と詠がいた。

「どうしたんだ？」

「昨日は、星と一日過ごしたんでしよう？ なら、今日は、ボクと一日過ごして！」

「つていうか、詠ちゃん、今日が月に一度のアレなので、私は仕事があつて申し訳ないんですけど、刃さんに見てもらいたいです」
「まあ、特に用事もないし、いいぞ」

つということ、詠を預かることとなった。

ついでに、なんで俺に振られるかという、俺にふりかかってくる不幸を力技で何とかしていたら、頼られるようになりました。

部屋ではなく、もしもの時の事を考えて倉庫で過ごすことにした。
ここなら、食料等も備蓄されていて、下手に外に出て被害を広げる
ことなく済む。

「ごめんなさい。あんた、かなり久しぶりの休みだったんでしょ？」

「気にするな。こうやって、詠とのんびり過ごすのもいいもんだしな」
俺の膝の上に座っている詠を抱きしめて、髪の毛に顔をうずめる。

「ちよ、ちよつと、昨日は、お風呂の日じゃ無かったから、ダメえ♥」
休日ということもあり、白のワンピースで髪を結んでいない詠は、
身体を揺する。

その仕草さえ可愛く見える。

暴れる詠を抱え直すとこつちを見上げてきたのでキスをする。

「ツ、んちゅ、ハむ……チュツ、ちゅう♥」

驚いたように目を開いた詠だったがすぐに俺の頭に手を回して舌
を絡めてきた。

唇の間を割り、歯をこじ開けるようにして、口内に舌を侵入させる。

そして、舌に舌を絡め、口蓋を細かくくすぐる。

キスをしながら、手を詠のマンコへと這わせる。詠は足を閉じて抵
抗するが、それは、フリであって少し強引に手を入れるとすぐに股を
ひらく。中指が、縦に割れたスリットを強引に這い進む。そこは、す
でに熱く濡れ始めていた。中指を、割れ目に沿って上下に動かす。

「んん……んん♥ んん、あああん♥」

ディープキスによって口腔をなぶられながら、詠は明らかに快感に
よる声を漏らした。

唇を解放すると、これからすることへの期待と不安で目を瞳を潤ま
せた詠の顔は、どきりとするほど美しかった。普段が勝気な分、その
ギャップはかえって俺の欲を駆り立てた。

「ひゃんっ♥」

詠は、体を弓なりに反らせた。俺の指が、さらに激しく詠の狭い秘部を刺激したからだ。俺の指の動きに合わせて、陸に上げられた魚のように跳ねる。

俺は、そんな詠を寝台に寝かせてキスの雨を降らし、服を脱がして胸の間に顔をうずめた。まだ青い果実を思わせる胸の肌触りを頬で感じ、その頂点にある乳頭を啜える。

「あああん♥ あは、あはあ……もつと、もつとすってエ♥ ひうッ♥」

俺の頭を抱き締めて詠が叫んだ。言われるがままに吸い、舐める。そして指を這わせる。

「そんな、敏感なところいつぺんにされたらあ……んあっ、ああああっ♥♥」

俺によつて与えられる快感に体を震わせ、媚を含んだ声を漏らす。普段の強気な詠からは想像できない可愛い姿に俺のイチモツは、触ってもいないのに臨戦態勢を整えていた。

「あ……」

愛撫が中断すると、詠は空ろな目を俺に向けた。その視線には、もつとという言葉が込められていた。

俺は、詠の下半身からパンツを取り去り、しなやかな両脚を大きく割り広げていた。そして、その中心部に顔を近づけていく。

「あ、ああ……」

これから来る刺激に期待の声をもらしながら、クイクイと腰を振つて俺を誘う。

「あうっ♥」

すでに愛液を滴らせていたマンコを、舌が舐め上げると、びくん、と詠は体を痙攣させた。

「ふわああっ♥ あはあん……気持ちいい……気持ちいいよお♥ ああああっ♥」

何度もセックスしているのに未だにぴっちりとしたマンコを、強引に割り広げるように舌でえぐり、丁寧に舐めしやぶる。

「だ、ダメ……やめて、刃♥ これ以上されたら、ボク……ボクウ♥」
「どうした？」

ちらっと詠の顔を窺うと、もうイキそうになって、それを必死に我慢している詠の顔が合った。その様子を確認してから、すぐに顔を戻し、溢れる愛液を舌で受け止め、マンコ全体を舐めまわし、舌先で膣口に浅く出し入れする。

「ボ、ボク……おかしくなる♥ 助平なことしか考えられなくなる♥
♥♥」

「いいぞ。おかしくなれ、俺という時は、助平なことしか考えられない助平軍師になれ」

片手で詠の腰を支え、もう片方の手でクリトリスの包皮を剥き、そこに口を寄せて吸いたてた。

「ああああああア♥♥♥」

詠が、弓のように反り返り、ひときわ高い声を上げた。

「そこ、そこは♥ ダメ、ダメダメダメええええええええええええええええええつ♥♥♥」

言葉とは裏腹に、詠は自ら腰を浮かし、両手で俺の頭をそこに押し付けようとする。

「ンああああ♥ は、はひっ♥ いっちや、いっちやう、ンひいいいいいいいいいいいいいい♥♥♥♥♥」

詠は絶叫し、まるでブリッジのような態勢で、一瞬動きを止め、そのまま、ひくんひくんと何度か体を痙攣させ、そして不意に腰を寝台に落とした。

「はあはあ……」

半開きの可憐な口から、荒い息を漏らす。そんな詠を見下ろしながら、自身の服を脱ぐ。

「詠……」

「刃、きてえ♥」

「ああ… 行くぞ」

俺は一気に腰を進ませた。

「んああつ♥ チ、チンポ、入ってくる……チンポお♥ んああああ、

あぐううっ ♥♥♥」

詠の体がのけぞった。充分に愛液で濡れているため、さすがに痛みはないが、きつい挿入であったことには違いない。細い腰を抱え、まるで、自分の腰を叩きつけるような動きで、詠を追い詰めていく。

「んっ、んああっ、あふ……あああ、あっ、あはあ♥」

詠は、まるでいやいやをするかのように頭を振った。そのたびに、未熟な胸がふるぶると震える。

詠が、すがりつくように手を伸ばして、指が白くなるくらい力で、しつかりと俺の手首を握る。

俺の動きを阻害しようとしているというよりも、深く結合しようとしての動きだ。

「気持ちいいか？」

「イイ……イイのお♥ ふあああああッ♥ き、きもちイイ……」

うわごとのように、問いかけに答える。こみ上げてくる笑いが抑えられずに口から洩れた。

「クス……いやらしいな」

「うん……あアッ♥ ボク、ボクはイヤラシイのお♥ イヤラシくて

いいって言ってくれたもん♥ だから、もっとオ……」

「もっと、どうしてほしい？」

「シて……いっぱいシて♥ ボクを、メチャクチャにしてえ♥ ああ

ああああア♥♥♥」

腰から手を離し、詠の乳首をつまみ、そのまま手を上に持ち上げる。

「ひいアアアアッ♥」

痛みに悲鳴を上げ、詠は体をのけぞらせた。膣内が、きゆうつと絞まるのを、チンポで感じる。

「イタイイ……」

「でも、気持ちいいんだろうっ？」

「う、ウン……イタイのに、キモチイイの♥♥♥ ンああああ……ス

ゴクイイ♥」

空中で軽く乳首をひねると、悲鳴にも似た艶声が響く。

ぱつと、乳首を離して今度は、詠に上体をかぶせ、体を密着させた

お前が寝ている間に、訓練所から飛来した矢が数本、この倉庫の窓を通って俺に向かって飛んできたことは、内緒だ。

休日3日目。今日は、消耗品がなくなりかけていたので、買い物にでも行こうと思ったら、白蓮がいた。

声をかけたら、行くと頷いた。ちよつとした遊び心で、ある提案を試みたら、「刃がしてほしいなら…」とOKしてくれた。

「白蓮、速く」

「ツ！ あ、あんまり早く歩いたら、見えちゃうだろ……」

遅れぎみな白蓮を急かして市を歩く。俺のオーダーで白蓮の衣装は、短い白のタンクトップとタイトのミニスカート。最後の物語といながらも延々と続いているゲームの7に出てくる格闘美女のコスだ。

ついでに髪をおろしている。衣装と雰囲気、ぱつと見で白蓮とは気づかないかもしれない。

スカートの丈が、気になるらしく小股で歩くので遅い。

「下よりも上を気にした方が良いんじゃないか？」

「ひゃん♥」

さつと、胸に触れる。布越しに柔らかい感触が手に伝わる。実は、ノーブラなのだ。

「ちよ、こんなところで!？」

「大丈夫だ。周りからは隠してる」

俺たちの位置なら、平均的な体形で平均的な身長、白蓮位なら、大柄な俺の身体で隠せる。恥ずかしそうに悶える白蓮を堪能してから、離れる。

「あ……」

「さ、買い物続きだ」

離れた俺の手を追いかけように出てきた手を握り、買い物の続きを始める。さすがにこんなところで、最後までするのは無理だ。

買い物を終え、昼食をとり、朱里を連れていったあの店に入った。

「おい……」

「さあ、食べるぞ」

テーブルに並んだ料理を見てこちらを睨んでくる白蓮をスルーする。麻婆豆腐をはじめとした辛い系の料理に手を付ける。白蓮も渋々といった感じで食べ始める。

辛い物を食べれば、当然、汗が出る。汗を流しながら食べる白蓮のタンクトップが肌に張り付く。

しかも白い為、汗でぬれてピンク色の乳首と柔らかそうな肌色が透けて見えてくる。

ニヤニヤしていると、自分の状態に気がついてバツと胸を隠してこつちを睨んできた。

「や、やっぱりこれを狙ってたんだな!？」

叫ぶ白蓮を無視して、席を立ち、白蓮の唇に唇を重ねる。辛い唾液が、行き来する。

続いて隙だらけの乳房を鷲掴みにした。

「あんっ♥」

白蓮が白い喉を見せてのけ反る。暴れる白蓮の体を抱きすくめながら、手の中の胸を荒々しく揉みしだいた。

「ああっ、はうっ、はあん、ああん♥」

甘い息を弾ませる白蓮を可愛いなと思いつつながら、両胸を交互に捏ね回した。

「んああっ♥　じ、刃っ、ううあ……んああああっ♥」

白蓮が、切なげに身をよじる。タンクトップ越しに自己主張する乳首を摘まむように刺激する。

「あああああっ♥　あううん……イイ♥」

刺激に合わせて可愛らしい鳴き声を上げる白蓮がいとおしくて頬にキスをする。

白蓮は、身をよじって俺の手から逃れようとして、それでいてより気持ちのいい場所を触らせようとする矛盾した動きは、彼女の理性と欲望が争っているかのようだった。

俺は体の位置を変え、白蓮の背後から抱くような格好になった。そして、その両手で、胸を弄ぶ。

「き、気持ちイイい……ああっ、あううう、あく、ああああ♥　あうっ、あひい♥♥♥」

執拗な愛撫に全身を紅潮させながら、身悶える。その身体を這うように右手を、白蓮の足の間に滑り込ませた。

「はひい♥」

「もうグシヨグシヨだな。これは汗じゃないだろう?」

そう言いながらマンコを布越しに指でまさぐる。

「あうっ、あっ、あううっ♥　ソコ、ソコイイ……　あん、ああん、あはん、あああああ♥　あうっ、あっ、あっ、あっ♥」

パンツを掴むと、俺の意志を理解して白蓮は少し腰を上げる。その手伝いもあって、あつと言う間にパンツをずり下ろした。

白い太腿の間に顔を突っ込むと、白蓮は、期待に満ちた瞳をこちらに向ける。

「あああん、すごい……イイ、キモチイイ♥　あふっ、はひひんっ♥　あはあああああ♥」

白蓮が下をより深く受け入れようと必死に俺の頭を押し付けようとするが、入口を浅く舐めるだけにとどめる。

「あうウ……うあああつ♡ ひいい……ひあああつ、あは、んはああん♡」

体をくねらせて、悩ましく喘ぐ。俺は、マンコをたつぷりと舐めた後、充血しているクリトリスを舌先でグリグリと刺激した。

「んああああああ……あひん♡」

白蓮がガクガクと悶えるが、絶頂かないように調整する。

「あひつ、はひああ♡ あああ……んあつ、も、もつとお、もつとしてくれえ♡」

だらしなく涎を垂らした口から、もう、理性などない欲望のままの声が発せられた。

俺は、いったん口を離し、より深く舐めてほしいと口を開いているマンコを視姦する。

「あああ、刃……切ないよお……」

中途半端に官能を燃え上がらせたまま放置された白蓮が、誘うように腰を振る。

「もつと舐めてほしいか？」

白蓮は、その問いにコクコクと、必死に頷いた。舌で愛液にまみれながらひくつくマンコを舐め上げた。

「あひいいいっ♡♡♡」

それだけで、白蓮は、体を弓なりに反らした。そんな白蓮の腰を抱え直してマンコにむしゃぶりついた。

「ひ、ひいいい……お、おかしくなるう♡ んあああつ、あひあああああ♡」

俺は指で白蓮のマンコをぱつくりと割り開き、愛液に濡れる膣を執拗に舐め回す。さらに包皮からクリトリスを吸い出し、舌で舐め上げる。

「あああああ……いひい♡ いく、いくッ、いくうううううううううううううううううううううううう♡♡♡♡♡」

絶頂を迎えてしなやかな体がビクビクと痙攣し、迸った愛液が、俺の顔を濡らした。

ずるずると椅子から滑り落ちる身体を支えながら、ズボンを脱ぎ棄

てる。すでに俺のイチモツはフル勃起している。

開いたままの白蓮の脚をM字にし、その膝に手をかけ、亀頭をマンコに押し当てる。

「あううう ♡ ひゃあ……」

未だ強烈なアクメの余韻に浸っている白蓮が、わずかに身じろぎするが、そのままの先端でぐりぐりと廻る。

「ううあ……くるのか？ あ、あああ……来てくれ ♡ 私の中にい……んひ、ひいい、あひいい ♡」

一度絶頂に達して敏感になった秘部を刺激されて、甘い喘ぎ声を漏らしながら、俺を求める。

俺は、一気に肉棒を突き進めた。

「ひぎいいいいいいいい ♡ ♡ ♡」

俺に抱きつきて絶叫する白蓮を支えながら、腰を使い始めた。

「ああん……あひツ、あひい ♡ ひゃんツ、はひいいい ♡」

白蓮の膣肉の鮮烈な締め付けを感じながら、イチモツの動きをさらに大きく力強いものにする。

「ううっ、うあっ ♡ うくう……あ、ああああ ♡ あうっ、あああ、んひいい ♡」

俺の動きに合わせて湧き上がる快感に、白蓮は身をよじって喘ぐ。

「あっ、あああ ♡ んああ……あひ、ひいつ、ひいいいい ♡」

がばっと、俺に両手両足でしがみつく白蓮の絶頂の気配を感じながら、最後のスパートをかける。

「ああああああ ♡ ♡ ♡ いひいいいい……い、い、いく ♡ ああ、い、イツちゃう ♡」

そのしなやかな体を身悶えさせ、胸を左右に揺らしながら、白蓮が叫ぶ。

「出る……出すぞー！」

「ああああああ ♡ ♡ ♡ ♡ ひいいいいい ♡ ♡ ♡ イ、イク ♡ イクツ ♡ イクイクツ、イツクううううううううううううううううううう ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡」

絶叫する白蓮の奥に、熱い精を吐き出した。

手を回してねぎらうように楓の頭をなでると、楓はさらに強く抱き着いてきた。

「刃、我慢できない。しよ♥」

俺の目の前で、楓の裸身が露わになっていく。

楓は、やはり、愛紗たちに負けないプロポーションをしている。すらりと伸びた四肢に、くびれた腰から続く尻と、たわわな両の乳房。外でストリップする恥ずかしさか、その頬は紅潮していた。

扇情的な下着姿の楓が、石の上に座る俺の足元に膝を付いて、イチモツを外に取り出す。

「あ♥」

楓の下着姿に興奮して勃起したイチモツを前にして、楓は息を飲んだ。

「こんなにアツい……」

うっとりとして、イチモツを見つめ、ゆつくりと楓は、イチモツに舌を伸ばした。

舌先が、張り詰めた亀頭に触れた。

「んあ……んちゅ……れるれるっ♥ れろ……んふう……ちゅ、ちゅぶぶ♥」

楓の舌が、亀頭の表面を這い回る。

その感触に、イチモツはさらに固く、大きくなった。

「ちゅ、ちゅぶ、ちゅう……れる、れるる♥ ちゅっ、ちゅぶっ、ちゅむむ……」

いきり立ったイチモツを、楓は舌と唇が愛撫する。

舌先が、尿道口やカリ、裏筋などを、丹念に刺激してくる。

「あ、あむ……んちゅ……ちゅぢゅう……ぢゅぶぶっ♥」

イチモツ全体を唾液でコーティングすると、楓はイチモツを口内に

加え込んでいく。

生温かな感触に包まれ、イチモツがさらに膨張する。

イチモツを啜え込んだまま、頭を前後に動かし始めた。柔らかく艶やかな唇が、竿を擦る。

「んぐう……ちゅぶつ、ふうう♥ んっ、ちゅぶぶ、じゅぶ……ちゅぶぶつ、ちゅぶ、ちゅぶつ♥」

段々と楓の頭の速度が増していき、口腔内全てで、ペニスを扱きたてる。

楓が体を動かすたびに、くぐもった声と湿った音が楓の口元から漏れる。

俺は、それを堪能しながら、体を前に倒して、楓のブラを外した。

「んあ……はひいいっ♥」

乳房を下から掬い上げるように掴み、柔らかな感触に指を食い込ませ、まさぐった。

手の平に当たる乳首が、次第に堅くなっていく。

「んあ、はうう……ひゃあん♥ あうう……あふん……ああん♥

あむっ、ん、ちゅぶう……ちゅ、ちゅぶぶつ♥ んちゅっ、ちゅむむ

……あひっ、ちゅばっ、ちゅばっ……はふうん♥」

唇で肉竿を抜く楓から、甘えるような息が漏れる。

俺は、楓の胸の感触を楽しみながら、さらに乱暴に捏ね回した。

「はううん♥ んむう、ちゅぶぶつ♥ くうん……んちゅ、ちゅぶずう……」

楓はくぐもった声を上げながら、身体をくねらせて悶える。

その姿は、俺の愛撫から逃げようとしているようにも見えたり、さらなる快楽を求めて俺を誘惑しようとしているようにも見えた。

「んふうん♥ ちゅぶ、ちゅぶぶ……ちゅばちゅばっ♥ んちゅう……」

媚びるように鼻を鳴らしながら、楓が、竿にと舌を絡み付かせてきた。

お返しに、ひとしきり弄んだ巨乳の先でほとんど触らずに放置していた乳首を指で摘まんだ。

を迎えさせる。

「あつ、ああああああああ♥♥♥♥ は、入ってくる……んああああ……
きひいいいいいい♥♥♥♥」

楓のマンコが、熱くとろけるような快樂が、肉棒全体を包み込んでいく。

「楓、いくぞっ」

「うんっ」

俺と楓は、どちらともなく腰を動かし始めた。

「うああ……あつ、あうっ、あふ……あはああああっ♥♥♥♥ すごい……
奥までできてえ……あああん♥♥♥♥ きもちイイのお♥♥♥♥」

楓が、嬌声を上げて俺にしがみ付く。その膣肉も、同じように俺のイチモツに絡みついてくる。

「あ、あううっ、あんっ♥♥♥♥ んひいいいい……す、すごい……あは
ああん♥♥♥♥ あひっ、こ、壊れちゃうう、あはああああああ♥♥♥♥」

俺たちの繋がっているところから大量の愛液が溢れ、濡らしている。

亀頭の先端で膣奥を突いたら、楓から悲鳴のような声が漏れる。

俺は、さらに子宮口に亀頭を叩きつけ続けた。

「あぐうっ、い、いひいい……ああああっ♥♥♥♥ や、やめてえ……それだ
め、だめっ、だめえ……きもちよすぎるううう♥♥♥♥ あああああああ

ああああああああああ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

より強い力で俺にしがみ付いてきた。それでも俺は止まらず、俺たちのぶつかる音が響く。

「あつ、ああつ、あん、ああん♥♥♥♥ だめ、だめえ……イっているのお、
あん……んああああ……あつ、はあうっ♥♥♥♥ あはああ……そ、

そこお……そんなにコスられたらあつ♥♥♥♥ はうううんっ♥♥♥♥」

叫び声とともに、楓の膣内が、イチモツを搾るように収縮する。

それは、もつと動いてほしいとねだっているようだった。

尻に指を食い込ませて、俺も見えてきた終わりに向かって激しく楓を揺さぶる。

「うあああつ♥♥♥♥ うぐうっ、あひっ♥♥♥♥ お、奥う……すごい、きて

ってことで、現在、倉庫にいます。ここ、改築した際に、風呂場も作ったので、色々と便利だ。

風呂場で生尻をさらす月に注射器型の浣腸を持って近づく。なんでもこの時代にこんなんがあるのかだろうか？ 俺たちが把握していないところで北郷が作らせた可能性は無きにしもあらずだが、あつたので使っている。

「はい、息を吐いて」

「は、はい……」

やると言いだったが、直前になって緊張しているらしく、きゅつと締まっているアナルが月の呼吸に合わせて緩まるが、浣腸が当たると、再び、絞まる。

仕方がないので、マンコを撫でる。

「キャッ♥」

意表を突かれて緩んだ瞬間に、先端を差し込む。本来、排泄する為の場所に差し込まれる感触に、月は短く悲鳴を上げるが、俺はそのままの直腸に薬を注入していく。

「あ、あっ♥ へううう、へ、変な感じがします……」

セックスのさなかで、入り口付近を愛撫することもあるので、戸惑いの中に快樂が混じった声を漏らす。ほどなくして、月の腹からごろごろと低い音し始めた。

「あぐ……あ、いやあ……うぐ……うぐぐう……」

自分の内臓が活発に動く感覚に、月は歯を食いしばる。

「うっ、うぐっ、ううう……お、おなか、痛い……」

身体を丸める月を支え、腰の上に座らせる。頬を赤らめて荒い息を吐く月の顔に思わず勃起して、ヒップの割れ目に直接押し当ててしまおうが、今の月はそんな事を気にしている余裕ない。

ワンピースの中に手を入れ、腹を促すような手つきで撫で回し、平

らな中にちよこんと自己主張する乳首を指で転がす。

「ううう、はう♥ はあ、はあ……うぐう……」

「苦しいか？」

「んんん、は、はい……あふ♥」

「なら、気を散らそうか？」

そうやって、月の下腹部に手を伸ばす。

「へうう♥ じ、刃さん、今は、今は、ダメですう……うぐう」

「ん？ 濡れているな、浣腸されて興奮したか？」

月のマンコを指先でまさぐりながら、意地悪な質問をする。

「ち、ちがいま……ああ♥ ちがいますう……はあ、はあ、はひ……

も、もう、厠に行かせてください……」

「ダメだ」

「そ、そんな……あ、あふ、んくう……」

望みを却下すると、少女は、悩ましげに眉をたわめる。

「んああっ……お、お願いします……厠に、厠にいかせてください……

あああっ♥ もれちゃいますう……んぐぐ……もう、限界なんです

……」

体を小刻みに震わせながら叫ぶ月を抱えて、浴室の隅に置かれていた桶の上へと導いた。

「こ、こんなところで……」

「みんな通ってきた道だ」

そうやって腹を押して腹圧をかける。

「あ、あ、ダメ、出ます……イ、イヤああああ♥ 刃さん、見ないでえ……」

どこか虚ろな顔で月が言った瞬間、可憐な少女のものとは信じられないほど下品な排泄音と月の悲鳴が浴室に響く。

もう一度浣腸して行い、すべて出し切った月にご褒美としてキスをする。すぐに月が下を伸ばして舌を絡ませ合い、そして、唾液を交換した。

「んん……ちゅ、ちゅっ♥ ちゅぶ……んんふう、ちゅぱ、んちゅっ♥」
たっぷりとディープキスを交わしてから月を降ろして桶を片付ける。

「ああ……へ、ヘンタイ……刃さんの、イジワルヘンタイい……はあ、はあ、はあ……んふう……」

そう言いながら月は、勃起しっぱなしのイチモツを熱っぽい目で見つめている。

「そう言う、月だって浣腸で喜ぶ、変態だろう?」

「へ、へうう♥」

尻を湯で流すと、月はぞくぞくと背中を震わせる。続いて濡れっぱなしのマンコに指を潜らせる。

「あっ……あうっ……あああ、あくうん♥」

マンコからたっぷりと愛液を指先で掬って、それをアナルに塗り込める。

「あああ……ああん……あひ♥ んうううん♥♥♥」

四つん這いの姿勢で、甘い声を上げる。入口が緩んできたところで、中指を、アナルに沈めていく。

「あぐぐぐぐつ、指が中にイ……はぐう♥」

「指は前から入れたらどう? 今日ほもっと大きなのが入るんだから、ならさないとな」

アナルをほぐしながら、イチモツを見せつけるように月の顔にさらす。

イチモツを見つめ、月は熱い息を吐く。月のマンコから期待の愛液が溢れ出て、それをローション代わりにして、指を増やしてさらに入念にアナルを愛撫する。

「ああうっ♥ んは……ああ、気持ちいいような、変な感じがあ……

あ、あはあん♥」

「そろそろよさそうだな」

月の後ろに回り込む。

「んはああ♥ も、もう、入れるんですか？ へうう、刃さんのが、お尻にくるんですね……あふう♥」

月がうっとりとした流し目を向けて誘うように、いや、尻を振って俺を誘う。

「あああ、刃さん……私のお尻に、入れてください……んふ、んふう……月のお尻の初めてを、はふ♥ 奪ってくださいあい♥」

俺は、イチモツにも愛液を塗りたくり、アナルに赤黒い亀頭を押し付けた。そして、小さな尻を左手で固定し、右手を肉棒に添えて、腰を前進させた。

「あつ、あ、あああ……かはつ、はい、入ってくる、入ってきてますう♥ うああああああ♥♥♥」

想像以上の衝撃だったのか、月はその大きな瞳を見開いて叫んだ。

「ま、待って、待ってください……お、おほおおお……裂けちゃやう、裂けちゃいますう♥」

待ったの声を無視して挿入を続ける。カリ首の部分が通過すると、その後は、意外なほどにスムーズだった。

「あああああ……入った、ぜんぶはいったああ♥ やつ、やあん♥ んあつ、あひい♥」

「ああ、全部入ったぞ」

月がアナルにある異物になれるのを待ってからゆっくりとピストンを始める。前とは違った締め付けが、鮮烈な快楽を紡ぎ出す。

「うあつ、あひ、はひああああ♥ す、すごい、すごいです♥ んあつ、あひつ、ひいひいひい♥♥♥」

「もう、感じてるんだな、月」

「あ、あはつ、はい、感じる、感じてます♥ うぐぐつ、あはあああつ♥ あひ、あひ、あああ……お、おほお♥ お尻、お尻すごい♥ うああああ……こ、こんなに気持ちいいなんてえ♥ は、はひあ、ああああ♥♥♥」

月の痴態に、俺は無意識のうちに動きを激しくしていた。

「ひぐう……へうつ、へうう♥ 刃さん、すごいっ、ああ、すごいっ

ますう♥」

「ク……尻の方が、反応が良いじゃないか、こつちの方が好きなんだろう?」

「んあああつ、あひ、あひい♥ わ、わかりません……でも、ホントにそんなふうになつちやいそうで……うああああ♥ お尻、気持ち良くて、へう♥ ここでするのすきになつちやいます♥♥♥ あひいいい♥」

月が、その小さな体を身悶えさせて絶叫する。直腸が痙攣を起こし始めて絶頂の気配を見せる。

「あいいいいいつ、いく、いくう♥ お尻い♥ ンああああ……んおとおとおとおお♥♥♥♥♥」

月が、アナルで絶頂に絶頂つたのを感じながら、動きを続ける。

「んああつ、そ、そんな、へうう♥ すごい、すごすぎましゅ♥ 刃さんのチンポ、お尻の中で、どんどんおつきくなつてえ♥」

腸液にまみれたチンポが、アナルに激しく叩きこみ、精を月の腸内に注ぎ込んだ。

「ひいいいい♥ イつちやう♥ ああああああ……イク、イク、イク、お尻マンコでイクうううううううううううううううううううううううううううううううう♥♥♥♥♥」

月は、さらなる高みへと舞い上がり、声を嗄らしかけながら叫び、白目を剥きながら、つぶれたカエルのような格好で、月は、浴室の床に腹這いになった。その尻穴から、大量の精液が溢れ出た。

こうして、淫欲に満ちた俺の休日は終わった。

十二話（なし／月&詠・白蓮&楓・星）

いつもと同じ、すがすがしい朝。

今日は珍しく、自分で起きられたなあ、昨日は仕事の日でひたすら判子押しをやらされて疲れていたから、早めに寝たのがよかったのかもしれない。

今、世界は、乱世へと突入したらしいけど、俺の生活はイイ女が増える以外の変化はなかった。

「へう、詠ちゃん、ご主人様、今日は自分で起きてるよ」

「それが普通なの。まったく、毎日こうだったら、ボクらの仕事も楽になるのに…」

ノックの音の後、メイド姿の月と詠が入ってきた。

「ご主人様、今日のご予定は、特には無いようですが、どうされますか？」

「ん、適当に過ぎすよ。それよりも、今日は、詠に後ろをお願いしようかな」

そう言って立ち上がると、心得たように詠が後ろへ月が前に回って跪いた。

「あぶつ、んぶぶつ、んじゅ、ちゅぶぶつ……んはあ……ちゅずずずつ♡」

月がいきなり根元までチンコを銜えこむ。生温かい気持ちよさが、チンコを包み込み、舌がうねうね動いて、俺のチンコをくすぐる。

「レロ、ぺちや……んちゅつ、ちゅぷ♡」
「ふあ…」

気持ちよさにとろけそうになる俺のケツ穴に詠の舌が這っていた。背筋がゾクゾクと震え、思わず溜め息がこぼれ落ちる。詠は、ケツ穴を舐めながら、ケツ穴と玉袋の間を指先でカリカリと擦る。むずむずとした。射精に向けての気持ち良さはまた違った気持ち良さが、弱火であぶられるようなじつくりとした気持ち良さを与える。その気持ち良さがこわばっていたケツ穴を緩めて舌が中へと侵入を許してくる。

「ひゅむ、ちゅぶぶ、んじゅつ……」ぷぷぷ

「おおお！」

月が喉まで使ってチンコを扱いて、合間合間で亀頭を舌で舐めまわす。

「じゅぶぶぶ、んじゅつ、んじゅじゅつ、じゅぶ……ちゅずずずずずつ」
あふれ出る先走りが月の小さな口にすすりあげられる。それに合わせるかのように、詠の指がグイグイと謎の快樂のツボを押して、ドリルのように舌をくねらせつつも優しくケツ穴を刺激する。

その刺激は、崖ギリギリのところ立つ人の背中を優しく押すような軽い衝撃だが、決定的な衝撃を俺に与えた。

「おふあああ!!」

月の口内に朝一番の精子を発射した。

「んツ、んぐ……んふふう……んンン……んくつ、んくつ、んくつ、んくつ♡」

喉奥に直接出した精子を月は慌てることなく、嚥下していく。その喉の動きが、尿道に残った分すら吸い出していく。

「ずいぶん出したみたいね♡」

「ふは……ご主人様、ごちそうさまでした♡」

二人に服を着せてもらい、部屋を出た。

飯を食ってふらふら歩いていると、訓練場についた。

無意識のうちに訓練場を見回して、白蓮を探す。

…いた！フル装備で、剣をふるっていた。その相手は、関平こと楓だった。

二人とも剣道部の幽霊部員だった俺でもわかる素晴らしい太刀筋、そして、彼女たちの動きに合わせて光る汗と、揺れるおっぱい……

「んく…」

思わず、唾を飲み込み、白蓮たちの訓練が終わるのを待つ。前に白蓮を訓練している途中で呼んですんげえ怒られたので、そこら辺は自重することにした。

しばらく待つと、手拭いで汗を拭きながら、更衣室の方へと歩いていくのが見えた。

急いで更衣室へと行くと、丁度白蓮と楓が部屋に入ろうとするところだった。

「白蓮！・楓！」

「御使い様」

「ん？ 北郷じゃないか……ってことは、あれか？」

「ああ！・頼むよ！」

「わかったよ」

「かしこまりました」

二人に促されて更衣室へと入る。白蓮は鎧を外し、服の胸元を開けて手でパタパタと風を送り込む。また、あの谷間に顔をうずめてたっぷり匂いを堪能したいなあ、とか思いながら眺めている。

背後でドアを閉める音と、鍵をかける音がして振り返ろうとした時、背後から何かを俺の顔に押し付けられていた。

「ほら、朝からずっと穿きっぱなしで、ムレムレな靴だぞ♡」

そう言われて、思わず白蓮の靴の匂いを吸いこむ。鉄と革の匂いの中に確かに、白蓮の汗と体の匂いを感じ、俺のチンコが即行で固くなる。

「私の匂いをちよつと嗅いただけでこんなになるなんて、どれだけ変態なんだよ♡」

白蓮が笑う。

「御使い様、見てください。訓練でいっぱい汗をかいて濡れたおっぱいですよ♡」

そう言って楓も胸のボタンを外し、あの快樂の扉を開いてペロリと舌舐めずりをする楓の仕草に思わず俺は興奮をしまいチンコがさらに高まってしまった。

興奮してビクンビクンと震える俺のチンコを楓はその豊満な胸で

包み込んだ。

「御使い様のオチンチンが私のおっぱいの中で、ビクンビクン震えていますよ♡」

「うあああ…」

楓が着衣パイズリでチンコに与える刺激で、腰砕けになって倒れそうになる俺を白蓮が後ろから支えてくれた。

楓が胸を動かすとその柔らかさと締め付けられるような感触で、一気に射精してしまいそうになってしまう。

「私の靴で鼻と口をふさがれながら、楓のおっぱいにオチンチン閉じ込められて、喜ぶなんて、変態さに磨きがかかったんじゃないか？

私は知っているんだぞ。北郷が女から責められるのが大好きな変態野郎だつてこと♡」

そんなことはない、つて言いたい。でも、なんでそんなこと知っているんだ!?

「どうして知っているのかわからないって顔だな？ お互いにどんなことをやっているか話しているからな。おまえが、みんなとどんなことしているか話しているからさ。」

お前が、愛紗の髪でオチンチンシコシコされているのも、桃香に裸で抱き着かれて悶えているのも、最近じゃ星の目を見たら、すぐに興奮してオチンチンが立つちゃうから、星の目が見れないってことも知っている」

俺のプライベート丸裸じゃないか！ でも、白蓮の匂いから逃げられない。

「御使い様、私のおっぱいは気持ちいいですか？ もつと締め付けちゃいますよ♡」

ただでさえ、締め付けの強い着衣パイズリしている楓は、左右から腕でおっぱいを抑え込んで乳圧を高めてきた。

そのきつすぎるギチギチした感触によって射精欲求が限界になった。

「ふぐづつづつづつ!!」

俺は楓の乳内に射精した。

力が完全に抜けて座り込む。顔に当てられていた白蓮の靴もチンコも楓のおっぱいから外れた。

座り込んで荒い呼吸をする俺を見下ろしながら、白蓮は、服の前を開けた。白いブラとそれに包まれた楓には劣るモノの、しっかりと自己主張するおっぱいが目に入った。

「ほおら、さつきお前が見てた私のおっぱいだぞ♡」

白蓮は膝立ちになって俺の頭を掴むとそのまま、胸に抱きしめた。顔にブラの肌触りとおっぱいの柔らかさ、そして、俺にとっての媚薬のお香ともいうべき、白蓮の甘い汗と体臭が混ざり合った匂いが俺の鼻に滑り込んで来る。

出し切った気がしたのに、俺のチンコは、一気に回復していく。

「御使い様ぁ♡ 御使い様の御出しになられたお汁でドロドロになつたおっぱい、きつときもちいいですよ♡」

そう言っただけで迫ってくる楓のおっぱいに思わず腰が引けた。だが、白蓮が俺のチンコを固定して入れるサポートをしたことでチンコは再び、楓のキツキツおっぱいの中に飲み込まれて、着衣パイズリが再開された。

さらに今回は、根元を掴んでいる白蓮の手が根元をシコシコとしごいてくる。

「フフ、凄い鼻息だな♡」

俺の出した精液が潤滑油のようになって、さつきまでとはまた違った強烈な快感が俺の体を襲う。

「おおおお!!」

「御使い様の大好きなおっぱいマンコにお出してください♡」

淫靡な音がおっぱいから発せられる。

その音だけで興奮のあまり射精してしまいそうだ。

楓の着衣パイズリによってチンコが、快樂の中に閉じ込められて、苛められていく。

落ち着こうとしても、息をするたびに白蓮の匂いを吸い込んで落ちて着く暇がない。

白蓮のおっぱいが俺の顔にぶつかる攻撃をして精神的に追い詰め

てきて、楓のおっぱいはいやらしく形を変えて、刺激を与え続けてチンコを物理的に追い詰めていく。

「こんなのはいかがでしょう?」

楓は、おっぱいを支えていた両手を頭の後ろに回して、おっぱいを突き出す姿勢を取ると、そのまま、身体を左右に振り始めた。その動きに合わせて、おっぱいが揺れて、チンコが左右からおっぱいに殴られる。

激しく振ってはいないから、痛くはないけど、柔らかくて気持ちよすぎる。

それに合わせて白蓮の手の動きが早くなっていく。

「ほら、私の匂いを嗅ぎながら、出してしまえ♡」

「どうぞ、私のおっぱいマンコに、中出ししてくださいませえ♡」

「も、もう…だめだあああ!!」

瞬間、特大の火花が散って射精した。

そのまま、俺の意識は、落ちていった。

意識がはつきりとした時には、すでに白蓮の姿はなく、身なりを整えられて更衣室に寝かされていた。

外を見るとすでに日が陰っていた。

しばらく更衣室で休み、ようやく動けるようになった俺は、外で夕飯を食ってから城に戻ると、星に出くわした。

「おや、主ではありませんか」

ニヤニヤしながら、こちらに近づいてくる星の眼から目が離せない。どうしても星の赤い瞳を見るだけでチンコが勃起してしまう。

「フッフ、主、こちらへ」

手をひかれながら、城の中を進み、中庭に出た。そのまま、備え付けられたベンチに座らされた。

曇っていて月明かりもない中庭は、真つ暗で普段とはまるで違っていた。

ベンチに腰掛けると、すぐに星にズボンをまさぐられてチンコを露出させられた。

チンコをゆるゆると撫でながら、星は耳元でいつもの言葉を口にする。

「さあ、私の眼を見なさい」

城からの僅かな光で間近にいる星の眼は何か見えたが、それ以外は見えない。これなら、いつものようにいじめられることはなさそうだ。

緩急をつけたり、握り方を変えたりして確実に射精へと近づけられていく。もう少しで射精できそうになった時、近くの草むらからガサツと音がした。

思わず、そちらを向いてから、ハツとなった。

「眼を外しましたね」

「ヒギイ！」

チンコの皮をわずかに痛み感じる程度に抓られた。

「まったく、主は、何度言えば、出来るようになるのですか」

「で、でも今のは…「言い訳しない！」ッ」

やれやれと首をふつてから、星が顔を近づけてきた。吐息が耳にかかる。

「想像してみてください。昼間のここを…」

「昼間の中庭…」

「ええ、城に用のある者が通ったり、文官が資料を持って歩いていたり、休憩をしている者がいたり、警備の兵が立っていたり……」

星の声で段々と、昼間の様子が、目に浮かんでくる。

「そんな中で、股間を露出した自分を…」

「ッ!!」

その瞬間、暗闇の中で見られていないという安心感がなくなり、羞恥心と禁忌を犯している背徳感がこみ上げてくる。

慌てだした俺を無視して星のテコキが再開された。

「せ、星、やっぱり部屋に戻ろう」

「ダメです。眼を放した罰です」

また、ガサツと音がした。

「ほ、ほら、誰か来ているのかもかもしれないじゃ「逃がしませんよ」
腰を浮かした俺を抑え込み、敏感なところをしごいてくる。」

「うあー!」

「声を上げると、本当に誰か来てしまうかもしれませんよ。だらしなく、おちんちんをさらしている主を目撃されてしまうかも…」

「ッ…」

声を殺そうにも、千変万化する星の巧みなテコキに耐えることなどできずに声が漏れる。音がする度に、誰か来たんじゃないかと、そちらを向いてしまい、罰と称して引つかかれたり、抓られる。色々な感情がごっちゃになってどうしていいのかわからなくなる。

「そろそろ限界の様子……さあ、私の眼を見ながら、イキなさい」

「うわああああ!!」

赤い瞳に魅入られて闇の中へと射精した。

「フフ、主の子種が、明日、ここを通る者たちに無自覚に踏みにじられて潰されていくのですね」

クスクスと笑う星の瞳を見つめながら、ソフトタッチのテコキに身をゆだねた。

十三話（音々音・恋／恋&音々音）

〈呂布Side〉

恋が周倉と会ったのは、虎牢関での戦いの時だった。目につくのを倒して進んでいると、周倉が現れた。恋の結構本気の一撃を受け止められて周倉の一撃は、恋を後ずらせた。

びっくりした。

恋の一撃を受けてすぐに反撃できる奴がいた。恋が本気を出したら、みんなすぐに死んじやうから我慢していたけど、周倉は、本気を出しても死なない。周倉も「久しぶりの本気だ」って言ってたから、きつと恋と同じだったんだ。

霞に言われたことも忘れて周倉との戦いを楽しんでいたら、突然、周倉の動きが悪くなつて、恋の攻撃を受けて倒れた。

血がいつぱい出て苦しそうにしながら、「すまない。こちらにも事情つてやつがあつてな」って言って倒れた。

もつと、いつぱい戦いたかつたのに：

その後、愛紗や鈴々たちがきてうやむやになった。

虎牢関を離れた後、しばらくして、また、周倉と戦った。いつぱい戦いたかつたけど、今度は恋が、おながが減つて動けなくなつた。

同じ所になつたけど、その時には、恋は、周倉の事よりもご主人様の事でいっぱいだった。

〈陳宮Side〉

最近、恋殿の元気がなくなっているのです。動物たちと遊んだり、ご飯を食べている時は、幸せそうですが、ふとした時に寂しそうにしているのです。

それもこれもあのチンコが、恋殿をないがしろにするからなので

す。凄く格好良くてドキドキしたけど、恋殿のさびしそうな姿を見ていたら、段々それよりも、イライラが募ってきたのです。

最初の内はあれだけ構っていたのに、おもちゃに飽きた子供かと言いたくなるのです！

「はあ…」

「どうしたのよ」

軍略の勉強を見てくれていた詠が心配そうにこつちを覗き込んできたのです。

言うべきかわわざるべきか考えたのですが、ねね一人では、良案が浮かばないので、助けを求めるところにするのです。

「…なるほどね。あいつにもっと、気にかけてほしいってことね」

「恋殿が、ですぞ。ねねはそのついで程度でいいのです」

「でも意外ね。あんたなら、あいつが恋に近寄らなくなって喜ぶもんだと思っただけ」

「最初はそうだったのですが、段々と元気がなくなっていく恋殿を見ていたら、そんなこと言ってられないのです」

「ふうん……一つだけ、方法があるけど、はつきり言って、大変だし、相当な覚悟が必要よ」

「恋殿の為なら、この陳宮、例え火の中水の中、なのです!!」

「あつそう、わかったわ。都合がいたら連絡するから大人しく待つてなさいよ」

持つべきモノは、やっぱり友なのです！

〈周倉Side〉

詠に呼ばれて何事かと思えば、呂布を手に入れるチャンスだとの事だ。で、その第一歩として陳宮を手に入れることになり、詠が場を整えてくれたのだが、朱里や月たちよりも小柄な陳宮とできるのかが不

安だったが、なんでも、陳宮は、すでに北郷と経験済みらしい。恋に流されていたしていたそうだ。

だったら、大丈夫かと思ひ、詠の策に乗ることにした。

が、まさか、詠の奴、媚薬まで用意しているとは思わなかったぞ。

「はあ、はあ……んふ、はふう♥」

詠に媚薬を盛られた陳宮が熱に浮かされながら、自分で真つ平らな胸と幼いマンコを弄り続けている。

「本当に大丈夫なのか？」

「ちゅぶちゅぶつ、ちゅぱ♥ ちゃんと、意識がしつかりしているうちに確認をとつたし、薬だつて、痛みを和らげるのに使うか、本人に選ばせたんだから、大丈夫よ」

その選ぶまでの会話は、まっとうな物だったのか誘導的なものだったのかが、不安なのだが、いずれにしても陳宮をこのままにしておくわけにもいかない。

詠にしゃぶられて、固くなったイチモツを陳宮のマンコに挿入していく。

「あぎいっ♥ 入ってくるのです♥ 周倉のがあ……んああああ、あぐうっ♥」

幼い膣内を押し広げられて一番奥へと突きいれる。

「ひううう♥」

「苦しくはないか？」

「へ、平気なのです……はうッ♥ それよりも、このうずきをお……」

俺はうなずいて、ゆつくりと動き始める。

「うぐぐつ、うあああ♥ あひい、う、動いてるう♥ 周倉のが、ズボズボって……あが、んああああ♥」

「本当に大丈夫か!？」

思わず、動きを止めて尋ねる。このサイズの子に本気を出すわけにはいかないから、心配だ。

「んぐ……く、苦しいのです……あ、あ、ああ♥ 苦しいのですが、き、気持ちイイのです♥♥♥」

そう叫んで、陳宮が、俺の体にしがみついた。俺は、狭い膣道の感

剥いた陳宮は、ビクツ、ビクツとその体を痙攣させた。

〈呂布Side〉

最近、ねねがとつても元気。何があつたのか、聞いてもまだ内緒つて言われたから、待つことにした。恋もご主人様と一緒にいれたら、ねねみたく元気になれるのかな？

〈音々音Side〉

刃と閨を共にしてから、大分経つたのです。

刃とのまぐわいはご主人と違って、とつても気持ちが良いのです。きつと、ご主人は、そうとうド下手なのです。あんなので、幸せを感じているなんて、恋殿がかわいそうなのです。刃と閨を共にすれば、きつと恋殿の眼も覚めるはずなのです。

それに、刃は、ご主人と仲良くなる方法も教えてくれるそうなのです。

まさに一石二鳥なのです!!

恋殿に提案すると、少し悩んでから、「周倉となら、してもいい」とのことなのです。

早速、刃に話を持っていかなくては!!

〈周倉Side〉

ねねから、呂布が興味を持ったから、何時にしようと思われてきたので、空いている日を伝えると、すごい勢いで、走って行ってしまった。色々、話しておきたいことがあったんだが……

やらないでほしいことはないと言うので、唇にキスをした。そして、そのまま、舌を差し入れる俺の舌を、呂布の舌が、遠慮がちに迎える。人見知りな呂布の舌を引っ張り出して、絡む。しばらくすると、人見知りも治ったようで積極的に舌を絡めてくるようになった。キスを止めて服を脱ぎ、お互い下着姿になった。剥き出しの肩を抱よせ、ブラに、手をかけた。

「あ……」

呂布の瞳に、戸惑いの色が浮かんだ。

「外すぞ」

「う、うん……」

ブラを外すと、たわわな褐色の胸が、やっと解放されたと揺れながら現れた。

「本当にいいんだな？」

呂布の身体を寝台に押し倒して、その上に覆いかぶさって、最終確認を行う。

「いい。周倉なら……」

頷いた呂布の声は、少し震えているような気がした。

右手で、呂布の胸にそっと触れる。

「あっ♥」

柔らかな感触を楽しみながら、緊張をほぐすように優しく、ゆつくりと揉んでいく。

「あうっ、ああ……あんっ♥」

呂布の控えめな喘ぎ声を心地よく感じながら、緩急をつけ、自己主張を始めた乳首を指先で転がす。

「あっ、んああっ♥ あ……はふっ、んん……あうっ♥」

「どうだ？ 痛くはないか？」

「ん♥ きもちイイ……周倉に触られたところが、ポカポカする……はふう♥」

呂布は、手で顔を隠しつつも、答えてくれた。

続いて胸をまさぐりながら、乳首を口に含んで舌先でくすぐる。

「あんっ♥」

呂布の体が跳ねる。反応を見ながら、二つの乳首を交互に舐める。

「あああん♥ あっ、あっ、やんっ♥ うくっ、んんんんっ♥♥」

呂布の切なそうな声が、俺を興奮させ、楽しませる。

唇を重ねると、今度はすぐに舌が出迎えてくれた。

「ちゅっ、ちゅぶっ♥ んっ、んんんん……んふうん♥」

甘えているような呂布の声を聞きながら、胸をまさぐっていた右手を、呂布の脚の間に差し入れようとしたが、

「あ……」

俺の手の動きを感じ取ったらしく、俺の手を太腿で挟んで封じてきた。

「……」

「……ん」

無言で見つめると、呂布は視線を外してゆつくりと、脚の力を緩めて手を解放した。

そのままその手で下着の布地の上から、マンコに触れる。

「んっ♥」

ぴくツと呂布の体が震える。指に湿りを感じながら、その部分を撫で、時折、ひっかくように爪を立てる。

「は、はくっ♥ うっ、んんく……あああ♥」

呂布とキスを繰り返しながら、マンコを刺激し続けると、呂布の頬が上気して瞳が潤んでいく。

「あ、あ……ちゅ、ちゅっ ♥ ああん ♥ れ、恋、なんか、変……あ、あつ、あんっ ♥」

呂布は、与えられる刺激に、どうしていいか分からない様子で身によじり、いきなり俺の股間に触れてきた。すでに下着の中で勃起しているチンポに、呂布の掌の感触を布越しに感じる。

「呂布……」

「周倉……んっ、んんっ ♥ はああっ ♥」

互いに、下着の上からまさぐり合う。俺が愛撫の手を止めて呂布の最後の砦を脱がそうとすると、呂布も真似るように、俺の下着を引つ張って脱がそうとする。互いに脱がし合って裸になり、体を重ねた。呂布の足の間に、腰を割り込ませる。

呂布は、恥ずかしそうにしながらも、脚を開いて迎え入れてくれた。イチモツの先端がマンコに触れると、ぴくり震えた。

「ひっ ♥」

「入れるぞ……」

呂布は、瞳を閉じて覚悟を決めたのか、肯いた。ゆつくりと、腰を進めていく。

「んあ、あう ♥ んく……あつ、ああああ ♥」

柔らかな感触が、俺のイチモツを包み込んでいく。そして、一番奥にぶつかった。

「あう、んっ ♥ あ、あふあ……あはああ ♥」

「大丈夫か？」

「へ、平気っ、あうっ ♥ キモチイイだけ……ああああん ♥」

薄く笑みを浮かべた呂布を見てから、腰を動かし始めた。呂布の中が、絡み付いてくる。これまでに経験したことのない、気持ち良さが襲う。ロリマンや武人マンとも違う、イチモツできつくて柔らかいゼリーをついているような気分だ。

「あつ、あつ、あううん ♥ あハア……あああつ ♥」

理性でブレーキをかけても段々と腰の動きが速くなっていくのを止められない。

「あ、あつ、あああ ♥ んあ、ああん ♥ あふ……もつと……もつと動

いると、いつもの庭ではなくて屋内に案内された。

「ご主人様、脱いで」

家が上がって開口一番、脱げと言われました。

「い、いや、そういうのはいいよ」

「ねねたちは、ある人に技を教わったのです。その技をお前に使ってやるのです」

おお！ ついに恋たちもスゴイ技を手に入れたのか！！

言われるがままに服を脱ぐ。そして、言われるがままに、膝をついて両手を床につけて四つん這いになった。何をするのかと、期待していると、恋が背後に回り込んだ。

「ぴちゅ……ちゅう……ちゅぱ♡」

「ひゃっ」

玉袋を舐められた。姿勢的にケツ穴まで丸見えにしている恥ずかしさとケツにチクチクとあたる恋の髪さえも段々と気持ちよくなってくる。

「んぐっ、んんん……こっちも♡」

「おほおおー」

勃起してぶらぶらと揺れていたチンコをまるで牛の乳しぼりをするかのように扱ってくる。

「何を、気持ち悪い声を出しているのですか」

どんつと、背中に衝撃があった。服の前を開けて肌を露出したねねが背中に乗っていた。そして背中に覆いかぶさると、脇から手を回して、俺の乳首を扱き始めた。

「うひゃあっ」

背中に感じるちっぱいの感触と子供特有の高い体温、みんなに攻められてすっかり敏感になってしまった乳首を小さな指で攻められる。そっちばかりを意識していられない。玉舐めとチンコ絞りも合わさってどこかを我慢しようとする、意識がおろそかになった場所が攻められる。

最終的な解放点は一つだけど、それまでの個所が……

「んくっ♡ちゅぶ……ちゅば……ちゅっ♡」

「あ、あ、ああー！」

「こつちも忘れちゃダメなのです♡ クリクリい♡」

「あひっ！ も、もう、出る!!」

チンコの下にはいつの間にか動物の食事を入れる椀が用意されていた。そこに向かって、俺は射精した。

びちゃびちゃと椀に精液が溜まる。

「はあはあ……二人とも、気持ち良かったよ。ねね、降りてくれ」

「何を言っているのですか？ まだまだ、これからなのですよ♡」

素晴らしいながら、乳首をつねられた。それだけで、萎えかけたチンコが勃起した。

「これがいっぱいになるまで、ダメ♡」

「そ、そんな!? おおおお!!」

再びの攻めに俺は絶叫した。

恋の唇と舌が袋に早く精を作れと促し、指でチンコの蛇口を開けるみたいしほり、捻られる。

敏感になった、チンコは、その刺激に耐えられずに再び射精した。

「はああああ!!」

「さつきよりも少ない。これじゃ、まだ足りない♡」

「んオオオオ!?!」

「騒いでないで、もっと出すのです♡」

「あひひひひひ!!」

〈恋Side〉

ご主人様とまた、仲良くなれた。

それに、刃と訓練場で本気で戦えるようになって楽しい。

寝台の上でも戦うけど、恋は弱くていつも負ける。ねねと一緒に戦っても勝てない。

今度、愛紗と一緒に戦おうと思う。

〈周倉Side〉

「ちゅむ、ちゅっ、ちゅぶ、んちゅっ♥」

「れる、れるる♥ んちゅ、ちゅむっ♥」

恋とねねが顔を並べて、俺のチンポをフェラチオしている。二人の唇が、亀頭をついばみ、舌が、裏筋を舐めあげている。

二人の唾液でてかるチンポはフル勃起した。

「ん……入れる♥」

恋は、チンポの上に腰を合わせに、徐々に飲み込んでいく。

「あああ……はふう♥」

根元まで入れて、恋は、満足げな溜め息をついた。

交渉する間もなく、とられてしまい、途方に暮れているねねを手招きすると、すぐに俺の顔に跨った。ロリマンに舌を差し込む。

「ん……んあああっ♥ あうっ♥」

「ねね、気持ちよさそう……恋も、あああん♥」

そう言いながら恋は、俺の腰に腰をこすりつけるように、動き出した。

「あ、あっ、ん♥ あふ……」

「ああ、あああん♥ あふ、あひい、ふひいいい……」

舌を動かすと、ねねが、抑えられた喘ぎを漏らす。

ねねは目の前に恋の動く度にぶるんと揺れる胸に目を奪われながら、快楽に身を任せている。

恋が、ゆるゆると腰を使いながら、ねねの小さな肩に手を置き、唇を奪った。

「んむっ、ちゅっ♥ ちゅっ、んちゅ♥ ん……んふう……」

恋がねねの唇をついばみ、舌に舌を絡ませる。

このままでは、忘れられてしまいそうな気がして、腰を突き上げ、マンコを吸い立てた。

「んふっ、あん、ああんっ♥ ふああ……あはあんっ♥」

「ああっ、やつ、やああ♥ あうっ、あはあっ♥」

二人の喘ぎ声を聞きながら、目の前のマンコを舐めしやぶり、イチモツをこすり上げる。

「ああんっ、あ、あうっ、うん、あはあ……恋殿、恋殿お♥ あん、ああんっ♥」

ねねが、恋の柔らかな体にすがりつき、快楽に身を震わせる。

「あん、ああんっ♥ 大丈夫、ここに……は、はふう♥」

そう言いながら恋は、愛しそうにねねの額や頬にキスする。

「恋殿のおっぱい……あむ、ちゅ、ちゅっ♥ ちゅぶ、ちゅぱ♥」

「あっ、ん、んふう……ねね、かわいい……あああっ♥♥」

そう言いながら、恋は、自分の乳首を吸うねねの乳首を指先で撫でる。

「あっ、あんっ、ああんっ♥ 恋殿、それはだめなのですよ♥ あ

ひんっ♥」

ねねの愛液がさらに溢れ、恋の愛液が腰の動きをさらに滑らかにする。

「ああっ、あく……んっ、ううんっ♥ 刃の、まだ大きくなった……

はあんっ♥」

ねねと抱きしめ、体をいやらしくクネらせて恋が言う。

「あっあっあっあっ♥ すごいつ♥ あああん、ああん……あくうっ」

恋が、腰の動きを激しくする。膣が優しく俺のを扱き上げる。

そして、自分を忘れるなど、ねねが、マンコを俺に押し付ける。

「んっ、あううっ♥ あああん……はうんっ♥」

ねねの小さな尻を両手で固定して、クリトリスを激しく吸いたてた。

「あひいいいい♥ あああ、ダメ、ダメなのです♥ あ、ああああ

ああんっ♥♥♥」

「ダメじゃない。ねね、気持ちよかったら、そう言う……んふ♥」

恋が、ダメだししながら、ねねの胸をむにむにとこね回す。

「んああ♥ あ、あん、あんっ、あああん♥ そ、そんな……あひっ♥

恋殿お……ひいひいんっ」

「ねね……ああ♥ はあん……ちゃんと言う……」

「んあああつ♥ 刃、きもちイイのですう……も、もつと……もつとしいのです♥ あいひ♥」

希望に答えて、クリトリスを舌で弾き、甘噛みする。

「やつ、やああああああ♥♥♥♥♥」

噴出した愛液が俺の顔を濡らす。

喜んでくれたのならば、もつとしようと、クリトリスから尻穴までを余すところなく舌を這わせた。

「あああつ♥ お、お尻があ……あうっ、あひっ♥ ひいひいひい♥♥

」

「ああん……刃、恋も忘れないで、あふあ♥」

突き上げて忘れていないことを示してやる。

「ひっ、ひいひいんっ♥ イ、イク……いつちやのですううううう♥」

ねねの体が痙攣する。最後のトドメにクリトリスの皮を剥き、そこを強く吸った。

「ああああああ……イ、イク、イクうううううううう♥♥♥♥♥

」

「あっ、あああんっ♥ れ、恋も……いつちやうううううううううううううううううううう♥♥♥♥♥」

恋が激しく上下に動き、俺をきつく搾り上げる。

「っー」

限界を振りきり、恋の中に射精した。

「ああああつ……中に、出てるう……んあああああああああああああああああ♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

恋は、背中を反らして絶頂に達した。

「あああ……」

うっとりしたような溜め息が、どちらだったのかわからない。

三人で、性交の疲れにまどろんでいた。

十四話（斗詩／斗詩）

〈周倉Side〉

「周倉さん、麗羽さんたちを可及的速やかに引き入れましょう」

朱里が鬼気迫った顔で詰め寄ってきた。

話題に上がっているのは、袁紹たちのことだ。白蓮を破り、調子に乗ったのもつかの間、曹操によって叩きつぶされ、俺たちのところに転がり込んできたのだが、高貴な身分だった頃が忘れられないらしく、散財癖がひどい。

しかも、本人たちは、さほど金を持っているわけでもなく、その請求を平気な顔でこちらに回してくるのだ。文醜と顔良の二人がその分を賄う為にただ同然で賊の討伐に出てくれたりするも、袁紹の散財の速さには追い付かない。

ついでにいうと彼女の散財がひどくなったのは、北郷が原因だと、俺たちは見ている。

ここに転がり込んできた当初に北郷の御手つきになったけど、さほど経たずして北郷は彼女を閨に呼ばなくなり、北郷に構ってもらえない鬱憤を散財で晴らしているようだ。

すぐに返品をしたりしているが、消耗品はさすがに返品できない為、彼女一人でウチのただでさえギリギリの金が、消費されていく。

そこで、俺が彼女たちを堕して、言うことを聞かせてほしいということになった。

さて、どうするか…

愛紗たちのようにセックスを対価に北郷と仲良くなる方法を教えるというパターン…：超上から目線の袁紹は、「教えてもらう」を良しとしない。彼女の場合は「教えさせてやる」なのだ。その為、教えてもらう代わりにセックスをするなど、彼女が納得するはずがない。

次に、星のように拉致って調教というパターン…：彼女の側近である文醜と顔良はなんだかんだ言って優秀だし、常に共にいる為、袁紹を拉致った後が大変だ。最悪、血を見ることになりかねない。

先ほどとは逆パターンの文醜と顔良を先に落とすパターン…：で

きなくはないだろうけど、二人一緒だとリスクが高いし、先ほども上げたように隙が少ない為、失敗する確率がとても高い。

さて、どうしたものか……

しばし考えてから、思いついた。能力頼りでいくとしよう。

「あ、刃さん、こんにちは」

「斗詩、賊の討伐、お疲れさま」

「今回は小規模だったから、全然余裕でした」

うれしそうに小走りで駆け寄ってきた斗詩と少し話をする。

「あ、刃のあんちゃん！」

話していると突然、横から衝撃が来た。俺じゃ無かったら、吹っ飛んでいたと思う。猪々子が跳びかかってきたようだ。グリグリと額を擦りつける猪々子の頭を撫でてやる。

「もお、文ちゃんがすみません」

「いや、大丈夫だ。猪々子も討伐の任、お疲れ様」

「へへ、あの程度じゃ、あたいは疲れないぜ！」

ニカツと元気な笑みを浮かべるをもう一度グリグリと撫でてやる。

「猪々子、斗詩、どこですか?」

訓練場へ行かなければと二人に別れを告げてしばらく歩いていると、今度は、麗羽が姿を現した。

「あら? 刃さんじゃありませんの」

「麗羽殿、お探しの二人ならば、軍師殿たちに今回の任の報告へ行かれ

ましたよ」

「そうですの…」

「仕事なので、厄介事に巻き込まれてはまずいので、長居は無用とさっさと離れる。」

さて、実はまだ、俺は三人と性交をしていない。

でも、中々、仲良くなりました。

マジカルチンポの効果である。精液による好感度アップを使った。彼女らが、食事をする際に、こっそりと混ぜて摂取させた。存在感が薄く忍者のまねごとをしてくれた地味組こと白蓮&楓がめっちゃ頼りになった。

後は、城や道で会うたびに会話を交わして行き、真名を呼べるほどの仲となった。朱里には可及的速やかにと言われているけど、今回に限っては、長期戦でも仕方がないと思ってほしい。

〈斗詩Side〉

夜、私は刃さんの部屋に来た。

今日は、お風呂の日だったから、しっかりと洗ったし、新しい大人っぽい下着も付けた…

ここに来るまでに覚悟を決めたはずなのに、いざ、部屋の前まで来て覚悟が鈍ってしまう。戦いに敗れて流れついたこの地で私は、ご主人様と出会い、閨を共にした。でも、それっきり、ご主人様は私を呼ぶことはなくなった。私は何か失礼をしてしまったのだろうか？

そんな不安を感じていた時、声をかけてくれたのが、刃さんだった。他愛もない話をしたり、ただ挨拶をしたり、時々、仕事のお手伝いをすると、「ありがとう」と笑顔を向けてくれた。普段、狼や虎等の野生の獣を思わせる刃さんが、向けてくれた笑顔が、私の不安を取り除いていつてくれた。

気がついたら、ご主人様よりも気になっていた。

勇気を出して、のつくというご主人様が広めた習慣を行おうとした時、突然、扉が開いて刃さんが現れた。

「ずっと、部屋の前にいる気配を感じるなと思ったら、斗詩だったのか」

そのまま、部屋に招き入れられて、促されるまま、椅子に座った。

「あ、あの、えっと…」

勇気を出さなきゃ！ そう思って、立って刃さんの前に立とうとして、足がもつれて刃さんの胸に倒れ込んでしまった。

「あ……す、好きです！」

なんで、私はこんな頃合いで言ってしまったんだろう……

後悔が、頭の中で何度も繰り返してきた、乙女な展開が……

思わず泣きそうになった私を刃さんは抱きしめてくれた。

「ありがとう」

そう言って、口づけされた。

私たちは全裸で寝台の上にあります。

刃さんの大きな手で私の左右の乳房を優しくさわる。

「ああん♥ あ、あああっ♥」

ご主人様の時の、何倍も気持ちいい刃さんの指が、堅くなった私の乳首を、クリクリと弄ぶ。抑えようとしても声が漏れてしまう。

「あ、あふ♥ あん、ああん……はふ、ひゃん、あああん♥」

恥ずかしい声を上げ続ける私の乳首を、刃さんは口に含んだ。乳首が、唾液に濡れながら、ますます堅く尖っていく。どうしようもないほどの快感が体の奥から溢れ、アソコから漏れ出ちゃう。

「感じてくれるのか？」

刃さんの指が私のアソコを、グリグリをまさぐる。

「あつ、あつ、ああん……ひゃう♥」

「斗詩は敏感なんだな」

楽しそうに言う刃さんの言葉に反論することもできず、私は、淫らかな声を上げる。

「足を開いて」

優しく接吻されると、恥ずかしいという気持ちよりも、刃さんの言葉に従いたいという気持ちが大きくなって、言われるがままに足を開く。刃さんの舌が胸からゆっくりと降りて来る。

乳首から胸の谷間を通って、おへそを通過して、あとちよつとで：

「あああ……あ♥ あつ、そんなあ……」

アソコに行かずに内股へ行ってしまう、思わず、声を出してしまった。刃さんは、そんな私を見てクスリと笑うと、突然、アソコを吸いたてた。

「あひいいん♥♥♥」

「もう、準備万端のようだな」

刃さんのご主人様よりも大きくて太いアレが私のアソコに添えられ、裏側を擦り付けながら言う。あんなものが中に入ったら、私はどうなっちゃうんだろう♥

「ハア、ハア……い、入れてください……わ、私、おかしくなりそうです……」

「わかった、入れるぞっ」

刃さんが腰を突き出した。

「おおおっ♥ あ、うあああ……はい、入ってくるう……お、おつきいッ♥ あつ、あつ、あひいっ、さ、裂けちゃうう……ああああつ、あひ、あひああああ♥♥♥」

ズンツと一番奥を先端で突かれ、私は、そのまま軽くイッちやった。

刃さんは、そんな私に構うことなく、腰を繰り出してきた。

「んあつ♥ あつ、あああつ、あぐぐ……はふ、あひいい♥ ああああ……す、すごいいい♥」

太いアレでアソコを蹂躪され、私は叫び声を上げてしまう。

「馴染んだようだな……」

「あうううっ、ひっ、あひいっ♥ よ、よくわかりませ……あっ、ああっ♥ コスれるうっ♥ あああっ、うっ、うああああっ♥」

激しい快感が体の中で次々弾ける。

刃さんが、私の腰を抱え上げ、抽送をますます激した。

「んうっ♥ うっああああ♥ おああああ……ダ、ダメえっ、あっ、

ああン♥ これ、気持ち良すぎるウ♥ あひい、ひいひいン♥♥♥」

「クっ、そろそろ、出るぞっ」

「きて、あふっ、あああ……きてください♥ ああん、あはあん……私

も、もう……ああああん♥」

その瞬間、熱い波が大量に私の膣内に溢れた。

「うあっ、うああっ♥♥♥ イキますっ♥ あひ♥ ヒイイイ……イ

ク、イク、イクっ♥ あああ……あああっ、イクううううううう

ううううううう♥♥♥♥♥♥♥♥」

灼熱の奔流が体内を満たしていくのを感じながら、私は、高みへと

舞い上がり、一気に絶頂へと昇り詰めた。

「ハア、ハア、ハア、ハア……あああ……き、気持ちよかったです……

あふう♥」

刃さんは、何も言わずに、ギュッと、抱きしめてくれました。温か

さと、気持ちの良さの余韻に浸りながら、私は、眠りについた。

〈北郷Side〉

最近、麗羽たちが仲間になった。

三人としてみたけど、正直、今一だった。

高飛車で一々うざったい麗羽。

その場の勢いで突き進んで、面倒臭い猪々子。

斗詩は一番まともだったけど、ぽっちゃり系は趣味じゃ無い。

ってことで、一度やって、もう良いやって思った。

今日は、誰に頼もうかなあ、と考えながら、歩いていると、曲がり角で誰かにぶつかった。

「キヤツ」

「うわっ」

相手を見ると、書類が入った籠を大量に抱えた斗詩だった。この量じゃ前なんて見えなかっただろうなあ。

ぶつかった俺も悪かっただろうし、拾うのを手伝って籠を持つのも手伝うことにした（斗詩：俺Ⅱ7：3）。

「ご主人様、ありがとうございます。とても助かりました」

「いや、この程度、どうってことないよ」

丁度いい暇つぶしになったしなあ。

荷物を置いて戻ろうとしたら、後ろから抱きつかれた。背中に当たるおっぱいが気持ちいいけど、斗詩ってあんまり、好みじゃないんだよなあ。

やんわり断ろうとしたら、そのまま、引き倒された。

「斗詩、何をするんだ!？」

「ちよっと、”オレイ”をしようと思ってます」

そう言って、ニツコリ笑った斗詩は、俺のズボンとパンツを下ろしてから、近くにあった椅子に座って、靴を脱ぐと、そのムチツとした脚の先で玉袋を擦り始めたのだった。

「な、何すんだ」

「だから、オレイですよ。お・れ・い♡」

斗詩は足の甲で玉袋を転がして、やわやわと弄ぶ。鈍い刺激で段々と、勃起していく。それを、足の親指と人差し指で亀頭の先を挟んだ。「敏感なんですね、先っぽ……ほらほら♡」

親指の腹で、先端を撫でる。

「く、ふあああ……」

声が抑えられない。気持ち良くて、払いのけようという意思も浮かんでこない。

斗詩はカリ首を掴んで回すように撫でる。

そんな足技に、俺は奥からどくどくと絶頂が、こみ上げてくる。

斗詩の足は容赦なく俺を攻め立てていく。竿の部分足裏で撫でていたと思ったら、再び袋を弄ぶ。でも、どれも決定的な刺激にならず、もどかしさと射精への欲求だけが蓄積されていく。

「どうしたんですか、ご主人様。自分から腰を浮かせて、私の足におちんちんを擦り付けて♡」

そんなにもどかしいですか？ 出したいですか？」

巧みな足使いに加えて、嘲笑するような言葉まで快感になっていた。

見下すように顎に手を当てて、片足は俺の弱点を刺激し続けたまま、じつと俺を見つめる。

短いスカートのすそが僅かにめくれてパンツが見えそうで見えな
い。

斗詩は反り返ったチンコの裏筋を足裏全体でなぞる。

「あうううう……」

「あら？ ご主人様、ここが気になります？」

足を少し広げ、スカートをめくって青いパンツが見えた。その先にあるモノを想像してチンコが膨れ上がる。

「切ないお顔……出したくてしたくて、たまらないんですよね♡」
不意に、斗詩が足を止めた。

「ッ！」

「……どうしたんですか？ もしかして、このまま足でされたかったですか？」

「……」

斗詩の足がチンコの上に添えられたまま、動かない。

射精したくてたまらない。でも、それを口にするのは……

今まで、いろんなことをされてきたけど、こういう風に見下された状態は初めてで、望みを口にするには、俺の中の大事な何かを失うような気がした。

「出したいんですしたら、そう言ってください」

斗詩はニツコリと笑って返答を促すように、軽くチンコを踏み込

む。

その軽い刺激だけで、俺の中にあつた戸惑いはなくなり、快樂への欲望が支配した。

「射精させてくれ！ 斗詩の、足で！」

「言えば、口とか手とか、アソコとかあつたのに……足でなんて、ご主人様の、へえん、たあい♡」

斗詩は侮蔑入り混じつた視線で俺を見下しながら、チンコにあてていた足を強めに踏み込んだ。

「うおおっ」

俺の口から歓喜の悲鳴が漏れた。

足裏で柔らかく、しかし徐々に強く踏み込んで、斗詩は俺を絶頂へと導いていく。

射精への期待に震えるチンコを、巧みに強弱を付け、容易にイかせてくれない。

抑え切れない声が漏れる。

「あああつ、で、出るっ!!」

斗詩の足が強く踏み込まれた瞬間、俺はチンコが爆発した。

「私のオレイ、満足してただけましたか？ っご主人様♡」

射精できた喜びで朦朧としている俺を見降ろしながら、ほほ笑むのが見えた。

〈斗詩Side〉

刃さんとの夢のような一夜を過ごした翌日、私は恋さんに捕まり、謁見の間に引きずられた。そして、文ちゃんと麗羽さま以外のみなさんに囲まれていた。

物凄く怖かったです!!

無言の圧力が半端なかつたです!!

ここに集まられている全員が刃さんを愛していて身体を重ねていることと、ご主人様の性処理の話が聞かされた。

そして、教えられた技を持ってご主人様の性処理を行った。

それから、時々、ご主人様が私を手伝ってくれるようになった。完全に、“オレイ”目当てですね。

まあ、麗羽さまや文ちゃんの相手で溜まったモノを吐き出すのにちよūdいかなって最近は思います。

十五話（猪々子・斗詩／猪々子）

〈周倉Side〉

最初に限界を迎えて俺の下に来たのは、一番我慢強そうな斗詩だった。ウチの女性の中では、珍しいぽっちゃり系（桃香は準ぽっちゃりで本人は、これ以上そっちに転ばないように努力しているようだ）で抱き心地もいい。

「んあああああつ♥ あつ、あうううう……コ、コスれる♥ ナカが、ナカがこすれてるの♥ あああん、イク、イク、イクつ、イクう、イクううううううううううううううううううううううううううう♥♥♥♥♥」

必死にしがみついて絶叫する斗詩の中に射精した。

とろけた瞳でこちらを見てくる斗詩を抱きしめる。

「良く頑張ったな」

「はひい……」

斗詩のおかげで麗羽の散財が若干減った。数字で表すと絶頂期を100%とすると85%位になった。

今日は、そのご褒美に一日を斗詩と過ごした。ヤル以外にも散歩をしたり、一緒に料理をしたりと、色々した。

散歩の途中、猪々子に会い、適当にごまかして置いたけど、納得できないうって感じの顔をしていた。

実際に、後を付けられたので、出来るだけ自然な感じに撒いたけどな。

さて、これがどう転がるか、楽しみだ。

「刃さん、お芝居の悪役の様な顔していますよ」

「もとから、こんな顔だ」

〈猪々子Side〉

この間、斗詩が刃のあんちゃんと楽しそうに歩いているのを見た。二人とも、ついそこで会って…なんて言っていたけど、あれは、絶対にウソだ。あたいの女のカンがそう言ってる。

あれを見てから、あたいの中で何かもやもやしてしようがない。斗詩にずるいつて思ってる。どうしちまったんだろう、あたいは……

ずるいつて思うなら、斗詩と一緒にいた刃のあんちゃんのはずだろ？

あたい、バカだから、何も思い浮かばなくて、仕方なく、星に聞いてみた。

「……それは猪々子、周倉に惚れているから、ではないか？」

「は？」

「惚れた男が自分以外の女子と仲良くしているのを見てそう感じたのだろう？ フッフ、猪々子も恋する乙女だったとは、可愛いではないか」

「あたい……刃のあんちゃんに惚れてたのか？」

「自覚がなかったのか？」

「……これは、敵に塩を送ってしまったか？」

なんか、星がぼそぼそ言っていたけど、そんな事よりも、あたいが刃のあんちゃんに惚れてたことの方がびっくりだ。

確かに、刃のあんちゃんには、賭け事で大破算しかけた時に何度も助けてもらったし、ご飯をおごってもらったり、会った時に頭を撫でてくれたり……

「猪々子……」

「なんだよ。今、あたいは、考えごととしてんだけど」

「部屋に戻って鏡の前であやつの、刃の事を考えてみるといい。そうすれば、その考え事の答えはすぐに出るだろう」

言われた通りに帰って鏡の前に立って刃のあんちゃんの事を考えてみた。

「ッ!？」

鏡に映っているの、誰だ？

あ、あたぃ、こんな顔できたんだ……

……自分の気持ちがあつた以上、今までどおりじゃダメだよな。
ヨシ！ 女は度胸つていうくらいだ！ ウジウジ悩んでんのは、あ
たいらしくないよな!!

あたいは、すぐに刃のあんちゃんの部屋に突撃した。

「あんちゃん、いるか！」

あんちゃんは、難しい顔をして紙を見ていた。

「ん？ どうした？ 猪々子」

あたいに気がついたあんちゃんが顔を上げた。

「あ、うん。ちよつと……」

「どうした？」

あんちゃんがあたぃの顔を覗き込んできた。

ええい！ 女は度胸だ！

あんちゃんの襟を掴んで、ちゆうした。

「あ、あたぃ、刃のあんちゃんが好きみたいだ。いつからそうなったかは、わかんないけど、あんちゃんが好きだ！」

あんちゃんは、驚いた顔をしてから、笑つていつもみたいに頭を撫でてくれた。

あんちゃんがあたぃの体を片腕で抱きすくめて、反対の手を太腿の間に差し込もうとする。あたぃが太腿を閉じるけど、脚と脚の間に手が食い込んでいく。

「猪々子」

「んっ」

あんちゃんの方からちゆうしてきた。あんちゃんからちゆうして

くれたことがうれしくて体から力が抜ける。

「んっ、んんんっ♥ん、んちゅ、ちゅぱ♥」

あんちゃんの舌があたいの舌に絡みついてくる。

あんちゃんはちゅうしながら、緩んだ足の間で手を入れて、下着の上からアソコを触れる。

「濡れて来てるぞ」

アソコを触っていたあんちゃんの指が抜かれて見える所に出てきた。

「そ、そんな、わけないだろ……」

思わず、違うって言っちゃったけど、あそこを触っていた指は確かに濡れていた。

「なら、ちゃんと濡らさないとな」

あんちゃんがあたいのアソコを、下着の上から舐めた。

「あっ、あああ……ダメ♥ あんちゃん、そこは汚いからダメだつてばあ……ひやうう♥」

あんちゃんに下着を脱がされてあたいのアソコに舌が直接当たった。下着越しよりも遥かに気持ちいい。

「やあん♥ あうツ はうう、あふん♥ ンツ、くうううん♥」

一生懸命声を抑えようとするけど、我慢できない。

「んうううツ、ダ、ダメだつて……ダメだつていつてるのにい♥
ンツ、んあツ♥ あッ、あひいいい……はうううツ♥」

あんちゃんの舌が中に入ってきてグネグネ動いたり、助平な音をたてて秘唇の吸ったりする。さらに、舌のさきつぽでお豆さんを攻撃してくる。

「あああツ♥ あッ、ひやうう……あ、あああん♥ あ、あたい……はひッ、ひいいいいいいん♥ なんかくるツ、なんかきちやう……あああ♥ あッ、あッ、あッ、あああああああ♥♥♥♥♥」

眼の奥がバチバチして、頭の中が真っ白になった。

「ああ……あ、あはあ♥」

あたいは、ぐったりと寝台の上に倒れた。

「イっただみいだな」

「いった？」

「キモチイイの、天辺まで上り詰めることだ」

「あたい、今、初めてイッた」

「そうか、初めてか、うれしいな」

あんちゃんはまたあたいにちゅうしてから、上の服を脱がせてきた。

「あたいのおっぱい小さいから、見ても、楽しくないだろ」

麗羽さまとかのをちよつとでもいいからわけてほしいって初めて思った。

「いや、そんなこと無い」

でも、あんちゃんは、首を振って否定してくれた。それから、優しくあたいのおっぱいを揉んで、乳首にちゅうした。

「あうっ、あん♥ あはああ……き、気持ちいい……オツパイ、イイ……あつ、あひゆ、ふうん♥」

斗詩や麗羽さまに比べたら、完敗なあたいのおっぱいを愛してくれるのがたまらなくうれしかった。

「あ、ああッ♥ ひああああ♥ ひゃん……ああん♥」

あんちゃんはおっぱいから手を放した。もつと触ってほしかった。そう思っであんちゃんを見ると、あんちゃんは服を脱いでいた。

あんちゃんのおんちゃんは、とつても大きくなっていた。あたいで大きくなったと思うと、すんごくうれしい気持ちになった。

あんちゃんが、あたいの両膝に手を置き、反り返ったあんちゃんを、あたいの割れ目に擦り付けた。ぴりぴりとした気持ち良さが、あふれる。

「あ、あう……はひ、あはん♥」

あたいの腰が勝手に上下に動いた。入口がグリグリされて気持ちいい。

入れられたら、あたい、どうなっちゃうんだろう？

「あ、あんちゃん、早く、はやく入れてくれ……あたい、気がくるっちゃいそうだよお♥」

「猪々子、行くぞ」

「き、ひやううッ♥」

来てって言うよりも速く、ずんつて一気に奥まであんちゃんが捻じ込まれ、視界が真っ白になった。

「あッ、お、おほおおおおおおお……い、い、イク……イク……突っ込まれただけで、あ、あたiiiiいっ、イツちやっただああああああああああああ♥♥♥♥♥♥」

さつきよりもすごいバチバチが起こった。さつきよりもすごいっちやっただ……

あんちゃんが腰を動かし始めた。

「ひッ♥ あッ、あああ……あひ、あひiiii♥ あッ、あッ、すごいッ♥ あんちゃん、すごいiiii♥♥♥」

あんちゃんが動く度に火花が散ってパチパチいつてる。アニキとした時は、こんな風にならなかったにいい。

「大丈夫か、猪々子?」

「あ、だ、ダメ♥ あああん♥ あっ、ふああん♥ 気持ちよすぎてダメえ♥ あああああ♥ ああッ、あひん♥」

一番奥を太鼓みたいにドンドンつて叩かれて、腹から身体全部に気持ちいいのが響いてく。

「あああッ……い、いいッ♥ あっ、あうん♥ あう……くひい……あ、あふん、はふあああああ♥♥♥♥」

「猪々子、そろそろ、出るぞ」

「出る? あああ♥ あんちゃんも、イキそうなのかつ、あひっ♥ あは、あはあ、んははあ♥ イッて、あたいでイッてえ♥」

あんちゃんの動きがもつとすごくなって、あたいは、あんちゃんの体に手と足で必死にしがみついた。

「イクぞ」

「おおああッ♥ あッ、あはああああ♥ イク♥ イクッ♥ イックう♥ いっちやうううううう♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

あんちゃんから煮えたぎった熱湯みたいな熱いのがあたいのの中にあふれて来て、今までで、一番すごいバチバチが頭に炸裂した。

「熱いッ♥ あっiiiiiiii♥♥♥♥♥♥ い、いい、ひやうううううう

「おひいいいいいいっ!!」

上半身をよじって逃げようとしても猪々子の足は許してくれず、強烈すぎる振動の刺激で俺のチンコを滅茶苦茶に刺激しまくる。

耐える間もなく、強制的に蛇口を開けられて、精液を吐き出させられたような、そんな射精だった。

終わった。そう思った俺のチンコの先端を足指で素早く擦ってきた。

「あぎいいいいいいっ!!」

強烈な刺激に襲われる。いったばかりで敏感なのに、猪々子は容赦なく素早くチンコをブルブルと責め立ててくる。

「うわあ、凄い気持ちいいみたいだな……へえ、そっかあ、アニキは、こんな風に踏まれても気持ちよくなっちゃう変態なんだあ。もうこれじゃ、オシオキになんないけど、いいや、このまま続けてやるよ。」

うりうりいつ、おらおら♡」

猪々子の足が激しく擦れる音がどんどん早くなっていく。

猪々子の足の動きがさらに激しくなった。

「アニキイ、ちよつとは我慢しようとしてみなよ。無理だと思うけど

さあ♡」

「あっ！ あああああっ!!」

「って聞いてないな、これは、はいぴゅっぴゅ♡」

我慢なんてできなかった。俺は叫び声を上げながらまたしても猪々子の電気アンマでイッてしまった。

猪々子は、そんな俺を笑いながらイッた後も俺のチンコを足指で弄ぶ。

「おりやおりやおりやおりやおり♡」

「う、うあああああああ」

チンコの根元に凄い振動が、ガガガガガガって振動で強制的に勃起させられた。

「アニキ、オシオキなのに大きくするなよ♡ しょうがないなあ、じゃ

あ、こっちだ♡」

足が離れたかと思うと、今度は、袋を持ちあげるように足が添えら

れて再び、電気アンマが!!

「ひ、ひあああああ」

袋におくられる振動が精子をチンコへと送り出しているみたいだ。それと、あの、いつもと違う感じの快感が、俺に襲いかかる。

わからない、わからないけど、ただひたすらにキモチイイ、なんか、開けちゃヤバイ気がしてならないけど、キモチイイ!

「どこをやっても、ちんちんがよろこぶんじゃ、オシオキにならないじゃないか」

そう言われて、チンコから、とんでもない量の先走りが溢れている事に今更気付いた。

それくらい、猪々子の電気アンマは凄かった。

猪々子の足が再び、チンコへと移った。あのままされていたら、どうなっていたんだろう?

怖いけど、されてもみたい気がした。

さつきは根元ばかりされたけど、今度は、全体が振動に飲み込まれた。

「おあああああ!!」

「オラオラオラオラ♡」

我慢することもできないまま、射精させられた。でも、振動は、止まる気配がない。

「出た、出たから止めてくれえええ」

「何言ってるんだよ。最初は、イジメてオシオキしようと思ったけど、それじゃ、アニキにはご褒美みたいだから、チンチンから悪いもんを全部出してやる♡」

「いひひひひひひひひ!!」

意識が戻った時には、俺の精子で汚れた床とズボンとパンツ、そし

て、生まれたての小鹿みたいになっている俺がいた。
猪々子（悪魔）は去ったようだ。

〈猪々子Side〉

刃のあんちゃんとした次の日に斗詩にそのことを話したら、すごい力で腕を掴まれて麗羽さま以外がいる所につれていかれた。

で、色々難しい話をされたけど、良くわかんなかった。

最近、アニキがあたいを見ると逃げるようになった。でも、時々、物欲しそうにしている時があるから、そう言う時は、相手をしてる。

段々、叫ぶアニキを見るのが楽しくなってきた。

十六話（麗羽／麗羽）

〈周倉Side〉

朱里がまだ麗羽を止められないのかと、睨んでくる。

でも、猪々子もこつち側に来てくれたおかげで、85%から60%まで下がったんだし、もう少し待ってほしいと、頼んでいる。

そして、問題となっている麗羽だが、最近、俺を避けている感がある。

城の通路で見かけても、こちらに気が付くと、慌てて逃げたり、猪々子や斗詩の陰に隠れて極力、俺の前に立たないようにしているようだ。

不審に思い、斗詩に聞いてみたところ、俺に会うのが恥ずかしいらしい。

猪々子が、夜這をかけてはどうだと提案したそうだが、そんなはしたない真似はできないとキレたらしい。

呼び出して告白してみてもと斗詩が提案するが、これもそんな恥ずかしい真似できないと怒ったそうだ。

では、どうするのかというと、俺に告白させるとのことだが、俺の記憶にある限り、その為の行動があつた覚えはまるでない。

「手っ取り早く、あんちゃんが告白すりゃいいんじゃないん？」

「色々と先の事を考えると、麗羽殿からしてもらった方が、都合が良いんだよ」

「そうだよ、文ちゃん、もし、刃さんから告白なんてしたら、麗羽さま、絶対に私たちのこと認めないよ。そうなったら、私たち、刃さんと別れることになるんだよ」

「ええええ!? それダメ！ あんちゃん、絶対に告白したらダメだからな！」

「ああ…」

頼んでいた仕事が終わって帰ってきた二人を労う為の飯の席で、麗羽の話題が上がったが、さて、どうやってきりぬけたものか…

そんなことを悩みつつ、二人に促されて、二人をねぎらうために

とつた宿へと向かった。

〈麗羽Side〉

わたくしには、好きな人がいました。

戦いに敗れて傷ついたわたくしたちを優しく迎え入れてくださつた、北郷さん。

愛を確かめ合つたはずなのに、北郷さんはわたくしから離れていきました。

名家である袁家の盟主たるわたくしに相応しくなる為にきつと、頑張られているんですね。

すでに今の北郷さんでも十分だというのに、素晴らしいお心構えですわつと、思っていました。

しかし、待てど暮らせど、北郷さんがわたくしのもとに現れることはなかったのです。

そんな時に、現れたのが、刃さんでした。一見粗暴そうに見えますが、その実、とても聡明で優しい方でした。何かとわたくしを気にかけてくれる様子から、わかつてしまいました、この方がわたくしを好んでいることを。

一度に二人の殿方に想われてしまうなんて、わたくしはなんて罪作りな女なのでしょう…

「なあに浸ってんですか、麗羽さま」

「浸ってなど、現状を再確認しただけですわ」

「何をどう確認したんだか…」

「斗詩、何か言いました?」

「いえ、別に」

今、わたくしは、猪々子と斗詩に左右から体を掴まれて引つ張られています。

「麗羽さま、刃のあんちゃんに告白しちやいましょう!」

「だから、言ったではないですか、もうそろそろ、刃さんからしてくるはずだと」

「何をどう考えれば、そういう結論になるんだか…」

突然、斗詩が頭を押さえました。どうしたんでしょう?

「麗羽さま、いいですか? これは勝負なんですよ。ホラよく言うじゃないですか、言った者勝ちって、袁紹ともあろう人が負けちゃつていいんですか?」

「そんなわけないじゃありませんか! 良いでしょう! わたくしから、刃さんに華麗に告白して差し上げようじゃありませんか!!」

「さすが、麗羽さま!」

「当然ですわ、このわたくしが負けるわけがないのです! おーほほほほ! おーほほほほほほ!!」

「さすが文ちゃん、こういう時に麗羽さまを乗せるのが一番うまいわ……」

(惚れた者の負けとも言うけど、これは言わないでおこつと)

斗詩が何か言っているようですが、まあいいですわ。さあ、いざ、刃さんのもとへ!!

〈周倉Side〉

今は小さな節約も馬鹿にならないので、火をつける燃料代さえも惜しくて月明かりを頼りに仕事をしていると、物凄い勢いで麗羽が現れた。

「刃さん、好きですわ!!」

そして、いきなりの告白、すみません。思考が追いつかないのです。がつてか、言いきつたぜ、みたいな得意げな表情はなんなんだよ。

扉の陰から、猪々子と斗詩が顔を出して口ばくで何かを言ってい

る。

——ア・ト・ハ・マ・カ・セ・タ——

おいおい…

俺に伝わったことに気付くと、扉を閉めていなくなった。

おいおい。

寝台に並んで座り、麗羽を抱き寄せてキスする。

「んっ、んむっ、ちゅ…：刃さん…：」

「麗羽に想われて嬉しいよ」

そう言いながら、麗羽の豊かな胸を、服の上から軽く撫でた。

「ひっ♡」

キスを繰り返しながら、麗羽の胸をまさぐり続ける。

「んあああ…：や、やめてくださいっ♡」

「怖がらないでくれ。大丈夫だ」

身をよじって逃れようとする麗羽だが、キスをデープキスに切り替えて、丁寧に口腔内を愛撫していくと、逃げるのも忘れてこわごとと舌を絡めてきた。

麗羽を俺の膝の上に、横向きに座らせ、左腕で肩を抱き、右手で左右の胸を弄ぶ。

「んふ…：んああっ♡ あ、あふ♡ お胸ばかり、触らないで…：」

麗羽は、喘ぎが混じった声で抗議してくる。

俺は胸から手を放して、ズボンからイチモツをだした。

「ひっ」

勃起して反り返ったイチモツを見て、麗羽は短い悲鳴を上げた。

麗羽の手を取って無理やり握らせる。

「あ…：」

「麗羽があまりにも魅力的だから、もうこんなになってしまったよ」

「え？」

「男は、魅力を感じる女性にしか、こうならないのさ」

「刃さんは、わたくしが魅力的すぎるから、こうなってしまったと？」
「すぎるとまでは、言っていないんだが…」

「まあ、ここでそのツツコミは無粋だな。」

「ああ」

麗羽の手が無意識に上下に動いた。

「麗羽、それをもっとしてくれ、気持ち良いよ」

「そ、そうなんですの？」

戸惑いながらも、麗羽はイチモツをさすっていく。

「あつ、手の中で、また膨らんで……」

お返しに俺も、麗羽の胸を愛撫する。

「うあつ、あ、あはあん……ああ、なんだか、ピクピクして、濡れてきましたわ、んっ、んくっ、あふう♥」

「麗羽の手があまりにも気持ち良いんだよ。麗羽だってこうされると気持ち良いだろ？」

少し強めに豊かなふくらみを揉みしだく。

「あ、あつ、んああ♥んっ、くう♥」

麗羽の手に合わせて、胸への愛撫を調整していたら、積極的にイチモツを扱くようになった。

鈴口から透明な液が溢れ、麗羽の手を濡らし、動きをますます滑らかなものにしていく。

「あ、あああああ……す、すごい♥んく……んあ、ああああん、あ、ひう♥」

自らの手の中で、脈打つイチモツに熱い視線を注ぎながら、なおも手を動かし、胸への愛撫で甘い声を上げる。

「麗羽、一度手を放してくれ」

「え？」

「気持ち良すぎて出してしまいそうなんだ。こんなところで出すのはもったいない」

イチモツから手を放させて、麗羽の太腿に手をかけて、体を抱え上

げた。

「きゃっ」

俺は、麗羽の手淫によってフル勃起したイチモツの先端を、ショーツ越しに麗羽のマンコに押し当てて擦り付ける。

「あうっ、はふ……は、んはあ♥ ああ、イイ……ううん……」

麗羽が、持ち上げられたまま、体をよじるが、俺は、構うことなく、イチモツで布越しに刺激し続けた。しだいに淫らな染みが広がっていく。

「あうっ、んく♥ あふう……ああああ♥ ダメ、ダメですの……んあっ、ああん♥ こ、こんなの、こんなのダメえ……あふう♥」

「麗羽、下着をずらして、入れやすくしてくれ」

「そ、そんな……そんなふしだらなこと……んくう♥」

イチモツの先端をぐいぐいと拒否しようとする麗羽の秘部に押し付ける。

下着の布とともにイチモツが、マンコに浅く潜り込んだ。

「あううう……あっ、ああ、く、食い込んでえ♥ ううっ、うく、あう♥」

麗羽の手が少しずつ下着へと近づく。さらに麗羽の体を上下に揺すり、イチモツをマンコに食い込ませた。

「ああっ♥ あん……ん、んふ♥ あ、ああっ、ああああ……」

そして、とうとう観念したのか、麗羽の右手が、自らショーツを横にずらした。

露わになったマンコにイチモツを押し当て、膣口が待ちわびたように龟头を包み込んだところで、一気に腰を突き上げた。

「ひぐうううううううう♥♥♥♥♥」

麗羽のしなやかな体を弓なりにそらして、全身を震わせた。入れられただけでイッたようだ。

「あ、あう、ん、んぐっ♥ ハアハア♥」

「軽くイッたようだな」

「んあ……は、恥ずかしいですわ……」

麗羽の声は、どこか媚びるような響きを帯びていた。

「でも、まだ、これからだぞ」

俺は、太腿から手を離し、背面座位の態勢を取らせた。

「んひい……ああ、んあ♥ あああん……」

「さあ、麗羽、自分で腰を動かすんだ」

「あん♥ そ、そんなはしたないこと、できませんわ……はふう……」

「今更、何を言っているんだか」

俺は腰を下から軽く揺すった。

「ああうっ、んああああ……はあうう♥」

その動きを起点に、麗羽は、ぎこちなく動き始めた。

「ああっ、あふ……あ、ああん……ああ、わたくし、な、何てはしたないことを♥ んあ、あふう♥」

嘆くようなことを言いながらも、麗羽は腰を揺らすのをやめることなく続ける。

その動きは、コツをつかんだのか、次第に滑らかなものになっていく。

「あく、あふ♥ んっ……あああ、ダメえ……あふ、あっ、んふう♥」

「麗羽、その調子だ」

俺は、麗羽の服を脱がし、ブラジャーをずらして、直に胸に触れる。

現在の劉備軍最大のサイズを誇る爆乳が手の中で柔らかかに形を変えらる。

「あっ、あ、あああ♥ はうっ、はっ、はひいん♥ やっ、ああふ、んふう……あああ……はふっ、んああ、あへえ♥」

甘い声を漏らしながら、麗羽は腰を動かし続ける。

俺は、麗羽の膣を楽しみながら、双乳を両手で弄ぶ。

「んん、あう♥ あっ、ああん♥ はあ、ああっ……き、気持ちイイい♥♥♥ ううっ、あひっ♥ あ、ああっ♥ わ、わたくし、おかしくなってしまうすわあっ、あ、あああっ♥♥♥」

「ああ、おかしくなれ」

麗羽の胸の先端を、引っ搔くように刺激する。

「あひいひいひいっ♥ あああっ、ダ、ダメ、ダメですわあ♥ あ、あああああっ♥♥♥」

終りが見えてきた為、俺も本格的に腰を使い始める。

「ひっ♥ うあああっ♥ そ、そんな……そんなにされたらあ♥
あっ、あひいいい♥♥ お、お腹、突き抜けちゃあ……くひいいい♥
い♥」

麗羽も俺の膝に手をつけて、腰の動きを激しくする。

「ひうつ♥ あひっ♥ ああああっ♥ んうつ、あふう♥ ふひいい……あああ、あっ、あはああああ♥♥♥」
「くうつ、出るぞー！」

俺は、最後のスパートをかける。さらに麗羽の爆乳を握り潰さんばかりに驚掴みした。

「くひいいい♥♥♥ いつ、ひい♥ イク、イク、イクイクイク♥ いぐううううううう♥♥♥♥♥♥♥」

部屋中に響くような絶叫を放ち、麗羽が、背中を反り返らせる。そんな麗羽の奥に、大量の精を放った。

「ひあああっ、あッ、また、またいきますわ♥♥♥ あっ、あうううつ♥ ンああああああああ♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

麗羽は、子宮に俺の欲望を浴びてさらなる絶頂へと到った。その唇に唇を重ねる。

最初と違い、麗羽は、俺の舌に吸い付いた。
「んんっ、ちゅ♥ あむっ……ちゅ、ちゅぱっ♥ んちゅ、んちゅうつ♥」

はしたない音をたてながら、麗羽はキスを繰り返した。
「どうだった?」

「ハ、ハイ♥ とても、きもちよくて……すてきでしたわ……はああ♥」

とろけた瞳のまま、麗羽は、答えた。

〈北郷Side〉

斗詩のオレイと猪々子のオシオキ…

俺って、Sのつもりだったけど、Mだったのかな？

あ、そう言えば、なんかで聞いたことがあったな、SとMは紙一重だつて。

自分の精癖に不安を感じながら歩いていると、横から衝撃が来た。

「グハッ！」

デ、デジャブを感じる…衝撃の正体に目を向けるとやっぱり、猪々子はその名の通り猪の様な突撃を俺にかましたようだ。しかも、今回は、斗詩までいた。

「ふ、二人とも、何なんだよ!？」

「麗羽さまがご主人様を呼んでいるんです」

「だから、あたいらが、アニキを探して麗羽さまのところに届けるんだよ」

「だったら、もう少し優しく「ついたぜ!」 うわっ!？」

台詞を言い終わる前に部屋に投げ込まれた。

「じゃ、麗羽さま、あたいは、兵たちの訓練があるんで!」

「あ、私も、政務のお手伝いがあるので、失礼します」

ええ、あの面倒臭い麗羽と二人きりとか、勘弁してくれよ。猪々子いらぬから、斗詩だけ残つてよ。

という心の声が届くはずもなく、眼の前で扉が無慈悲に閉まった。

「北郷さん、そこにお座りなさい」

振り返ると、椅子に座った麗羽が、納刀されたままの剣で床をこんこんと叩いていた。

俺、こいつが怒るようなこと何かやったか？

一度セックスしたくらいで、それからは、一切合切関わって無いはずなんだけど…

「早くしなさい!」

素直に従った方が、安全とを考えて言われた通りに座る。一応、機嫌を損ねない為、正座で。

「最近、猪々子や斗詩と面白いオアソビをしているそうですね」

ええー!! なんて、あの二人、よりもよって、こいつに足コキの事、話してんの!?

やめろよ! このバカが何するかわかんねえだろ!

「その粗末な物をお出しなさい」

「え?」

「だから、そこに隠している物をですわ」

納刀したままの剣でやさしくズボンの上からチンコを撫でられた。やべえ、なんか、こそばゆくて少し勃ってきた。

「どうしたんですの? さあ、早く」

「あ、ああ」

ファスナーを下ろしてチンコを取り出す。

麗羽は剣を下ろしてじろじろとチンコを見てくる。

見られているって意識すると、恥ずかしさがこみ上げて来て、チンコがまた大きくなった。

手で隠そうとすると、その手を剣で叩かれた。

「何もしていないのに大きくなってきましたわね。北郷さんは、見られて喜ぶ変態さんだったのですね♡」

「ち、違う」

「でも、そこは、大きくなっていますわ」

そう言いながら、麗羽は組んでいた足を組みかえたその瞬間、僅かに麗羽のパンツが見えた気がした。

「あら? ここが気になるようですわね」

俺の視線に気がついて麗羽は少しだけスカートをめくった。白くて柔らかそうな太ももが少し見えるけど、パンツは見えそうなのに見えなくてもどかしい。

「わたくしの足でもう、そんなになっぺいらっしやるのね♡」

俺のチンコは触れられることもなく勃起していた。

そのチンコを麗羽はブーツを履いたまま、つま先で撫で上げた。

「ううっ」

今までされた足コキはどれも生足とか靴下とかで、靴でされたのは初めてだった。

足の温かさではない冷たい革がゆつくりとチンコを撫でまして、鈴口をグリグリと刺激されて、チンコから、先走りが溢れる。

靴のつま先と横の部分を巧みに使って麗羽は俺を追い詰めていく。つま先で根元から裏筋を撫でてカリ首を回って、亀頭をくすぐると、麗羽は足を離した。

「はあはあ…」

後少しでイケそうだったのに！

思わず、麗羽の足を追いかけるように身体を起こそうとしたら、足で押し返された。

「ッ」

「北郷さんの汚い物で、わたくしの靴が汚れてしまいましたわ。舐めてきれいにしてくださいさる？」

俺の顔の前に足が付きだされた。

「なッ!？」

「ただとは言いませんわ、舐めてくだされば、ここをもっとしてあげますわ」

そう言うと、もう片方の足で俺のチンコを踏んだ。靴底の固い部分、本来なら痛いはずなのに、背徳的な刺激を与えるだけだった。

自分で、チンコを擦りつけようとすると、また、足で抑えられた。

「どうしますの？ わたくし、そろそろ、足が疲れてきましたわ。

……もう、終りにしましょうか？」

見下すような冷たい視線が俺をついた。

「いいんですの？ このまま、終りにしても？」

思考が定まらない、ただ、このまま、終わってほしくない、最後までしてほしい。その一心で、俺は、自分の先走りが付いた靴を舐めた。「あら、本当に舐めるだなんて、北郷さんは、どうしようもない変態さんなのですわね。

いいですわ。お約束通りの御褒美です♡」

チンコに添えられた足に力が込められて、そのまま、上下に擦られた。靴底の凸凹とした部分に擦られて痛いはずなのに、俺には、射精へ

の刺激でしかなかった。

「あああああ!!」

自分でも、びっくりするくらい、自分の顎にかかるほど、出た。

「あらあら、北郷さん、とっても、幸せそうな顔をされていますわよ。わたくしもなかなか、面白いオアソビでしたわ♡」

いつもの高笑いではなく、嘲笑する麗羽の姿さえ、俺には、性的な刺激だった。

〈麗羽Side〉

情けないお顔をしている北郷さんに部屋を掃除するように言いつけて部屋を出ました。

先日、みなさんに言われたことは、これで良いでしょう。

さあ、刃さんのところに行かなければ!

刃さん、あなたの愛しの麗羽が今、参りますわ!!

おーほほほほほほほほほ!!

十七話（恋・音々音・猪々子&斗詩&麗羽／なし）

曹操軍の動きが活発になってきた。

入手した情報では、こちらに攻めてくる準備を整えているらしい。そのことで、我々は動くのかを、桃香と軍師と武将（北郷&麗羽除外）で話し合っていた。

そして、桃香の鶴の一声で、この地を離れる方向で落ち着いた。ここまで、この地を発展させてきた手前、手放すのはとてもおいしいことだが、命あつてこそだ。

「あ、刃…」

「恋か」

「うん」

仕事が一と段落ついて城壁で月を肴に酒を飲んでいたら、恋が現れた。

「どうした？」

「刃がいる気配がした」

俺の隣に腰を下ろした。生憎と、恋が喜びそうな食べ物は持っていない。

酒瓶からの直飲みをしていたので、分ける杯もない。

「飲むか？」

「うん」

酒瓶を振って見せると、恋は頷いた。酒瓶を受け取ろうと差し出された手を無視してあおる。そして、いるか聞いておいて、くれなかつたことに不思議そうな顔をしている恋の頭を押さえて唇を重ね、恋の中へと酒を流す。

「ツん!? んくんく…ゴクン」

「美味かったか？」

「(コクコク!)」

顔を真っ赤に染めて恋は顔を激しく上下させた。そして、酒瓶を手におかわりをねだってくる。

しばらく俺たちは、お互いの口を杯にして酒を飲み交わした。

酒がなくなり、二人で倉庫に入って、裸になって抱きあう。

「あ……うう……うん……んくう♥」

恋の体中にある刺青を丁寧に舌でなめていく。

「あう……ううう♥」

もどかしそうに、恋は体をよじる。ここでは珍しい褐色の肌が薄く桃色に染まる。

「あ……刃」

「ん？」

「……ちゆうしてほしい」

恋の希望に応えるべく、突き出された唇に唇が重なる。

「ん……んちゅ……んむ……ん、んん♥」

恋の舌が口に侵入してきた。

珍しく積極的な舌に驚いていると、恋の舌が、俺の舌に絡み付いてくる。動く舌とともに、唾液が、俺の口の中に入り込んでくる。

戸惑っていたのは最初だけで、すぐに舌と唾液を受け入れる。

「ん……んむ……ちゅっ、ちゅぶ♥ ちゅばば……ぶはあっ♥」

満足したようで、恋は舌と唇を解放した。

「恋、刃とのちゆう、好き♥ 刃は？」

「嫌いだったら、やらない。好きだぞ」

触れるだけのキスをして、マンコをいじりながら、反対の手で恋の頭を撫でる。

「あ、あん……はふう♥ はあん……」

恋の顔や首筋にキスを繰り返しながら、優しくマンコを愛撫し続ける。

ぬるぬるとした愛液が、溢れ出して、俺の指を濡らしていく。

「ああっ、あうう……ああん……はひ、はあっ、あふ♥ ああん♥」

俺は狙いをクリトリスに変更して刺激する。

「はああ……あん♥ やあん……そこ……そこはきもちよすぎて、ダメえ♥ あああん♥」

下を愛撫しながら、桜色の乳首を、転がすように刺激する。

「あ、あつ、あう♥ やあん……あああん♥」

クリトリスと、二つの乳首を責め立てる。

恋もやられてばかりではなく、イチモツを探り当てて抜く。

「ああん♥ ん、ふああ……はあああん♥」

俺の手の中で大きな乳房が、淫らに形を変える。

「あつ、あふん……あつ、あう、あううん♥ ああ……あはあん♥」

「そろそろ入れるぞ」

恋にせがまれてもう一度、唇を重ねて、十分に濡れきったマンコに、先端をあてがう。

「刃、きてえ♥」

亀頭が、恋の肉を押し広げて侵入していく。

「う、うああああ……あふ、あつ、あん……うぐ……あ、はひ、はひい♥ くひい♥ あつい……あついい♥」

一番奥まで入ったところで、腰をぐりぐりとグラインドさせて、恋の膣をかき回した。

「ああああああ……あうううつ♥ あつ、あひつ、んあああああつ♥♥♥」

俺の下で悶える恋を可愛く思いながら、腰の動きを円から直線に切り替えた。恋も俺の動きに合わせて腰を振る。

「んんん……ああ、あふあ♥ あん、あつ、あああん♥♥♥ あん、ああ……あひいいん♥」

恋は、俺の背中に手を、腰に足を絡みつかせながら、大きく背中を反らした。

「あううつ♥ あく♥ くうん♥ イク……イク……イクう♥ ひい
いいいいいい♥♥♥♥♥」

普段の恋からは考えられない絶叫を聞きながら、俺も射精した。

「ああああああ♥♥♥ イク、イクツ、イク♥ イク♥♥♥ イイク

壊して焼く予定だ。もったいないけど、色々と現代知識使って作った部分があるから、そういう技術はあまり人の目に晒したくはない。何がどう利用されるかわからない為だ。

「ちゅ……ん、んん……ちゅ、ちゅぽ♥」

ついでにようなキスを唇を続け、気分が高まってどちらともなく舌を出して絡めた。

「んあ、あぶっ♥　ちゅ、ちゅ……ん、んふう♥　ちゅむ、ちゅぽっ、ちゅぽっ♥」

しばらく舌と舌を絡ませてから、顔を離した。

「そういえば、二人つきりするのは、初めてだったな」

「む……言われてみれば、そうだったのです。

なんだか、意識すると、恥ずかしくなるのです♥」

もじもじしたたねねが、愛おしくて小さな体を抱き締めた。

そして、もう一度、ねねにキスをする。抱きしめていた手をといて、指先で首筋を愛撫する。

「ちゅ、あふ、ちゅむ……ふああん♥」

手をゆつくりと下へ這わせていく。

「んあ、ああん♥　ああ、おっぱいい……刃、ねねのおっぱいさわって楽しいのですか……は、はふう♥」

「これから、育つていくかわいいおっぱいだからな。大事に愛でなきゃな」

ねねのこれからが期待の胸をまさぐる。

「は、はっ、んん……なら、もつと……いっぱい、さわるのです♥

ねねのおっぱい、刃の手で大きく育ててください……はひい♥」

ねねが、もじもじと体を動かしながら言う。

希望に応えるように揉みしだき、乳首を指先で転がす。

「はふあ、ん……あ、ああん♥　んあ、き、気持ちいいのです……はあ、はん、はあん♥」

ねねが、悩ましげに体をくねらせながら、その小さな手の平を俺のイチモツに押し当てる。

「んん、刃の、ここ、すごく堅くなっているのです……あふ……ああん

……」

ねねは、瞳を潤ませながら、イチモツをまさぐる。

「カチカチで、すごく熱いのです……はふん♥」

うっとりとして吐息をつきながら、ねねは、血管を浮かせたイチモツを小さな手で握り直して両手で撫でさするように刺激する。

俺は手を止めて、ねねの好きなようにさせる。

「んちゅ……ちゅっ、ちゅ、ちゅう……ちゅぶ……ちゅば、ちゅぶぶ♥」

イチモツをねねが、啜えて舌を纏わり付かせてきた。

「ちゅぶぶう……ちゅっ、ちゅぱっ……ちゅちゅちゅう♥　ちゅむむ、

ちゅぱっ♥」

「いいぞ、出そうだ」

「いいのです……出ひて、出ひてくだひゃい……んちゅ、ちゅっ、ちゅぶぶぶ♥　ちゅっ、じゅぶ、じゅるじゅるう♥」

ねねは、イチモツの先端を激しく吸いたてる。

「くう……」

ねねの口に精を放った。

ねねは、うっとりとした顔で、射精を受け止める。

そして、口の中に溜まっていた精を、何度かに分けて飲み干す。

この小さい身体で頑張ってくれたことがたまらなくうれしくて、精子を飲んだばかりのねねにキスした。

それから、ねねのキャラパンを脱がし、すでに愛液を溢れさせているマンコに、亀頭を押し当てる。

ねねは、俺に抱えられたまま、腰を動かして自分からイチモツに愛液を塗りつけていく。

「ん、うふうん♥　あああ……ねねのマンコが、じんじんするのですう……」

熱い吐息を発しながら、ねねは腰を動かして挿入を催促する。それに答えてゆつくりネネの中へと入っていく。

「あぐっ♥　んっ、んくう……あ、あひ、ひい♥　ううっ、んく、刃、

ちゅうしてほしいのです……」

「ああ……」

目尻に涙を滲ませるねねと唇を重ねる。

「んむ……んんんんっ♡♡♡♡」

キスをしながら、ねねの中に肉棒を押し込む。

「んっ♡ んちゅ、ちゅぷ、ぷはっ♡ あうう……じ、刃のが……一番奥まで、入ったのですう♡」

俺は、華奢なねねの体を抱きしめて上下に動かしながら、腰を使い始めた。

「あっ、あんっ、あうっ、す、っい……あひっ、すっいのです♡ あっ、はあああっ、ああん♡」

激しい抽送ではなく、ねねの弱点を的確について小刻に動く。それが、ねねを絶頂へと追い詰めていく。

「はふっ、くうん……あうう……あひ……いい……気持ちいい♡
ああっ、あん、ああん♡ んあっ、あああっ♡ そこばかり、はひい♡
ついたらやなのですう♡ イク、イクう……イっちやううううううううううううううううううう♡♡♡♡」

ねねは絶頂して、俺に回していた腕がほどけるほど、大きく体を仰け反らせた。慌てて抱きしめて腰を力強く引き寄せる。

「ひゃあ♡」

抱き寄せたせいでイチモツがマンコに深く刺さってねねは叫び声を上げた。

まだ元気な様子なので、ねねの腰を抱えなおし、動きを再開させる。

「あっ、うぐう♡ んっ、ひううん……あ、あ、あああああ♡♡♡♡
んあっ、ああああああ♡」

膣内が、イチモツにおねだりをして締め付けてくる。それに応えるべく、動く速さを上げていく。

「んああ♡ い、いっちやうのですう♡ あ、あひああ♡♡♡♡ 刃も、刃も一緒にい……ああああ♡♡ 刃も一緒にイクのですう♡♡♡♡
ああっ、ああああ……い、いぐ♡ いぐっ♡ いっぐううううううううううううううううううう♡♡♡♡♡♡」

「ああ、出るぞー！」

幼い膣内に精を放った。

「ひいいいいいいいつ、ああああああああああああああああああああ
ああ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

溢れんばかりの精を受けてねねは、白目を剥いて絶叫した。

「あ……あひ♥ あ、ああ……あふああ♥」

体を痙攣させながらも、惚けた声を漏らし、ねねは、ぐったりと倒れた。

ねねと夜を過ごした翌日は、城の風呂が開かれる日だった。普段ならば、男子の時間の一番風呂をもらっているのだが（北郷は、女子の時間に入っている）、今日も忙しくて、結局、風呂が終わる間際になってしまった。申し訳ないので、風呂の管理を任されている者たちに後始末はやっておくので、帰って良いと指示を出して、一人でこの大きな風呂を堪能しようとしていた。

「ほら、言った通りだろ！ この時間は、もう、みんな入った後だから、誰もいないんだ!!」

「ホントだ。まるで貸し切りみたいですね、麗羽さま！」

振り返ると、麗羽たち三人がいた。

「あ、刃のあんちゃん！」

前を隠す様子もなく、こちらに手を振る猪々子。

「刃さんも、これからなんですか？」

大きめの手ぬぐいでしっかりと体と体に巻いていた斗詩。

「じ、刃さん!？」

慌てて、斗詩と同じように手拭いを体にまいて体を隠す麗羽。

三者三様の反応に思わず、笑みが漏れた。

「終りの時間が近いとはいえ、一応、男の時間なのだが？」

「いいじゃん、あんちゃんだけなんだしきさ！」

「まあ、それもそうだな」

三人も最近は、色々頑張ってくれている。特に資金を捻出する為に城にあつた調度品を売り払う際、麗羽がとんでもなく活躍した。さすが、袁家の元頭首なだけの事はあり、美術品を見る目は肥えていて、商人との値段交渉をしてくれた。

おかげで、だいぶ資金面で余裕が出てきた。まあ、ぶっちゃけると、以前の散財がなければ、資金に困ることもなかったんだけどな。体を洗おうと、手拭いをとろうとしたら、猪々子に奪われた。

「あんちゃんはじつとしてろって、あたいと斗詩と麗羽さまが体の隅々まで洗ってやるからさ♥」

「ちよ、ちよつと、文ちゃん!」

「わたくしに侍女の真似ごとをさせる気ですか、猪々子!」

「まあまあ、二人とも、ちよつとこつちに來て♪」

俺の手拭いを持ったまま、三人は、風呂場の隅でこそこそ話を始めた。

まあ、今の時期は、裸でいても寒くないからいいが、早く手拭いを返してほしいなあと思っていると、三人がこつちに來た。

「こ、この袁本初が洗って差し上げますわ!」

麗羽が巻いていた手拭いをほどいて、大胆に俺に身体を晒す。

「頑張ります!」

斗詩は対照的に、恥ずかしそうに焦らすように手拭いをほどいて、俺に身体を見せる。

「へへん、あんちゃん、期待してくれよ」

最初から一切隠していない猪々子に促されるままに椅子に座らせられて、お湯をかけられた。

続いて三人は自分たちにもお湯をかけてから、石鹸を泡立てて体に塗りつけた。

そして、正面から麗羽が、後ろから斗詩が抱きついてきて泡の付いた体をこすりつけてくる。さらに猪々子が俺の腕を掴んで跨り、先の二人同様に泡の付いた股を腕にこすりつける。

「んくつ、ふあ、あふうん……刃さんの鍛え抜かれた男の人の身体……素敵ですわ♥ んんつ、んふう♥」

「あつ、ああんっ、ん、はう……背中中の筋肉も、すごいですう……はぶ、あふう♥」

湯を浴びて体温が上がった温かく柔らかい肌が、前後から俺の体を挟んで動く。固くなり始めた乳首が体にこすれてこそばゆい。また、三人の中で一番細い太腿で挟まれた腕を僅かに動かすと、男勝りな少女の艶声が聞こえるのも楽しい。

「あつ、あうっ、ん、あふう♥ あんちゃん、いたずらするなあ……あはあん♥」

場所を入れ替え、麗羽と斗詩がむっちりとした太ももとマンコを足にこすりつけて洗い、猪々子の指が、俺の股の下に入り込んで、尻や肛門をくすぐるように洗ってくる。

一部以外、総てを洗い終えて、お湯をかけられた。

「さあ、最後に洗うチンポには、すっごいことするからな！」

そう言つて猪々子が目配せをすると、麗羽と斗詩が足元に座り、自分の胸でイチモツを挟みこんだ。巨乳ランキング暫定No.1とNo.5のダブルパイずり。ハリのある柔らかさを持つ麗羽の爆乳とふんわりとした柔らかさの斗詩の巨乳に挟まれて、イチモツが完全に臨戦態勢に入る。

「あうっ♥ ん、んっ、あふあ……ああっ、あん♥ 麗羽さまの乳首が擦れて、気持ちいい♥」

「あつ、くう、あはあ♥ 斗詩、ダメですわ、そんなにグイグイとおされたら、オチンポがはさめませんわ……あは、あああ、あ、あはあん♥♥♥」

「麗羽さまと斗詩のおっぱいに挟まれてんのに、チンポが見えるって、さすが、あんちゃんだな♥ でも、だから、あたかも参加できんだけどな、はむ……んっ、んちゅ、ちゅぶぶ、レロ……じゅるる、じゅぶぶっ♥ ぢゅぢゅるる♥♥♥」

ダブルパイずりで、納まりきらなかった部分を猪々子が咥えこんだ。鈴口やカリ首、敏感なところを唇と舌がうごめく、更に猪々子が垂れ流す唾液が、イチモツをつたって、麗羽たちのパイずりの滑りを良くする。

「くっ、これはすごいな……」

思わず、声が漏れる。その声を聞いて気を良くしたらしい麗羽と斗詩のダブルパイずりの動きがさらに激しくなり、猪々子のフェラも熱がこもった。

「あッ、はあん…… 刃さん、わたくしのおっぱいでイキなさい♥ あん……はうッ、ああん♥」

「あう……あうん♥ 刃さんは、私のおっぱいでイクんですね？」
あつ、んあああッ♥」

「ちゅ、ちゅう♥ ぷは、あんちゃん、あたいのことも忘れないでくれ、はぶぶ、ちゅば……じゅる、じゅぽぽっ、じゅぼ♥♥♥」

麗羽の爆乳がイチモツの反り返りを押し返し、斗詩の乳首が裏筋を擦り上げ、猪々子が鈴口のすすする。

「三人とも、出るぞー！」

「きゃあ♥♥♥」

「んぶぶぶ♥♥♥」

我慢できずに腰を突き出して猪々子の口内で射精した。

「猪々子、ずるいですわ！」

「そうだよ、文ちゃん、ずるいー！」

「んく、んく……んく、んく！」

麗羽たちの抗議に精を嚙下していた猪々子は少し考えるそぶりを見せてから、にんまりと笑い、麗羽の頭に手を回して、唇を重ねた。麗羽は最初こそ抵抗していたが、すぐに受け入れた。

「んー!! ん、んぶ、んぶん……」

どうやら、猪々子は麗羽に精子を口移しで流し込んでいるらしい。

麗羽の唇を解放すると、今度は、斗詩に口移しを始めた。斗詩は猪々子の行動を理解しているようで珍しく、自分から進んで、猪々子とキスしていた。

美女たちの淫らなキス、しかも、自分の精を分け合っているとあって、その光景を見ているだけで、イチモツが回復した。

「麗羽、猪々子、四つん這いになって、そこに並べ。今度は、俺が動く番だろう?」

「りよ〜かい♥」

「この袁本初に這いつくばれになれだなんて……刃さんだけ、特別でしてよ♥」

猪々子は喜々として、麗羽はぶつぶつと言いながらも、こちらに尻を向けて四つん這いになった。どちらの下の口からは、早く欲しいと涎を垂らしている。

「これなら、すぐにできる、な!」

「ひゅわああああああ♥♥♥」

容赦ない挿入に猪々子が絶叫した。

「そんな! わたくしに入れてください、いひいひいひい♥♥♥ ゆびい♥」

文句を言おうとしていた麗羽のマンコに指を突き刺して、黙らせる。

そして、取り残された斗詩を空いている手で抱き寄せて、胸を揉みし抱きながら、唇をむさぼる。

「んぷっ……んふ……んむむ♥ あ……ああん……くうん♥」

斗詩も積極的に俺の首に抱きついてキスをねだる。

柔らかな斗詩の体を楽しみながら、イチモツと指で猪々子と麗羽を攻め立てる。

泡踊りとパイずりフェラで高ぶっていた三人は、あつという間にのぼりつめていく。

「あっ、あああん♥ すぐ、すごい……マンコっ、マンココわれるウ♥♥♥」

「ひう♥ うっ、あああああ……イイツ、イイですわあ♥ ゆびい……あっ、ああ♥ オマンコひっかいてえ……ああ、イイい♥」

「あああ、もつと、おっぱい、もみもみしてください♥ あ、ああん♥ あんあん♥ あひい♥」

三人とも、自ら動いてより快楽を得ようと、俺に快楽を与えようとする。俺もそれに答えて、より激しく動く。

そして、斗詩の乳首を捻り、麗羽の膣内の弱いところを擦り上げ、猪々子の一番深いところで、射精した。

「はっ、ひゃああああああああああ♥♥♥♥♥」

猪々子は土下座するように倒れ、麗羽は横に身体を投げ出して倒れ、斗詩は、俺の体を支えにずると崩れ落ちた。

まだ、おさまらない俺は、斗詩を抱えて、風呂椅子に座り、背面座位で挿入した。

「んああああっ♥いきなりなんてえ…あ、あひ♥ひああああん♥♥♥」

斗詩と楽しんでいると、横から手が伸びて来て、顔が柔らかい物に包まれた。

「ハアハア…吸って、わたくしのおっぱいを吸ってください♥ああん…あんっ、くひいいいい♥♥♥」

希望どおりに吸ってやると、麗羽は体をのぞけてより爆乳を俺に押し付けてくる。

「斗詩い、あたいまきもちよくしてやるからなあ、んちゅう…ちゅ、れろ…ちゅぶぶ…ん、じゅるる♥」

「ぶ、文ちゃん、あうっ♥まってえ、んあ、あはあん♥♥♥それ、だめえ…マンコ、とろけちゃうううう♥あ、あひ、おひいいい♥♥♥」

「ひぎいいい♥♥♥乳首噛んではダメですわあ、ああん♥噛んだ後優しく舐め舐めえ…いいい♥」

斗詩との接合部にぬるりと何かが這った。

猪々子が片手で自分を慰めながら、俺と斗詩の繋がっている部分を舌でなめていた。麗羽の乳首を吸っていなければ、俺も声を上げていたかもしれない。まあ、思わず、乳首を噛んでしまい、麗羽が喜声を上げたのだが。

こみ上げてくる射精感を我慢せず、より激しく動く。

「あ、あうっ♥くあっ♥ひゃあうう…」

「あ、あはあっ♥あ、ああん…そんなにすわれたら、お乳がでてしまいですわあ♥あっあっあっ♥あひいいいい♥」

「あふ、んふうん♥ちゅ、ちゅうう…れる、んはあ…斗詩のおまめさん、びんびんだあ♥んっ、ちゅっ、ちゅぶ…はふ、んむむ、れ

る、れるる、れろお♥♥♥」

斗詩の中で射精し、麗羽の乳首を二つ同時に吸い上げる。

「ふあああああああああ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

猪々子も自慰で絶頂したらしい。

斗詩は俺の背中を預けて余韻に浸る。麗羽は、俺に抱きついたまま、熱い吐息を吹きかけてくる。猪々子は、とろんとした目で斗詩の中から滴ってくる俺の精を舐めていた。

斗詩を降ろして、麗羽を抱き上げて湯船につかる。そして、そのまま、対面座位で麗羽の中へ押し入る。

「はああああん♥♥♥」

麗羽は、最後に回されたことに不満げだったが、2・3回突き上げてやると、そんなことどうでもよくなったらしく、俺の体に手を回して、自分でも腰を振り始めた。

しばらく二人で楽しんでいると、猪々子と斗詩も湯に入り、俺に左右から抱きついてきて耳や首筋に舌を這わせてきた。

俺もお返しに二人の後に手を回して、斗詩の大きめで揉みごたえのある尻と、小振りで、撫でまわしたくなる猪々子の尻の、感触の違う二つの尻肉を堪能し、アナルをくすぐる。

「あつ、あひい♥ はひ……おしり、おしりキモチイイ……あん、はうう、あふん♥」

「あうう……うく、あ、あんちゃんのゆびがおしりにい♥ あぐつ、ああん……あはあ♥」

「んはっ、ああう♥ あひい……刃さん、わたくしにしゅうちゅうしてくださいい……あひっ♥ あああん♥♥♥」

麗羽の動きに合わせて爆乳が水面にばしゃばしゃとぶつかってお湯が跳ねる。

猪々子と斗詩が示し合わせたかのように同時に耳を舐める。左右から、ぞくぞくとした感覚と耳をしゃぶられる卑猥な音が俺の耳を支配する。思わず、二人のアナルへの愛撫に力がこもる。

そして、俺の気を引こうと、麗羽もキスをしてきたので、舌で応える。

十八話（なし／恋&音々音・麗羽&猪々子&斗詩）

最近、みんなが忙しそうにしている。

聞いた話だと、近々、ここを出て益州へと向かうらしい。

ああ、もう、そんな時期かあ……なんて思っていたけど、ヤバイ！
俺専用の娼館どうしよう!?

寝取ったりとかしてせっかく集めた娼婦たちが!!

朱里に確認をとったら、娼婦たちが付いていきたいと言ったら、連れていけばいいと言ってくれた。話してみたら、みんな、俺についていってくれるってさ！ ま、当然なんだけどな。

結構な私産（領地の予算）を使って作った設備は、残念だけど、捨てていくことにした。

さてと、恋にお呼ばれているので、恋の家に向かう。

家に着くと、動物（メスのみ）たちに迎えられる。いやあ、かわいいなあ。

動物たちを撫でまわして和んでいると、俺が来たことに気がついたらしく、恋とねねが出迎えてくれた。

促されるままに家の中へ入る。

「ご主人様、脱いで」

この何の前置きもない一言。

言われるがままに裸になって四つん這いになる。チンコはすでにこれから期待して勃起していた。

背中にねねが裸で乗ってくる。

「みなまで言われずに、出来るようになるとは、褒めてやるのです」

ねねは、覆いかぶさって俺の乳首を指で刺激し始める。

「これは御褒美なのです。れえ口♡」

そう言うと、首筋を舐められた。身震いするような快感が体に走る。続いて耳の後、背中。舐める場所を変える度に背中にあたるねねの乳首が擦れる。

「ご主人様、恋のことを忘れちゃ、ダメ。あむ……ちゅ、れるっ、れる……んむ♡」

「おおっ」

突然、恋に袋を舐め上られて、思わず、声が出る。恋は気にした様子もなく、丁寧に袋全体を唾液まみれにしてチンコを搾る。

「恋も御褒美上げる。ヨシヨシ♡」

「うひゃああー!」

指先で鈴口を撫でられた。玉舐め+チンコ絞りされながらの鈴口攻めに一気に射精への階段を駆け上がっていく。

「ご主人様、うれしそう。もっとしてあげる。ヨシヨシ♡ ヨシヨシ♡」

「くうう……」

「何を我慢しているのですか、さっさと出すのです♡」

「ああああ!!」

ねねに乳首を捻られて、堪え切れずに射精した。

射精後の倦怠感に崩れそうになるも、それを許してはくれない。

不意に恋が離れた。

どうしたのかと振り返ると、庭から、一匹の犬を連れてきた。

「今日は、特別参加」

意味がわからずにいると、ねねに乳首を擦られた。

「ひぎッ」

「いいから、おまえは、チンチンをでかくすればいいのです♡」

ねねの巧みな乳首責めで俺のチンコは、あっという間に勃起させられた。

「ちゅぱっ、ちゅっ、んちゅ……ん……レロレロ、ちゅっ、ちゅう♡」

そのチンコを恋が刺激して、また、射精へといぎなおうとする。

気持ち良さに身をゆだねようとした時、はっはっとしてチンコに生温かい息がかけられ、いきなり、分厚い舌でフェラされた。

でも、ねねは背中の上だし、恋だつて玉舐めしている。まさかと思いい、振り返ると、予想通り、犬がチンコを舐めていた。

人間がやるような、こちらの様子を見ながらやるのとは違い、犬は

ただひたすら、全体を好き勝手に舐めてくる。

犬の唾液ですべりがよくなつて恋のチンコ絞りが、激しくなる。

イキそうになるのを必死に我慢するけど、恋たちの巧みな連係プレーの前には無力だった。

射精した精子が犬になめとられていく。

「……この子、まだ、満足してない♡」

「ほら、もっと出すのです♡」

「か、かんべんしてくれえええ!!!」

俺の願いはかなわず、意識を失うまで搾り取られた。

「ハアハア……」

俺は今、必死に城内を走って逃げていた。

昨日、恋たちに搾り取られた為、動く気にならず、部屋でダラダラと過ごしていたら、麗羽たちがやってきた。

暇だから何とかしろって言われても、今の俺は、療養中だ。

つて事を言ってみたけど、効果がなく、そんな時に猪々子が面白い遊びを思いついたとか言い出した。

内容は、簡単に言うと、俺対麗羽たちでの鬼ごっこだ。

ただし、逃げるのは少数の俺であり、鬼の麗羽に捕まればオアソビ、猪々子に捕まればオシオキ、斗詩に捕まればオレイ。

どこの芸人の鬼ごっこだとキレそうだが、俺に拒否権を与えてくれるほど、優しい奴はいなかった。

問答無用で開始された鬼ごっこに、俺は鬼が百数え終わるまでに、必死に走って隠れる場所を探す。範囲は、城内のみだが、十分に広いので、良い場所に隠れさえすれば、タイムリミットの夕方まで逃げられるはずだ。

そして、俺はあっさりと捕まった。

あの場所なら、絶対に見つからないと思ったのに…

「ご主人様の目撃情報を集めながら、歩いていたので……」

斗詩にタネ明かしされて気付いた。

たしかに、俺が走ってたら、目立つよな……クソツ、一番最初になくちやいけなかったのは、変装か！

「文ちゃん、わたしたち三人で一緒に見つけちゃったけど、どうするの？」

「みんな一緒にやればいいじゃん」

え？ マジで？

裸になって、自分の部屋の床に寝かされている。チンコが、これから起こることに恐怖する俺の意志とは逆に勃起していた。

「あ、アニキも楽しみにしてんじゃん♡」

「楽しみなわけないだろ、無理やりされて！」

目敏くチンコを見た猪々子がニヤニヤと笑うけど、否定する。

「え？ あたいら無理やりだった？」

「確かに、わたくしたちは、脱ぐように言いましたけど、北郷さんが自分でお脱ぐになりましたわ」

「それに、手足を拘束しているわけでもないです」

「つまり、なんだかんだ言っても、アニキもあたいらのアレを楽しみにしているんだろ？」

何も言い返せずに、俺は黙ってそっぽを向いた。

「んじや、イクぜ、アニキ♡」

そんな俺の両足を押さえて裸足の猪々子が、スツとつま先でチンコを撫でてから、袋の裏に足を押し当てて、振動させ始める。あの未知の快樂が巻き起こる。

「ああああああ!!」

「へえ、文ちゃん、そんなことしてたんだ」

俺の頭の方で椅子に座っている斗詩が、感心したように呟きながら、裸足の足指で乳首をくりくりと刺激したり、身体の上を撫でまわす。こそばゆくもキモチイイ。

「うひゃああー!」

「あなたたち、面白い事をされているのですね」

俺の横で椅子に座った三人の中で唯一靴を履いたままの麗羽が、靴の内側でチンコを挟んで別々に足を前後させる。カリ首をつめたい皮の部分で擦られて思わず、腰が浮く。

「あくっ」

細い猪々子の足による電気アンマ、むっちりとした斗詩の足によるソフトタッチ、柔らかそうな麗羽の足による容赦のない靴でのアシコキ、6本の足が俺を絶頂かせようと、俺を追い詰めていく。

「で、出るうー!」

麗羽の靴底に向かって今日生産されたばかりの精子が発射された。

「あら、もう出てしまったの?」

「大丈夫ですよ、麗羽さま」

俺の体を這っていた斗詩の足が、顔に乗った。足裏の柔らかい感触と、斗詩の足の匂いに俺のチンコは急速に回復した。

「ほら♡」

「アニキ、顔を踏まれてここをふくらませるなんて、さすがのあたかもドン引きだ♡」

「ええ、軽蔑モノですわね♡」

「そんなこと言っちゃダメですよ、二人とも。ただ、ご主人様は、どうしようもない変態さんだけです♡」

三人に蔑みの眼で見られても、今の俺には、快樂だった。

「なんか、アニキのチンチン、あたいらに侮辱されて、うれしそうに揺れてんだけど…」

猪々子の足の親指と人差し指の間で裏筋を擦られた。

「文ちゃん、変態さんなご主人様にとって、侮辱や罵倒は、御褒美なんだよ♡」

斗詩の足が猪々子の足に押された分を押し戻して、更に擦る。ダブルアシコキの気持ち良さに酔いしれる。

「本当に、どうしようもないですわ、ね♡」

麗羽が踵で亀頭を踏みにじる。

「あざいいいい!!」

痛みと、それを超える快樂に、俺は、あらがうこともできずに射精していた。

「あんなことされても、出るのか。アニキのチンチン、節操なしだな♡」

さらなる刺激で、二日連続で枯れ果てるまで、射精させられ続けた。

十九話（蒲公英・翠／翠&蒲公英）

〈馬超Side〉

曹操に負けて、母上も逝ってしまった。

あたしたちは、天の御遣いがいる劉備のもとに身を寄せた。そこでご主人様と出会った。

ご主人様との一時は、夢のようだった。

でも、少しして、ご主人様は、あたしをあまり構わなくなった。たんぽぽにからかわれたりしたけど、寂しい…

そんな風に思っている時、愛紗がご主人様と歩いている姿を見かけた。

興味本位で後を付けていくと、二人は、ご主人様の部屋に入ってしまった。

そうだよな…愛紗の方がずっと長い事ご主人様と一緒にいたんだから…

いけないと思いつつも、あたしは、少しだけ開いていた窓から中を覗き込んだ。

寝台に座って下を脱いだご主人様とその股の間に座った愛紗がいた。

ご主人様のアレに愛紗の髪が巻きつけられていた。な、なんなんだ、あれ!? あんなことやって気持ち良いのか? あ、でも、ご主人様、すごく気持ちよさそうだ…

髪の毛が撒きつけられたアレを愛紗が手で扱く度にご主人様は気持ちよさそうな声を上げて、そして白いのを出した。愛紗は、それでも、手を止めずに動かし続ける。

「お姉様、何やってんの?」

「うツ!」

思わず、大声を出しそうになって、慌てて口を押さえて声を飲み込んだ。振り向くと、たんぽぽが興味深そうにこっちを見ていた。

「何見てんの? たんぽぽにも見せて!」

「バツ、子供が見るもんじゃない!」

「たんぽぽ、子供じゃないもん」

捕まえようとしたけど、たんぽぽはあたしの手を逃れて窓を覗き込んだ。

「うわあ、愛紗さんって、あんなことするんだあ……ご主人様も気持ちよさそう…」

お姉様、お姉様、ほら見て！」

たんぽぽに手招きされて、あたしも再び、部屋の中を覗き込んだ。

愛紗は、髪の毛の束の先でアレの先っぽを箒みたいに掃いていた。ご主人様はそれに気持ちよさそうな声を上げる。更に、愛紗は髪の毛をアレに突っ込んだ!? ご主人様が大声を上げて、あたしは、大変なことになったのかと思って、愛紗を止めに行こうとしたら、たんぽぽに掴まれた。

「放せタンポポ！ ご主人様を助けないと！」

「でも、お姉様、ご主人様、すぐく気持ちよさそうだよ」

「え？」

三度、中を覗き込む。ご主人様は、腰をビクンビクンさせながらも、顔は気持ちよさそうだった。

何度も白いのを出して、ご主人様がぐったりとしてから、愛紗は、ご主人様のアレを解放して近くにあった水で髪の毛を洗って、ご主人様を寝台に寝かせると、部屋を出た。

あたしたちももう行こうとしたら、さつき部屋を出たばかりのはずの愛紗が立っていた。

「覗きだなんて、二人とも、良い趣味をしているな」

「あく、もしかして、怒ってる？」

「あまりいい気分ではないな」

「……………」

「……………」

「じゃ、さようなら！」

たんぽぽがあたしを残して逃げようとしたけど、それよりも速く、愛紗に捕まった。必死に逃げようとするたんぽぽだったが、最後は、愛紗に絞め落とされた。

「で、なんでのぞいていた？」

場所を愛紗に部屋に移して、その第一声がそれだった。

「……えっと、その……」

「お姉様、ご主人様あまり構ってくれなくて、寂しくて、それでご主人様と一緒に歩いていた愛紗さんを見かけて後を追ったの。そして、二人がご主人様の部屋に入っていくから、思わず、何をするのか気になって、覗いちやっただの」

復活したたんぽぽが何故か、全部答えた。

「ちよっと、待て。たんぽぽ、なんでそんなに詳しいんだ？ おまえ、いつから、あたしを見てたんだ？」

「え？ 最初からだよ？」

たんぽぽの頭をぶん殴ったあたしは悪くない。

「いったあい！」

「おまえが悪い！」

「……とりあえず、二人とも、ご主人様に閨に呼ばれる方法が気になって覗いたということの良いんだな？」

愛紗が、あきれたような顔でこっちを見ていた。

謝る意味と、頷く意味を込めて深々と頭を下げる。ついでにたんぽぽの頭も掴んで無理やり下げさせる。

愛紗はため息をついてから、もういいと言ってくれた。

「愛紗さんみたいに髪の毛でやれば、ご主人様は構ってくれるようになるの？」

「私の場合がそうだったというだけであって、ご主人様が髪の毛好きというわけではない。」

閨に呼ばれるモノはみな、それぞれ違った方法だぞ」

「へえ、じゃあ、お姉様やたんぽぽはどうやれば、ご主人様に呼ばれ

るようになるかな？」

なんでこいつは、こういうことをすいすいと聞けるんだろう？
まあ、あたしも教えてほしかったことだから、助かるんだけどさ。

「私には、わからん」

「私……には？」 じゃあ、わかる人がいるの？」

「…知る為には、とても大変な事をしなくてはいけないとしても、知りたいか？」

あたしとたんぽぽは揃って迷う事無く頷いた。

そんなあたしたちをじつと見てから、愛紗は少し考えて口を開いた。

「確認が出来たら、声をかけるから、それまで待っていてくれ」

今日は、それでお開きとなった。

〈周倉Side〉

「馬超殿と馬岱殿？」

「ああ、あの二人を落とさないか？」

夜、部屋に入ってきた愛紗と酒を飲んでみると、そんな話が出た。

二人とも、中々のスタイルである。馬超は言うまでもないが、馬岱もあの歳であるスタイルならば、あと数年で馬超を超えるかもしれない。

だが、中々骨が折れそうな話である。何が問題かというと、馬超だ。なんだかんだ言っただけで初心な乙女だった星よりもっと大変だ。

たぶん、あの様子からしてエロには、人並み以上の興味があるんだろうけど、羞恥心と男女の付き合いはこうあるべきだという固定概念が強くて、それを突き崩すのが大変そうだ。

麗羽たちに使った方法だと、馬超が自分はなんてふしだらなんだと暴走して面倒事を起こす可能性が高い。

かと言って、星にしたような方法を使うにも現状でそんな余裕は我々には無い。

どうするべきか、思考していると、愛紗が席を立てて俺の膝に座った。

「自分で振っておいてあれだが、私といるのに他の者の事を考えられるのは、あまりいい気分がしないぞ」

「どうやら、拗ねてしまったらしい。」

一端、馬超たちの事は置いておき、今は、目の前の女の事だけを考えることとしよう。

愛紗から彼女の杯を奪って中身を全て飲み干し、愛紗を抱えて寝台へ向かう。

「きゅっ♥」

既に愛紗の目は期待にうるんでいる。今日の夜も中々、激しい物になりそうだ。

〈馬超Side〉

あれから、三日過ぎた頃、愛紗に呼ばれた。

「二人ともに覚悟があることは、わかった。まず、たんぽぽ、本当に覚悟があるのなら、今日の夜にここに来い」

「なっ!?! 愛紗、あたしは?。」

「今回は、たんぽぽだけだ。翠は次だ。」

「この間の私の時のように後を付けるなんてことをしたら、私は協力することを止めるからな」

「たんぽぽも、あたしと順番を変えられないか聞くけど、愛紗はダメだの一点張りだった。」

「気になるから、後をつけたいけど、この間みたいにバレたら、本当に協力するのを止められてしまうかもしれないから、グツと我慢す

る。

〈周倉Side〉

俺の部屋に愛紗と彼女に連れてこられた馬岱がいる。

愛紗に何をしなくてはならないか、聞かされている馬岱は、こちらを見ようとしなない。

先にも言ったことだが、現在、さほど余裕もないし、以前使っていたような宿屋や飯屋を見つけていない為、俺の部屋でやることとなった。

北郷にバレるリスクが高い為、桃香に協力を仰ぎ、北郷が外出不可能になるほど搾り取ってもらっている。万が一も考えて安定と安全の斗詩（他二人はポカをやらかす可能性が高い為、お留守番）に待機してもらっている。ついでに一番手っ取り早い鈴々は、普段、会議で北郷の注意をひきつける任についてもらっている為、負担を減らすためにも今回は声をかけなかった。

「えっと、愛紗さん、さっきの話は本当なの？」

「本当だ。今更、嫌だとは言わせない」

「そんな、こんな良く知らない人とするなんて…」

君、俺の記憶が間違っていないければ、北郷と出会って三日と経たずにいたしたよな？

俺の立場上、そういう情報が嫌でも耳に入ってきているんだよ？

ってか、君達と君達が連れてきた兵の為に俺は結構、頻回に君達と面会して話し合いをしていたはずんだけど…

なんとか、俺としないですむ方法を探している馬岱にいい加減、じれったくなった愛紗は、隠し持っていた紐で馬岱を拘束した。

「あつ、愛紗さん!？」

「刃、ヤッてしまえ」

「ヤッてしまえって……」

「あ、私の事を気にすることはない。私も、斗詩と合流してくる。万一があつては困るからな」

そう言うと、愛紗は出て行ってしまった。あわただしかつたなあと思うが、たぶん、馬岱がするのを見ていたら、我慢できずに参加してしまいそうだからだろう。

俺の知らないところで、抜け駆け禁止の条約が結ばれているらしいから……

「ヒッ！」

馬岱と目が合うと、悲鳴を上げられたが、いちいち気にしては、話が進まないと、無視して服に手をかける。サイズ的には普通だが、年齢と体系から考えれば、巨乳の域に入る胸があらわになる。下にも手をかけると、激しく、足を振りまわされた。縛るか少しだけ考えてから、そのままにすることにした。

俺は、右手で馬岱の胸をまさぐった。

「あああつ、い、いや……さわらないでっ！ あうつ、うぐ……あつ、いや、いやあ……あああつ！」

固くも柔らかい乳房の感触を、手の平に感じる。

俺は、馬岱の胸を、あえて強く揉みしだいた。

「あつ、うくつ ♥ ううう……あうう……いや、いやああ ♥ やめて……あううう……いやああああ ♥」

馬岱の声が、次第に弱々しくなり、艶が混じってきた。強弱をつけ、乳首への刺激も付け加えていくと、俺から離れようと暴れていた体は、だんだんと弱くなつていった。

そして、それを頃合いと見て手を馬岱のマンコに滑り込ませてみた。

「ひっ、だめえっ ♥ そこはだめっ ♥」

胸への愛撫で大人しくなってきたが、再びまるで火が付いたように暴れだした。

それでも、俺の動きを阻害できず、指先でマンコに触れると、かすかに濡れているのが感じられた。

「馬岱、濡れているじゃないか」

「はうう……そ、そんなこと、ない……あつ、あくうっ♥」

指で割れ目をぐりぐりと刺激する。北郷によって性に目覚めさせられてから刺激を求め続けて放置されていたそこは、求めていた相手のものでは無くても、飲み込み、喜びの汁を流していく。

でも足りない。彼女が一番刺激してほしいのは、入口なんて浅い場所ではないのだから。

「どんどん濡れてくるぞ」

「そんな……ち、違う……あつ、あう♥ 濡れたりなんか……濡れたりなんかあ……ううっ、あううううっ♥」

馬岱は必死に否定しようと、かぶりを振った。

そんな事をして、快樂からは逃れられない。指を濡れたマンコに挿入した。

「ああああああ♥♥♥」

馬岱は、大きく姿勢を崩して倒れかけて俺に支えられた。でも、指は止まることなく、激しく刺激する。

「あつ、あふっ♥ あん、ああん……イヤあ……あつ、あううん……感じちやう……感じちやうの♥ ダメえ♥」

マンコに指を抽送させながら、胸に手を当てて乱暴に揉みしだく。「あつ、ああつ♥ はひ、あはあん……ダ、ダメ……ダメなのに、いつちやいそう……いつちやう♥ ああん、あつ、あひいいい♥♥♥」

俺は、馬岱のマンコから手を離して、足の間に腰を割り込ませた。

「あううう……ダメ、これ以上は、ダメなお♥ あつ、あひいいい……」

快樂に翻弄されていた馬岱だが、これから何をされるのか察して、逃れようともがく。

「やめて、やめてえっ♥ あうううう……い、いや……ああつ、助けてっ、ご主人様、助けてえ♥」

ここまで本気で拒絶されたのは、初めてだが、その言葉に、俺は思いのほか、興奮を覚えていた。

充分に濡れたマンコを亀頭が押し広げる。

「ああっ、うっ、うぐう……いやあ……ひ、ひどいい……抜いてっ！
抜いてえ！ あああ、ご主人様以外はダメなおっ!!」

馬岱の割れ目に、イチモツを侵入させていく。

「あ、ああああ……ひ、ひどいよお……あ、ああああああ♥♥♥」
絶望に満ちた顔をする馬岱だが、漏らした吐息は、官能の色が濃く
浮かんでいる。

俺は、馬岱に覆いかぶさって腰を使い始める。

「あうっ、くうっ、あっ、あひい……や、やあっ♥ はあ……ひいっ
♥」

馬岱の胸をこね回し、乳首を指先で摘まみ、さらに抽送を続ける。

「あっ、ひうっ、うぐう……い、いやあ……もう、やめてえ……あっ、
あああっ、あく……ンあああああっ♥♥♥」

馬岱の拒否の声とは、対照的にマンコは愛液に潤み、ヒクつかせな
がらチンポに絡みついてくる。

「あっ、ああっ、ああん♥ あああ……はうっ、うううう……んっ、
はっ、はふうん……あああん♥」

「感じているんだな」

「あああ……そ、そんな……そんなことお……ああん……無理やりさ
れて感じるわけがないでしょっ、ひうっ、あひいいいン♥♥♥」

その言葉とは裏腹に、馬岱の喘ぎには、甘い響きが混じり、こっそ
りと解放した手と足は、これの背中と腰にまわされてしがみついている。
もう、彼女の心以外が彼女を裏切り、チンポを喜んで迎え入れて
いる。

「あひい……やめて……もうやめてよお……あくっ、ああんっ♥ た
んぽぼには、ご主人様があ……あううう……ンあああああっ♥♥♥」

馬岱の奥にイチモツをぶつけるように、激しい勢いで腰を前後させ
る。

「ンあっ、いやっ、いやあっ♥ もうダメっ♥ あっ、あああああ
……あひっ、あはあん♥ あん、あああん♥♥♥」

馬岱の呼吸がせわしなくなり、終りが近づいてきているのを感じ

た。

俺が感じたように、馬岱も俺の射精感がこみ上げて来ているのを感じたらしい。

「あああっ♥♥♥ ダメ、ダメえ♥ 中はダメなお♥ ああああ……そ、それだけは、許してええっ♥ お、お願いいい♥」

馬岱が哀願してくるが、その手足は俺の体に回されたままであり、今は自ら腰まで振っている。馬岱の体の望み通りに精液をぶちまけた。

「何これえええ♥♥♥ こんな知らない♥ ダメ、ダメえええ♥♥♥ あああああああああああ♥♥♥♥♥」

馬岱は、力いっぱい俺に抱きつき、絶頂しながら体をビクビクと痙攣した。

「ああああ……出てる……な、中に出てるう……ああ……ご主人様、ごめんなさい……」

馬岱の半開きになった唇から洩れたのは、今頃、桃香か、斗詩か、愛紗に搾り取られている北郷への謝罪だった。

だが、その体は、本人の意思に反して、絶頂の快楽を求めているようだった。

「まだまだ、これからだぞ」

俺は再び、腰を動かし始めた。

「やあああああっ♥♥♥♥♥」

〈馬超Side〉

翌日、たんぽぽは帰ってこなかった。

愛紗にたんぽぽはどこにいるのか聞いても、大丈夫だから待てとしか言わない。いい加減、キレたあたしは、武器を持って愛紗に迫ろうとした時、たんぽぽが帰ってきた。

どこにいたのか、聞いても「言っちゃいけないことになっているから」としか答えてくれなかった。

今度は、あたしの番かと思つて身構えていたけど、愛紗からは何の音沙汰もなかった。聞いてみても、向こうの都合でしばらく無理だつてさ。

ただ、気になるのは、たんぽぽがあれから、あまり、ご主人様を探したりしなくなった。ちよつと前まで、悪戯をして気を引こうとしていたのに。

腑に落ちない気分で一週間以上経つた時、たんぽぽに呼ばれた。なんでも、愛紗が忙しいから、たんぽぽが呼びに来たらしい。

言われるがままに連れてこられたのは、飯屋だった。

「ここにいるのか？」

「ううん。愛紗さんが、会う前にしっかりとご飯を食べとけてさ。

ちゃんと食べておかないと身が持たないよ？」

「ふうん、じゃあ、しっかりと食べとかないとなー！」

〈蒲公英Side〉

目の前でバクバクご飯を食べているお姉様は気づいていないけど、お姉様が食べてるご飯には、たんぽぽがこっそり、お菓をまぜてるんだよね。

刃さんとするようになってから、色々に見えるようになってきた。ご主人様は、普段、街によく行くのは、民の生活を見て、どうすれば、もつと良くなるのかを考えているとばかり思っていたけど、冷静に見てみると、ただ、女あさりをしているだけだった。

いつも暇そうにしているのは、早く仕事を終わらせているんじゃないかと、本当に暇で、ぶらぶらしているだけ、たまたま仕事があっても、他のみんなよりもはるかに少ないのに遅い。

刃さんの方が、みんなに頼られているし、お仕事はしつかりやっているし、アレも気持ち良いし、性格も優しいし、お姉様の目をさまさせてあげなきゃ！

お薬の効果がでてきてお姉様の手が止まりがちになってきた。

「そろそろ、行くっか！」

お代を払ってフラフラなお姉様の手をとって歩き出す。

〈周倉Side〉

たんぽぽがつれてきた馬超はうつろな目をしていた。薬の使用量はちゃんと説明しておいたはずなんだが…

褒めて褒めてと言った感じにこちらを見てくるたんぽぽのデコにデコピンをくらわされて問い質すと、馬超は鈍感だから、適量じゃ効かないかもしれないと思つて多めにしたとのこと、おいおい…

馬超はたんぽぽの手によりあっさりと服を脱がされる。

スレンダーな体に中々大きな果実が二つ。

馬超を抱き寄せると、彼女はあっさりと、俺の腕の中におさまった。

「あっ」

そのまま、胸を揉みし抱く。

「あ……あうん……ああ……あああん……あんっ♥」

最初は戸惑いがちな声も、次第に甘いものになっていく。

「気持ち良いでしょ？ お姉様」

「あ……うん……」

たんぽぽの問いかけに対して、馬超はかすかではあるが頷いた。右手は胸への愛撫を継続させながら、左手を馬超のマンコへと移動させる。

「ひゃう♥」

馬超が、悲鳴を上げて身体を震わせた。

「お姉様、逃げちゃだめだよ。これから、とつても気持ち良くなるんだから」

「は……あう……はあつ、あふつ、あ、ああん、あひっ♥」

「すごく気持ち良いでしょ？ ご主人様なんかよりも」

「ああ……あうっ♥ はうう……あはあん♥」

後ろから俺に抱かれて愛撫されている馬超の頭を抱いて、たんぽぽは馬超の耳元で囁く。

「ご主人様以外の人にされても、気持ち良いんなら、気持ち良いって言わないと、ね？」

「あつ、ひいつ♥ あん♥ ああん♥ やあん♥」

繰り返す、繰り返す、すり込むようにたんぽぽは馬超の耳元で囁く。

馬超は喘ぎ声を上げながら、振りほどこうとするように首を振るが、たんぽぽは離れず、囁き続ける。

「クス……ご主人様じゃないけど、気持ちいいんでしょう？ お姉様」

「いい……きもち、イイツ♥ ああん……イイツ♥」

ついに馬超が屈して、夢見るような口調で言った。

「素直になったね、お姉様。もつともつと感じて、ご主人様じゃない人で気持ち良くなって」

「はんっ♥ あひい……あああ……あつ♥ ひゃんっ♥ はひいん♥

♥♥」

「お姉様、ご主人様としている時よりも、助平な汗が、いっぱい出て来てるよ♥」

打ち合わせをしたわけでもないのに、積極的に参加するたんぽぽを最初こそ止めようかと思っただけど、彼女に、こんな才能があるとは……「ひゃうっ♥ あひんっ♥ こ、こんなの、はじめて……ああっ♥ おほおほお♥♥♥」

「どう、お姉様？ ご主人様はこんな気持ちよくなってるしてくれないよ？ この人を覚えたなら、もう、ご主人様ごときじゃ満足できないよ♥」

「そ、そんなの、ダメだ……あんっ♥ あたしは……」

「でも、イキそうなんですしょ？」

にんまりと笑うたんぽぽは、俺に焦らせと指示してくる。

「あたしは……あたしはごしゅじんさままいがいでイツたりなんて……」

「でも、気持ち良くてイキそうなんですよ？」

「あふう……あ、ああん♥ そこは……そこはダメ……」

馬超の体が震え、絶頂の兆しが見えてくる。ちらりとたんぽぽを見ると、頷かれた為、クリトリスをつまみ、とどめをさす。

「あはあ……ふああ♥ あ、あつ、ああああああ♥♥♥♥♥」

「お姉様、イッチャったんだあ♥ ご主人様じゃ無くて周倉さんに、それもチンポも突っ込まれずにイカされちゃったんだよ？」

身体を痙攣させる馬超を嘲笑い、たんぽぽは続ける。

「周倉さんの指で、ご主人様とした時よりも気持ち良くイッチャったんですよ？」

「うん……しゅうそうのゆびで、ごしゅじんさまよりもきもちよく……」

「そうだよ、ご主人様のおちんちんよりも周倉さんの指の方が気持ち良かったんなら、周倉さんのチンポでされたら、どうなっちゃうのかなあ？」

虚ろな目のまま、馬超の喉が鳴った。

「あ、お姉様。今、してみたいって思ったでしょ？ 周倉さんのチンポを体験してみたいって思ったでしょ？」

馬超の首筋から耳を舐め上げ、たんぽぽはさらに追い込んで行く。

「ひゃんっ♥ そ、そんな……こと……あ、ああん♥」

「お姉様、想像してみて、ご主人様よりも熱くて、ご主人様よりも大きくて、ご主人様よりもバッキバキに硬いチンポでオマンコを、ご主人様よりも深いところまで、ご主人様よりも激しくズンズンって突かれるの♥」

「あ、ああ、あひい……ああん♥」

馬超はまるで、チンポを求めるかのように尻を振る。

たんぽぽの手で勃起したイチモツが外へと解放され、そのまま、馬超のマンコに押し当てられる。

「やめ……て」

本能的に危機を感じたのか、馬超が身をよじるが、その動きは、逃げ出せるほどのものではなかった。

「刃さん、やっちゃって♥」

たんぽぽのGOサインを受けてイチモツを突き入れた。

「ああああああアアア♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

「入れられただけでイクだなんて、お姉様のど・す・け・べ♥」

「ひい……ひあんっ♥ いつ、いいい……」

馬超は自らも腰を振って快楽をむさぼる。

「ほおら、たんぽぽが言った通り、気持ちイイでしょ？」

馬超の耳に唇を寄せ、たんぽぽが聞く。

「あつ、あひいつ、あふうん♥ う、うん……あああつ♥♥♥♥♥」

「ふうん、気持ちいいんだ……本物のチンポの感触は、どう？」

「あ、あつい……あつくて……かたくて……あはあああつ♥ く、くるしいっ♥」

「そうだよね、ご主人様よりもおつきいもんね。でも、その苦しいのがたまらないでしょ？」

「はひい……あうっ♥ うん……イイツ、すごい♥ あああつ……ひゃあつ♥♥♥♥」

背後から、俺に突き上げられ、正面からはたんぽぽに言葉で攻められ、馬超は、激しく喘いだ。たわわな胸が重力に逆らっておどり、半ば開かれた口からは、涎がこぼれる。

「んああっ♥ はうっ、はひいいい……あ、ああああん♥♥♥♥」

「お姉様、気持ちいいんなら、そう言わないと」

「いい……ひああ……いひいいっ♥ いい……きもちいいのおっ♥」

もはや、馬超はたんぽぽの声に抵抗することもなく、受け入れていく。

「すごいっ♥ こんな……こんなのしらな……んああああ♥♥♥♥」

「お姉様、これが、本当の性交、まぐわい、交尾だよ♥」

「はあんっ♥ ああああ……あはああ……はうううっ♥♥♥♥」

「周倉さんとするの、気持ちいいでしょ？」

「あ……あふう……き、きもちいい……きもちいい♡」

「なら、ちゃんと、言わなきゃ」

たんぽぽの言葉に馬超が続く。

「ご主人様なんかよりも」

「ごしゅじんさまなんかよりも」

「周倉さんの方が」

「しゅうそうのほうが」

「とっつっても気持ちいい♡」

「とっつってもきもちいい♡♡♡」

馬超が、普段からは考えられないような言葉を叫んだ。

俺自身、肉バイブみたいな気分だが、妹分に調教される姉貴分の姿は、中々、面白く、興奮するものがあつたし、熱くとろけるような馬超の膺は、柔らかい圧力でイチモツを締め上げ、絡みつくような動きをして俺を楽しませる。

「ンあああアツ♡ す、すごい……すごい♡ も、もうダメ、ダメ、ダメえ♡♡♡」

たんぽぽがこちらを見てくる。その視線は射精するのかを聞いていた。俺が頷くと、たんぽぽは喜々として再び囁く。

「お姉様、イキそう？」

「ああツ、あひツ……イク、イクイク♡♡♡ ひあツ、ひあああああああアツ♡♡♡」

「イツてお姉様。周倉さんのチンポで、イツて♡ 周倉さんのアツツイのでイキ狂って♡」

「あツ、ひあああ♡ あつ、あんつ、ああン♡♡♡ ンああああアツ♡♡♡ イ、イク♡ イクう♡♡♡ イっちゃううツ♡ あツ♡ あああツ♡ ひああああああああああアツ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

体を仰け反らせて絶頂した馬超が、力無く崩れていくのを支え、寝台に寝かせる。

熱っぽい息を吐き続ける馬超の耳元でたんぽぽが最後の締めを囁く。

「お姉様、気持ち良くしてもらったんだから、ちゃんと、お礼を言って

ね」

「……きもちよくしてくれて……ありが……とう……ごございました……」

〈北郷Side〉

なんとか曹操軍を振り切ったどり着いた地だけど、まだ、俺の能力が浸透していない為、俺専用娼館を新設させられない。

朱里曰く、前の主があまりいい政治をしていなかったそうで、軍師や文官は内政で忙しく、武将たちは治安の安定の為、賊の討伐やら何やらで大忙らしい。

ま、俺は、いつも通り、判子を押し仕事に呼ばれない限りは、のんびりだらりとさせていたいただきますけどねえ。

「あ、ご主人様！」

街に行こうとしていると、たんぽぽが現れた。

体は中々良いんだけど、悪戯好きで事あるごとに俺を毘にはめようとする。最近は落ち着いてきたけど、どうしても、会うと警戒してしまう。

「あのね、ご主人様」

含みのある笑みを浮かべて手招きしてくるたんぽぽに耳を貸す。

「ふう♡」

「ツ!!」

突然、耳に息を吹きかけられて、思わず、ビクツとしてしまった。

「あははは、ごめんなさい。ご主人様がたんぽぽのこと警戒するから、つい」

本心から悪いと思っっているようには見えない謝り方をするたんぽぽにイラっとする。

「本題はね……たんぽぽとお姉様、ある人に会ったんだ」

「マジか!」

「うん、マジマジ♪ ご主人様、用事がないんなら、これから、たんぽぼたちの部屋に来る?」

「これはお誘いか!」

「ああ、今日は、特に用事もないし、行かせてもらおうかな?」

「じゃあ、お姉様呼んでくるから、少ししたら、部屋に来てね!」

今度は、一体、どんな技なのか、楽しみだなあ。っていうか、ある人とやらも俺たちについてきてくれていたんだな。麗羽たちの足コキも後々聞いたら、やっぱりある人とやらに教えてもらったらしい。

「なんで、俺、縛られてんの?」

「それは、ご主人様が暴れられないようにするためだよ」

「いや、暴れたりなんてしないぞ」

「絶対に、暴れると思うよ。ね、お姉様」

「あ……う、うん。そうだな」

裸で両手を天井から伸びた紐で拘束された(余裕を持たせてくれている為、辛くはない)俺の前には、下着姿の翠とたんぽぼがいた。

なんだかぎこちない翠をたんぽぼが引っ張って部屋の隅に行つて小声で何か話している。

一分もしないで二人は戻ってきた。

「じゃあ、はじめるよお♡」

いったい何をするんだろう? そう思った直後、たんぽぼの両手が俺の体にのびてきた。

「こちよこちよこちよこちよこちよこちよ♡」

「なっ!? あははははははははははは!!」

俺は不意打ちのくすぐりに声を上げて身をよじった。

「ふふ、まだまだ行くよ。こちよこちよこちよこちよこちよこちよ♡」

「ひやはははははははははははははははははははははは!!」

また、激しくくすぐられる。

しかも、今度は、翠が絶え間なくチンコをしごいている。

「や、わははははは……やめて……はははは……やめてくれえ!」

たんぽぽは、脇の下・首筋・太股・背筋と、ありとあらゆる敏感な部分を、くすぐり続ける。翠にチンコも扱かれてくすぐったいのと気持ちイイのがごっっちゃになる。

「あは……はああ……ひはあ……」

俺は体を激しく揺らすけど、二人は離れない。体に力が入らない、強烈なくすぐり攻めに声も枯れた。静止の声を上げようとしても、声が出ない。

「や……たの……はひい……たのふう……」

チンコを扱っていた翠の動きが変わった。

「うっ」

「ご主人様、ちんちんがびくびくしてるぞ♡ そんなにあたしのこちよこちよが気持ちいいのか?」

翠の手が亀頭や竿や袋を優しいタッチでくすぐりだした。

「ご主人様、もう出ちやうの?」

体中をくすぐりながら、たんぽぽが耳に息を吹きかけてくる。さつきされた時みたいなのゾクゾク感よりも、気持ち良くさの方を感じる。

「う、ああっ!」

「ご主人様、出しちゃえ、よ♡」

翠に言われるがままにチンコから激しく射精をした。

「うわっ」

「いっぱい出たね、ご主人様♡」

射精して倦怠感を感じ、翠たちの声が遠くから聞こえた。

「でも、まだまだ、くすぐりを楽しんでね♡」

まどろんでいた俺は再びの刺激で、覚醒させられた。

〈翠Side〉

白目向いてちんちんだけ立ててビクンビクン震えているご主人様をあたとたんぽぽで清めて寝台に寝かせる。

正直、刃とするようになってから、ご主人様としたいとは思わなくなつたし、ご主人様にしてあげたいとも思つてなかつただけど、みんなに捕まつて話を聞かされて、ご主人様の性欲処理をやるようになつた。

「たんぽぽ、指が疲れちゃつた」

「だったら、今度は代わるか？」

「ずぼらで大雑把なお姉様にご主人様の反応を見て、くすぐり方を切り替えるなんて芸当出来るとは思えないんだけど」

「なんだと!？」

「そんなことよりも、たんぽぽたちも体洗つて刃さんのところに行こうよ!！」

言うが早いのか、飛び出していくたんぽぽをあたしは慌てて追いかけた。

二十話（紫苑・朱里&雛里／紫苑）

〈周倉Side〉

荊州と益州を平定し、軍師にも武将にもようやく余裕が生まれてきた。

「早急な問題として、紫苑さんを仲間にしませう」

「確かに、間違いが起きる前にした方が良いわね」

「さんせー」

執務室で仕事がひと段落つき、みんなでゆっくりしていると、突然、雛里が提案し、詠が頷き、桃香が同意した。

理由がわからず、首をかしげる俺。

「実は、いつも通り、ご主人様が紫苑さんに手を出しました。で、問題なのは、紫苑さんの性欲です。底なしです。刃さんと一対一でやって刃さんが満足するまで出来そうな勢いです」

「旦那さんを失ってから、自分で処理するだけだったそれがあいつによって解放されて、ほぼ毎日のように朝駆け夜這であいつを襲っているわ。ひどい時は、昼間もね」

「そのおかげで、私たちが性処理に呼ばれることがなくなったのは良かったんだが、親衛隊から、不満の声が上がってきている。私にまで愚痴ってくるくらいだから、相当だと思う」

「ご主人様の御手付きさんたちからも、そんな声が聞こえています」

俺の前に飲み物を置きながら、楓が報告すると、その横から月がお茶請けを置きながら別の情報をくれた。

「桔梗さんも似たような感じですけど、あの人は、紫苑さんに便乗しているだけみたいなので、紫苑さんが納まれば、落ち着くと思うんです」
ってことで、黄忠を取り込むこととなったわけだが……

〈黄忠Side〉

「でね、刃さんのアレってご主人様よりもすぐくって、私、抱えられたまま突き上げられちゃったの♥」

「そ、そうなんですか…」

ニコニコと桃香さまが話されている内容は、ご主人様以外の殿方との閨の話。引き攣りそうになるのを必死にこらえて相槌をうつのだけれど、大丈夫なのかしら？

愛紗ちゃんに相談すると、劉備軍の起こりと、周倉くんの存在の大きさについて語られた。

わたくしがその場において、桃香さまの言葉を聞いてすぐに忠義を誓えただろうか？

わたくしが迎え入れたのは、桃香さまの実績と噂を聞いていたからだ。それがなかったら、ただの夢想家のたわごとと、聞き流していたかもしれない……

立ち上がったばかりの頃で、お金も地位も何もない状態の桃香さまたちが軍の中心となっていた周倉くんに体を使ってまで留めたことを、そしてその対価で残留した周倉くんをわたくしは、否定したり、軽蔑したりするつもりはありません。

ただ、話のついでに真面目だと思っていた愛紗ちゃんにまで、閨の話がされるなんて……

でも、ご主人様よりもはるかにスゴイって……とても気になる……ご主人様との一時は確かに気持ち良いものだけけど……

悶々としたまま、お酒を飲んでみると、周倉くんが現れた。

わたくしが酒豪だと聞いて一度、飲み比べを試みたいと思っていたとこの事で、わたくしも彼と話してみたかったので、渡りに船とその勝負を受けた。

飲みながら、色々と話していて、彼が、農民の出とは思えないほどの博識である事がわかった。

そして、ある程度飲み続けたところで、周倉くん提案された。負けた方が勝った方の言う事を聞くのはどうかと……

わたくしは、意地悪のつもりで「桃香さまたちとの肉体関係を今後一切断ってもらおう」と言うと、彼は「なら、一晩、閨を共にしてもらおう」と言った。

そこからは、二人とも無言で杯を空け続け、気がついたら、卓にうつぶせになって寝ていた。周倉くんは、その間も杯を空けていたらしい。

こうして、わたくしは、周倉くんと関係を持つこととなった。

ご主人様に申し訳ないという気持ちと、桃香さまたちの言うスゴイのに期待している自分がいた。

〈周倉Side〉

直球勝負に出てみた。

女性陣に何気ない会話の中で俺とのセックスについて話させて興味を持たせたとところで、飲み屋で偶然を装って遭遇し、飲み比べを挑んだ。俺が勝ったら、一晩共にするという条件でな。

前にも言ったが、俺は特典のおかげで酔っ払うことなんてない。

性欲のタガが外れていると聞いていた為、思いのほか、簡単に事が進んだ。

毎度おなじみの料金以上の金を渡すことで、口が堅くなる宿屋をこの地でも見つけ、そこに連れ込んだ。

「あつ、ああんっ、あふ……んっ、ああああ……はうん……」
悩ましい喘ぎが、室内に響く。

「ああん、だ、ダメですわ……うんっ、くあ、あひ……やあん♥」

桃香や麗羽を余裕で抜き去り、蜀乳ランキング2位の黄忠の爆乳を揉む。

「ああつ、はふん♥ んああ……あ、ああん……はひ、はふう、ああつ、ああん♥♥♥」

黄忠の後から両手を回し、左右の胸を無遠慮に捏ねる。黄忠は、媚びるように甘い声を漏らす。

「……乳首がずいぶん堅くなってきたな」

「あつ、あんっ、い、言わないでえっ♥ あつ、ああんっ、あ……きやんっ♥」

口では拒否の声を上げているが、これはただの言葉遊びでしかない。宿に着くまでも、宿に入り、事を始めるまでも黄忠は一度として逃げようとはしなかった。

大きく開いた胸元から手を入れて左右の乳首を摘まむと、黄忠は、少女のように可愛らしい悲鳴を上げる。黄忠は、寝台に腰掛けた俺に後から抱きすくめられ、その実り豊かすぎる胸を弄ばれている。

「あうっ、ああんっ♥ そんな、胸ばかり苛めないでください……あ、あつ、あふ、あうん♥」

「苛めるとは心外だな。ただ、可愛がつているだけだぞ」

上の服を脱がし、勃起しきった乳首を指先でなぶる。

「あひっ、あん♥ あああ……それ、ダメです……あひい♥ ダメ、ダメですわあ♥♥♥」

駄目と言いながらも、黄忠は、俺の腕の中で悩ましく体をくねらすだけで、やはり逃げようとはせず、むしろ、俺の体に、進んで身を委ねてすらいる。

「ああん……あつ、はうう♥ オ、オッパイが……お、オッパイが切ないんですっ♥ あふ、ああん♥ 乳首、乳首もう苛めないでください

いい♡♡♡」

「本当に言いたいことは違うんだらう?」

指で乳首を弾くと、頬を赤く染めながら、黄忠は体をヒクヒクとおののかせる。

「胸ばかりじゃなくて、こっちも可愛がつてくれ……だらう?」

右手で胸を弄びながら、左手を下の深いスリットの中へと滑り込ませた。

「ああんっ♡♡♡」

黄忠が、白い喉を反らせて、声を上げる。胸とマンコを同時に責める。俺の動きに合わせて黄忠は、悩ましげに大きな尻を揺する。

「ひうっ、んんっ、そこ……あああん♡　そこは駄目ですっ♡　はあ

……はうっ♡　くうん……あ、あつ、あああああっ♡♡♡」

黄忠が後を向き、俺の頭を掴んで引つ張り、強引に唇を重ねてきた。

「んんっ、んふ……んちゅ♡　ちゅっ、ちゅぶ……んむっ、んふうん♡」

甘えるような息が漏らしながら、黄忠は、俺とのキスを続ける。唇を吸い、舌を絡ませ、唾液を交換し合っても黄忠は、頭を掴んだ手を離さない。

「んちゅっ、ちゅっ、ん……ぷはっ、ああん♡　もう、わたくし……んく、あはあ♡」

熱い吐息をつきながら、黄忠は腰を揺すつておねだりする。

「ああっ♡　お、おねが……ああん、お願い♡　はあはあ……お、お願いです……わたくしのアソコに……アレを……」

黄忠は、服越しに尻をイチモツに押し付けてきた。

「あ、あああ……す、すごい……あふう……」

長い睫毛に縁取られた黄忠の両目が、期待に潤む。

黄忠を寝台に上げて服を脱がして仰向けに横たえる。俺自身も服を脱いでその上に覆いかぶさる。

「あ、あああ……すごい……大きい……」

俺のイチモツを見つめて、思わず、といった感じで、黄忠はかすれ声を上げる。

「これが欲しいか?」

「は、はい♥ んく……わたくしのオマンコに、そのチンポを、入れて、
ください♥」

そうしろと言ったわけでもないのに、黄忠は自分で股をひらき、指
でマンコを広げ、淫らな台詞を口にした。

「わかった。行くぞ……」

手で角度を調節しながら腰を進め、黄忠に膨れ上がった亀頭を挿入
していく。

「ん……はううっ♥ あああああ……わ、わたくしのなかに……あ
く、あうううううっ♥」

俺はさらに腰を突き出し、黄忠からかすかに苦しげな声が溢れる。

「ああん、あつ、あううう……すごい、すごい……ひいいっ、ま、ま
だ、まだはいつてくるなんて……あ、あふ、ああん♥♥♥」

一番奥を先端で突きあげて、俺のイチモツがここまで入っているの
だと黄忠に教えてやると、黄忠は背中を反らして絶叫した。

「あつ、あひいっ、あはああああ……あつ、だめ、ダメですっ♥ あ、
あああつ、イ、イ、イキます……イクうううううううううううう
ううううっ♥♥♥♥♥」

本格的に動き出す前に、黄忠は体を震わせて、絶頂していた。

「入れられただけでイったのか？」

「はああ……はあ♥ ああん、だって……あなたのチンポが、こんな
におくまで……あふうう……こんなの、はじめてですわあ♥」

「気に入ってくれてよかった……まあ、これから本番なんだけどな」

「え……ああつ、ま、まって……まだ、わたくし……あつ、ひううううっ
♥♥♥」

黄忠の制止を無視して、腰を動かす。

「んあつ、あふっ、あひいん♥ ああ、だ、ダメですっ♥ あつ、はう
ううん♥ まだ慣れてえええ、あつ、ああん♥ ゆる、ゆるしてえ♥
♥♥ あつ、くあ、あつ、あああああっ♥」

切羽詰まった声を上げながら、黄忠は寝台の上で体をくねらせる。

「あうっ、あつ、はううう……んああああ……あく、あつ、ああつ、あ
ひい♥ また、またイキそうっ♥」

「もうか？ 好きナだけイケ！」

「あつ、あああつ、うつ、うひつ、あひ♥ ひいいん♥ あああ、イキますう♥ イってしまいますっ♥ あつ、ああああ…：わ、わたくし、また…：おほおおお♥♥♥ イ、イク、イクううううううううううううううう♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

黄忠は、卑猥に腰を浮かせてチンポを膣内深くに迎え入れ、先程よりもさらに激しい絶頂に、快樂の悲鳴を上げる。

絶頂の余韻に浸る黄忠は、だらしなく表情を緩めて艶やかな唇から涎を垂らす。

そんな姿をさらしても、黄忠の美貌は扇情的な魅力を増していた。

「余韻に浸っている所悪いが、まだ、俺はイってないんだ、がー！」

「あおおおおおっ♥♥♥♥♥ あぎいい…：あ、ああん、あく…：あひつ、あああああん♥♥♥♥♥」

黄忠は、俺の体に腕を回してしがみつき、両脚で腰に絡み付けた。

「ハアハア…：あはあ♥ だれにも、されなかったおくまでどいて…：んああ…：き、気持ちいいですわ…：あつ、あはんつ、す、すてきいつ♥♥♥♥♥」

「そんなにいいか？」

「ああつ、はいい♥ とても気持ちいいの…：あ、あん、ふあん♥ あああつ、また、またイキますっ♥ あつ、あうつ、あうう♥ い、イっ、イ、イクっ♥ イキますう♥♥♥♥♥」

「そろそろ、俺も、出すぞ」

これまで以上に強い力で抱きつかれた。

「あああつ、イって♥ わたくしとイってください♥ ああつ、きてきてくださいっ♥ あああああん♥」

一気に腰を加速させる。

「あつ、お、おおっ♥ あひいいい♥ す、すごい…：あつ、あひあ…：あああつ♥ おくに、一番奥に届いて、突き上げられますう♥♥ ああああん♥ あ、ああああああ♥♥♥ イ、イクっ、イイク♥ イクう♥ イッグううううううううううううううううううううううううううう♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

〈北郷Side〉

最近、紫苑と桔梗がヤバイ。

二人とも、スゲエ良い体しているから、手を出したんだけど、ヤバイのに手を出しちまったらしい。

襲われると、向こうが満足するまで放してくれないから、夜這されて寝不足、朝駆けされて一日ベッドの上、って感じになる。

マジで勘弁だ。

もう、夜だけど、今日のところは、まだどちらとも会っていない。このまま、久しぶりに平穩無事におわれそうだ。

「ご主人様」

「ひいっ！」

神さまは優しくないらしい。振り返るとそこには、性欲の魔神……紫苑がいた。

「し、紫苑、どうかしたの？」

「ご主人様に謝ろうと思ひまして」

「謝る？」

「はい。夫を失ってから、性交を断っていた反動か、ご主人様と致した喜びのあまり、わたくし、少々、タガが外れていたようです」

あれで、少々なのか？ いや、アレは絶対に少々なんて生易しいもんじゃねえ!!

「い、いや、わかってくれたんなら良いんだよ」

「ありがとうございます」

なんだかよくわかんないけど、今後は、自制してくれるらしい。よかった!!

「つきましては、ある方に教わった技で、今までの様な自分勝手ではなく、ご主人様に気持ち良くなってもらいたいです」

ある方って言うのは、みんなの言うある人の事だろうか？

紫苑の言うことが本当なら、今までみたく立たなくなるまで絞り取られるような、俺じゃなかったら、死んでそんな奴じゃないはず…

また搾り取られるんじゃないかという恐怖を感じつつ、一体どんなことをしてくれるんだろうという、期待で、俺のチンコがいきりたち始めていた。

紫苑に導かれるままに部屋に入り、促されるままにズボンとパンツを脱いでベッドにあおむけになった。

「ご主人様、そのままでもいいですかいいね」

紫苑は俺の頭をまたぐように立ち、そのまま、腰を下ろした。紫苑の柔らかく大きな尻が顔に乗る。黒の大人っぽいセクシーな下着が俺の鼻に当たり、つつい、匂いを吸い込む。

朱里や雛里の様なちびっ娘の匂いとも、白蓮の様な大人になりかけの匂いとも違う、熟れた女の匂いにチンコが勃起した。

「よいしょ」

その姿勢のまま、紫苑は俺の腰を掴んで下半身を抱き起こした。属に言うチンぐり返しの態勢だ。

「ん……ちゅっ……れろ、んちゅっ……てろれる……」

「んんー」

玉袋をなめられた。しかも、柔らかい物が、チンコを包んでこすってくる。これは、まさか、おっぱいか!? 紫苑のぱっくりと開いた胸元にチンコを挟んで、そのまま、玉舐めされている。

「うふふ、れええ口♡ ご主人様、知っていますか? ここを蟻の門渡りと言って、男の人が女のように気持ち良くなれる場所なのですよ♡」

詠や猪々子がよく攻めてくる場所を舐めて紫苑が教えてくれる。だから、気持ち良かったのか……

「ここは、月ちゃんや詠ちゃんによく解されているようですね」「むづむづー」

続いてアナルを指でくすぐられた。最近、翠やたんぽぽのくすぐりを受けているせいか、体が敏感になっていて、ちよつとした刺激にまで、体が反応する。

「暴れないでくださいな。ここからです、よ♡」

紫苑の指が、俺のアナルに突き立てられた!!

「むふうう!!」

紫苑の細い指に、体をのけ反らせて悶える。本来出口として使用されるところを不意に侵食された嫌悪感が全身を走る。

紫苑は具合を確かめるように、中で指をくねくねと動かし続ける。

必死に静止の声を上げようとするけど、顔の上に乗ったケツが邪魔で声が出ない。

「大丈夫ですわ、すぐに気持ちよくなりますから。わたくしにお任せください♡」

指を抜ける寸前まで引いたり根元まで挿入したりする度に、アレを出すのに近い感覚が頭をよぎる。さすがに女の前での脱糞は恥ずかし過ぎる。

「ふひへふへええ!!」

「もつと力を抜いて下さいね。そんな調子だと気持ちよくなれません♡」

「ううう!!」

説明しがたい感覚と、チンコを包むおっぱいの感触が俺を追い込んで行く。

「慣れてきたみたいですね♡」

「ふあああ!」

ケツの奥にある何かに紫苑が触れた瞬間、背筋がゾクゾクとする感覚があった。ちよつとチンコの裏側に当たる部分にある場所に。なんというか、気持ち良いというよりは脳天に突き抜けるような感じが襲ってくる。

「大分ほぐれて、お尻が良くなってきたみたいですね。ご主人様のお尻が、わたくしの指を受け入れていきますわ♡」

「ああああ!!」

いつの間にか、指の数が二本になっていて、重点的にソコを責められ、グリグリと擦られると変な声が出るのを抑えられない。

ゆっくりと指が抜かれて爪の先辺りまで抜けると同時にチンコも亀頭のところまでおっぱいから抜けた。

「それ♡」

「ふがああああ!!」

指を一気に根元まで押し込まれてあの場所を擦られるのと同時にチンコが再びオツパイに包まれて、俺はこらえきれずに射精した。

ケツでイツたのか、チンコでイツたのか、わからなかった。

「強烈な脱力感と痙攣で、動けなくなっていた。」

「ウフフ、まだまだ気持ち良くなったださいね♡」

その声と共に、指とオツパイによる前後攻めが再び始まった。

暴走していた時と同じように徹底的に搾り取られているのに、あの時のようなつらさは感じなかった。

自分自身の何かが変わりだしているような気がして、恐怖を感じるとともに、この甘い誘惑の中にどっぷりと浸かりたいと思っっている自分がいた。

〈紫苑Side〉

何度もわたくしのおっぱいの中で出されたご主人様は、そのまま、ぐったりとされてしまった。

寝台から降りて用意されていた濡れた手拭いでご主人様の精を拭きとる。

ちらりと寝台を見ると、下半身が裸のまま大の字で寝ているご主人様がいた。

わたくしの股の下にいたのに、一度もオマンコを舐めたりしてくださらなかった。フガフガと激しい鼻息がくすぐったくはあったのだ

けれど、刺激としては弱すぎた。

何気なく、拭き残した精を指ですくってなめてみる。

「薄い……」

刃くんの濃厚な精に比べると薄く感じる。

桃香さまたちが刃くんにハマるのは仕方ないなど、今なら思える。
あんなに気持ち良くされたら、誰だってハマってしまうわ。

「……まだ、起きているかしら？」

「あつ、あああつ ♥ あひつ、あひい ♥ マンコっ、マンコ感じちやいますう ♥♥♥ イイ、イイのお……ひああああああ♥♥」

わたくしは、嬌声を上げながら、刃くんのチンポに犯される。

「あひい……いああああ♥ おっ、おほおおおお♥♥♥ また、またイキますうっ ♥ イク、イクうううううううううううううううう♥♥♥♥♥」

「俺もだ。出すぞ！」

「あああああ、来てえ ♥ 濃いので来てえ ♥♥♥ 紫苑のマンコに、濃いのをいっぱい注ぎ込んでください♥ あうっ、あはっ、あああああ！ イ、イイ、イクううううううううううううううううううううう♥♥♥♥♥♥♥♥」

わたくしが、激しい絶頂に達した瞬間、刃くんも膣に射精した。

「あひい♥ あついッ ♥ あついのッ ♥ ヤケドしてしまいますう♥♥♥ イ、イキますっ ♥ あついの出されてイクう♥ イク、イク！ イツグううううううううううううううううううううううううッ♥♥♥♥♥♥♥♥」

熱い脈動を感じながら、寝台に倒れる。寝台の冷たさが、ほてった体に気持ちが良い。

わたくしの中から未だに大きな物が抜かれるとすぐに朱里ちゃん

と雛里ちゃんが飛びつく。

二人の小さな舌で清められていくチンポを見つめていると、またほしくなってくる。

朱里ちゃんと雛里ちゃんがいたのに、無理やり入れてもらったから、少しは自制するべきかもしれないけれど、こればかりは、仕方ないわよね？

「刃くん、もう一度、ね♥」

「はわわ、紫苑さん、続けてなんてずるいです！ 冗談は、そのおっぱいだけにしてください！ 私、まだ一度しかしてもらってません！」

「あわわ、私なんて、指でもらっただけで、入れてもらってもないのよ…」

二十一話（焰耶&蒲公英&桃香&鈴々&朱里&雛里・
音々音&猪々子&詠／焰耶）

〈周倉Side〉

「現在の予算では、これが精一杯で…」

「えへへ♥」

膝の上に乗ってにっこにっこしている桃香をあやししながら、デスクワークをしつつ、桃香への説明を行う。

たまたま、軍師たちが忙しく、また、俺同様に文武官と化している一部の武将たちも出払っている為、俺と桃香しかない状況だったので、桃香が凄く甘えてきます。

ちゃんと仕事をしているし、勉強も頑張っている為、御褒美も込めてキスをしたり、軽い愛撫をしてイチヤイチャしながら、仕事をしている。

「ッ！ 桃香、降りてくれ」

「ええ〜」

「アレが来た」

「あ、うん」

不満そうな顔をしつつも桃香は素直に俺から降りた。

体裁をとりつくろう為、桃香を椅子に座らせて、俺はその横に立つ。

「この部分ですが…」

説明するフリをしたと同時に、扉が乱暴に開け放たれ、茶器を持った魏延が突撃してきた。

「桃香さま、お茶をお持ちしました！」

その勢いそのまま、湯呑みを置き、茶を入れ、茶菓子を置く。

ついでに、俺の分はない。

「……なんで、貴様が、ここにいるんだ」

すんげえ睨まれています。未だに関羽隊副長である俺ごときが彼女の大好きな桃香と一緒にいるのが、我慢ならぬらしい。

「仕事の為ですが？」

「なら、そんなところに立っていないで、さっさと仕事をしろ！」

「劉備さまに説明をしていたのですが」

「貴様の説明など無くても、桃香さまならお分かりになる！」

「ええ〜!! そんなの無理だよオ〜」

この間、訓練をしていたら、ケンカを売られた。わざと負けようかとも思ったけど、そんなことしたらそれを理由にいちやもんつけられそうなので、ワンサイドで完封してから余計に辛く当たるようになってきた。

めんどくさいことこの上ない。

「大体、貴様、もつと離れろ！ 桃香さまには御館という偉大な伴侶がいらいっしやるのだー！」

「ご主人様は、ご主人様であって旦那さまじゃないよお」

桃香の声など聞こえていないヒートアップした魏延は激しく、俺をののしる。

北郷のニコポによって御館と桃香さま大好き！ 状態である為、原作の北郷の様な感じに俺があてられている。本当に面倒だ。

「焰耶ちゃんを仲間にしよう！ じゃないと、私が刃さんとイチチャイチャできない!!」

「いいのではないのでしょうか？」

「はわわ、愛紗さん、即答はどうなんでしょう？」

「でも、あいつが刃を罵るのを聞いていると腹が立つのよね」

さて、どうやるかなあ……

前回の様な直球勝負は、まずダメだ。あれは、相手が利口だからこそ、出来た手だ。バカ相手にやったら、北郷にあっさりと報告されて蜀で、北郷が後先考えずに暴走する。

たぶん今なら、俺が勝てるだろうが、相当な被害が出ること間違い

なしだ。

星に使った手段は、現状で俺が二週間近くここを離れるわけにはいかないから無理。

なので、力技で行くことにしてみた。

〈魏延Side〉

桃香さまに誘われた！

誰もいない通路で突然、抱きしめられて、「夜、部屋に来て…」そうおっしゃられて、私のお尻を撫でてから離れた。

最初は、何があったのかわからなかったが、これはどう考えても、アレのお誘いだ!!

早速、同士である猪々子や、ねねに相談してみたら、絶対にそうだって言われた。

そして、夜になり、私は、身を清めて桃香さまのお部屋に向かった。御館の故郷での風習であるのつくをする、中から、桃香さまのお声が聞こえ、私であることを伝えると、扉が開き、桃香さまが招き入れてくれた。高鳴る気持ちを抑え、部屋に入った瞬間、頭に強い衝撃を受け、私は意識を失った。

「ああああ……あうっ、あひっ、んひい ♡ はへ……んああああああ ♡ ♡ ♡」

声に目を覚ますと、目の前には、裸の桃香さまが、淫らに腰を振っていた。ふわつとした髪と大きくて柔らかそうなおっぱいが動く度

に扇情的に揺れる。とろけた表情は、どうしようもないほどに劣情をかきたてる。

桃香さまに手を伸ばそうとした時、私は、自分の体が椅子に拘束されていることに気がついた。さらに服も脱がされていた。

「あ、焰耶、ようやく起きたんだ」

声の方を向くと、裸のたんぽぽがニヤニヤと笑っていた。

「たんぽぽ、私を解放しろ！」

「ん、ヤダ♪」

「なッ!? ふざけている場合か！」

「だって、あんたにみんな迷惑してるんだもん。だからね……あんたも仲間に入れようと思うの。あんだけ酷い態度取ったのに、仲間に入れてもらえるなんて、良かったね」

こちらに近づいてくるたんぽぽから逃げようとするも、私の手足は椅子に縛り付けられて距離をとる事さえできない。

全力で、手足を動かそうとするが、拘束は解けることもなく、椅子も壊れない。

私の目の前に立ったたんぽぽは無遠慮に私のアソコに指を這わせてきた。

「ひゃうっ」

「焰耶ってホント助平ね。桃香さまの見ただけで、ここを濡らすなんて。」

「こんなんじやすぐにねを上げちゃうかもねえ」

たんぽぽが何かの合図を送ると、朱里と雛里が現れた。二人もたんぽぽと同じように裸で、その幼いからだを隠そうとするそぶりも見せない。

「朱里、雛里、助けてくれ」

「ダメです。私たちだって怒っているんです」

私は何か朱里を怒らせるような事をしただろうか？ そんなことした覚えなど、一度もない。

「な、なんのことだ？ 私が何をしたんだ？」

「周倉さんを貶し続けました。私たちは何度も、周倉さんの存在の必

「要性と、重要性を話しましたよね？」

「何を言っているかわからなかった。あんな、体が大きくて、ちよつと強くてちよつと物知りなだけの男を貶したからだ？」

「確かに何度か、周倉という男について聞いた覚えはあるが、それはどれも誇張したモノだ。何故なら、それだけの事をやっている者が、副長の地位のままではいるはずがないからだ。」

「それに、あんた、まだ、桃香さまのお相手が誰か気付かないの？」
「え？」

「あ、あつ、あはあん♥ んひいい♥ あつ、ああつ、あうつ、あああ
ああああつ♥♥♥」

淫らに踊る桃香さまの胸を後ろから掴む大きな手、桃香さまを乗せている大きな足、桃香さまに深々と刺さっている大きなアレ……そして、桃香さまが振り向き、口づけを交わしているのは……

「な、何故、貴様がそこにいるのだ！ 周倉!!」

至高の存在である桃香さまとまぐあうことを許されるのは、御館だけだ。

それを、あんな副長ごときが!!

「やめろ！ たんぽぽ、やめさせろ!!」

「ダメに決まってるんじゃない。あんたのせいで、桃香さま、最近、全然、周倉さんとできないって嘆いていたから、相当溜まっているみたいだし」

「ふ、ふざけている場合かあ!!」

「ふざけているのは、あんたでしょ？ 大好きな人と大嫌いな人を見て、こんな濡らして♥」

「あんっ♥」

再び、たんぽぽにアソコをかき回されて、私の意志とは関係ない声が漏れた。

「たっぷりとあんたを調教してあげるから、覚悟しなさい♥」

たんぽぽの笑みに私は、恐怖を感じていた。

「ひっ、お、御館……」

「残念、ご主人様は、今頃、麗羽さんのオアソビと猪々子さんのオシオ

キと斗詩さんのオレイをいっぺんに受けている頃だし、あの三人を突破することができたとしても、愛紗さんと恋さん達も控えているから、助けになんてこれないわよ」

「な、なら、桔梗さま……」

「桔梗さんは、紫苑さんと星さんの二人が飲みにつれ出していますから、たぶん、夜が開けても帰ってくるかどうか」

「そ、そんな……」

「あ……ああん……あふ……んああ……」

両方の乳房を朱里と雛里に吸いつかれ、鈴々にアソコを舐められ、たんぽぽに身体全体を愛撫される。

気持ち良すぎて、抗えない……

「あッ、あアン……ひゃう、ンあ……あ、あつ、ああああああつ♡♡」

「はい、みんなはなれてえ♡」

「はあい(なのだ)♡」

「あ、ああああ……」

もう少して達するところで、四人は、私から離れる。これで何度目だったか、もう、わからない。

「フッフ、気付かれないようにイこうとしてみたんだけど、バレバレだよお♪」

「何度も言ってるじゃん、焰耶をイかせてくれるのは、周倉さんのオ・チ・ン・ポ、ただだって♡」

「……」

たんぽぽが私の体を撫でながら、囁くが、私は、齒を食いしばって無言を貫く。

「しょうがないなあ。二人ともよろしく」

桃香さまのアソコにまた、周倉のアレがずぶずぶと入っていく。

「あ、ああ……ああああ……」

「あくあ、あんたがほしいって言えば、桃香さまは、これ以上、穢されずに済んだのに……」

「わたしが……」

「そうだよお、焰耶が身を呈して桃香さまを守るんだよお」

「桃香さまを守る……」

「だから、負けたんじゃない。これは主の為に泥をかぶるだけなの。忠義の証なの♥」

負けじゃない……忠義の証……

たんぽぽにアソコを撫でられて、私は叫んでいた。

「あ、あああああ!! い、入れてくれ! 周倉のそれを私に!!」

いつのまにか、手足の拘束は外され、桃香さまを下ろした周倉は私を抱えて椅子に座った。

そして、その大きな物を私のアソコに狙いを定めて、私を下ろした。

「あ……ああああああああああああああああああ♥♥♥♥♥♥」

周倉のが私の中に入ってきた。御館との初めての時以上の衝撃だった。

「す、すご、すごひい♥ あ、ああん……まだ入ってくる……ひいひい

♥ は、はひ、はふう♥ お、おおきい……それに、すごくカタイ♥

あひ、あひいっ♥♥♥♥」

私は、周倉の腰の動きに合わせて堪え切れずに、喘ぎ声をあげてしまった。

アレが抜かれると同時に、御館への想いがかき出され、押し込まれると同時に、周倉に私が征服されていくのを感じてしまう。

「ああ、あひ♥ あん……ああん、あうっ、あひいい♥」

周倉の動きが、少しずつ早くなってくる。熱くて固いアレが、私の感じる部分をこすり、腰全体が熱くしびれたみたいな気持ち良さが走る。

「うっ、あうん、ああん、あはあ……あひ、あひいい、あひいいん♥♥♥」

不意に後ろから手が現れ、私のオツパイを鷲掴みにした。そして、オツパイを捏ね回し、固くなった乳首を指で扱く。

「ああんっ♥ あくっ、んはあ……あああん♥ あああああっ♥」

痛みを感じる一步手前のギリギリの激しい快感に、体をくねらせてしまう。

「どう？ 周倉さんのチンポ、キモチイイ？」

私の背後にいたのは、たんぽぽだった。

「あああんっ、か、感じるう♥ し、周倉のチンポ……チンポ、スゴイイっ♥」

周倉が、腰をさらに激しく打ち付けてきた。

私のお尻が、周倉とぶつかって、パンパンと恥ずかしい音をたてる。

私たちの周りで、桃香さまや朱里、雛里、鈴々たちが、私たちのまぐわう姿を見ながら、自分のアソコをかき回して自慰をしていた。

みんなに見られているという羞恥心と、みんなが求め乞うモノを独占しているという優越感が、たまらなく、私を興奮させた。

「ひっ、あひっ♥ ああんっ♥ ひぐっ、んひいつ、ひああああ……」
奥の奥をチンポに連続して突かれ、私の頭の中が真っ白になっていく。

「あっ、あへっ、あへえっ♥ も、もうらめ♥ らめえ……イク、イク、イク、イク、イクううう♥♥♥」

「俺も出すぞっ」

周倉の声と共に熱い衝撃が私の中を満たす。

「ああああああっ♥♥♥ イクっ、イクっ♥ イぐううううううううううううううう♥♥♥♥♥ あ、ああああ……あひゃああ♥ でてる……でてるう♥ す、す……い……あふうううううううううううううううううううう♥♥♥♥♥」

とてもさつき出したばかりとは思えないような量と勢いの精液が、私の膣に何度も何度も吐き出される。

「こんなの……はじめてえ♥」

私の中から抜かれたチンポに群がっていく桃香さまやたんぽぽたちに私も、けだるい体を押して参加していた。

〈北郷Side〉

「ん……アレ？」

目が覚めて体を動かさそうとしたけれど、身体を拘束されて椅子から立ち上がることができなかった。

しかも、服は脱がされて裸だった。

確か昨日は……みんなが忙しくしていたから、親衛隊といたしてそのまま寝たはずだ。

「起きたか、御館」

「焰耶か、どうなって……」

どうなっているんだと言おうとした俺が見たのは、椅子に座っている焰耶だったが、その恰好に言葉を失った。

胸のところがVの字に大きく開いた上着……ギリギリ、乳首が見えないくらいまで開いていて下乳のある高さでVの先が着ているくらい開いているから間違いなくブラはつけてない。

そして、下はマイクロミニのスカートで焰耶の黒いパンツが見えていた。

「そ、その格好は？」

「フフ……よろこんでくれたようで嬉しいな。どうだ、似合うか？」

「あ、ああ……似合ってるよ。とつても……」

で、なんでこんなふうになっているんだ？」

「ある人に御館を喜ばせる方法を聞いて、それを試そうと思う」

「そ、そうか！」

どんなことをしてもらえるのか、すごく楽しみだ。椅子から立ち上がった焰耶が、ゆっくりと俺のもとへと歩み寄ってくる。一歩踏み出すことにプルンプルン揺れる焰耶の巨乳にチンコが勃起してしまう。

そして、俺の目の前に立った焰耶は、そつとチンコを撫でた。

「あう……」

「しかし、いざ来てみれば、御館は他の女と楽しまれた後の様子。流石の私も、腹が立ったぞ。先に目を覚ました親衛隊の女はさっさと出て行ってもらったが」

「あ、えつと、ごめん……」

「そんな言葉くらいでは、許せないな。だから、お仕置きだ♡」

「お、お仕置き!?!」

その言葉に、猪々子のオシオキを思い出して、俺は期待と恐怖に震えた。

「フフ、お仕置きって言ってもそんなにひどいことするわけじゃない」
しゃべりながらも焰耶に撫でられ続けたチンコは、すでに最大サイズまで成長してしまっていた。

「御館、この程度で、おちんちんをビンビンにしていますっは、オシオキに耐えられないぞ♡」

そう言いながら、焰耶はチンコから手を放し、俺に背を向けると、マイクロミニの裾を握り、ゆっくりとたしく上げていく。

桔梗や紫苑みたいな圧倒的なサイズではなく、小振りで引き締まっている。だが、翠や蒲公英みたいに乗馬で鍛えられたものとも違う絶妙な美尻だった。

そんな白い美尻に黒いレースのパンツが食い込んでいて、俺は思わず、喉を鳴らしてしまった。

誘うように左右に揺れるそれを掴もうとするも、手は椅子に固定されていて動かない。極上の料理があるのに食べることができないよなもどかしさだ。

「じゃあ、お仕置きだ。御館の膝に座るぞ♡」

「えっ? あつ、あああ……」

目の前にあつた美尻がそのまま俺の膝というより股間の上に乗っかり、体重がかかり、柔らかくその白桃の形が潰れていく。

そして、俺の上に完全に乗ると、位置を確かめるように腰を揺らし始める。柔らかな尻がその動きに合わせて、ムニムニとチンコを刺激する。

「ああああ、焰耶、そんなに揺らさないでくれ」

「だめだ、これはお仕置きなんだから、私ののしかかり攻撃がお仕置きだ♡」

「で、でも、これ♡お仕置きっていうかむしろ……いえなんでも」

焰耶は、これをお仕置きって言っているけれど、男にはむしろこれは、ご褒美だ！

体重をかけてるのがお仕置きと思ってるみたいだけど、装備を付けていない焰耶はそんなに重くない。確かに膝の上でグリグリ動かれたら、痛かったかもしれない。だけど、焰耶の美尻がチンコあたる感触は、痛みなんてなくて快樂しかない。

揺れが、だんだん大きくなっていく。

チンコへの快樂もすごいが、揺れが激しくなっていくごとに焰耶の巨乳もダイナミックに揺れる。

丁度いい位置にある鏡が、焰耶の体で本来見えないはずの、焰耶の正面を映していた。

あああ、クソ、両手が自由だったら、思いつき揉みし抱いて感触を樂しめるのに!!

「ほらほら、もつと揺らすぞ♡」

「んはあああ……え、焰耶あ」

尻の谷間にちようどチンコが挟まって、柔らかい二つの山が左右から快樂パンチを繰り出して、俺を追い詰めていく。

「だ、だめだあ、出「ふう♡ 少し疲れたな、休憩だ」 ふえ？」

射精が目の前に迫った時、焰耶はピタリと止まった。

「え？ な、なんで？」

「ん？ どうした御館。私は疲れたから休憩をしているだけだ」

焰耶に挟まれたまま、気持ちいいけどイけないもどかしさに自分から動こうとするも、椅子にぎっちりぎちに固定されていて、身動きが取れない。

「え、焰耶、動いてくれ」

「は？ 御館、何を言っているんだ？ あれはお仕置きだぞ。自分からお仕置きされたいのか？」

そう言いながら、焰耶は俺に身体を預けてくる。焰耶の匂いが俺をより興奮させて、時間経過でクールダウンすることを許さない。

何も言えないでいると、焦らすようにわずかに腰を揺らしてくる。とてもじゃないけど、我慢なんてできない。

「焰耶に……焰耶に、お仕置きしてほしい！」

「クスクス……自分からお仕置きしてほしいだなんて、でも、望まれて
するお仕置きなんてお仕置きじゃないしなあ」

イクには足りないくらいに腰を揺らしながら焰耶が考え込み始めた。これじゃあ、いつになつてもイけない。俺は叫んでいた。

「じゃ、じゃあ、イジメてくれ、俺をイジメてくれ！」

「イジメてくれとは、御館は変態だな。」

まあ、いいか、この硬くなっているおちんちんを私のお尻でイジメてやる」

本格的に焰耶が俺に体重をかけてチンコをイジメ始めた。

「情けないぞ御館。私のお尻にイジメられておちんちんが泣き出しているぞ♡」

「あふ、あああああ……」

ゴールが見えたとき、不意に焰耶が腰を上げた。

「行くぞ、御館♡ と・ど・め・だ♡」

その言葉とともに、勢いよくケツを下ろして、チンコを押しつぶした。

「えあつ、あひいいいいいいいい!!」

焰耶のケツに埋もれたまま、射精した……いや、させられた。

「さあ、もつとイジメてやるからな、御館♡」

「う、うわああああ」

「あッ……ひゃん♥ ダ、ダメなのです……ソコばかりせめられたら、……ねねは、ねねは、またイっちゃうのですウ♥♥」

俺の左手にすがりついて拒否の声を上げながらも、マンコを弄る俺の手に自ら腰を振るねね。

「あふ……んああア♥ んちゅ、ちゅばば……ちゅばあ♥ あ、あんちゃん……んああ、あうん♥♥♥」

背後から抱きついて背中に乳首を擦りつけつつ、キスを求めてくる猪々子。

「ひゃあん♥ もつと、もつと強くオツパイ揉んでえ……んあ……あ、あひいん♥ あひゆう……あはアン♥♥♥」

俺の右手に自分の胸に押し付けながら、自分を慰める詠。

「ああああ♥ はあ……す、すごいイ……きもちイイ♥ 刃のチンポ、きもちイイ……あ、あひいいい♥♥♥」

俺の腰に跨り、チンポを根元まで飲み込んで腰を振る焰耶。

すでに焰耶以外の三人には、精を与えている。何とかという集会のメンバーらしいが、焰耶が入ったことで、巨乳属性が加わり、俺の楽しみも増えた。

「ン……んあッ……ああッ♥ も、もうすぐ、もうすぐイクうううう、ああア……あはア♥ イク、イクうッ……ああああああああああああアアアアアアアアッ♥♥♥♥♥」

二十二話（桔梗&紫苑／桔梗）

〈敵顔Side〉

ここの最近、紫苑の様子が変わった。少し前までは、ワシと競うように御館様とまぐわっていたというのに、今では、御館様が求めた時のみしか、お情けを受けていないらしい。

その余った時間を、少々蔑ろにしていた璃々との時間に当てているようだ。

興がそれでワシも御館様のもとへ行くのを控えることにした。

変わったと言えば、焰耶もそうだ。御館様と桃香さまの周りを子犬のように駆けまわっていたというのに、今は桃香さまのもとへは走っても、御館様のもとへは走らなくなった。

二人に何があったのだろうか？

そんな事を考えながら、訓練場まで行くと、金属同士がぶつかり合う音が聞こえてきた。

そちらに目を向けると、焰耶と愛紗の隊のところの副長である周倉が、お互いの獲物を持って戦っていた。いや、全力の焰耶を周倉が相手してやっているようだ。

二人の間には、それだけの力の差が見て取れた。

焰耶の本気の一撃を顔色一つ、表情一つ変えることなく受け止め、弾く。

何度となくそれを繰り返し、焰耶が体勢を崩したところで、周倉が足を払い、得物を突き付けられてその模擬戦は終わりとなった。

その後、周倉の差し伸べる手を焰耶が喜々として取り、仲良さげに会話をする姿があった。

焰耶のやつは、周倉をまるで親の敵と言わんばかりに毛嫌いしていたはずなのだが、本当に何があったのだろうか？

暇を見てその事を問うても「私がヤツを誤解していたのです。ヤツはとても素晴らしい男でした」と晴れやかな笑顔で言われた。そして、最後に「桔梗さまもその内わかります」との事だ。

それから数日後、紫苑を誘って飲みに行こうと思いい、探していると、

周倉と仲良さそうに並んで歩く紫苑がいた。声をかけると周倉と飲みに行くところらしい。ならばと、ワシも便乗することにした。

酒が入れば、その者の本心も垣間見えるというモノだ。

だが、まさか、あの紫苑相手に飲み比べで余裕勝ちするほどの酒豪だったとは……

〈周倉Side〉

酒の力って怖いなあつと常々思う。

「くう……」

イチモツに二人美女の唇を感じて、俺はたまらず小さくうめき声を上げてしまった。

紫苑と巖顔が、頬を寄せてイチモツに唇を押しつけ、舌を伸ばしている。

ダブルフェラなど、良くされているが、経験豊富な大人の女たちのそれは、巧みに快樂をコントロールして、イチモツをじんわりと熱くさせる。

亀頭や、竿の部分が、二人の唾液で濡れていく。別々に動く二枚の舌が絡みつく感触に、腰が砕けそうだ。

「うちゅ……んちゅ、じゅぶ♥ん……うん……んちゅつ♥」

「んふ……んふん、ちゅちゅう……はう、ちゅば♥んん……ふうん……」

片方が亀頭部分を吸引すると、もう片方がハーモニカでも吹くように竿の部分に唇を滑らせながら、舌で唾液を塗り付けるようにする。巖顔が俺の反応を楽しむように、舌と唇で追い詰めていき、紫苑もまた、楽しそうにイチモツを舐めしゃぶり、二人は妖艶に微笑む。

「紫苑、先に味わわせてもらおうぞ♥」

そう言つて巖顔は、イチモツを口内に収める。酒の力で体温が上

がって温かい口内の感触は、油断していると声を上げそうになる。「あ、ずるいわ♥」

淫らな音を立てながら、裏筋に沿って唇を前後させていた紫苑が子どものような声をあげ、仕方なさそうに脚や陰囊に口付けする。

「刃くん」

紫苑が、上目遣いでこちらを見る。

「んク、なんだ?」

「腰を上げてくれないかしら?」

ディープスロートをする巖顔の頭を持って立ち上がった。すると、すぐに紫苑は後ろに回り込んだ。

「前をとられたから、わたくしはこっちをご奉仕するわ♥」

そう言うと、紫苑は、俺のアヌスにキスをし、続けて舌を伸ばして舐めしやぶる。

前後からの快感に、俺の意志とは関係なく体が震えた。

「うおお……」

前と後を同時に責められて俺は不覚にも声を漏らしてしまった。

そんな俺の様子を見て二人はにやりと笑い、イチモツを口腔で摩擦し、肛門を舌でこじ開けるように愛撫してくる。

紫苑の舌がドリルのように固く閉じたそこを掘り、巖顔が休みなく舌を使いながら、イチモツを吸引した。

それが引き金となって限界を振り切った。

「出るぞー」

頭を押さえて逃げられないようにした巖顔の口内に大量の精を解放した。

「んんんっ♥」

巖顔は、チンポを口内に収めたまま、精を嚙下していく。

座り込みそうになるのをぐつとこらえて息を整える。

「ぶはっ、何という濃さと量……はああ♥ 口でただけだというのに、身体が疼いて仕方がない……」

「フッフ♥ 桔梗、この程度で、驚いていたら、身が持たないわ。刃くんは、その濃いのをたつくさん、何度も出せるんだから♥」

「おお、それは楽しみだ♥」

二人を寝台に上げて体を上下に重ねさせる。紫苑が上で厳顔が下だ。

紫苑が、厳顔を見下ろしながら、ゆっくりとその白い体を動かす。爆乳が爆乳を押しつぶし、桜色の乳首同士が触れ合っている。

「あん……ん……はあん♥」

厳顔がもどかしいような小さな声をあげる。

「桔梗、気持ちいいの？ 乳首がビンビンよ♥」

「はくう……そ、それは、おまえとて同じだろう♥」

厳顔も負けじと体を動かすも、上と下では自由度の差が大きかった。

紫苑が熱く濡れた厳顔のマンコに、自分のそれを重ねる。両者ともに負けず劣らず、淫らな蜜をにじませている。

「ああああん♥」

粘膜と粘膜が吸いつくようにぴったりとくっつく感触に、二人は声をあげていた。

紫苑がぐいぐいと腰を押しつけ、マンコが、クリトリスが、擦れ合つて愛液を溢れさせている。

「やああん♥ あああああ……あううん、ひア……ひああんっ♥♥♥」

「んん……あ、あああん……ああん♥」

自身も快楽に震えながら、まるで、男のように腰を使いながら、紫苑は厳顔を追い詰めていく。

「あう……はううんっ♥ あ、ああ、ああ、あ……ああんっ♥♥♥」

「感じているのね。刃くんが見てるわよ♥」

「ツ、み、みるなあ♥」

見られていることなど、先刻承知のはずだが、指摘されると意識してしまい、恥ずかしくなるのが、人の性だ。厳顔は、恥ずかしげに両手で顔を覆った。

「今さら、何恥ずかしがってるの？ 桔梗のココは、すごく濡れていて、ぐちやぐちやよ♥」

「やあん、ああ……あはあん♥」

「うふふ♥」

紫苑はますます激しく腰を動かす。疎外感を感じるものの、大人の女のレズプレイは、それはそれで見ていて楽しい。

「あ……ンあああッ♥ ま、まて、そんなにされたら……」

厳顔の体が、絶頂の予感に震えたが、紫苑は残酷な笑みを浮かべて腰を引いた。

「な、なぜ？」

イキそこねた厳顔が、不満げな顔でもじもじと腰をゆるする。

「どうしたのかしら？」

そう言いながら、紫苑は、厳顔の豊かすぎる双乳を揉みしだき、イキそうでいけないところで快楽をアイドリング状態に保つ。

「ン、あう……あふうん♥」

「イキたいの？」

「……」

厳顔が、ちらちらと俺の方を、正確には勃起したイチモツを見ている。その視線の先を追って紫苑は、笑みを深めた。

「刃くんのチンポでイキたいのね？」

「……ン」

こくりと厳顔が肯いた。

「出番よ、刃くん♥」

紫苑が、厳顔の体を押さえこんだ姿勢のまま振り向いて言った。

「早く、桔梗の……をなぐさ……ンあああああああッ♥♥♥」

紫苑の声が、自らの悲鳴によつて遮られた。俺が、紫苑の大きな尻を抱え、紫苑のマンコにイチモツを挿入したからだ。

「きゃんっ♥ あ、あひ、ああ、あは……あうううんッ♥♥♥」

完全に不意を突かれた紫苑は抽送に合わせて声を漏らす。

「そ、そんな……どう、してエ……ンああああッ♥♥♥」

快感に、両手で体を支えきれなくなり、厳顔に体重を預けながら、紫苑が言う。

「どちらに入れるかは、俺の自由だろう？」

容赦なく膣内をえぐる。

「それに、入れてくれって顔なのは、おまえも一緒だったぞ。紫苑」
「はううううんッ♥♥♥」

俺の突きに紫苑は声をあげ、厳顔の体にしがみつく。厳顔は、ぼんやりとした顔で、喘いでいる紫苑の顔を見つめていたが、すぐにニヤリと笑うと、紫苑の背中を両手で撫でまわし、うなじにキスの雨を降らせる。

「すごい……あんっ、あん、あひいんっ♥ おねがい、もっど、もっど強くして……おねがい♥♥♥ ああああああっ♥♥♥」

俺の激しい抽送と、厳顔の愛撫に、紫苑はとろけるような声をあげる。

そして紫苑の淫らな体が、絶頂を目の前にして小さく痙攣し始めた。そこで俺は紫苑の膣からチンポを引きぬいた。

「ひあああああッ♥♥♥」

絶頂直前の寸止めに、紫苑が悲鳴をあげるが、構わずに厳顔の濡れすぼった膣口に挿入する。

「ひああああああああっ♥♥♥」

厳顔が待ち続けた刺激に悦びの声をあげて体をうねらせる。

紫苑が快感を分けてもらおうと体をこすり付けながら、厳顔と口付けをする。

「んちゅ、ちゅム……んんん♥」

厳顔が、音をたてながら口腔をまさぐる紫苑の舌に舌をからめて応える。

「ぶはっ♥ 桔梗、すごいいい顔をしているわあ……」

熱にうなされた声でそう言うと、厳顔の顔を舐めまわす。

「ん……ああああ……ああん……きもちいい♥ はうううう……ひやうっ♥ んくううううんッ♥♥♥」

俺のイチモツを柔らかく締めつける厳顔の膣肉が、蠢動してさらに奥まで引き込もうとしてくるのに逆らって、厳顔の中から抜き、間を置かずに紫苑を貫く。

「いやああ♥」

「はあああアンッ♥」

巖顔の恨むような声と、紫苑の歓喜の声が重なる。弓なりに体を反らせる紫苑の体を、巖顔はもどかしさに身悶えしながら抱き締め、自分のそれと負けず劣らずの胸に顔を埋めるようにしながら、勃起した乳首を吸い上げる。

「きゃはあんッ♥」

紫苑が悲鳴のような声をあげて身悶えるが、逃すまいと巖顔の脚が細い腰にからみついてホールドする。

「あひゅううう♥ じ、刃くん、そのまま、そのままア……」

どうにか絶頂にたどり着こうと、イチモツをきつく締めつけながら、紫苑が訴えてくるけど、抜く。

「ひ、ひどいい……」

紫苑が泣きそうな声をあげるが、かまわずに巖顔を貫く。

「んひああああアッ♥♥♥」

蕩けるような快感をイチモツで感じながら、激しく腰を繰り出す。

「イ、イク……イッてしまう……ワシは……ああんっ♥ たのむ、周倉……いひイ♥ ワシを、ワシを、イかせてくれえ……ああうっ♥」

すでに何度もイキかけては放置を繰り返し、敏感になつて巖顔は、あつけなく絶頂へと追い込めたので、容赦なくチンポを抜いてしまう。

そして今度は、恨み言を言わせるひまも与えず、ぴつたりと重なった二人の秘所の中にチンポを差し込む。

「はひっ、おほおほおほおほおほおほおッ♥♥♥」

痛いほどに勃起し、包皮から顔を出しているクリトリスがカリに引つかかれ、竿にこすられ、二人は絶叫した。が、すぐによりチンポを感じるために、互いの腰をいっそう強く押しつけあう。さすが、交友の長い二人だ。

愛液にまみれた二人の女のマンコが、チンポを圧迫し、絡みつく。俺は、スパートをかけるべく、寝台がきしむほどに、激しく腰を前後させた。

「あああん♥ あく、はふんっ、んはあっ……ああん、あひっ、ひいいいん♥♥♥」

「んく……ひうん♥ ンあ、あぐう……ンあああああッ♥♥♥」

二人は、声をあげながら、互いの体を抱き締め合い、キスをし、互いに唾液を交換し合う。

「そろそろ、出るぞー」

重なり合った二人の女の間で、大量の熱い精液が発射された。

「うひひひひひひひひ♥♥♥ あついつ♥ あつひいつ♥ ひああ

あああああああッ♥♥♥♥♥」

どちらのものとも分からない、絶頂を告げる叫びが部屋に響く。

長い射精を終えて寝台に寝転ぶと、右に紫苑、左に巖顔が寄り添う。

「周倉、御主、すごいな……」

熱い息を吐きながら、巖顔の手が、俺の胸を這う。

「そうでしょう？ 刃くんは凄いんだから」

我がことのように誇らしげに言いながら、紫苑の手が内またを撫でてくる。

「次は、一人ずつ相手をしてやる。どっちが先だ？」

「当然、わたくしです（ワシだ）」

競うように抱きついてくる二人を抱き返し、この二人を相手に自分が明日の朝日を拝めるか不安に感じつつも、更なる淫欲の夜に浸る。

〈桔梗Side〉

酒のせいとはいえ、性を交わして理解した。周倉、いや、刃という男が蜀の武将や軍師にどれだけ大きな存在なのかを。

普段の姿勢も含めると、御館様以上に刃に心を寄せてしまうのは仕方ないと思えた。

アレだけ激しく、何度も何度も、ワシと紫苑が気をやり、果ててしまったのに、刃には、余裕さえうかがえた（やせ我慢）。

あの夜の事を思うと、体が、思わず熱くなる。

「あ、桔梗さま、いい所にいらつしやいました」

「え、焰耶、どうかしたのか？」

身震いする姿を見られ、恥ずかしく思いながらも、努めて冷静に問う。

「桃香さまが、桔梗さまに用があるとのこと、探していたのです」

「む、そうか、わかった。すぐに向かおう」

「こちらです」

そうやって通されたのは、謁見の間。

武将と軍師がずらりと並ぶその中心に有無を言わせずに座らせられた。周囲からぶつけられる殺気は、ワシでも恐怖を感じる。

視線の隅で、にこにことしている紫苑が見えたが、助けしてくれる気はないようだ。

ワシが一体何をしてしまったんだと戦々恐々としていると朱里が口を開いた。

要約すると、

・ 御館様に刃との性交がばれると、とてつもなく面倒なことが起きる為、表向き、御館様を好いている姿勢を見せる事。

・ 刃と性を交わすのは良いが、公私をちゃんと分ける事。 仕事中に盛ったら、罰を与える。

どんな罰かは、星に聞け（この時、あの星が真っ青になってガタガタと震え、月が黒い笑みを浮かべていた）。ただし、刃から求めてきた場合は御咎めなし。

・ 御館様を好いている姿勢を見せる為に、御館様の性欲処理をしる。最後までしなくていい。

・ 刃の都合を優先し、邪魔をした場合には、罰を与える。 罰の内容は麗羽に聞け（麗羽が真っ青になり、斗詩が空恐ろしい笑みを浮かべていた）。

最後に、箱と手紙を渡された。

〈北郷Side〉

なんていうか、城の雰囲気が変わった気がする。

曹操軍と五胡がそれぞれ、怪しい動きを見せているらしくて、戦力強化も兼ねて近々南蛮へ遠征する予定になった。

ジャングルとか勘弁だし、それに手に入るのが、ロリニャン娘ばかりじゃん、やる気にもなんねえ。

適当な奴に任せて俺は、ここでのんびりとさせてもらおうと。

今日は、仕事の日で大量の書類に判子を押し続けた。腕が腱鞘炎になっってしまったそうだ。

終わった時には、もう真っ暗だ。

飯も食ったし、今日は疲れたし、寝よっかな？

「おや、御館様ではないですか」

そんな事を考えていた。俺の前に現れたのは、蜀一番のオツパイ……じゃなくて桔梗だった。

ちよつと前まで、紫苑と競うように襲ってきたけど、最近落ちついたみたいで、頻度も下がってくれて大助かりだ。

遅れていた俺専用の娼館もようやく完成した（当然、周倉たちの手が入っている）。

桔梗は、色っぽい笑みを浮かべて俺の腕を胸の谷間に挟んで耳元に口を寄せてくる。

「これから、御館様の部屋に窺っても？」

耳をくすぐる声と柔らかいオツパイの感触に思わずうなずいていた。

疲れた手も桔梗の爆乳を揉めば、癒されるだろうしな！

部屋に入っただけで、壁に手をつくように言われた。

「ある者から、面白い事を教えて頂いたので」

その一言で俺は大人しく従った。

後ろから、抱きしめられ、背中の柔らかい感触を堪能していると、桔梗の手が、段々と下にさがっていく。背中に感じる柔らかい感触も一緒に下がる。

手が股間まで来ると、艶かしくズボン越しにチンコを撫でまわして、それから、ズボンとパンツを脱がされた。

右手でチンコを扱きながら、左手がケツを撫でまわして、指先でケツ穴をノックしてからゆっくりと、指を侵入させてくる。

「あ、あああああ」

「さすが、月や詠に舐めとかされ、紫苑に解されているだけあって、御館様のここは、御館様の懐のように簡単にだれでも受け入れるようだよ♡」

後の穴を犯されながら、チンコを激しくしごかれ、俺は、呆気なく、イってしまった。

崩れそうになる体をケツ穴に入れられた指で支えられ、声を上げる俺にクスクスと笑いながら、桔梗は、もう一度、壁に手をつけて言ってくる。待つてほしいと言おうとしたけど、ケツを突く指が巧みに動いて、俺の声を殺す。

ヒイヒイ言いながら、手をつく俺の尻を撫でていた桔梗の左手が離れ、ケツ穴に何か当たった。

「御館様、今度のは、少し太いですぞ♡」

「え？ お、おおお!? あっ、あがあああああつ!!」

指じゃ無い、それよりも遥かに太い物が、俺のケツにメリメリと入ってくる。

「御館様、滑りを良くする物を塗ってはありますが、あまり力むと裂けて、この一生おむつの世話になることになりますぞ」

「あぐッ」

一生おむつを避けるため、言われた通りに力を抜こうと努力するが、少し入ってくることに息苦しさにも似た違和感がせり上がってきた。

て思わず、力が入る。

「しかたないですな。一、二、の、三で入れますぞ」

「ちよ、ちよっとー!」

「一、二…」

三に備えて思わず息を吸い込む。

「の!」

「おごおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

〃の〃で、〃の〃で入れられた…

文句を言いたくても言える状態じゃ無い。声を出そうとしても、まるで鯉みたいに口をパクパクと動かすことしかできなかった。

何とか振り向いたそこには、ペニバンを付けた桔梗がニヤニヤと笑っていた。

その状態のまま、桔梗は動かずに俺の体を撫でまわす。

「フム、御館様も大分慣れてきたご様子。では、動きますぞ♡」

「ぬ、ぬいて…」

「ウソをおっしゃいますな。ここは、喜んでいらつしゃいますぞ♡」

俺の意志とは関係なく、再び勃起したチンコを一撫でしてから、両手で腰を押さえて、ゆっくりと桔梗は腰を動かし始めた。

「おああああああ…」

紫苑にケツを掘られた時の様なゾクゾクとしたチンコで感じる気持ち良さとは別の何かが、腰から頭へと駆け抜けていく。

徐々に早くなる桔梗の動きに、何が何だか分からなくなり、意識が薄れていく。

そして、大きな、何と言えはいいのかわからない。大きな何かが桔梗のが突き上げられる度に段々と頭へと上がってきた。

「あ、ひああああああああああ!!」

射精じゃない。

それとは違う、あの大きな何かが頭に上り詰めた瞬間、チンコが暴発した。

「御館様、女の絶頂は如何でしたかな?」

「おんなの…:…ぜつちよう?」

「さよう、さあ、更にご堪能あれ」

完全に立つことのできなくなつた俺の両足に手を回して抱え上げた。ケツにはまだ、ペニバンが入つたままだ。

「や、やめて……くれ」

今、感じた快樂に慣れてしまう恐怖と、期待が俺の中で入り混じる。「ご安心を、御館様の尻が閉じなくなつてしまうような事態にはならぬよう、注意しますので」

桔梗は、俺を抱え上げたまま、体を揺らした。

〈周倉Side〉

何のめぐり合わせか、飲み屋に行つたら桔梗が一人で飲んでいたので声をかけてみたら、さつきまで紫苑も一緒にいたけど、娘に早く帰ると約束していた為、帰つてしまい、飲み足りない桔梗が一人で飲んでいたらしい。

ついでに俺は、ようやくデスクワークが終わつて夜食に近い夕食をとりに来たのだった。

二人で飲んで、そのまま宿屋へGOした。

「あん……はふ……んふう♥」

寝台に仰向けで寝転ぶ桔梗が、甘い喘ぎを漏らす。その上にかぶさつて服の上から、乳首の辺りを刺激すると、すぐに服が僅かに盛り上がった。

「ワ、ワシの乳は、こんなにいやらしく……あ、あん……無かつたはずなのだが……んくつ、はううん♥」

服を下にずり下げ、乳首を同時に転がすと、桔梗は、俺に体を預けて快樂にうち震える。

「ち、乳だけでこんな……ひあつ、ああんっ♥ おまえのせいじゃ、あううん……だから、あああつ、ああん……せきにんをとれ……う

くっ、あふうん♥」

「責任？…どうやって？」

俺は、桔梗の爆乳を揉みながら聞く。

「き、きまっっているであろう……あつ、ああん……わ、ワシのオマンコを……あつ、あうん……おまえの極太チンポで……あうっ、あうん……なぐさめつづけろ♥ あふう♥♥♥」

熱い吐息をつきながら、桔梗は、腰を股間のあたりに押し付ける。

そこはすでに濡れて、色っぽい黒い下着では吸い切れずに愛液があふれ出ていた。

「おいおい、すごい濡れ方だな」

「あああ……あふう♥ ワシのマンコが、んふう……ぬしのチンポを
はやくむかえたいと、ハアハア……いつておる……あうっ、はふう♥」

おもらしでもしたかのようなびしょ濡れの下着に手をかけると、こちらの意図を察して腰を上げてくれたが、濡れているだけあって、脱がすのに苦労する。

「今度からは、これはつけてこない方が良いな」

そう言つて下着を捨てると床にべちよっという音がした。

「そ、それは、さすがに……」

「その方が、俺も興奮する」

「……はあ♥ ぬ、ぬしが、そう言うのなら……」

普段あんなだけ、胸元さらしてノーブラなのにノーパン命令は恥ずかしいらしいが、取り出したイチモツを見ると、熱い吐息を吐いて頷いた。

勃起したイチモツで入口周辺を撫でる。

「あふっ……ああん♥ はあん、あああん♥」

桔梗は喘ぎ声を上げながらマンコにイチモツを当てようと腰を振り、愛液が飛び散る。

「はあっ、あああ……刃のチンポ♥ 入れてくれっ、ワシの……い、淫乱なマンコに、そのぶつといのを……はああん♥」

興奮に息を荒げながら、桔梗は卑猥なセリフを口にして、マンコを両手で開いて俺を誘う。

「ああ、入れるぞ…」

亀頭を、濡れに濡れた秘裂に押し付けた。

「はあああ♥ くるのだな♥ あのおとこらしいチンポが、んあああ
あ♥」

俺は、桔梗の腰を捕らえ、腰を進ませた。

「あつ、あぐううう……いい、いい♥ あああ……す、すごい♥ うぐつ、
ああああああ……うつ、ああああ♥ ひiiiiiiiiii♥♥♥」

悦びの声を聞きながら、イチモツの先端で桔梗の肉をかき分けていく。そして、そのまま、桔梗の一番奥まで一気に貫いてやった。

「あひゃあああああああ♥♥♥♥♥」

膣内がイチモツを包み込み、強烈に締め付けてくる。

桔梗は目から涙を、口から涎をこぼして体を痙攣させている。

「うつ、うああ……あうん……んひい♥」

まるで手で握りしめられたような圧力に抗いながら、腰を使い始めた。

「あうつ、うあああああ……あひいつ♥ ひあつ、ひいつ、あひゃああ
あ……いい、イイイ……あふ、あひい……ひつ、ひいん♥ あつ、あ
ああああ……すごい……あああ、刃のチンポお♥ ンあああああつ
♥♥♥♥」

俺は腰を動かし続けながら、腰から手を離して目の前でダイナミックに踊る爆乳を鷲掴みにする。

「ああつ、あああああ♥♥♥♥」

桔梗が、嬌声を上げる。柔らかくしつとりとした弾力のある双乳を、乱暴に捏ね回す。

「んっ、あつ、あはあん♥ あああ……いい、きもちいい♥ はああ
……ちちが、ちちがかんじるう……ああ、あああん、あふうん♥♥♥」
桔梗の結わえられていた長い髪がほどけ、それを振り乱しながら、かぶりを振る。

俺は、続けて堅くしこった乳首を、指で摘まんそのまま、持ち上げた。

「あひiiiiiiiiii♥♥♥ のびるウ♥ ちちが、ちくびが伸びてし

体の上に重みを感じて目を向けると、刃が起きている時には、見られないあどけない寝顔で寝ていた。

「ンッ♥」

刃を横に降ろそうとして、まだ、熱を失っていないチンポがワシの中にいることに気がついた。

「フッフ、ワシを魅入らせた責任、ちゃんととるのだぞ」

横に降ろした刃に身を絡めてワシは再び目を閉じた。

二十三話（翠&蒲公英・焰耶・桔梗・紫苑／なし）

〈??〉

「集まってもらったのは他でもないわ。近々予定されている南蛮遠征に行くのは、わたくしたちになりました」

「へえ」

「ほお」

「そうなのですか!？」

「ええ、そうなの。更に言うと、刃くんも行きます!」

「「ツ!」」

「これは、絶好の機会です。わたくしたちは、桃香さまや愛紗ちゃんたちに比べて圧倒的に刃くんと過ごしてきた時間が少ないのですから……ここで! この遠征で! その遅れを取り戻しましょう!」

「「おおー!!」」

「で、方法は、どうするんじや?」

「ご主人様に聞でおねだりしてわたくしたちの衣装を考えて頂きましょう。そして、それを使います」

「「おおー!!」」

「ご、ご主人様の考案した衣装かあ……」

「お姉様、想像して、刃さんにいつも以上に愛してもらえる自分を!」

「して紫苑、璃々を置いていつてしまつてよいのか?」

「しばらく構っていなかった反動で、構い倒していたら「お母さんちゃんと仕事して!」と叱られてしまったの」

「極端すぎるからだ……」

※今回もコスプレさせる予定ですが、衣装を文字で説明するのがめん……難しいので、先に上げてしまいます。

どんな感じかは、脳内で想像してください。

ついでに、今回は、クイーンズブレイドでまとめました。

以下、コスプレ内容

- ・ 翠 ⇒ 戦闘教官アレイン
- ・ 蒲公英 ⇒ 森の番人ノワ
- ・ 焰耶 ⇒ 甲魔忍軍頭領シズカ
- ・ 紫苑 ⇒ 帝都の聖女メルファ
- ・ 桔梗 ⇒ 武者巫女トモエ

以上です。※

〈周倉side〉

紫苑をリーダーに、俺が副リーダーとして南蛮遠征が開始された。

人選については、早期に俺が行くことは決定したのだが、その後、武将と軍師たちは誰が行くかでもめたのだが、紫苑が感情的になった少女たちを上手く操って、自分を含めた新しく入った翠・たんぽぽ・焰耶・桔梗を選出させた。

あの手腕は、見習うべきモノがあったな。

そして出発した翌日、泊まった宿から出ると、武将たちの衣装が変わっていた。

色々と突っ込みたい物もあったが、それらは飲み込んで、似合っているだけ告げた。

「で、刃さん、一番似合っていると思ったのは、誰だったの？」

「この状況で聞かれて、おまえたち以外の答えを出すと思うか？」
「じゃあ、たんぽぽとお姉様なら、どっちが可愛い？」

南蛮に向かって二日目夜、宿の俺の部屋に翠とたんぽぽがやってきていた。

椅子に座る俺の横に寄り添うように座る翠と、俺の背中にくっついて
いるたんぽぽ。

「フム、たんぽぽだな」

「わあい！」

「そんなあ……そうだよなあ、あたしなんかよりもたんぽぽの方が……
突然、暗くなつてぶつぶつ言いだした翠のフォローもちゃんとする。

「だが、どっちが綺麗か聞かれば、翠だな」

「あqwse drftgyふじこーp!？」

「あははは！ お姉様照れてるう♪」

慌てだした翠をたんぽぽが笑う。

アワアワ言っている翠を抱き上げて、背中にくっついたたんぽぽをそのままに立ち上がって寝台に移動した。

寝台に腰を下ろすと、翠は右側に移動して身を寄せて胸を押しつけてくる。後にいたたんぽぽも左に移動して胸を押しつけながら、二人で協力してズボンとパンツをおろしてイチモツを握った。

ダブル手コキを受けながら、二人の申し訳程度の長さしかないスカートに手を入れると、二人の生尻に触れた。どうやら、ノーパンでいたらしい。

「二人とも、下を穿いていないのか？」

「あん♥ 刃さんの部屋に来る前に脱いできたの♥」

「あん……桔梗にさ、下を穿くなって言ったんだろ？ だ、だから、あたしたちも……ああアツ♥ う、うれしいか？ はあん……」

「ああ、うれしいな」

「えへへ♥ 刃さんのタマタマ、モミモミしてあげるう♥」

色っぽく吐息を漏らしながら、たんぽぽがその滑らかな手で玉袋を優しく揉み上げる。

「あふっ、あたしは、こっちを気持ち良くしてやるからな♥」
翠が慣れた手つきで竿を抜き、亀頭をサワサワとあやしく撫でまわす。

左右から抱きついて火照った体を俺にすりつけながら、イチモツに刺激を与えてくる。特に肌の露出が多いたんぽぼは、胸を覆う布が外れてぷるんと胸をさらす。そのまま、柔らかい感触を俺に与え続ける。

尻肉を撫でまわし、割れ目へと指をさし向けてアナルを撫でる。

「んああッ♥ あひっ、あはあん……くうううん♥」

二人揃って身を逸らしてぴくんと震えた。すると、さらに体を密着させてイチモツを刺激してくる。

俺たち三人で相談したわけでもなく、互いの舌を伸ばし合い、三枚の舌が、まるで蛇のように絡まり合う。

「ん……ちゅっ、んん……れろ♥ んあ……ちゅ、ちゅっ、ちゅむ、じゅるり♥♥」

寝台に横になった俺の上にたんぽぼが跨り、イチモツに手を添えながら、ゆっくりと腰を落としていく。

「ごめんね、お姉様。刃さんの濃いのを先にもらっちゃって♥」

「じゃ、じゃんけんで負けた以上、文句はない……」
そう言いながらも、悔しそうに握りしめた拳を見つめている翠に意地悪な笑みを浮かべ

たたんぽぼは、イチモツを飲み込んで行く。

「あはあアッ、刃さんのやつぱり大きくてかったあい♥」

たんぽぼが、うっとり目を閉じて声をあげる。

たんぽぼはゆっくりと、感触を確かめるように腰を動かし出した。そのひきしまった小ぶりな尻を、いやらしく前後に揺らす。

「あうっ、あああああ♥ ひっ、ひああ……あん、あああん♥♥♥」
たんぽぽが喘ぐ姿を翠が、頬を赤く染めてじっと見つめている。

「……翠、こっちに来い」

手招きすると、近づいてくるが、俺の意図がわからないらしい。

「え、えっと……」

「刃さんが、お姉様のアソコを、お口でしてくれるってさ ああん♥」

戸惑う翠に、妖しく微笑みながらたんぽぽが答えを教えた。

「ええ!? で、でもオ……」

もじもじする翠にもう一度手招きする。

「翠、来い」

しばし逡巡した後、翠は、恥ずかしそうに肯いた。

「お、お願いします」

そう言いながら、翠は俺の頭をまたいだ。すぐ目の前に、透明な液をたたえた翠のマンコが迫るが、あと一步のところまで止まう。

俺は、顔に股間を押しつけるのをためらう翠の白く丸い尻を両手で捕まえた。

「ひゃ、ちよつと……」

驚いた声をあげる翠の尻を引き落とし、濡れきったマンコに口を押しつける。

「あひいいいいいッ♥♥♥」

音をたてて啜ると、翠の体が痙攣したが、イチモツをたんぽぽの膣に柔らかく締め付けられて興奮している俺の愛撫に手加減の文字はなかった。

「あん♥ ああああア……はう、んああッ♥♥♥」

高い声をあげて喘ぐ翠の膣口に鼻をうずめ、クリトリスを舌でなぶる。

「お姉様、気持ちイイ? 気持ちイイの?」

声を上ずらせながら、翠が訊いた。その腰の動きはますます速まり、着実に絶頂へと向かって突き進んでいる。

「イイ……きもちいい♥♥♥ あ、ダメだ、そこまで、しちやッ♥」

翠のクリトリスを口に含むと、さらに大量の愛液をあふれさせた。

だからっ♥♥♥」

翠の唇が、俺の返答を塞ぐように俺の口に吸いついた。

「んっ、んぐ、んむ、ちゅぶぶっ♥　ちゅぱ……んはっ、んちゅ、ちゅむ、ちゅう……ぷはあっ、んちゅううううっ♥♥♥」

貪るようなキスの合間に息をつきつつ、翠はなおも腰を使う。その淫らな腰の動きにもどかしさを思えて俺も腰を動かす。

「んああ♥　あん、はあん……あっ、ああっ、あはア、あはああん♥♥♥」

俺に腰を打ちつけながら、翠はしなやかに体をのけぞらせて声を上げる。

「んあっ、あああっ、はああんっ♥　と、届いてる、奥にい♥　あん、んひい、奥にこっこつしちやつてるよお♥♥♥　んあああああ♥　あ、あああ、あは、あひああっ♥」

膣がチンポを締め付けてくる。それに負けないように翠の腰に指を食い込ませ、さらに腰を使う。

「ああん、あふう、くううんっ♥　ううん、ん、うふうん♥　あ、あああ、あは、奥に響いてるう♥　うあっ、あっ、あああっ、ああああああああッ♥♥♥」

口から涎を垂らしながら、翠が声を上げて悶える。目の前で揺れる胸に顔を埋めながら、俺は、腰の動きを加速させた。

「あっ、ああっ、あああっ♥　あひ、あひっ、あっひいひい♥♥♥　んああ、チンポすぎさるう♥　あああああ、あっ、ひいひいやああんっ♥♥♥」

「翠、そろそろ、出すぞ」
「あああん♥　中、中に出して♥　あああんっ♥　んあああああ♥♥♥」

歡喜の声を上げる翠の膣が、俺のイチモツに早く出せと締め付ける。グイグイと腰を使い、俺から精を搾り取ろうとするマンコに、こちらも激しく突き上げる。

「あああああああっ♥♥♥　イ、イク、イっちやうっ♥　刃の、刃のデカチンポでイクう♥♥♥　ああッ、イツクうううううううううううううううう

うろうう♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

先に絶頂に至った翠の四肢が、俺にしがみつく。

翠の胸に顔を埋めながら、俺は痙攣する膣内に精液を迸らせた。

「ひああああああああん♡♡♡♡ あひっ、んはああああああ♡♡

♡ 出てる、出てるう♡ イク♡ イク♡ アツくて、イっちゃうう

うろうろうろうろうろうろうろうろうろうろうろううううううう♡♡♡♡

♡♡♡♡♡♡

精を放つたびに、翠が俺を抱く腕に力を込める。

出し切ると、うっとりとした声を上げながら、翠は汗まみれの全身

を弛緩させる。

翠の胸から顔を上げると、オナニーをしながら、順番待ちをしていたたんぽぽと目が合った。手招きすると、歩けないらしく、這って俺のもとへとやってきた。

翠もまだ足りないらしく、腰に足を絡めて離そうとしない。

まだまだ、夜は長そうだ。

遠征三日目、今日はほど良く村や町がなかった為、野営となった。

まあ、指示を出して、これからの進行予定を確認したら、特にやる

こともない為、自分の天幕に入ると、そこには、焰耶がいた。

どうやら、ローテーションを組んでいるらしい。

焰耶を抱き寄せて無遠慮に胸を鷲づかみにする。

「あん……あはあっ♡」

焰耶の唇から、熱い吐息を漏れる。それは、すでに情欲に濡れていた。

焰耶の高ぶりが、俺にもすぐにうつってイチモツを熱くたぎらせる。

俺は、それを焰耶の尻に押し付けるように、立ったまま、後ろから

彼女の体を抱き締めていた。

焰耶の髪から甘く、蠱惑的な香りがした。

その香りにさらに肉棒を疼かせながら、焰耶の体をまさぐる。

瑞々しい弾力のある、白い肌。豊かに膨らんだ胸を優しく撫でさする。

「はうっ、刃……きもちいい♡」

うっとりとした声で、焰耶が快感を訴える。

俺は、耳を甘噛みしながら、白い乳房の頂点にある桃色の突起をつまんだ。

「きゃうっ♡♡♡」

指を細かく震わせ、その可愛らしい突起に振動を送り込むと、乳首は徐々に勃起していく。

「ああ……刃、もつと強くう……あひあっ♡」

艶っぽい喘ぎを紡ぐ。

少し、マゾツ気のある焰耶を喜ばせるべく、痛みを感じそうなくらい、強く、乳首をつねる。

「きもちイイ……んあッ♡ あ、あふうん♡ きもちイイ……あああ……」

尖った乳首を引っ張るようにして刺激すると、焰耶は体からかくつと力を抜いてしまった。

寝台に両手を突き、はあはあと喘ぐ。

「ちよつと待て……感じ過ぎて……」

額を寝台に押し付け、尻を強調するような格好でそう言う焰耶の体を、俺は執拗に愛撫する。

腋から脇腹にかけて撫でてから、尻を揉んで、太腿の内側をそつと擦る。

「だめだっ♡ 気持ち良すぎて……あつ、んあああああっ♡♡♡」

焰耶のしなやかな体もたえる。俺は、焰耶の体にかぶさるように抱え、左手で胸を揉み、右手をスリットから足の間に差し込んだ。

服の都合上、上はつけていないと分かっていたが、下も穿いていなかったらしい。

「お前もか」

「あ、あああつ♥ お、おまえ……穿いていないのが好きなんだろう……あん、ああアあ♥♥♥」

愛撫とは別の理由で頬を赤らめてそっぽを向く焰耶を愛おしく感じる。

「状況にもよるけどな。でも、おまえが恥ずかしいって感じながらも、俺の為に脱いでくれたんなら、すごく興奮するよ」

「そ、そうか♥ あああん♥」

愛液で充分すぎるほどに潤んだマンコは、指先が火傷しそうなほど、熱くなっていた。

絡み付いてくる秘裂に指を食い込ませ、さらに奥をまさぐる。

「ひあつ、はううつ♥ これ……スゴい……だめっ♥♥♥ ああああ……もう、い、いく……いつてしまうう♥」

背中を震わせながら、絶頂を目前にして焰耶は、その官能を、歯を食いしばって耐えている。

俺は、その仕草さえ愛おしくて両手を動かし、胸を揉みしだき、マンコをかき回す。

「いやあ……指……ゆびい♥ 指でイきたくない……刃の……刃のチンポがいいっ♥♥♥」

その言葉に、俺は、手を動かすのをやめた。

「わかった。望通りにしよう。ただし、自分の手で、その部分をさらしてくれ」

「ッ♥」

俺の方を羞恥心でいらんでから、尻に手を回して、少しずつ、裾を手繰っていく。

段々とあらわになっていくさまは、見ていて楽しく、興奮する。

太ももの裏側がさらされ、マンコが見えそうで見えないところで、一度止まるもすぐに動きだして、マンコを、そしてアナルを尻を全てさらす。

「や、やったぞ。だから、このまま……後ろから、乱暴に♥」

白い尻を振って誘う焰耶の腰を捕まえて、いきりたったイチモツ

で、熱くぬかるんだマンコに狙いを定める。

「ああ……早く……早くう♥」

亀頭と秘裂が接触してくちゅつと音を立てる。

そして、そのまま、亀頭から陰茎の根元まで、全体で味わうように挿入する。

「あひいいいいいいいいいい♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

焰耶の白い背中が、弓なりに反って震える。

どうやら、軽い絶頂に達したらしい。

そのまま崩れそうになる体を、腰に回した両手で支えて腰を動かす。

「あつ、あふう……あへえ……ああああん♥♥♥♥♥♥」

俺の抽送に合わせ、焰耶が甘い声を上げる。

少しずつ抽送を速めながら、膣の感触を味わう。

「あつ、あううつ、あひ、あはあん♥ あつ、ああああ……あああん……

あくつ、あひゆうううん♥♥♥♥♥♥」

焰耶の喘ぐ声が、高ぶりに比例するように、徐々に高くなっていく。

それを更に上げさせたくて、俺は腰を前後させ、時に回すように動かす。

「いいっ……いいいい♥ す、すごく感じる♥ あんっ、ああん♥ あ

ひい……ああつ、あひあああつ♥♥♥♥♥♥」

俺の動き一つ一つに、敏感な体を持つ焰耶は反応して俺を楽しませる。

「すごい……刃のが、私の中で……ふああつ♥」

膣内が俺のチンポをさらに奥へと誘い込むように動いて、絶頂がマジかに迫っている事を俺に告げる。

「ああつ、またっ……またイクっ、あは……あああんっ♥」

絶頂に近づき、肥大化したチンポが、焰耶の一番奥を小突く。

その刺激に焰耶が、寝台を握りしめて身悶える。

「ああん♥ イクっ♥ イクっ♥ も、もう……ああんっ♥ あああ

ああ♥♥♥♥」

俺が腰を一突きするごとに、焰耶は、絶頂に達しているようだ。

連続する快感の爆発を、その体で受け止めながら、次の絶頂を誘い込むように、体をうねらせる。

「あああつ♥ すごひ♥ ああん……イイ……あふつ♥ あひいん♥
またイっクウ♥ イクつ♥ イクうつ♥♥♥」

焰耶が絶頂を宣言するたびに、膣が締まる。

何度も何度も断続的に繰り返される強烈な締め付けは、俺に早く精を出せと訴えているようだった。

それらが俺を一気に限界以上に追い詰める。

「くうつ」

俺は、痛いくらいに高まりに思わず声を上げ、まるで、膣肉に搾り取られるように、勢い良く射精した。

「きゃはあああああああああああああああああん♥♥♥
♥♥♥」

焰耶が、一際高い絶頂の声を上げて、体から力が完全に抜けた。

俺はつながったまま、焰耶を抱きあげて寝台に上がり、そのまま、眠りについた。

翌日、快樂の声で俺を起こす焰耶におはようの口付けと、朝一番の射精をしたのは言うまでもない。

遠征四日目、周囲の風景も大分変わった。

見慣れない木々が増えて、気候も熱くなってきた。

本日は、村があり、武将たちは村の空き家にただし、俺と桔梗だけもう一つ、会議室代わりと言って無理を言っ借りた家に入る。

「刃……あ、あんっ♥」

手に余る柔らかな膨らみを揉むと、桔梗は甘い声を上げる。

清楚な巫女服なのに、この大きすぎる胸が卑猥に見せるのだ。そんなことを思いながら、俺は激しく桔梗の胸を揉んでいく。

「あつ、ああん♥……刃、イイ……ああん……あはああ♥♥♥」
俺の体の下で、桔梗の体が悶える。

家に入るなり、組み伏せようとしてきた桔梗を逆に組み伏せて上をとったのだが、桔梗は表面上は悔しそうにしていたが、その瞳は、期待であふれていた。

「やあ……ああん……うふうん♥ はあああ……」

「桔梗、今日はどうされたい？」

「やつ、あふうん……み、耳に、息が……あうん♥」

桔梗がが、体を震わせ、縮こまらせようとする。

「桔梗……」

「ぬ、ぬし……ワシの耳が、弱い事を知っていて……はううつ、きゃん♥」

ふつと、耳に息を吹きかけただけで、桔梗の体が跳ねた。

「で、どうされたいんだ？」

「んん……いつものように はあはあ……いっぱい、してほしい……はううんっ♥♥♥」

「そうか、了解した」

そう言つて、桔梗の耳を舐めた。

「ひああああん♥♥♥」

俺は、大げさなくらいに跳ね上がった桔梗の体を抱きすくめ、耳を舌でたっぷりと舐った。

「あ、あうつ、うく……ああんツ♥ ダメ……ダメだと言つてえ……」

あつ、あああああつ♥♥♥ あ、あうつ、あふんっ♥ あああん……」

俺は耳から口を離して、その両肩を押さえ付けるようにして、体ごとこちらを向かせた。

「あ……」

正面から、俺と桔梗の目が合う。軽くキスをしてから、巫女服をはだけさせてノーブラでたわわな胸があらわになった。

「ああ♥」

俺は、両手で桔梗の手に余るそれを、パンをこねるように揉みしだ

く。

「あん、あふう……あは……あああん♥ はひ……ひいん♥」

桔梗から惱ましい息が漏れる。乳首が、段々と勃起するのが、見ているだけでも分かった。

「乳首が立ってるぞ」

「いつ、いちいち、あはあうっ♥ あう……言うなあっ、えあっ、やあ
ああああっ♥♥♥」

右の乳首を、口に含む。そのまま首を上げて胸ごとひっばる。

「あっ、あああん……あひあああっ♥♥♥」

桔梗の声が、甘くとろける。俺は、右手で左の乳房を捏ね回しながら、右の乳首をしゃぶり、吸った。

「あううう……そ、そんなに吸つても……あっ、あっ、乳なんて出んぞお……あうっ、あっ、はううう……あはああああっ♥♥♥」

桔梗は胸を突き出すように背中を反らしながら、体をくねらせる。その豊かな胸にキスをしながら、左右の乳首を舐め吸すうと、桔梗はすぐに反応して声を上げる。

「あううう……とれるう……ワシの乳首がとれてしまおう♥♥♥

あっ、はううっ、はひ……あふうううん♥」

俺の頭に両手をあてがいながら、桔梗は左右に首を振り、快樂にもだえる。

「ひやう……あうっ、あはあん♥ あひいつ♥ はっ、あふ、あひい
いいん♥」

桔梗の呼吸が、次第にせわしなくなっていく。

俺は、その双乳をたつぷりと手と舌で堪能してから、袴に手を入れた。ノーパンで濡れすぼった感触を俺に与える。

「あっ、あああっ、おまえが穿くなというから、あう……ワシは、あの日から、ずっと穿いていなかったのだぞ……やつ……あはあ……」

翠たちは、やる前に脱いできたというのに、桔梗は、俺が言った日からずっととは……大人の色気を醸し出しながらも、中々カワイイことだ。

「胸だけで、こんなに濡れているぞ」

びっしよりの手を見せると、桔梗は頬を赤らめて視線をそらした。
「はひい……あひいん……あうう……ぬ、ぬしのせいだっ♥ぬしが
上手すぎるから、はあああう♥♥♥」

左手をマンコに這わせる。袴がおもらししたかのように変色して
行く。

「あああ……イイ……きもちイイ……あふう♥あああんっ♥」

桔梗が、体を震わせる。入口を撫でるように、続いて穴を掘るよう
に中を刺激していく。

「あああ、ううん……はっ、はひっ、あん、ああ……ひあああああっ♥
♥♥」

艶かしい声を上げながら、桔梗が身をよじる。一端、攻めるのを止
めて、袴を降ろす。むっちりとした太ももと、とろとろになったマン
コが姿を見せる。

「あああああん♥はひん、あん、あはあっ♥」

俺もズボンを下ろし、振り返ったイチモツを取り出す。それを見た
桔梗の目が情欲に染まりきった。

「何度見ても……おおきい♥」

期待を含んだ、その声音。

俺は、イチモツの先端を桔梗のマンコに当て、そのまま腰を進ませ
た。

「くううううん♥♥♥」

イチモツの裏側で、マンコを擦り上げる。濡れすぼる秘裂の表面を
滑らせて焦らす。

「あああ、イ、イヤあんっ♥あ、あん……じ、焦らすなあ……」

桔梗が、目尻に涙すら浮かべながら懇願をする。普段、大人っぽい
のにセックスになると、途端に乙女になるギャップが愛おしい。

抗議する桔梗のマンコに、張り詰めた亀頭を浅く潜らせた。

「ああああんっ♥♥♥」

ただそれだけの刺激で、桔梗は甘く喘ぐ。そのまま、ゆっくりとイ
チモツを中に埋没させていく。

「う、うあああああ……おおきい……んぐうううう♥す、す……」

おああああああ♥♥♥

進み続ける俺のイチモツを、桔梗の膣が包み込んでいく。

「あううう……ま、まだ入ってくる……あひいい♥♥♥ あ、あへ、あへえ、ンああああ♥」

どこか苦しさと悦びの混じり合った桔梗の声。

「ああああ……あひ、くうん♥ あっ、ああああああ♥♥♥」
肉壁を掻き分け、先端が、最奥と侵入していく。桔梗は、だらしなく口を開きながら、体を震わせていた。

「あん……ああああ……あっ、あはああ……あひいん♥」

亀頭が、膣の最奥部にぶつかつた。桔梗の膣内がイチモツに吸い付いて精をねだる。

「あ、あううう……は……ああん♥」

「動くぞ」

「あっ、ま、待て はいってきたばかりい……あひいいいいいっ♥♥♥」

桔梗の制止の声を無視して、俺は腰を使い始めた。

「はひい……はうっ、あひ、ひゃああああん……あっ、あうっ、あふう……んひああああ♥♥♥」

激しく喘ぎながら、桔梗はまるで釣り上げられたばかりの魚のように暴れる。

「は、はひっ♥ ひゃんっ♥ あひいいいっ♥♥♥ はううう……ひんっ♥ ひいいいっ♥ あっ、あううっ、あ……ああああん♥♥♥」

「桔梗、俺の指示通りしてくれてうれしかったぞ」

「ああん♥ ああああああっ♥ よ、喜んでもらえて……あはあああああっ♥♥♥」

桔梗のマンコからは、次から次へと愛液が溢れくる。

「ひあああああ……刃のチンポ、すごい……すごいっ♥♥♥
あっ、あっ、あはあああん♥♥♥」

悲鳴を上げながら、桔梗は、豊かな胸を揺らして身悶えた。

「はうん♥ あん♥ くううん♥ あひいいい……あああああっ

「♡」
絡みつく膣からチンポを抜ける寸前まで引き、再び奥まで滑り込ませる。

「あくウっ♡ あん♡ あっ、あああっ……イイツ、イイイツ♡ あああ♡ ああんっ、あひ、あひい♡ ああああああ♡♡♡♡ も、もう♡ ひいあああ、イク♡ イクううううう♡♡♡♡」

そう叫びながら、桔梗の手が、俺にしがみついて、俺の胸板で豊かな胸が淫らに潰れる。

「あああああ♡ イク♡ イつてしまっ♡ 刃、刃も……刃も一緒にっ…… あああああああっ♡」

柔らかな両脚で俺の腰を引き寄せ、さらに深い結合をねだる。俺も桔梗に合わせる為に、最後のスパートをかけた。

「あああっ♡ ひぐうううううううう♡♡♡♡ いっ♡ イイツ♡ イグうっ♡ イグううううううううううう♡♡♡♡」

膣肉がチンポを搾り上げ、射精をねだる。俺は、チンポを根元まで挿入して射精した。

「あああああ♡♡♡♡ また、イクっ♡ イイクうううううっ♡♡♡♡ ああっ♡ あっ、熱いっ♡ ああああああああっ♡♡♡♡ イツグううううううううううう♡♡♡♡♡♡♡♡」

下半身を、生温かな何かが濡らしている。

それがなんだったかは、体を痙攣させてほとんど意識を失っている桔梗の名誉の為に、黙っておくことにしよう。

遠征が始まってもう五日。行程は行きに七日、南蛮で七日、帰りに七日の三週間を予定している。

今日は、泊まる場所もないので野営決定となった。

日があるうちに天幕を張り、いくつかの隊が森に入って今日の飯を

調達する。

俺も、獲物を探して森に入ったんだが……

「なんでこうなっているんだろうな」

「あはあああああつ♥♥♥」

今日の晩御飯を探していたら、聖職者の格好をした紫苑に襲われた。どうやら、このタイミングを狙っていたらしい。俺の腹の上に、逆さまにうつ伏せになった紫苑が、吐息を漏らす。互いの股間に顔を向けるシックスナインの体位だ。

ピッタリとくっついて紫苑の安産型の尻を浮かび上がらせているタイツの上から軽くなぞるだけで、湿り気があった。このまま破いてしまい衝動にかられるが、そう言うわけにもいかないので、ぐっと我慢して脱がせるだけにした。

「下着をつけると、これだと、すぐにわかつちやうから、付けてないの♥」

丁度いい位置に木の根っこがきて首から上を起こすようにして、俺は、紫苑の尻に顔を押し付けている。紫苑は、柔らかな生地越しにその爆乳でイチモツを挟んでいた。

俺の口元はマンコから溢れた愛蜜にまみれ、紫苑の胸元はイチモツからの先走りで汚れていた。

「はっ、はふうっ♥ 我慢できなくて、みんなが刃くんにしてもらっているのを想像するだけで……ああああん♥♥♥ んくう……」
「こんなところでやって大丈夫なのか？」

「周りの草は背が高いし、反対の方で大きな獲物が見つかったって声がかしていたから、あまり遅くならなければ、こっちにはこないわ」
しゃべっている間もイチモツを離さず、パイズリを続ける紫苑に、ため息が漏れそうになるのをこらえ、愛撫を続行することにした。

「ああん……あう、はふう……あああん♥ あつ……あん、あひい♥」
クリトリスからアナルまでの舐め上げられ、紫苑はかぶりを振って快楽を耐え、服をたくしあげて、生のたわわな乳房を自ら中央に寄せてイチモツへの圧力を強くして、上半身を揺すり、胸の谷間で俺のを扱き上げる。

「ああん、すごい……わたくしのオッパイでも包みきれない……それにとっても固い……はふう♥」

「紫苑のオッパイは、すごく柔らかくて気持ちがいいよ」

「ああああ♥ お風呂に入れていないから、すごく男性の匂いがする……ああん♥ 興奮しちゃう……」

溢れる先走りで白い乳房を汚されながら、紫苑は奉仕を続ける。

俺も柔らかな感触を楽しみながら、目の前のマンコにむしやぶりつき、溢れ出る汗を舐め啜る。

「はううんっ♥ あふう……あああつ……そ、そんなに奥まで……ああん、ああん、ひああああ♥」

紫苑はうっとりとした表情を浮かべながら、すっかり勃起した左右の乳首を亀頭に押し付け、前後に動かした。

それに抗応して俺も下から腰を突き上げるように揺すった。乳首を押し込むように、俺のイチモツが、柔らかな乳房にめり込む。

「あん、あひいい♥ あはああ……わたくしのオッパイマンコが、刃くんのチンポに犯される♥ 気持ちいいイ♥♥♥」

上半身を大きく動かしてイチモツを扱き上げた。

「うふふ……もつとよくしてあげる……だから、精をいっぱい出して……」

紫苑は、にっこりと微笑んでから、自ら谷間に唾液を滴らせた。

唾液がイチモツを濡らしてにちゆにちゆと卑猥な音が響き、胸による奉仕の動きがさらに滑らかにする。

「くうう……」

さらに気持ち良さを増した奉仕に歯をくいしばって耐える。

「出して……子種出して……私のオッパイマンコでいっぱい射精してっ♥ あむっ♥」

まるで堪えきれなくなったように、紫苑は胸の谷間を出入りする部分を啜え込んだ。

「んむっ、ちゆ、ちゆぶ……じゆる、じゅぼ……ちゆずずずずずっ♥♥」

激しく吸いたてられて、俺はこらえきれずに射精した。

「んんんんんっ♥♥♥んくんくっ♥♥んふ♥♥」

紫苑は、大量にあふれ出るそれを口内に溜め、少しずつ嚙下している。

「んっ、ちゅるる……ぴちや……ん……ちゅるるっ♥♥」

卑猥な音を立てて精を啜り飲み、舌で清めてから、尿道に残った分まで吸い上げる。

「はああ♥ まだこんなに固い……」

目の前にある濡れたマンコにキスをして、指でいじる。

「ああん……あウン……刃くん、そろそろ……はふう♥」

紫苑のおねだりを無視して、もうすっかり柔らかくほぐれているマンコに指を挿入させてかき回す。

「あうっ……はあん、刃くん、指じゃ無くてえ……あああん♥」
「……」

まだ無視して指で膣内を刺激すると、我慢できなくなった紫苑が叫んだ。

「ひゃああんっ、マンコ……オマンコに、入れて……あん♥ オマンコにチンポ入れてえっ♥♥♥」

紫苑の口から漏れる卑猥な叫びを聞き、俺は体の位置を変えた。

俺の腰に、後ろ向きに紫苑がまたがる、背面座位だ。

「ああ……いい？ もう、入れてもいい？」

自らのマンコのすぐ前にあるイチモツを手コキしながら我慢できないと言いたげな紫苑が訊く。

「ああ、自分で入れろ」

OKを出すと、紫苑は喜々として腰を浮かしてイチモツの向きを調整すると、腰を下ろした。

「ああううううううう♥♥♥」

根元まで膣に収まった。紫苑が、へたりこむような姿勢で俺の膝に手を置いた。

「す……す……す……わたくしの中……刃くんのもうイッパイ……んんん♥」

うっとりとしている紫苑に軽く腰を揺すって動くよう促す。

「あうう……う、動くから、あまり下から突かない、で……はひいひい
いいい♥♥♥」

ゆっくりとしたペースで腰を振り始めたが、反応が面白いので、不規則に下から突き上げてやる。

「ああつ、あつ、あんっ♥ あふつ、あひゃんツ♥♥♥ あはあああああつ♥」

紫苑は、甘い悲鳴を断続的に上げ、俺が突き上げるたびに体を震わせ、その熟れた体が上下に動き、胸がゆさゆさと揺れる。

「うぐつ、くうん……あああ、あたってる……刃くんのおおきいのが、一番奥にい♥ あうううん、い、いい……あああん♥ あつ、お腹がすぐく熱くて……んはあああつ、気持ちイイい♥」

紫苑はセックスの快楽に悶え、その体の動きにあわせて髪が激しく乱れた。

「あああああ……あつ、ああんっ、あひっ、ひいひいっ 気持ちいい♥ 刃くんのチンポ気持ちよすぎるう……あああああああ♥♥♥」

紫苑の膣肉が、とろけそうな柔らかさはそのまま、イチモツを締め上げる。

俺は後ろから抱きすくめて、紫苑の胸を両手で掴み、強く揉みしだいた。

「ひああああああつ♥♥♥ いいのおっ♥ オツパイっ♥ オツパイいい♥ マンコもきもちよくて……くひいひいひい♥♥♥」

紫苑が体をひねり、こちらを向いた。すぐお互いに、舌を突き出して、キスを交わす。

その間も腰の動き、胸を揉む指をお互いに止めることはなかった。

「あはあつ、刃くうん……も、もうダメ……いつちやう……いつちやうわあ♥ あああああん、イ、イ、いつちやう！ イクううううう♥♥♥♥」

「俺も、また、出そうだ」

「出して、アツイのいっぱい出して♥ イクッ、イクイク♥ イツクうううううううううう♥♥♥♥♥」

俺と紫苑の動きが一致して子宮を突き上げた瞬間に、抑え込んでい

二十四話（なし／翠&蒲公英・焰耶・紫苑・桔梗）

〈??〉

「ご主人様に聞でおねだりしてわたくしたちの衣装を考えて頂きますよう。そして、それを使います」

「「おおー!!」」

（（日数的に考えて、全員の衣装を作ってもらうのは厳しいかもしれないから、優先的に作ってもらえるようにしないとー））

（刃に「綺麗だ」なんて言われたら、あたし、どうしよおお♥）

南蛮遠征のメンバーが決まると同時に、怪しい動きをしているという五胡対策の為、国境の砦に向かうメンバーも選出された。

城に残る面々も忙しそうに動いている。

俺は、そう言うのとは無縁にのんびりと自由気ままにさせてもらってますけどね。

拉致られました。

「たんぽぽ、そんなことしてないよ。イイことしない？ って聞いて、するって言うから、ここまで連れてきただけだし、手足だつて縛つてないでしょ?」

「ごめんなさい、ウソをつきました。たんぽぽの誘惑にホイホイついて行って二人の部屋に来てしまった。」

「それにご主人様、自分から率先して服脱いでたじゃないか」

二人は、全裸待機の俺を放置してたんすの中をござござやり始めた。

「えっと、アレ？ この辺りに……」

「お姉様、だから、整理整頓した方が良いって言ったじゃん」

「う、うるさいな！ ホラ、見つかっただろ！」

何やってんだらう？

たんすの中をござござやって何か見つけたらしい二人はそれを背中に隠して俺の方に来た。

「ご主人様、今日はね、これを使おうと思うんだあ♡」

そう言っで見せられたのは、朱里や雛里たち軍師が指揮をとる時にもっといえる羽扇だった。

ただ、使っている羽が違うみたいで、フワフワした感じだ。

あれでくすぐられる期待と恐怖が体の動きを封じた。

アレの攻めを受けたらダメだと感じる一方で、どれだけくすぐったくて気持ちいいのかわかりたいと思ってしまう。

そんな俺の目の前まで来たたんぽぽがスツと首筋から胸を羽根の束がやさしくなぞった。

くすぐったさが突き抜け、チンコが一瞬でフル勃起した。

ヤバイ……これだけで、イキそうになった。

「ひ、ひいひいひい……」

羽根の感触がくすぐったすぎる。羽扇を持ったたんぽぽの手がものすごい速さで、しかし、繊細に動いて俺の全身をくまなくくすぐる。

「ひやははは、ひやはははあはあ!!」

敏感な脇や胸、乳首をこしよこしよと、また羽のくすぐったい感触が乳首を最高に感じさせて勃起させる。

腰も背中も足も羽に包まれたような錯覚さえ覚える。

たんぽぽだけじゃない、翠も羽扇で俺のチンコの力をくすぐり、そのまま、裏筋や穴、袋まで羽でくすぐる。

「ひゃあああっ！ んあああああああああ!!」

俺は、耐えることもできずに、射精していた。

射精すると、二人は示し合わせたように全身を優しくくすぐりだし

た。さつきまでの射精させようとするようなものじゃなくて、心地よ
ささえ感じさせるくすぐりだった。

「ねえ、ご主人様、たんぽぽ、おねがいがあるんだけどお♡」
「んあ……」

あまりの心地よさに夢見心地になっていた俺は、朦朧とした意識の
まま、たんぽぽの声に耳を傾ける。

「たんぽぽとお姉様に服を作ってほしいの。たんぽぽたちの為だけの
服を」

「たんぽぽたちのためだけのふく？」

「そうそう、作ってくれたら、その服を着てご主人様をいっぱいくすぐ
るからよ」

翠の羽扇が裏筋をスーツと撫でた。

「ひあぁ……」

「約束してくれたら、もっと気持ち良くして、あ・げ・る♡」

ゆらゆらと俺の胸の上でたんぽぽが羽扇を揺らす。

「わかった……」

「なにがわかったの？」

「さわあつとたんぽぽが首筋をくすぐる。

「あぁあ…ふたりにつくる……」

「何をあたしたちに作ってくれるんだ？」

俺の乳首を翠が軽く撫でた。

「あひい……ふたりにふくをつくる……」

「だから？」

たんぽぽの羽扇が耳を通過した。

「ふあぁあ……だから、もっとくすぐってほしい」

「最初から、全部言って」

翠の羽扇がくるっとへそを一周した。

「ひゃあ、ふたりにふくをつくるから、もっとくすぐってください
……」

「……」

二人は無言でニツコリと笑った。

「あひやひやひやひやひや!! あひあはははははははははは!!
も、もう、だめだあ!! あひい、ひやああああ!! いひいひいひい
!!!」

先ほどまで優しかった羽が、俺を射精させる為のモノへと変わった。

脇の下をされたかと思うと足の指の間までくすぐられ、二つしかないはずの羽扇が無限にあるようにさえ感じられる。

チンコへも強すぎず弱すぎず、絶妙に射精を強要し、耐えられずに精液はもう、垂れ流した。

悶えて背中を見せれば、ケツにまでくすぐられた。

絶え間ない絶頂とくすぐりで俺の意識はブラックアウトするのに、そんなに時間がかからなかったんじゃないかと思う。

翠とたんぽぽに服をつくる約束をした為、色々と考えているけど、中々いいアイディアが出てこない。エロいのは、後先考えずに作っちゃったしなあ…

気に入ったら、もっとスゴイこととしてくれるって薄れゆく意識の中、言われたと思うから、結構気合い入れて考えている。原作のゴスロリはもう、作ったしなあ……

また、拉致られました。

「人聞きの悪い事を言うな! 私は、くるかと聞いたら、御館が自分から付いてきたんだらう!」

ごめんなさい、ウソをつきました。焰耶の誘惑に負けてついていき、自分から服を脱いで拘束されました。

「まだ、何もしていないというのに、御館のおちんちんは、元気だな♡」
「うおっ」

突然、チンコを扱かれた。こっちの反応を見ながらとかそういうのは一切ない、力任せな手コキ。それでも気持ちよくてチンコが節操なく勃起してしまった。

「おっと、このまま、出したら、つまらないな」
手がパツと離れた。

そして、ホットパンツに手をかけると、するりと脱いで白と青の縞パンが姿を現した。

さらに上着のボタンをはずして、肌を露出させる。

たまらないエロさに、勃起が収まらない。

いつものように椅子ではなく、今日は床に正座をするような形で拘束されている。焰耶のおっぱいを下から見上げてみるのもいいものだ。さらにパンツが丁度目の前にきていてより興奮する。

こんな姿勢でどんなことをするのかと思っていると焰耶は俺の両肩を抱えてそのまま横に寝かせてきた。焰耶の巨乳のドアップに視線が釘付けになっている俺には、焰耶が何かごそごそやっていたけれど、どれがなんなのかわからなかった。

そして、作業が終わったらしい焰耶は俺を起こすと離れた。

「御館、細かく説明するのが面倒だから、簡単に言うぞ。満足したら、起き上がるな」

それだけ言うと、俺に背中を向けた。

柔らかな美尻が俺に向けられる。思わず、そこを注視していると、急に焰耶のケツが俺の顔に向かってきて、俺を突き飛ばした。ヒップアタックってやつだ。

「うぐっ」

ムニユっとした衝撃が顔にぶつかり、拘束された俺はバランスを保つことなどできずに倒れた。頭や体への衝撃を覚悟したが、いつの間にか敷かれた座布団に守られ、痛みなんて一切なかった。

「ん？ たった一度で満足したのか、御館」

さっきの焰耶の台詞の意味をようやく理解した。俺が四苦八苦し
ながら体を起こすと、今度は、左頬に横方向の動きでヒツプアタック
がさく裂した。

その後も、右からや下からの突き上げ、優しくケツを顔に押し付け
られたと思ったら、そのまま突き飛ばされたり、様々なヒツプアタッ
クを顔面に受けた。

さらに、今回も丁度いい位置にあった鏡が、焰耶のヒツプアタック
にあわせて揺れる巨乳を映していた。

「ふう、熱いな♡」

焰耶はそういうと、おもむろに服に手をかけると、脱ぎ捨てた。焰
耶が身に着けている服は、縞パンのみ、鏡には、ピンク色の乳首まで
見えている。

「それっ♡」

「あぐっ」

さっきまでよりも盛大に揺れるオツパイに夢中になっていると、顔
面に衝撃を受けて俺はひっくり返った。

「御館。そろそろ、おちんちんが苦しいんじゃないか？」

振り返った焰耶は俺のチンコを見ながら、そう言った。

最初に少ししごかれた以外一切触られていなかったチンコからは、
我慢汁があふれていた。

フルフルと揺れる焰耶のオツパイに魅入られながら、俺はうなずい
ていた。

「顔面をお尻で小突かれて興奮しちゃう変態御館、たんぽぼたちの服
を作っていると聞いたが、本当か？」

「へ？ あ、ああ」

なんでこんなタイミングで聞くんだけ？

「じゃあ、私の服も作れ」

何を言われるのかと恐れていたけど、大した内容じゃ無かった。

「わ、わかった」

「もし、たんぽぼたちのよりも先に作ってくれることを約束してくれ

るなら……」

焰耶が再び俺の背を向けた。

「親方のおちんちんをココに入れて扱いてやる」

焰耶の指がパンツの淵をゆつくりと撫でた。

「ツ、ゴクン」

すごく魅力的な提案だった。だけど、蒲公英たちのデザインさえ決まっていないのに、焰耶もなんて、無理だ。

「どうだ？ 私の下穿きとお尻でおちんちんをしごかれて、ぴゅっぴゅっできるんだぞ♡」

ゆつくりとケツを振る焰耶のエロさに俺は、屈服した。

「わ、わかった！」

頷くと、焰耶はチンコを優しく握った。

「何がわかったんだ？」

エロケツがチンコに当たりそうで当たらないところで止まった。

「た、たんぽぽたちよりも先に、え、焰耶の服をつくる」

「約束だ。やぶったら……」

チンコを握る力がこもって痛みを感じる。

「ぜ、絶対に、絶対に破らないから!!」

握る力が弱まった。

「じゃあ、報酬の前払いだ♡」

「お、おとおお!!」

瑞々しい焰耶のケツの感触と反りかえるチンコをケツに押し付けるようにきついパンツの感触が、俺を襲う。

「さあ、動くぞ♡」

焰耶は両手を頭の後ろで組むと、そのまま腰振りを始めた。チンコにケツとパンツによるたまらない快楽が、鏡には抑える物がなく縦と横を縦横無尽に暴れる巨乳が、視覚から俺を追い詰めていく。

「だ、ダメだ、でるううううう!!」

あっさり追い詰められた俺は、焰耶のケツとパンツの中で射精した。だが、そこで終わりじゃなかった。焰耶はさらに腰を振ってきた。

射精してぬるぬるになったケツとパンツが気持ち悪いどころか、逆に滑りが良くなって気持ちよさが跳ね上がり、俺はすぐに勃起してしまった。

そして、そのまま、何度も射精に導かれたのだった。

焰耶の服まで考えなきやいけなくなってしまった。しかも、翠やたんぽぽよりも先に作って渡すって約束しちゃったよ……

万が一、それが二人にバレたらヤバイ……

かと言って焰耶を後にしてこっそりと二人に服を渡したことがバレたら、玉砕してしまう可能性がある……

マジで、どうしよう……

また、拉致られました。

「わたくしが、御誘いしたら、喜んでついて来られましたよね？」

ごめんなさい、ウソをつきました。紫苑に尻を撫でられたら、ついていくしかないでしょ！

いつものようにズボンとパンツを脱いでベッドに寝転ぶ。

「今日は、いつもとちよつと違う事をしましょうか」

紫苑は、俺の太ももの後ろ側を両手で持ち上げると、俺の上ではなくて、足側に座って両足を投げ出し、体を俺に押しつける。両手で俺の足を持ち上げてちんぐり返しの体勢にすると、その後ろにびったりと張りつく格好になった。

そして、ふくらはぎを俺の脇に滑り込み、腕を固める。さらに片手

で俺の腹を抱き締めて固め、体全体で俺の腰を抱き寄せるようにして安定させた。

俺は紫苑にケツをさらしたまま、身動きが取れなくなった。

「ウフフ、だいぶ、こころも柔らかくなつてきましたね♡」

「あひんツ!!」

素晴らしいながら、紫苑のしなやかな指がケツの周りを撫で、ノックするように出口を叩く。続いて涎を垂らして、ぬめった柔らかい指は容赦なくアヌスにねじ込まれてうごめく。

さらに舌でケツ周辺をあちこち舐めまわしてくる。俺は甘美な刺激に痙攣し、足をばたつかせるしかできなかった。紫苑はチンコに一切触れることなく、ケツを重点的に責める。ケツに与えられる快感が電流のように駆け抜け、チンコの奥を激しく疼かせる。

気持ちイイのに、最後の決め手がなくてイケない。俺の中でうごめく指も決定的な刺激を与えないソフトな物ばかりだし、ケツ周辺や袋まで行ってもチンコに届かない舌。

「はうう……し、紫苑……」

「切なそうな、ご主人様、とても、可愛いですわ」

ニコニコしながら、紫苑は、ソフトな攻めを続ける。

「あ、そういえば、ご主人様、翠ちゃんたちに服をおつくりになるとか？」

「わ、わかった。紫苑の服も作るから!!」

「こ、こんなおねだりされて、断れるわけがない。

「あら、うれしいですわ♡」

紫苑の指がチンコをほんの少しだけ撫でた。あの返事じゃダメってことかよ!」

「あひツ、し、紫苑だけの服、他には絶対つくらない服をつくるから!!」
「そこまでして頂けるなんて♡」

紫苑の人差し指と親指がチンコの根元で輪っかをつくった。けど、動かない。

「これでもまだ駄目なのか!？」

「翠たちよりも先に、紫苑の服をつくるから!!」

「まあ♡」

紫苑の手がチンコを包んで優しく扱いた。それだけで、限界を超えるほど、抑え込まれていた精子は発射された。

「うひひひひひひ!!」

俺の顔に……

ソフトからハードに移行した後を攻める指と、優しく前を扱く指に翻弄され、俺は何度も顔射を繰り返した。

やつちまった。誘惑に負けてまた、無茶な事を引き受けてしまった。三人の服もできていないのに、紫苑の服まで考えなくちやいけな
いなんて……

そうだ、期限は決められてないんだし、バックレるか!

いや、そんなことしたら、マジでダメな未来しか予想できねえわ。

どないしよう……

悩んでたら、拉致られました。

「拉致とは人聞きの悪い、少し強引に誘っただけではないですか、御館様」

今回は、マジです。衣装を考えながら、歩いていたら、桔梗に部屋に引きずり込まれました。

「聞いた話では、御館様がみなに服をつくると約束しているとか」

「え? あ、まあね」

「ワシにも一つ作ってもらえませぬか?」

「ちよつと、立てこんで難しいかなあ…」

「なあに、他の者たちのように一番に作れなどとは言いませんぞ。最後まで良いので」

「まあ、それなら…」

よかつたあ、これ以上、無茶振りされたら、俺死じまうよ。

「で、御館様、どうされます？」

そう言つて、着物の裾をずらした。

そこには、大人な下着ではなく俺のよりも大きなペニバンを装着していた。

ペニバンを見て、無意識のうちに生唾を飲んでいた。

「どうされる？ ワシが脱がしましょうか？ それともご自分で？」

「あ、ああ……」

指先でズボン越しにチンコを撫でられただけで、俺の手は、勝手にズボンとパンツを脱がしていた。

「ご自分から、脱がれるとは、それほど期待されていると。」

では、そのまま、ご自分で入れられますかな？」

腰に下げていた小さな瓶をペニバンに垂らす。ローションの様なものがかかってテカテカと光それに誘われるように、俺は桔梗の上に跨っていた。

「位置は調整するので、御館様は腰を下ろすだけで」

言われるがままに腰をおろして肛門にペニバンの先端が当たったところで、躊躇してとまった。

「心配なさらずとも、ワシや紫苑に散々仕込まれた御館様の尻は、この程度簡単に飲み込みますぞ。このように♡」

桔梗は俺の腰に手を置くと、そのまま、俺の腰を力ずくで降ろした。

「おほおほおほおほおほお!!」

大きな異物が入ってくる感覚に不快感なんてものはもう、感じなくなっていた。ただ、通常ではありえないすぐにも意識を失ってしまったような快楽が、脳天を突き抜けた。

「入れただけで、そんな顔をしていては、これからやることを受けたら、どうなる事やら……」

軽く腰を揺すりながら、桔梗はにやりと笑うと、俺の両ひざに手を
入れて、そのまま、立ち上がった。

「あひいっー」

奥にある何かをペニバンがグリツと抉って俺の口は、意思とは関係
なく、変な声を上げていた。最初の頃に感じていた、不快感や圧迫感
はすでになく、蜀最強のオツパイに体を預けて普段感じることはない
快楽に酔いしれる。

俺を抱えたまま、桔梗が歩きだした。

その揺れを受けて、俺は喘ぎ声を上げる。チンコからは、先走りが
蛇口のハンドルが壊れて水が出っぱなしになっているみたいの後か
ら後から溢れてくる。

「つきましたぞ、御館様」

見せられたのは、姿見に映る自分の姿だった。だらしなくとろけた
自分の顔を否定しようとしたそのタイミングで、桔梗は腰振ってペニ
バンで俺を責める。

「うくっ、ふああああああ!!」

あの、射精とは違う快楽の塊がせり上がってきて、耐えることもで
きずに解放していた。

意識が飛びそうになるも、再び桔梗に突き上げられて強制的に覚醒
させられる。

「フフ、この程度でイってしまうとは情けないですなあ。ワシが鍛え
て差し上げましょう」

「ひぎっひぎっー」

さてと、みんなの衣装を作るってことだけど、誰から作るべきか、桔
梗は最後でいいって言ってたから、焦らなくていいとして……

ううん、これだっというのがないなあ、ここは逆に考えて、急がな

くてもいい桔梗から考えるべきか。

うくん、あのエロさを昇華させるんだから、あえて逆に清楚なイメージの衣装にしたらどうだ？

……よし、決まった！ あ、桔梗を和にするなら、対比で紫苑は洋にしよう。

ああ！ 丁度いいアニメがあつたじゃん！ アレに当てはめて、翠とたんぽぽはあのキャラにして、焰耶は……あの辺かなあ？

おお、一気に決まったぜ！

最初に決まった桔梗から図案を出して行こう！

南蛮遠征や砦に向かった武将や軍師を見送って、建てたけどみんなに搾られてたから、久しく行っていない俺専用の娼館にでも行こうかと思っただけ、なんと、遠征と砦に行つて人手が足りなくなつたとかで、俺は強制的に仕事をさせられることになってしまった。

バックレようかと思つたら、軍師たちが俺の逃走経路に罠はつて、それに捕まり、そのまま執務室に強制連行されることになってしまった。しかも、翌日も仕事があるのでとか言われて、ご褒美もなしだぜ、やってらんねえええええええええ!!

あ、すみません、手は止めてないんで、朱里さん、睨まないでください。

桃香さん、目をそらさないで助けてください。

二十五話（シヤム・トラ・ミケ・美以／美以&シヤム
&トラ&ミケ）

〈周倉Side〉

思っていたほど苦勞することもなく南蛮遠征の目的は達した。むしろ、遠征中の夜の方が大変だった気がする。

孟獲こと美以とその筆頭子分であるミケ、トラ、シヤムの四人と南蛮の兵たちを連れて城へ帰還するだけだったのだが……

城へ戻る途中、町で一泊することになり、俺は一人でこれからの事を考えていると、美以が扉を乱暴に開け放って現れた。

「刃、刃！」

「美以、どうかしたのか？」

美以とは、真名を交わしている。ただ、諸々の理由をできるだけわかりやすく簡潔に説明し、真名では呼ばないようにさせた。

「大変なのや、大変なのやー!!」

「美以、何が大変なのか言ってくれないと、わからないのだが……」

「とにかく来るのにや！」

そう言うと、美以は俺の手をとってグイグイと引っ張っていく。仕方なく、ついていくと、そこには、裸の三人が三角形をつくっていた。

「ちゅむ、ちゅつ、レロレロ……じゅる♥」

「これは、一体……」

「三人とも、発情期になっているのにや！」

「発情期？」

動物っぽいなあとは思っていたが、まさか、発情期があるなんて

……

「昨日、刃と紫苑が交尾しているのを見てから、三人とも発情期になったのにや」

え？ 紫苑としている時、他の気配なんて一切感じなかったはずなんだが…

南蛮人、侮りがたし。

「昼間は我慢してたけど、宿について、我慢できなくなってああなったのにや。」

紫苑があんな風になってたから、刃なら、ミケ達を助けられると思っただのにや」

美以はまだ発情期に入ったことがない為、どうすればいいのかわからないとのことだが、ようするに性欲を発散させればいいのだろう。ただ、一つ心配事がある。三人とも、朱里たちロリと同じくらいの体格である為、俺のが前準備なしで入るだろうかという心配だ。

鈴々やねねのように俺とする前に北郷ので慣らされていたならともかく、初めてで俺のだと、裂ける可能性もある。

「刃、早く、ミケ達を助けてほしいのにや！」

「ああ、わかったよ」

三人の中では、比較的体の大きい（と言っても、僅か差）シヤムを抱え上げる。

「あふ……にやん？ 刃しやま？ スンスン…オスの匂いにやん♥」

「オスにや!？」

「オスによ!？」

俺の体にすりすりとしり寄り寄って匂いを嗅いだシヤムの漏らした声に反応したミケとトラがぎらついた目でこっちを見た。

「まずはシヤムの番だ。お互いになぐさめて準備をしておけ」

シヤムを寝台に降ろして体においかぶさるようにする。そして、右手で、むき出しになっているシヤムのマンコを撫で上げる。

「あはアんっ♥」

シヤムは、熱のこもったため息をはきだした。

「いい感じにぬれてるな」

「刃しやまのだって……はふう、カタくなってるにやん」

そりやまあ、ケモノ娘三人のレズ見せられて興奮しないわけないじゃないか。

寝台に寝かせてシヤムのふくらみかけた胸に触れる。

「にやああん……」

小さく声をあげてシヤムが身を震わせた。

すでに濡れすぼっているマンコに指を這わせながら、乳首を攻める。

「ん……んく……ああん♥」

これ以上、濡らす必要もなさそうなので、シヤムの狭そうなマンコにイチモツを押し当てる。

「いくぞ」

「刃さま、きて……」

できるだけゆっくりと無理し過ぎないことを意識して入れて行くが、驚いたことにシヤムのマンコは、俺のイチモツを飲み込んで行く。確かに狭いが、裂けてしまう心配をする必要はなさそうだ。これは、シヤムだけなのか、南蛮の連中全員の特徴なのかは、わからないが、安心してできそうだ。

「んあ、にやああああああッ♥♥♥」

狭い中を、イチモツでこすられて、シヤムは普段眠そうにしている目を見開いて高い声をあげた。すぐにでも動けそうだが、あえて動かずにいると、シヤムが体を揺らし始める。

「刃さまあ……動いてほしいのにやん♥」

上目づかいでそんな事を言われて、動かないわけにはいかない。

「あはあんッ♥」

焦らされた後の快感にシヤムのマンコが締め付ける。

「刃さまの、おっきいのが、きもちイイのお……あつ……にやあんっ……あああ♥ おちんぼイイツ♥」

段々と動きを早くしていくと、愛液にまみれながら出入りするイチモツに、シヤムのマンコがいやらしく絡みついている。

「あッ、あはあ♥ あんッ、ふにやああんっ♥」

シヤムが、動きに合わせ、短い悲鳴のような声をあげ続ける。

抜かれるときには、絡みつく肉がめくれあがり、差し入れられるときには、それが一緒に体内に押し入れられる。

「ンあっ♥ あひいいい、き、きもち……いい……」

シヤムが、うわ言のように頼りない調子で言う。

「いいのっ？」

「にゃん……あ、あんツ♥ いい……いい……き、きもちいいのにや……いい♥ いいのお♥」

俺は、抽送を中断し、イチモツを、シヤムの奥に差し入れて、腰をグラインドさせ、イチモツでシヤムの奥をかき回す。

「にゃああああんっ♥♥♥♥♥」

歡喜の声をあげて、シヤムが膣肉を収縮させる。ただでさえ狭い中がさらに絞まり、凄まじい快感が俺の背筋を駆け上り、射精感が高まっていく。

シヤムの両の脚が俺の腰に絡みついて更に深い接合を求める。

俺は、抽送を再開させ、シヤムを壊しかねないほどに激しく腰を繰り出す。

「ひあああんツ♥♥♥ あひんツ♥ にゃあああツ♥♥♥」

シヤムが、切羽詰った声をあげ、初めて経験する絶頂を前にして、シヤムの未成熟な体がうねる。射精をねだるように、柔らかく締めつけて絡みつくシヤムの膣肉に、俺は、まだ続きがある事を言い訳に我慢するのを止めた。

「出すぞッ」

「にゃはああああああああああんツ♥♥♥♥♥」

何度も何度も熱い精を膣奥に叩き込まれ、シヤムは、叫び声をあげ、華奢な体が、俺の腕の中で何度も痙攣した。

シヤムの中に出し切った俺は、イチモツをシヤムから抜き、シヤムを脇にどけると、こちらを食い入るように見つけていた三人の中から、トラを選んで寝台に上げる。

寝台に上がったトラを抱えて対面座位の体制になると、トラはイチモツを愛液に濡れた自分のマンコに入れようとしてこすりつける。

「にや……あふ♥　こうかにや……」

トラが、可愛らしく尻を動かしながら、挿入を試みる姿に可愛らしさと気持ち良さを感じながら、両手が抱え上げた。

トラの体を浮かして、イチモツの先端を、熱くとろける淫肉にあてがい、ゆつくりとトラの腰を落としていく。

「にや、にやああアアン♥♥♥」

対面座位で、突き上げられるようにチンポに貫かれる感覚に、トラは、日に焼けた喉をのけぞらせて、声をあげた。

カリが、トラの膣肉をこすりあげる。

「す、すごいのにや♥　まだ……まだ入ってくるう……にやああああん♥♥♥」

俺のイチモツが、トラの小さな膣内に収まった。トラは、切なげに息を漏らしながら、俺の顔を見つめ、うっとり目を閉じて、胸板に頬ずりした。

「ジンジン、あったかくて気持ちいいのにやあ」

そんなことを言ってから、トラは、そろそろと腰を動かし始めた。

「ん……にやふ……ふあん……あッはあん♥」

トラの尻が、淫らに動く。

「あふ……き、きもちイイのにや♥」

隙間無く包みこんだ膣肉で、イチモツの感触を感じながら、トラが濡れた声を漏らす。

俺は、そんなトラを左手で支えながら、右手で乳房をまさぐる。手の中で乳首が立っていくのが分かる。

「あはああ……イイイ……きもち、イイのにや……」

俺に手足を絡めてトラは、ますます大胆に腰を動かし、最初のぎこちなかった動きは、次第に滑らかになっていく。

「ひやああああああ♥♥♥」

尖った乳首を指の間で転がすとトラは、高い嬌声をあげた。

「にや……にやつ♥　それ……すっごく、きもちイイ……すごいのにやあ♥♥♥」

膣が収縮して、早く子種をくれとせがむ。

トラが動くに任せていたが、普段の元気いっぱいなトラがいじらしく動く姿に耐えきれなくなった俺は、その小さな体をぎゅつと抱き締め、体を動かし、チンポを激しく抽送させる。

「にやあああああああああああッ♥♥♥♥」

激しい動きにトラが、背中に爪を立てたが、それさえも愛おしく思えた。

「あ……はううっ♥ あああッ、ス、スゴい♥ スゴいのにやああ♥♥」

淫らな水音が響く中、トラは、高い声をあげる。結合部から溢れた愛液はしぶきとなって、寝台を濡らす。

「ダ、ダメえ……ダメっ、にや……ト、トラ、もう……ンあああああッ

♥♥♥♥ イク、イクのにやあああああああッ♥♥♥♥♥♥」

悲鳴をあげながら、トラは絶頂を迎えた。

「俺も、イクぞ」

トラの体が弓なりにのけ、その一番奥の部分に熱い物を放った。

「にやッ♥ にやッ♥ ンにやあああああああああッ♥

♥♥♥♥♥♥」

俺のイチモツが、何度も律動する。

白目を向いて体を痙攣させるトラを抱きあげ、シヤムの隣に寝かせる。

そして、期待に目を輝かせたミケを寝台に招き入れた。

「刃しやま、刃しやま、早く♥ 早く♥」

寝台に上がったミケはもう、待ちきれないと言わんばかりに俺に尻を向け、自分でマンコを広げて誘うように左右に振る。

「ああ、いくぞ」

このまま一気に挿入し、無茶苦茶に腰を動かしたい衝動に必死に耐えながらも俺は、ゆっくりと挿入した。

みっちりとした膣内の感触が、上下左右からイチモツを包みこむ。

「あぐ……あ、ああ、あ……によおおおおお♥♥♥♥」

ミケの一番奥にまで、到達した。待ち続けたミケは、奥を突かれただけで、絶頂し、体を震わせた。

「あはああ……」

ミケが、どこか満足げな溜息をつく。

俺は、背後からミケの体を抱き締めて腰を動かし始めた。

「あふ……あうう……によお♥」

初めて感じる抽送の感覚に、ミケが声をあげる。イチモツに愛液で濡れた肉褌がぬるぬると絡みつく。

「ンあ……じ、刃しやまあ♥ あつくて……しびれて……ミケ、ヘンになるうう♥♥♥」

頼りない声で、快感を訴えてくる。

俺は、右手を結合部に伸ばしし、クリトリスを指先で愛撫する。

「んによ……そこ、いじったら……あひ……ンああああッ♥♥♥」

敏感な突起を嬲られ、ミケの甘く濡れた声が響く。

「それ……イイ……イイによ……じ、刃しやまっ♥」

左腕でミケの体を抱き、右手でクリトリスを愛撫しながら、抽送を続ける。

絡みつくような熱い膣肉の感触に、たぎる♥♥♥の根元で、射精欲求が高まっていく。

ミケも絶頂が近付いてきたようで、息が荒くなり、体がピクピクと絶頂の予感を告げる。

「あ、ンああ♥ な、なにかくるによお♥ くるう♥ あひあああああ♥♥♥」

痛いほどにミケの膣内がイチモツを締めつける。

「うくうッ」

俺は、その締め付けの中、大量の精を、ミケの体内に放った。

「によああああああああああああああああああッ♥♥♥♥♥」

自分の中で迸る精子に、ミケが悲鳴のような声をあげる。

何度も律動しながら、熱いモノを、幼い少女の膣内へ注ぎ込んだ。

他の二人同様にミケを寝台に寝かせ、一息つくと、服の袖をクイクイと引っ張られた。

そちらを向くと、顔を赤らめて目じりに涙をためた美以が自分を慰

めながら、袖を引つ張っていた。

「みいも、みいもしてほしいじよー」

寝台に上がった美以の服を脱がし、秘部に優しく触れる。

「にや、あああ……」

美以は、弱々しく身悶えさせる。

羽毛のように繊細なタツ子で、上下に撫でるような動きに変える。

「ああ……にやあ……ああん♥」

「美以、気持ちいいのか？」

「ん……きもち、いいのにや……」

美以は俺の指に身を預けながら、答える。

性に関して未熟すぎる少女とする以上、いつも以上に注意を払って幼い性感を的確についていく。

「あ……ああん……ふにやあっ♥」

秘部を攻めながら、耳を舐める。

「ひゃう♥」

美以の反応一つ一つを楽しみながら、秘裂に指を食い込ませた。

「あああああ……ああん♥ あん……にやふう……あああ♥」

あからさまな喘ぎ声が、美以の唇からこぼれる。

続いてクリトリスを刺激すると、美以の体はビクンと震え、溢れる愛液は俺の手を濡らし、自身の太ももの内側にまで伝うほどだ。

「ああ……にやあ……もう……ダメなのにや……あにやああっ♥」

その幼い体が、さらに大きな快感を予感し、無意識のうちに期待に打ち震えている。

日に焼けた両手が、俺の服を握る。

間もなく絶頂するというタイミングで、俺は愛撫を中断した。

「あうっ、はううん……にやっ、にやあああ♥ ふあっ?」

俺を美以は濡れたような瞳で見つめた。

少し間を開けてから、愛撫を再開する。

「にやはああん♥♥♥」

中途半端に放置されていた快感が、たちまち再燃する。

けっして行かせないように指先が、膣口の周囲を円を描くように愛

撫し、クリトリスには触れない。

「あ……あう……んんん……はああ……」

美以は、もどかしげに声を漏らし、その幼い腰を淫らに踊らせる。

「あああ……やあん……んあああっ♥」

絶頂を知らないその体は、そこに至らない限り、この気の狂いそう
なもどかしさを解消するすべはないということを理解していない。
故に自分がどうなっているのか、美以は自覚していない。

「これを入れるぞ」

「にや？」

ミケ達を狂わせたものを前にして美以の目が輝く。

「……刃ン、みいと交尾してほしいのにやあ♥」

股を広げておねだりする美以のマンコの具合を指で確かめ、亀頭の
先端を、そこに触れさせる。

「あ、あついのにや……」

「力を抜けよ」

俺は、ゆつくりとイチモツを、前進させた。

「にや、にやうう……」

先端が、南蛮の王の膺をこじ開けていく。

軽い抵抗が、チンポに当たった。

それを貫いて更に腰を進める。

「あ、あああ……んあっ♥」

鋭い痛みに、美以は、身を固くするが、ゆつくりと挿入し、奥をつ
くころには、硬くなった体はほぐれていた。

「痛いかな？」

「あんまり……痛くないのにや……」

元々痛みに強いのか、それとも生活環境で膜が自然に破けてしまっ
ていたのかは分からないが、俺の能力も相まって、さほど辛くはない
らしい。

「そうか、動くぞ」

「にや？ あ、あんっ♥」

俺が、クリトリスを刺激しながら、抽送を始めた。体の内側を擦ら

れる、未知の感覚をクリトリスから広がる刺激が補強し、快樂として脳へ伝える。

「はぁん……あぁん♥ にゃあぁん あっ、あふう……」

ゆっくりとした抽送のリズムに合わせ、美以の唇から、自然と声が漏れる。

美以の手を股間に導き、俺と美以の接合部に触らせた。

「んふう……刃のがみいの中に入ってくるじょお……」

指先を溢れた愛液と破瓜の血が濡らす。

そのまま、美以の指をクリトリスに誘導すると、自らの突起に指で触れた。

「にゃんっ♥」

強すぎる刺激に、美以が声を上げた。

「あ、はふう……にゃはっ♥ あふうん……」

俺の突かれながらの自慰行為に、美以は熱い吐息を漏らす。

俺のイチモツに慣れてきたらしい美以の尻を押さえて勢いよく突いた。

「にゃあふうっ♥♥♥」

今までにない重い突きとクリトリスからの快感が混じり合って、圧倒的な快樂が美以を襲い、その小さな体を目一杯そらすも、俺はその勢いのまま、何度も突き立てる。

「あうん……んあっ、あっ、あふう♥ あっ、あぁん……はひいひい♥♥」

苦しそうでありながらも甘い吐息を放つ。

俺に突かれながらも、美以の手は、さらなる快樂を求めて自らのクリトリスをいじる。

「はにゃん……あぁん♥ あア……あぁア……ひゃん♥♥♥」

美以は、その幼い体で、セックスの悦びを感じていた。そして、美以の膣が収縮して精子を搾り取ろうとする。

俺は、それをイチモツで感じ取り、動きを速めた。

「あひっ♥ ひいひいひい♥♥♥ すごいのにゃあ♥ きもちイイ♥
きもちイイのにゃ♥♥♥ はひっ、ひにゃあぁあぁあぁあぁあぁあ

ああああああああ♥♥♥♥♥

絶叫する美以の中で俺は果てた。

何度も、美以の奥に性を吐き出し、終わった頃には、まるで陸に上がった魚のようにビクビクと体を震わせていた。

〈北郷Side〉

紫苑たちが南蛮遠征から帰ってきた。

連れて帰ってきた南蛮の連中は、王の美以を始め、全員がロリで、俺の娼館に入れそうな逸材はいなかった。

五胡の襲撃も納まり、そっちに行っていたメンバーも帰ってきてこれからの大きな戦に向けて、準備が始まる。

俺のゲート・オブ・バビロンを使えば、一瞬でけりがつくんだけど、朱里が「目先の勝利の為にその先をつぶすわけにはいかない」って言うって使わせてくれない。

やることもなくて部屋でごろごろしていたら、いつのまにか寝ていたようで、目が覚めると、服を脱がされて周囲を美以たち南蛮の四人に囲まれていた。

四人とも裸で、凹凸の少ない体を恥ずかしげもなくさらしている、むしろ、こっちの方が恥ずかしさを覚える。

「フ、フ、フ……にいをみい達が気持ち良くしてあげるのにや!」

「あげるのにや!」

「あげるによ!」

「あげるにやん」

美以がそう、宣言し、他の三人が追従する。

俺のチンコはすでに期待にウチ震え勃起していた。

「かかれ!」

「「オー」」

背後からミケが、左右からトラとシヤムが、そして正面からは美以が飛びかかってくる。

「「んちゅっ……ちゅ……れる♡ んううう……あふ……んむう♡」」

美以とミケが前後から首を、トラとシヤムが両手の指をしゃぶりはじめた。

美以がペロペロと舐めるのに対してミケは舌で一筆書きをするかのように舌を這わせてくる。

指を二本ずつ口の中で、舐めまわすトラと、一本一本啜えて卑猥な音を立てるシヤム。

四者四様の舐め方で、俺の体を嘗める。

「んむっ、ちゅ、れる……ちゅる、レロレロ♡」

首を舐め尽した美以は、そのまま、下へ降りて胸板を、乳首を舐めはじめた。乳首を舐められて思わず、腰がビクツとなる。

「ちゅ、れえろお……ん……ぺろろ♡」

同じく、首を舐め尽したミケは、背骨に沿ってケツ近くまで舐め下ろし、今度は、蛇が這うかのように蛇行しながら上がってくる。ゾクゾクとした快感がミケの舌と共に這いあがってくる。

「ちゅ、れろてろ……れろろろ♡」

トラとシヤムは、手を舐め尽すと、そのまま、掌と甲から手首へ、手首から前腕へ、前腕からひじへと、段々と肩の方へ、腕を舐めながら移動していく。それがじれったさと、不思議な快楽を感じさせた。

胸を舐めたあと、美以は腹へ。

ミケは、背中の上に、尾てい骨を舐めてから尻へ。

トラとシヤムは、肩まで舐め尽すと、両足へ。

「ハアハア……ハアハア……」

キモチイイ、確かにキモチイイけど、翠とたんぽぽがするみたいないな強烈さがない。

腹を舐めた次はチンコかと思ったけど、美以の舌は、下がらず上

がって、再び胸に。ミケも尻肉を舐めてもアナルへは近づかない。トラとシヤムも足を舐め尽しても内またを舐めるだけでそれ以上にはいけない。

もどかしい。

鈴々や紫苑にされたみたいないけそうでイケない焦らしとはまた違った焦らしだった。

自分でチンコを扱こうとしても、美以が体でブロックして触れられない。

「レロレロ、ちゅ……ちゅちゅ、ちゅう……れろれる♡」

「た、頼む、出させてくれ!!」

耐えきれずに叫ぶと、舌の動きがぴたりと止まった。

「にい、そんなに出したいのかにゃ?」

「あ、ああ、出させてくれ!」

美以が合図を送ると、俺は、四つん這いの姿勢から、座位姿勢に返させられ、左右からトラとシヤムが俺を支えながら、乳首を舐めはじめた。

「ちゅ、ちゅう、ちゅうううう……んん……んちゅう♡」

「うひひひひひ!!」

そして、俺の股の間に美以とミケが座って袋を舐めはじめた。

「ぴちや、ちゅちゅ、んちゅ、ちゅ……ぴちやぴちやぴちや♡」

「あうううううう」

その刺激で、銃に弾が装填されて発射態勢が整った。

「にい、本当に出したいによか?」

「ああ、出したい……」

美以は、乳首を舐める二人に目配せをすると、二人は、乳首を舐めるのを止めて、俺の耳にそれぞれ顔を近づけてきた。

「いきたいによ?」

「ああ」

「いきたいにゃん?」

「ああ!」

「じゃあ、もっとそう思うのにゃ」

美以がそういった直後、左右同時に耳をしゃぶられた。

「んちゅ、ちゅ、もつとイキたいって思うによ　ちゅぱつ、んんん
……チュ、チュウ……んむむ、イキたい　れろ、れろお……ふう……
んちゅ、イキたい　んちゅう♡」

「んちゅ、ちゅぶつ、ちゅ、ちゅぱあ……んふ、もつとイキたいって思
うのにや……んちゅううう……イキたい　ちゅむつ、んちゅう、イキ
たい……れえろ♡」

「うひやあああああ!!」

耳だけじゃなくて、脳まで犯される!!

「はふう……んあああつ、イキたい　ちゅぼつ、ちゅぼつ、イキたい
ちゅつ……はあむ、んむむむ、んむむつ、イキたい……レロレロ♡」

イキたいイキたいイキたいイキたいイキたいイキたいイキたいイ
キたいイキたいイキたいイキたいイキたいイキたいイキたいイキ
たいイキたいイキたいイキたいイキたいイキたいイキたいイキた
いイキたいイキたいイキたいイキたいイキたいイキたいイキたいイ
キたいイキたいイキたいイキたいイキたいイキたいイキたいイキ
たいイキたいイキたいイキたいイキたいイキたいイキたいイキた
い
い

「ふう〜」

「あああああああああああ!!」

ホワイトアウトする意識の中で最後に見たのは、チンコにさわらず
に息を吹きかけている美以とミケの姿だった。

〈美以Side〉

みいとミケに息をかけられて白いのをいっぱい出してには、寝て

しまったのにや。

刃に連れられて城について桃香たちに出会った時に、刃と交尾しているのは、にいから、白いのを搾ったヤツだけだって教わったのにや。

「大王さまあ、白いの搾れたのにや」

「搾れたによー！」

「……搾れたにやん」

「ウム！ ちゃんと搾れたから、ご褒美のおやつをもらってから、刃と交尾をしに行くのにや!!」

「「オー！」」

区切

〈周倉side〉

目の前に迫った三国の戦い。
戦いはもう、避けられない。

そんな中で、蜀の俺・魏の司馬懿／閃・呉の紀霊／弾の三人は、秘かに集まり、裏三国会議とでもいうべき会議を行っていた。

この会議を開くことができたのは、左慈という男のおかげだ。

よくわからないが、俺に襲い掛かってきたから、半殺しにしたところ、ワープみたいなことをしようとしたから、ワープされる前にとっつ構えて、誠心誠意（暴力と暴力）をもつてお願いしたところ、快く協力者になってくれた。

で、会議の席に着いた俺の内心は、かなり、ビビりまくっている。

この二人が手を組んだら、俺は詰む。

閃の能力で蜀の女たちの弾への信頼度をMAXに上げられれば、あつという間に蜀は呉（弾）の奴隷だ。

閃自身の内政チートも甘く見れば、気が付いた時にはどんな不利な条件を結ばされているかわかったモノじゃない。

俺は薄氷の上を歩くような、そんな気持ちで、この会議に臨んでいた。

〈司馬懿side〉

華琳たちが戦いの準備に追われる中、言うなれば、裏三国会議というべき会議を行っていた。出席者は、蜀の周倉こと刃さんと呉の紀霊こと弾さんだ。

二人ともボクにはない武力がある。

刃さんなんて見た目が世紀末救世主だし、弾さんだって見た目が鬼

畜麻婆神父（若）だ。

しかも二人ともボクと違って内政チートとかもってないのに、政務までこなしているんだから、ボクじゃとても敵わない。

今、最も危険なのは、刃さんだ。やろうと思えば、ボクと弾さんを一瞬で殺すことだって可能だろう。

この交渉は、本当に命懸けだ。

〈紀霊 side〉

三国志最大の合戦の前に、俺は蜀の周倉（刃）と魏の司馬懿（閃）と、裏三国会議とでもいえる会議を行っていた。

マジやべえ……

俺の能力は、効果こそ絶大だが、時間がかかりすぎるし、なにより、その過程をこの二人が気が付かないわけがない。つまり、俺は世紀末救世主似と錬金術師の弟似に迫出た状態ってわけだ。

やべえ、雪蓮と殺し合い（演技）した時以上に命の危険を感じてやまねえよ。

〈??〉

「ボクを含め、三人とも他国の女性に手を出すつもりはないと？」

閃が刃と弾に視線を向けると二人は頷いた。

だが、弾は疑いの視線を二人に向けた

「はいそうですかって信用できねえな」

「何？」

「はい？」

「刃の旦那の能力なら、簡単に他国の女だって侍らせられる。それこそ、レイプしてしまえばいい」

「俺が、劉備たちに手を出した理由は、前にも話した通りだ。それに、現在、俺が手を出している人数、何人いると思う？」

23人だ。

一日一人相手にするとしても約一ヶ月かかる人数がいる。しかも、ロリから熟女迄幅広くいるんだぞ。なのに、なんでわざわざ、何日もかかる離れた距離にいる女に手を出す必要がある？」

ギョツと睨まれた弾は逃げるように閃に視線を向けた。

「なら、閃の坊主はどうだ？ 魏の面子に熟女とかいないから、欲しいんじゃないのか？」

「興味がないと言えば、ウソになります。でも、ボクは、あなた方と違って文官ですよ。下手に増やしたら、体力が持ちませんし、華琳を相手にするときに勃たなかったら、それこそ、殺されてしまいます」

考えるだけでも恐ろしいと言わんばかりに顔を青くして身を震わせる閃に、弾は何も言えなかった。

「そういう、弾、おまえはどうなんだ？」

「正直に言えば、手を出す気満々だった。」

でもよお、どうあがいても勝てない相手の女に手を出すほど、俺は命知らずじゃないんだよ。これでも、腕つぶしにはそこそこ自信があったけど、旦那に勝てる気がしないし、魏に手を出して坊主の怒りを買ったら、旦那に負けるよりも恐ろしい目に合いそうだしな」

両手を上げてそう言う弾に二人は何も言わなかった。

「では、当初より話していた通り、天下三分の計を。それも孔明の提案したものではなく、我らが考えた天下三分の計で、この戦を終わらせるといふことでよろしいですね」

「ああ、俺としてはこんな戦争さつさと終わらせて、懐にいる悩みの種を何とかしたいんだが…」

「あ、それは、ボクも同じですね」

「大変だなあ、クズのいるところは、ウチは真面目くんだから楽でいいよ」

ニヤツと笑う弾に刃は「クズはお前だと」あきれ顔で指摘し、閃は苦笑をするだけだった。

その数か月後、蜀・魏・呉は条約を結び、終戦を迎えた。

三国あわせて武将も軍師も誰一人欠けることはなかった。

裏で動く三人の男の動向は、各組織の天才軍師でさえ、悟ることはできなかった。

一話

〈??side〉

薄暗い部屋で20人以上の美女美少女が人数分の木の棒が入った箱に、強い眼光を向けていた。

その中の一人がゆっくりと歩み寄り、一本の木の棒を握った。それに合わせて他の女たちも木の棒を一人一本ずつ手に取った。

「みんないい？ 誰が当たりを引いても大外れを引いても恨みっこなしだよ」

「(コクン)」×22人

「ただ……私があたりを引けなかったら、あたりを引いた人を辺境に左遷させる」

「恨みっこあり!」×22人

「まあ、冗談はここまでにして、行くよ♪」

(本当に冗談?) ×22人

「せーのっ!」×23人

全員が同時に木の棒を引き抜いた。一本だけ赤い印が付いており、一本だけ黒い印が付いてあった。

「やった……やったあああ!!」

「……」×22人

赤い印が付いた木の棒を持って一人の少女が飛び跳ねて喜びの声を上げる。

それを見ながら、全員が無言で武器を手を取った。数分前の会話のことなど誰も覚えてはいなかった。

〈周倉side〉

魏の司馬懿・閃と呉の紀霊・弾とひそかに連絡を取り合い、裏で工

作して三国の武將軍師誰一人欠けることなく、戦いは終わった。

現在は、三国が手を取り合い、進んでいく時代へと移っていった。そして俺の仕事は変わらず、文官と武官を兼任している。

「何をゆつくりと歩いているんだ。時間がもつたない！」

俺と腕を絡ませて歩くのは、俺の直属の上司である愛紗だ。今日の彼女は、いつものサイドポニーをといて、服装も、第五回聖杯戦争で登場した騎兵の格好だ。眼帯こそないが、ボディコンスーツは、周囲の男の目をどうしても引き付ける。そして、軽く化粧をしている愛紗は、普段の彼女の雰囲気とはかけ離れているせいか、周囲に愛紗と気づかれている様子はなかった。

俺たちが向かったのは、いつも使う宿とは別の宿。

詳しい話は知らないが、ウチの武將と軍師たちが何か計画しているらしい。愛紗曰く、くじ引きで一番になったららしい。

すでに話は通されているらしく、宿の親父が部屋を案内してくれた。

部屋に入つてすぐに『行為中、絶対に名前を呼んではいけない』と厳しく言われた。了承すると、愛紗は俺に飛びついてきてキスを交わした。

「ちゅ ♥ ちゅ…あふうん、ちゅ ♥」

「今日はいつになく、激しいな」

一旦顔を放してそう言うと、愛紗はこちらを拗ねたように睨んでき

た。

「当然だ。最近、忙しいと言って私を構ってくれなかったじゃないか」

「悪かった。今日は楽しもう」

「ああ♥」

俺はゆっくりと顔を愛紗に近づける。

俺の唇が愛紗の艶やかなそれに重なる。

「んっ、ちゅう♥」

今度は先ほどのような激しいモノではなく、振れるだけの優しいものだった。

愛紗の唇に舌を這わせると、微かに声をあげ、その口の中に俺の舌を受け入れた。

「ん、んちゅう……あふ……ああ♥ んふう……ちゅぱっ」

愛紗の体が跳ね上がる。

「あうう……ちゅううう……ちゅぢゅ♥」

俺は舌を無造作に動かしながら、愛紗の舌を絡めとる。

やがて、それに答えるように愛紗の柔らかい舌が俺の下と絡み合う。

その知的だった瞳は蕩け、愛紗の舌はまるで獲物に絡みつく蛇のように積極的に動き出す。

薄暗い寝室内にただひたすら口を吸いあい、舌をからませる音だけが響く。

「んむ……ちゅ……ちゅぶ、れる……ぶあっ♥」

お互いの唾液をすすりあう音に合わせるように、愛紗は自分の顔をすこし横にむけて深いキスを貪り合い、愛紗の細い腕は俺の後頭部に回され、自分のほうに引き付けてさらに深いキスを求めてくる。

「んっ、んふう♥ んちゅ、ちゅむむ……ちゅぱあっ、やめてはだめだ、もつとだあ♥」

「うわ…」

それは俺が驚くほど積極的な舌の動きだった。愛紗の舌がお互いの口の中をかき乱し、俺の舌を絡めとると待ちきれないように唾液をすすりとる。

口を放すと、愛紗の手で引き戻されて、再び激しく口付けてくる。いや、もう口付けというよりも、口と唾液を貪られていた。

俺は愛紗の体の上にのしかかりキスを交えたまま、両手で下半身を撫でまわしていく。

「んああ♥　ちゅちゅう……いい、気持ちイイ……あ、あう、んふう♥」
ボディコンスーツの短いスカートがめくり上げ、尻に手を伸ばして揉みし抱く。柔らかな尻肉の感触を楽しみながら違和感を覚えた。

尻を揉みし抱く手に下着の感触がない。まさか、ノーパンだったのかと驚くも、さらに愛紗の尻を触っていくと、細い紐に触れたどうやらTバックだったらしい。

「やあん……あ、ああん♥」

体をのけぞらせる愛紗の唇から俺は舌を引き抜くと、唇の周りから耳へと移動していく。

「あんっ、あああ……はあん♥」

尻から腰を撫でられて、体を震わせながら愛紗は鳴く。

俺が唇をなめると、愛紗も自らの舌をだしてそれに絡めながら鼻にかかった声をだす。

「んふっ、ちゅ……ちゅちゅ、ちゅぶっ、んちゅっ♥」

俺は愛紗の舌をしばらく味わうと、口から離れて舌を顎先にすべらせ、ゆっくりと嘗め回す。そのまま白く細い首筋に舌を進め、甘噛みする。

「ひゃあん♥　んああっ、は、はひああああ♥」

俺はその白い首筋に何度も吸い付き唾液と痣を残しながら、舌を移動させていく。

「あああんっ♥　あひっ、あはあ……あああ……いい、あん……そんな吸われたら、あとになるう♥」

喉を通って俺の舌はむき出しの鎖骨へ、そこからさらに下へ向かって服に包まれた胸に這い寄る。

「隠せば大丈夫だ」

「で、でもお……ああああん♥」

無理やり服を引き下ろし、ノーブラですでに乳首が勃起した巨乳を

引きずり出す。

「だっ、だめえ、はあんっ♥ あ、ああん……あっ、あひいいん♥♥」
愛紗は口ではダメと言いながらも俺の頭に回した手は、髪の毛をかき乱し、胸に頭を押し付けようとしてくるその顔は、欲情していた。仰向けに寝てるにもかかわらず、その巨乳は乳首をつんと立たせ、まるで砲弾のように突き上げている。

大きさは紫苑たちになわなないが、それでも魅力的であることには変わりはない。

俺はその魅力的な胸にむしやぶりついた。

「あひいい、あああ……おっぱい、吸われてるう♥ あああん♥」

愛紗は首を左右にふりながら、その手で俺の頭をつかんで自分の胸に押し付けて、もつとと強請ってくる。

俺は歯でピンク色の乳首を甘噛してやる。・

「あううう、いい……きもちイイっ♥ ああん、イイのお……そこ、そこもつと噛んでえ♥」

俺の愛撫で乱れる愛紗の姿はなんとも艶かしかった。

俺は愛紗の胸を余すことなく味わいながら、空いたほうの胸を絞るように揉む。

「はふうう……ああん、そんなに強く、はひいいいい♥」

「また、大きくなつたんじゃないか?」

愛紗の足がさらになる快楽を求めて、俺の体に絡まり抱きついてくる。上半身は悶えて、汗と俺の唾液を飛ばしながら激しくゆれる胸。

「そうなんだあ♥ お前にいっぱい揉まれて、んああああ……おっぱい大きくなって最近また下着がきつくなってきたんだあ……」

「俺のせいかな? お前が助平だからだろう?」

そう言つて乳首を少し強めに噛むと、愛紗はあっさりと降伏した。「んひいいいい♥ そうだ、私が助平だから、助平だから、もつとおっぱいモミモミされて気持ちよくなりたいたいからおっぱいが大きくなつてしまうんだあ♥ あはああああ♥♥♥」

俺は乳首のまわり舐めながら、胸の根元から牛の乳を搾るように両手で揉みだす。

「ああっ、そ、そんな……あひ、あん、ひいんっ♥ うああ、あああああ……ひいひいひいひい、囁んじやだめえ♥」

だめと言われてやめるなら、最初からやらない。

俺は顔を愛紗の助平な胸に鼻までうずめ、勃起した乳首をかみ搾り、さらに根元から絞り上げる両手に力をこめて弄ぶ。

「ああああ♥ もう、おっぱいをいじめなでえ……だめえ……あひいひいひい♥♥♥」

俺は吸い付くような甘い肌を十分に楽しみながら、思う存分に愛紗の胸の感触を楽しみ、歯を立てる。

「ああああああっ♥ イクっ、イクうっ♥ お、おっぱいで、イクうううううううううううう♥♥♥♥♥」

声をあげて愛紗は、体を震わせて俺に下半身を押し付け、背筋を反らした。そして、そのまま、脱力した。

「胸だけでイクとは、本当に淫乱だな」

俺は喉で笑いながら、巨乳から顔をあげた。

ボンテージから唾液と汗にまみれの胸と柔らかい太腿をさらして寝台の上に横たわっている。

その真っ白な肌が薄暗い室内にぼんやり浮かび上がる光景は淫靡でありながら美しかった。

「はあああ……」

力の抜け横たわるその足元に移動し、愛紗の両足の足首をそれぞれ手に持つ。

「んああ……な、なにを」

まだ絶頂の余韻にひたる愛紗は、俺が何をしようとしているのかも気ついていない。

俺は無言で、そんな愛紗の足を持ち上げた。

「きゃっ」

俺は愛紗の両足を持ち上げて左右に開いて、そのまま愛紗の体をくの字に押し曲げて頭の上まで足をおしつける。

「いやああ、はずかしい♥」

愛紗をまんぐり返しの格好にした。俺の目の前には、美少女の桃

尻。

「もう、びしょ濡れだな」

「だめえ、見ないでえ……ああ……恥ずかしい」

「いまさら恥ずかしいもないだろう？」

俺はくの字を通り越してコの字に曲げられた魅惑の美軀を体全体で押さえつけると、鼻先を卑猥な下着でつつまれた秘部に押し付ける。

「ひいい、だめえ……あああ♥」

口ではダメと言いながらも抵抗などなく、とろけた瞳に自分の大事な部分をいじる俺を見上げている。

舌でマンコを隠しきれない紐を脇にどけて膣口に舌先を伸ばす。

じらすようにわざと舌先をつけながら、肉の花びらをつつきまわす。

「んああああ……舌が、ちよんちよんあてるなんて、切ない……あ、ああ、もつとちやんとペロペロしてえ♥」

豊満な胸の向こうから覗く愛紗は頬を染めて、はしたないおねだりを口にする

俺は返事をする事なく、おもむろに舌先をのばすと、顔ごと愛紗の股間にうめるように膣口にむしゃぶりつき、愛液をすすりとり、膣の中を舐めまわした。

「ひあああ♥ はひ、くひひひひひひ♥ やつ、だめ、だめえ

……お、お腹の中、ぐちゃぐちゃになるう……あひ、あひ、あひああああ♥♥♥」

激しくゆれる丸められた白い身体。

俺は鼻先まで埋まるほど顔をくっつけて取り止めなく流れ出る愛液をすすりながら、激しく舌で膣壁をこそぐように舐めまわす。

「あひひい……うっ、うああ……あ、あひい♥ いやあ……は、激し……あ、あううっあつ、吸われるう……私の中が吸われてるのお♥」

俺はさらに鼻先を濡れ落ちそうな肉の花びらの上で息づく陰核に押し付ける。

「あはあああああ♥ そんなああ、すごい……だめになるうううう♥」

愛紗は首を振りたくり、それでも欲情に潤んだ瞳はマンコに顔をうずめる俺からはなさない。

「あああんっ、い、いい……もつとしてえ……あああああつ、もつと強くう……んんっ、あつ、あん、あはあああああつ♥」

尻が蠢き、隙間無く吸い付いた俺の顔にさらに突き上げるように押し付けられ、膣の中で襲を舐めあげていた俺の舌が、まるで吸い込まれるように引き締められた。

「あひい、だ、だめえ♥ あつ、あはあああああんっ♥ き、きもちイイ……イクっ、イクっ♥ イクイクっ、またイクうううううううううううううううううう♥♥♥♥♥」

愛紗の体が大きく震え、愛液が噴水のように迸り出た。

頬を染め、舌を突き出しはしたなく絶叫して首を振る愛紗。

「……それじゃ、そろそろ」

「はあはあ、はあはあ♥」

愛紗は、ぼんやりと体を折り曲げたままこちらを見上げる。

俺はニヤリと笑い、尻を片手でおさえつけ、限界まで勃起したイチモツを引きずり出した。

「あああああ……」

俺は寝台の上で丸まる愛紗の体をまたぐように立つと中腰でゆっくりと腰をおろす。

「来てくれ、もう……たまらないんだあ、そのぶつとくって、熱いオチンポを私の中にぶち込んでくれえ♥」

愛紗の声は震えていたが、それは恐怖ではなく、期待によるもだった。

自分で両脚を自分の頭の上で固定し、両手で太腿をささえ腰をひくつかせながら、尻をせいっぱい上げている。

俺は腰をゆっくりとおとし、下着の横からイチモツを差し込んでいく。

「んああああ……お、オチンポ、入ってくるう……巨根オチンポ……」

んひひひひひひひ、うぐうううううっ♡♡♡♡

俺のイチモツが濡れた愛紗の肉壺の中に、埋まってい

愛紗のマンコは、締め付けで俺のイチモツを迎え入れるとまるで奥に誘い込むように煽動する。

「あうううううう、入ってるう、私の中にい……あはあああああ、ズリズリ入ってきてるう♡」

卑猥な肉の花びらが俺のイチモツに纏わりつく。それを亀頭がかき分けて進み、ついに子宮口に到達する。

その途端、また愛液が噴水のように吹き上った。

「あひっ、あひあああああああッ、だ、だめえ、入れられただけでイクううううううううううッ♡♡♡♡♡♡」

俺は全体重をかけて愛紗をまたいで、尻の上に腰掛けるような姿勢になる。

「おいおい、まだこれからだぞ」

「はひい？」

唇から唾液をながし、自分の巨乳に上から押さえつけられた愛紗がうつろな声を出す。

俺はおもむろに腰を引き上げる。

「んああああああ♡ はうう……はっ、あはあ……あん……あひひいっ♡」

肉の花びらが引き抜かれるイチモツに絡みつく。まるで食いついたら離さない気持ちのいい肉の罫だ。

半分ほど引き上げたところで俺はまた全体重をかけ腰をおとす。

「あぎい……んくう……はぐう……あああ、はっ、あはあ……ひああんっ♡」

愛紗のマンコは、イチモツを突き入れるたびに、まるで水を吸ったスポンジを押しつぶのように愛液があふれだす。

俺は根元まで突き刺さった亀頭で子宮口を体重をかけて突き叩く。

「ああああああ♡ また、またイってしまうう……き、気持ちいい……だめになるう♡」

愛紗は自分の膣に深々と突き刺さるイチモツを恍惚と見上げてい

る。

もちろん、そんな言葉は無視して、俺は愛紗の尻と腰をもつと、激しくイチモツを上下させる。

「あうううう……オチンポがオマンコ、出入りしてるう♥　すぐいいのお♥♥♥　はひいいあ……いい、気持ちいい♥　お腹の中がぐちやぐちやされてるう♥」

愛紗は舌をだして喘がせながら、突き入れられる俺のイチモツに酔いだしている。

俺は腰を回して、愛紗の中をこねくり回す。

「はっ、はひいんっ♥　もっと、もっとわたしを突いて……あんっ、ああんっ、突いてこわしてえ、あっ、あはああん♥」

愛紗は狂ったように叫びながら、膣でイチモツを締め上げてくる。

まるで便器のように俺の下で丸められた愛紗の体に、激しくピストンを叩きつける。

突き入れながらイチモツを回し、肉壁をこそぎ落とし激しく摩擦する。

「壊れるよ」

「ひ、ひどい……ああっ、わたし、バカになってしまっ……気が狂うウ……ああああああっ♥♥♥」

腰をぶつけ、愛紗の膣を味わいながら俺は愛紗を見下げる。これまでに以上に締め付けてくる膣肉と紺がするような愛紗の表情が、終わりが近いことを教えてくる。

「あああ、イクっ、あっ、ああああ……イキそう……わたし、もうイチやううっ♥♥♥」

「俺も、出そうだっ」

俺は、腰をしずめると亀頭の先を膣奥に押し付ける。

「あうっ、んひいい♥　あっ、あっ、すごい……す、すごい……あうっ、出して、わたしの中にたっぷり出してえ……あひい、あっ、あああああっ、いっぱい、いっぱい出して、孕ませてくれ、おまえの子を私に孕ませてくれっ♥　ひああああ……あひんっ、あああっ、んひいいいいん♥♥♥」

今日は鈴々とデートだ。

とは言っても、買い物だとか、飯だとかめんどくさいことはしないで、宿に直行してエッチだ。

だって、鈴々の買い物なんて食べ物だし、飯行ったら延々と食べるだけ。

ひたすらブラックホールみたいに食べものが消えていくの見せられて、さらにその後にとんでもない額のお支払いが待ってますとか、勘弁してくれ。

で、宿に着き、親父の案内で部屋に入る。美人女将とかいねえのかよ。

部屋に入っただけで俺は服を脱いでいく。すべて服を脱いで鈴々の方を見ると、鈴々はそのままの格好で暇そうに寝台に座って足をプラプラと振っていた。

「鈴々、脱がないの？」

「脱いだ方がいいの？」

「いや、脱がなきゃできないじゃないか。あ、俺が脱がせてあげようか？」

「鈴々、自分で脱ぐのだ」

分厚いステーキばかりじゃ飽きちゃうからな、たまにはさっぱりしたのも食べたくなる。

戦乱の頃は、じつくり慣らすなんて暇なかったから、この平和な時にこそ、今までないがしろにしてきてしまったロリ組の開発をしようと思ったんだ。

そんなこと考えている間に鈴々はポンポンと服を脱ぎ捨てて裸になっただけ。

慎ましいふくらみのおっぱいとまだ肉の薄いお尻。これを俺が育てると思う興奮してくる。

「じゃあ、お兄ちゃん、座るのだ」

「ちよつと、待って、今日は……」

鈴々に椅子に座らせられると、あつという間に鈴々に手足を拘束されてしまった。

「り、鈴々、今日は……お兄ちゃんのおちんちん……もう、大きくなってきてるのだ。そんなに鈴々におしゃぶりしてほしかつたの?」

そう言つて鈴々は、口を大きく開けていやらしく舌をうごめかせた。

思わず、喉が鳴り、セックスしようと言ひ出せなくなった。

鈴々は俺の股の間に跪いた。

「ちゅっ♡」

俺のチンコに、細く小さな指先を添え、亀頭部に、唇を被せるようなキスをする。

「んむ、ちゅちゅ……ちゅぶ、ちゅう……んふん……ちゅじゅ、ちゅびっ♡」

鈴々が、チンコのおちこちに、小さな唇で口づけを繰り返す。

その刺激でチンコが勃起率50%くらいから、一気に数値を上げていく。

「んちゅっ、ちゅぽっ」

さらなる刺激を期待していたのに鈴々は不意にフェラを止めて壁の方を見た。

「声が聞こえるのだ」

声? 俺も耳を澄ませてみる。確かに声が聞こえるな、この宿の壁が薄いつてことか。

でも、なんとなく誰かがしゃべってる声が聞こえるって程度で、それほど気にならない。そんなこと思っていると、鈴々が椅子ごと俺を持ち上げて壁のそばに移動した。

どうやら、声が聞こえる方とは反対側にいたから声が聞こえにくかつたらしい。

『あひいい、あああ……おっぱい、吸われてるう♡ あああん♡』

って、おいおい、お隣さんもSEXの真っ最中ですか!?

『あううう、いい……きもちイイっ♡ ああん、イイのお……そこ、そ

こもつと噛んでえ♡』

なんてエロい声上げてんだ。聞いてるだけでフル勃起してしまつた。

『んひいいいい♡ そうだ、私が助平だから、助平だから、もつとおっぱいモミモミされて気持ちよくなりたいたいからおっぱいが大きくなつてしまふんだあ♡ あはああああああ♡♡♡♡』

どんな女なのかマジで気になる！

「お兄ちゃん、鈴々がおしゃぶりしてたときよりもおちんちんおつきくなつたのだ」

「だ、だって、あんなエロい声聞かされたら……」

「問答無用。そんなに声が好きながら、もつと聞こえるようにしてあげるのだ」

そういうと、鈴々は脱ぎ捨てていた自分の服からマフラーをとると、俺の顔を、特に目を覆った。

『ああつ、そ、そんな……あひ、あん、ひいんつ♡ うああ、ああああ……ひいいいいいい、噛んじやだめえ♡』

ヤバイ、視覚が奪われたことで、他の感覚が敏感になってよりはつきりと声が聞こえるようになった。

それに、マフラーにしみこんだ鈴々の匂いが、俺をより一層興奮させる。

「はぶ、んちゆう……ちゆうぶ、ちゆうぶつ、ん、ちゆう♡」
「おお……」

さらに鈴々がフェラを再開してチンコを包み込んでいく口腔の感触に、俺はたまらず声を上げた。

『あああああつ♡ イクつ、イクうつ♡ お、おっぱいで、イクうつうつうつうつうつうつ♡♡♡♡』

「じゅるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる♡」
「え、あがああああああああああ!!!」

隣から聞こえたイキ声に、意識を向けた瞬間に鈴々必殺のバキュームフェラがさく裂し、俺はあっけなく射精した。

っていうか、おっぱいだけでイクってどんだけ淫乱なんだよ。

『んあああああ……舌が、ちよんちよんあてるなんて、切ない……あ、ああ、もつとちやんとペろペろしてえ♥』

「ちゅぶ……れる、んちゅ♥ ふう……ちゅぶ、ぢゅむむ♥」

力を失いかけたチンコが艶声とフェラで復活させられる。だが、一体どこを舌で攻められているんだ？

復活したチンコを鈴々は、さらに肉棒を深く啜え込み、舌をねつとりと動かして、チンコを刺激してくる。

『ひあああつ♥ はひ、くひいいいいいい♥ やつ、だめ、だめえ……お、お腹の中、ぐちやぐちやになるう……あひ、あひ、あひああああああ♥♥♥』

まさか、クンニか？ 巨乳の女がクンニされてオツパイぶるんぶるん振って喘いでんのか!?

「ちゅむむ、ちゅぶ、ぬぷ♥ んふう、ちゅふう……んむむむむむ、ちゅ、ちゅば、ちゅばつ♥」

「あ、あああつ」

自分を忘れるなど言わんばかりに、鈴々が強めのフェラで自己主張してくる。

『あああんっ、い、いい……もつとしてえ……あああああつ、もつと強くう……んんっ、あつ、あん、あはあああああつ♥』

鈴々のフェラに夢中になっていると、今度はエロ声が思考に割り込んできて、まだ見ぬ巨乳美女を妄想させる。

『あひい、だ、だめえ♥ あつ、あはあああああんっ♥ き、きもちイイ……イクっ、イクっ♥ イクイクっ、またイクううううううううううううううううううう♥♥♥♥♥』

「じゅるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる♥」

「おおあああああああああああああ!!!!」

声がイクのに合わせて、再び鈴々がバキキョムして俺を強制的にイかせた。

鈴々は、チンコから精液を吸い出すといったん口の中からチンコを解放して、小さく息をつく。吐息がチンコにかかってムズムズする。

そして、鈴々は、唾液にまみれのチンコを握り、連続で射精して疲

れたチンコを癒すように舌で亀頭を舐め回し始めた。

「れるれる、れる、れるお……ちゅちゅう……ちゅぶぶつ、ちゅぱっ♡
ちゅぷ、ちゅっ」

フェラチオに関しては、鈴々が間違いなく蜀一だ。月と詠のコンビプレイも最高だけど、チンコをしゃぶることに限定すれば、間違いなく鈴々だ。

さらに鈴々は、指先でシコシコと竿を扱きながら、先端部を音をさせて吸い始めた。

「んちゅうつ、ちゅう……ちゅぶつ、ちゅうつ、ちゅうちゅう……ちゅちゅつ、ちゅううう♡」

「おほおほおほおほ……」

鈴々の唇がもたらす快楽に、俺は天井を仰いで喘ぐ。

鈴々は、音をたてて亀頭から口を放すと、快楽に打ち震える竿に、まるでハーモニカを奏でるように唇を滑らせた。

「ちゅううう……ちゅぱ、れるれる……んちゅ、ちゅちゅう……れえろお♡ ちゅ、ちゅぶつ、んちゅちゅ……」

『あひつ、あひあああああッ、だ、だめえ、入れられただけでイクうううううううううッ♡♡♡♡♡』

鈴々のフェラに癒されていると、静かになっていた隣から再び声が響いた。ついに本番を始めたらしい。

「はむん、ちゅぶ……ちゅ、ちゅばつ、ちゅぷぷ……んむむ……」

鈴々は、再び俺のチンコを咥え、舌と口内でチンコを擦り、刺激してくる。

『んああああああ♡ はうう……はっ、あはあ……あん……あひいいいっ♡』

「ちゅぶ、ちゅぶつ、んっ、んむむ、ちゅ、ちゅう……ちゅちゅつ、ちゅぶ、んちゅううう♡」

鈴々のフェラと声が俺を三度高ぶらせていく。

まだ見ぬ巨乳美女を妄想する。真っ先に想像した顔はフェラしてくれている鈴々、それを大人へと成長させる。巨乳に成長した鈴々が俺とのセックスで喘いでいる。

『あざいいい……んくう……はぐう……あああ、はっ、あはあ……ひ
ああんっ♥』

「あむ、ちゅぶちゅぶ♡ んちゅっ、ちゅっ、ちゅぶぶ、れろろ……
んちゅう……」

エロく成長した鈴々を犯しながら、幼い鈴々にフェラされる妄想
は、俺をこれまで以上に興奮させた。

『あううう……オチンポがオマンコ、出入りしてるう♥ すごくい
いのお♥♥ はひいいあ……いい、気持ちいい♥ お腹の中がぐ
ちやぐちやされてるう♥

はっ、はひいんっ♥ もっと、もっとわたしを突いて……あんっ、あ
ああんっ、突いてこわしてえ、あっ、あはああん♥』

「ちゅぶぶっ、ちゅ、ちゅばば♡ ぢゅぶっ、ぢゅぶ……」

「鈴々……で、出るぞ……」

そう、隣が未来で姉のような鈴々を並べてそれぞれ犯している。そ
んな妄想をしたとき、俺の中で何かがカチツと音を立てた。

「ちゅぽっ♡ わかったのだ、じゃあとどめなのだ」

巨乳……鈴々の姉……

隣で犯されている女を、鈴々の姉である黒髪巨乳美少女と想像して
みた。

愛紗が見知らぬ男とSEXして喘がされてる姿が一瞬浮かんだ。

その瞬間、ゾクツとする、言い知れぬ快樂が走った。

『あうっ、んひいい♥ あっ、あっ、すごい……す、すごい……あ
うっ、出して、わたしの中にたっぷり出してえ……あひい、あっ、あ
ああああっ、いっぱい、いっぱい出して、孕ませてくれ、おまえの
子を私に孕ませてくれっ♥ ひああああ……あひんっ、ああ
ああっ、んひいいいいん♥♥♥』

俺以外の男に孕ませてくれと乞う愛紗が浮かんだ。

「り、鈴々、待つて『あああああっ♥ い、いくう、いくうっ、ひひい
……ぐひいっ、はひい♥ イ、イ、イっ、イっちやうううううう
う♥♥♥ い、いっ、イクうううううううううううううううう
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお』

「で、どうだったの？ 鈴々ちゃん」

「お兄ちゃん、全つつつ然、気づいてなかったのだ！」

「ふうん、まあ、あいつにとつて女なんて、その程度の認識だったってことね」

「愛紗の方はどうだったのだ？ ご主人様がすぐ隣にいる状況での刃とのアレは？」

「フッフ、最高だ。だが、一つ問題を上げるのなら、楽しめたのは最初のほんの少しの間だけで、後はご主人様の存在など、忘れてしまっていたな」

「ほほう、それほど、刃と熱く激しくイタしたのだな？」

「それはご想像にお任せする♥」

二話

〈??〉

「じゃあ、みんな準備は良い？」

「……（コクン）」×21

「今回は、前回あたりを引いた愛紗ちゃんは除外してまず、当たりくじが入ったくじを引いて、その後、今度は愛紗ちゃんと鈴々ちゃんを入れ替えて外れくじが入ったくじを引くよ。」

それと、前回みたいにあたりを引いた人を襲っちゃだめだからね」

（あなたがいの一番に、剣抜いたよね!?）×22

「念のためにみんな武器は、その小部屋に入れてきてね」

「は〜い」×22

全員が武器を指定された部屋に置いて戻ってくると、指示通りにくじを握った。

「それじゃあ、いくよ?」

「せえ〜の!」×22

「……やったあ!」

「っ!」×20

次の瞬間、ある者は胸の谷間から、ある者は袖の中から、またある者は服の裾から暗器を手に飛び掛かった。

そんな中、一人の少女が、あたりを引いた少女に交渉を持ち掛け、20人の狂える美女たちを言葉で抑え、あたりの権利を共有することに成功したのだった。

〈周倉side〉

今日、俺の両手を引くのは、月と詠のメイドコンビ。いつぞやかの黒と白のワンピースを着た二人はそれぞれ俺の手を握っているのだ

が、俺との身長差でぶら下がっているような感じだ。

「こつちです、刃さん」

「ねえ、早くー!」

二人に手を引かれてたどり着いたのは、この間、愛紗に連れてこられた宿だった。

前回と同じように宿の親父に案内されて部屋にたどり着くも、二人に部屋の前で待つてると言われた。

二人が入ってしばらく待っていると、入室の許可が下りた。

扉を開けると、そこには、侍魂の恩を返す者のコスプレをした月と詠がいた。正直二人とも、ロリ体系の為、色々と足りないのだが、それが逆に背徳的に見える。

二人に部屋に招き入れられると、一つ約束事をさせられた。名を呼ぶときは、字で呼ぶこと。とのことだ。

「元福さん ♡ んっ、んむ……ちゅ ♡ んふう……ちゅうう……ちゅばっ」

月が、俺の上半身にしがみついてキスをねだってくるのに答える。月の柔らかな唇を堪能し、肉付きの薄い小振りな尻を掴んで月を支えながら、その感触を楽しむ。

普段ロングスカートで隠れているその部分は現在、スーパーハイレグメイド服でほぼ尻を丸出しにしている。

「へうう……元福さあん、お尻をモミモミするのもいいんですけど、もつとちゅうもしてください ♡ はちゅっ、ちゅぢゅう……」

そう小さく囁いて、甘えるようなキスをしたあと、月は小鳥のように俺の首筋を啄んでくる。

両腕と両足を俺の背後に回して、しっかりと抱き着いてくる月の尻をしつかりと抱えなおして、二人の唇の高さを合わせると、ちょうど抱きかかえられた月の尻は俺の腹の前くらいになる。

「んむ、ちゅむっ、ちゅ……あん、お尻イイですう……んちゅっ、ちゅ ♡ ちゅむむ……ちゅぱっ、ちゅちゅうう ♡ あはあっ、元福さん、もつと、もつとちゅうしてください……」

息継ぎをする為に、身体を放す月。その度に深く開いた胸元が目

入る。

真っ白な素肌と、服から覗くピンクの乳首が未熟な体ながら、色気を醸し出し、イチモツが昂る。

「ああ、分かった」

月とのキスが、月の希望通りにより執拗さを増した。

そんな中、一人残されていた詠は、俺の前に跪いて、服の中からイチモツを取り出した。

「あああ、元福のが、こんなにおつきく♥」

それから、右手の指で俺に抱えられてより一層尻に食い込んだ月の股間を下から押しつけて、二本の指でマンコを擦る。

「あああ……う、うひい……文和ちゃん、そこお……あん、あああんっ

♥ あはああああっ♥」

すでに潤み始めていたマンコが擦られて、内側にためられていた大量の愛液が、あふれて擦を濡らすだけにとどまらず、滴をおとす。

その愛液は、すぐ下にある俺のイチモツに、降りかかる。

詠は親友のマンコを右の指で刺激しながら、余っている左の指でその後ろをなぞる。その瞬間、完全に不意打ちを食らった月の身体が弾み、俺の掌に月の体重がかかり、尻をつかんで押さえつける。

「あ、あひい……ぶ、文和ちゃん、そ、そこだめえ……ひん♥ きひいひ……ひ……ひああああああ♥♥♥」

「何言ってるのよ。仲穎が、オマンコよりもこっちで気持ちよくなっちゃう変態だっけボクが知らないと思った？ ほら、こうすると♥」

詠が、尻の谷を撫でていた左指の内的一本の中指を立て、布を脇にずらして月の尻穴に突き立てた。

「あ、あっ、ああああああ……ダメダメダメ♥ お尻の中、クリクリしたらダメなお……ああっ、ああ、ああん……んひい……あうっ、あきゆうううううっ♥」

「何がダメなのよ。知ってるんだから、今日だって、元福にお尻を可愛がってもらうためにこの中、綺麗にしてあるって」

月の制止の声を無視して、詠は自分の愛撫で敏感に反応する月の身体の震えを見ながら、指を抜き差ししたり、捻ったり、かき混ぜてい

く。

「んちゅっ、ちゅぷ♥ は、はひ、んはあ♥ じ、元福さん、今ちゅう
されたらあつ、あああああ♥」

俺とキスされながら、詠に前後を同時に愛撫され、月の瞳は完全にとろけ切っていた。

そして、詠は月への愛撫だけではなく、俺のイチモツにも舌を這わせてきた。

さつきから零れている月の愛液と自分の唾液でイチモツ全体をコーティングするように舌で塗り広げていく。

両手を親友の愛撫に使っているので、舌や鼻、顔全体で俺のイチモツを愛撫する。あの性知識がほぼ皆無だった詠が自分の顔を使ってイチモツに奉仕する姿は、他の娘たちよりも興奮する。

「んちゅ、ちゅぶぶ……ん、ちゅむむ……ちゅ、ちゅぶっ♥ ちゅぶ、ちゅぼっ♥」

フェラをはじめ、色々な奉仕をしてくれる詠だが、未だに初々しさがある。イチモツを頬で向きを変えようとして失敗して、眼鏡が我慢汁で濡れてしまったり、何度も顔にぶつかったりしている。

「はっ、はぶ、んふう……ちゅっ、ちゅば、ちゅぶ……ああ……ん、仲頼ったら、オマンコから、助平な汗がどんどん出てきて、ボクの顔にもかかるう♥ れろれろ……」

「やあつ、ダメえ……ああん……あひい……オマンココシコシしながら、お尻グリグリ、ダメえ……ああん♥ き、きもちイイ……あうう……しびれちゃうのお……くううん♥」

「ウソばかり……ちゅ、れる……んは、ボクに助平お尻をグリグリ押し付けといて……はぶ、ちゅぶぶ……なにがダメエよ……んちゅうう♥」

詠は、一度俺のイチモツから口を放すと、その柔らかな頬をこすりつけながら、月の尻越しに俺を見た。

「ねえ、元福。今日は、もう誰かに出してきたの？」

「え？ 私と文和ちゃんが、あの人のおちんちんとお尻を舐めさせられてる間に、誰かに搾り取られちゃったんですか!?!」

彼女たち二人が、俺と寝起きでセックスなんて展開は早々ない。彼女たちの立場は天の御遣いの専属侍女である為、朝は北郷がどこかに遊びに出てそのままでない限りヤツを起こさなくてはならない。

「いや、今日は二人とするんだから、まだ誰ともしていない」

そう答えると、明らかに二人の目が変わった。

「じゃ、じゃあ、ボクが最初に飲んでいい？」

上目に見上げながらせがんでくる詠に、肯いて応じてやる。

「嬉しい♥ あむ……ちゅちゅ……ちゅばっ、ちゅ、ちゅぶ♥ あはあ

……んむむ……ああん……ちゅずずずっ♥」

笑顔でイチモツを頬張る詠。

月のマンコを擦っていた右手を放して、俺のイチモツの根元を扱きたてる。

かわりに、月の尻穴を布越しではなくて直接刺激し始め、挿入する指も二本に増やし、先程までの解す動きに、指を交互にばたつかせて穴を広げる動きも加えている。

「ああああ……おひいいいい♥ はふう、あああん……あひ、あひいい……ひあああ……ああああ♥♥♥」

さらに指の根本まで埋め込んで回すように捻っているらしく、すでに月は俺とキスを続ける余裕などなく、必死に俺にしがみつきのながら、喘ぐ。

「れるっ、んむむっ、はあ……ちゅぶっ♥ はあ、はあ……も、もう、ボクも……がまんできないのお……あん、んじゅっ、ちゅぶうっ♥」

詠は、イチモツを扱いていた右手を放して、鈴口にこすりつけて手を我慢汁で濡らすとそのまま、自分の股間にもっていき、食い込みの中にを入れてオナニーを始めた。

「ちゅぶぶ、あはああ♥ 元福のチンポ汁ついた手でする自慰気持ちいい♥ じゅぶっ、ちゅずず……んぢゅううう……」

俺もただ月を抱えているだけじゃない。月の尻を跡が付くようなほどに揉みし抱き、舌を出して喘ぐ月の舌に自分のそれを絡めて、しゃぶりつく。

上下からの攻めで、月の身体が不定期にビクつく。おそらく軽く何

で月の股間を隠していた布をどかし、マンコに押し当てた。

「あんっ♥ 文和ちゃん、待って……元福さん、体勢を変えてください」

「ああ、わかった」

月の希望通りに俺に抱き着いていた月の向きを180度変えて、詠に向けてM字開脚する体勢となった。

「あく、仲穎、もしかして、お尻に入れろってこと?」

「うん♥ この体勢で、元福さんのデカチンポ、お尻に突き刺してえ♥」

「……ボクの純心だった仲穎はどこに行ってしまったんだろう」

「私から言わせると、自分からお尻振って男の人を誘う文和ちゃんこそ、昔の文和ちゃんからは全く想像できないよ」

「ボくら二人とも元福に助平な女に作り替えられちゃったのね……」

「でも、嫌じゃないんでしょ?」

「うん♥ じゃあ、イクよ」

「早く入れてえ♥」

長い前振りの間もしごかれていたイチモツが詠の手によって月の尻穴へ突き刺さっていく。

「ああああ……へううううう♥ はああ……お尻、入ってきて、ひぎいいいいいい♥♥♥」

「ツク」

排泄行為とは逆方向の不自然な快楽に月は快楽の悲鳴を上げ、その締め付けに俺が声をあげそうになる。

イチモツは、詠の導きで月の直腸を進み、根元まで侵入した。

あの日以来、後ですることハマってしまった月だが、その締め付けは、未だに健在だ。

「ああああああ、はひ、はふうううん……す、すごいですう……んああああ♥」

「常々思うんだけど、本当に……き、気持ちいいの?」

「へう……うん……きついけど、気持ちいいよお……あうう♥ 元福さん、動いてください……私のお尻で気持ちよくなってください♥」

「そ、そう……」

俺は、ゆったり抽送を始める。詠は俺と月のアナルセックスをドアップで顔を真つ赤に染めて観戦している。

「あ……あうう……ひぐうう……あ……ああ……あはあああ♥
おひいいい……」

俺の腰の動きに合わせて月が、喘ぎ声を上げる。

「あ、あはああん……ハア、ハア……あひいい……あひア……はひいいイ♥」

喘ぐ月を突き上げながら、またオナニーを始めた詠に声をかける。

「文和」

「な、なに？」

「仲穎の前、舐めてやれ」

「え……」

「そうすれば、仲穎も早くイって文和とたっぷりできると思うんだけど、どうだ？ イヤか？」

意地の悪い口調で、俺は言った。しばし呆然とした詠だったが、すぐににやりと笑ってを月のマンコに口づけした。

「ちゅっ、ちゅぶぶぶ……れるろ、あはっ、仲穎のお豆さんピンピンね……ん、んう……こもたっぷり舐めてあげる♥ ちゆるっ、んっ、んんん……ちゅう……ちゅぶぶっ♥」

「あっ、あああん、文和ちゃん、ひ、はふうん……あああ、イ、イヤあ……感じちやうのお♥」

月が俺の腕の中で詠の舌によって身悶える。その動きがつながっている俺にも快樂となつて伝わってくる。

「んむ……ちゅぶぶ、んむ……はふう……仲穎のおマンコ、美味しい♥
んっ、んちゅ……ちゅむむむ……」

「あああ、文和ちゃんの舌あ、中に入ってくるう……くはあ……いいのお♥」

親友のクンニでだらしなく表情を緩める月に、俺は腰の動きを再開させた。

詠も俺に突き上げられて揺れる月にあわせて、頭を動かし、月のマ

早く元福のチンポ、入れて♥」

詠はそう言つて、壁に手をつけて、尻を突き出した。突き出された陰部は変色し、あふれた愛液で内股を濡らしていた。

俺は、尻を突き出す詠の後ろに立つと、行くりと、尻に手を這わせた。俺の手が触れると詠の尻はビクンと震えた。だが、気にすることなく、撫でまわし、そのまま手を腰へ、そこからさらに上を目指していく。

背中とわき腹を撫で上げ、脇から手を入れてノーブラの乳房を掴む。月よりはある膨らみを揉みし抱く。

「ああああん……胸が、敏感になつて……あああ、ダメえ……入れてももらつてないのにい……あふんつ、くうん♥ あつ、あつ、ああああ……だ、だめえ……お、おかしくなつちやうう♥」

「乳首、触る前から立っているじゃないか」

「あ、あんたとしたくて、あふつ、ボクの体、発情しちゃっているんだもん……しようがないでしょお♥ ねえ、焦らさないで、早く突っ込んで♥」

詠はその可愛い尻を揺らして、押し当てられている俺のイチモツをねだつてくる。

「ああ、俺も入れたいんだが、邪魔な布があつてな」

「だ、だったら、あんつ、どかせばいいじゃない」

「俺の手は今、おまえの胸を揉むのに忙しい。チンポでどかそうとしているんだけどどうまくいかなくてな。まあ、擦ってるだけでも俺は気持ちいいからいいんだけどな」

「はひつ、わ、わかつたわよお♥」

俺が言わんとしていることを理解した詠は、壁についていた片手を放して自分のマンコを覆っていた部分をどかして、マンコをあらわにする。

「さ、さあ、早く入れて。もう、ホントに我慢の限界なんだからあ♥」

潤んだ瞳で、こちらを睨んでくる詠を可愛いと思いつながら、俺は両手を移動させて詠の尻肉を広げ、小さな穴に自分のイチモツが入りやすいようにする。詠は、胸を揉むのに忙しいなど言っておきなが

ら、あつさりと手を移動させた俺をさらに強く睨みながらも、性欲にあらがえず、催促するように尻を振る。

マンコにイチモツの先を押し合えて、腰に力を入れ、押し込んでいく。膣口が大きく広がり、亀頭を受け入れる。

「ひぐう、あうううう♥ 来た来た来たああ……元福の巨大チンポきたああ♥」

のけぞりながらもようやく挿入されたイチモツに詠の表情が恍惚した。

焦らすわけではないが、詠の体の小ささを考慮して、亀頭だけを潜り込ませたまま、腰をゆっくり動かし、回すような動きで膣肉を解してやりながら、奥へ沈めていく。

「あひいいいいいい♥♥♥ す、すごひい、うまるう、うまつちやうう、ボクのおマンコ、元福のチンポで完全に埋まつちやつたのお♥」

「ああ、一番奥まで俺ので塞いだぞ」

「あ、ああつ、あふう……あはああああ……すごいよオ……おなかの奥が、ズンつてえ……あああん♥ き、きもちイイ♥」

甘い吐息を含んだ詠の声が、宿の部屋に響く。

亀頭の先端に、子宮口が感じられ、それが亀頭に吸い付いてくる。俺のイチモツが全て埋まったわけではないが、詠の膣は俺のイチモツで完全に塞がっていた。

そのまま、膣をなじませるように、腰を左右に揺すり、捏ねるように動く。そのたびに詠は身体を震わせる。

「あああん……だめえ……グリグリダメエ……あん……はううう……あああ♥ くひいん♥」

馴染んできたところで腰の動きに前後を加えると、詠は、苦しげな声を上げる。だが、その声は、すぐに甘く濡れた響きを帯びていった。「あうつ、んあ、はううん……あつ、あつ、あひい……ああああ、パコパコするのもダメエ♥ ンああああ……」

「あれもダメ、これもダメだなんて、じゃあどうすればいいんだ？」

俺は、紅潮した詠の顔に顔を近づけてそう尋ねる。

「んあああ……そ、そんな、そんなことお……はふうん♥」

半開きになつて涎を垂らしていることさえ気づいていない唇が、否定の言葉を紡ごうとした瞬間、突然身体を震わせ、膣肉がイチモツを締め上げた。

いつの間にか復活した月が壁と詠の間に陣取り、さつきまで自分がされていたように詠のマンコに舌を這わせていた。

「んちゅっ、れろれろ、ちゅう……ちゆるる、ちゅぱっ♥」

「あひいい……ちゅ、仲穎い、そこダメなお♥ あうん……んはああ……ああん♥」

体勢を維持するために手を使うことができない詠は、腰を振つて月の舌から逃れようとするも、そんな動きで逃げることなど叶わず、月の舌でクリトリスを攻めたてられ、さらに逃がさないように抑え込むように、月の白く細い右手の指が詠の尻に回され、そのまま月の中指が詠の尻穴に突き刺さった。

「ぎゃああっ♥ そ、そこだけはダメ、ホントにダメなおお……あぐうっ♥ あんっ、あひいいい……お願いお尻から指抜いてえええ♥」

普段なら、人の嫌がることなど絶対にやらない月が、詠の絶叫を無視してさらに深く指を突き刺し、中をこねくり回す。その動きを直腸と膣越しに感じながら、俺も腰を動かし続ける。

「んんっ、ちゅぷう……んちゅっ、ウソばかり♥ 文和ちゃん、こっちで自慰しているって私が知らないと思つた？ ちゅ……元福さんのオチンポでお尻の中をぐちゃぐちゃにかき回されるの想像しながら、お尻を道具で弄ってるす・け・べさん♥ んちゅっ、ちゅむむ……んん、んちゅ……」

月の巧みな舌使いでクリトリスを犯されると同時に、俺のイチモツの動きでマンコを蹂躪され、詠の体が震えていた。

「んちゅっ、んふう……んちゅ、ちゅちゅっ♥ んむむ、ちゅ、れろれろ、ちゅう……」

月は詠だけではなく、俺にまで手を伸ばしてきた。月の左手が俺の股間に伸びてきて優しく陰囊を撫でさす。

いている。

一歩歩くたびに揺れる巨乳に思わず手を伸ばすけど、ぴしやりと払われた。

「主、このような往来で盛るとは、いくら私が魅力的とはいえ、触るのなら、二人つきりで♡」

そんなことを言われて、二人つきりになっただらどんなことをしてやろうと、考えてしまうのは、仕方のないことだろう。そして、その妄想でつついっい勃起しちまうのも仕方ないことなのだ。

そしてたどり着いた宿。

案内されて部屋に入っただけで星を押し倒そうとしたけれど、ヒラリとかわされ、逆に俺が脱がされた。

背後にまわった星が巨乳を押し付けながら、上着のボタンを外し、胸板や腹筋を撫でながら、シャツを脱がす。ゆつくりと焦らすようにチャックを下ろし、俺の内股を撫でながら、ズボンとパンツを脱がした。

今度は、俺が星の服を脱がそうとしたけど、やんわりと断られ、床に転がされた。

起き上がった時、始まったのがストリップショー。

怪しく踊る星。すぐにぱっと脱いだりすることなく、脱いでは戻し、戻して脱ぎ、BGMがなく、観客は俺一人だけ。

俺は星のエロさに見とれてただただチンコをデカくして見入っていた。

そして星が裸になって、気が付いた時には、手足を縛られ、口にボルギャグを加えさせられていた。

「む、むうううううう！」

「ウフフ……わかっていますよ、主。今日もたっぶり気持ちよくして差し上げましょう♡」

身動きの取れない俺は、あっさりとは転がされた。星は、起き上がるうともがく俺を見下ろした。

身体を一切隠そうとせずに堂々と立つ姿に、逆に俺の方が恥ずかしさを覚える。

「おや、お隣の方もお盛んのようですな」

「ムぐ？」

星の言葉に音に意識を向けてみた。

『あ、あつ、ああああああ……ダメダメダメエ♥ お尻の中、クリクリしたらダメなお…… ああつ、ああ、ああん……んひい……あうつ、あきゆうううううつ♥』

『何がダメなのよ。知ってるんだから、今日だって、元福にお尻を可愛がってもらうためにこの中、綺麗にしてあるって』

『んちゅつ、ちゅぷ♥ は、はひ、んはあ♥ 元福さん、今ちゅうされたらあつ、ああああああ♥♥』

男1、女2の3Pかよ！ しかも、女の声結構幼い感じじゃねえかよ。

縛られてなかったら、隣の部屋に突撃して奪ってやるのに！

『はっ、はぶ、んふう……ちゅつ、ちゅば、ちゅぶ……あああ……ん、仲頼ったら、オマンコから、助平な汁がどんどん出てきて、ボクの顔にもかかるう♥ れろれる……』

『やあつ、ダメえ……あああん……あひい……オマンココシコシしながら、お尻グリグリ、ダメえ……ああん♥ き、きもちイイ……あうう……しびれちやうのお……くううん♥』

『ウソばかり……ちゅ、れる……んは、ボクに助平お尻をグリグリ押し付けといて……はぶ、ちゅぶぶ……なにがダメエよ……んちゅうう♥』

うおおお!? レズプレイなことやってんのかよ!? 見てえ!!

「おやおや? 主は、目の前の女よりも、見えない女の声に夢中とは……」

これは、私も頑張らなくてはなりませんな♥」

星の指がチンコの根元からゆつくりと玉袋を撫でられて体が震えた。

「むふううううう」

「クスクス。おちんちんがびくびく震えてますなあ♥

いうまでもないですが、いくら私の体が魅力的で、目に焼き付けた

いと思つたとしても、私の目から目をそらしてはなりません」

楽しそうに目を細める星は、その人差し指で、つんと俺のチンコの根本に触れ、そのまま亀頭の先まで指先が滑らせた。

「むふっ」

待ちわびていた肉棒への刺激、背筋を這いあがる快樂の波に思わず腰が引ける。

一糸まとわれない星の体はあまりにも綺麗だった。大きく実ったおっぱいは、星の動作にあわせて重量感たつぷりに動き、二つのピンク色の乳首が誘惑のするように揺れる。

隠す気のない下半身は、肩幅に開かれて第二の口が俺を誘う。

「主、今しがた、私の目から視線を外しなといったばかりだというのに、もう、視線が、下に流れていますな。まったく、待てもできないとは、セキトの方がはるかに立派ですな」

俺は、思わず、あきれ声の星の赤い目をまっすぐに見てしまった。

赤いすべてを見透かしたような目。

何度も、この赤い目を見ながら射精させられた俺は、いつの間にか、星の目を見ているだけで、昂り、射精への階段を一気に駆け上がってしまうようになった。

だから、できるだけ、意識を反らすようにしていたのに、星の抜群のエロボディを見せられたうえであの目を見た俺は、あつという間にがけつぷちに立たされてしまった。

とつさに、意識を別のモノに向けようとした。その時、星の目が俺から、声の聞こえる壁へと移った。

「ほお……」

「むぐっ」

「おや？ 先ほどまで夢中になって声を聴いていたのに、今は、私に夢中で聞いておられなかったようですね♡

どうやらお隣の娘たち

普段は別の男のモノを毎日奉仕しているとのこと。

なかなか、ただれた関係の様子……」

何？ そんなイケナイ関係ってやつなのか？

星の手が、リズミカルにチンコをしごき上げながら、身を乗り出して俺の目を覗き込んでくる。

「さ、イってしまいなさい、あ・る・じ♡」

「むふふうふうっ!!!」

俺は、星の赤い目に魅入られながら、耐えることもできず、射精させられてしまった。

一度射精して、力を失ったチンコを星の右手が掴み、やさしくしごき始める。

「くふうふう、むふうふうふう」

不意に与えられた刺激にのけぞる。それを面白そうに眺めながら、星の手は、やさしく俺のチンコを再び勃起していく。

「フッフ、主、私の口を見ていてください」

そう言つて、星は唇に赤い舌で舐めて、潤わせると口を開いた。

「ああああん……胸が、敏感になつて……あああ、ダメえ……入れてもらつてないのにい……あふんっ、くうん♡ あっ、あっ、ああああ……だ、だめえ……お、おかしくなっちゃうう♡」

「ッ!？」

隣からの声のはずなのに、星の口は、正確にその声と同じ動きをしていた。一瞬、星がしゃべっているのかと思つた。

実写のアフレコを見た気分だ。いや、逆だ。演技しているモノに声を当てているのではなく、声に演技を当てている。

「あ、あんたとしたくて、あふっ、ボクの体、発情しちゃっているんだもん……しようがないでしょ♡ ねえ、焦らさないで、早く突っ込んで♡」

違うとわかっているのに、まるで、星が別の誰かにチンコを突っ込んでもらおうとおねだりしているように聞こえて、ムカムカしてく

る。

『ひぐう、あうううう ♡ 来た来た来たああ……元福の巨大チンポきたあ ♡』

元福とやらに殺意すらわいてきた。

「おやおや、主は、私が誰か別の男のおねだりしていることを想像して、おちんちんを大きくしてしまったようですなあ ♡」

はつとなった。ギンギンに勃起したチンコから、星の手は離れていた。

「主には、自分の女を他の者に奪われて興奮する性癖があったとは、変態だ変態だと思っていました。ここまで変態とは、この私でもさすがに引きますな」

「むぐう、むががあつ!!」

違うと叫びたかったけれど、ボールギャグが邪魔で、叫べない。

『あ、ああつ、あふう……あはああああ……すごいよオ……おなかの奥が、ズンってえ……あああん ♡ き、きもちイイ ♡』

星は、俺と対面するように四つん這いになって誰もいない後ろに向かって淫らに腰を振る。

『あああん……だめえ……グリグリダメエ……あん……はううう……あああ ♡ くひいイン ♡』

あうつ、んあ、はううん……あつ、あつ、あひい……ああああ、パコパコするのもダメエ ♡ ンああああ……』

蕩けた表情を作り、身体を前後に揺する星の姿に、誰もいないはずなのに、星を犯す男の影が見えた気がした。

ブルンブルン揺れる星のおっぱいよりも、蕩けた瞳に俺は目を奪われた。

普段、俺を蔑み、すべてを見透かしたようなあの赤い瞳が、男に媚びを売るようなエロくて淫らな瞳になるなんて……

胸の奥から込み上げてくる胸糞悪く、でも、興奮する感覚。

美女をそいつの恋人 or 旦那の前で犯してやった時の背徳感よりも黒い快樂。

『きやああつ ♡ そ、そこだけはダメ、ホントにダメなおお……あ

ぐうつ ♡ あんっ、あひいいいい……お願いお尻から指抜いてえええ ♡』

『んんっ、ちゅぷう……んちゅっ、ウソばっかり ♡ 文和ちゃんが、こっちで自慰しているって私が知らないと思っただ？ ちゅ……元服さんのオチンポでお尻の中をぐちやぐちやにかき回されるの想像しながら、お尻を道具で弄ってるす・け・べさん ♡ んちゅっ、ちゅむむ……んん、んちゅ……』

さつき、SEXしてた娘も復活して攻めるのに参加したらしい。前後の動きだけでなく、もがくように腰を振る星に、もう、やめてくれと思う心と、もつと見せてくれと思う心、二つが俺の中でせめぎ合う。「触られてもいないのに、主のおちんちんから、助平な汁が取り止めなくあふれていますなあ ♡」

星の手がチンコを掴み、ゆっくりとしごいてくる。

「いつもよりも、大きくなっていてとは……そこまで興奮された、と？」

チンコを愛撫する指の動きが緩やかなものから一転し激しいものへと変化していく。

「むぎいいいいっ!!」

『あああん、ああん、あひいつ ♡ あああっ、はうんっ ♡ んあああ……ひあああ……気持ちいい、きもちよすぎるうう ♡ ♡ ♡』

星の口パクによって俺はさらに興奮させられていく。

星の左手が、玉袋を揉んだり、亀頭を掌で、こねるように撫でまわす。

「こうやってシコシコっつと、激しく擦られるのが、主のも好みでしたな？」

星の指が、俺の感じるところを再確認するかのようにチンコ全体を撫で回していく。

「む、むふうふううう!!」

「フフ、身体が震えているな。主が気持ちよくなってくれと、私も頑張りがあるというもの……さあ、もつと喜んでくだされ ♡」

星の人差し指が鈴口をほじくりまわす。

けるだけになってしまっているな。

そんなことを思いながら、外を見ると、背の高い男の両腕に小柄な少女が縋りつくようになっているのが見えた。二人とも白と黒のワンピースを着ていてつばの広い帽子をかぶっているため、顔はわからないが、なんとなく月と詠を思い浮かべてしまった。

その瞬間、俺の胸がドキッと鳴った。

昨日、星に言われた言葉が、不意に頭の中によぎる。隣の部屋にいた二人の娘は普段別の男のモノを毎日奉仕していると、言っていたと……

だが、すぐにそんな馬鹿な考えは、ありえないと頭から消し去る。何故なら、二人とも俺のニコポの影響下にあるからだ。

帰ったら、また、二人のどちらにチンコをしゃぶってもらって、どっちにケツを舐めてもらうか考えながら、俺は、帰り支度を始めた。

〈??〉

「愛紗さんが言っていた通りでしたね。刃さんのオチンポを受け入れちゃうと、もう、ご主人様のことなんて一切気になりませんでした」
「まあ、あんちゃんのチンポの前じゃ、アニキのちんちんなんて霞んじやうよな」

「もお、事実だとしても、もう少し言い方考えようよ。ご主人様がかわいそうだよ。いくらご主人様が閨下手で変態で屑みたいなオチンチンだったとしてもー」

「あんたの言い方の方が、ひどいわよ」

「フフフ……だが、主には、女を奪われて、興奮する性癖がある様子なのだから、バラしてしまっても面白かったかもしれない」

「そんな話どうでもいいですわ！ 今度こそ、わたくしが、刃さんとの閨権を手に入れて見せますわ!!」

三話

〈??〉

「じゃあ、みんな準備は良い?」

「……(コクン)」×19

「今回は、すでにあたりを引いた二人と便乗した詠ちゃんを除外してまず、当たりくじが入ったくじを引いて、その後、抜けていた三人とすでに外れくじを引いている二人を入れ替えて外れくじが入ったくじを引くよ。」

それと、前も言ったけれど、あたりを引いた人を襲っちゃだめだからね!」

(だから、あなたが一番最初に襲い掛かってたよね!) ×22

「武器を置いてくるだけじゃ、小刀を持っている可能性もあるから、全員服も脱いできてね」

「は〜い」×22

全員が指定された部屋に武器を置き、服も脱いで、下着姿に戻ってくると、指示通りにくじを握った。

「それじゃあ、いくよ?」

「せえ〜の!」×20

「……オ〜ホホホホホホ!! ついに当たりくじを引きましたわ!!」

「っ!」×17

次の瞬間、全員が、ブラやパンツの中に仕込んでいた暗器を抜き、襲い掛かった。

それを一人の少女が防ぎ、もう一人の少女が自分たちが外れくじの方も担当すると宣言して何とか身の安全を確保することに成功したのだった。

今回のコス

麗羽……餓狼伝説・舞

「ああ、そういう、格好の斗詩も悪くないな」

文ちゃんに報復することは決定事項だけど、少しくらい優しくしてあげてもいいかも……

大人しめの服ばかりだけど、今度から、もうちょつと冒険してみよっかなあ。そしたら、もつと刃さんが愛してくれるかもお♡

そんな妄想をした私は、刃さんにしなだれかかるように腕の中に納まるとすぐに唇を重ねて、刃さんの服を脱がせていく。

下着一枚になった刃さんに、私は甘えるように背中を預けると、刃さんは脇下から腕を回して服を着替えようとしていた時のままだった私の胸に手を宛がうと、やわやわと手触りを確かめるように揉み始める。

「あん、あはああ……あつ、あう、んああ……んつ、はううんっ♡」

刃さんの大きな手でおっぱいを揉まれ、それに身を任せていると、耳元で囁くように質問された。

「この衣装どうしたんだ？」

「あん……ぶ、文ちゃんが、刃さんに楽しんでもらうためって、あはああんっ♡んあつ、ああああ……恥ずかしい♡」

「そうか、これは後で、礼を言わないとな」

私としているのに文ちゃんの話をするひどい刃さんに、私を見てもらうべく、お尻に当たる大きなオチンポにお尻を押し付けてグリグリと刺激して、今ここにいるのは、文ちゃんじゃなくて、自分だと主張する。

「ククク……嫉妬か？」

「し、知りません」

私の様子に刃さんはおかしそうに笑い、胸を揉む手の力が強くなった。

「ひうっ、うくう……あああんっ♡あつ、あひいいい……あんっ、んはああっ、ひあああああっ♡♡♡」

「猪々子の事は後でだ。今は、斗詩をたっぷりと堪能させてくれ」

「はひいいいいいい♡♡♡♡♡」

乱暴に胸を揉まれて、人差し指で私の乳首をグリグリと押しつぶす

ように刺激されて、私は軽くイってしまった。

でも、刃さんは私を休ませたりせず、乳首を引っ搔くように刺激しながら、私をさらに追い詰めていく。

「あつ、ああつ、あふう……はああん……あ、ああん♥ はううつ、いいいですう……あひつ、あああんっ♥」

いやいやをする様に首を振りながら先ほどよりも力を増した胸への刺激を受け止め、私は必死にお尻を振ってオチンポに反撃するけど、耳を甘噛みされただけで、私の身体から力が抜けて刃さんの思うがままに身体をなぶられる。

「あはっ、あああん……はああ……あ、あつ、あああ……おっぱいばかりい♥ だめえ♥」

「そうか……」

刃さんが私の胸から手を離して、今度は強く抱き締めてきました。

「うん、斗詩の抱き心地は最高だな」

「そ、それは私が太っているってことですか？」

「太ってるのか？ 俺には、そうは見えないぞ」

そう言いながら、私のおなかまわりとか撫でられた。

「あれだけの武器を振り回す力を持ちながら、身体は硬くない。程よい柔らかさを持っている。いつまでも抱きしめていたくなるな」

私、今、顔だけじゃなくてたぶん肩まで、ううん、全身が真っ赤になっていと思う。文ちゃんみたいにスラっとしているわけでも、麗羽さまみたいにボン・キュツ・ボンってほどじゃない私の身体をここまで褒められるだなんて……

私を抱きしめていた刃さんの手が、私の下腹部に右手を伸ばしながら、オチンポを私に押し付ける。

「それに、俺が、今、誰に興奮してこうなっているのか、言うまでもないだろう？」

刃さんは、閉じた脚の付け根から割れ目に沿うように指を這わせて、お豆さんを下着越しにのつくするように指を動かすと、私の身体はビクツと震えて、意思とは関係なく、まるでそうするのが当然のようにゆっくりと脚を開いていく。

恥ずかしいと思う心と、もつと気持ちのいい場所を触ってほしいと言う心がせめぎ合い、快樂を求める心が勝った。

そして、刃さんの指が、私のオマンコに到達した。

「あつ、あうっ、んああああ……あひい♥ やっ、やあ……あつ、ああん、指、指、ゆびすごいのおつ♥♥♥ あ、ああ……んああああああああああ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

身体を支えるように回されていた刃さんの左腕にしがみついて、再び襲い掛かってくる絶頂を耐えようとするも、身体はビクビクと震え、耐えること窓出来ずに私は再びイってしまった。

「ハアハア♥」

刃さんの腕の拘束が解かれると、私は背中を預けたままズルズルと寝台から滑り落ち、刃さんの股の間の空間に頭を預けて呼吸を整える。

視線の隅に大きく反り返った刃さんのおっきなオチンポが窮屈そうに下穿きの中に納まっているのが、映った。

顔のすぐ横で存在を主張するオチンポを撫でてから、身体を反転させて、下穿きの縁に指先を掛けると、刃さんは少し腰を上げて私に下穿きを脱がされた。

窮屈な下穿きから解放されたオチンポがブルンと姿を現した。私は、それを両手で包み込むように握った。

龟头と竿の感触を確かめるように数回撫でてから、躊躇いなく口内に導く。

「んちゅ……んっ、ちゅぶ、んはあ……ちゅぱちゅぱっ♥ ちゅ、ちゅぶぶぶ……ちゅっ、れろれろ、ちゅう……ちゅむ、ちゅうううっ、ちゅぶぶ♥♥♥」

オチンポの感触を舌に感じながら、若干腰を震せる刃さんに頭を撫でられた。

ほめてもらえているようで、嬉しくて、奉仕にも力が入る。

全体を喉まで使ってしゃぶり、あの熱いモノがたっぷりと詰まったタマタマを右手で、揉みし抱く。さらに左手で、飲み込み切れなかった部分をしごく。

口内と舌でオチンポを味わう様に口を動かして刃さんに気持ちよくなつてもらおう。

「んう、んふうう……ちゅぶ、ちゅぶぶっ♥　じゅ、じゅるる……あはあ……あむっ、むちゅっ、ちゅば、んちゅっ、れろれろお……んちゅっ、ちゅちゅう♥」

「斗詩、そろそろ、したい」

「ちゅばっ♥」

刃さんに促されてオチンポ口を離しました。私の唾液まみれでピカピカ光るオチンポ。

「どんな格好で入れてほしい?」

刃さんの問いに、私は、寝台が上がってうつぶせに寝そべり、膝を立てて腰を上げて刃さんにお尻を向ける。さらに両手で自分のお尻の肉を広げて自分のオマンコだけじゃなく、お尻の穴まで、下穿き越しに刃さんに晒す。

刃さんは、私のお尻に手をかけて、蜜を溢れされるオマンコを下穿き越しに舐めてきた。

「きゃあんっ♥」

不意打ちに身体が震えた。

「じ、刃さんっ、いじわるしないでください」

「悪かった。あまりにも、綺麗で触りがいのありそうな尻と濡れすぼったマンコがあったからっついな」

そんなことを言いながら、下穿きを横にずらして私の尻を鷲掴みにし、オチンポの先端で入口を探るように腰を動かす。私も迎えに行くように腰をくねらせる。

直ぐに互いを見つけて入口に添えると、長い挿入を開始した。

「ひぎいいい……いっ、いひいいっ♥　んああああ……す、すごいまだはいってくるのおおお……ひああああああ♥♥♥」

一気に最奥まで貫かれ、私は猫のように背を反らした。

最初はゆつくりと、そこからだんだんと早い動く腰を動かし始める。

「あうっ、うっ、うぐうう……あひい……あああん♥　んああっ、

あふっ、あ、んふ、んひいいいいい♥」

硬く強ばったオチンポでオマンコを擦られ、私は、寝台を掴みながら、喘ぎ声を上げる。

「ひううっ、んあっ、あひ、あふうん……あっ、あっ、気持ちいいです……ん、んひい、おっ、おっ、オマンコっ、いいですう♥ んあああ、あっ、オマンコ、気持ちよすぎてえ、狂っちゃいますう♥」

刃さんは、私の背中に覆いかぶさるような姿勢になって、両手を胸に回してきて。腰を動かし続けながら、私の左右の胸を乱暴に揉み始めました。

「んあああっ、あふう……あ、あふああああ、いい……いいでうっ、あ、あん♥ オツパイ、あへえ、オツパイも感じます♥♥♥ あ、あっ、ああああああ……か、体中、気持ちいいっ♥ あっ、あうっ、あはああああああ♥」

私のお尻に腰を打ち付ける。パンツ、パンツ、という音が、部屋中に響く。文ちゃんたちにも聞こえちゃっているかもしれない。

「あうっ、んくう……あっ、あっ、あひあああ♥♥♥ あううっ、うぐう……き、気持ちいい……あああっ、んひいいいっ、イイですう……」
「いつもよりも、感じているみたいだな？ これも、この衣装の影響か？」

そう訊きながら、刃さんは、私の体を後ろから抱き締め、腰を激しく繰り返し出す。たしかに、この服でしていると、なんだか、開放的な気分になってきます。

「はふっ、あふう、そ、そうかも、ああん♥ そうかもしれません……あひっ♥ ふああ、ん、んあっ、あはああん……」

「なら、今度は、そういう格好で街に出てみるのもいいな」

刃さんの言った言葉を理解し、想像すると、私の身体は、どうしようもなく熱くなつてしまいました。

「んあっ、はふうん♥ あっ、ああああん、そこいいのお♥♥♥ んふう、あひああああああ♥♥♥」

刃さんのオチンポがいつそう膨らみ、動きが激しくなるのを感じて、私は、声を張り上げてしまいました。

麗羽さまつたらすごい声……あん♥ あんな声を聞かされてたら、なんだかまた、刃さんのがほしくなってきたきちやいます。

いつもの服に着替えて、文ちゃんと交代でご主人様のいる部屋に入ります。

麗羽さまと文ちゃんに絞られていっぱい……いっぱい？ まあ、ご主人様的にはいっぱい出してぐったりとしたご主人様が寝台の上で縛られていた。私と文ちゃんに寝ていたご主人様を連れてきて縛ったんだけどね。

でも、なんで、顔の横に踵の高い靴が置いてあって、中途半端に女性ものの長靴下（パンストの事）を穿いてるんだろう？

「と、斗詩？」

「はい。今度は私がお相手しますね♡」

そう言いながら、ご主人様に背中を向けて、着ていた服を脱ぎ始めた。ゆっくりとじらすように服を脱いで、本来隠すべき場所が開いた下着の姿になって振り返る。

節操のないご主人様はこれだけで私の前に二人に絞られているから、完全ではないけど、オチンチンが大きくなっていた。

私は、ご主人様の足の間に腰を下ろして、右足で硬くなりかけたオチンチンにそっと触れる。

「ツ!!」

ほんの少し足を乗せられたそれだけで、少し柔らかかったオチンチンが硬くなった。

笑ってしまいそうになるのを堪えて、そっと乗せた足が前後にゆっくりと動かし始めた。

すぐに亀頭の表面にぬるっとしたものが浮かび上がる。

「くっくっくっ」

「すごいですね、ご主人様♡ 麗羽さまや文ちゃんにいつぱい絞られたはずなのに、こんなに大きくなるなんて♡」

『あうう……いい、いいよオ♡ あああん……いい……気持ちいいイ……おっぱいも、マンコも、気持ちよくなってえ……ああああ、いい……ひいいいん♡♡♡』

「あ、文ちゃんたら、あんなはしたない声上げて……」

文ちゃんの喘ぎ声で、ご主人様のオチンチンは、完全に勃起した。まあ、ご主人様のオチンチンは雄々しいって言うよりもかわいいって感じで、親指で早くも浮かび上がったご主人様の汁を掬い取り、ぐりと強めに刺激してあげる。

オチンチンの先端をつまみこむと、ご主人様の口から嗚咽が漏れた。

「と、斗詩いつ」

「クスクス……ご主人様、凄く気持ちよさそうですね♡」

私は右足だけでなく、今度は左足も参戦させる。亀頭の部分を左足の裏でなでなでしてあげると、ご主人様の両足は既に快感をこらえようと突っ張っていた。

私は座る位置を治してご主人様の足の間で胡坐をかくような姿勢になって左右の足を交互に滑らせる。

オチンチンの側面を挟み込んで、親指や人差し指でご主人様の汁を全体にまぶす。

刃さんのオチンポは女の汁で濡れて光るのに、ご主人様のオチンチンは自分の汁で光る。それが哀れで、滑稽で、より一層にご主人様のオチンチンをイジメたくなる。

「ご主人様、そんなにおっぱいばかり見ないでください♡」

わざと、そう言って、むにゅっと手で胸を寄せるとそれだけで、助平なお主人さまの視線は、私の胸に夢中だ。下着をつけているのに乳首が丸見えのだから、より気になっちゃうみたい。

そんなことをしながら、裏筋の部分を優しく上下に撫でると、心地よさそうにご主人様の顔が緩む。

「今度は、足の指先で先っぱを掴みますよ♡」

足指を開いて、見せ付けるようにご主人様の前に足を伸ばして、愛撫予告すると、私の胸と自分のオチンチンに向かっていく足の間をせわしなく視線が行き来する。

「あ、あああ……」

ゆつくりと足をオチンチンに近づけてからまるで手でするように足指で亀頭に押し付けて、そのままじわりと足の指で締め付けられながら、オチンチンを上下に揺らす。

「うあああっ!! ああああ!!」

「はあい、シコシコされて、気持ちいいですかあ?」

無意識に寝台の端を握って声を押し殺しているご主人様を私は楽しそうに見つめた。

亀頭と竿を責めている足を少し緩める。

「次は、タマタマですよ♡」

今度は今まで責めていなかったオチンチンの根元のほうに足を向ける。そして宣言通りにタマタマを足で転がし始めた。

「あうううっ、斗詩、すごいよっ!」

オチンチンへの直接的な刺激より一段落した刺激に、ご主人様は少し余裕が生まれたみたいですけど、ちよつと、胸を揺らして視線を誘導してあげるだけで、すぐに興奮してその余裕もなくなる。

指先でオチンチンをチョンつとつくだけで腰が浮き上がる。

イキそうになっているようなので、あえて刺激さらに弱くして焦らしてあげる。

「と、斗詩い、イ、イキそう、イかせてくれえ!!」

「もう少し焦らしてあげようと思ったんですが、まあ、いいか……」

ご主人様♡ 今度は足の裏で挟みながら指先で揉んであげますね♡」

私の両足が、オチンチンを左右から挟みこんで、今までの責めでヌルヌルになっている足指全てを使って、オチンチンを射精へと導いてあげる。

「どうですかあ?」

「うはあっ、い……イク!!」

「ほらほら、ちよつと、踏んだだけですよ。もつと可愛がつてあげます♡」

今までは解放していたご主人様の両足首を両手で掴んで、今までよりも少し広げる。

「女の子に足を無理やり開かされて……恥ずかしくないですか?」

「は、恥ずかしいいつ、うほおお!!!」

「女の子にオチンチンを踏まれて喜んじやう変態なご主人様は、その恥ずかしいのがたまらなく気持ちいいんですよね? 今度は先っぽを踏んであげます♡」

「は、はいいいつ、踏んでくださいっ!」

限界が近い様子のご主人様を少し強めに裏筋部分を踏みつけてあげた。

「あひゃあああああ、イクううううう!!!」

ご主人様は、全身をとろけさせられてしまったかのようにだらしない顔で、数回の痙攣のあと、あっけなくあの汚いモノを撒き散らした。

『はっ、ああっ、はひ、し、しゅごいい……い、いくうううう♡♡ ああああああ……んおおおお♡♡♡ いぎっ、い、いぐ、いつぐううううううううううううううううううううううううううううう♡♡♡』

……ゴクン、ご主人様も失神しちやったし、今から文ちゃんに交じってきてもいいかなあ?」

〈麗羽 side〉

箱を手に、部屋に入ると、そこには、裸で手足を寝台の四隅から伸びるひもで縛られて身動きの取れなくなっている北郷さんがいました。

「れ、麗羽、これはどうなってるんだ!?!」

いつものように遊びに出て、見つけた女の人としつぱりやって寝ていたところを猪々子と斗詩の手でここに連れてこられて、目が覚めたら、身体を縛られていたのですから、騒ぐのもしょうがないのかもしれないませんが、うるさくてウンザリですわ。

『あん、あはあぁ……あつ、あう、んあぁ……んつ、はううんっ♥』
「ッ!？」

「あらあら、あの二人ったら、もう始めたようですわね」

「ふ、二人？」

「猪々子と斗詩ですわ。北郷さんとしらない間の暇つぶしにお隣のお部屋も借りて、慰め合うことにしました」

「な、慰め合う!？」

「ええ、今、隣のお部屋で、猪々子と斗詩が……いえ、斗詩が猪々子にその体を弄ばれているのですわ♥」

わたくしの話聞いて、北郷さんのオチンチンがムクムク起き上がってきました。

北郷さんの目の前でパパッと服を脱ぎ捨てて、わたくしの身体を見せつける。

脱ぐ仕草で興奮させるという方法があるらしいですが、北郷さんごときにそんなことをするなど、めんどくさいのでさっさとわたくしの身体で興奮させてしまいます。

別に今更、北郷さんに身体を見せることに、忌避感などありませんしね。わたくしの身体を見て大きくなったおちんちんを見てから、持ってきた箱の中身を取り出して履くと、寝台の上に乗ります。このために寝台を板のように硬いモノにしたので、こんな踵の細くて高い靴でも危なげなく立てます。

「さてと、それでは……まずはわたくしの靴を舐めなさい」

「は?、い、いやだよ!!」

「あら、なぜですか?」

この靴は新品で、普段舐めさせている靴と違い、まだ、北郷さんのモノで汚れてもいませんから綺麗です」

「で、でも……」

北郷さんの目の前で靴をちらつかせと、北郷さんの目は靴に吸い付き、喉を鳴らした。

「段々、靴を舐めたくなくなってきようですわね」

「っ!？」

一旦、北郷さんの前から、足を引くと、そのままその足で北郷さんのオチンポを擦ります。竿にタマタマ、そして裏筋を靴の爪先で撫でまわす。

「くっ、くうううっ!!!」

「気持ちがよろしいようですわね。でも……ここまでですわ♡」

わたくしは、早くもピクピクし始めたオチンチンを擦る足を止めました。もっと擦ってと泣くオチンチンを放置するのは心苦しいですが、せめてオチンチンくらいは、自分勝手にならないようにしつけてあげなくてはなりません。

「な、なんで……」

「あら、オチンチンが苦しそうですわ。また擦って欲しいのかしら？」

「あ、ああっ!! 頼む……頼むよ!!」

北郷さんはさすがのようにわたくしを見つめてきます。でも、自分の要求ばかりでは、ダメだと言うことを教えないと、なりません。

「では、靴を舐めてくださいな。そうしましたら、またオチンチン擦ってさしあげます」

そう言って、北郷さんの目の前にオチンチンを擦っていたのとは反対の靴を近づけると、北郷さんは靴に舌先を這わせました。

「しっかりと舐めなさい。」

ちゃんと舐めれば、この靴で構ってと泣いているそこをしつかりあやしてあげますわ」

北郷さんは、わたくしにオチンチンを気持ち良くして欲しい一心に、靴を舐めます。靴を舐めている間、一切、オチンチンに触れていないのにオチンチンからは、後から後から、雫をこぼして、萎える気配などまるでありません。

靴をあらかた舐めまわした北郷さんの舌が、わたくしの足に触れようとしてきたので、それよりも早く、オチンチンを踏みつけました。

「ぐうぐうぐうっ?!?!?」

「あら、痛かったですか？　ですが、その割に、オチンチンは固くなつたままですわよ♡」

まったく、わたくしの足までなめようだなんて、わたくしの肌に触れていい殿方は、刃さんだけだと言うのに。お仕置きの意味も込めて、強めに擦って差し上げます。

「あぐううううう!!」

わたくしは右足を上げ、北郷さんのオチンチンを軽く踏みつけ、踵でオチンチンの先端の割れ目を圧迫する。

「あぎいいいいいいっ!!」

北郷さんは悲鳴にも似た声を上げていますが、オチンチンは期待に脈打つって、脈打打つたびに踵がよりオチンチンに食い込んで、それでまたオチンチンが喜んで脈打つ。

「北郷さん、痛い？　それとも気持ちイイ？　どっちかしら？」

「き、気持ちイイ」

北郷さんの答えにわたくしは笑みを浮かべ、踵により力を込めて、強くオチンチンに食い込ませる。

「ひぎいいいいいいいいっ!!」

ビクンビクン震えてもう、オチンチンが限界だと大泣きを始めました。それに合わせてわたくしは足を放した。

「そんなんっ!!　もっと、もっと踏んでくれえ!!」

「ウフフ……素直になったようでしょううれしいですわ。でも、お隣も、凄いいことになっているみたいですよ♡」

「ふえ？」

『あはっ、あああん……はああ……あ、あっ、あああ……おっぱいばかりい♡　だめえ♡』

「あらあら、斗詩ったら、猪々子にどんな風に攻められているのかしら？」

そうつぶやくと、凄い形相で、北郷さんは、隣の部屋を見た。

『あっ、あうっ、んああああ……あひい♡　やっ、やあ……あっ、ああん、指、指、ゆびすごいのおっ♡♡♡　あ、あああ……んあああああ

ああああああああああああ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

丁度その時、斗詩の絶頂の声が聞こえました。そして、それに合わせて、わたくしは、爪先でオチンチンを軽く突いた。

「んほおほおほおほおっ!!!」

それだけで、北郷さんは、大量（北郷さん水準で見て）の白い汁を吐き出した

「北郷さんったら、斗詩の声だけでイってしまっただなんて……変態ここに極まりですわ」

「ち、ちが……はおっ!?!」

息も絶え絶えに言い訳をしようとする北郷さんのオチンチンを踏みつけて小刻みに揺らした。

それだけで、北郷さんはしゃべれなくなり、オチンチンは再び大きくなりました。さらにタマタマごと全体的に踏みつけたり、爪先でつぶりをツーツとなぞったり、裏筋を靴裏で擦ると、北郷さんはあっけなく、再び、痙攣して、絶頂してしまいました。

「んおほおほおほおほおほおほおほおほおほおほおほおほおっ!!!」

身体をビクンビクン震わせて白目をむいている北郷さんをちらっと見てからわたくしは、寝台から降りて、汚い靴を脱ぎ捨てて、北郷さんのところにおいてから服を集めていると、隣の部屋から大きな声が響きました。

『いくっ♥　いくっ♥　いくっ♥　あっ、あっ、あひっ、ひいひいひい
いっ♥♥　いっ♥♥　いっ♥♥　いくっ♥♥　いくっ♥♥　いくっ♥♥　いくっ♥♥
うっ♥♥　うっ♥♥　うっ♥♥　うっ♥♥　うっ♥♥　うっ♥♥　うっ♥♥　うっ♥♥　うっ♥♥　うっ♥♥』

斗詩ったら、本当に助平な声ですわね。声だけで、わたくしのオマシコが潤んでしまいますわ。刃さんに愛していただくのを楽しみにしながら、部屋を出ました。

わたくしたちが裸で移動しても平気なように一番端の部屋が用意され、そこに北郷さんを入れ、その隣の部屋には、刃さんが待っていてくださり、そのさらに隣の部屋はわたくしたちの休憩部屋として用意されており、そこから先には、仕切りができて他の客には見えないようになっています。

先ほどまで、刃さんとまぐわっていた斗詩を休憩部屋に寝かした猪々子が、北郷さんのいる部屋に入り、わたくしは通路で、身を清めてから、猪々子が用意してくれた衣装を身に着けます。

扉の前で呼吸を整えてのつくをすると、刃さんの返事があり、中に入ります。

部屋には、寝台に座って水を口にしてる刃さんがいらっしやいました。

わたくしが衣装のことを聞いて、魅力的に見えるような姿勢になって見せる。

刃さんの視線が、わたくしの体に向けられる♥

体中に向けられる視線の中でも、特に熱く感じたのは、やはり胸元。紫苑さんや桔梗さんに、大きさは劣りますが、あの二人はただ無駄に大きいだけです。

あのように大きすぎて垂れてきて楕円形になっているおっぱいよりも、わたくしのように大きき・形・感触の三拍子そろったおっぱいこそが至高。さらにわたくしはあのお二人に比べては・る・か・に若いので瑞々しい肌も足して最強なのですわ♥

刃さんに似合っていると行って頂き、わたくしは、刃さんの足の間に腰を下ろしました。

先ほどまで、斗詩とまぐわっていた刃さんのオチンポは、二人の汁にまみれていました。

「このおっぱいを使ってご奉仕させていただきますわ」

いつぞやか、猪々子に誘われて刃さんの体をわたくしの体で洗ってから、殿方（刃限定）に奉仕するのが楽しくて仕方ありません。わたくしの奉仕が、刃さんを喜ばせていると感じることがたまらなくうれしくて楽しいのです。

猪々子をはじめ、色々な方の体験談を聞いて自分なりにも考えているのですが、やはり、わたくしの至高のおっぱいで奉仕こそ、刃さんが安らぎ、気持ちよくなっていただけなのです♥

わたくしは刃さんのオチンポを握って上下に擦る。少し柔らかくなり始めていたオチンポは、わたくしの手の中で、再び力を取り戻し、大きく反り返りました。

「熱くてたくましいですわ……それじゃ、いきますわ♥」

わたくしは、刃さんのオチンポへ胸を寄せ、大きく開いた胸でオチンポを挟み込みました。

オチンポがおっぱいに埋もれていきますが、刃さんのは大きく、わたくしのおっぱいでもすべてを包み込むことはできませんでした。

「ん……すごく熱くて、硬いですわ」

わたくしは両側から胸を寄せて、ふにふにと柔肉がオチンポを押しつぶす。

「どうですか？ わたくしのおっぱい、気持ちいいですか？」

「ああ、気持ちいいよ」

刃さんは、わたくしのおっぱいの心地よい圧迫に、本当にお気持ちよさそうなお顔をされています。

わたくしはうれしくて、もっと刃さんに喜んでほしくて、おっぱいを両側に開いて、再び閉じる。谷間を開いたり閉じたりして、刃さんのオチンポを愛撫します。

続いておっぱいを押さえると、上下に揺らします。

「んああ♥ はぶん♥」

刃さんのオチンポを刺激していたおっぱいが、気持ちよくなってきて、思わず吐息が漏れます。

わたくしは一度動きを止めて、おっぱいの深い谷間の中でそそり勃つおちんぽの先端を口に咥えて舐めます。

「んむ、んちゅ、んぶん♥ んちゅう……ちゅぱ、ちゅぶぶぶつ♥」

刃さんと斗詩のものを舐め取り、わたくしの涎をたっぷりとまぶして、舌でねぶっていく。

できるだけやさしく、淫らに、それでいて優雅に見えるよう動い

て刃さんを責めていきます。

わたくしのおっぱいの中で刃さんのオチンポがビクンビクンと震え、刃さんはわたくしの頭に手を置き、撫でてくださいました。

「じゅぽっ ♥ 刃さん、もっと激しく致しますわ」

わたくしはオチンポをおっぱいで挟み込み、力を入れます。先ほどよりもさらに滑りのよくなったオチンポはおっぱいの中を躍るように動いてわたくしまで気持ちよくなってしまいます。

わたくしがゆさゆさとおっぱいを揺ると、おちんぽはおっぱいに溺れないように、一生懸命に顔を出してもがいてるようで、あの凶暴な外見なのについついかわいいと思ってしまう。

「ちゅちゅ、んちゅ……れる、ちゅっ ♥ んはああ……ちゅ、ちゅばっ、んちゅうっ ♥」

刃さんのオチンポがより固く大きくなっていくのを感じます。きつと、もうすぐあの、熱いモノを放たれるのでしょう。

わたくしは、それを早く出していたきたくて、オチンポの先端を口で咥えてそのまま先端に吸い付いてきました。

「ツク」

刃さんがわずかに声を上げました。もうすぐなのだと思うと、自然にオチンポへの奉仕も熱が入って、含んだ先端を舌で舐め回します。

「どうですか？ ちゅっ、ちゃんと気持ちいいですか？ れろお ♥」

「ああ、気持ちいいぞ。もう少しでイキそうだ」

刃さんの返答にわたくしは、より一層に奉仕に力を入れます。なぜなら、わたくしが刃さんといたすときは基本的に刃さんに愛していただいてばかりですし、斗詩や猪々子たちと売るときも、三人がかりの奉仕で刃さんをイかせていました。

でも、今、ここにいるのはわたくしだけ。わたくしが、わたくしの力だけで刃さんを絶頂へ導くことができるかもしれないのです。

「じゅぶっ、じゅるっ ♥ れろお……んはあ、わ、わたくしのお口の中で、どんだん、ふ、膨らんで……ああ、刃さん……ちゅ、ちゅぶ……先っぽ、膨らんできましたわあ ♥ おっぱいとお口でいっぱい気持ちよくなってくださいまし ♥」

わたくしは、おっぱいと顔を一緒に動かしていきます。オチンポが胸の中で揺れて暴れる。

お口の方も激しくなり、先端を舐め、出っ張りを唇で挟み、そのまま吸い上げる。

「あむっ、ちゅ、ちゅぼっ、ちゅぶぶ……はふうん♥ んちゅ、ちゅぶぶ、んじゅ、ちゅずずっ ♥♥♥」

「もう、出るぞっ」

わたくしのお口の中に、刃さんの熱いモノが勢いよく放たれました。

先端がお口から離れた瞬間、わたくしの顔にもふりかかりました。

「きやうっ♥ 熱い……んクっ、刃さん、すっごいいっぱい出てますね♥」

わたくしのお口と顔にたっぷり出されても、刃さんのオチンポは、未だに大きく反り返っていました。

刃さんのオチンポをご奉仕していただけなのに、わたくしのオマンコは熱く潤んでいます。わたくしは、下穿きを脱ぎ、刃さんの肩に片手を置き、もう片方の手でオチンポの位置を調整しながら腰を落とすと、刃さんがわたくしの腰に手をやって、挿入しやすいように手伝ってくださいます。

刃さんのオチンポがワレメに当たったところで、狙いを定める為に腰を動かすと、オチンポがこすれてそれだけで声が漏れてしまいません。

そして、狙いを定めてから、腰を下ろしました。

「あひいいいい♥ いい、オマンコいいですわあっ♥ あああん、はへえええっ♥♥♥」

オチンポの先端がゆっくりと入ってきて、わたくしの閉じたオマンコを押し広げて侵入してくる圧迫感に思わず力が抜けてしまいそうになるも、刃さんが支えてくれました。

途中で挿入が止められて、刃さんに抱えられたまま、快感に腰をガクガクと痙攣させながら首にしがみ付き直して、さらに深く刃さんを迎え入れていきます。

「んぐううううう ♡♡♡」

自分の内部を押し広げられる感触に感じ入り、さらに長い挿入に晒され、やがて最奥が押しつぶされるような感触と共に挿入が止まりました。わたくしが、刃さん以外で唯一、好みに受け入れたことのある北郷さんのモノとは圧倒的に違うオスの象徴に、わたくしの中は満たされ、刃さんに手だけでなく、足までつかってしがみついて耐えます。そんなわたくしに刃さんは、口づけをしてから、ゆさつゆさつと揺さぶるように律動を開始されました。

「ひああつ、あうつ、んひい ♡ ンあああああつ、はうううう…：…だつ、駄目え、まってえ、わたくしい…：あ、あああああ、んひい いいいいッ ♡」

何度か揺さぶられた後、刃さんの手がわたくしのお尻を鷲掴みにしました。

「ひゃあうつ ♡」

驚く暇も無く、より一層強く奥が押し潰されました。刃さんの胸板でわたくしのおっぱいが押しつぶされ、乳首がこすれてビリビリとした快楽が駆け抜けていきます。

「んあああああああつ ♡♡♡」

そのまま揺さぶられていると、内部への刺激が少しずつ変化していきます。

おへそに近い部分をオチンポで強く擦られた瞬間、乳首で感じた以上のビリビリとした衝撃が全身に走りました。

わたくしの反応を見た刃さんは、執拗にそこをオチンポでかき回していきます。

「ひあああああつ ♡ だ、ダメっ、ダメですわああ ♡ あつ、あああああああああああ ♡♡♡♡♡」

抱き抱えられた姿勢のまま、わたくしは成すすべなくいつてしまい、お潮を吹いてしまいました。

いつてしまったわたくしを寝台に下ろした刃さんは、直ぐに後ろから挿入してきました。

「んはああああああ ♡♡」

わたくしのオマンコは、侵入してくるオチンポを再び飲み込むと、お尻を掴まれパンツパンツと音がするほど強く腰を打ちつけられました。

「あうううう……やああ……すごいです、あうっ、くううん♥　んあああああつ、あひ、あつ、あふううううう♥」

わたくしは、刃さんに激しく求められ、愛されるの現状に喜びを覚え、与えられる快感を拒むことなく受け入れます。

刃さんは、お尻から手を放すと、わたくしの腕を掴まむとわたくしの身体を引き起こしました。

「あはあああ、はひいいん♥　あ、ああああ、ああああん……ひやああん、はげし、激しすぎますわあ……んああああ……お、おお、おかしくなりますう……ああああああああ♥♥♥」

打ち込まれる衝撃が伝わり、お尻だけでなく頭の先までオチンポに押し付けられているような、引き起こされたこととおっぱいが宙づりになりぶるんぶるんと振るえる。

「フム……そうだ」

後ろで刃さんが何かつぶやくと強く引かれていた腕の力が弱まり、身体が前に倒れそうになり、縦横無尽に震えていたおっぱいが……いいえ、乳首が寝台に掠める位置に調整されていました。

「ひやあんっ♥　あんっ、乳首こそすれてえ……あひ、あひいん♥　はふう……うあ、ああああああ♥♥」

腕を引かれているため快感に耐えるべく何かを掴む事すらできず、わたくしは髪を振り乱しながら与えられる快感い翻弄されます。

自身のなかでオチンポが膨らむの感じ、この永遠に続いてほしいような、早く高みへといぎなつてほしいような、快樂の終わりが近い事を感じました。

「あああああつ、やああん……また、また大きくなつて……う、うあああ……あ、あひいいい……あ、ああん♥　あああつ、あひ、あはああああ♥♥♥」

「ツク、そろそろ、イクぞっ」

刃さんの息が上がり、腕を掴む力と腰の動きが一層強くなった。

最初、休憩部屋とか、やることなくで暇で暇で仕方ないし、そのう
え、隣から斗詩の助平声が聞こえてきて、凄く悶々としてくる。ここ
で自分で慰めるなんてもつたいないし……

あんちゃんもやってる斗詩が羨ましいし、斗詩とやってるあんちゃ
んも羨ましい。いっそのこと二人のやっていると勝手に乱入しようか
とか考えたけど、それやったら、絶対に斗詩が許してくれないだろう
なあ……ってか、さつきなんか、ゾワツと寒気がしたんだけど、なん
だっただらう？

『いくっ♥　いくっ♥　いくっ♥　あつ、あつ、あひっ、ひいひいひい
いっ♥♥♥　いっ、いくっ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥』

短かったような、長かったような……なんだか、大事な人をすぐそ
ばで奪われるっていうなんか、味わっちゃいけないものを味わった気
分だ。

あんちゃんの部屋から、斗詩を運んで麗羽さまと入れ替わりで、ア
ニキのいる部屋に入っていた。

アニキは、麗羽さまのオアソビでぐったりしていたけど、あたいを
見て、なんか言いたげだったけど、無視して、服を脱ぐ。麗羽さまの
後だから、あたいの貧相な体じゃ、起ちにくそうだけど、秘密兵器が
ある。

長靴下（パンストのこと）　♪

なんかの本に男はこういうのが好きって書いてあった。あんちゃ
んとするときも穿くけど、その前にアニキで試して、本の話がホント
かどうか、やってみないと。ウソだったら、あんちゃんに詰まんな
い思いさせることになっちゃうしさ。

で、穿いてみたら、アニキ、すんごく見てくる。ウソじゃなかった
みたい。お尻振ってみたら、すんげえだらしない顔になってチンチン
勃起させてた。

「さてと、アニキ、暴れんなよ。面倒だから」

あたいは、アニキの両足の枷を外して自由にすると、その足をもつ
て、アニキの腹を股くように立った。

『あひいいい♥ いい、オマンコいいですわあっ♥ あああん、はへえええっ♥♥♥』

「麗羽さま、飛ばしてんなあ」

「麗羽と……斗詩が、してるんだよな？」

あゝ、そういや、あんちゃんがいることは内緒ってことになってんだっけ？

「そうそう、麗羽さまのあのデツカイおっぱいと斗詩の程よいよりも大きい感じのおっぱいがぐにゅうって潰れ合ってるんだぞ♥」

「ま、マジか!？」

アニキ、鼻息荒くして、壁を物凄い形相で見てる。そんな顔したつて、壁は透けたりしないってのにな。

つてか、確かに、斗詩や麗羽さまに比べたら、美人じゃないけど、目の前に女がいんのにそういう態度ってどうなんだよ？

これは、オシオキが必要だよな？

あたいは、壁を見るのに夢中になってるアニキのチンチンに足を押し付けた。

「い、猪々子っ!？」

「傷ついたなあ、傷ついちゃったなあ。あたいがせっかくこんな格好してきたのに、アニキは、斗詩や麗羽さまの方が気になるんだもんなあ……」

「あ、いや……これは、男のサガと言いますか……」

「とりあえずお仕置きだ♥」

麗羽さまに絞り出されたモノを塗りこむように足を動かしながら、体重をかけて圧力でチンチンを踏みつける。足の下で、チンチンがピクピク脈打ってるのを感じる。

「ヌルヌルのチンチンを擦りあげられて、気持ちよくないわけがないよな？ アニキ、もっとしてやるから、やめてって言っても止まらないくらいにさ♥」

「ひっー」

ニヤツとわらって、あたいは足を小刻みに揺らしてアニキは、簡単にイキそうになってた。

「うああっ、とめて、止めて！ あ、あああああ!!」

「あれ？ もう限界なのか？ アニキ、麗羽さまに散々絞られたんだろ？ なのにこんなに早くチンチンかたくするなんて、そんだけ、あたいの足はきもちいい？ もしかしてこの長靴下の感触で興奮しちゃってる？ まあ、どっちでもいつか。アニキがいっぱいいい気持ちよくなって、壊れるぐらい出させてやるだけだし♡」

あたいの言葉と止まらない足に、アニキのチンチンが嬉しそうにビクビクと脈打つ。

「ソフフ♡ アニキがたっぷりと出せるように……こうやって、足の親指と人差し指の間にチンチンを挟んで……いつもの生足じゃなくて長靴下だからって一瞬でイったりしちゃだめだぞ？」

あたいの足の指で、チンチンをがちりと挟み込んで、そのまま激しく足を振る。

「あ、あああああああああああ!!!」

あたいの足さばきに、アニキのチンチンが、足の下で膨らんで、白いの飛び出した。

アニキはあたいの足の気持ちよさに、ビクビクと体を震わせていた。

「(アニキにしては)いっぱい出てたな♡ そんなにあたいの足がで気持ちよかったってことだよな？」

でも、まだまだこれからだぜ♡」

あたいのことばにアニキの体が小さく震えた。

あたいは、アニキの足を持ったまま、寝台の上に座ってアニキの腹の上に飛び散った白いのを今まで使ってたのとは反対の足の裏に塗りつけてから、両方の足の裏を合わせてヌルヌルに擦り合わせる。

「今度は、両足だぞ♡」

あたいの足の間で、ネットリが糸を引くのを見て、アニキのチンチンは、期待と不安でピクピク震えた。

「ま、待ってくれ……いや、待ってください。少し休ませて……」

「だあめっ、最初に言っただろ？ 今だって、聞こえるでしょ？ アニキがあたいがいるのに麗羽さまと斗詩のまぐわうの想像してチンチ

ン膨らませたオシオキだって」

『あはあああ、はひいいン♥ あ、あああ、あああん……ひやああん、はげし、激しすぎますわあ……んああああ……お、おお、おお、おかしくなりますう……ああああああああ♥♥♥』

「斗詩、普段の鬱憤晴らそうとしてんのかな?。」

「え? 麗羽が斗詩に?。」

「うん、麗羽さまが斗詩のワザでアンアン喘いでんの。普段大人しい斗詩の指で麗羽さまがオツパイぶるんぶるん振って乱れてんだろうなあ」

ワザと妄想させるようなこと言ってみると、アニキはやっぱりあたいの言った様子を想像してるみたいだ。

そんなことするから、オシオキされてるのに、馬鹿なあたいが言うのもなんだけど、アニキってホントに進歩しないなあ。

「ほらまた、あたいを無視して斗詩と麗羽さまの助平な場面想像してたな?。」

「あ……で、でも、これは……」

「でもじゃない。休憩なんてさせてやんない。この搾りたてのヌルツヌルの足でいっぱい絞って、もっとドロドロにさせてやる。」

ほら……挟むぞお♥」

あたいの両足をゆっくり、少しずつアニキのチンチンに近づいてくる。アニキは、何とかあたいの攻めから逃れようともがくけど、無駄無駄、普段食っちゃ寝して女に自分勝手に腰振る運動しかしてないアニキが、普段からそこそこ真面目に訓練してるあたいの手から逃れられるわけない。

そして、あたいの足がチンチンにヌチャアツと触れた。

「うおあつ!?!」

そしてそのまま、無駄な抵抗むなく、アニキのチンチンはあたいのヌルヌルの両足にしつかりと包み込まれてしまった。グチュグチュと乱雑に擦り回されて、チンチンは情けなく再び元の硬さを取り戻した。

「さつきまで嫌そうにしてたのに、チンチンは凄く嬉しそうだ♥ ア

が強調されちゃうじゃんか。

そんなこと思いながら、あんちゃんのいる部屋に入った。
全裸で、寝台の上で寝ているあんちゃんがいた。

「あんちゃあん、女が来たのに寝てるなんて失礼じゃないかつ」とびかかろうとしたあたいだったけど、それよりも早く、グイつとあんちゃんに手首を握られてそのままあんちゃんの上に倒れ込んだ。
「あああ、あんちゃんっ!？」

慌てるあたいをあんちゃんは抱きしめた。

「可愛くて、思わず、抱きしめてしまった」

「か、可愛い!? な、何言ってるんだよ。斗詩とかの方が可愛いだろう」
「斗詩は斗詩でかわいいが、猪々子は猪々子でかわいいと思う」

「ま、まったまたあ! あたいをかつごうなんて、十年早いぜ!」
「猪々子に魅力を感じなかったら、こうはならない」

そう言っであんちゃんは、体を起こすと、あたいの手首を掴んで、自分の股間へと導いた。兄貴のチンチンなんかとは比べ物にならないくらいデツカくなったチンポが、あたいの手に触れてビクつと震えた。

「あ、あんちゃんの熱い……あ、あたいで、こうなったの?」

「ああ、猪々子のせいでこうなった。どうしてくれる?」

「どうしてくれるって……そ、そりゃあ♥」

あたいはおずおずとチンポを握って、ゆっくりとしごき始めた。

あたいの手の中で、あんちゃんのチンポがより熱く、より固く、より大きくなっていく。あんちゃんの手が、あたいの尻を片手で鷲掴みにすると、抱き寄せて、ちゅーしてきた。

「ちゅっ、はふう♥んっ、ちゅぶ……」

あんちゃんは両手をあたいの尻に回して、ぐにぐにと揉みしだきながら、あたいの口の中に舌が入ってきて、あたいの口の中を縦横無尽に暴れて、舌に絡みついてくる。あたいも舌で応える。

「はちゅ……んっ、ちゅる……んむう♥」

あんちゃんが、あたいの口の中をねちっこく掻き回していくと、段々、あたいのマンコが切なくなつて、内股を擦り合せて堪える。

「んちゆう……ちゅちゅつ♥ はふうん……ちゅ、んんんん♥♥
♥」

ちゅーしながら、尻を揉みほぐしていたあんちゃんの手が、そのまま奥から回すようにして、股の付け根に移動した。そして、熱く、ちゅーだけで潤んでいたマンコに指を這わせる。

「ぶふあつ、あん♥ ははあ、あつ、ああん、あひいつ♥」

口を開放されて、あたいは息を整えようとするけど、あんちゃんは、あたいの身体を力強く抱きとめ、ニヤリと笑った。でも、あんちゃんの胸に抱き寄せられて、あんちゃんの鼓動が聞こえてくると、安心しちゃって、気が緩んだところにマンコを刺激されて、とんでもなく気持ちよくなっちゃう。

「あうつ、んあああつ、ひううう……あああああつ♥ ダメ、うううつ、あああん♥」

「口付けとちよつとの愛撫でこんなに濡れるなんていやらしいな」

愛液にまみれた指先を擦って糸を引かせながら呟くあんちゃんにあたいの顔は、はずかしさで、たぶん真っ赤になってるんだと思う。ほんの少しマンコを触られただけですっかりと腰が砕けて、あんちゃんに抱きしめられるがままになってるなんて。

でも、言い訳させてほしい。

「あ、あんちゃんのせいだ。はふうん♥ あんちゃんが、あたいをこんないやらしいしたんだあ……ああああん♥」

「そうか、なら、責任を取ってもつといやらしくしてやる」

あんちゃんに導かれて寝台の上に仰向けにされて、閉じていた膝をあんちゃんの手によって、大きく広げさせられた。さっきまでの、あたいの身体は力がろくに入っていなかったから、されるがままだ。

あんちゃんの目の前にあたいの助平な汁でマンコの部分だけ変色しているのが、丸見えになっている。さらに服をずらしておっぱいを丸出しにされちゃった。

足の間にあんちゃんは、身体を割り込ませると、濡れた割れ目に優しく指を運ぶ。下穿きを穿いていないからあんちゃんの指がすごく感じる。

「あはあ……あうっ、あああん♥ やあっ、やああん♥」

マンコを撫でつつ、揉みほぐすような手つきでクチュクチュと撫でると、あたいの身体はピクツと反応しちゃう。

あんちゃんは、残ったも一本の手で、あたいのちいさいおっぱいを掴んで揉みだした。

「あうう……いい、いいよオ♥ ああああん……いい……気持ちいいイ……おっぱいも、マンコも、気持ちよくなってえ……あああああ、いいい……ひいいいん♥♥♥」

マンコを撫で上げるだけだったあんちゃんの手が、くちゆりと音を立てながら、膣穴の浅いところを突いてきた。それにあわせて乳首をつまんできた。

「あ、あひ……ダメエ……ひやううう♥ ああっ、あっ、あはあああああ♥♥♥♥」

「猪々子、猪々子の助平なところが、ここも触ってくれって、大きくなってきたぞ」

あたいの様子を見ながらそう言うと、あんちゃんはあたいが一番感じるところを指で転がした。

「あっ、そ、そこっ、ダメ……あいいいいッ♥♥ ひッ、あう、んああああああああああああ♥♥♥♥♥♥」

とんでもない気持ちよさに、あたいの頭ん中は真っ白になった。

気持ちよくて動けなくなったあたいの太ももをぐいと手で左右に開いて、露わになった蜜まみれのびしょびしょのマンコにあんちゃんは舌を這わせる。

驚いたあたいは、あんちゃんの頭を両手で挟んでマンコから引き剥がそうとするけど、さっきのでろくに力が入らなくて、どうすることもできず、新しい刺激に晒された。

「んあっ、あひっ、やあん……あんちゃんの舌、んひ、き、気持ちいい♥ んああっ、ひいっ、あはあああん♥♥♥♥」

マンコを舐められ、おしっここの穴を尖らせた舌で突かれ、マンコの入り口をくるくると円を描くように舌を這わせてくる。

「はううう、んああああ……あ、あひいん……あはああああ、ひ、ひあ

と、あたいは自分でも恥ずかしくなるような声を上げていた。

「あうううっ、はひっ、ひうううう……お、お、お、おかしくなるうう
ふひっ、ああんっ、あああああ♥♥♥ あはああんっ♥」

ゆつくりと引きずり出したチンポが今度は、ぐりぐりと奥に押し付けるようなゆつたりとした腰使いであたいを攻めてくる。

ぐつちゅぐちゅとオマンコにチンポがめり込んだり引き抜かれたり、チンポで丸を描くように腰を回されたりして、あたいは悲鳴を上げることにできなかった。

「あんっ、あはあああ……はひっ、はひいんっ♥ んあっ、あああん
……ひうううっ♥ はあんっ、あひい……奥まです……い
♥」

あんちゃんの動きが段々と早くなってきた。チンポもあたいの中で大きくなつてもう少少で、あれが、あの熱いのが出るんだとわかった。

「だ、出ひて、出ひてえ♥ うあっ、あっ、あああああ……マンコ
の中にいつ、ああん♥ アツいの、あついのいつぱい ひっ、んひい
いいいいい♥♥♥、はっ、はへえ……はげしい♥♥♥」

あんちゃんは、とどめと言わんばかりに腰を振って、あたいの奥の奥までチンポを叩きつける。

そして必死になつてしがみついたあたいの奥に深々とチンポを突き刺して、あのアツいモノを解き放った。

「はっ、ああっ、はひ、し、しゅごい……い、いくううう♥♥♥ あ
あああああ……ンおおおお♥♥♥ いぎっ、い、いぐ、いつぐ
ううううううううううううううううううううううううううう♥♥♥
♥♥♥♥♥」

奥で弾けるように打ち込み出された灼熱の波があたいの中を遠慮なく侵入していく。

それが物凄くうれしくて、あたいはいつまでも、斗詩や麗羽さまが来るまで、あんちゃんと一つに融け合っていた。

〈北郷side〉

「北郷さま、北郷さまっ」

名前を呼ばれて目を覚ますと、俺の親衛隊の女がいた。えっと、何て名前だったけ？

「どうしてここに？」

「はい、昨日、袁紹さまたちとお楽しみになられたけれど、北郷さまが疲れて寝てしまったので、後を頼むと言われました」

女の話聞いて、脳裏に全裸で赤いハイヒールを履いた麗羽や、ライトグリーンのストッキングだけの猪々子、穴あきのエロい下着姿の斗詩が浮かんだ。

「北郷さま、起き抜けに一度なさいますか？」

そう言っつて、女が、胸元を開く。

「いや、いいよ。服を着せてくれ」

「……はい」

女は残念そうに俺の着替えを手伝ってくれる。決して不細工ではない。むしろ美女と言っても間違いじゃない女だけれど、麗羽たちに比べると、今一つ見劣りして、あの過激な快樂のあとすぐに抱く気にはなれなかった。

「麗羽たちは？」

「先ほど、自分と入れ替わりで、出ていかれました」

「ふうん」

そう言われて、何気なく外を見た。よく見知った三つの後姿、それと一緒に歩く男の姿が見えた。まさか!? っつて思ったけれど、いやいや、ここ最近、そんな感じのをよく見かけるから、そんな妄想してしまうんだろうな。あんなだけ体格のいい男なんだから、どう考えても麗羽の御神輿隊の一人で、どうせ、麗羽の買い物の荷物持ちに駆り出されたんだろうな。

「どうかなさいましたか？」

四話

《???

「じゃあ、みんな準備は良い？」

「……（コクン）」×16

「今回は、すでにあたりを楽しんだ6人を除外してまず、当たりくじが入ったくじを引いて、その後、抜けていた愛紗ちゃんたちあたりだけ楽しんだ人とすでに外れをやった人を入れ替えて外れくじが入ったくじを引くよ。麗羽さんたちはどっちにも参加しなくていいからね。」

それと、前も言っただけだけど、あたりを引いた人を襲っちゃだめだからね！」

（だから（ry））×22

「みんな、小刀隠すだけじゃなくて暗器まで出してくるので、もう、全部脱いできてね」

「は〜い」×22

全員が指定された部屋に武器を置き、服も全て脱いで、全裸で戻ってくる、指示通りにくじを握った。

「それじゃあ、いくよ？」

「せえ〜の！」×17

「ウフフ……あたりです♪」

「っ!？」×16

次の瞬間、全員が、帽子や髪留めに仕込んでいた暗器を手に襲い掛かった。が、しかし、あたりを引いた彼女から発せられる殺気にあの飛將軍ですら、身動きを封じられてしまった。

〈周倉side〉

「……」

「どうかしたのかしら？ 刃くん♥」

目の前にいるのは、紫苑。弓の名手にして璃々という子供もいる美女。

それが、コスプレしているのだが、そのコスが……

セーラー服風のコスチュームを着て戦う美少女戦士のモノで、しかも、自分の色に合わせたらしく紫……土星のコスをするとか……せめて、冥王星のコスにしとけよ年齢的に!!

声には出さなかったが、原作キャラの持つ清純な印象など一切ないむしろ、濃艶って印象しか受けない。

思わず痛くなった頭を押さえるが、考えてみれば、俺とするために着てくれたんだしな。

「意外性の高い格好だな」

「それは、褒めているのかしら？」

あの爆乳を無理やり押し込んで今にもはち切れそうな胸、ムツチリとした太ももを惜しげもなくさらし、申し訳程度に隠された尻……

「普通の服として似合っているかどうか、聞いているのなら、似合っていないと言わせてもらおう」

「そう……」

「だが、性交することを前提にしてそういう格好をしているというのなら、間違いなく似合っている」

「あら、そうなの？」

残念そうな顔になった紫苑がにっこりと笑って俺の股間に覆いかぶさって、腰に抱きつくくと、服越しにイチモツに頬を擦り寄せてきた。

「はぁん……服越しなの、匂いを嗅いだけで♥」

服の上から紫苑は、その美貌を擦りつけ、イチモツに鼻先を押し付け、半開きの唇で、刺激されて盛り上がってきた部分にキスの雨をふらせながら、潤んだ瞳で俺を見上げおねだりしてくる。

「はふうん、ねえ、わたくしのお口で刃くんのオチンポをペロペロさせてえ♥ 先っぽから根元までたっぷり、おしゃぶりしたいのお……だ

めかしら?」

「……ああ、いいぞ」

目の前で四つん這いになりこちらを見上げる紫苑に、断ったらどんな顔をするか気になったが、身の危険を感じて許可を出した。

「では、失礼して……」

色っぽい笑みを浮かべると、紫苑は心底嬉しそうに俺の服を脱がしていく。紫苑の手は、あつという間に脱がされ、勃起し始めたイチモツを取り出した。

「あああ♥　じゃ、いくわよ……んん、ちゅ、ちゅぶぶ、れろお、あはあ♥　ずちゅう……んんんっ」

紫苑の唇が亀頭をくわえ込み、そのままイチモツをしゃぶつていく。

「んぐう……んんんん……じゅるるるっ♥」

紫苑は、俺のイチモツを根元までしっかりと唇が覆い、喉の奥までつかって亀頭をくわえ込むと、さらに卑猥な音をたてて口の中の肉棒を啜りこみ出した。

「ツク!?」

イチモツ全体がバキュームされ、柔らかく暖かい口腔内の粘膜が竿をくみこんでいく。かなりデカい俺のモノを完全に加えこめるのは、蜀の中でも紫苑と桔梗しかできない荒業だ。

俺の腰をしっかりと掴み、股間に顔をふせた美女は、さらに頬肉と喉の奥でイチモツを締め上げながら、舌を口腔内で動かして竿をしごいてくる。

他の女では、そうそう味わうことのできない快楽に、思わず、声が漏れる。

「んぶっ、じゅ、ちゅぶぶっ♥　んじゅじゅ……ちゅずずずずずずずずず♥♥♥」

イチモツを啜えたまま紫苑は、口腔内を動かし、喉と頬肉全部をつかってしごきながら、イチモツに吸いつき、喉の奥で吸引する。

これを始めたら、俺が出すまでは馴れない紫苑の頭を掴んでより快楽を得るべく、紫苑の喉の奥を突くように腰をうごかしだしていた。

そして震える二つの双球の間に俺のいきりたつたイチモツを挟んだ。

「こんどは、このおっぱい絞ってあげる♥」

肩を寄せるようにして、豊かな乳肉を胸の中心に集め、手で重量感たっぷりの爆乳を左右から寄せる。

紫苑自身の手でも掴みきれない豊満で弾力のある乳肉が、揺れながら卑猥に形を変えて俺のイチモツをしごく。

「あん……刃くんのビクビクしてて、とつてもアツイわあ♥ もっとすべりをよくするわね……」

イチモツと胸の谷間に紫苑は涎をこぼした。

「ウフフ、これで準備できたわ。おっぱいでぎゅうぎゅうにしぼるわよ♥」

紫苑は、俺ににんまり笑いかけると、自らの爆乳を左右から両手で押しつぶした。イチモツがマシユマロのような爆乳の中に埋まっていき、吸いつくように包みこむ乳房の柔らかさが、竿を覆いつくし、龟头が顔を除かしている。

「あつ、あん……刃くんのオチンポ……本当に大きい♥ わたくしのオツパイでも、覆いきれないなんて……はふうん♥」

そんなことを言いながら、おもむろに紫苑は自らの爆乳を掴んだ両手を動かしはじめる。

上からのしかかる重量感たっぷりの爆乳に下半身を押さええられて、イチモツをしごかれ、両手で上下にゆすりながらさらに押し込んだり緩めたりとこねるように揉みまわす。

その度に爆乳の間に挟まれたイチモツは、紫苑の唾液とさつき出した俺の精がローション代わりになって卑猥な音をたて、最上級の乳肉にもみくちやにされる。

「んん……れろっ♥ んちゅ……ちゅむ……れろろ、ちゅぱっ♥」

さらに、包み切れなかった亀頭に、紫苑の艶やかな唇がキスをしたり、尖らせた舌先で鈴口を舐めまわす。

一方的に奉仕され続けるのもいいが、そろそろ、俺も反撃がしたくなり、パイズリ奉仕を続ける紫苑の爆乳の頂を指先で左右同時に摘み

あげた。

「ふあっ、ひやうっ♥ やっ、やあああん♥♥♥」

俺の反撃を受けた紫苑の身体が、震えて奉仕が止まった。

「だっ、ダメえ♥ あん、あふっ、ひやひいいい……だ、だめよ、オイ
タしちや、わたくしがご奉仕するんだからあ……あつ、あん、あ
はあつ、あん……ダメええっ♥」

龟头から唾液の糸を引きながら顔をあげた紫苑は、胸の先端を襲う
刺激に首を振り、俺に手を止めるように言うが、その眼は、欲情であ
ふれかえっていた。そんな彼女に容赦してやる必要なんてないので、
俺は豊かな乳肉の中心にそびえる乳首を左右同時に捻り潰すように
引っ張った。

「あああああ……もう……もうダメ……あつ、ああん……だめなのお
……いく、おっぱいだけでイクウ……あああああああああああ
あああああ♥♥♥♥♥」

反り返った後、自らの乳房に突っ伏したように顔を俯かせて、はあ
はあ喘いでいる美貌の未亡人武将は、絶頂による痙攣で震えていた。
その間も、俺は、勃起している紫苑の乳首を指でつまみあげて弄ぶこ
とはやめない。

「はあ……きつ、気持ちよかったけど……でも、刃くん、もうおっぱい
の先つちよいじつちや駄目……あん♥ おっぱいでオチンポをシコ
シコできなくなってしまうから」

瞳を潤ませながらこちらを見上げてくる。されるよりしてあげる
方が好きな紫苑として、俺に乳首を弄られたことは嬉しいのだが、パ
イズリ奉仕の邪魔をされたのは気に入らないらしい。

「ちゃんとおっぱいご奉仕させて……邪魔しちゃだあめ……それ
じゃ、もう一度♥」

まるで、聞き分けのない子供に言うような口調でそういうと、紫苑
は俺の同意も待たずに、体勢を整えて、舌なめずりをしてから体を上
下に動かした。

「あん……どうかしら、気持ちいい?」

淫らで粘着質な音が、男ならだれもが、揉みし抱きたいと夢見る美

女の爆乳の間から再度漏れ出す。

「ああ、きもちいいよ」

俺は、目の前でゆれる豊満な乳房を円を描くように撫で回しながら、その肉の球体の奥でイチモツをはさまれてしごかれ続ける快感に耐えながら、へんじをする。

紫苑の背中が、リズムカルにそして丁寧に動き回り、細い指先のあいだから乳肉を溢れさすほど激しく爆乳を押しつぶし、熱心にパイズリ奉仕を続ける。

「ウッフ…：わたくしのおっぱいで、刃くんが喜んでくれてる…：あ
ん♥ もっと、とろとろにしましょう♥」

俺を見つめながら、紫苑は色っぽい唇をすぼめるように突き出し、口内に貯めた唾液を滴り落とす。

紫苑の唾液が、イチモツを揉み上げ押しつぶす柔らかな爆乳の谷間に流れ込み、混じりあうようにイチモツに絡みついていく。

俺の反応を見ながら、段々と激しく爆乳でチンポをこすりあげて、鈴口を舌先でほじくりかえす。

「ちゅ、ちゅぶ…：レロレロお♥ んちゅ…：ウッフ、わたくしのおっぱい
の間で刃くんのオチンポが、ビクンビクンしてきたわあ♥ 搾り出してあげるわね…：あんっ♥ んちゅ…：」

そういいながら我慢汁をすする紫苑の尻が左右に揺れている。ミニスカがめくれて、股間部分が尻の谷間に食い込んで柔らかな尻肉が姿を現し、剥き出しの太腿まで愛液が流れ落ちて、彼女の興奮の度合いを物語っていた。

頬を染めて、淫乱な未亡人は潤んだ瞳で俺を見上げて一生懸命に爆乳でパイズリを続け、体を小刻みに上下に動かす。

「あああ…：あん♥ おっぱいに刃くんのオチンポがこすれるう…：あ、オチンポの先からヌルヌルが出てきて…：あはあああ♥」

先が飛び出た亀頭を残し、イチモツ全体が乳肉に包みこまれて絶え間なく刺激されるという極上の奉仕をうける。

俺は、再び艶やかな乳房に手を伸ばしてそれを撫でまわし、指先で揺れる尖った乳首をもう一度つまみ上げた。

「ふああっ♥ んあ、ひゃああん……こらあ、そこ摘んじやだめえ……は、はふうんっ♥ あああつ、あううん♥ いいい……おっぱいいいのお♥♥♥」

乳首をつまんだ途端、また紫苑の背中が反りかえり、愛液が滴り落ちる。

それでも今回は眉をひそめ頬を桜色に染めながら、甘い吐息を吐くも、パイズリをやめようとはしない。

それでころか、さらに激しく体を動かし、俺の下半身に擦りつけるように体重をかけて押し付けてきた。

紫苑の爆乳が上下に揺する度に、俺に摘まれた乳首だけが動かず、乳肉が引き伸ばされるように揺れる。

「ひい……ああつ、ああん♥ じ、刃くうん……わつわたくし……また、おっぱいでイクう♥ あつ、あん、ダメえ……あううつ、刃くんのオチンポ挟んだまま、おっぱいだけいっっちゃうのお♥ あつ、あふつ、んふあ、ああん、あはああああ♥♥♥」

紫苑が、さらに体を揺らしてスパートをかけてくる。

「いっっちゃう……おっぱいで、いくう、いくつ、イクのおおおおおとおおとおおお」

「俺も……でるっ！」

俺のイチモツに吹き上がった精が、紫苑の美貌を白く汚す。

美女の爆乳の間から白い液が吹き上がり、そのまま辺りに飛び散る。

「あああんっ、もったいない……れろ♥」

紫苑は、飛び散たモノを必死に舌で舐め取っていく。

「あああああ♥ あんなに、それも二度も出したのに、まだそんなにピンピンだなんて♥ 今度は、こちらに♥」

イチモツに熱い視線を向けてから、紫苑はそのしなやかな肢体を動して寝台にあがると、背中をむけて、尻を突き出した。いやらしく股間に食い込んだ布を、脇にどかしてマンコを俺に晒す。

「来て、助平な淫乱未亡人オマンコに……その大きくて硬くて、立派なおチンポで、突き刺してえ♥」

俺の方を振り返って俺の視線が自分の尻に集まっているのを確認した紫苑は、淫らな笑みを浮かべると、魅惑的な張りのある尻を揺らし、俺の前で、紫苑の手が尻のほうから秘所にまわされ、白い指先が、マンコを広げた。

俺は、紫苑のマンコにイチモツの先をこすりつけながら、尻に指を這わせ、その女性らしい丸みを帯びた曲線を楽しむと、そのまま細くくびれた腰、そしてわき腹へと優しく愛撫していく。

「ああああ……早く、早くぶち込んでえ♥」

紫苑は唇をわななかせながら、背後にいる俺に懇願し、自分から俺にたれかかるように腰をおとしてくる。

それを受け止めながら、俺からも腰を練り出し、反り返ったイチモツが、糸をひいて広げられたマンコの中へと潜り込んでいく。

「あううううううう♥♥♥ お、お、奥まで来てるう……んあああつ、くひひひひひひひ♥♥♥」

肉のヒダが重なりうねり、俺のイチモツにまとわりつく。

そして蜜壺全体が、まるで搾乳機のように柔らかな肉圧を伴って絞りとなるようにイチモツを刺激してくる。

俺は、紫苑を背後から抱きしめ、揺れる爆乳に両手で掴んだ。

柔らかな肌は俺の手の平にしっとりとなじみ、乳肉は指を押し返す程の弾力で最高の感触だった。

「はうう……ンあああつ♥ ああつ、い、いいのお……あうううつ♥
ああ、ああああン♥♥♥」

紫苑は頬を染めて、うっとりとした声を出し、俺にもたれかかるようにしてより密着する。

俺は後ろから爆乳を揺るように揉み上げながら、おもむろに腰を激しく突き上げる。

「ひああつ、あ、あひ、あひやあん♥♥♥ あつ、んひひひひひ、奥、奥があ……きやうん♥♥♥ ああん……いいい……もつと、もつと突いてえ♥♥♥」

荒い息をはく赤い唇、破けてヒロピンモノにありがちな感じに乱れたヒロイン衣装、剥き出しにされ揉みくちやにされる白く大きすぎる

見事な爆乳。

その爆乳は、吐息のような喘ぎ声が響くたびに、俺の手に掴まれているにもかかわらず、重量感たつぷりに、卑猥に揺れる。

「あああああ、それ、ダメええええ♥♥♥ おっぱい悪戯しちやダメなのお……ひいひいひい♥♥♥」

身悶えながら放たれる甘ったるい声を無視して、縦横無尽にその爆乳をひねりあげ、柔らかい肉の中に手の平を埋める。

「あはあああ、だめえ……そんなにおっぱい、いじつられたら、またいつちやうう……あひいひいひい♥」

牛乳を搾乳するような容赦なく爆乳を愛撫すると、紫苑は髪を振り乱して悶えるが、胸を弄ぶ俺に抵抗するそぶりは見せない。むしろ、腰をこすりつけて、肌を惜しげもなく俺と密着させてくる。

「ああああああ♥ そこ、ああん……そんなところまで擦れてえ♥ あっ、ひいひい、ひい♥ 気持ちいいい、あはあん♥」

絶頂の気配が見え始めたとき、俺はあえて動きを遅くした。するとすぐに不満げな顔でこちらを見て、紫苑は自分で腰を振り始めた。

「前から一つ聞きたかったんだ」

「あああん♥ き、聞きたいこと？ それなら、後でいくらでも応えるから、今は……あ、あひいん♥」

「今じゃないとダメだ。答えないならこのままだ」

爆乳から手を放して、快楽を求めて動く腰を抑え込む。

「ンああああっ、ひどい、ひどい♥ なに、なにが聞きたいのお……」

「俺と、おまえの夫、それからあれ、どれを愛しているんだ？」

「あ……そ、それは……」

俺の問いに、今まで、性欲に浸っていたのがウソのように素面に戻っていた。言葉に詰まる紫苑だったが、俺が子宮を擦ると、あっさりど答えを吐いた。

「あひっ、んひいひい♥♥♥ わ、わたくしが愛しているのは、あなたよ♥ あの人も、あのお方も、わたくしをこんなに気持ちよく、愛してくれなかったのお♥ あなただけなのおお……あひいひいひい♥♥♥」

「そうか、そこまで言ってくれるとは思わなかったな。じゃあ、約束通り、イケ！」

俺は、抑えるのをやめて、紫苑の肉壺の中を容赦なく突きまくる。「ああああああ♥♥♥♥♥♥ いっ、いく、いくのお……あひっ♥ オマンコ突き壊されて、いっちやうううううううううう♥♥♥♥♥♥」

紫苑は激しく動くイチモツの律動に、絶頂へと駆け上っていく。

「俺も、イクぞっ！」

俺も紫苑の乳房を握りつぶさんばかりに掴み取ると、腰を突きだし、その先端をマンコの奥に思いきり叩き付けた。

「ああああああ……いく、いっ、イクっ、オマンコ、イクううう♥♥♥♥♥♥ あああああ、い、イクうううううううううううううううううううう♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

紫苑の白い喉をのけぞり、反り返った。

激しい絶頂して痙攣している紫苑の爆乳を搾り取るように掴んだ俺は、紫苑がイクのと同時に膣の中に精を吐き出した。

さらに柔らかな尻を捏ね回すように腰を動かして、マンコの奥を龟头で擦りつける。

「んああっ、あひい♥ 出てるのにまだ、おつきいい♥ うぐ……もつと、もつとお……んあああ、もつと出してえ♥ あの子に兄弟つくつてあげてえっ、はひい……あはああ……もつと搾り出してあげる♥♥♥」

紫苑も尻を俺に突き出し、俺の腰の動きにあわせて腰を降りたくる。

狭まる膣奥と子宮がイチモツをくわえ込み、おかわりを要求してくる。

「はあああ……んひいっ♥ お、おほおおおお♥♥♥♥♥♥ はひっ、はへえ♥ ♥んあああああっ♥♥♥♥♥♥」

「ツク！ また、出る!!」
「いひいひいひいひいッ♥♥♥♥♥♥ イク、イイク、またイクううううう♥♥♥♥♥♥ あひい、イクの止まらない♥♥♥♥♥♥ イク、イク、イクイク、イッグううううううううううううううううううううううううううううううう♥

♥♥♥♥♥♥♥♥

絶頂を極めた紫苑は、そのまま、電池の切れたおもちゃのように寝台に倒れ込んだ。一瞬死んだのかと思ったが、身体が、痙攣して、荒い呼吸が聞こえるから、生きてはいるようだ。

俺は、紫苑の中から、イチモツを引き抜き、紫苑の隣に寝そべった。すぐに紫苑が身を寄せてきた。俺もそれにこたえて、紫苑の背中に手を回して、抱き寄せる。

「はあはあ……よっ良かったわ♥」

「そうか…」

「している最中に言ったことはウソではないわよ。わたくしが一番愛している殿方のは、あ・な・た♥」

そう言つて頬にキスしてきた。

本当にこの未亡人は、意識しているのか無意識なのか、男をその気にさせるな。

〈北郷 side〉

最近思ただけで、うちの武将も軍師も俺を縛るの上手くなってないか？ 焰耶と宿に來た俺だったけど、一瞬で裸にひん剥かれて拘束されて転がされてしまった。

焰耶もすぐに服を脱ぎ捨ててパンツ一枚になった。

引き締まった体に大きく張り出したおっぱい。チンコにすぐに血が集まつて勃起する。

「相変わらず、御館のチンチンは、すぐに大きくなるな」

ニヤニヤしながらそう言い、焰耶は、くると俺に背を向けた。そこで初めて、今日、焰耶が着ているパンツがTバックであったことに気が付いた。

そして、ケツを突き出し俺のチンコに密着させ、尻肉でチンコと刺激し始めた。

「うおおっ！」

チンコの位置を調節するかのように腰を左右に振り、ちようどいい

位置にチンコが来ると、今度は、腰を前後に振り始めた。

彼女の動きに合わせて揺れる焰耶の横乳。プリンつと突き出され、いやらしく蠢く美尻。

時折彼の方を振り向いて、自分の指を啜えて舐めながら、ゾクつとするような魅惑の視線を投げかけてくる。普段の焰耶からは全く想像できない色っぽく、エロい姿に俺は、自分からも気持ちよくなるうと、動けない体を必死に動かす。

「ウツ、え、焰耶……」

ゆつくりと、そして時に強く蠢く焰耶のエロケツ。俺のチンコの一番感じる所を次々と刺激し、チンコを破裂寸前にまで高ぶらせる。

そんな状態に追い込みながら、焰耶が自分の姿勢を保つためについていた手を放し、大きく、ゆつくりと動かして自分のあたまのうしろで両手を組んで、腰を動かしてくる。

その動作の最中、俺はようやく、部屋にある無数の鏡に気が付いた。手を頭に回したことでより強調されるように突き出されたおっぱいが前後に動くたびに上下に揺れ、左右に動けば、おっぱいも左右に揺れる。俺はまるで催眠術にかかったようにおっぱいから目が離せなかった。

「なんだ？ 御館、もう動かないのか？」

「あ、あああ……」

応えられない俺を見て、焰耶はにやりと笑った。

「気づいていないと思ったか？ 親方がずっと、私の胸ばかり見ていると」

「ッ!？」

「最初からずっと気づいていたぞ。大体にして、鏡に映るようにしていたのだしな。」

「まったく、素直に見たいと言えればいいものをこそこそ……男らしくない、なんて女々しい」

ズバズバと突き刺さる言葉に胸が痛くなる。手が自由なら、胸を押さえていただろう。

そんな俺を嘲笑いう焰耶は立ち上がると、身体を180度反転させ

て、俺の方を向いた。むき出しのオツパイを隠す様子すらない。

「ほら、御館が見たがってた私の胸だぞ♡」

そう言うと、焰耶は足を開いて腰を下ろし、手を後ろについて体のけぞらせた。チンコが焰耶のケツによって無理やり下に向けられて、痛みを感じると同時に、柔らかい尻肉の感触が襲ってくる。

「え、焰耶……」

「ほおら、御館、動くぞ♡」

不敵な艶然とした笑みと共に、絶妙の腰つきでケツを動かして、俺のチンコを更に刺激する。

M字開脚している為、パンツでも隠し切れずに見えているマンコと、動いたびに揺れるおっぱいに俺は見入ってしまう。

「ううう……焰耶、少し手加減を……」

「何を言っているんだ、御館。私のお尻でチンチンをクニクニされて、こんなにガチガチにしている癖に、本当はもっとしてほしんだらう♡」

「くううつ、そ、そんなこと……」

「あるだろう？ さつきから私のオマンコとおっぱいをじろじろ見てオチンチンビンビンにして、私のお尻にグイグイ押し付けているじゃないか。このまま、ピュッピュッピュしてくたしょうがないんだらう♡」

時に優しく、時に強めに、緩急を交えて続けられる焰耶エロケツによる尻コキ。

翠と並んで羞恥心の強い彼女が、普段なら恥ずかしかがって絶対に言わない淫語を口にしてくる。それが俺を追い詰め、俺を狂わせていく。

「ほら、正直に言え、焰耶のオツパイが見たかったって。ほらほら♡」

「え、焰耶のオツパイが見たかったんだ！」

「やつと正直になったな。こっちはどうだ？」

焰耶の手がパンツ越しにマンコを撫でた。

「み、見たい、焰耶のマンコが見たいです!!」

「仕方がない御館だ。ほら♡」

マンコを撫でていた手が、パンツを掴み、脇へとずらしてマンコを

丸出しにした。

「おおお!!」

「オマンコくらいで、そんな声を出すな。御館は親衛隊とか、いろんな女のおマンコを毎日見放題じゃないか」

確かに、焰耶の言う通りだけど、見慣れた女のマンコと、久しぶりに見る女のマンコじゃ、意味が違う。と力説してみたけれど、それに対する反応は、冷たい視線だった。

「よくわからんが、御館がやはり変態だったということはよくわかった」

焰耶が動きを再開し、重力に逆らう巨乳がゆさゆさ揺れ、乳首が卑猥に動く。

おっぱいを揺らしながら、同時に俺の硬直したチンコを巧みにエロケツの弾力と温度で刺激してくる。

「そろそろ、イかせてやろう♡」

焰耶はわずかに腰を上げて、チンコを掴むと、無理やり上を向かせて腰を下ろし、座った体制のまま、身体を反転させた。

柔らかい肉と下着が敏感な裏筋を刺激し、我慢汁が吐き出されて俺の腹を汚す

焰耶が腰を動かし始め、俺の腹に押し付けられたチンコは逃げ場などなく、焰耶のエロケツの感触と、細いTバックの布地が亀頭に擦れ、チンコを苛んでくる。

「御館のおチンチン、ギンギンに硬くなって、私の尻がそんなに気持ちいいか？」

「い、いい！ 気持ちいいよ!!」

細い腰をくねらせ縦横にチンコをいたぶる焰耶は残酷な微笑みを浮かべ、チンコがふにふにと尻肉に柔らかく押しつぶし、裏筋を圧迫する。

そして、とどめにチンコの前から根元までを一気に擦りたてられた。

「うあ、あああああ!!!」

堪えきれず、チンコが![!]快楽の脈動を始め、射精させられた。

出したものが自分の腹や胸に飛び散った。焰耶に拭いてほしいと頼んでも、「そんなこと言つて、そんな風になつて喜んでるんだらう」と聞き流された。

焰耶は、エロケツで中に残っていた分も絞り出すと、俺の上から降りて、備え付けられていた水を飲み始めた。

身体を隠すことなく、水を飲む焰耶を見ていた時、隣から声が聞かえてきた。

『来て、助平な淫乱未亡人オマンコに……その大きくて硬くて、立派なおチンポで、突き刺してえ♥』

隣から聞こえてくる声にギョツとなつて思わず、声がした方の壁を見た。

未亡人だ?!? その単語に連想してしまったのは言うまでもなく、蜀の二大爆乳が一人、紫苑だ。

一瞬、紫苑がいるのかなんて想像してしまつたけど、まあ、そんなわけではないが、いずれにせよ未亡人という単語は、俺の煩惱を刺激して興奮させた。それがダイレクトにチンコに現れ、それを焰耶に見咎められた。

『おい、御館。いくら休憩中とはいえ、私がいるのに、他の女のことを考えるのは失礼じゃないか?』

『あ、いや……だつて』

『だつてじゃない。まだ、出し足りないなら徹底的に絞つてやろう』
『ひいつ!?!』

焰耶が、俺の股の間に背中を向けてしゃがみこんでエロケツを、未亡人を想像して興奮して勃起してしまつたチンコにゆっくり当ててきた。

『あひつ、んひいいいい♥♥♥ わ、わたくしが愛しているのは、あなたよお♥ あの人も、あのお方も、わたくしをこんなに気持ちよく、愛してくれなかったのお♥ あなただけなのおおお……あひいいいい♥♥♥』

隣から聞こえてくる声に俺は再度驚いて、壁を見てしまつた。未亡人だから、過去に旦那がいたつてことだろうけど、“あの人”つての

が旦那だと想像すると、〃あのお方〃ってのが今の彼氏か、肉体関係にある相手ってことだろう？ しかも言い方からして、自分よりも上の立場の相手ってことだろうし……マジか!? 隣の未亡人、とんでもなく爛れた関係ってやつじゃないか!!

「さすがに、行為を開始してからもよそ見をされるとは思わなかったぞ……」

「あ……」

「確かに、私は桃香さまたちに比べて、可愛げも女らしさもないかもしれない……しかしな、そんな私でも、矜持というモノはあるのだ。

覚悟しろよ♡」

怒気を含んだ笑みでそう言うと、焰耶は俺のチンコを柔らかかなエロケツではさみ、そのままゆっくり上下に振るようにゆすつてきた。

「おほおほ!!」

「朱里たちにこっちも攻められているのだろう?」

焰耶はエロケツを揺すりながら、体を反らし、手を後ろに回して俺の乳首を指先で転がし始めた。

「うひいっ!! あひやああああ!!」

すっかりと、性感帯の一つにされてしまった乳首を攻められて、俺は絶叫した。さらに尻コキをしているエロケツの動きもより速く、色っぽくなってきた。

「どうだ? もう、声なんて聴いている余裕はないだろう? 私に集

中しろ♡」

「あひやああ!!」

焰耶の乳首責め&尻コキは、凄かった。俺の乳首を弄るために体を反らしているから、焰耶のオツパイは上向き突き出され、尻コキの動きに合わせてプルプルと揺れる。鏡が置きっぱなしのままになっていいるから、様々な角度から揺れるおっぱいが見れた。

さらに目の前には、尻コキする白い綺麗なエロケツがゆれている。

そして俺は、その焰耶のエロケツの感触をチンコに感じるたびに興奮し射精してきそうになるのを必死にこらえていた。

「あ、あああああああ! ああああああ!!」

「そろそろイキそうだな♡ とどめだ♡」

焰耶がグリンツと、腰を振り、乳首を抓った瞬間、あまりの気持ちよさと焰耶のエロさを見せ付けられて射精してしまった。

「フフ、もう出したのか♡」

そう言うのと焰耶は、俺のチンコからエロケツを少し上げた。終わったと思っただ次の瞬間、腰が下ろされ、チンコは再びエロケツの下敷きとなった。ただ座りなおしただけだったらしい。

「まだまだイクぞ♡ 何回でも出させやるからな♡」

「ひっ、ひいいいいいい……あひやあああ!!! や、やめでえええっ!!!」

た……たすけてえ、ぶひひひひっ!!!!!! ま、また、また出るうううう!!!!!!」

俺は、焰耶の攻めで何度もイカされ、何度も射精して搾りとられた。

気が付くと、日が変わっていた。拘束は外されて、自分の身体にかりまくったモノも洗い落とされて服を着せられていた。

でも、あまりの疲労感と倦怠感に指一本動かすのも億劫だった。

俺が起きたことに気が付いた焰耶がこつちを覗き込んできた。当然と言うべきか、焰耶もちゃんと服を着ていた。

「起きたか、御館。そろそろ出なくてはならない時間だが、動けるか？」

「ムリ。指一本動かすのも、つていうかこうやってしゃべるのもだるくて仕方ない」

「フム、そうか、ならしょうがない」

そう言うのと、焰耶は、俺を背中に背負った。正直恥ずかしいけれど、今は動けないから、仕方がない。

焰耶に背負われて街を進んでいく。そんな時、ふと、視線に紫の長い髪の女が、背が高く体格がいい男に身体を預けている後姿が見えた。男は女と同じ髪の色の子供に肩車をしていた。仲のいい夫婦に見えた。色っぽい後姿の人妻に普段なら、食指が動くところだけ

ど、今は疲れ切っていて何かをする気になれず、それに焰耶がさつさと進んでいってしまい、見失ったのであきらめた。

この街に住んでいるのなら、そのうちまた会えるだろう。その時に必ずモノにすると心に誓った。

〈??〉

「紫苑さま、注意してくださいよ。もう少しで、あれに刃のことがバレるところでしたよ!」

「あら、そうだったの? それはごめんなさいね」

「まったく、気をつけてください」

「むう……次こそは、みいがあたりをひくのにや!」

「大王、頑張れえ」

「頑張るによ」

「頑張るにやん」

「……お前たちは当てなくていいのか?」

「誰かが当てれば、みんなと一緒に行くのにや」

「行くによ」

「行くにやん」

「なるほど、事前に共同戦線を張ってあるわけか……私も、桔梗さまに持ち掛けるべきか?」

「あら? それなら、わたくしも一緒に……」

「紫苑さまは、自重してください!」

五話

〈??〉

「じゃあ、みんな準備は良い？」

「……（コクン）」×15

「今回は、すでにあたりを楽しんだ人を除外してまず、当たりくじが入ったくじを引いて、その後、抜けていた愛紗ちゃんたちあたりだけ楽しんだ人とすでに外れをやった人を入れ替えて外れくじが入ったくじを引くよ。麗羽さんたちはどっちにも参加しなくていいからね。」

それと、前も言っただけだけど、あたりを引いた人を襲っちゃだめだからね！」

（だから（ry））×22

「みんな、小刀隠すだけじゃなくて暗器まで出してくるので、もう、全部脱いできてね。あ、帽子とか髪留めとかもダメだからね」

「は〜い」×22

全員が指定された部屋に武器を置き、服も全て脱ぎ、帽子等の装飾品も外して、全裸で戻ってくると、指示通りにくじを握った。

「それじゃあ、いくよ?」

「せえ〜の!」×16

「おお! あたりだじよ」

「っ!」×12

次の瞬間、全員が座っていた椅子を手に襲い掛かろうとしたが、無邪気に喜ぶネコミミ幼女たちに毒気を抜かれ、見送るのだった。

〈美以side〉

みいは寝台の上に向かって、刃の服を脱がす。

みいの手で刃が段々裸になっていく。それに合わせて、みいのドキドキも強くなってきて、我慢できずに刃のおつきな体に、みいの体をスリスリと擦りつけてみいの匂いを刃に付ける。

この日の為に紫苑が、みいたちの服を選んでくれたけど、刃に似合っているか聞くのももつたいなくて、一生懸命身体を擦り付ける。大好きな刃には、やっぱりみいのだっていう印をつけておかないと満足できない。刃の体中にみいの匂いを付けてから、刃に抱き着くと、刃もみいを抱きしめてくれた。

「ふにやあ、みいは、刃に抱っこされるの大好きだよ♥」
「そうか」

刃の体に擦れてみいのおっぱいのさきっぱがピンピンに尖って、オマンコがジンジンしてきた。

刃の服を全部脱がして少し硬くなったチンポのさきっぱをちゅつと、口を当てる。

みいたちをいっぱい気持ちよくしてくれて、これから、みいの中をいっぱいいっぱいズンズンして気持ちよくしてくれるチンポをいっぱい舐める。

いっぱいちゅうしたり、裏の筋にそって舌をれろおって這わせたり、タマタマの裏側も舐める。

「ちゅっ、ちゅぶぶ……んふん、んふん……れろろ……はふう♥ うぶぶ、ちゅば♥」

段々硬くなって熱くなっていくチンポをみいは、おつきく口を開けて刃のチンポを入れていく。歯を当てないようにしながら、唇と舌と喉でいっぱいチンポに気持ちよくなってもらえるように頑張る。

頑張っていると、刃が頭を撫でてくれる。みいはうれしくなって、刃の腰をしっかりとつかんで喉奥深くまでチンポを咥える。

「うぐ、うぐうう……じゅぼぼ、じゅぶう♥ う、うぐぐ……おぶっ、おぶぶぶっ、じゅばじゅぼ♥」

「そろそろ出すぞっ」

刃がそう言ってみいをはがそうとするけど、もつとがちり手に力を込めて離れないようにすると、刃は、みいをはがそうとするのをやめてそのまま、あの熱いのを出した。

喉奥で熱いを感じながら、みいはそのまま、飲み込んでいく。

「んむっ、んぐぐ……ゴキユゴキユ……うううん♥ んんん……」

うっ、うううっ、ゴキユ♥」

おなかの中に流れ込んでいく感じに、みいの頭はふわふわしてくる。

いつの間にか緩めていた手をはがして、刃はみいの口からチンポを引きずり出した。

まだまだビンビンのチンポを見せられながら、みいは刃の手で寝台に寝かされた。

みいは服の裾をめくって、オマンコを出して両足を抱えて大きく開いた。

「刃ンン♥ 早く、みいのオマンコに、刃のチンポがほしいじょお♥」

刃も寝台の上へのぼって、みいのビショビショのオマンコにチンポを当てた。

オマンコの入り口をチンポの先が入る場所を探すみたいに擦ってくる。でも、みいは知っている。これは、刃がみに意地悪している。いつも、悪戯したり意地悪するのはみいたちで刃は怒る方だけど、交尾の時は刃が意地悪する方になる。

「にゃあ♥ 刃、早く早くう♥ みいのオマンコ、刃のチンポでジユポジユポしてエ♥」

刃のいじわるに我慢できなくなってみいは、お願いする。

刃は薄く笑ったかと思うと、腰を引いてみいのオマンコからチンポを離れた。

「ああッ!?!」

みいが何か悪いことしたのか？ こんなところで、やめるなんてひどい。そう、叫ぼうとした時、刃のチンポが、みいのオマンコに深く突っ込まれた。

「んにゃあああああああああああああああああああああああ
あッ♥♥♥♥♥」

一番奥に刃のチンポが押し付けられたとき、みいは、あっというまにイっちゃった。

でも、刃はそのまま、腰を動かし始めた。

「はひひひひ♥ んにゃおおっ、チンポ、ズポズポってえ、んひひひ

いい♡♡♡」

ずりずりつてチンポがオマンコを擦すつて、みいは声をあげる。

「にやああつ♡す、すごいじよお……ごりごりつてえ……あううううん♡♡♡」

ゴツゴツしたチンポに擦られて、みいのオマンコからいつぱい汁が出て寝台におもらしたみたたく広がって恥ずかしい。でも、そんなことよりもっと気持ちよくなりたくて、必死に刃にしがみ付く。

「ああん、あふうん♡ふにやああ……すごい、すごい……あん、ああん♡ああああん……もうダメえ……刃、みい、もう、きもちよすぎるじよお♡」

急に、刃がみいをつくのを止めると、みいの体を持ち上げて、うつぶせにして、お尻を陣に突き出すような格好にされた。

体勢を変えると、刃はまた、みいをチンポで突き始める。

「あつ、ああああつ♡ああん……す、すごいじよ……刃のチンポ、刃との交尾い……あうん、ふあん♡きもちよすぎい、あああんつ♡♡」

やっぱり、交尾はこの格好が最高にきもちいい。

「あううん♡にやふつ、あきゆう……すごい、すごいすぎるじよお……きやひいいいいん♡♡♡」

寝台に手を着いて、刃に突き崩されないように必死に踏ん張りながら、みいは髪を振って悶える。

刃は、突くだけじゃなくて、奥をグリグリしたり、浅いところを擦つたりしてみいのオマンコをいじめる。

「はにやああつ♡♡♡そこ、そこそこお……そこスゴイ、スゴイじよお♡」

みいの一番弱いところを擦ったと思ったら、そこを離れて、別の場所を擦ったり、刃の交尾はとつても意地悪で、でも、とつても気持ちいい。

みいの腰を掴んでた刃の手が、みいのお豆さんを触って、押すように擦ってくる。

「にやひいいいいいいいい♡♡♡あああつ、もつと、もつとお……

みたい、目で合図を送ると、トラも目で返事をした。

みいとトラは、にいの腕から舌を放してゆつくりと、舌を這わせる。

「れえろお……んちゅつ、じゅるるるる♡」

「あひい……」

にいのおっぱいにたどり着いたみいたちは、そのまま吸うとにいはビクンビクン震えて、チンチンの先っぱから透明な汁がビュクビュクつと出た。

シヤムの方を見ると、シヤムと目が合った。

『あああん♡ あつ、あああ……ミケ、も、もうイキそう……ンあああ♡♡♡♡♡ イク、イクううううううううううう♡♡♡♡♡』

隣からミケの発情した声が聞こえるけど、にいには聞こえていないみたい。

さつき、刃にいつぱいもらったのに、また、欲しくなってくる。トラとシヤムもミケの声で発情してきてる。

シヤムにうなずくと、シヤムもうなずいてにいの股から顔を放して、太ももの内側を撫でながら、大きく息を吸って顔をチンチンに近づけた。

それに合わせて、みいとトラはにいのおっぱいを啜えた。

『あひいいい♡ まつ、またつ、またイクつ、イキそうっ♡ イ、イ、イ、イク、によおおおおおおおおお♡♡♡♡♡』

「じゅるるるるるるる♡」

「はあ〜」

「お、おあああああつー!」

みいとトラが一緒におっぱいを吸って、シヤムがにいのチンチンを包むように息を吐きかけると、にいのチンチンは、さつきよりも震えて白いのをピュツピュツって発射した。

みいたちがにいの身体を手でなでなでしてあげていると、メスの匂いをさせたミケが戻ってきたトラと場所を交代して、トラが部屋を出ていく。

ミケがにいの頭におっぱいを押し付けると、ミケの発情した匂いで

シヤムが座つてた場所は、ビシヨビシヨだった。

にいの右にいるミケが、にいの頭の後から手を回してにいの左目を抑えて、にいの左にいるトラが、同じように手を回してにいの右目を抑えて、一緒ににいの頭に息を吹きかけると、にいのチンチンがおつきなつてきて、みいもタマタマをモミモミすると、すぐにチンチンから透明なのがダラダラ出てきたけど、まだ、柔らかくてまだ、ピンピンじゃない。

「ちゅっ、れろれろ……れろろっ、ちゅっ、れろれろ♡　ちゅばちゅば……れえろお♡」

「んああああ……」

にいの体が、ビクンビクン震えるけど、チンチンはふにやふにやのまま透明なのをダラダラ出してる。

『んにやあああん♡　んん、にやふっ♡　んああっ♡』

ずっと、ミケとトラがにいの耳をペロペロしたり、みいがタマタマモミモミしたりしたけど、にいのチンチンは透明なのダラダラ出すだけでおつきくならなかった。

にいは、だらしな顔でどっか向いてる。

「にいはしょうがないじよ♡」

「しょうがないによ♡」

「しょうがないにや♡」

ミケとトラに合図すると、にいを寝かせて、その右と左にミケとトラがくつついて耳に顔を近づける。

みいもにいの上に跨る。あ、チンチンの上じゃなくて、おなかの上に。にいのフニヤチンの上に跨るなんておいしいご飯もらっても嫌だ。

みいは、にいに跨つて、にいの頭を掴む。だらしな顔してどっか

毎度思うんだけど、何なんだろう。この南蛮の儀式。

柔らかな体の感触は、嫌ではないけれど、これをされている時、俺と接触した相手への敵意のようなものを感じる。

ミケは一通り俺に身体を擦り付けると、改めて俺に抱き着いてキスをした。はじめは唇同士が重なり合うキスからスタートして、どちらからということもなく、互いに舌を絡ませ合う。

「はあんっ ♥ んちゅ……ちゅ、ちゅばっ、あはあ……」

たぶん、南蛮の中で一番キスが好きなのは、この娘だろうな。息する時間も惜しいと言わんばかりに激しく俺の口をむさぼってくる。

「あん……んちゅ、ちゅう……ぴちゃ、もっど、ちゅう ♥ ちゅ、ちゅばっ、ちゅ、れろっ ♥」

やられてばかりなのも癪なので、舌でミケの舌を押し返し、そのままミケの口内へ侵略していく。舌で、ミケの舌を、歯を、口内を犯していく。舌と舌とを絡ませられ、唾液を交換する。

「んちゅ、んはあ ♥ 刃しやまとのちゅうはきもちよすぎるによ」

口を放しと、ミケは、名残惜しそうに吐息を漏らして、俺との間にできた唾液の橋を見つめる。そんなミケを寝台に転がし、胸へと手を伸ばしてなだらかな胸を揉む。

かすかな膨らみを揉み、自己主張する乳首を指先で転がすと、ミケの口から喘ぎ声が漏れる。

「あん……ひゃあああん、はひっ ♥」

ミケの乳首に口をあてがい、吸い付く。

乳房が俺の手の平に揉まれ、舌で乳首を転がし、歯で甘噛みして刺激する。

「ひいひい ♥ 刃しやまにオツパイ食べられちゃうによ ♥ あはああ

……ああああ、食べられちゃうによ ♥」

ミケは、俺の頭を掻き抱き、愛撫を受け入れる。悶えていたミケの足が、俺のイチモツをとらえた。

「ッー」

「あはああ……刃しやまにしてもらってばっかりじゃいやだによ……ミケも、刃しやまに気持ちよくなってもらいたいによ ♥ はひっ、あ

ううううっ、エイエイ♥ くうん、あん、ひああああああっ♥♥♥
小さな足が、不器用に俺のイチモツを擦つてくる。そんな健気な姿に俺もミケへの愛撫に一層力がこもる。

「はああああ……はひい……ダメえ……ぐ、ぐ奉仕できないによ……はふん♥ あああんっ♥」

息継ぎの為に口を放すと、ミケは、俺の胸をグイグイ押ししてくる。普通になんてことないが、今日はおとなしく押されて、仰向けに寝そべると、俺の上にミケが乗り、そのまま、俺の乳首を舌で舐め、反対の乳首を指で弄ってきた。その間も、ミケの足が俺のイチモツを擦りたててきていた。

「んちゅっ、ぴちや……閃しやま、気持ちイイ？ ん、れる……ちゅ、ちゅぱちゅぱ♥」

「ああ、気持ちいいぞ」

ミケの唾液が塗られ、舌先で俺の乳首が円を描くように転がされ、イチモツの上を足が往復する。股間と乳首からの甘い快感が俺を満たしていく。

「んちゅっ、ちゅむう……、ちゅっ、ちゅうう……ちゅぽっ♥ そろそろ、ミケの中に入れるによ♥」

そう言っつてミケは、俺のイチモツを手にとつと、上に跨つて自身のマンコにペニスの先をあてがい、擦り付ける。

「んっ、う、ああああ……入ってくるう……ふ、太いによ……あっ、あっ、あひい……あひ、あひん……によああああ♥♥♥」

ミケは跨つたイチモツに腰を落として、俺のを飲み込んでいく。

「う、動くによ……刃しやま、ミケで気持ちよくなつて♥ んっ、んああっ♥ あああっ、あぐぐ……あっ、あひい♥ あっ、あああんっ♥」

ミケの腰が前後に動き、喘ぎ声を響かせる。

「にようううっ♥♥♥ あっ、あひい……あっ、あああっ、コスれるによおっ♥ 刃しやまも気持ちいい？ あうっ、うああああ♥」

ミケは快感で言葉を詰まらせながらも、俺に笑みを浮かべ、腰を動かして奉仕する。

に身体をこすりつけ始めた。

やっぱりやるんだなあ。

「匂いだけでふわふわするにやあ♥」

自分でスカートの中に手を入れて弄り始めたトラを寝台に転がし、体におおいかぶさるようにして、右手をスカートの中にいれて、下着の上からマンコを撫で上げた。

「はにやあ♥」

トラは、ため息を掃くように喘ぎ声を漏らした。

「もう、濡れてるぞ」

「刃さまの匂い嗅いだら、おまたジンジンして、刃さまのチンポ早く入れてほしくてたまらなくなっただのにや♥」

トラの胸を触ると、乳首が硬くどがっていた。そこを中心に擦る。

「ん……あううん♥ あっ、あひあああ……ダ、ダメ……にやううつ、あふ、ひいん♥」

薄い服の上から乳首とマンコを一緒に撫でられて、トラが声をあげる。

愛撫を続けたまま、振れていなかった乳首に舌を這わせた。

「ぎやうううん♥♥♥ 刃さまあ……」

トラが、切なげな声で俺を呼び、気持ちよさげに、身体をよじる。

俺は、乳首を口にくわえて吸い上げた。それと同時に、もう片方の乳首を擦り上げ、マンコを指で突くのを忘れない。

「あああっ、あひっ、ふにやああああ♥♥♥ もう……もうう……んあああああああああッ♥♥♥♥♥」

トラが体を仰け反って絶頂に達した。

体を震わせ、ぐったりとしたトラの乳首とマンコから手と口を放して、荒い呼吸が落ち着くまで髪を撫でる。

しばらくそうしていると、呼吸の落ち着いたトラは、切なげに俺の方を見てきた。その顔は、赤く染まり、容姿とは不釣り合いな色つばいしぐさで唇を舌で舐め、目は潤み、欲情を抑えきれない様子だった。

「刃さまあ……お、お願いにやあ♥ もう我慢できないにや……」

トラは甘えるような声で俺に訴えかけてくる。

焦らされた後の快感に、トラのマンコが、イチモツを締め付ける。
「んああつ、んぐうう……んああつ、ああん♥ にやああんつ♥ ああつ、いいのお……あふああああ♥♥♥」

そして、トラの声を聴きながら、腰を激しく前後させる。

「チンポ、チンポつ、きもちイイ♥ あつ、ああああ……あはつ、あひい、すごおい……あつ、にやあああつ♥ はつ、はふうん……ウ、ウソ……こんなにや、カンジすぎ……あつ、あああつ♥ あひい、すぎ、にやあああああつ♥♥♥」

あらぬことを喚きながら、トラは首を左右に振った。

火傷しそうなほどに熱くなっているトラの秘肉が、俺のイチモツを締め付ける。

まるで、俺を離すまいとしているかのような力だった。

「あああん♥ 刃さまあ、いい……あ、あひいい……あはあああつ♥♥♥ もう、もう♥」

潤んだ瞳で俺を見つめながら叫ぶ。

「やあああん……そ、それ、いい……あつ、あううんつ♥ はひいい……」

俺は、腰を回すようにして、トラの膣内を掻き回すとトラは、自分からも腰を振る。

「あああああ……イ、イイ……刃さまのイジワル……あはつ、はあああんつ、にやはあああん♥」

「意地悪されるのは、いやか？」

「ひううつ♥ 刃さまにされる意地悪は好きいつ♥」

「意地悪されるのが好きだなんて、トラは変態だな」

「んああつ、へ、変態でいいから……あつ、あううう……あああ、もつと、もつと気持ちよくしてえ♥」

トラが、脚まで使つて、俺にしがみ付いて、より深い結合をねだる。

俺は、奥の奥までイチモツを繰り出した。

「にやあああああつ♥♥♥ あつ、あううう♥ あん、ああんつ、き、気持ちよすぎてえ……んあああつ♥ おかしくにやるう♥」

俺は、さらに腰の動きを加速させた。

「あああああああ♥♥♥ ダメ、ダメダメえええええ♥ す、すごい…あひいいい♥ イッ、イクッ、イクイクうつ♥♥♥ 刃さまのチンポがすごい…ああああ♥ イクイクうつ、にやあああ♥♥ イクうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつ♥♥♥」

叫びが部屋に響き、ただでさえ狭い膣内がイチモツを食い千切らるばかりに締めあげる。

俺は、最深部に亀頭を押し付けながら、欲望を解放した。

「あああああああ♥♥♥ 熱いッ、熱いいいいいいい♥♥♥ にやふうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつ♥♥♥」

半ば声を嗄らしながら、トラが絶叫する。

俺は、背中を反り返らせて悶えるトラの体内に、さらに精を注ぎ込んだ。

トラが、体を痙攣させる。俺は、トラの唇にキスすると、トラはネコが甘えるように身体を擦り付けた。

疲れてふらつきながら出ていくトラを見送り、身体を清めて部屋を喚起しながらゆっくりしていると、眠気でふらつきながらシャムが入ってきた。

シャムはそのまま、俺の隣に座ると、俺の膝に頭を乗せて寝息を立て始めた。

美以、ミケ、トラと段々と露出を上げていたため、今度はどうなるのかと思ったが、シャムの格好が、一番露出が少なかった。

だから残念…とは言わないが、さらに露出が上がったらどうなるのか気にならないかと言えば、気になる。

5分にも満たない時間、シャムは何度も頭の位置を変える。普段な

ら、こんなことせずには大人しく寝たままになるのに、珍しい。

そんなことを思っていると、シヤムは目を開いた。

「刃しやま、くやん」

マジか。

恋と並ぶ蜀のお昼寝幼女は、俺の匂いで寝れないらしい。娘に拒否られる父親の気持ちとはこんな感じなんだろうか？

まだ、加齢臭が出るような歳じゃないはずなんだが……

「刃しやまの匂い、大王しやまたちの匂いと一緒になってくさいの」

どうやら、俺が臭いと言うよりも、美以たちとしたせいで匂いが混ざり、俗にいう複合臭ってやつのようなようだ。

セーフ

どうやらまだ、俺自身は拒絶されるような臭いはさせてないらしい。

だが、シヤムが来る前に身体はしっかりと拭いたし、部屋だって換気して消臭したんだけどなあ……

さすが、南蛮の野生児、嗅覚まで獣じみてる。

シヤムは、俺の体に手を回して、美以たちと同じように身体を擦りきつけてくる。

「匂いの上書きにゃん」

これ、本当にマーキングだったんだな。

好きにさせていると、シヤムは俺膝の上に跨り、向かい合った。

眠たげな雰囲気は成りを潜めて、目を潤ませ舌で唇を舐めている姿は幼いながらも妖艶だった。

小柄なのでまったく重さを感じない。

俺の膝の上に乗ったシヤムは俺の手を取ると、服の上から小さく膨れた乳房に押し付けた。

猪々子のような成長しきった貧乳ではなく、成長途上のこれからの未来がある貧乳。

シヤムの乳首は、すでに勃起していた。

とりあえず、シヤムの身体に抱きしめる。小柄で華奢な体軀を抱きしめ、顔を乳房の間に埋める。といっても、埋めるほど乳肉はないけ

ど、温かな体温とかすかな柔らかさを楽しむ。
顔を動かせば、かすかな感触も頬に当たる。

「んにゃんっ♡」

おもむろに服の上から乳首を両手で摘まんだ。硬くなった乳首はやはり敏感なようで、軽く摘まんでこねているだけだというのに、身体を震わせている。

強く乳首を押しつぶすようにすると、シヤムの身体が跳ねる。

「んっ、いいっ、いい……ああん、刃しやまの指、き、きもちいいイ……あ、あああ、ああああああ♡♡♡♡」

シヤムの首を反らして天を見上げるように顔を上げ、身体を震えさせた。絶頂したようだ。

「こんなすぐにイクなんて、シヤムは助平だな」

「だ、大王しやまや、トラとミケが発情した匂いぶんぶんさせてたから……シヤ、シヤムも発情してたにゃん、はひっ、はう、ひにゃああんっ♡」

腕を伸ばして、言い訳するシヤムのマンコを弄る。シヤムの穿くタイツは、股間部分に穴の開いたエロ目的の品のようで、俺の手は、何の邪魔も受けることなく、マンコにたどり着いた。

揉むようにマンコを弄ると、蛇口を捻ったみたいに手を愛液が濡らす。

こんなに濡れていれば、もう、イチモツを受け入れることもできるだろう。でも、もう少し、シヤムを弄っていたいなとも思う。

「刃しやま、刃しやまあ♡」

「ん?」

「んああっ♡ シヤムのオマンコにはふうん、刃しやまのオチンポほしい♡」

マンコを弄られながら、シヤムがおねだりしてくる。

もう今すぐにでも入れていいと思うのだが、少し工夫してみよう。

「お前から入れてくれ」

俺の言葉に、キョトンとした顔になった。普段、受けしかしないシヤムは、俺とイチモツを見比べてから、戸惑いがちに、両手でスカー

トをめくり、自分で身体を浮かせてイチモツを秘部にあてがい、腰を下ろすも、上手く入らず、イチモツは入り口を滑り、クリトリスを擦るだけだった。

「んにゃあああん♥ んん、にゃふっ♥ んああっ♥」

何度も腰を上げて、イチモツをマンコで飲み込もうとするが、上手くいかずにイチモツは、素股でもするように擦れるだけだった。

これだけでも気持ちいいが、満足感が得られない。それは、シヤムも同じようで、一生懸命腰を振るが、素股奉仕されているような感じだ。しまいには、いつもトロンとした目に涙をためてこちらを見てくる。

「刃しやまあ、オチンポ、シヤムのオマンコに入ってくれない……」

「みんながいれるときにどういう風にしていたか、思い出してみろ」

シヤムは、少し考えてから、片手でイチモツを握り自分のマンコに押し当て、腰を下ろしていく。

「こうやって……あああっ、入ってっ、入ってくるっ♥ にゃあああん

♥ いいいい……あううっ、ま、まだ入ってくるう……んひいい♥

♥ 刃しやまのオチンポお、あっ、あふう……はあああん……すごい

いい……奥まできてるう……」

ゆっくりとおれのイチモツがシヤムの膣内に収まっていく。

閉じていた秘裂がこじ開けて侵入していく様は、非常に興奮させられるものだった。火傷してしまいそうなほどの熱い膣内が俺を迎え入れる。

シヤムの張りのある尻が、俺の身体に着いた。

「よく頑張ったな」

「ふにゃあん♥」

小ぶりの尻を撫でまわしながら、シヤムを褒めてやると甘えた声をあげた。

「シヤム、入れて終わりじゃないだろう?」

そう言うときシヤムは、拙いながらも、自分で腰を上下に振り始める。張りのある尻肉が、俺の身体に当たっていたと思えば跳ね上がる。

「あっ、あああっ♥ はうん、あああん、あひい……」

俺も我慢することなく、シヤムの太ももを掴んで、男根を最奥まで突っ込んで射精した。

大量の吐き出された精液を、シヤムの小さな身体の中に注ぎ込んだ。

反り返って震えていたシヤムは、長い射精を受け止めきると、俺に身体を預けて荒い呼吸を繰り返す。

そして、その呼吸が落ち着いてくると、そのまま、寝息に移行していった。

どうやら、俺は彼女が寝られる匂いに染まったらしい。

一息ついていると、美以たちが乱入してきた。

???

「……ってかんに、にいからたつぷり搾り取ってやったじよ！」

「やったにゃん」

「やったにゃ！」

「やったによ！」

「はわわ、凄すぎですう」

「あわわ、私たちじやとてもそこまでできません」

「なるほど、御主人を見かけなかったのは、それでなのですか。でも、まあ、アレはいなくても仕事に支障は全くないので、問題なしなのですー！」

「本当のことでも、そんなこと言っちゃダメ」

六話

今回のコスプレはフェイトの女海賊コンビです。

???

「じゃあ、みんな準備は良い?」

「……(コクン)」×11

「今回は、すでに当たりを楽しんだ人を除外してまず、当たりくじが入ったくじを引いて、その後、抜けていた愛紗ちゃんたちあたりだけ楽しんだ人とすでに外れをやった人を入れ替えて外れくじが入ったくじを引くよ。麗羽さんたちと美以ちゃんたちはどっちにも参加しなくていいからね。」

それと、前も言ったけれど、当たりを引いた人を襲っちゃだめだからね!」

(だから (ry)) ×22

「みんな、小刀隠すだけじゃなくて暗器まで出してくるので、もう、全部脱いできてね。あ、帽子とか髪留めとかもダメだからね」

「は〜い」 ×22

全員が指定された部屋に武器を置き、服も全て脱ぎ、帽子等の装飾品も外して、全裸で戻り、椅子や机の撤去された部屋で、指示通りにくじを握った。

「それじゃあ、いくよ?」

「せえ〜の!」 ×12

「あ、当たり!」

「っ!」 ×10

次の瞬間、全員が、手に持っていたくじで襲い掛かり、返り討ちにあった。

〈恋side〉

くじで恋が、あたりを引いて刃とできることになった。

ねねを誘って三人で宿に入って、すぐに刃とねねにお願いした。

二人のしているのを見せてほしいって。

ねねはいつも、恋に先を譲ってくれる。だから、刃とねねがしている姿をちやんと見たことがなかった。

ねねが凄く慌てて恋に先にするようになって言ってきたけど、もう一度お願いしたら、ねねは真っ赤になって了解した。

刃は困ったような顔をしていたけど、何も言わなかった。

「うう、恋殿お、あんまりじろじろ見られると、恥ずかしいのですが、恋殿のお願いなので、お見せします。それでは……」

「ああ、しようか」

刃がうなずくと、ねねの小さな右手が、刃のオチンポを握った。

「あ、あつい……」

ねねが、どこか酔ったみたいな顔で、手の中のオチンポの感触を確かめる。

それから、ねねは、ゆっくりとオチンポを握った右手を上下に動かし始めた。

ねねの手の中で、刃のオチンポが段々大きくなっていく。

ねねは、その小さな手では握りきれないほど大きくなった刃のオチンポを、さらに扱いた。

「はあ、はあ……オチンポ……んく……すぐくあつくて、かたくて……んふ、はふうん♥」

刃のオチンポから、透明な汗が出てきてニチュニチュって、ねねの手と刃のオチンポを汚す。

「う、うぐ……匂い、どんどん強くなってる……はあ♥ オチンポお……んふう♥」

ねねは、鼻を刃のオチンポに触れそうなくらい近付けて匂いを嗅いでいる。

「スンスン♥ はあ……はあはあ……すごい匂い♥」

息を荒くしてねねは眩きを続けながら、手の動きをさらに激しくしていく。

「ねね、気持ちイイぞ」

「ハアハア……フフ、これからもっと気持ちよくしますぞ♥」

刃の声に満足げな笑みを浮かべて、ねねは自分の口にオチンポの先端を押し当てた。

そして、頭をゆっくりと沈ませて口の中にオチンポを入れていく。

「ちゅ、んちゅ、ちゅう♥ はふう……ちゅ、ちゅぶ……ちゅぶぶ、んちゅう♥」

刃の大きなオチンポを、ねねは小さな口でしごく。

「んちゅっ、ちゅばっ♥ ちゅちゅう……んはあ……オチンポがねねの口の中でまたおつきくう……ちゅぶちゅぶっ、ちゅうう……んちゅ、ちゅばっ♥」

そんなことを言いながら、ねねは、小さなお尻をもじもじ動かしている。刃もそれに気が付いて、刃はねねの服をめくった。

ねねは下にご主人様の作ったぱんすとしか穿いていなかった。そんなねねのお尻を刃の手が揉む。

「んちゅ、ちゅむっ……はう、今はねねが気持ちよくする番ですぞお……ねねにオチンポ舐められてえ……オチンポ気持ちよくしてればいいのですう……ちゅばちゅば♥ ンああつ、あひい♥」

お尻を揉まれながらおしゃぶりするねねが、段々羨ましくなつて、口の中が乾いてくる。

刃の手が、ねねの声を無視してお尻を越えてオマンコまで移動した。

「はうっ、んく、ああう……あひっ、だ、ダメですう……いい、いい……気持ちいい……あああああつ♥♥♥」

くねくねとねねはお尻を振りながら、刃のオチンポをしゃぶる。

「ちゅう、はぶぶ……ちゅぶ、ちゅばば……こんなあ、恋殿に無様な姿を見せるわけにはあ……ちゅむむ♥ ふああ♥ ちゅぶぶぶ♥」

「ねね、一発目、出すぞっ」

刃が、ねねのオマンコを弄りながら、そう言った。

「んあああつ♥ちゅぶぶ……ちゅぢゅ、ぢゅぶぶ♥んぢゅうううう
ううううううつ♥♥♥♥♥」

「ツクー」

刃のアツいのを口で受け止めながら、ねねはイッた。

口から白いのを溢れさせながら、身体をビクンビクンさせている。それでも、ねねは刃のオチンポを放さないで、必死に飲んでいる。

「うんっ、う、うぐ……んく……ゴキユゴキユツ♥」

いつもなら、恋も一緒に飲むけど、今日は我慢する。

「んく、んく、んく……ふはあ……んく、けぷっ♥」

ねねが、刃のオチンポから口を放して小さなげつぶをした。

「ああああ……まだまだ、ビンビン♥す、すごい……」

ねねの口の中で出したはずの刃のオチンポは、大きのまま、反り返っていた。ご主人様なら、もうちっちゃくなってると思う。

「あ、あはあああ♥さつきよりおっきいのです……んぐ……やつぱりおっき過ぎ……んは、あううっ♥」

刃は、ねねを抱き上げて、自分の膝の上に乗せると、ねねの服の前を開けた。

開けられた服の中は、真っ白なねねの身体。

平らなおっぱいの先でピンと勃った桃色の乳首。

オマンコから助平な汁がいっぱい出て色が変わったグチヨグチヨのぱんすと。

刃の手がねねのちっちゃいおっぱいに伸びて揉む。

「大きすぎっ…誰と比べたんだ?」

「きゃうっ、い、いひいいい……ああああ……あん、あん、あああん♥」

ねねは、その手を受け入れて、自分でも刃の足にオマンコを擦り付けてる。

「ああああ……ち、乳首い……んひいいいいっ♥♥♥」

「ほら、誰のと比べて大きいんだ?」

ねねの腰は、物欲しげにクネクネと揺れる。

「言ってます、このままどうぞ」

「そ、そんなあ、んああああ……御主人なのですう……ふひひい
……御主人のチンチンよりこっちのチンポの方がおっきいのですう
♥」

刃の脅しに、こらえきれなくなったように、ねねが声を上げた。

「よく言えました」

刃が、ねねを抱き寄せて、ねねのおっぱいに舌を這わせる。

「きゃうん、あ、あはあ……あつ、あん……ああん♥ お、おっぱい
……んうううつ、あひいっ♥」

ねねは、刃の頭を抱きしめて自分のおっぱいをさらに押し付ける。

刃は、ねねの乳首を交互に吸いたてながら、手をねねのオマンコに
移動させる。

ぐつちよりに濡れたねねの割れ目を刃の指が擦る。

「あううつ、あ、あん……んああああ♥♥♥」

刃の指がねねのオマンコから離れて、ぱんすとを掴んでピリツと破
いてねねのオマンコを丸出しにした。

「あううん……い、いいい……あはつ、はひいっ♥ んひい……あ
あつ、ああん♥」

裸よりも助平な格好になったねねは、刃のオチンポに擦り付ける。

「んあつ、あひいん……あああ……んああ♥ ンン……ねねのオ
マンコにオチンポお、あう……」

ねねが、小さなお尻を上下に揺すって、刃のオチンポをオマンコで
啜え込もうとする。

「はあはあ……入らない……入らないのですう……んっ、んくう……
んはああ♥ おっきいオチンポ、ねねの中に突っ込んでほしいので
すう♥」

刃は黙ってうなずくと、ねねのオマンコにオチンポを入れていく。

「んああつ……オ、オチンポ、入ってくるう……巨大チンポお……んあ
あああ、あぐううううううっ♥♥♥」

ねねの小さいオマンコの中に、刃のオチンポが押し込まれてい
く。

恋は、ねねみたくに入れてもらった時のことを想像して、自分のオ

マンコをいつの間にか、自分の指で弄ってた。

「ひゃうううっ♥んはああああ……ねねの身体とろけちゃうのですう……んああ、いつもみたいにムチャクチャにしてくださいっ♥」

ねねの助平なおねだりを聞いて刃が、動き始める。

「うぐぐっ、うあ、あああっ……あひ、あひ、あひ、う、う、動きますう……オチンポ、ズボズボってえ……あ、あん、あひあああああっ♥♥♥」

刃は声を上げるねねを見つめながら、腰の動きを早くしていく。

「んぎっ、くひひひ……うあ、あん、あはあああ……苦しいけど、き、き、気持ちイイのですっ♥」

そう叫んで、ねねが、刃の体にしがみつく。

「んひひいっ♥あ、あひひひひひ♥♥♥来てますう、ゴンゴン来てますう……うあああああっ♥おなかの奥に、か、かたいの当たってえええ……お、おほおおっ♥んああああああ♥♥♥」

ねねが、いつものねねの声と全然違う、聞いている恋まで、助平な気持ちにさせる声を上げる。

オチンポをねねのオマンコの奥に押し込んで、ぐりぐりって腰を擦りつける。

「んああああ♥♥♥それ、それ気持ちよすぎますう♥あっ、あひいっ、んひひひ♥オ、オマンコ、かき回されてえええ……あううううっ♥あっ、あはああああああああ♥♥♥♥♥」

ねねの身体がビクビクん震えてる。いったみたい。でも、刃は動くのを止めない。

二人の繋がっているところから溢れた汗が寝台に染みを作って、広げていく。

「んあああっ、もっど、もっどお♥ねねのオマンコ、もっど犯してほしいのですうっ、うぐううっ♥あひひひひ……ひううううう♥♥♥」

刃とねねを見ていて、もう、恋は、手を止めることができなかつ

た。

「あん、あつ、ああつ、あん、はふうん♥ あはああああ♥」

「ねね、見ろ。恋が我慢がでなくなつて自分で慰めているぞ」

「んひっ♥ れ、恋殿お♥ そ、そんな、見てはいけないのですう、ねの助平顔みてはいけないのですう……んああああああ♥♥♥ オチンポ激しすぎい……ああああああ♥♥♥」

容赦のないオチンポの攻撃に、恋から顔を隠したねねは、声を上げ続ける。

刃も終わりが近づいてきたみたいで、段々早くなつていく。

「ああああん♥ も、もう、ねねはあ……ねねはあ♥ きひいいい……オチンポしゅごしゅぎでしゅう♥ ンあああああ……ら、らめえ♥ あひいいいいいい♥♥♥」

「うあつ、あはあ♥ ねね、ねねえ……あああ、んああああ♥」

ねねたちを見ながら、オマンコを弄るだけじゃ物足りなくなつて、おっぱいも自分でイジめる。

「あ、あふ、んふうっ♥ あつ、あつ、ああああんっ♥ んひ、んひいいいい♥ イクっ、イクうううッ♥ イク、イクイク、イツクううううううううううううううううううううううううううううううう♥♥♥♥♥♥♥♥」

ねねが体を反らして叫ぶ。

「ねね、ねねえ……んああああああああ♥♥♥♥♥♥♥♥」

刃のオチンポが脈打ってねねの中いっぱい出してる。

それを見ながら、恋もイっちゃった。

「んひいいいいいいいい♥ イクのとまらなひいいいいいい♥♥♥♥♥♥♥♥ は、はへ♥ あひいいいいいいいい♥ いっぐうう♥♥♥♥♥♥♥♥」

くたつとねねが、刃に身体を預けるように倒れた。

〈音々音side〉

ねねは、刃に優しく寝台に寝かされた。それを待っていた恋殿が刃に抱き着いたのです。

それから恋殿は、瞳を閉じて、刃のオチンポの先端に口付けをしたのです。

刃は、恋殿に奉仕させながら、恋殿の服に手を掛けて、辛うじて乳房を隠していた布地が外れて、恋殿のたわわな双乳を露出させました。

「ん、あぁっ♥」

「俺たちのを見て、興奮したのか？ もう、固くなってるぞ？」

刃は、恋殿の乳首を指で撫で回しながら、言ったのです。

「んんんん……刃も……ねねも、凄く気持ちよさそうだったから……我慢できなかった……ぁん♥」

そう言いながら、恋殿が、身体を震わせるのです。刃の勃起した恋殿の乳首を摘まみ、クリクリと弄び、上に引つ張る。恋殿は、されるがままになりながら、目を潤ませ、切なげに喘いでいるのです。

その様子を見ていたら、ねねもまざりたくなってきたのです。でも、いつも先を譲っても、結局は、ねねを呼んでくれて三人で一緒にするのに、今日の恋殿は、きつと、ねねが刃としている間、まざりたかったのに、我慢してくれていたのですから、ねねも我慢するのです。ねねがそんな葛藤をしている間に、恋殿は、目の前にそそり立つ刃のオチンポを胸の谷間に挟んで、たわわな乳房の狭間からのぞく赤黒い先っぽに、柔らかな唇を被せてしまったのです。

「あむ、ちゅぷ……んっ、んぶ、ちゅぶぶっ♥ んむ、ちゅっ、ちゅぷ、ちゅむむ、んふう♥」

恋殿は、上半身全体を上下に揺らしながら、おっぱいでオチンポを扱いて、舌と唇でオチンポの先っぽを刺激しているのです。

刃が恋殿の頭をなでると、恋殿は、気持ちよさそうに目を細めて、さらに熱のこもった奉仕を続けられています。

「んむっ、んちゅう……あふう♥ ちゅっ、ちゅぶっ、ちゅぶぶ♥

ちゅちゅう……れろっ、んふう……」

恋殿の口元から、くぐもった喘ぎとともに、オチンポをすすする卑猥な音が響くのです。

そして、恋殿の口からあふれた涎が刃のオチンポを伝って恋殿のおっぱいを濡らし、パイズリの動きをより滑らかにしていくのです。

「んふう、んはああ……ちゅっ、ちゅぶぶっ、じゅる、じゅぶぶっ♥
ハアハア……あむっ、ちゅっ、ちゅば、ちゅぢゅう……んちゅっ、ちゅう……」

顔を上気させながら、恋殿が情熱的な奉仕を続けていくのです。

固く勃起したオチンポに左右のおっぱいを強く寄せながら、恋殿が、亀頭を激しく吸引するのです。

その表情は、見たことがないほどとろけて、手はまるで快樂を貪ろうとするように、自らの乳房を揉みくちやにしていたのです。

「んちゅっ、へはあ……ちゅぱっ、ちゅぱっ、ちゅぶ、ちゅぶぶぶ……
ちゅぼっ、ちゅぼぼっ、ちゅう……ちゅむ、ちゅむうううっ♥ん
ちゅう……ちゅ、ちゅずずずうっ♥♥♥」

「くっ、出すぞっ」

刃は、そう言うのと恋殿の口からオチンポを出して、恋殿の顔に浴びせかけたのです。

恋殿は、額から胸元に至るまで、刃のでドロドロになった。いつもなら、ねねが、それを舐めとるのですが、今日はそれぞれ別々にする約束なので、ねねは恋殿を舐めたい衝動を、ぐっと抑えます。

「あっ、あはあ……あああ……んっ、んぐう……れる、ゴクン、ングン
グ……ゴキユツ♥」

下品なほどに喉を鳴らして恋殿が、顔についたモノを指で掬い取り、舐め取り、口へ入れて嚙下する。

「んっ……はあはあ……んく、はふう♥」

我慢できなくなって、ねねも、自分のオマンコからあふれるモノを掬い取って舐めてしまいました。

刃は、恋殿の手を引いて自分の膝の上に座らせて、右手で恋殿を支えながら、左手で恋殿のおっぱいをまさぐっているのです。

「あうう……あん♥ ひゃあん……」

刃は、恋殿の乳房をいじり、指で乳首の周辺を円を描くように撫で回す。

「んむっ、んあああ……あ、はうっ♥ ああ、ダメ……」

恋殿もされてばかりではなく、弓なりに反り返るほど固く強ばった刃のオチンポを握り、右手を上下に動かしシコシコ抜き始めたのです。

刃は、恋殿の手淫の快感にさらにオチンポを膨らませながら、恋殿のおっぱいを弄び、そのままどちらともなく、段々顔が近づいて行って濃厚なちゅうに移行していったのです。

「ちゅっ、ちゅぶぶ、んはあっ♥ はひい……んんっ、ちゅっ、はふ……あううううっ♥」

固いオチンポを抜く恋殿は、その瞳を情欲に潤ませているのです。

先っぽから漏れ出た汁がオチンポ全体を淫靡に濡らし、恋殿の手指を汚していく。

「はああ……あはあ♥ あっ、あううっ、んあああ……んっ、あううううっ♥」

刃は、オチンポを抜き続ける恋殿の体をまさぐり、甘い喘ぎ声を上げさせる。指で乳首をつつくと、恋殿は、体を震わせたのです。刃の指は、そのまま、下に進んで、恋殿の下の服の中へと入っていった。

「んああっ♥ やっ、やああ……うあっ、あああああっ♥ あっ、あひあっ♥ あん、ああんっ♥」

きつと、恋殿は、今、ねねがしているみたいに刃にオマンコを弄られているのです。

「あ、あああ……あああんっ♥ はあああっ、あひああん♥♥♥」

刃は、恋殿の助平な汁で濡れた指先を乳首に当て、クリクリと動かすのです。

「あううっ、あはあ……やあ……やああん♥ あっ、あああん、あふうん……」

すでに恋殿の体は、快楽を受け入れる準備ができていたのか、恋殿は、悩ましく喘ぐのです。

ビクンつと恋殿の体が痙攣するのです。刃は、そのまま激しく腰を使い始めたのです。

「いつ、いひいいつ♡んあああつ、あひい……ああああ♡ああんつ、あうううつ♡だ、だめ、だめええ、オチンポだめえ……んあああつ♡あひううううつ♡ひああああああああ♡♡♡♡♡♡♡♡」

恋殿の体がビクビクと震える。恋殿がイっているのです。でも、刃の攻めは止まらないのです。

「あうううつ、イ、イイつ♡ん、んああああ……あひいいい♡♡♡♡♡♡♡♡」

「ああ、恋殿、恋殿お♡」
ブルンブルン揺れる恋殿のおっぱい。

快楽に潤んだ色っぽい恋殿の瞳。
グチヨグチヨと卑猥な湿った音。

全てがねねの興奮をますます煽り、オマンコを弄る手が止められないのです。

「ひうつ、うつ、うぐぐつ……んあああつ♡あうつ、あひいいいい……ひつ、ひやああんつ♡んひいひいひいひいひいひいひいひい♡♡♡♡♡♡♡♡」

寝台の上で恋殿の体がのたうち、その肌はほんのりと桃色に上気しているのです。

刃が、さらに大きくオチンポを繰り出して、恋殿の中を蹂躞する。
「あぐつ、うつ、あああつ♡やああ……ダメつ、ダメえつ♡そこはダメええええ♡♡♡♡♡♡♡♡」

恋殿は、荒い呼吸を繰り返し、唇の端から涎を垂らしながら、身悶えているのです。

「出すぞっ！」
「あうううう……いつ、あああああ♡中、中にいつ♡あああん♡はへえええええ♡♡♡♡♡♡♡♡」

刃が、さらに乱暴に腰を突き出し、恋殿のオマンコをオチンポで挟む。

恋殿は刃に手足を回して、全力で抱き着いたのです。そんなことを

愛撫は、もう、すごいレベルだし、本番行ってもいいだろう？

その為に誘ったら、二人にいい場所があると、宿に連れてこられた。促されるままに部屋に入り、椅子に座ると、あつというまに手足を拘束された。

この世界の宿には、人の身体を拘束するものが常備されているのか!?

「ご主人様、今日はどっちにしますか？」

「いや、今日は二人と、最後までしようと思つてさ」

「ツ!？」

一瞬二人が止まった気がしたけど、朱里が顔を伏せ気味にして、スカートをめくった。

「はわわ、なら、お情けをいただく前のお遊びに」

「あわわ、どうでしゅか？」

雛里もこっちに背中を向けてケツを突き出して後ろ手でスカートをめくった。

二人の穿いていたのは、いつものお子様パンツじゃなくて、背伸びしたセクシーな感じのもので、ロリな外見とのミスマッチに思わず見入ってしまった。

「どちらにしますか？」

モジモジと太ももを擦りながら、見せてくる朱里のライトグリーンのショーツ。

フリフリとケツを振って見せつけてくる雛里の水色のショーツ。

「そ、そうだあ、雛里かな」

二人は、スカートから手を放して二色の下着が俺の視界から消えた。でもすぐに、二人の手がスカートの中に入って再び、二色の下着が俺の視界に現れた。

朱里が、あつさりと俺の服を部がし、雛里が、慣れた手つきでズボンのファスナーを下ろしてまだ、半勃起のチンコを取り出す。

「ご主人様、見てください♡ ここにさつきまで、私のアソコがくっついてて、私のアソコの匂いが染みついているんですよ♡ あつ♡ ご主人様、目が飛び出しちやいそうなくらいに焚いて私の下着見てま

しゅ」

「すごい、鼻息も凄く、荒くなってて、首も亀さんみたいに伸ばして、そんなに朱里ちゃんのお匂いが染みついた下着の匂いが気になるんですか♡」

「あ、あのさ、二人とも、下着のことオパンツって言ってくれない?」
「? はい、わかりました。」

じゃあ、ご主人様、私のおぱんつをかぶって奉仕されながら、雛里ちゃんのおぱんつでオチンチンシコシコさちやってくださいね♡」

「ご主人様、私のおぱんつでオチンチンご奉仕されながら、朱里ちゃんのおぱんつの匂いを堪能してくださいね」

朱里と雛里におぱんつって言わせているだけで、興奮してきてチンコが全勃起した。

「あわわ、ご主人様のオチンチン、もう、ビンビンでしゅ♡」

「はわわ、言葉だけで、ビンビンだなんて、ご主人様、凄く変態です♡」

そんな変態なご主人様には、いつもと違った方法でしますね。雛里ちゃん♡」

「うん♡」

二人は頷い合うと、いつものように上半身担当と下半身担当に分かれず、二人それぞれ、俺の左右の膝の上に座った。下着に包まれていない生のロリケツの感触が、紫苑のようなたつぷりと肉の付いた柔らかな巨尻や焰耶のような張りのあるケツとは違う柔らかさが、膝に伝わる。

そして、二人の指先が俺の両乳首を撫でまわす。ゾクゾクするような快感が走った。みんなに弄られ続けた乳首は、感度が大幅に上がったしまった。

「ご主人様、まだ軽く撫でただけなのに、もう、乳首もビンビンです♡」
「そんなに、朱里ちゃんのおぱんつに興奮しちゃったんですか?」

朱里は攻撃的な口調で囁きながら、雛森は不思議そうにしながらいつも責め立ててくる。

二人は片手で乳首をいじりながらも片方の手を俺の胸におき、そこからゆつくりと下に降って行って、雛里のパンツに包まれたチンコ

へと伸ばしてくる。降りていく手とは逆にゾクゾクした感覚が上へと這いあがってくる。

「くああっ、んひいいっ!!」

「ご主人様のオチンチン、触ってないのにお汁がダラダラです♡」
「私のおぱんっ、びしょびしょです♡」

チンコに到達した二人の手に、軽く撫でられただけでチンコはビクンと反応してしまう。

「ちゅっ♡」

二人は俺の乳首を同時に口に含んだ。温かく柔らかい感触が快楽の突起を包み、俺は上半身を仰け反らせていた。

「んひあああっ!!」

二人の舌がねつとりと動き、俺の乳首を舐めまわす。痺れるような快感が脳を支配する。二つの乳首を同時に舐められる快感は意識が飛んでしまいそうなほど強烈だった。

乳首に刺激が走る度に、俺のチンコはビクンビクンと跳ねあがり、我慢汁を吐き出し続ける。

乳首を舐めながら、二人の小さく細くそして柔らかい手が雛里の下着ごと勃起したチンコを同時に包み込んだ。

「あひゃっ、あああああっ!」

「はわわ、すごく熱くてかたいです♡」

「お汁溢れすぎてヌルヌルになってます♡」

ペニスを握った二人の手がゆっくりと上下に動かされる。両乳首を舐められながらのダブル手コキ、しかも、片方のパンツをかぶつておいを堪能しながら、もう片方のパンツでしごからながらだ。前の世界で見つかつたら、一発outだが、そうなくてもいいくらい気持ちいい、凄まじい快感だった。下半身が熱くなりビクビクと震える。二人の手の動きはすごくゆっくりとしたもので、強烈な快楽を与えつつもじわじわと炙るようなもどかしい刺激だったが、当然、射精には至らない。

俺はもつと強い刺激を求めて腰を上下に振ろうとするけど、ロリとはいえ、女の子が二人の足の上に乗ったまま、動くことなんてできる

わけもなかった。

「はわわ、ご主人様、そんなに暴れたら、落ちちやいますよ」

「あわわ、おちついてくださあい」

乳首責めとゆつくりとしたパンコキで時間をかけて快感を煽られる。

「ご主人様、ちよつと耳を澄ませてみてください」

「え?」

そんな余裕など今の俺にはないのだが、朱里も雛里もチンコから手を放し、乳首責めも止めた。静かになった部屋に隣の音が響いてくる。

『そ、そんなあ、んああああ……御主人なのですう……ふひいいい……御主人のチンチンよりこつちのチンポの方がおつきいのですう』

♡』

「ツ!」

「お隣には、恋さんとねねちゃんがあります。二人で（刃さんと）いたしている真っ最中です」

つまり、この声は、恋に攻められたねねの喘ぎ声で、話の内容から察するに恋が、ペニバンつけるってことか。

「二人ともどいてくれ」

「きやつ」

隣の部屋に行くためにもがく。

「ご主人様、朱里ちゃんのおぱんつの匂い嗅いで落ち着いてください」「はわわ、私のおぱんつにそんな効果ないよお。ご主人様、雛里ちゃんのおぱんつでいっぱい気持ちよくしてあげますから、落ち着いてください」

もがくけど、拘束は解けず、体力を無駄に消耗するだけだった。荒くなった呼吸を落ち着かせようと深呼吸を繰り返す。

「ご主人様、そんなに、ハアハアおぱんつの匂いをかがないでください♡」

隣に行く事で頭がいつぱいで、朱里のパンツをかぶったままだったことを忘れていた。

たつぷりと、雛里のパンツに精を浴びせかけ、疲れてぐったりとしていると、二人は、俺の膝から降りた。朱里が俺の顔からパンツをはがすと、息苦しさがなくなるが、その代わり、朱里の匂いがなくなつて少し物足りなくなる。チンコにかぶせられていた雛里のパンツもとられた。俺の目の前に二人はそれを穿くと、俺の後ろに回り込んだ。

何かごそごそとやる音が聞こえた次の瞬間、目の前が水色一色に染まって痴れ以外何も見えなくなった。驚ている間に、頭の後で縛られた感覚があり、いくら頭を振ってもそれは一なかつた。

「ふたりとも、悪ふざけはやめて、これを取ってくれ!」

「ご主人様、頭に着けたの何だと思います?」

慌てて叫ぶ俺に声に笑みを含ませた朱里の声が聞こえた。

「知らないよ!」

「じゃあ、答えにたどり着くための情報です。女の子は男の子と違つておぱんつ以外にも下着をつけるんですよ」

何を言っているんだと言いかけて、朱里の言葉と、目の前の色、さっきのプレイの時のみた二人の下着の色が、頭の中を駆け巡つた。

「雛里のブラジャーか?」

「ぶらじゃあ? よくわかりませんが、たぶん言いたいことはわかります。正解ですよ。外したての雛里ちゃんのおっぱい♡ 雛里ちゃんのおっぱいのぬくもり、感じませんか?」

「あわわ、朱里ちゃん、そんな風に言わないでえ、恥ずかしいよオ」

雛里は、貧乳だから、ブラのカップもあつてないようなものだから、顔に隙間もできず、布が顔に当たつて確かに温かい感じ、安らぎを感じる。

「そして、これが、私のぶらじゃあですよ♡」

「うおっ!」

その声とともにチンコに何かがかぶせられ、その上からグリグリと力がかけられて、チンコを刺激してきた。

こ、今度は、ブラコキか!?

「ご主人様、いきます♡」

「うひゃっ!」

その声と共に雛里がカリカリと乳首を引つ搔いてきた。俺は思わずびくりと震えてしまう。

さつきまで二人がかりでしゃぶられた乳首を雛里の指が引搔いたり、撫でまわしたり、資格を塞がれて次に何をされるかわからず、快楽に打ち震える。

少し前屈みになって、乳首に与えられる快楽に耐えようとするも、雛里の指先は楽しげに僕の乳首を責め続けた。

一方で、朱里は、チンコをブラでしごいてきていた。自分の呼吸が荒くなっていくのがわかる。

片方のカップを亀頭に乗せたまま、もう片方で竿をしごいたと思つたら、突然カリの裏に指が伸びてきて、おもわず射精にしそうになった瞬間、動きが鈍くなる。

かと思えば緩やかな攻めを続けられ、油断した瞬間に亀頭に乗せられたままのカップに強い圧が掛かって、突然の強い衝撃に腰が砕けそうになる。

「あひ、ああああ……」

二人の踊るような連係プレイに、自然と感度が高まってきてしまう。

両乳首を捏ね回され、チンコをしごかれ、その快感に耐えるだけで精一杯だ。

気を緩めたらその瞬間、出してしまいそうで、まだ、この快楽に浸っていたい一心で必死に耐える。

「ご主人様、お隣、攻守が逆転したみたいですよ♡」

「え?」

雛里の声に恋たちのいる部屋に意識を向ける。

『あつ、はううつ、んくう……あああ、舌、中までえ……あつ、ああん、あふ……あつ、ああああ……んひいいいいっ♥♥♥』

攻守が逆転つてことは、ねねが恋を攻めてるってことで、つまり、今は、ねねが恋のマンコしゃぶっているってことか!?

体を起こした俺に二人は、深々と頭を下げた。

「いや、気にしてないよ。俺の方こそ、先に寝てごめん」

お互いに謝り合って俺たちは帰り支度を始めた。

朱里や雛里の声にドロドロしたものを感じたのは確かだけど、ニコポで虜にしているんだから、実際に起きるわけがない。

だから、そんな気にする必要なんてない。

???

「刃とするねね、凄く色っぽかった……」

「そ、そういう恋殿こそ、凄く可愛かったです」

「二人ともいいなあ」

「次は絶対にあたしがあたりを引いてみせる！」

「丁度、下着の安売りがあって助かりました。教えてくれてありがとうございます
うございます」

「いや、ちようど警邏に出たときに見かけたただだから」

「うくん、あたりを狙って刃とするのもいいけど、北郷とした方が、普通って言われなくなるだろうか？」

「あわわ、そもそも、あたりは狙って取れるモノじゃないですよオ」

七話

〈??〉

「じゃあ、みんな準備は良い?」

「……(コクン)」×9

「今回は、すでに当たりを楽しんだ人を除外してまず、当たりくじが入ったくじを引いて、その後、抜けていた愛紗ちゃんたちあたりだけ楽しんだ人とすでに外れをやった人を入れ替えて外れくじが入ったくじを引くよ。麗羽さんと美以ちゃんたちはどっちにも参加しなくていいからね。」

それと、前も言っただけだけど、当たりを引いた人を襲っちゃだめだからね!」

(だから (ry)) ×22

「みんな、小刀隠すだけじゃなくて暗器まで出してくるので、もう、全部脱いできてね。あ、帽子とか髪留めとかもダメだからね。」

あと、みんな、くじまで武器にして危ないから、紙にしたよ。○が書かれてる紙が当たりだから。脱いだら、適当に紙の前に座って」

「は〜い」×22

全員が指定された部屋に武器を置き、服も全て脱ぎ、帽子等の装飾品も外して、全裸で戻り、椅子や机の撤去された部屋で、指示通りに置かれた紙の前に座った。

「それじゃあ、いくよ?」

「せえ〜の!」×10

「ヨ……」

小さくガッツポーズをとって叫ぼうとした少女を背後から、拘束して、まだ、周りに気付かれていないのを確認すると、そのままこっそりと部屋を抜け出した。

他の者たちが、あたりの在り処に気が付いたのは、外れくじを引いた時に余りが出て、点呼を取った時だった。

「私のおかげで安全に脱出ができたんだから、お礼は当然?」

「はいはい、わかったよ。これを共有すればいいんだな？」

〈周倉side〉

白蓮と楓の地味組に誘われて、最近よく来ている宿にやってきた。宿に着いてすぐ、部屋の前で待っているように言われた。なんでも、俺を楽しませるために衣装を用意したが、街中で着るには恥ずかすぎるらしい。

しばし待っていると、入室許可が出たので中に入る。

そして、二人の格好を見た。確かに、この二人には、この格好での外出は、厳しそうだなあ。

前世でやった凌辱系エロゲーのダークエルフが着ていた衣装に身を包んだ二人だが、何故、地位の低い楓が女王で、白蓮が側近なんだ？

そんな疑問を感じつつ、二人の手で服を脱がされた。

「れろ……んちゅ、ちゅ♥」

「んちゅ……あむっ、れえろ♥」

白蓮がカ리를丹念に舐めあげ、楓が竿を横からくわえて味わう。

地味組によるダブルフェラは、仁王立ちする俺のイチモツはすでに臨戦態勢に入っている。

何事も平均以上最高未満にこなす白蓮は、性行為に関してもなかなかのテクニシャンだし、もともと努力家で墮落していた時期もあるが、再起してからの努力が半端ない楓のフェラテクは、努力の甲斐あつてかなり上達している。

「んちゅ……れる……れろれる……あふ♥ 刃、きもちいい？ んちゅ♥」

楓がイチモツの先端を舐めながら訊いてきた。

俺は楓の頭を撫でてやる。

「ああ、最高だ」

「刃、私の方はどうだ？」

白蓮が俺の陰囊をさすりながらを聞いてくる。

「白蓮も気持ちいいぞ」

「それはよかった♥ れろ……楓、交代してくれ」

「ちゅぶぶ♥ わかった……」

名残惜しそうにカリに舌を這わせていた楓は陰囊の愛撫へ移行、代わって白蓮がしゃぶり始めた。

「あむ、ちゅぶつ、ちゅぶぶ、んちゅう……あはあ……ぢゅずう……
ああん♥ どんどんお汁が出てくる♥ ちゅずずっ♥♥♥」

白蓮の口がイチモツ全体をしゃぶり、舌が根本からカリまで這い回る。

俺は立った状態で、フェラを受けているが、油断すると、快樂で足の力が抜けそうになる。

「二人とも、重なって寝台に横になれ」

「ああ、わかった♥」

「はい♥」

いそいそと寝台に上がり、白蓮が仰向けに寝て楓がその上で尻を突き上げて四つん這いになって、二つのマンコが俺に差し出された。

俺は愛撫なんて一度もしてなどいないのに、すでにどちらのマンコもだらしなく口を開けて涎を垂らしてる。

「刃、私のオマンコから味わってえ♥」

流し目でこちらを誘い、尻を振る楓。

「刃、まずは私の膣から味わってくれ。たつぷりと搾り取ってみせるから♥」

自分の手でマンコを広げて誘う白蓮。

「んあああああああッ♥♥♥」

楓が甘い叫び声を響かせた。

まずは楓からすることにした。挿入した途端にマンコがイチモツに絡みついて逃がさないと云っているようだった。

「な、なんで楓から!？」

白蓮がムツとした様子で訊いてくる。

「いや、入れやすい高さだったから」

「く、上を取っていれば……」

悔しそうに顔をゆがめるも、白蓮はオナニーを始めた。

「んんん……あんっ、あふう♥」

こちらを誘うように見てくるが、気にせず楓を犯す。

「あっ、あはあん♥ あはあ、あああん、はううん……あっ、ああっ、す、すごい……オマンコの奥とオチンポがちゅうしてるのおお……あん、あひっ、あああん♥」

楓が頭を振って感じている。尻を突き出しアナルをヒクつかせ、マンコはきつく締めてイチモツをくわえて離さない。

「刃っ、刃んんんっ、頼むから私にもオチンポ、おチンポください♥」
自慰をしていた白蓮のおねだりが激しくなった。彼女の指二本を出し入れしてオナニーしているが、満足できなくて相当焦れているようだ。

「だめえ、今は、私の番なんだあ♥ あひい、私が終わるまで、じぶんですしているおお♥」

勝手に拒否する楓だが、決定権は俺にある。楓の膣からイチモツを引き抜く。

「あああああっ、なんでえっ」

楓が切なそうに鳴く。

「おまえはしばらくお預けだ」

「そんなあ」

「んあああああああああああああああ♥♥♥♥♥ あっ、あはあああっ、きたあ……きたきたああ、刃のチンポ、私の奥にズンってきたあ♥ あひい……あっ、あああんっ♥ すごい、すごい♥」

白蓮は、身体を反り返らせて喘ぎ声を上げる。

白蓮のマンコも楓に負けず劣らずぐっしより濡れていて、挿入したイチモツから精を抜こうと吸い付いてくる。

「ああんっ、あふう……うっ、うひい……はあ、あはあん♥ も、

もつとお……あああん♥」

「刃っ、私にもチンポお♥」

楓が猫なで声で言いながら尻を振る。さつきまで俺のイチモツが入っていたところからは、取り止めなく愛液が流れて白蓮の腹のあたりに垂れていた。

「あひっ♥ 刃っ、楓のおねだりなんて無視して私に集中しろお……あああん♥」

「白蓮、私よりも長いぞ！ そろそろ交代しろっ!!」

「あつ、あふう……だ、ダメだっ♥ あああん……いいっ♥ このまま、私の中に出してもらうんだあ……刃ン、もつとしてえ♥ もつとオ……あああん、あつ、あひいいいいっ♥♥♥」

「ず、ズルいぞ、白蓮っ!」

俺のイチモツをめぐつてをガチの喧嘩とか、やめてくれ。

俺は白蓮の中から引き抜いた。

「んああああ♥ 刃、そんなあ……」

「刃、やっぱり私のオマンコの方がいいんだな♥」

泣きそうな顔の白蓮の上にいる期待に瞳を輝かせる楓を押して白蓮と密着させると、二人のマンコの間自分のイチモツを突っ込んだ。

「こういう形にさせてもらう」

そうやって俺は腰を振った。イチモツが白蓮のマンコと楓のマンコの間を滑る。

「んあツ♥ あはああん♥♥♥ あつ、あああ……あああん……きやううううん♥♥♥」

二人が同時に声を上げた。

「なにこれえええ♥ すごい気持ち良いのおお……オチンポにお豆さんがコリコリされてるうう……んひいいいい♥♥♥」

楓は、戸惑ったような様子を見せるも、すぐに自分も腰を振って快楽をむさぼり始めていた。そういえば、楓に素股プレイした記憶がなかったなあ。

二人のマンコに挟まれ、イチモツを動かすたびに白蓮と楓の勃起し

〈蒲公英side〉

「は〜い、ご主人様、今日はお姉さまとたんぽぽが、ご主人様をきれえくにおそうじしてあげます」

全裸で手足を拘束されたご主人様に笑顔で宣言する。ご主人様の顔は、たんぽぽの宣言を聞いて少しの恐怖と、何をされるのかわからない期待にあふれていた。

まったく、少しは感情を隠してほしいモノです。

じゃないと、イジメられるのが大好きな変態だつてまるわかりじゃん。

「じゃあ、最初は掃き掃除から始めるよお♡」

これで、ご主人様の身体を掃いて綺麗にしていくね」

まず初めに取り出したのは、羽でできたは・た・き♪

ふわっふわの羽がびっしりについて、とつても手触りが良いの。

「このはたきで、ご主人様の身体を綺麗にしてやるからな♡ すぐくくすぐつたくなっちゃうかもしれないけど、ご主人様にはご褒美だろ？ 頑張つて耐えてくれよ♡」

「ひあつー！」

お姉さまが、ご主人様の脇腹をそつと一撫でする。歯をくいしばつて耐えようとしてたみたいだけど、その程度じゃ、このはたきのくすぐったさには耐えられないよ。

「この掃き掃除で、ご主人様の身体のありとあらゆる場所に溜まっちゃつてる汚れを掃いてあげるね♡」

「そ、そんな……だ、だめだつ、むり、耐えられるわけがツ！」

なんか言っているご主人様を無視してたんぽぽとお姉さまは、とびっきりの笑顔をご主人様に向けながら、両方の脇に純白の羽ばたきを近づける。

「ごちよごちよごちよごちよ♡」

「や、やめえ、あひゃひゃひゃひゃひゃひゃ!?!」

「ご主人様の言葉をさえぎり、お掃除を開始します。」

たんぽぽのはたきが、ご主人様をくすぐると、ご主人様は、身激しく身体を震わせる。

お姉さまのはたきもご主人様の体の上を行ったり来たりする。

「ははははははははっ、ははあ、ははははは!!」

「クスクス、ご主人様だったら、笑顔になってくれてたんぽぽも嬉しいよ。」

もっとお掃除してあげるね♡」

「はひやはははは、やっ、いひひひひひ、や、え!」

笑いながらご主人様の口が、『やめて』って言っている気がするけど、声が聞こえないってことは、たんぽぽの勘違いだよな?」

たんぽぽたちの手で、ご主人様が気持ちよくなっちゃう場所を的確に責めていく。たぶんここまでご主人様の弱点を熟知しているのは、蒲公英とお姉さまだけだと思う。で、その弱点を一切の容赦なく責め廻る。

「ねえ、お姉さま」

「ん?」

一旦手を止めてお姉さまに声をかけると、お姉さまも手を止めてたんぽぽを見た。

「そろそろ、たんぽぽ、お姉さまは次の“お掃除”をした方がいいと思うんだけどなあ♡」

意味ありげにニヤリと笑ってお姉さまを見ると、普段察しの悪いお姉さまも今回は察してくれたみたいだ。

「ああ、そうだな♡」

笑い過ぎて息切れを起こしているご主人様を放置して、お姉さまははたきをたんぽぽに預けて奥から手拭いを持ってきた。

「ご主人様、見てくれよ」

「はあはあ?」

「この手ぬぐい、はたきとはまた違ったふわふわなんだ。これで、ご主人様の身体を拭き掃除してやるからな♡」

お姉さまの手にあるのは、ふわふわした素材でできた手拭い。

「ひいつ!？」

「で、たんぽぽは変わらず、掃き掃除をするね♡ 今度はお姉さまの使ってたはたきで二刀流だ。そおれ、こちよこちよこちよこちよ♡」

ご主人様の返事も待たずに内股を丹念にくすぐると、ご主人様の足から力が抜けて、オチンチンがびくんびくんって震えた。

「こっちもいくぞ♡ ゴシゴシ♡」

お姉さまは、ふわふわ手拭いをご主人様の股の間に通して、ゆつくりと近づけて前後に動かし始めた。

「いひい、ふひひひひっ!!」

たんぽぽが、膝の頭をくすぐると、必死に逃げようとするけど、拘束具に抑えつけられているんだから無駄なことで、膝の裏表もしつかりとくすぐってあげる。

お姉さまは、ご主人様のお尻の割れ目からお尻の穴、蟻の門渡り、タママ、オチンチンをふわふわ手拭いで擦って、また逆にオチンチンからお尻の割れ目までを擦る。

ご主人様が、とつさに脚を閉じようとするけど、足を広げた状態で固定されているから、快感から身を守ることは許されない。

「ひひやああああ!!」

背中を何度も上下になぞると、ご主人様は背筋を伸ばしてはたきから逃げようとするけど、動ける範囲が決まってるご主人様がいくら動いても無駄無駄ってことで、もつと背中を何度も上から下へ、下から上へとくすぐりまわして悶えさせられる。

お姉さまが、ふわふわ手拭いを絶妙に角度を変えながら動かして、ご主人様が刺激に慣れたりしないように追い詰めていく。

「あれ? なんだかご主人様の乳首、びんびんになちやっみたい♡

ご主人様、おっぱい気持ちいい? ほら、こちよこちよお♡」

「んひい、あひやああああ!!」

たんぽぽ、ご主人様の乳首がビンビンになってたから、両方の突起に羽を絡めるように、優しくはたきを回転させる。

少しでもおまたを襲うお姉さまの拭き掃除から逃げようとして、ご

主人様はへっぴり腰になると、狙いすましたようにお姉さまは、浮いたお尻を磨く。それで、次は前に逃げようとご主人様が腰を突き出すけど、これもお姉さまはすぐに反応して、今度はオチンチンとタマタマにふわふわ手拭いがより強く密着するようにして、翺る。

もう、ご主人様の腰は、お姉さまに操られてへこへこ気持ち悪くねらせる惨めな操り人形になっていた。

「やあはあああ!! や、やめれええ!!」

お姉さまに股間の敏感な部分を優しくめぐりまわされて、体中の気持ちいい場所をたんぽぽに翺られてご主人様のオチンチンは、助平な汁をダラダラ流してピクピク震えて、もう、発射寸前。

「ご主人様、こちよこちよ気持ちいい?」

「おまたゴシゴシされて気持ちいい?」

「も、もうだめだあつ、もう、出るうう!!」

「だめだよ、ご主人様。もし、お掃除中にお漏らししたら、また洗い直してだよ?」

「キレイになるまでゴシゴシされちゃうんだよ?」

「で、でもおおつ」

「ダメだ、ご主人様、我慢だぞ。出したら、今度は体中ゴシゴシされちゃうんだぞ♡」

たんぽぽもお姉さまも手を止めることなくご主人様をさらに追い込んでいく。

「ごまん♡ ごまん♡ ごまん♡」

ご主人様が、諦めるようにイこうとするのを邪魔するようにたんぽぽたちが我慢を強いると、ご主人様も我慢しようとし始めた。その瞬間に、たんぽぽはご主人様の耳に息を吹きかけて、お姉さまはふわふわ手拭いでオチンチンにとどめの一撫でを与えた。

「ふう♡」

「あああああつ!!! あひいいいいつ!!!」

ご主人様が行っている最中もお姉さまはオチンチンやお尻、蟻の門渡り、タマタマをふわふわ手拭いで磨き続ける。

「あああ、ダメってたんぽぽ言ったなのに、白いおしつこの汚れができ

ちやった。

まったく、ご主人様は仕方ないなあ♡ 白いおしつこの汚れははたきじや落とせないから、たんぽぽもふわふわ手拭いで拭き掃除するね♡」

「ご主人様はしようがないなあ、蒲公英、もうこのまま、空っぽになるまで拭き掃除しよう。白い汚れを全部、出し切らせよう♡」

お姉さまは、そう言いながら、手を止めることなく、ううん、もつとオチンチンを強めに攻め始めた。ふわふわでニユルニユルになった手拭いで、ご主人様のおまたを前後に磨き上げる。

たんぽぽも道具をはたきからふわふわ手拭いに変えてご主人様を拭き掃除する。両手にふわふわ手拭いをもってご主人様の脇腹に当て手を動かし始めた。

「あひやあああああ!!」

さつきイツて意識がほとんど跳んで、お姉さまの攻めを甘受していたご主人様は、脇腹を蹂躪するたんぽぽの刺激で強制的に覚醒した。

脇腹を汚れを落とすようにふわふわ手拭いで何度もさする。

「いひやああああ、はひやあああああ!!」

ふわふわ手拭いで脇腹を上下に何度も撫でさすって苦悶させた後に、たんぽぽはその上の脇へ移って撫でさすり、ほじくりまわす。

そこから両腕、手のひら、首筋、耳、胸、背中、腰、お尻、両脚、足の裏を順にたっぷりと磨いた。

その間も、お姉さまの拭き掃除にご主人様の身体は、何度も体を震わせて、その度に身体が汚れて、たんぽぽ、すんごく疲れちゃった。

ご主人様のオチンチンは、もう、出るモノもなくなつてビクンビクン震えている。ご主人様自身も、もう、意識が落ちちゃって虚ろになつちやってる。

で・も、ここで手を止めたりはしませえん♡

お姉さまが優しくふわふわ手拭いを巻き付けた手で、ご主人様の内股に手を滑らせる。

敏感な内股を手のひらがゆつくりと動いて、段々速くなって、オチンチンの付け根やお尻の穴や蟻の門渡りを、たんぽぽも脇腹とかご主

人様が敏感なところを、ねちっこく、指先がくすぐり回す。

「あ、あひい……あああああ……」

お姉さまがお尻の穴の入り口を丹念に撫でて、たんぽぽが両方の乳首を繊細に指先でくすぐりまわす。

「ひゃひい……」

ガクガクと震え始めたご主人様に、たんぽぽはお姉さまに目配せすると、お姉さまは頷いて、足元にあったはたきを拾って、それをご主人様のオチンチンのさきつぽに優しく置いてすうつと撫でた。

「あ、ああ、あひあああああ!!!」

ご主人様のメスイキしたオチンチンの先つぽにから潮を吹き始めた。

そして、ビクンビクン震えたご主人様は、そのまま、動かなくなつた。

あつ、ちゃんと呼吸はしてるよ。

「どうする？ お姉さま？」

「うくん。ご主人様、全部出し切つて失神しちゃつたし、オチンチンふにやふにやだしなあ」

『んあツ♥ あはああん♥♥♥ あつ、あああ……あああん……きやううううん♥♥♥』

「……」

地味組いいなあ。たんぽぽよりも耳がいいお姉さまはもしかしたら、ご主人様をお掃除している間から聞こえていたのかもしれない。

あ、そうだ!!

「お姉さま、今からたんぽぽたちも混ぜてもらおうよ！」

「え？ ご主人様、どうするんだよ？」

「服着せて寝台に寝かしてあげればいいじゃん。そうすれば風邪ひく心配もないし」

「でも……」

行きたいって顔に書いてあるお姉さまだけど、義務感で迷ってる感じ。

「じゃあ、お姉さまはここに残ればいいよ。たんぽぽはまぎびつてくる

からあー！」

「あ、コラっ！ たんぽぽ!!」

〈翠side〉

「ちゅっ、ちゅ、ちゅぶ……あはあ♥」

「んちゅ、ちゅむう……れる、はふうん♥」

「あああ……あんなに出したのにまだずっしり重たい……れるっ、んむむっ、ちゅぶっ♥」

あたしが刃とちゅうをしながら、白蓮が刃の逞しい胸を舐めまわす。楓が蒲公英に挿入してじっとしていている刃のお尻に回り込んで、刃のお尻や内股とか袋を舌で愛撫する。

時々、二人が合体しているところまで舌を伸ばして、ビクンビクン痙攣する蒲公英のオマンコから溢れる助平な汁を舐め取るのも忘れない。

「じゃあ、そろそろいくぞ」

「ああああああっ♥ ひぐうう……はうう、はひい♥ あはあ……お、奥、すごいのお、きてるっ♥ ガンガン叩いてるう……あああああああああっ♥♥♥」

刃がゆっくり腰を動かし始めると、蒲公英は気が狂ったように身体を悶えさせて、卑猥な悲鳴を上げ始めた。発情しきったオマンコを巨大な肉柱で擦られている。

たぶん、この大音量のよがり声は他の部屋にも聞こえているだろうけど、文字通り精魂共に尽き果てたご主人様は起きないんだろうなあ。

「ひいっ、んああああ♥♥♥ もう、たんぽぽ、もうっ、イクイクうっ♥ イキそうなのお……あああああん♥ イっちやううう♥♥♥」

蒲公英の全身をくねらせながら、汗でぬめり光っている姿は、思わ

今は寝台に横になった刃の巨大なチンポを、あたしがおっぱいで挟み込んで、先端を舐めながらご奉仕している。白蓮と楓が左右から刃に抱き着いて柔らかな身体を擦りつけている。刃の両手はそんな二人のそれぞれのおっぱいを掴んで、蹂躪している。

刃の頭を膝の上に乗せたタンポポは、刃の顔を覗き込むようにして、刃と情熱的な口づけを交わしている。ご主人様としていたころは見たことがないほど熱のこもった熱いちゅうだった。

「んちゅうっ、ちゅ、ちゅぶ……はああっ、刃さん……大好きい♥」

刃の頭を抱えるようにして、蒲公英は熱っぽく囁きながら、しつこくちゅうを繰り返して、舌を差し入れて、唾液を大量に刃の口に注ぎ込む。

「んちゅ、ちゅう……ん、れろ、んちゅうう、はぶっ、れろお♥」

「ちゅ、ちゅちゅ……れろろ、んふう♥　ちゅ、れるる♥」

白蓮と楓も左右から刃にすがりついて、顔の周りにちゅうしたり、舐めたりしている。なんだか自分だけないがしろにされている感じがして悔しくて、あたしは、おっぱいで奉仕していた刃のチンポを握り締めて自分から跨っていく。ご主人様を攻めている頃から隣の声が聞こえていて疼いていたオマンコに一気に啜っていく。

「んああああああああ♥♥♥♥　これっ、これが欲しかったんだあっ♥　あはああああああ♥♥♥♥」

正直、自分から跨るなんて恥ずかしいけど、それ以上に早く刃に愛してほしかったし、たんぽぽたちよりも、あたしのことを見てほしかった。あたしは淫らな声を上げて、激しく腰を振り乱した。その度に刃の前で、この中でも一番大きいあたしのおっぱいが、タップと揺れているけど、そんなことどうでもよかった。

「ああっ、んあああっ♥　おほお、おふっ、お、お、奥う♥　奥に、奥に来てるう♥　うぐう♥　あううううう♥♥♥　ああん、お、オマンコ、いいい……あああ、あひいん♥　き、き、気持ち良すぎいいっ、んああああ♥　あはあ♥」

がむしやらに動いて刃のチンポが与えてくれる快樂を貪る。

「翠、そろそろ、出そうだっ!」

「んひいいいいいいいいい♡♡♡ いっちゃうう、うあつ、あ、あああ
 ああああアツ♡♡♡ うはああああ♡ 来て、来てえ……刃のチンポ
 汁、あたしのオマンコに出してくれえ、んああああああ♡♡♡
 欲しい欲しいっ、欲しいのぉ♡

刃の指が、こみあげてくる快樂の塊を受け入れて、腰を振り乱すあたしのお尻の穴を貫いた。その一撃で、あたしの身体は、絶頂に達してしまった。

「い、いいい、いっぐうううううううううううううううううううううううううううううううううううう♡♡♡♡♡♡♡」

熱い塊をおなかの中に感じながら、私は、刃の胸に倒れ込んだ。

〈北郷 side〉

目を覚ますと、自分の部屋の寝台にいた。窓の外はまだ薄暗く、月たちが俺を起こしに来る時間よりも早そうだ。周囲を見回すとサイドボードに書置きがあった。

——ご主人様が起きないので、お姉さまがおんぶして部屋まで連れて帰ってきたよ。しばらく待ってたけど、ご主人様、全然起きないからたんぽぽたちは帰ります。

二人の攻めで精魂尽き果てて、そのまま寝入ったのか……あああ、せつかく、久しぶりに二人としようと思ったのになあ。

〈??〉

「白蓮ちゃん、言い訳は聞かないよ」

「聞かないよって、大体にして、ただあたりを引いたのに、罰を受ける流れになっっているんだよ！」

「楓ちゃんもちやつかり、美味しいところだけ持っていこうとする姿勢は感心できないなあ」

「正当な交渉をして手に入れた権利でなんで、そんな風に言われなければならぬんですかあ……」

「二人とも大変だなあ」

「まったくだよねえ」

「何を他人事のような顔しておる。おまえたちこそ、ちやつかり、あたりのお零れを頂戴しておいて」

「でも、たんぽぽたちはちゃんとハズレ分の仕事もしたよ！」

「理不尽だ！」

八話

〈??〉

「じゃあ、みんな準備は良い?」

「……(コクン)」×7

「今回は、すでに当たりを楽しんだ人を除外してまず、当たりくじが入ったくじを引いて、その後、抜けていた愛紗ちゃんたちあたりだけ楽しんだ人とすでに外れをやった人を入れ替えて外れくじが入ったくじを引くよ。麗羽さんと美以ちゃんたちはどっちにも参加しなくていいからね。」

それと、前から何度も言っただけだけど、当たりを引いた人を襲っちゃだめだからね!」

(だから (ry)) ×22

「みんな、小刀隠すだけじゃなくて暗器まで出してくるので、全部脱いできてね。あ、帽子とか髪留めとかもダメだからね。」

あと、みんな、くじまで武器にして危ないから、紙にしたよ。○が書かれてる紙が当たりだから。脱いだら、適当に紙の前に座って」

「は〜い」×22

全員が指定された部屋に武器を置き、服も全て脱ぎ、帽子等の装飾品も外して、全裸で戻り、椅子や机の撤去された部屋で、指示通りに置かれた紙の前に座った。

「それじゃあ、いくよ?」

「せえ〜の!」×8

「おお! あたりじゃ!!」

「ツ!」×7

次の瞬間、全員があたりを引いたものに襲い掛かろうとしたが、あたりを引いた者から一つ提案が出された。

「自分と共に外れも一緒に引き受けてくれる者がいるのなら、あたりを共有してもいい。条件は、自分を喜ぶものをくれた者」

そして、その権利を勝ち取ったものは、自分の持つ権限全てを使っ

た王だった。

〈北郷side〉

気が付いた時、何かに塞がれているらしくて目も見えないし、耳も聞こえない。体を動かしてみた感じ、裸にされているみたいだ。

たんぽぽか美以たちの悪戯かなって考えていると、突然、誰かに抱え上げられた。恐怖を覚えるも、感じたのは、女の甘い匂いと、柔らかな感触。

女であるのなら、俺のニコポでなんとかできると、安心をした。

そして、謎の女から降ろされると、手を拘束された。続いて耳栓を外されると、聞きなれた声が聞こえた。

「ご主人様、お待ちせ♡」

「その声、桃香か!?!」

「うん、そうだよ。ついでにここにご主人様を連れてきてくれたのは、桔梗さんだよ」

「桔梗もいるのか?」

「ここに♡」

「何でこんなことを?」

「何でって、ご主人様に気持ちよくなってほしくて、桔梗さんと協力することにしたの。私が、いつものアレをやりつつ、桔梗さんとまぐわってもらおうと思って♡」

いつものアレとは、あの肉クッションのことで、柔らかい肉の感触が背中に当たった。続いて、細い指が、俺の身体を撫でまわしてゆつくりと、チンコの方へと向かっていく。

すでに滾ったチンコを桃香の指が優しくしごいて硬さを確かめると、ぐっと握った。

「あふっ」

「はあい、ご主人様、動かないでねえ♡ 動いたら、桔梗さんのオマンコに入らないよお♡」

桃香に握られたチンコの先に何かがかくちゅつと当たった。

「あん♡ そう、そこですぞ。さあ、御館様のオチンチンを中へ……」
俺は、久しぶりの桔梗のマンコに突っ込むため、呼吸を整えようとしたその時…

「えい♡」

「うおあ!?!」

「んひいいいいい♡ きたあ♡」

突き入れるタイミングを計っていたら、桃香が後ろから腰を繰り出してきて、強制的に桔梗の中に突き入れさせられた。

チンコに襲い掛かる不意打ちの快楽に思わず、声を上げてしまった。

桔梗の中がぎゅうううつと締まって、動いていないのに、射精させられそうさ。

「ほらほら、ご主人様ったらあ♡ じつとしてないで、桔梗さんのオマンコを後ろから、いっぱい突いてあげないとだめだよ？ こんな風に♡」

「くう、おふっ!」

気持ちよさに力が抜けた瞬間、桃香に引つ張られて桔梗の中から引き抜かれて桃香の柔らかい肉クツションが俺を受け止め、その反動を利用してのように桃香に押し出されて桔梗の中に戻される。

「ああんっ♡ 勢い良く、お、奥に突かれてえ……あはああああ♡♡

♡ いい、はひいいいんっ♡」

桔梗が今まで以上にエロい声を上げてきて、声だけでイキそうさ。

「ご主人様、腰をへこへこ振るだけじゃだめだよ、奥もグリグリしてあげなくちゃ♡」

「おほおおおお!! こ、これやべえええ!!」

桔梗の奥まで突っ込まされてそのまま、強制的に腰をのの字に回される。うねうねって、チンコを刺激してくる桔梗の中も凄いけど、後からピツタリとくつついた桃香の肉クツションの感触。前後を肉感

的な女に挟まれて、もう、歯を食いしばって耐えることしかできない。
「奥、グリグリってえ……あああんっ♥ はうっ、きひいいい……お、
おかしくなるうっ♥ あはああああ……」

桃香に操られるがままに腰を振り、ついに限界が来た。

「おおお……で、出るうー!」

桔梗の奥に思いつきり出そうとした。

「……ご主人様、まだ駄目だよ♥」

「なッ、あぐううう!」

桃香の手が、チンコの根元を強く掴んで、無理やりせき止めた。

「と、桃香あ!」

「もうちよつと我慢すれば、最ッ高に気持ちイイから我慢しようねえ♥」

桃香はチンコを抑えたまま、腰を動かして、無理やり桔梗の中にチンコを突っ込ませる。

桔梗の膣内の気持ちよさが、出せない苦痛を高める。

「んあああああっ♥ 激しいい……す、すごい……あああっ、あふ
ううん♥」

「ねえ、桔梗さん」

「はひっ、ひいいん……あああ……と、桃香さま? あくううっ♥」

「フッフ♥ 桔梗さんも、もつと激しく、いっぱいオマンコをチンポでズンズンされたいよね?」

桃香は、腰を止めて桔梗に声をかける。わずかな休息かと思ったけれど、その間もチンコを握ったまま、俺の乳首を細い指が刺激して、俺を休ませない。

「熱くておっきいチンポで、激しくオマンコ突きまくられて♥ オマンコの奥に熱くてどろっどろのをどっぴゅんびゅるるってたっぶり出されて♥ 赤ちゃん仕込まれたくない?」

普段の柔らかい雰囲気の桃香からは想像できない、色気に満ちた声と淫語の連発に、俺のチンコは、さらに苦しめられる。

「あ、ああっ、チンポ、チンポでズンズンされたい♥ マンコに、マンコにいっぱい出されたい♥ ワシの中に、出してえ♥ あっ、あひい

いいいいいいいいいい♡♡♡♡♡

桔梗がおねだりを言い終わった直後に桃香が俺の腰をパンパンツ、と桔梗の巨尻に打ち付ける。俺も桔梗も喘ぐことしか出来ない。

「ンあああああ♡ あひい……あああつ、いひつ、ああはあああああつ♡♡♡♡」

「と、桃香あああ、だ、出させてくれええええ!!」

俺の叫びを無視して、桃香はまるで俺を自分のチンコみたい……いや、バイブみたいに扱ってを桔梗の最奥まで押し込んで、犯す。

「桃香、桃香、桃香桃香ああ!!」

「んひい、チンポが、ワシのマンコの中で、ビクビクしてえ……はふつ、あああん♡ 中に、中に、出してっ♡ ワシのマンコに、いっばいどっぴゅんして、ややこをはらませてくれえ♡♡♡」

「もう、イキそう……イっちゃおうか? ご主人様、そろそろ、イかせてあげるね♡」

「早く、早く早く早く!!!」

「じゃあ、イクよお♡」

桃香が、桔梗のマンコに向かってひときわ大きく腰を突き上げて、桔梗の最奥でチンコの栓をしていた手を放した。

「うわおおおつ、出るう!!!」

「んああああああつ♡♡♡ あつ、あひいいいいっ、出てるう♡ ああああああつ、い、いくううううううううううううううううううううううううううううううう♡♡♡♡♡」

ため込んでいたすべてをぎゅうううつと締まる桔梗の中に吐きだした。

桃香の言う通り、我慢に我慢を重ねてやっと解放された快樂に腰が抜けそうになる俺を桃香が支えてくれた。

だが、その直後、再び桔梗に向けての腰が動き始める。

射精して力を失いかけたチンコが、桃香の肉クッションと、桔梗の締めつけで強制的に勃起させられる。

「はあんっ♡ あああああ……イツたのに、ひううっ♡ うぐう……んあああつ、あう、はひいっ♡」

「と、桃香、桃香待つてくれええ」

「えええ？ ご主人様あ、もつといっぱい出さないと、桔梗さんに赤ちゃんできないよお？ だからもつと、いっぱい出してね♡」

チンコが最奥とぶつかって、絶頂の余韻が抜けていない俺の身体を高ぶらせて、きつく締め上げてくる膣内からの快楽を耐えようとしても、桃香に操られて快楽から逃れられない。

「あんっ、ふ、深い…あはあんっ♡ か、感じるう、んああっ、マッンコ激しく突かれて感じるう♡ あは、はひっ、んひああああ♡♡♡」

桃香は、容赦なく腰をどんどん加速させて俺の腰と桔梗の巨尻がぶつかってパンパン！ と乾いた音を激しくたて、俺のチンコで桔梗の膣内を蹂躪する。

「あはっ♡ 桔梗さんのおっぱいすごいよ、ご主人様あ♡ 後から一突きされるたびに、ぶるんぶるんってすんごく激しく揺れる♡」

桃香による激しい腰使いによってぶるんぶるんと揺れているという桔梗のおっぱいを見たくてたまらないのに、アイマスクが邪魔で見れない。外そうと首を振ってもまるで外れる気配がしない。再び込み上げてきた欲望を歯をくいしばって耐えながら、喘ぐ桔梗に桃香の肉バイブと化した俺は腰を打ち付ける。

「ひんっ♡ あはあん…また、またイカされるっ♡ あん、チンポにイカされるう♡ んああああああ…」

また、桔梗の膣内の締めりがきつくなってきた。

桃香もラストスパートとばかりに腰を激しく動かして俺を桔梗の膣内の最奥へと突き立て始めた。

「うひっ、出るっ、出るっ、出るうっ!!!」

「ンああああっ♡ ら、らめっ、らめえ…いった、いったのにい♡んひひひひひひひ♡♡♡ また、いつ、またすぐイクう…あっ、ああっ、いいいいいい♡♡♡」

「良いよ出して、ほらほら、いっぱいどっぴゅんしちゃえ♡」

桃香が勢いよく、大きく喘いでいる桔梗の最奥に俺のチンコを叩き込んだ。

「今度は、桃香さまとですよ」

「もう少し待ってくれ、さっきいっぱい出しすぎて、ちよつと今は無理だ」

「フム、確かに、御館様のおちんちんの元気がありませんな。なら、ワシが、喝を入れましょう♡」

背後に立つ桔梗は耳元でそう囁くと、同時に俺のケツに硬いモノが当たった。

何をされるか悟って逃げようとするも桔梗の手で掴まれた腰は、まるで動かない。

「ご安心を、桃香さまにたっぷりししゃぶって、頂いたので、ご安心を♡」

そうじゃない。第三者がいる前で、逆アナルプレイをしたくないって話なんだよ！

「ま、待つ、お、おおおおおお!!」

桔梗のアレが、俺のアヌスを一気に満たした。バックで突かれた俺の背筋がびんと跳ねる。

「すっごおい、桔梗さんがご主人様のお尻をずぶってやったら、ご主人様の子供チンチンが……お、大人？ チンチンに急成長したよ♡」

桃香が、どもののも無理はないと思う。前立腺を刺激されて強制勃起させられたチンコは、さっきまで以上に肥大化していた。

そして容赦のないが俺の前立腺をえぐる。乱暴に傍若無人に、連続で何度も危険な快樂の扉をこじ開ける。快樂と衝撃が、前立腺を中心に全身へ伝わり続ける。

「もう、がまんできなあい♡ 桃香のぐちよ濡れオマンコに、そのギンギンでビンビンの勃起チンポ突っ込んでえ♡」

「そうですね。では、御館様、桃香さまのオマンコをどうぞ、ご堪能あれ♡」

バックでアヌスを犯されていた俺は、さらにチンコまで犯され、俺の体が、新たな快感にびくついた。

桃香の熱い膣内が俺のチンコを飲み込んでいく。桔梗がこれでもかというほど腰を押し付けて、ぐにゅぐにゅとうごめく桃香のマンコ

から俺のチンコを逃がさないようにする。

「うぐううう、あがあああああつ」

「御館様、気持ちよさそうだなにより♡ 桃香さまは?」

「んいいつ、あ、あひい、すごいのお……来てるうつ、ゴンゴン来てるのお♡ あ、うああ、オマンコの奥に、かたいの当たつてえ♡ あああ……はひつ、ンああああ♡♡♡」

「なら、もっと激しくするとしましょう♡ 御館様もよろしいですね?」

既に俺は腰くだけの状態で桔梗のペニバンと腰を掴んだ手だけで支えられて桔梗と桃香の間に挟まれている。桔梗は、俺が言葉を発する余裕などなく、止められないのを分かっている上で言っている。おまけに桔梗がリズムカルに前立腺をいじめてチンコを反応させる。俺のチンコは桃香のマンコの奥まで突き刺さり、とろついた膣内がチンコを削り取るように絞ってくる。桔梗の巧みな腰振りをアヌスで受け止めて、それを桃香のマンコへと送る中継点のような、まるで、桔梗が桃香を孕ませるために俺を使っているかのような、状態だった。さっきのサンドイッチによる疲弊と、手枷と、桔梗と俺の身体能力の差も相まって、俺が何かできる余地はない。

「ああああああ……しゅ、しゅい♡ しゅごひいのお♡ チンポ、しゅごしゅぎるう……ンああああああ♡♡♡ ら、らめえ♡ チンポ、ズコズコされてバカになっちゃおう♡ あひいいいいいい♡♡♡」

「あひ、ふひいいいい……」

「クク……御館様、すっかりと、口元がとろけ切っておりますよなあ♡ ワシの偽チンポで犯されるのがそこまでよいのですかな? それとも、桃香さまのオマンコを犯すのが……いえ、オマンコでオチンチンを犯されるのが良いのですかな?」

背後から桔梗が、俺が前後からの性感帯をいじめられて震える姿を、快楽に苦悶の表情を浮かべているのを、嗤ってみているのを感じられた。

込み上げてきた絶頂が間近に迫った時、激しかった桔梗の動きが

徐々にゆるやかにになった。

間違いない俺の絶頂を感じ取った桔梗が動きを遅めていた。

快樂に、腰は震えて開きっぱなしの口から涎を溢れさせていた俺は、もう、ただ下半身に溜まったものを吐き出したいただけになっただのに、こんな事をされるなんて……

動きがゆっくり過ぎて、チンコでもアヌスでも絶頂することができない。段々と動きだけじゃなく、アヌスをついていたペニバンは、浅いところを刺激するだけで、前立腺まで届かなくなり、桃香のマンコも、桔梗の動きが遅くなったことで、ほとんど動かなくなり、グニグニと動く膈内の気持ちよさはあっても、それだけじゃ、イクには足りない。

「おや♡ 御館様、御自分で腰を動かし始めてどうされた？」

「あうううう……」

「だんまりですか？ 黙っては何の解決にもなりませんぞ♡」

桔梗の声を無視して、自分で腰を振って桃香のマンコにチンコを突っ込んで、桔梗のペニバンを自分から迎えに行く。

「んふう……ねえ、もつとお……もつとお、はあげえしいくう♡ こんなんじや足りないのお……チンポで、私のおなか、突きまくって、いっぱいドピュドピュしてえ♡♡♡」

桃香が物足りないと声を上げた。

分かっている快樂で腰の抜けている俺の貧弱ピストンじゃ、自分すらイケないって……

だから、俺は我慢ができなくなって叫んでいた。

「た、頼む、桔梗、もつと激しく突いてくれええ！ 桔梗のチンコで俺を突きまくってくれえ!!」

もう、恥とか、外面とかどうでもよかったとにかくイキたかった。「フフ、わかりました。」

必死に腰を振ったのに桃香さまに駄目出しされたダメな御館様に、本当の腰振りというモノを教えて差し上げましょう♡」

桔梗は、そう言うと、がちちりと俺の腰を掴むと、腰を突き出した。浅く突かれていた前立腺が深く、強く、長く押し込まれ、突きまわさ

れる。

「ぐひいいいつ、おほおおおおお!!」

「ひうっ♥ うぐうっ♥ あああああ…これ、これを待つたのお♥ すごいいつ、あひあああつ、すごすぎるよお♥♥♥」

桃香のマンコも激しい挿入にチンコを締め付けて喜んで迎え入れてくれた。

だが、もう、絶頂を目の間にした俺には、強かった。

前立腺を桔梗に全力で押し潰され、チンコを桃香に締め上げられるというどめの連携攻撃は、余りにも強力すぎた。

「あぐっ、あああああああああああっ!!!」

桔梗の一撃で、メスイキしながら、桃香の中にまだこんなに出たのかと言いたくなるほど、射精していた。

そして、そのまま、俺は、意識を失った。

〈周倉side〉

桃香に呼び出されて向かった宿。宿の主に誘導された部屋には、某機動戦士種の歌姫の続編での艦長服（陣羽織なし）を着た桃香と、その偽物の格好をした桔梗がいた。

…紫苑もそうだが、桔梗も年齢的にかなり痛いぞ。爆乳的にはありだと思いがな。

そんなことを考えているうちに、二人がかりで服を脱がされ、寝台に腰掛けると、桔梗が俺の首筋から胸、それに腹へと舌を滑らせて行く。

興奮が急速に高まっていくのを感じる。

「はむ、ちゅぷ…んっ、ちゅぶっ、れろれろ♥」

桔梗は、早くも大きくなり始めたチンポを舐め上げていく。

裏筋に舌を擦り付けて、硬くなつていくチンポをうっとりした表情

で味わう。

そして両手で竿をやさしく上下に擦りながら、先端を咥え込んでいく。緩やかに唇でしごきながら、口内で亀頭に舌を擦り付け、指で陰嚢や口に入りきらなかった竿を細やかな愛撫してくる。

「ちゅ、ちゅば、ちゅばつ、んちゅう……ちゅぶ、ちゅぶぶ……はふうん♥ 本当におまえのチンポは大きい……ちゅちゅう……ん、ちゅぶぶ、ちゅ、んちゅ♥」

「桔梗さんだけずるい、刃さん、私にもさせてえ♥」
「ああ」

うなずくと桃香は喜々として俺のもとへと這い寄り、桔梗がチンポを加えたまま、場所を譲ると、綺麗な指でそつと俺のチンポの硬さを確かめる。

「本当に、刃さんのオチンポすごおい♥」

うっとりとした声を出し、亀頭を咥える桔梗の口から唾液が溢れ、桃香の指へと垂れるのも気にせず、桃香は太さを確かめるように手で根元を握り締める。

「すごく太い……それにすごく硬くてあつつうい♥」

フェラチオを一度中断し、桔梗は桃香に場所を空けた。桃香は桔梗に礼を言うと、チンポを握り直して硬さを確かめてから、二人の刺激で硬く反り返ったチンポをゆっくり擦り始めた。

「刃さん、私にもおしやぶりさせてね♥ んちゅ……あはあ♥ んちゅ、ちゅつ、ちゅぶぶ……」

俺の許可も待たずに桃香はチンポを舐め始めた。

ふと、二人が魅力的な尻を振りつていることに気が付き、それと同時に二人とも片手が見当たらないことに気が付いた。そしてすぐにその理由が分かった。二人とも片手で自分のマンコを弄ってオナニーをしていたのだ。

短い裾がめくれてノーパンで尻丸出しになっていることに気づかず、マンコを弄る桃香と衣装が食い込んでもともとデカイ尻がより一層に強調され、それを見せつけるかのように振りながら、マンコを弄る桔梗。

「れる、ちゅっ ♥ この張り出した笠が、マンコの中で擦れて堪らない ♥」

「ンチュウ……ああっ、わかります。入ってくる時も凄いけど、出て行く時にここが一杯に広がって中をいっぱい擦ってくるのが凄いですよね ♥」

それにこの長さが堪らない……どんな体制でもオマンコの奥の奥まで届いて ♥」

「その通り、もう、これを知ったら、これからは離れられん ♥ 御館様のチンチンでは物足りなすぎる」

「そうそう ♥」

俺のチンポを舐めながら、二人は、俺のチンポの評論を繰り広げる。正直恥ずかしさがこみあげてくるからやめてほしい。チンポにあたる舌や会話の吐息がむず痒い。

桔梗は、唇を広げてチンポを舌と口の粘膜でもてなす。俺は手持ち無沙汰になって、二人に手を伸ばして桃香の衣装の中に手を忍び込ませてノーブラの柔らかな胸を、桔梗の方は、衣装がはち切れそうな胸を衣装越しに揉み始めた。

「あああっ、い、いい……もっとしてえ……ああん ♥ そう、もっと強くう……んあっ、あひ、あはあああっ ♥ ♥ ♥」

「はふうん……あああああ……あはあっ ♥ いい……あううっ、激しい……あひいいいん ♥ ♥ ♥」

二人とも乳首は勃起して俺の掌に擦れる。股間では、マンコが大きく口を開け、そこから愛液を溢れさせていて、そこを弄る手も止まる様子がない。

「あはああっ ♥ もう我慢できないよお ♥ ♥ ♥」

桃香はそう叫ぶと、甘い吐息を吐き出し、舌を伸ばして竿を舐め、唇と舌の両方でチンポを愛撫する。桔梗が亀頭を開放すると入れ替わるように、桃香が唇をかぶせていく。

「ちゅぶ、ちゅっ、ちゅばっ、ちゅむむ……はむむ……あん、ちゅぶぶ、んちゅうっ、ちゅむうう ♥」

チンポを3分の1ほどまで啜えたところで頬を窪め、巧みに吸いた

て俺の快感をあおる。普段、人々の為に言葉を紡ぐ唇をすぼめて吸い立て、十分にその大きさを確かめると、舌を使って敏感な裏筋や力りの部分を刺激する。

「んんっ、んちゅ、はふう、んちゅう……ちゅぶ、れろろ、ちゅううう♡」

亀頭が桃香の口内を擦りあげる度に、快感が腰の方まで広がっている。

亀頭を譲った桔梗が、唇を開き、竿に沿って舌を這わせたり、唇で陰嚢を刺激する。

その間にも二人の指が鼠蹊部や乳首を刺激して、さらには張り詰めた怒張を優しく激しく擦りたててくる。

「刃、気持ちよいか？」

「ああ、最高だ」

「フフ♡ そうか、では、これはどうだ？」

桔梗舌を滑らせ、そのまま俺の尻に尖らせた舌で愛撫した。

「うおうっ!？」

突然の攻撃に思わず声が出た。だが、桔梗は俺の様子にかまうことなく、愛撫を続け、時折、舌を錐のように尖らせて尻の中へ挿入したかと思うと、唇を付けて吸いたてる。あまりの気持ちよさに思わず身悶えてしまう。

「ん、んちゅ、ちゅちゅ……相当気持ちいいようだなあ♡」

桔梗のアナル舐めにチンポを脈動して、先端から我慢汁があふれだす。そして暴れるチンポは、桃香の口がしゃぶりつき、先端から滲み出る汁を舌先で掬い取り、さらに鈴口に尖らせた舌をねじ込むようにしてくる。

並の男ならあつという間に射精してしまいそうな快感に耐えながら、俺は桃香たちとの快楽を味わう。

「れる、ちゅぱっ♡ 桃香さま、このまま心行くまで楽しみたいところですが、そろそろ……」

「ぶはっ、ちゅっ♡ うん、そうだね。刃さん、ここからは、絶対にしゃべっちゃだめだからね」

俺の口に人差し指を当てて桃香が命じた。

俺が黙ってうなずくと、にっこりと笑って、桔梗に合図を送った。桔梗はそれにうなずくと部屋を出て、すぐに戻ってきた。

裸で手かせとアイマスクを付けた北郷を連れて。

思わず、何を考えているんだと、叫びそうになった俺の口に桃香が再び、人差し指を当て、黙っているよう合図した。こんな状態だ。もう腹をくくり、指示通り黙って気配を消すことにした。

二人は、手早く北郷の手枷のついた腕を頭の高さまで上げ、天井から伸びていたフックに取り付けて固定した。これで奴の腕は動かせなくなった。

それから桃香はおもむろに北郷の耳に手を回し、何かを取った。どうやら、耳栓もしていたらしい。

「ご主人様、お待たせ♡」

「その声、桃香か!？」

「うん、そうだよ。ついでにここにご主人様を連れてきてくれたのは、桔梗さんだよ」

「桔梗もいるのか?」

「ここに♡」

「何でこんなことを?」

「何でって、ご主人様に気持ちよくなってほしくて、桔梗さんと協力することにしたの。私が、いつものアレをやりつつ、桔梗さんとまぐ

わってもらおうと思って♡」

そう言いながら、腰の帯を解いてノーブラの胸を背後から北郷に押し付け、ヤツの股間を軽くしごく。

その間に桔梗は部屋の隅から、女の下半身を模した人形にハンドルとレバーが付いたものを取り出し、北郷の前にある机に置いて、人形のマンコにローションを流し込んだ。

それから、その対面にスカートを外してレオタードだけになった桔梗が机に手をついて俺を手招きする。そつと桔梗のそばに近づく。

「あふっ」

「はあい、ご主人様、動かないでねえ♡ 動いたら、桔梗さんのオマンコに入らないよお♡」

桃香が握った北郷のモノをオナドールのマンコに当てた。

俺も促されて同じようにチンポを桔梗のマンコに当てる。

「あん♡ そう、そこですぞ。さあ、御館様のオチンチンを中へ……」

桃香が、俺に口パクで合図を送る。

「『いち、にい、のお、さん!』えい♡」

「うおあ!」

「んひひひひひひひ♡ きたあ♡」

桃香に合図にあわせて、俺は桔梗のマンコに挿入した。

桔梗は、俺のチンポを受け止めながらオナドールのハンドルを回し始めた。どうやら、あのハンドルが膣内の蠢きを表現しているらしい。

本当にどこでそんなもん作ってんだか (made in GI)。

「ほらほら、ご主人様ったらあ♡ じつとしてないで、桔梗さんのオマンコを後ろから、いっばい突いてあげないとだめだよ? こんな風に♡」

「くう、おふっ!」

そんなことを思っていたら、桃香が北郷を動かし始めた。

それに合わせて俺も桔梗を後ろから犯す。

「ああんっ♡ 勢い良く、お、奥に突かれてえ……あはああああ♡♡

♡ いい、はひひひひんっ♡」

ハンドルを回しながら、桔梗は、俺を受け止める。そんな桔梗に覆いかぶさるように抱きしめ、桃香の方を向いて指をくるくると回す。エロに関しては察しがいい桃香はすぐに俺のサインの意味を理解して、ニヤツと嗤った。

「ご主人様、腰をへこへこ振るだけじゃだめだよ、奥もグリグリしてあげなくちゃ♡」

「お、おおおお!! こ、これやべえええ!!」

腰を密着させたまま、のの字に回して、桔梗の奥を削りながら、手を伸ばして爆乳を揉みし抱く、レオタード風の衣装の上からも分かるほど勃起した乳首も一緒に弄ぶ。

「奥、グリグリってえ……あああんっ♡ はうっ、きひひひ……お、おかしくなるうっ♡ あはあああああ……」

身悶える桔梗を抑え込み、激しく、攻めたてながら、片手を爆乳から放してクリトリスをつまむ。

「あッ、あひゃあああん♡ あはあ……はひっ、はふ、あああん……くひひひひひひひ♡♡♡」

桔梗の首筋を衣装越しにかみつくと、面白い位に身体がはねた。

「おおおお……で、出るうー!」

桔梗の反応を楽しんでいると、いつの間にか北郷がイキそうになっていた。桃香がこつちを見て口パクでイキそうか聞いてくる。俺が首を横に振ると、桃香はとても楽しそうな顔になった。

「(刃さんがイキそうじゃないから)ご主人様、まだ駄目だよ♡」

「なッ、あぐううう!」

桃香の手が、北郷のを強く掴んで、無理やりせき止める。北郷が必死に桃香の手をはがそうと悶えているけど、はがせない。

「と、桃香あ!」

「もうちよつと我慢すれば、最ッ高に気持ちイイから我慢しようねえ♡」

俺は、そんな二人を見つつ、桔梗を攻めたてる。

「んあああああつ♡ 激しい……す、すごい……あああつ、あふううん♡」

「ねえ、桔梗さん」

「はひっ、ひいいん……あああ……と、桃香さま？ あくううつ♥」

突然、桃香に声をかけられた桔梗は、喘ぎながらも返事をするが、たぶん、声をかけられるまで、桃香のことを忘れてたんじやないか？

桃香の合図で俺は動くのを止めた。

「フッフ♥ 桔梗さんも、もっと激しく、いっぱいオマンコをチンポでズンズンされたいよね？」

桃香は、サディスティックな笑みを浮かべて、蕩けきった桔梗に声をかける。

桃香は腰を動かすのを止めたが、北郷に余裕を作らせるつもりはないらしく、北郷の身体を刺激してさらにじわじわと追い詰めていく。

俺も桔梗の身体を弄り、キスの雨を降らせる。

「熱くておっきいチンポで、激しくオマンコ突きまくられて、オマンコの奥に熱くてどろっどろのをどっぴゅんびゅるるってたっぷり出されて、赤ちゃん仕込まれたくない♥」

赤ちゃんという単語に桔梗のマンコが反応し、身体が震えた。

「あ、ああっ、チンポ、チンポでズンズンされたい♥ マンコに、マンコにいっぱい出されたい♥ ワシの中に、出してえ♥ あっ、あひいひいひいひいひい♥♥♥」

桃香のGOサインが出るのを確認し、桔梗のマンコにおねだりを言い終わった直後にチンポを奥へと突き入れ、打ち付ける。

「ひいひいひい……んああああ♥ あひい……あああっ、いひっ、あはあああああっ♥♥♥」

「と、桃香あああ、だ、出させてくれええええ!!」

北郷が切羽詰まった声を上げるが、正直、ウザったい。桔梗の声が聞こえないだろう。

「桃香、桃香、桃香桃香ああ!!」

「んひい、チンポが、ワシのマンコの中で、ビクビクしてえ……はぶっ、あああん♥ 中に、中に、出してっ♥ ワシのマンコに、いっぱいどっぴゅんして、ややこをはらませてくれえ♥♥♥」

そう言いながら、桔梗も俺にあわせて、腰を振り、手に爆乳を押し

「あはっ♡ 桔梗さんのおっぱいすごいよ、ご主人様あ♡ 後から一突きされるたびに、ぶるんぶるんってすんごく激しく揺れる♡」

それを目ざとく見つけた桃香が北郷に報告する。北郷が桔梗の爆乳見たさに必死になってアイマスクを外そうと動くが、アイマスクは外れない。まあ、外れたら俺がアウトなんだがな。

優越感を感じながら、桔梗の爆乳を揉みし抱く。

「ひんっ♡ あはあん……また、またイカされるっ♡ あん、チンポにイカされるう♡ んああああああ……」

俺は、桔梗の体勢を変え、机に横向きに寝そべるようにさせて、片足を抱え上げて、腰を動かしながら、桔梗の anal に指を侵入させた。

「あひっ、んひいいい♡ あっ、あああああっ♡ すご、すごい……ひい、んああああ♡ チンポ、チンポがあ……ああん、こすれて、こすれてえ……はひ、はひいいいい♡♡♡」

絶頂の気配を見せ始めた桔梗にあわせるべく、ラストスパートに入る。

「うひっ、出るっ、出るっ、出るうっ!!」

「んあああっ♡ ら、らめっ、らめえ……いった、いったのにい♡んひいいいいいい♡♡♡ また、いつ、またすぐイクう……あっ、ああっ、いいいいいっ♡♡♡」

「良いよ出して、ほらほら、いっぱいどっぴゅんしちゃえ♡」

桃香が勢いよく、大きく喘いでいる桔梗の最奥に俺のチンコを叩き込んだ。

「だ、ダメだ出るうう!!」

「んひいいいいいいいいいい♡♡♡♡♡ あっ、あっいつ、あっついい……あ、あはああああ♡ イ、イクうううううううううううううううううううう♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

桔梗の中に出し尽くして、チンポを引き抜くと、マンコから俺の出したモノが、あふれ出てくる。

北郷を椅子に座らせた桃香が、息も絶え絶えな桔梗のマンコに口を付けた。

「あむむむ……ちゅっ♡ ちゅちゅっ、れろれろ……ちゅぶっ、んぢゅ

見比べながら、おかしそうに言う。強制勃起された北郷のモノが俺のよりも劣っているとはいえ、笑うのはかわいそうだ……同情はしがないがな。

桔梗に突かれて喘ぐ北郷の姿は、俺には気持ち悪い以外何物でもないのだが、桃香には性欲を駆り立てるものだったらしい。両手で恥ずかしげもなく愛液をしたらさせるマンコを広げて俺を誘う。

北郷の姿に萎えかけたチンポも、桃香のマンコで回復した。

「もう、がまんできなあい♥ 桃香のぐちよ濡れオマンコに、そのギンギンでピンピンな勃起チンポ突っ込んでえ♥」

「そうですね。では、御館様、桃香さまのオマンコをどうぞ、ご堪能あれ♥」

桃香の尻を掴むと、桔梗の尻とはまた違った柔らかさがあった。

桔梗とタイミングを合わせながら、ゆっくりと挿入していく。

桃香の膣内は、他の女たちと違い、快楽と共に心地よさを感じさせる。それを楽しみながら、腰を動かしていると、北郷が汚い咆哮を上げる。

「うぐううう、あがあああああつ」

「御館様、気持ちよさそうでなにより♥ 桃香さまは？」

「んいいつ、あ、あひい、すごいのお……来てるうっ、ゴンゴン来てるのお♥ あ、うああ、オマンコの奥に、かたいの当たつてえ♥ あああ……はひっ、ンああああ♥♥♥」

「なら、もっと激しくするとしましょう♥ 御館様もよろしいですね？」

北郷の返答を待たずに激しく動き始めた桔梗にあわせて、俺も腰の動きを速めた。

北郷は、桃香の時と違い、上半身を手かせだけで支えられている為、邪魔するものもなくて俺は桃香を、桔梗は北郷を突きながら、視線がぶつかった。

桔梗は艶っぽい笑みを浮かべ、わぎとらしく、身体を大きく振って北郷を突き、自分の爆乳をこれでもかと揺らして俺をおおる。

それにこたえて俺も動きを速めて桃香を犯す。

「あああああああ……しゅ、しゅごい♡ しゅごひいのお♡ チンポ
しゅごしゅぎるう……ンあああああ♡♡ ら、らめえ♡ チンポ、
ズゴズゴされてバカになっちゃう♡ あひいいいいいいいい♡
♡♡」

「あひ、ふひいいいいいい……」

「クク……御館様、すっかりと、口元がとろけ切っておりますよなあ♡
ワシの偽チンポで犯されるのがそこまでよいのですかな？ それ
とも、桃香さまのオマンコを犯すのが……いえ、オマンコでオチンチ
ンを犯されるのが良いのですかな？」

ニヤニヤと笑いながらも動くのを止めなかった桔梗だが、俺に合図
を送りゆつくりと動きを止めた。俺もそれにならって動きを止める。

桃香がもどかしそうに腰を振って少しでも快楽を得ようと、するけ
れど、腰を抑え今度動けなくする。

少し待っていると、北郷が、動き出した。桔梗に促され、俺も同じ
ようなペースで動き始めた。

「おや♡ 御館様、御自分で腰を動かし始めてどうされた？」

「あううう……」

「だんまりですか？ 黙っては何の解決にもなりませんぞ♡」

桔梗のやつ、凄く楽しそうです。でも、止めようとは思わない。大
人しく、桔梗の指示に従う。

「んふう……ねえ、もつとお……もつとお、はあげえしいくう♡ こん
なんじゃ足りないのお……チンポで、私のおなか、突きまくって、いつ
ぱいドピユドピユしてえ♡♡」

先に根を上げたのは、桃香だった。まあ、楽しんでいたのは、桔梗
一人で、俺も桃香同様に動きたいのをぐっところえていたわけだし。
自分よりも先に降伏したものがいるとわかると、自分だけじゃない
と安心して、我慢することを止めてしまう。ましてや、北郷は、すで
に快楽に負けて自分で動いてしまっていた。

「た、頼む、桔梗、もつと激しく突いてくれええ！ 桔梗のチンコで俺
を突きまくってくれえ!!」

恥も何もかも捨てて快楽を要求する姿は滑稽だったが、こちらとし

ても、そろそろ、思い切り桃香と楽しみたい。

俺の様子に気が付いた桔梗は残念そうな顔をした。こいつ、まだ焦らすつもりだったのか？

「フフ、わかりました。」

必死に腰を振ったのに桃香さまに駄目出しされたダメな御館様に、本当の腰振りというモノを教えて差し上げましょう♡」

ようやくGOサインも出て、俺と桔梗は容赦なく動き出した。

「ぐひひひひひっ、おほおほおほおほおほ!!」

「ひうっ♡ うぐうっ♡ ああああああ……これ、これを待ってたのお♡ すごいッ、あひあああつ、すごすぎるよお♡♡♡」

待ちに待った俺の突き上げに桃香が歓喜の声を上げる。

「あぐっ、あああああああああああつ!!!」

「あううっ、あああんっ♡ イ、イイっ、気持ちイイのお……んひひひひひひひ♡♡♡」

桃香は、体を大きくくねらせ、それに合わせて胸が揺れる。

俺は、桃香の体に覆いかぶさり、それに手を伸ばした。

全体を手で揉みながら、乳首を指で転がし、扱くように刺激する。

「あつ、あはあああ……ああん、ダメえ♡ そこ感じるのお……はううっ、ああん、あひひひひひ♡」

桃香が、そのしなやかな体をのけぞらせる。俺は、桃香の体を抱き締めながら、腰を小刻みに使って攻め続ける。

「ああああああ♡ すごいのお……はあん……ああ、激しい……ああううううっ、ああん♡」

桃香の首筋にキスを繰り返して、桃香の嬌声を聞きながら、チンポをマンコの奥深くまで挿入させる。それと同時に片手をクリトリスへと伸ばした。

「ひっ、ひひひひひん♡ あんっ、あああつ、あああああ……すごい、すごい♡♡♡」

腰を振り、クリトリスをつまんでやると、桃香は歓喜の声を上げる。

「ああん、イって、イってっ♡ わたしもイっちゃう……お願い、そのままに出してっ♡」

桃香の膣圧が増して俺のチンポを締め付ける。

俺は、お返しに激しく動いて、子宮にチンポを何度も叩きつける。
「あつ、あああつ、イク、イクのっ♥ ああん、イクイクっ♥ 刃さん、私、いつちやうつ、イクっ イ、イ、イクうううううううううううううううううッ♥♥♥♥♥」

高みに昇り詰めた桃香の肉体が、痙攣する。

チンポをきつく包み込んだまま蠢く桃香の中に、俺は何度も射精を繰り返した。

「はふうう♥ あつ、ああああん……あふう、すごい……」

射精して、一息つくと、ぐったりと椅子に座っている北郷とこちらをあきれ顔で見ってくる桔梗がいた。

「二人とも、もり上がりすぎです。御館様が気絶していたからよかつたものの……」

「ごめんなさい……」

「すまん……」

素直に謝ると桔梗は、仕方がないともう一度ため息をついてから、俺の手を取った。

「まあ、過ぎたことはここまでにして、今度はワシと楽しもうではないか」

「あああ！ 桔梗さんは、二回もしてもらったでしょ！ 私はまだ一回しかしてもらってないんだから、もう一回は私！」

「桃香さまは、あれほど激しく気をやったばかりでお疲れのはず、ここは無理をせず、ワシにお任せを」

「忠臣みたいなこと言ってもごまかされませんからね！」

ギャーギャーと騒ぐ二人を眺めていると、桔梗が俺の頭を掴み、爆乳を押し付けてきた。

「刃、もう一度ワシとしたいな？ 今度は、向かい合ってまぐわおう。ワシの乳を吸いながら、おまえの手で、尻を揉んでくれ♥」

桔梗の提案を想像すると、勝手にチンポが臨戦態勢になっていく。「フフ、ワシとのことを考えてチンポを大きく」刃さん、イきますねえ

♥「桃香さま!?!」

勃起したチンポは、俺の上に座った桃香の中へと入ってしまった。
「なあ、横取りとはっ!?!」

〈北郷 side〉

気が付くともう、日が昇っていた。

「あ、ご主人様、やっと起きた! もう、お昼まで寝てるなんて、さすがに寝すぎだよ」

「ご、ごめん」

あんなに絞られたら当然だろうって怒鳴りたいところだけど、我慢して、手渡された濡れた手拭いで顔を拭き、服を着る。

「ほら、ご主人様、帰ろ?」

「ああ」

部屋を出ていく桃香を追いかけて外に出た。

最終話

〈北郷 side〉

「は？」

桃香に言われた言葉の意味が、理解できなかった。

「だあかあら、この間の会議で話し合ったとおり、ご主人様は、これから、別の、城に、移って、もらうの」

「なんでだよ!？」

会議なんて、鈴々のフェラで聞いてねえよ。俺が怒鳴り付けると、朱里が一步前に出た。

「会議でもお話ししましたが、魏や呉とはもう、争うことはありません。今後、最大の敵となるのは、五胡となるでしょう。この蜀は、五胡との戦の際には、最前線となる場所です。」

そんな危険な場所にご主人様を置いておくわけにはいきません」

そう言われると、ここが危ないって言うのはわかる。だけど、だからって桃香たちみたいなイイ女を手放すわけにはいかないし、俺専用の娼館とかあるし、恋とかがいるんだから、大丈夫だろう？

「これも、会議でお話ししましたが、ご主人様の為に用意した城とその街には、ご主人様の娼館で働いていた方や、希望者の女性を集めています」

「マ……本当か!？」

「はい。すでに移って頂いています」

「おおおっ!!」

思わず、身を乗り出す。どんな女がいるのか気になって仕方がない。

「あ、そうそう、会議で話したと思うけど、愛紗ちゃんとか、みんなで順番にご主人様のところに行く事になっているからね」

「そうです。すでに、水面下で熾烈な（譲り合いの）順番争いが行われています」

何か話を聞いて、考えてみたら、別に困ることなんてないか？

だって、みんなが順番に来てくれるってことは、みんなといつでもできないってことだけど、逆に言えば、一人一人と濃厚にできるってことだろう。

だったら、悪くなさそうだな。

「わかったよ。その城に行くよ」

「じゃあ、もう、馬車も用意できているから！」

「はあ!？」

え？ 今日、出発すんの？ マジで!？」

驚く俺をそっちのけで、猪々子と斗詩に担がれて、馬車の下に連れていかれた。

そこにはすでに月と詠がいた。

「なんか急に、こんなことになっちゃったけど、行こうか」

そう言つて二人に手を向けるけど、二人は俺の手を不思議そうに見ている。

「どうしたんだ？」

「どうしたって……もしかして、会議で私たちがあんたの専属めいどを交代するって決まったの、聞いてなかったの!？」

「あ、いや……」

詠の剣幕に圧されて、何とか誤魔化そうとするが、マジかよ。二人は俺についてくるとばかり思つてたのに!

「はあ……もう、いいわ。新しいめいどが馬車の中で待機しているから」

殴られるかと思つたら、そんなこともなく、馬車へと促された。

扉を開け、中に入ると、そこには、俺の親衛隊の娘と桔梗や紫苑や麗羽みたいな爆乳ではないけれど、愛紗や桃香クラスの巨乳を持ち、将や軍師たちには少し劣るけど十分な美女メイドたちがいた。

「よろしくお願いいたします、御使い様!」

気が付いたら、両手が巨乳メイドの巨乳を掴み、チンコに親衛隊の奉仕を受けながら、馬車に乗っていた。

〈愛紗side〉

ご主人様が、やっと旅立たれた。

ご主人様には、これからも服を作っていたきながら、外界から隔離された城で生きて頂くことになっている。

ご主人様が、旅立たれてしばらくして、私たちは桃香さまに呼ばれて、会議室に集まった。

「私、劉備玄德は、刃さんと結婚しようと思いますー!」

皆が集まって開口一番、桃香さまがアホなことを言い出した。誰かが言った桃色髪はアホで淫乱というのは、正しかったということか。

「何を言っているのですか、桃香さま!」刃は、私の副官です。刃のお嫁さんになるのは、私です!!」

「愛紗ちゃんこそ、何言ってるの!?!」

何言ってるのとは、なんですか? 刃は私の副官なのだから、公でも私でも私を補佐し、私も補佐する関係になるのは、自然の理というモノなのに。

「鈴々も、お兄ちゃんのお嫁さんになりたいのだ!!」

「ほら、桃香さまが変なことを言うから、鈴々まで、こんなことを言いだしたじゃないですか」

「なんで私のせい!?!」

桃香さまが頬を膨らませてこちらをにらんでくる。あざといことしても冷めるだけなのでやめてほしいです。

「刃は、南蛮大王であるみいのお婿さんになるんだじよ!」

「そうにや」

「そうによ」

「そうにやん」

南蛮の五人(匹?)は、今日もかわいいけれど、今は黙っていような?

「」「」「ひっ?!」「」

「ワシは、これまで通りに相手をしてくれれば、構わん」

「……私には、ここで名乗り出る資格なんてないし」

「私は、刃といわれれば、何番でもいいんだが……」

我関せずといった感じの桔梗に、小さくなっている楓。あ……いらしたんですか、白蓮さん。

「月、ここで名乗り出ないと!」

「大丈夫だよ、詠ちゃん。だって私たちは、刃さん専属のめいどなんだから」

（お嫁さんなんかよりも、公私でお傍にいられるめいどの方が、上なので）

ちゃっかりと、自分の地位を確保していたらしいめいどたちは、それ以上を望んでいないようなので置いておこう。

「お姉さまも、刃さんのお嫁さんになりたいってえ!!」

「なっ!? たんぽぽ、そんなこと言っていないだろう!!」

「なりたくないの?」

「……なりたいです」

「ほらやっぱいい!!」

翠は、たんぽぽが余計なことを言わなければ、考慮にも値しないな。だから、蒲公英、黙っている。

「刃さんほどの殿方ならば、やっぱり、袁家ほどの名家でなければ、釣り合いませんわ!!」

「もう、没落したも同然ですけどねえ……」

「麗羽さま、頑張れえ!」

煩い三人は、もとより眼中にないので、勝手に騒いでいろ。

「恋殿は、参加しないのですか?」

「刃が迷惑するなら、恋はお嫁さんじゃなくてもいい」

「とつても健気なのです! そんな恋殿こそ、お嫁さんにふさわしいのです!!」

せっかく健気なんだから、そのまま健気でいさせておけ。

「璃々には、まだ、お父さんが必要だと思うの」

大丈夫、璃々は元気いっぱいにちゃんと育っているぞ。子供をダシ

にしようとするんじゃない。

「わ、私たちは最初から刃さん一筋だったんですから、私たちこそ、正妻になる権利があると主張しましゅ!!」

「あわわ、でも、朱里ちゃん、正妻は一人だけだよお」

「おい、朱里、はわあわで同盟組もうとして失敗しているぞ。」

「桃香さまと刃が、結婚するでいいじゃないか。」

「そうすれば、閨で桃香さまと刃の二人から……クフフ」

「だよねだよね!」

己の欲望駄々洩れの焰耶の一言に桃香さまが便乗する。

「もう、刃に決めてもらえばいいのでは?」

「それだあああああああっ!!」(ほぼ全員)

星の案が採用され、刃に誰と結婚するのかと迫ったが、外面的には我々全員、ご主人様を愛していることになっていたので、結婚はできないだろうと返され、全員で絶望した。

だから、内々で式を行い、外には明かせないが、全員と結婚したいと刃に言われ、全員の気持ちは一気に振り切れた。



蜀の武将や軍師たちは、五胡の脅威を考え、蜀に舞い降りた天の御使いを脅威の少ない地に城を作り、そちらへ移した。天の御使いは、その地で様々な服を生み出し、後に服の神として祀られ、多くのデザイナ―たちが訪れる聖地となった。

武将や軍師たちは、定期的に天の御使いのいる城へと訪れ、愛を育み、多くの子宝に恵まれた。

だが、近年、劉備玄德の手記が発見されたのを皮切りに、蜀の主な

武将や軍師の手記が発見され、それによると、劉備をはじめ、武将も軍師も天の御使いと閨を共にしたことはなく、子供たちは天の御使いの子ではなく、蜀の守護神とされ、祀られている周倉の子であると記されていた。

その為、天の御使いに、三国最大の勘違い男やら、地上最大の寝取られ男といった不名誉な名で呼ばれるようになった。

番外編
番外編 アンケート結果発表！

季衣&流琉「『転生者無双 奪う者と奪わる者』アンケート結果、発表!!」

流琉「作者曰く蜀メンバーだけにしたら、不正が起こりそうとのことで、全く関係ない魏の私と季衣が司会進行することになりました。よろしく願います!」

季衣「よろしくね!」

蜀一堂「よろしく願います!」

流琉「では、早速、結果発表を行っていきます。投票者数27名。皆さんありがとうございます」

蜀一同「ありがとうございました!!」

季衣「投票してくれた時に、グループを考えてくれた人もいたけれど、今回集計した際には、そのグループでは、カウントせずに、書かれていた名前だけでカウントしているんだって。」

そここのところは、ごりよくしよくください」

流琉「それでは、まず、北郷sideから行っていきます」

季衣「デケデケ（どこからともなく取り出した小太鼓を連打しまくる）デデン!」

流琉「北郷side、第一位!」

季衣「え? いきなり一位なの? こういうのって三位からじゃないの?」

流琉「あのね、第一位が圧倒的に人気で、それ以外の人たちが、もう、ドングリの背比べになっちゃっているから、一位から発表してほしいんだって」

季衣「ふうん」

流琉「では、改めて、北郷side第一位！ 6票！ 南蛮カルテツト!!」

蜀一同（南蛮カルテツト以外）「ワーワー」（これで面倒な梓が一つ減った！）

美以「お〜」

ミケ「まい」

シヤム「があ」

トラ「orz」

季衣「作者からコメントが届いてるよ。えつと……「マジで!?」もう、ネタ思いつかなくて苦肉の策で書いたのに！ これ以上どうしろってんだ!!」……うわあ、本音だだもれだあ」

流琉「あ、あはは……そ、それでは、一位を取った南蛮カルテツトを代表して美以さん、コメントをどうぞ」

美以「周倉sideの間違いに違いがないじょ!」

流琉「残念ながら、間違いではありません。コメントありがとうございますございました!」

季衣「じゃあ、次は、北郷side第二位を発表するよ！ なんと、

第二位は3人入ってるよ!!」

蜀一同「ええええええ!!」

季衣「正確には、コンビ1組と個人1人だけどね。それでは、北郷side、第二位!!」

流琉「デケデケ（季衣から渡された小太鼓を連打しまくる）デデン!」

季衣「メイドコンビ&桔梗さん、です!! あ、ついでに票数は3票だよ」

月「……」（白眼）

詠「月？ ちよ、ちよつと、しっかりして、月え!!」

桔梗「たぶん入るだろうとは思っていたが……」

流琉「こちらにも作者からのコメントが来てます「桔梗は入ってくると思ってた。予想通りです。でも、メイドコンビが来るとは思ってもみなかった」だ、そうです」

季衣「続いてメイドコンビの代表、月さんのコメントですよ！」
月「なつてしまったものはしょうがないので、頑張ります」

季衣「前向きなコメント、ありがとうございます！」

月「いえいえ（はあく）」

季衣「最後のため息がすべてを物語っているね。じゃあ、続いて桔梗さん、お願いします」

桔梗「この不満を御館様の尻に叩き込んでやる」

ヒイヒイヒイヒイ

季衣「今、どこかで悲鳴が聞こえた気がするけど、きつと気のせいだよな？」

流琉「それでは、続きまして第三位を発表します」

季衣「あれ？ 二位が二組あったんだから、四位じゃないの？」

流琉「作者が「たぶん、同票になるのが出てくるだろうから、そうになったら、そいつらで一本書くだけだから何人被っても一位、二位、三位でいいや」ってなったんだって」

季衣「うわあ、大見得切ってるねえ」

流琉「では、気を取り直して第三位！」

季衣「デケデケ（流琉から返してもらった小太鼓を連打しまくる）デデン！」

流琉「投票数2票！ 軍神コンビ&紫苑さんです！」

蜀一同「ワーワー!!」（ヨシ、これでめんどろなものが終わった!!）

流琉「作者からのコメントです「軍師コンビが入ったのはマジで意外。それ以上のコメントはない。紫苑に関しては、桔梗と共に入ってくるんじゃないかなあって思っていたので、驚きはないなあ」だ、そうです。」

軍師コンビ代表の朱里さんからコメントをお願いします」

朱里「絶対に周倉 sideと間違ってます!!」

流琉「作者もそう思って三回調べなおしたそうです」

朱里「きいいいいいい!!」

季衣「え、呼ばれた!？」

流琉「呼んでないよ。続いて、紫苑さんです」

紫苑「まあ、やれることをやりますね」

流琉「コメント、ありがとうございます。」

一位がこんなに圧倒的なんて予想外でしたね。一位の南蛮カルテットで一話、二位のメイドコンビ&桔梗さんで一話、三位の軍師コンビ&紫苑さんで一話作る予定だそうです。おめでとうございます。おしくもベスト3入りを外れてしまった方々の順位は、以下の通りです」

第四位 一票

桃香・星・主従コンビ・斗詩・馬コンビ・焰耶

その他 0票

愛紗・鈴々・白蓮・麗羽・猪々子・楓

麗羽「あら？ わたくしと猪々子が0なのに、斗詩には1票入っているのね」

斗詩「いえ、こつちに関しては、入っていてもそれほどうれしくないんですが……」

白蓮「匂いフェチ系とか、特殊だから、投票してもらえと思ったのに……」

愛紗「作者的には、私か鈴々も入りそうだなと思っていたらしいぞ」
鈴々「でも、0なのだ」

流琉「では、メインイベント、周倉sideの順位発表を行いたいと思います！」

蜀一同（ドキドキ、ドキドキ！）

季衣「それじゃあ、周倉side第一位!! 投票数8票 序盤より圧倒的人気で、スタートダッシュを決めてから、一度も抜かれることなく一位を守り抜いたのは……」

流琉「デケデケ……デデン！」

季衣「愛紗さん!!」

愛紗「わ、わたししか!? や、やったあああああああああああああ
ああ!!」

季衣「作者からは「愛紗は北郷の方になると思ってたけど、本編中一番、周倉とイチャイチャしてたし、そう思うと、当然の結果だった

のかな？」だつてさ。

じゃ、愛紗さん、コメントをお願いします」

愛紗「うれしい、私に投票してくれた方々、ありがとう!!」

季衣「うわあ、笑顔がキラキラ輝いてる。それと一位になれなかった人たちのどんよりが凄くいい」

流琉「え、えつと、それでは、周倉sideの第二位を発表します。投票数6票で二名います!!」

蜀一同（ドキドキ、ドキドキ）

季衣「デケデケ……デデン!」

流琉「なんと、周倉side北郷side両方で二位になりました。月さん&詠さんです!」

月「へ、へうううううう」

詠「う、うそ……」

流琉「周倉sideについては、作者的に個人戦のつもりだったそうなので、メイドコンビではなく、月さん&詠さんと呼ばせていただきます。作者よりコメントです「メイドってポジの強さを見た感じ。他のキャラも+したメイド隊にしてご奉仕してほしいみたいな意見も多かったなあ」だ、そうです。」

それでは、お二人からコメントを頂きたいと思います」

月「うれしいです。向こう（北郷side）は適当にやりますけど、こっちは全力で頑張りたいと思います」

季衣「うわあ、さつき言つてたことと逆のこと言ってるよお。じゃあ、詠さんもどうぞ」

詠「ま、まさか、こっちにも入れるとは思わなかったわ。」

…でも、入賞したからには、この賈駆文和、持てる全てをもつてやらせてもらおうわ!」

流琉「力強いコメントありがとうございます」

季衣「それでは、ラスト! 周倉sideの第三位を発表するよ!!」

蜀一同（ドキドキ! ドキドキ!!）

流琉「デケデケ……デデン!」

季衣「投票数5票。最終日の1票が同点だった人を引き離れた、単

独の第三位！ 恋さん!!」

恋「……(???)? グッ」

蜀一同「ええええええええええええええええええ!!」

流琉「えつと、恋さんは、個人投票の他にねねちゃんとの主従コンビでの投票もあつて票を伸ばしたそうです」

季衣「作者からのコメントだよ」「正直、周倉sideでは一番予想外。他上位はさり気にも何度か登場していたけど、恋はメインパートの時だけ。これがキャラ愛なのか……」だつてさ」

流琉「それでは、恋さんからのコメントです」

恋「ありがとう(*。*」

季衣「それじゃあ、入賞できなかった人たちの順位を一挙公開するよ。四位からはこんな感じ」

第四位 4票

翠、楓

第五位 3票

桃香、朱里、雛里、音々音

第六位 2票

蒲公英、紫苑

第七位 1票

鈴々、星、斗詩

第八位 0票

白蓮、麗羽、猪々子、焰耶、桔梗、美以、ミケ、トラ、シヤム

季衣「以上!」

翠「一票、一票差かあ……」(↑最終日まで同着3位だった人)

楓「感想であんなにボロカスに言われていた私に、こんなに入れてくれるなんて……ありがとう」

桃香「私、原作蜀編のメインだよね!? 元祖メインヒロインには勝てないってこと!」

朱里「感想でいっぱい私と雛里ちゃんのこと褒めてくれてたのに……やっぱり、おっぱいですか!」

雛里「ぐすん……」

二話（なし／桔梗&月&詠）

朱里たちにたつぷりと搾り取られた俺は、気が付くとコテージで寝かされていた。

待っていてくれたらしい三人となんとか夕飯を食べるも、そのまますぐに寝てしまった。

翌朝、目が覚めるも、起き上がる気力なんてなく、ごろごろしていたら、愛紗がやってきて、今日の担当らしいけれど、体がだるくてムリ。エッチな感じの水着だけど俺のチンコはストライキ中です。

愛紗に膝枕してもらって、ゴロゴロダラダラして過ごした。

そして、三日目、体力が回復した俺のもとに来たのは、普通のワンピース水着の詠、同じくワンピースだけどフリルが付いていて背中も大きく開いている水着の月、そして同じくワンピースだけれど、首のあたりからへその下まで空いていてハイレグな水着の桔梗。

詠の水着にはエロさがないけど、前の世界でプールの時間に乱入して乱交したのを思い出してしまう。

月の水着もエロさがないように見えるけど、ひらひら動くフリルに目が行くとついつい移ってしまう真っ白い足や小さなお尻にエロさを感じてしまう。

桔梗の水着はエロいの一言だ。あの爆乳が左右から押し付けられてできている谷間はもう、峡谷と言っても過言ではないし、ムッチリとした足ときわどい角度のハイレグ……最高です!!

「……桔梗のおっぱいばかり見て、さいってえ」

「へえう、少しは隠そうとしてもいいと思います」

「御館様の顔と股間は正直すぎるだ」

なんか、ぼそぼそ話しているけど、まあいいや、三人に連れられて、一昨日と同じ場所へ行って遊んだ。

砂で詠が城を作っていたけれど、恐ろしく細かく作ろうとしていて、何度も海水を汲みにいかされた。

桔梗は浜辺で酒を飲んでるかと思っていたけれど、意外にも結構

泳いでいた。水の抵抗をもろに受けそうなのに、結構速く泳いでいてついていく事が出来なかった。疲れたのか、仰向けに浮かんでいる姿を遠目に見たときは、浮島が現れたのかと思った。

そんな二人と振り回される俺を砂浜に用意されたパラソルの下で、月が見守ってくれていた。思わず、お母さんと思ってしまうよ！前回のお母さん役とは、真逆なのに。

そして、昼飯を取って少しゆっくりとした。大人の時間がやってきた。

詠が砂の城を作っていた時と同じ要領で水をかけて砂を固めてポコツと横長の山を作った。

そこに寝るようになってきた。枕かと思つてそこに頭を乗せようとしたら、違ふと止められ、腰を乗せるように言われて、いわれるとおりに寝る。

「なんなんだよ。この体勢」

「ふふんっ、こうすれば、お尻の穴までたつぷりご奉仕できるでしょれる♡」

詠は、薄く笑つてそう言うと、砂の山で浮き上がっている俺の腰の前に座り、いきなり蟻の門渡りに舌を這わせてきた。

「おうっ!?!」
ゆるゆるとした舌の動きでその辺りを舐め回すと、詠はアナルへと舌を伸ばす。

「では、主人様、オチンチンは私がご奉仕しますね♡」

詠のテクニクに痺れていると、俺の上に月が寝そべるように乗っかり、そそり立ってギンギンになったチンコに、小さな手が巻きついた。

月はしばらく硬さと太さを確かめるように手を動かした後、亀頭を啜え込んでいく。冷たい指とは対照的に、月の口腔内は熱くたぎっていた。

「うおおおっ!」

詠にネロネロと巧みにアナルを舐められながら、月の口にチンコをしつとりと包まれて、腰が震え、思わず声を上げてしまう。さらにゆ

らゆらと誘うように揺れる月の尻に興奮は右肩上がりだ。

二人が動く度に、極上の快楽が背筋を駆け上ってくる。

「ちゅ、ちゅぶぶっ、ちゅぶ……ちゅぶっ、ちゅぶぶ♡　ちゅう……んちゅう♡」

月は俺のチンコを全部咥え込んでから、舌を絡みつけながらゆつくりと抜き出していく。

さっきまでのまるで聖母のような優しげな雰囲気から一変して熟練の娼婦のようにチンコを咥え込んでいく。月の手は玉袋を揉みしだき、詠の手は太ももの内側を這いまわる。

あの、月の可憐な唇に締め付けられ、舌がチンコに巻きついてくるような感触に、力を入れてこみ上げる快感に耐えようとする。だが、そんな俺の反応を見越したように、詠が舌を尖らせて、俺の肛門に突き立てる。

「あうおおおおおっ!!」

「フフ……御館様、気持ちいいようじゃな。だが、何時までもされたまままというのは、ズルいというもの。御館様には、ワシに奉仕していただこう♡」

敏感なアナルを舌で愛撫されて思わず声を上げる俺の頭を、いつの間にかペニバンを装着した桔梗がつかみ、股間に装着した偽チンコを俺の口に押し入れようとする。

「んちゅう……ちゅっ、ちゅぶっ♡　ちゅむむ……んちゅっ、ちゅぶ、ちゅぶぶ♡」

「れえろお……ちゅっ、ちゅっ、ちゅうう♡　ん、んん、れろ、れろお♡」

「あおっ、むぐうっ!?!」

口を閉じて侵入を防ごうとするも、月と詠の舌技で思わず、声を上げてしまい、強引に口内にペニバンが突っ込まれた。

抵抗しようにも俺の頭を押さえている桔梗の足が俺の腕を踏んでいて動かせない上にメイドコンビの快樂責めで力が入らない。

桔梗が腰を動かすままに、俺の口腔内が蹂躪される。

「ワシのチンポ、しっかりと奉仕してください」

偽物を舐めたところで、桔梗が気持ち良くなるわけない。奉仕と言っているが、一方的に口腔内を犯されているだけだ。

「ほら、もつと舌を使うのです。そうそう、上手ですよ」

たまたま舌が当たっただけなのに、出来た褒美と言わんばかりに、桔梗に頭を撫でられる。不快なはずなのに、何故か嬉しく感じてしまう自分がいた。

一体何をやっているのかと頭の片隅では思っているのに、ローアングルで見える爆乳に目を奪われる。

偽物のチンコを啜えた俺を嬉しそうに見下ろしている桔梗、そして、俺のチンコとアナルを攻める月と詠。

自分の高ぶりが、月と詠の攻めによるものなのか、桔梗の股間から生えたモノを舐めさせられているからなのか、わからなくなる。

桔梗に口腔内を犯すように腰を動かされ、上顎や舌を擦られると、腰が砕けそうになる。

「へえう、お主人さまのオチンチン、ピクピクして、もう、いつちやいそうです♡　じゅぶぶ、ちゅぶ♡」

「一生懸命、お尻を締めて耐えているけど、これで御終いね♡　れえ♡」

強引に詠の舌がアナルを押し広げて我慢を緩め、月のフェラが最後の壁を吸い崩した。

「んんんんんん!!」

桔梗にペニバンを啜えさせられながら、月の口の中に射精した。息苦しさで快楽で頭の中が真っ白になって訳が分からなくなる。

「御館様、チンポを舐めて気持ちよくなってしまったのですかな？」
「ひっ、ひがっ、あうう……」

違うと否定しようとしたものの、口内から引き出された俺の唾液で、てらてらと光っているモノを見せつけられ、頬が熱くなる。

「違う？　ウソをおっしゃるな♡　月、詠、御館様のオチンチンは萎えていらっしやるか？」

「全然、逆にピンピンで、まだまだできそうなくらい昂っているわね♡」

「ご主人様のオチンチン、ビクンビクンしてます♡」

桔梗たちが微笑む。

「フフ、期待通り、もっと気持ちよくして差し上げましょう。それでは、四つ這いになって」

こんな状況はおかしい。そう、頭のどこかでは思っているはずなのに。言われるがままに、よろよろと四つ這いになる。

四つ這いの体勢で月にし掛られ、今度はチンコを手で扱かれる。

「ツふああ……」

「気持ち良さそうな顔……すっかりとろとろになっちゃって♡」

「詠……」

「ええ♡ あむ……ん……ちゅむむっ♡ ご主人様の味がする♡

ちゅぷ、んちゅっ、ちゅぶぶっ♡」

俺の目の前で、桔梗に促された詠が、桔梗のペニバンを、俺の唾液がべったりと付いたペニバンを、フェラし始めた。

俺以外の誰かをしゃぶる姿に、寝取られたような、言いようのない興奮が俺を燃え上がらせる。

背中に乗った月の体温とささやかな膨らみの感触、そして、細い指でチンコをしごきながら、アナルまで、攻め始めた。

「ご主人様ぁ♡ よおく見てあげてください。詠ちゃんがあんな助平におしゃぶりしているモノがご主人様のココに入るんですよっ♡」

「あふ、っんおおお……」

俺の体内でグニグニと月の指が動き回る。

「詠、もっと御館様に見せつけるように激しくせんか、こうやって♡」

「んぶっ♡ ふぐっ、むぐぐ……んぶ……じゅぶ、じゅぼぼっ、じゅっ、じゅぼっ、じゅぼっ♡」

桔梗が詠の頭を掴んで、さつき俺にやっただみみたいに、いや、それ以上で乱暴にペニバンを口に突っ込む。

喉の奥まで激しく突かれて、詠の目に涙が浮かぶ。だけど、それ以上でその姿はエロくて、嫌が応にも俺は興奮した。

「へえう、桔梗さん、ご主人様、詠ちゃんが羨ましくて、お尻振ってますよ♡」

「む、ならば、お相手せねばな♡」

「じゅぽっ♡」

詠の口からペニバンを引き抜いた桔梗が、月と入れまわるように、俺の背中のにし掛かる。桔梗のやわらかすぎる胸が背中に押し当てられる。さつきまで、月のささやかなものが当たっていただけにその存在感は圧倒的だった。

「ひゃうっ」

その柔らかな母性に身を委ねそうになったが、ペニバンが俺のアナルを撫で上げた感触に、鳥肌が立ち、思わず上ずった悲鳴が漏れた。

その体制のまま、桔梗が腰を前後にゆつくりと抽送してくる。後ろから犯されているような錯覚に陥り、快感が背筋を走る。単調に前後に擦られていたかと思うと、今度は尻穴をなぞる様に滑っていく。

「ひあっ、あ、あ、あ」

反射的に竦んだ身体を見て、愉しむようにくすくすと笑う声が複数、聞こえる。

「今、ご主人様、ビクッてしていました♡」

「お尻に入れられるかもって思ってた期待したのかしら？」

「御館様、もっと堂々と様れませんと、まるで生娘のようですよ♡」

反応を確かめるように、ゆつくりと、再び尻穴に擦り付けられる。

「では、そろそろ、お楽しみモノを、あげましょう」

そういうと、俺の腰に当てられていた桔梗の手が、尻を撫でてからそのまま足の方へ移動してグイッと俺を持ち上げた。

「へえう、桔梗さん凄い……」

「うわあ、恥かしいところ丸出し……」

駅弁の体勢にされて月と詠に開脚した体勢ですべてを見られる。隠す気力さえ、今の俺には残っていなかった。

「さあ、それではっ♡」

「ひいひいっ」

来たる衝撃に身構えるが、ペニバンは、浅く侵入したが、そのまま中には入らず、滑るように玉袋を後ろから突き擦り、その先のチンコの裏筋を撫でた。

「うひひひひっ」

予想外の快樂に声を上げてしまう。

「おや、上手く入りませんでしたな。では、もう一度♡」

そのまま、何度も同じようにペニバンは、滑り、アナルに入らず、後からチンコを擦った。

「うわあ、ご主人様のオチンチン、偽オチンポに擦られてうれし泣きしてます」

「朱里たちに話したら、大喜びしそう……」

やめて！ 一昨日すでに変な餌与えられてよ怒んでたんだから、これ以上、腐女子に餌を与えないでください!!

「上手くは入らんのお、二人ともちと手伝え」

「わかりました」

「はいはい」

見に徹していた月と詠がこっちによつてきた。

月が俺に抱き着くように身を寄せて尻肉を掴んで左右に穴を広げた。

詠が俺と月の間にしゃがみこんで桔梗のペニバンの位置を調整する。

「いいわよ。グイツと行っちゃって」

「ウム」

「ま、まつ、うあああああっ!!」

ペニバンが、卑猥な音を立て、俺の中に一気に侵入を果たす。

「すつごおい、全部入っちゃった」

「へえう、ご主人様のお尻凄いです……」

「ワシが鍛えたのだから、この程度、造作もないぞ」

俺を犯す桔梗が何故か得意気にする。

「っあ!? そんな、うあああッ!」

圧倒的な質量を受け入れた衝撃に翻弄されている。

それを受け止めるのに精いっぱいだというのに、桔梗は止まることなく、今度はゆつくりと、浅いところまで引き抜かれる。

ずるずると浅いところまで引き抜かれたソレが、桔梗の腰が打ち付

けられるのに従ってまた俺の奥を貫く。ごりごりとアナルを挟られている快樂に、抑えきれない嬌声が上げてしまう。

「あぐ、あぎい……おおおおっ!!」

「ご主人様、凄い助平なお声が出ちゃつますよ♡ 女の子におちんぽで犯されて気持ちいいですか?」

抱き着いた体勢のままの月が真っ直ぐに俺を見つめて問いかけてくる。チンコが月の水着に擦れて快樂を俺の脳に送り付けている。

はかなげな美少女からの卑猥な問い掛けに俺は思わず、視線をそらした。

「月の質問に答えなさいよ!」

俺の下にいる詠が、痛みを感じるギリギリの力で玉袋を噛んで、返答を要求してくる。

「どうなんですか、ご主人様? 詠ちゃんにペロペロされてぐつつちよりにされたお尻を桔梗さんのオチンポでズポズポ突き上げられて気持ちいいんですか?」

「ほらほら、どうなのよ♡」

「ッ、やつ、いいつ、キモチイイ!!」

詠の歯の力が強くなって、我慢できず、俺は叫んでいた。

「私にオチンチン、グリグリ押し付けて、ご主人様の助平汁で水着をベトベトにするのも気持ちいいんですか?」

月はより体を密着させて、俺の腹と自分の身体でチンコを挟み込んで、身震いする快樂が生まれる。

「あ、ああつ、きもちいいよっ!!」

「詠ちゃんに、タマタマ、つぶれそうなくらい強く噛まれるのはどうですか?」

詠が噛む強さを調節しながら、舌で玉袋をなぶる。

「いいよっ、キモチイイ!」

巨悪な三点責めに射精感がこみ上げてくる。

「ご主人様、もうイキそうなんですか?」

「ああ、イク、イキそうだ!!」

もう、月の問いかけに応えるのに戸惑いはなかった。

「どれでイキそうなんですか？ 桔梗さんの偽オチンポですか？」
桔梗が強く俺を突き上げた。

「私の身体ですか？」

月が体を揺すってチンコを擦った。

「詠ちゃんのおしゃぶりですか？」

詠が玉袋を啜り上げた。

「ぜ、全部。全部で、でるううっ!!」

気絶してしまいそうな快楽で限界を振り切った俺は、月の身体に向かって今日初めて出したんじゃないかってくらい射精した。

「はあはあ……や、やあつ、くひいつ!」

連続で射精した疲れで、もうろうとしていた俺を桔梗が、突き上げて無理やり覚醒させた。

激しく俺の尻と桔梗の腰がぶつかり、音が響く。

「フム、御館様のオチンチンに力がありませんなあ♡」

んなこと言っても、あんなに出たら、無理だよ。

「詠ちゃん……」

「月……」

そんなことを思っていた俺の目の前で月と詠が両手を恋人つなぎで握り合い、キスを始めた。

「ちゅっ、ちゅむ、ちゅぶぶ……ああ♡ ちゅむむむ、ちゅぱっ♡」

触れるだけのものじゃなくて、深い、ディープで濃厚なレスキスを見せつけられて俺のチンコが、再度目覚めた。

「女同士の接吻を見て勃起するとは、本当に御館様は、変態なよう♡」

では、御館様も混ぜてもらいましょ♡」

俺を突き上げながら、桔梗が動いた。

二人のそばまで行くと、俺のチンコを二人の顔に押し付けた。

二人の瑞々しいの頬に亀頭がこすれて、身体が反り返るほどの快楽を生み出すけど、桔梗はさらにつき上げて、二人の唇の間にチンコを突っ込んだ。

うねる二枚の舌が、チンコをなぶり、柔らかい唇が、竿を滑る。

「んっ、ちゅぶ、ちゅう……んちゅっ、ちゅぶっ、ちゅむむっ♡」

桔梗の押し上げるようなピストンに俺の腰が勝手に月たちの間に
つきだされる。

「あつ、ううつ、うくあああ……」

桔梗に犯されながら、月と詠の唇を犯し、俺は快楽を逃がそうと身
をよじるけど、桔梗に抑え込まれた身体は逃げることができず、桔梗
がその腰の動きを次第に速め、俺を追い詰めていく。

「ちゅむ、ちゅぶぶつ、レロレロ……ちゅぱ、んちゅ、ちゅぶぶ♡」
「だ、だめだああつ、出るッ!!」

本来男が達することのない絶頂感に身体が反り返って痙攣する。

「あれ？ オチンチンから、何も出てきませんか？」

「ほんとね」

「フム、出ると言いつつ出ていないということは、御館様はワシらの奉
仕に満足していなかったということ」

そんなわけない朦朧とした意識の中で、違うと、叫ぼうとするけれ
ど、余りの疲労感で、かすれた声しか出ない。

そしてその声は、三人には届かず、さらに搾られることになった。

一話（なし／紫苑&朱里&雛里）

王である桃香や、愛紗たち武将、朱里たち軍師の全員で数日の休みができた。

まあ、全員同時でつてわけにはいかないから、数人ずつで休みに入る。

今回俺と一緒に休みになったのは、愛紗・朱里・雛里・月・詠・恋・紫苑・桔梗・美以・ミケ・トラ・シヤムだ。

親衛隊は置いてきた。

俺の提案で海に行く事になり、この日のために水着をいっぱい作ってきたんだ。たつぷりと楽しまないとな！

いい感じに晴れた青空！

白い砂浜！

青い海！

水着で戯れる美女美少女たち！

夜は俺の提案で作らせたタヒチとかでありそうな水上コテージでしっぽりと…

なんてことを考えたんだが、俺の寝泊まりするコテージだけみんなのコテージから離されてたてられている。

理由を聞くと、音漏れを気にしてらしい。

……まあ、しょうがないか。

けっして、喘ぎ声に誘われて紫苑とか桔梗が攻めてきたらを考えてビビったわけじゃないぞ！

「ご主人様、失礼します」

その声とともに入ってきたのは、噂をすればな紫苑、それと朱里と雛里だった。

三人ともビキニ＋パレオだったから、余計に三人の、紫苑と朱里たちのスタイルの差が、より強調されてしまう。

ただ、朱里と雛里のパレオは短めで細い足が見え、尚且つ下につけているのが水着と分かっていても見えそうで見えない朱里と時折見

える雛里という、異なる二つのチラリズムが妄想を掻き立てる。

紫苑の方は、シースルーなパレオの為、むっちりとした足が透けて見えて色っぽいいし、何よりも歩きたびに揺れる爆乳が、俺の股間を刺激する。

「それでは、ご主人様、行きましょう」

そう言っただけで連れていかれたのは、他のみんなが遊んでいる場所とか違う砂浜だった。

「なんで、みんなのところじゃないんだ？」

「はい。私たち全員と一緒に遊んだら、ご主人様が持ちませんから、ご主人様にゆつくりと楽しんでいただけるよう、順番にご主人様と遊ぶことになりました。」

大変だったんですよ。順番を決めるの」

大変だったという仕事を朱里に俺は思わず頬が緩んでしまう。人気者はつらいなあ！

そんな、競わなくても、みんな相手にしてやるさ！

三人と遊んだ。

泳いだりはしなかったけど、朱里たちと水を掛け合ったり、仕草一つ一つがエロい紫苑に魅せられたりして楽しみ、昼飯は敷物を敷いて用意してくれていたものを食べて、一息ついたところで、不意に朱里が聞いてきた。

「私と雛里ちゃんと紫苑さん、どれがいいですか？」

“だれ”じゃなくて“どれ”。

一瞬意味が分からなかったけど、すぐに水着のことだと理解する。「そうだなあ、紫苑かな」

ある意味当然だろう。だって、一人だけ圧倒的に違うんだから。そつちに目が行っちゃやうだろう！

「あらあら、わたくしですか♡」

微笑みながら、そう言うのと、おもむろに紫苑はパレオの中に指を入れ、下の水着を下ろし始めた。

シースルーで下ろす様子が薄っすら見えて犯罪級にエロい。

足から水着を取ると、座っている俺の顔にその脱ぎたての水着をかぶせて、そのまま俺を押し倒した。

海の匂いと共に、紫苑のぬくもりを感じる。

このまま襲われるのかと思ったが、紫苑は俺の上からどいた。俺の上からどくときに股の間が、マンコがモロに見えた。

どいた紫苑を追うように朱里と雛里が俺の足をそれぞれ持ってひっくり返し、俺をチン繰り返しの体勢にした。

さらに、俺の右足に朱里が、左足に雛里が跨って、紫苑が俺の後ろに回り込んで俺の身体を支える。

腰に当たる爆乳の感触がたまらない。

紫苑にばかり意識が行っていると、足を持っていた朱里と雛里が足の上に座っていて、その手には、いつの間にかそれぞれの下の水着が握られていた。

つまり、今俺の足の上に座っている二人は、ノーパンで、尚且つ、きわどくはだけているパレオの奥には、まだ、誰も受け入れたことのないロリマンが隠れている。

何なんだよ、今日のこいつらは！ バカンスに来てハッチャけすぎじゃないか？ 俺のチンコに、ガンガン来るような事ばっかしやたつて！ サイコーだな！！

紫苑が後ろから爆乳を押し付けながら、ソフトタッチで尻を撫でまわし、海パンを少しだけ下ろして尻を露出させると、尾てい骨のところから、ゆっくりと舌を這わせてきた。

「れえろお♡」

「おっ、おとおおお……」

「はわわ、ご主人様のオチンチン、ビクンビクンしてます」

「あわわ、もう、さきっぽからお汁出てきてます」

海パンから顔を出したチンコをロリ軍師たちに凝視され、左右から

手に持った水着を持ったままの手でチンコをしごかれた。

「うおっ」

「雛里ちゃん、ご主人様のお汁、いっぱい出てきたよ♡」

「う、うん、朱里ちゃんとシコシコしたら、ぴゅるって出てきたね♡」

「あらあら、このままじゃ、わたくしがご主人様に忘れられてしまうそうねえ♡ なら、おご主人様のだあい好きなら、ここを攻めさせて頂こうかしら♡」

「おうっ、うううううっ!」

くすぐるようにアナルを撫でていた紫苑の指がズブズブと入ってきた。

そして、すぐに前立腺を探り当て、指先で調べるように撫で回す。それだけで焦らされるような気持ちになり、腹の底から熱い炎が立ち上ってきた。

「あわわ、紫苑さんの指がご主人様の中に入ったら、ご主人様の顔、トロントロンになっちゃった」

「はわわ、八百一本に書いてあった通りだよお♡」

「そんなに、ご主人様は、気持ちよくなってくださいているの？ わたくしの場所からはご主人様のお顔が見えないから、せめてお声だけでも聴かせてほしいのだけど♡」

前立腺を軽く愛撫されはじめると、どうしようもなく甘い疼きが湧き上がってくる。早くも切ない気持ちが募ってきた。もつと強くしてほしいという願望があふれて、望まれた通りに叫んでいた。

「あぎい、き、きもちいいっ!!」

「ご主人様、こっちはどうですか？」

「私たちのシコシコ、気持ちイイですか？」

左右から掌を重ね合わせる間に、チンコを割り込ませたように水着を押し当てられ、息の合ったパンコキに腰が震える。

「おあっ、い、いいぞっ!!」

的確に弱点を愛撫する紫苑の指に、トントントントんっとリズムをつけて前立腺を刺激され続け、姿勢を支えるために押し付けられた爆乳、呼吸する度に吸い込む女の匂い。

朱里と雛里の息の合ったパンコキ、俺の足の上に乗ってパレオの奥に隠れたロリマンが見えそうで見えない。それらすべてが、俺の五感と、チンコとアナルに強烈な快楽を送り込んで来る。

「ご主人様のお尻、痛いぐらいにわたくしの指を締めつけてきて、もう、イキそうなんですわね♡」

「そうなんですわ、ご主人様？ ならもつと、シコシコしますわね♡」

「シコシコ♡ シコシコ♡」

紫苑の指が激しくなるのに合わせて、朱里と雛里のパンコキも早くなった。

「だ、ダメだ！ 出るううっ!!」

紫苑に押し出されるように、朱里と雛里に絞り出されるように、俺は射精した。

自分の精液を顔面で受けた俺を朱里と雛里が輝いた瞳で見ってくる。

「男の人の顔が、男の人の出したので汚れるのって、凄く来るわね♡」

「うんうん♡」

ダメだ、この腐女子軍師たち……

「温まってきたところで、そろそろもう一本増やしましょうか？」

紫苑はそう言うのと、俺の返事も待たずにアナルに挿入する指を増やした。

「おぐううううううっ!」

食いしばろうとした口から、耐えきれずに声が漏れ、チンコが強制的に勃起させられる。

「雛里ちゃん」

「うん♡」

朱里と雛里が、俺の足に身体を預けるように身を寄せると、朱里は左手に持った水着を、雛里は右手に持った水着を、それぞれ丸めて俺のチンコの先で押し付け合うようにお互いの手を握った。

紫苑の指が押し込まれるのに連動して腰が繰り出され、チンコが朱里と雛里の水着に勝手に、突き出してしまふ。

「うひいっ!!」

さらに二人は、それぞれ残ったもう片方の手を俺の乳首に伸ばし

て、優しくくすぐるように刺激してきた。

「んんっ♡ れろれろ……ちゅっ、ちゅう……れろ……れえろっ♡
ちゅ……んっ、んちゅっ♡」

さらにさらに、二人は俺の太ももの裏に舌を這わせてきて、紫苑もアナル攻めをしているのとは反対の手で、ケツを撫でまわしてきた。

「ああああ……」

こそばゆくも気持ちいい刺激に思わず、身体が緩んでしまう。

そして、そのタイミングを逃さずに激しいアナル攻めが襲い掛かってくる。

快楽に身構えることもできず、ダイレクトに強烈な快楽が叩き込まれ、チンコが水着に擦れてその快楽は倍増して脳へと駆け下りてくる。

歯をくいしばって耐えようとするも、三人の甘い愛撫によってせつかく込めた力が抜けてしまう。

「あ、あ、ああああ……」

「ちゅう♡ 水着がご主人様の助平汁でもうぐちよぐちよです♡」

「れろ♡ 手まで、濡れてきちゃいました♡」

「ご主人様のお尻が、またキュンキュンしてきましたわぁ♡」

「はわわ、雛里ちゃん」

「あわわ、朱里ちゃん」

朱里と雛里が、うなずき合った。

「せえ♡♡」

「の♡」

指先まで抜けた紫苑の指が一気に根元までアナルに突き刺さり、前立腺を押し込み、朱里と雛里が同時に乳首を捻り上げ、当てているだけだった水着ごと亀頭を握りしめた。

「あがああああっ!! 出るうううっ!!」

反り返ろうとする身体を抑え込まれ、丸まったまま、ロリ軍師たちの水着の中で射精した。

「ねえ、雛里ちゃん」

「なあに？」

「はあはあ……」

連続で射精して荒くなった呼吸を整えている俺の前で朱里と雛里がひそひそと話をする。

「……で、いい？」

「うん……いいよ」

朱里の提案に雛里は少し困ったよう顔をして渋々うなずいた。

ロリ二人が、俺の足の上からどいた。

雛里は俺の精液で汚れた水着を身に着ける。その間に朱里が、俺の両足を掴んでそろえる。

そして、雛里が俺の顔の上に立つと、そのまま腰を下ろした。

紫苑の水着の上から、俺の精液で汚れた水着を付けた雛里のまだ幼く、小さなロリケツの柔らかい感触が顔に広がった。

顔全体を押しつぶすような紫苑の尻とも、弾力のある焰耶の尻とも違う、青い未発達の柔らかかさの中に硬さのあるロリケツ。

塩の匂いと、紫苑の匂いと、雛里の匂いと、自分の精液の臭いが混じったにおいにくらくらしてくる。

パレオがカーテンのように視界を遮る。

「はい、雛里ちゃん」

「うん。ご主人様、わかりますか？これ、朱里ちゃんの水着ですよ♡」

その声とともに、亀頭の先に何かか押し当てられた。

「ご主人様あ、タマタマ、こうしちゃいます♡」

「あらあら、朱里ちゃん、そんなに足を上げたら、ご主人様にオマンコ、丸見えよお♡」

玉袋が上から何かに押し転がされた。紫苑の言うことが本当なら、これは朱里の足ってことだ。

で、足を上げているせいでパレオがめくられて、朱里のロリマンが見えてるってことだろう。

見たい。パレオをどかそうと手を動かそうとしたが、いつの間にか、俺の手は、紫苑の尻の下だった。

「あん♡ ご主人様、悪戯はダメですよ♡ オシオキですよ♡」

亀頭に当たっている朱里の水着越しに細い何か鈴口を擦り始めた。たぶん、紫苑の指だ。

「ひぎいっー」

三人の連携責めに早くも三度目の射精感がこみ上げてきた。だけど、あと一押しが足りない。

アナル責めも、玉袋の足コキも、亀頭責めもとんでもなく気持ちいいけれど、どうしても射精に至らない。

「はわわ、ご主人様、そんなに暴れたら、足でクニクニできないですよ♡」

物足りなさに自分から動こうとするも、望んだだけの刺激は得られないどころか、朱里の足が離れてしまった。

「なら、とつてもいい方法を教えてあげましょう♡」

「なんですか？ ……はわわ、そんな方法が!？」

今度は何をされるのかと身構えると、朱里の小さな手が玉袋を優しく揉みしだき、さらに蟻の門渡りを擦りだした。

「おひいいいいいいいいいっ!!」

それが呼び水になった。一気に駆け上がってくる快楽。望んでいたモノとは別の、教え込まされた、本来男が達することのない絶頂へ一気に押し上げられた。

「キャツ、ご主人様、おもらしですか!？」

「ウフフ、雛里ちゃん、おもらしはおもらしでも、それは潮吹きって言うモノよ♡」

「ご主人様がメスイキしてしまったの」

「男のご主人様が、女の子みたいにイっちゃったんですか？」

「そうよ。朱里ちゃん、もっとしてあげて」

「は、はい」

「や、やめえああああ、あ、あああああああああああああつ!!」

制止の声を上げた俺を無視して朱里が手を動かし、紫苑も亀頭責めとアナル攻めを再開した。

一度、達した俺は、あつという間に絶頂へと押し上げられた。

「あわわ、また、ご主人様がメスイキしちゃいました♡」

「男の人の絶頂と違ってメスイキは終わりがいいから、何度でも出来るの♡」

「ですので、ご主人様、たっぷり、メスイキを堪能してくださいね♡」

紫苑の指がアナルの中で暴れて強制的に勃起を促し、さらに鈴口をピンポイントで刺激して、俺を快楽の頂から降ろさない。

「ご主人様、お潮って勢いよく、それもいっぱい出るですね♡ あわわ、朱里ちゃんの水着で吸いきれなくて私の上に垂れてきますう♡」
「雛里がそんなことを言いながらも、亀頭責めをする手を緩めることなく動かして、俺を逃がそうとしない。」

「はわわ、これがメスイキなんですわ♡ すごく妄想がはかどり……勉強になります！ もっともっと、メスイキしちゃってください♡」
「一番楽しそうな声を出しているのは朱里だった。言い直せてないから、取り繕えてないからな！」

「あがあああああああああああああああつ!!!」
連続絶頂で、俺は意識を失った。

〈朱里 side〉

連続メスイキしていたご主人様が反応しなくなったので、雛里ちゃんにご主人様の顔の上からどいてもらったら、白眼向いて失神してしまいました。

「紫苑さん、お願いします」
「ええ」

失神したご主人様を紫苑さんが持ち上げて、ご主人様の泊るお部屋へ連れて行ってもらいます。

それにしても男の人のメスイキは、なかなか見物でした。
これで、私の自主製作八百一本も厚くなるというモノです！

今日の夜は、このネタで雛里ちゃんと夜通し話し合わなければなりませんね。

ご主人様のお部屋の窓から、皆さんがいるであろう方を見ますが、こちらからは見えません。そうなるように設計してもらいましたから当然ですね。

今頃、向こうでは、みんなが刃さんとイチヤイチャしていると思うと心がムカムカしてきます。

「朱里ちゃん、朱里ちゃん、顔が怖いよ！」

おっと、すみませんでした。

今からでも、刃さんたちのいる方に参加したいのですが、今日は、私たちがご主人様の番なので、我慢します。その分、明日は思いっきり、刃さんに甘えますけどね！

「紫苑さあん、朱里ちゃんがぁ……」

「そっとしておいてあげましょう」

三話（なし／美以&シャム&トラ&ミケ）

桔梗・月・詠の三人に徹底的に苛め抜かれた俺が意識を取り戻したのは、翌日だった。

本日の担当は恋だった。だが、今の俺に恋のエロい水着姿に勃つことができない気力はなかった。恋に介護されて、その日は終わった。

その翌日の担当は、美以たち南蛮の四人だった。

四人ともビキニにスカートの組み合わせだった。普段の恰好が格好だから、少し意外だなと思った。

昨日よりは動けるけど、まだ、体がだるいことを伝えると、四人はヒソヒソと何かを話し合い、うなずき合うと俺を担ぎ上げて、外に飛び出して、一昨日行った砂浜に向かった。

美以たちは、俺がコテージで寝てる⇒俺のお世話をしないとイケないから、外に遊びに行けない⇒俺が外にいれば、お世話もできるし、自分たちも遊べる！

つとなつたらしい。

砂浜についたら、そこ辺にぶん投げられるとか、ぞんざいに扱われるのかと思っただけれど、そんなことはなくて、ビーチチェアとパラソルが用意されて、さらに飲み物まで準備してくれた。

心の中で、美以たちのことを悪く思ってしまったことを謝罪しつつ、ゆったりとくつろがせてもらう。

美以たちが用意してくれたヤシの実ジュースみたいな感じの木の実にストローが突き刺さった飲み物でのどを潤しつつ、遊ぶ四人を眺める。

木の実ジュースはさわやかな甘みが、涼しさを感じさせてくれる。

四人で遊びながら、ふとしたタイミングで、誰か一人が俺のところに来てきて、珍しい貝殻やら捕まえた虫やらを見せに来ては、俺の体を気遣ってくれる。

なんだか、引率の父兄になったような気分だ。

ついさつきも、ミケがドデカいフナムシを俺に見せに来て、その時

に丁度、ジュースがなくなったことを話したら、新しいのを用意してくれた。その献身はともうれいんだけど、フナムシを顔の前に突き付けるのはやめてほしい。

昼頃になって美以たちがとってきた魚を焼いて食べた。謎の貝とかは拒否させてもらった。

飯を食べた俺は、ビーチチェアの上でゆったりとくつろがせてもらう。美以たちが、わざわざ日の動きを見てパラソルの位置を調節してくれたので日差しに晒されず、なかなか快適だ。

その横に満腹になって眠くなったらしいシヤムも同じようにビーチチェアに乗っていた。

「んにゃあ……」

「…ッ」

何故だろう。

横で寝ているシヤムが妙に艶かしく見える。

柔らかそうな小さな唇から漏れる吐息。

呼吸と共に上下するほとんど膨らみのない胸。

寝やすい位置に動こうともぞもぞ動く仕草。

そのすべてが、色つぼく見えて、疲れ果てたはずのチンコが目覚め始める。

頭を冷やそうと、ジュースを飲みながら、美以たちの方を見る。

動きに合わせて、水着の短いスカートが翻り、下の水着に包まれた小さな尻が晒される。

美以がミケに飛びついて押し倒す様子が百合百合しく見える。

波のせいでトラの上の水着がめくられてピンク色の乳首が晒される。

三人そろって何かに注目しているようで、並んでこちらに尻を向けてふっっている。

「はあはあ……」

無意識のうちに呼吸が早くなる。四人の何気ないしぐさに欲望が駆り立てられる。

どうしようもなく喉が渴いてジュースを一気に飲み干すが足りない。

いつの間にか、チンコはギンギンに勃起して海パンを押し上げていた。

「シャ、シャム、飲み物のお代わりを……」

「シン〜ン、ふあい」

ビーチチェアの上で器用に四つん這いになって猫のようにノビをして、欠伸交じりに返事を返すと飲み物を取りに行くシャム。その仕事一つ一つに魅せられる。

寝ぼけたようなフラフラとした歩きで木の実ジュースを取りに行くシャムの尻に無意識のうちに視線が行ってしまう。

ジュースを持ったシャムは、真っ直ぐに俺のところに戻らず、美以たちの方へ行き、俺を指差して何か話している。

話が終わると、シャムだけじゃなくて、美以たちも俺の方へやってきた。

「おお、にいのチンチン、ビンビンだじよ♡」

「ビンビンにゃ♡」

「ビンビンによ♡」

「ビンビンにゃん♡」

四人の視線が俺の股間に集まり、気恥ずかしさに思わず、股間を隠す。

四人は気にした様子もなく、ワイワイ言いながら、砂遊びを始め、何かが完成すると、俺をビーチチェアから降ろして、四つん這いにさせ

た。

そして、美以は俺の後ろに回り、ミケとトラが左右に陣取り、シャムが俺の前に来た。

美以が、後から玉袋を優しく撫で回し、トラとミケが左右から体中を舐めてくる。一人残ったシャムは、俺の顔を膝にのせて頭を撫でてくる。

ただでさえ、興奮しまくっていたチンコから取り留めなく我慢汁が溢れ出す。

「あひつ、うあ……」

四人がかりの愛撫に晒されて悶える。四人は、一切、チンコに触れようとしない。

自分でしごこうと思ったけれど、いつの間にか俺の両手は、シャムの尻の下にされていた。

小さなシャムの尻の肉感的な柔らかさではなく、瑞々しい肌の柔らかさが手いっぱい広がる。

「にゃあん♡」

シャムの間延びした喘ぎ声がより一層興奮を煽る。

紫苑や桔梗のようなムツチリとした柔らかい太ももとは違うシャムの太ももの感触。

細くて硬い、顔を埋めてそこまで心地いいわけではないのに、どうしても埋めていたくなる。

「ミケ」

「りようかあい、ドーン♡」

「ふぎいっ!?!」

美以がミケに呼び掛けると、ミケが俺の身体を舐めるのを止めて、次の瞬間、腰に勢いよく飛び乗ってきた。

姿勢を維持できずに俺の腰が下がる。すると、チンコが何かに擦れて、快楽が腰から脳へと駆け上がった。

チンコの下にあったのは、さつき四人が作っていた砂の山だった。

ミケの体重を支え切れなくて、腰が下がったことでチンコが砂の山に乗っていたタオルに擦れてあの快楽が走ったみたいだ。

ミケは俺の背中から降りると、トラと一緒に左右から、脇や背中を舐めてくる。美以も変わらず、玉責めしてくる。

「トラ」

「はあい、んしよっ♡」

「あぐうううっ」

今度は、トラが乗ってきて、再びチンコが砂山に乗せられたタオルに擦れた。

トラは、俺の背中に乗ると、そのまま、背中の上で何度も腰を揺する。その度に、チンコがタオルに擦れる。だけど、十回くらい体を揺ると、すぐに背中から降りて、また、身体を舐めてくる。

「ぺろぺろ、れろ……ちゅ♡ れろお……ちゅぷ♡」

「このコリコリしてるところ、やさしく、モミモミしてあげるじよ♡」

「いいいいいこお♡」

「あ、あつ、ああああ……」

次に、乗ってくる相手を警戒しているけど、誰も乗ってくる気配がない。

四人がかりで体中を攻められているのにチンコだけに触れられない。

そのじれったさに俺は、無意識に動いていた。

「にいい、砂にチンチンこすりつてるじよ♡」

「へんたいにや♡」

「腰がへこへこしてるによ♡」

「はあはあしてるにやん♡」

四人に罵倒されながらも、俺は腰を止めることができなかつた。

チンコをタオルに擦り付ける快樂に腰は早くなつていく。だけど、刺激が足りない。物足りない。四人の愛撫とチンコの刺激でも達するほどの快樂に届かない。

「……ってくれ……」

「「「?」」」

「乗ってくれ! 俺に乗ってくれえっ!」

あのミケやトラが乗った時の衝撃があれば、いけるはず。もう、恥も何もなく、俺は叫んでいた。

「にい、ミケとトラ、どっちに乗ってほしい？」

「はいはい、思いつきり乗ってあげるによ♡」

「いっぱい、上で跳ねてあげるにゃ♡」

どちらにしようか、迷った。

強力な一発のミケと、威力は抑え気味だけど連続のトラ。

どちらにするかを迷ったけれど、すぐに答えを出した。

「ミケに、ミケに乗ってほしい!!」

早くこの生殺し地獄から解放してほしくて、俺はミケを選んだ。

「ミケ、いくのにゃ!!」

「はい、どーん♡」

「おひいっ!!」

腰の骨が砕けるんじゃないかってくらいの勢いで飛び乗られた俺のチンコが勢いよくタオルに擦れて、普段以上に射精していた。

ミケに乗られて射精した俺は、ひっくり返されて仰向けにさせられた。
た。

「紫苑たちが、しっかりとすいぶんほきゅーしなきやダメって言っていたよ」

「どーぞー♡」

シヤムと入れ替わりで、俺を膝枕してくれているミケが差し出す木の実ジュースを飲む。

激しい射精で消耗した体が水分を欲していたらしく、すでに結構飲んでいらずなのに、ゴクゴク飲めた。

下半身の方へ移動したトラとシヤムがそれぞれ俺の足を肩にかついで、片手で足を刺激しながら、もう片方の手で、玉責めを開始した。

ミケが、膝枕したまま、身体を前に倒して、乳首責めをしてくる。乳首責めの快樂もさることながら、目の前にある。ほとんど膨らみがないビキニに包まれた胸に興奮を覚える。

これが、愛紗とか、桔梗とかの巨乳爆乳組ならわかるけど、ぺったん娘なミケでこんなに興奮を覚えている自分に自分で驚いていた。

最後に残った美以は、俺の腹の上に乗ると、腰を揺すり始めた。美以のスカートがチンコにふわふわ当たって、優しく甘い快樂を送ってくる。

「うあつ、ああ……」

膝枕をしてきているミケの胸をガン見しつつ、ミケの乳首責めに酔いしれる。元気いっぱいイメージのあるミケだけど、その攻め方はとても優しく、蕩けそうだ。

「おっぱいコリコリしてきたによ♡ ウリウリイ♡」

足の方に陣取るトラとシヤムが玉責めしつつ、その手を不意にさらに奥のアナルへと移動させて来る。でも、一昨日迄のみんなと違って表面を軽く撫でるだけで、それ以上をしてくれない。

「お尻撫でると、ビクッてしておもしろいにゃ♡」

「タマタマもピクピクしてるにゃん♡」

腰の上で動く美以は騎乗位で俺を犯しているように見えるけど、実際は、スカート部分がふわふわ当たっているだけ。

そのギャップが、もどかしい。

手を伸ばして、美以をチンコの方へ動かそうとしたら、その手をミケに取られて、そのまま、ミケは俺の手を自分のなだらかな胸に押し当てた。

「んにゃ♡」

シヤムとは違った喘ぎ声が俺の煩惱を刺激する。ミケが変わって、美以が俺の乳首を攻めてくる。

「にいのおっぱいコリコリしてるじょ♡」

「ひいっ！」

全身を襲う快樂地獄に悶える。だが、チンコへの刺激は、美以のスカートだけでとてもイケそうにないし、アナルへもシヤムとトラは、

表面を撫でるだけで、メスイキもできない。

気持ちいのに終わりに届かないもどかしさに、俺は叫んでいた。

「た、頼む！ もっとちゃんと触ってくれ！」

「さわってるじよ。コリコリい♡」

「さわってるにや、ナデナデ♡」

「さわってるにやん、イイコイイコオ♡」

「逆にさわられてるによ」

四人は、変わらない愛撫を続ける。

たまらなく気持ちいいのに、絶頂に近づくことができなくて、気が狂いそうだ。

「ち、チンコにさわってくれええええ!!」

「チンチンにさわればいいのかにや？ じゃあ、はい♡」

美以は、あつさりとうなずくと、チンコに指先で、チヨンつと触つてすぐに手を放した。

敏感な部分を触られて、より一層に、物足りなさが募る。

「ち、違う、もつと、もつとちゃんと触ってくれ！」

「にいはワガママだじよ、じゃあ、はいっ」

美以は不満そうな顔をしてから、チンコを右手で掴み、すぐに放した。

掴まれた瞬間、イケると思ったのに、すぐに放されたせいで、イケそうでイケない微妙な位置に追い込まれて、腰が震える。

「触ったらすぐに離さないで、握って、扱いてくれ!!」

「むうう、ちゃんと、にいのお願い聞いたのに、ありがとうもなしにやってほしいことばかりいうなんて、にいはじよーしきがないじよ！ そんな、にいななんて、こうだじよ、どーん♡」

「ひざいいいいいいいいいいいいっ!!」

美以は、腰を高く上げて、勢い良く、腰を落とした。チンコを自分の腹と、美以の幼いロリマンコに挟まれて、俺はまだこんなに出せたのかってくらい射精していた。

「いっぱい大きな声出してたから、喉カラカラにや？ はい」

今度は、横向きにされた俺は、トラに膝枕されながら、木の実ジュースをもらう。

美以が後ろから、抱き着いてきた。ロリの体温がダイレクトに伝わって、もう、勃たないと思っただのに、チンコが三度元気になる。

前に座ったミケが乳首責めをしてくる。敏感になりすぎた乳首への攻めだけで体から力が抜ける。

シヤムは、俺の片足を持ち上げて、肩に乗せると、開いた股に手を這わせて来る。

気持ちよさで、全身が震える。

トラが普段の元気いっぱいな姿からは、想像できない優しい手つきで首や頬を撫でてくる。

美以の手が背後から前に回されて、腹とかを撫で、吐息が首筋をくすぐる。

前に座っているミケの乳首責めもさることながら、一番は、正面に座った状態でわずかに開いた足の間から覗く短いスカートに隠れて見えなかった下の水着の股間部分、生地の間こうにあるロリマンコを想像すると、たまらなく興奮する。

さらに下半身に陣取ったシヤムが、精子の増産を急かすように玉責めをしたり、内股に自分のロリマンを擦り付けたりして煽ってくる。

「あ、あ、あああ……」

全身が溶けてしまいそんな快樂に晒されて、全身の力が抜けてされるがままになる。

「にい、身体が、ビクンビクンしてきたじよ♡ シヤム」

美以がシヤムに声をかけると、俺を仰向けに寝かした。

「はあい、ごっくん♡」

シヤムがチンコの上に勢いよく腰を落としてきた。

「おぐううううううううううう！！」

チンコがその強すぎる衝撃で、絶頂に達した。でも、さつきまでの射精で弾を使い切っていた俺のチンコから、精子は出てこなかった。「にや? チンチンもう、空ツカラだじよ。シヤム、あれで行くにや」「はあい」

再び俺の身体を横向きにして、美以が後ろに張り付いて、シヤムが俺の片足を抱えると、腰を玉の後、蟻の門渡りに叩きつけてきた。

「どーん♡」

「あつ、ああああああつ!!」

オスイキじゃない。前立腺への強烈な衝撃で、強制的にメスイキさせられた。

「どーん♡ どーん♡ どーん♡」

「おひつ、あぐうつ、あああああつ!!」

トラとシヤムが俺の両足を抱きかかえてチン繰り返しの姿勢をさせて、俺の股を跨いだミケが激しく腰を打ち下ろしてくる。その度にメスイキさせられる。

そして、一人残った美以が、何度かに一回、水分補給として木の実ジュースを飲ませてくれる。

せっかく飲んだ水分も、メスイキする度に潮吹きして出してしまうているような気さえする。

もう、何度目かさえ覚えていない絶頂に達して、俺の意識は暗転した。

「どーん♡」

「あざいいいいいつ!!」

なのに、衝撃で強制的に覚醒させられて、イカされる。

「も、もう……」「どーん♡」 あがああああつ!!」

四話（恋／なし）

北郷が、海に遊びに行きたいと言い出した。

普段なら、みんなが適当に有耶無耶にするところだが、今回の奴は違った。

複数種の水着を考案し、さらにコテージの建設まで言い出した。その行動力を普段から発揮し、まともな人格を持っていれば、良かったのに……

水着を見た桃香たちは、何か思案する様子を見せた後、今まで頑張ってきたんだし、ここらで一度ゆつくりと英気を養うべきだと提案しだし、満場一致で可決された。

そして、休みの順番決めのじゃんけん大会が開催された。

謀略・裏切り・強奪……ここはどこの世紀末世界だと言いたくなるような争いが城内で、矛盾に満ちた言葉だが、静かにしかし激しく巻き起こった。

その結果、俺と一緒に休みを取れたのは、愛紗・恋・月・詠・朱里・雛里・紫苑・桔梗・美以・ミケ・トラ・シヤム、そして紫苑についてきた璃々だった。

北郷が適当に説明したコテージを俺が図面に起こして訓練の一環で、兵士たちに作らせた。今後も慰安地として使っていく予定だ。

北郷のコテージだけ女性一同の意見で離れた場所に建てられ、つくりも意識して万が一にもこちらの声が届くことがないように最大限配慮した。

森森才砂海海

森森砂砂海海

森森砂砂海海

森森砂砂コ海

森森砂砂コ海

森森砂砂コ海

慰安地についた俺たちはそれぞれのコテージで水着に着替える。

俺に渡された水着は、ブルーメランパンツ。朱里が「刃さんに(似)合うものはこれしかありませんでした!!」っていうから、仕方ない。しかし、確かに体格は良いと思うが、これしか(サイズが)合う水着がないとか……

色々思うことはあるけれど、さつさと着替えた俺が、砂浜でチェアやパラソル(俺作)の設置や諸々の準備をしていると、元気よく飛び出してきた美以・トラ・ミケは、森へ駆けだしていき、シヤムは俺の設置したチェアで早速、お昼寝を始めた。

次いで出てきたのは、愛紗と恋。恋は、シヤムのそばにしゃがみ、頭を撫で始めた。シヤムは嫌がる様子もなく、昼寝を続け、愛紗はその様子を見て悶えていた。

残りの面子が現れ、紫苑は璃々に声をかけた後、こちらを何度も振り返る朱里と雛里と共に北郷の元へ向かっていく。

月と詠は俺の手伝いをして、桔梗はビーチチェアに座ると、早々に持ってきた酒を飲み始めた。

ワイワイと騒ぎながら美以たちが戻ってくると、シヤムを叩き起こし、恋と愛紗を連れて再び森へと駆けて行った。

残された俺は璃々と遊ぶ。小さな子供の相手に不満はない。だが、一つ言わせてほしい、紫苑、璃々に俺のことを「お父さん」と呼ぶよう言うんじゃない。

その呼び方をしていいのは、璃々の本当の父親や、そう呼ばれる覚悟を持って紫苑の隣に立つことを決めた男だけであることを説いた。やることやっているなので、その覚悟がないわけではないが、万が一、そんな呼び方しているのを北郷に聞かれたらめんどくさいので、今は勘弁してほしい。

賢い璃々はわかってくれたようで「お兄ちゃん」に変えてくれたけれど、あの顔は納得していない顔だなあ。

璃々を背中に乗せて遠泳して戻ってくると、大量の木の実を抱えた

美以たちがいた。

「わあい、いっぱい！」

「どうしたんだ、これは？」

「フ、フ、フウ、これは、美以たちの住んでたところにあつた木の実と同じ奴で、これの中の汁を飲むと、みんな発情期になるんだじよ！」

「甘くておいしかったにやん」

「大王以外のみんなで舐めて、みんな発情期になつたにや」

「体が熱くなつて大変だつたによ」

「……媚薬つてことか」

「「「「「？」」」」」」

女性陣の目の色が変わった気がする。

「でも、採つてから少し寝かさないといけないんだじよ」

「どれくらいだ？」

「んくと、これくらいっ！」

つきだされた指の数は4本つまり今日から四日後、帰る前日か。

璃々から遠泳の話聞いた美以たちも行きたいと言い出し、それにほかのメンバーも便乗して結果、俺の背中に月と詠、恋の背中に美以とミケ、桔梗の背中にシヤムとトラ、愛紗の背中に璃々を乗せて遠泳したり、スイカ割をしたりして遊んだ。

夜、俺のコテージに恋がいた。

胸や腹が大きく開いたワンピース姿の恋は、寝台に座る俺の前に跪いていた。

水着の上から、恋の指が俺のチンポを撫でてくる。こそばゆい刺激に浅ましく膨らんでいき、チンポが立ち上がり、水着からはみ出す。

「刃のオチンポ……大きくなってきた♥」

目を輝かせながら、最初は指先だけで触れていたのに、その内に指

の数を増やしていき、最後には手で掴み、チンポを外に取り出す。

「あ……」

恋は、反り返るほどに勃起したチンポに顔を近づけて、確認するようにおいを嗅ぐ。

「スンスン……オチンポ、刃の匂いだけじゃなくて潮の匂いもする」

「昼間、あれだけ泳いだしな……」

「今は、これ、恋だけのモノ♥」

「いや、これは、俺ものモノだからな」

「……刃も、刃のオチンポも、今は恋だけのモノ♥」

恋はそう言って微笑みながら、自分の顔をチンポに押し付け、マージングするように頬を擦り付けると、舌を伸ばした。

舌先が、赤黒く張り詰めた亀頭に触れる。

「れる……んちゅ……少ししよっぱい……れる……れるっ♥でも……れるれる……んふう、おいしい♥ちゅ、ちゅぶぶ♥」

恋の舌が、ゆっくりと味わうように亀頭の表面を這い回る。

背筋を駆けあがってくる快樂が、肉棒をさらに固く、大きくさせていく。

「んちゅ、ちゅちゅっ、ちゅぶう……れるれる♥凄く熱い……んむう

♥ちゅっ、ちゅぱっ、ちゅむむ……」

いきり立ったチンポを、舌と唇が愛撫する。

恋は、舌を伸ばして、犬や猫が舐めるかのような舐め方をする。動物と言って真っ先に思い浮かぶ美以たち南蛮の娘たち以上に、動物的な部分のある恋らしい舌遣いで、奉仕してくる。

「はぶん♥ちゅぶ、んちゅ、れる♥れるろ……ちゅっ、ちゅちゅっ♥ちゅむ、ちゅぶっ♥ちゅ、ちゅぱっ、ちゅぶぶ……」

培ってきた技巧的な奉仕ではなく、本能で動く動物的な奉仕で、こちらが何も言わないのに、その舌先が、鈴口やカリ首のくびれ、竿の裏側の縫い目などを、丹念に刺激してくる。

チンポが、恋の唾液にコーティングされる。

「今日は、いつもよりも熱心だな」

「ちゅぱっ♥だって、んちゅ……今日は、誰かの事とか考えないで、

れろれる、刃とできるから、ぢゅぶぶ♥」

恋は、につこりと笑うと俺のチンポを口内へと啜え込んでいく。
生温かな感触に包まれ、肉棒がさらに膨張する。

「んぐう……んふっ、んふうう……ぢゅぶ……んむ……んぐっ、ちゅぶぶ♥　じゅぶ……ちゅぶぶっ、ちゅぶ、ちゅばっ♥」

恋が、血管を浮かせたチンポを啜え込んだまま、頭を前後に動かす。柔らかく艶やかな唇が、肉竿の表面をスライドする速度が増していき、口腔粘膜全体でチンポを扱きたててくる。

「んふっ、ふうっ、んむむ……んちゅうう……ちゅぶ、ちゅぶぶっ♥　ちゅぶ……ちゅばっ、ちゅ、ちゅむむ、ちゅぶぶぶ♥」

恋が体を動かすたびに、くぐもった声と湿った音が恋の口元から漏れる。

俺は、体を前に倒し、水着の上から恋の胸に手を這わせる。

「んあっ♥　刃、ああん……」

「いいからそのまま続けろ」

恋に声をかけてから、水着と乳房の間に手を差し込み、柔らかな感触に指を食い込ませる。

「あ、ああんっ♥　あ、ああん……ひゃああッ♥　刃ンン……おっぱい　　イイ……イイ……きやうン♥♥♥」

俺は、恋の胸を無遠慮にまさぐる。

手の平に当たる彼女の乳首が、次第に堅くしこっていく。

「あ、あうっ……あふうう、あああ、やあ、やめてえ……んんんっ、じ、刃のオチンポに、ご奉仕できなあ……イヤあん♥　あ、あはあん、あん、ああん、ダメえ♥」

恋が、チンポを口からこぼしそうにしながら、喘ぎ声を漏らす。

「自分ばっか感じてないで、続けてくれ」

「はううっ♥　刃、いじわる……あむっ、んぶぶ、ちゅぶぶ♥♥♥」

一度、俺の方を睨みつけてから、恋は再び亀頭を啜え込んだ。

「ちゅっ、ちゅぶぶ……んあああっ♥　ちゅっ、ちゅむむ……んふん……んちゅ、ちゅばっ、ちゅぢゅ……ん、んふう♥　ああん……」

唇で肉竿を扱く恋の鼻から、甘えた息が漏れる。

俺は、両手でその双乳を揉みしだいた。

「うううんっ♥んっ、んくう……んちゅ、ちゅぶぶぶ♥♥♥ん、ああんっ♥はふう……はううっ、ん、ちゅむむ……ちゅ、ちぢゅうう♥」

恋が、口唇奉仕を続けながら、悩ましげに眉をたわめる。

俺は、恋の乳房を弄び、その感触を楽しんでから、さらに乱暴に捏ね回した。

「ひゃううん♥♥♥あうっ、んちゅ、ふぐぐうう……あんっ、んんっ、んくう……んぢゅ、あううう……あああああっ♥♥♥」

恋が、くぐもった声を上げながら、身をよじる。

それは、どうにか俺の愛撫から逃れようとしているようにも見えたと、湧き起こる快楽に悶えているようにも見えた。

「んふう、んちゅう……ちゅぶ、ちゅぶぶ♥ちゅ、ちゅばあ……はうっ、うぐぐ……んちゅ……ぢゅずず♥♥♥」

媚びるように鼻を鳴らしながら、恋が竿に舌を絡み付かせてくる。

俺は、ひとしきり恋の巨乳を弄んでから、水着を押し上げて自己主張する乳首を指で摘まんだ。

「んひいいんっ♥♥♥」

体を大きく震わせた恋の乳首を指先で転がし、刺激する。

左右の乳首がさらに充血し、完全に勃起する。

「ぢゅばっ、んああああ……ダ、ダメえ……そこ、やめてえ♥ひやううっ♥♥♥」

チンポから口を離し、恋が弱々しい声を上げる。

「そんなに気持ちいいの？」

俺は、そう訊きながらも、恋の乳首から手を放すことなく嬲り続けた。

「あううう……だ、ダメエ……はあはあ♥そんなに、されたら、ご奉仕に集中できなあ……あっ、あうっ、んあああああっ♥♥♥」

「それくらい我慢しろ。俺だって我慢しているんだ。俺をイカせるまですこのままだ」

「あううっ♥刃、ひどい……」

そう言ってから、恋はフェラチオを再開する。

「そんなこと言いながら、楽しんでるんだろっ？」

「……ちゅぶ、ちゅぶぶっ ♡ んちゅ……ちゅばっ、れろれろ……
ちゅ、ちゅむむっ、んちゅう……はふうん ♡ んああああ……ちゅぶ
ぶぶっ ♡ ♡ ♡」

俺の問い掛けに無言になって、自らの快感を忘れようとするかのよう
に、積極的に肉棒を責めてくる。

そんな恋の必死な攻めに耐えながら、俺も彼女の胸を嬲り続ける。
指の痕が残るほどに荒々しく乳房を揉み、乳首を引っ張ってやる。
恋は、頬を紅潮させながら、チンポを舐めしゃぶり、吸いたてる。

「ちゅぶぶぶぶっ、ぢゅずっ、ぢゅぶぶっ ♡ ♡ ♡ んあっ、はうう……
ちゅぶ、ちゅば……んふうん ♡ んちゅっ、ぢゅぶ……あうう、ひゃあ
ん ♡ ぢゅずずずっ ♡ ♡ ♡」

激しい音をたてながら、恋がチンポを吸引する。

バキューム責めとディープスロートの合間に、鼻息を漏らしなが
ら、恋はそのヒップをもどかしげに揺らしていた。

「んんん、はふうう……ちゅぶぶ、じゅずずずっ ♡ ♡ ♡ ちゅばっ、
ぢゅばっ、ちゅぶぶぶ……ふうふう、あふうん ♡ んんん……
ちゅばっ、ちゅぶぶぶ、ぢゅるる……じゅずっ、じゅぶっ、じゅぶぶ
ぶぶっ ♡ ♡ ♡」

「くっ、出るぞっ！」

俺は、射精すると同時に、恋の乳房を強く揉み、乳首を捻った。

「んぢゅっ、あぐっ ♡ んぐううううううううううううううう
うっ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡」

恋の身体が、大きく震え、くぐもった悲鳴を上げる。

「う、うぐう……んくっ、んむむっ、ゴク……う、うぶ……ゴクゴクッ
♡」

それでも、口を放すことなく、口内に容赦なく溜まっていく精を、喉
を上下させて飲み込んでいく。

精を飲み込む恋の口の中の動きを、まだ啞えさせたままのチンポを
通して感じる。

俺は、満足感を覚えながら、まだ萎えていないチンポをゆつくりと彼女の唇から引き抜いた。

「ぷはあっ♥ はあはあ……」

どこか惚けたような表情を浮かべた恋の半開きの唇と、赤黒い亀頭の間を、粘液の糸がつかぬ。

俺は、おもむろに自分の右足を、恋の太腿の間に潜り込ませた。

「あふうん♥」

水着の股間部分に足指を押し当てられた恋がは、可愛い悲鳴を上げる。

「だいぶ火照ってるぞ……俺のチンポしゃぶりながら興奮したか？」

「あうっ、んくうっ♥ ち、ちがうう……んひっ♥」

恋が目尻に涙を滲ませながら、体を震わせ、首を横に振る。

俺は、足の指を、さらに恋のマッコに食い込ませた。水着で押さえきれなくなった水分が俺の足を濡らす。

「あああんっ♥」

「やっぱり熱くなってるじゃないか……感じてるんだろう？」

熱い湿り気を感じながら、足の親指で水着越しにマッコを刺激する。

「うっ、あううう……違う……そ、そうじゃなくてえ……んっ、んああっ♥ じ、刃とできるって思った時から、はふん♥ オマッコ、熱くなってた……あううっ♥」

恋が、その女らしい体をクネらせながら、可愛いことを言い、甘い声を上げる。

俺は、思わず足の指で、恋の秘部をつねってしまった。

「ぎやううんっ♥♥♥」

恋が、股間を両手で押さええてうずくまって身体を震わせる。

俺はそんな恋を抱き上げ、寝台に上げると、恋の肢体を、無遠慮な手つきでまさぐる。

髪に触れ、首筋をなぞり、脇腹を撫で、乳房を揉み、乳首を指で摘まむ。

「んっ、んくう……あうう……あああっ♥ やっ、やあん……うあ、あ

はぁん……んんっ、ぁん……ぁひひひひひっ♡♡♡♡♡ きゃうっ、ぁぁぁぁぁ……ぁっ、ぁひ、ぁひいん♡♡♡♡♡

喘ぎ声を漏らしながら、目を涙で潤ませ、頬を赤く上気させた恋は、これまで見たどんな姿よりもなまめかしかつた。

俺は、たまらず恋を抱き寄せ、その唇を奪った。

「んむむっ♡ んちゅ……ちゅ、ちゅぶ……ちゅう……ん、はふう……ちゅぶぶ♡」

荒々しく唇を吸うと、恋は俺の腕の中で、弱々しく抵抗する。

俺は、たつぷりと口付けを楽しんだ後、唇を離れた。

次いで、左腕で恋の体を抱いたまま、右手を彼女の股間に滑り込ませた。

「やっ、やぁん♡」

そこは、水着の上からでもはつきりと分かるほどに、熱く潤んでいた。

「もう、ビチョビチョだな……」

「あうう……刃のがほしくて……恋のオマンコ、ぁっ、あううっ♡ びしょびしょになってるう♡」

恋の悲鳴を聞きながら、布地を横にずらし、マンコを露わにする。

「んぁっ、ぁぁぁん♡ やっ、やぁぁん……ぁ、ぁひい♡ ぁぁぁぁぁ……ぁ、ぁはっ、ふぁぁん♡ はっ、はひい、んひひひひひ♡♡♡♡♡」

すでに愛液にまみれているそこに指を潜らせると、恋の身体がまるで電氣を受けたように震えた。

「もう、どろどろだな」

恋に耳元に口を寄せ、そう囁きながら、さらに秘唇を愛撫する。

「あううう……じ、刃ンン……ぁ、ぁ、ぁ……オマンコ、せつなくなるう……んぁっ、ひうううう……やぁん♡」

甘く蕩けていく恋の声を聴きながら、その膣口に、右手の中指を浅く抽送させる。

「んぁぁぁぁぁっ♡♡♡♡♡ やっ、やぁぁ……だめえ♡ ぁっ、あう……オマンコ、ぐちゅぐちゅするの、だめえっ♡」

「だめじゃないだろ？ ここは喜んでるじゃないか」

「ひあぁっ、よ、喜んでるけどおっ、んっ、あぁあん♥ だめえ……あうっ、あん、あぁあぁあぁは」

恋が、普段の百分の一にも満たない弱弱しい力で俺を押しつけようとするが、その程度で押しつけられるはずもなく、逆に俺は、恋に密着して彼女の首筋に唇を這わせ、赤く染まった耳たぶを舐め回した。

「はううう……や、やぁあん♥ お願い、許してえ……あぁあん♥」

耳の穴に舌を侵入させて蠢かすと恋の体から力が抜けていった。

「寝台に両手をつけて尻をこっちに向けろ」

俺は、そう言つて恋の体を開放した。俺自身も、もう、恋に入れたくてたまらなかつた。

「あうう……ん、うんっ♥」

恋は、もぞもぞと身体を動かして、俺の指示した通りの体勢を取つた。

「あぁあ……お願い……刃、早く……もう我慢できない、早くオチンポ頂戴♥」

魅力的なヒップを揺すつて強請る恋の秘唇に、肉棒の先端を押し当ててる。

「ううっ♥ 早く早く……」

俺は、恋の中へと、ことさらゆっくりと挿入させていく。

「あうっ、うぁあぁあぁあぁっ♥ あっ、あ、あぁあぁあ……は、入つてくるう……あううううううううう♥♥♥」

熱く熟した肉壺の中に、チンポを埋め込むと、熱くとろけるような快楽が、肉棒全体を包み込んでいく。

「恋、いくぞっ」

俺は、そのまま腰を前後させた。

「うぐっ！ あっ、あうう……ンあぁあぁあぁっ♥♥♥ あ、あひ、あひいい……す、すごい……んひ、ひいいいいいい♥♥♥」

恋が嬌声を上げながら、快楽に耐えるようにその手を握り締めている。

そして恋の肉襞は、まるで待ち望んでいたモノを歓迎しているかのように、肉竿に絡みついてきた。

る。

「ああん♥ あうう……あ、あひいん♥ あ、あひい……来てるう♥
ゴンゴン来てるう……うああああ♥ おなかの奥に、刃の、刃の
オチンポ、当たってるう♥ お、おおおっ、おあああああっ♥♥♥」
恋が、快樂の悲鳴を連続して上げる。

幾重にも重なった肉襞が蠢き、限界まで膨れ上がった俺のチンポを
刺激する。

恋の名器の快樂に耐えながら、俺は、ひたすら腰を前後に動かした。
「ひあああ……も、もうう……ああああん♥ あんっ、あうっ、ひい
……あっ、あひい……ひいつ、んひいひいひい♥♥♥ あはああ
あっ、またああ……また来ちゃうう……うああああっ♥ あああん、
あひっ、あひいひいひい……ひううううううっ♥♥♥」
獣じみた声を上げながら、恋が悶える。

終わりが迫った膣内が、チンポを搾り上げる。

「あううっ、うぐうっ、あはあん♥ あああ、オチンポ、オチンポびく
びくつてえ♥ 恋の中でビクビクしてるう……んあっ、いひいひい
いっ♥♥♥ 出る？ 出る？ あ、あふ、んひいつ、ドビユドビユツ
て出る？ あっ、あっ、だ、出ひて、出ひてえ♥ うああああああ
あっ♥♥♥ 恋のおまんこの中にい、ああん♥ 出ひてええええ♥
♥♥♥ んひいひいひいひいひいひいひい♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

「ああっ、出すぞ、中に、出してやるー！」

俺は、興奮に身を任せ、恋の膣内に精をぶちまけた。

「んぎっ♥ ひぎひいひい♥♥♥ 出て、てりゅうう♥ は、は
ひい、あへえ♥ い、ひいひいひい♥♥♥ イっちやうっ♥ イっ
ちやううううツ♥♥♥ イク、イクイク、イクうううううううう
うううううううううううううううううううううううううううううううう」

子宮の入り口で射精を受け止めながら、恋は体を痙攣させていた。

恋は、両脚でしがみついたまま、尻だけが動き続けていた。

「あつ、あああん、あふううん♥ はあ、あはあん……んふううう……」
甘い声を漏らす恋の腰が、俺の腕の中で踊る。

体が海水で熱くなつていく橋から冷やされているはずなのに、それ以上に自分の身体が、そして、恋の身体が熱く燃え上がつていくのを感じる。

俺は、恋の尻に手を伸ばし、滑らかな肌を撫で回した。

「あつ、あふうん……んひっ、あん、ふああああつ♥ ああつ、刃、恋のオマンコ、キモチイイ？ ああん、あん、あああああん♥」

「気持ちいいぞ……でも、こういうのはどうだ!？」

「へ？ お、おほおおおおおおおおおおおっ♥♥♥♥♥」

俺は、恋の足を強引に振りほどいて、恋の身体を反転させると、チンポをマンコから引き抜いて、その後ろで蠢いていたアナルに挿入した。

その衝撃に、恋の身体が反り返る。だが、俺はそこで終わらず、片手で恋を支えながら、反対の手で恋の水着の胸の穴から手を入れて、胸を掴んだ。

「ほら、もつと動いてくれっ」

そう言いながら、俺は、柔らかなと恋の巨乳を揉みしだき、指で乳首と摘まんだ。

「きやうううん♥♥♥」

驚いた子犬みたいな声を上げながら、恋は体を震わせる。

「ほら、もつといやらしく腰を振れ……」

胸を揉みながら、後からアナルを突き上げて恋に催促した。

「あつ、あああつ、や、やるう……やるからあ、お尻、いっぱい振るう……んく、は、恥ずかしいけど、刃に気持ちよくなつてもらえるように振るからあ……んひひひひひひひひ♥♥♥♥♥」

恋は、俺の腕を掴んで、回すように腰を動かし始める。

「んうっ、あ、あああああつ♥♥♥ 刃のオチンポ、恋のお尻の中でぐりぐりつてしてえ……んあああつ、あ、あはああ……気持ち良すぎ

身体を痙攣させ、恋が、ゆっくりと俺の胸に身体を預けてくる。
それを抱きとめると、恋は俺ん方を振り返つてと瞳を閉じ、キスを
ねだってきた。

「俺は、恋の唇に唇を重ね、その舌と唾液をたっぷり吸った。」

五話（月&詠／なし）

〈周倉side〉

二日目には南蛮四人と紫苑による擬似母娘井を堪能し、三日目は朱里と雛里と桔梗による無&爆のおっぱいまつりが開催された。

そして、四日目、今、俺は船の上にいる。

船と言ってもそんな立派なもんじゃなくて、小舟だ。

なんでそんなものに乗っているのかと言えば、釣りをする為だ。

恋は、コテージでお昼寝中、子供特有の無尽蔵な体力を持つ美以たちが璃々と監視員として随行する紫苑を連れて森に探索へ、昨日で疲れ気味な桔梗は浜辺で酒を飲み、朱里と雛里はコテージでダウン中。

そして、月と詠は、俺と一緒に船に乗っている。

「んちゅ……れろれろ♥」

勃起したチンポが、詠の生温かな口内の感触に包まれる。

月が、その小さな口を開いて、竿に舌を這わせる。

釣竿を垂らす俺の左右に陣取った二人は、浜から離れると、喜々として俺に身体を寄せ、どちらともなく、俺の海パンを下ろし、フェラを始めていた。

「はぶん♥ちゅぶ……んんん……じゅる……ちゅじゅじゅ♥」

詠が、口の中にたまった唾液を、すすり上げる。

片手を釣竿から放して、まるで、揺れる月の尻に手を伸ばして掴んで、撫でまわし、揉みしだく。

「へえうっ♥お尻、き、気持ちいいですう♥」

月は喜々として俺に抱き着き、俺の手を自分の尻に押し付けてくる。

「ちゅっ、ちゅぶ、んちゅうっ♥もう……月ばかりじゃなくて、ボクにも、何かしてよっ」

「詠ちゃんに刃さんのオチンポを譲ったんだから、愛撫は私でもいいと思うの」

こちらを睨む詠だったが、月にそう言われ、チンポに頭を押し付けられると指して抵抗もせずに、しゃぶり始める。別に、本気で不満

だったというわけではないようで、すぐに、まるで甘いものでも口に含んだような表情で、俺の肉棒に舌を絡めてきた。

「れる……ちゅっ、はああ♥ れるれる……んちゅう……あふうん……ちゅぶ、ちゅむむ♥」

「詠ちゃん、本当に美味しそうにおしやぶりしてる♥ 私もおしやぶりしたくなっちゃいます♥」

赤い唇と舌が、詠自身の唾液と、肉棒が溢れさせる粘液に、濡れていく。

そんな詠を羨ましそうに見つめる月の舌が、俺の胸の上で淫靡にうごめき、詠のしゃぶり切れない部分に指を絡ませてしごく。

「ちゅ、んちゅ、ちゅちゅ♥ ぶちゅ、ちゅうう……んふふ……ちゅぶぶ、んちゅうっ♥」

二人の舌が縦横に暴れ回って俺の性感を高めていく。

二人の舌技に忘れそうになっていた釣竿が引いていた為、引き上げると、そこそこの大きさの魚を釣り上げた。

「ちゅぱっ、大きいわね。でも、みんなで食べるには少ないからもっと頑張つてよ。れるろ♥」

「へえう、私も応援しますから、頑張ってくださいね。んちゅ♥」

うっとりとした表情で、二人は、俺にエールを送りつつ、舌と唇で俺を愛撫している。

「ちゅ、ちゅむむ、ちゅうう……あむっ、んむむっ、ちゅずずずっ♥」
詠が、喉奥まで俺のチンポを啞え込んだ。

口蓋が亀頭部をこすり、舌が裏筋をくすぐる。

「ちゅむっ、あっ、刃さん、引いてますよ」
「ツ！ おっっっ」

チンポ全体を包み込む快感に、耐えていた俺は、月に言われて慌てて釣竿を引き、さつきよりも大きな魚を釣り上げた。

「ちゅ、ちゅむむ、ちゅぶ……はふ……すっごい♥」
「れえろっ♥ 本当にすごいです♥」

「お前らは、何に對していつているんだ？」

俺の言葉を無視して二人の柔らかな唇が、血管を浮かした竿の表面

を滑る。

「んっ、ちゅぶぶ、ちゅず、ちゅうう……あふ♥ 匂いがどんどんきつくなつて……ンン……んふう♥」

「はあ♥ 刃さんのオチンポのにおいだけで、私のオマンコ、ぐちよぐちよですう♥ れろ♥」

チンポの匂いに酔ったように、月と詠は、濃厚なフェラチオを続ける。

その目許は紅に染まり、口元からはしどけなく唾液が溢れていた。

「んむ、ちゅぶぶ、ちゅ、ちゅぶ……あはあ♥」

「はふう……んちゅっ、ちゅ、ちゅぶ、んちゅっ♥」

二人の、細い指が肉竿に絡みつき、しごいて快楽を一定に保つ。

月が尖らせた舌先でカリを、詠が柔らかな舌の裏側で鈴口を刺激してくる。

そして、月の温かい口内に包み込み、いきり立った俺のチンポを吸い上げる。

「ちゅじゅっ、じゅるるっ、ぢゅず……ちゅずっ♥ ちゅぶぶぶッ♥」

「ちゅむむ、れろれろ♥ ちゅぶっ、んちゅっ♥」

詠が、チンポの下、陰囊を舌と唇で愛撫してくる。

チンポの先端から、我慢汁が溢れ出し、それを、月は口内で受け止めて、喉を上下させて啜り飲む。

「んむっ、ちゅずずっ♥ んちゅ……あふん♥ んちゅう……」

二人の顔が、ますます赤く染まっていく。

「んちゅっ、ちゅぶぶ、んンン……うふうん♥ はふう、んちゅ……ちゅむむっ♥ ちゅっ、ちゅっ、ちゅぱっ♥」

チンポのあちこちに月はキスの雨を振らせ、頬擦りをする。

「ねえ、ちよつと腰上げて」

突然の詠の申し出に戸惑いつつも、腰を上げると、詠は俺の股の下に潜り込んだ。

「そのまま、腰を下ろして♥」

普段、複数とやる時、自分が良くやれたりする顔面騎上位をやれという。何をしようとしているのかも明白なので、すぐに従えなかった

が、やれと睨まれて重くないよう意識して腰を下ろした。

「もつと、体重かけてくれてもいいのに……れるろ、んちゅう……れるれるろ♥」

「ツクー！」

釣竿がひていることに気が付いて、詠のアナル舐めで力が抜けそうになるのを堪えて、魚を釣り上げる。

「んむ……ちゅぶぶ……はふあん♥ んちゅう……」

詠の舌が、まるで独立した生き物であるかのようにアナルを刺激し、間断なく溢れ続けている我慢汁を舐め取りながら、月は細く白い指で竿を抜き、陰囊を優しく揉む。

「あむ……ちゅつ♥ はふうん、ちゅむむ……ちゅば、ちゅぶ、ちゅぶずずずつ♥」

月が、チンポの根元に指を添え、小さな口を広げて一気に啜え込んだ。

そのまま、幼い顔に似合わない大胆なディープスロットで、肉棒全体に奉仕してくる。

たまらない快樂に、こらえる。

柔らかな舌が竿に絡み付き、喉奥で龟头を擦り上げる。

「ちゅつ、ちゅぶぶぶ、んぢゆるる……ちゅぶつ、ぢゅぢゅ、ぢゅずず……ぢゅばつ、ぢゅぶぶ♥」

「ちゅぶつ、んちゅ、ちゅぶぶつ♥ ンちゅ……れるろ……ちゅぶ、ちゅぶぶ、れるる♥」

下から詠の舌が強引に蛇口を開き、上から月の口がすすり上げる。俺は、上下からの口淫による快樂に浸り、限界を迎えた。

「くウ、もう…出るー！」

「ちゅぶつ♥ ぢゅずず……ちぢゅずずずう♥♥♥」

俺は、大量の精液を月の口内に迸らせた。

激しい勢いで放出される熱い精が、月の喉の奥に立て続けに打ち込まれる。

月は、上気した顔に恍惚の表情を浮かべながら、俺のを全て受け止めた。

「んく……んっ ♥ んふうウ……ンンン……」

そして、白い喉を鳴らしながら、精液を残らず嚥下していった。

二人のフェラを堪能しながらの釣りでそれなりの成果を上げて陸に戻り、夕飯に俺の釣った魚を食べて騒いだ。

そして、みんなが寝静まったころ、俺のコテージでは月と詠がいた。二人とも、昼間は、セックスはせずにフェラだけで終わっていた為、その眼は欲情しきっていた。

俺の股の間に座った二人は、嫌がることなく、うつとりした表情で口を開くと、チンポを舐め始めた。カリの部分や根元についた自分のじゃない唾液を舐め取り、自分の唾液をまぶし合う。まるで、犬の縄張り争いだ。

「ちゅぶ、んちゅっ、ちゅう……はふうン ♥ 刃さんのオチンポ、おいしい……」

「んちゅっ、ちゅっ、ちゅぶぶ……んはあ ♥ ホント、すごい味い……ちゅちゅっ、ちゅむ……んちゅっ ♥」

美少女2人のダブルフェラに、鈴口からは取り止めなく我慢汁が溢れてくる。月と詠はそれを争うようにして舌で掬い取り、うつとりした表情で飲み込んでいく。

みんなに聞くと俺の汁は独特の味がして、舐めていたくなってしまうそう。まあ、俺のマジカルチンポの効果で、我慢汁にも少量とはいえ精液が混じっているらしいから、好感度上げの効果でそう感じてしまうのかもしれない。

絶妙のコンビネーションを見せるダブルフェラに、俺は腰から下が溶けるような快楽を味わっていた。

詠が龟头を甘く唇でもてなすと、月が竿に舌を這わせて刺激してくる。月が敏感なカリを舌で舐め回すと、詠が陰囊を口に含んでその中

で舌を擦り付けてくる。

「ちゅ、ちゅむむつ、ちゅぶぶ……れろつ、れろれろつ♥　れえろお……あはああ♥　ちゅむつ、ちゅむうう♥」

二人の甘い声と体臭、2つの口と20本の指が巧みに俺を刺激する。

娼婦顔負けのダブルフェラに、チンポの先端から陰囊まで二人の唾液まみれにされながら、そのテクニクに酔い痴れる。

二人を寝台の上で四つん這いにして並べ、今まで一切触れなかったマンコをまさぐる。そこはすっかり濡れて、二人が口腔奉仕をしながら興奮していた事を物語っていた。

「やって欲しかったら、自分でマンコを出して強請ってみろ」

「はあい♥」

二人は可愛い声と惚けた表情で笑いながら、それぞれの方法で桃色のマンコを晒す。

月はマンコを隠しているクロツチ部分をわきにどかして晒した。

「はああ♥　入れてください……淫乱な月は、もう、刃さんのオチンポを、オマンコにハメてほしくてしかたがないんです♥♥♥」

詠はパンツをズリ下ろしてマンコだけでなく、尻全部を俺に晒した。

「ああ、ボ、ボクに……ボクに入れて欲しいです♥　じ、刃の男らしい、オ、オチンポ、つ、突っ込んでください♥」

俺は、詠の腰を掴み、ずぶ濡れになったマンコにチンポを啜えこませていく。

「は、はいってええ♥♥♥　きやうううううううううううううううううう♥♥♥♥♥」

詠の狭い膣道がむりやり押し広げ、身体の中へと進入し、最奥を突

いたその瞬間、詠はあつという間に絶頂へと登り詰めてしまった。

「へえう、詠ちゃんいいなあ……」

「はひっ、ゆ、月は、昼間、たっぷりオチンポ汁飲んだじゃない……こ、今度は、ボクの番なお♡ くひいいいい♡♡ 刃ン、それえ……ダメエ、ま、また、イクううううううううううううううううう♡♡♡♡♡」

詠の膣肉を味わいながら腰を捻ると、膨れた亀頭が子宮口に擦れては再び絶頂をさまよう。

幼さの残る可愛らしい顔を悦楽に歪ませながら、詠は快樂を貪る。

残された月は少し悲しそうな顔をしながら、俺の尻に吸い付いては舌を出し入れして刺激してきた。

「ゆ、月!？」

「ちゅっ、ちゅぶぶ……れろれろ……んむっ、ちゅぶぶっ、れろお……ちゅちゅっ、ちゅううっ♡」

楽しげに鼻を鳴らし、月は俺の尻を舌で刺激し続ける。

俺は詠のマンコに入れながら、月に尻を吸われる快樂にたまらず、唸り声を上げた。

「んちゅ、詠ちゃんにもしてあげる♡ れえろっ♡」

淫らに開いた親友の秘部を我が物顔で出入りしている肉棒を見ながら、月はうつつとりするような声で囁き、詠と俺がつながっている部分に顔を寄せる。

月の吐息を股間に感じ、詠は恥ずかしさに身悶える。

「だ、だめえん♡ 月、見ちゃだめえ……」

「うふふ……恥ずかしがる詠ちゃんも、可愛い……」

「だめだめ、だめえええ♡♡♡ んひっ、あっ、ひあああっ、あううんっ♡

♡ あああああ……そ、そんなところお……あっ、ああんっ♡ あ、ふああん、あああんっ♡♡♡」

恥ずかしい結合部を最愛の友に覗き込まれる羞恥に震えながら、詠は尻を震わせて新たな快樂を味わい、そんな詠を下から串刺しにしたチンポで、俺は収縮する媚肉のわななきを存分に堪能する。

「うわあ……詠ちゃんのオマンコ、刃さんのオチンポをよだれを垂ら

ああ、あん、ああん ♥ あ、ああああ、あひ、い、い、イクっ ♥ いった
ちやううっ ♥ ♥ ♥

詠が声を上げたの瞬間、鳥肌が立つほど甘美に肉壺が収縮し、俺の
チンポをしごきたてる。さらに月が尻に吸い付いて舌を挿しこんで
きた。

「うおおっ、出すぞっ!!」

堪らずに詠の腰を鷲掴みにしながら、溜まりに溜まった精を詠の中
にぶちまけて行く。

「あひいいいいいいいつ ♥ ♥ ♥ 熱い、熱いいつ、ドクドク出て
るっ ♥ あああああああ ♥ ♥ ♥ い、いぐ、いぐうううううう
うううううううううううううう ♥ ♥ ♥ ♥ ♥ ♥ ♥ ♥ ♥

大量の精を膣奥に叩き付けられると、その衝撃で詠も身体全体を痙
攣させながらエクスタシーに駆け上っていく。肉襞の蠢きが、精液に
まみれながら、さらにそれを求めて嬉しそうに肉棒にまとわりついて
くる。

〈月side〉

失神しちゃった詠ちゃんを刃さんの寝台に寝かせて、私たちは、昼
間乗った小舟に乗っています。

刃さんが、その大きな手で私のおっぱいを捏ね回し、指で充血して
堅くなった私の乳首を、クリクリと弄びます。

「あっ、あん ♥ あああ……あっ、あふうっ ♥ あん、ああん……もつ
と、してください……んんん ♥ ああん、ああああ ♥ ♥ ♥

恥ずかしい声を上げ続ける私の乳首を刃さんは口に含み、音をたて
て吸います。私の恥ずかしい乳首が、刃さんのよだれに濡れながら、
ますます堅く尖ってしまいます。

へえう、乳首じゃなくておっぱい全部が大きくなってくれたらいい

のに……

「ンツ、はうう……ああ、感じるう♥ おっぱいきもちいいですう……あつ、あふつ、ンふう♥♥♥」

刃さんの大きな舌が、私のおっぱい全体を舐め回します。

詠ちゃんを先に潰して刃さんを独占できる喜びと、快感が体の奥から溢れて、昼間に刃さんのオマンコを舐めていたところから溜まり溜まっていたいやらしい汁が、オマンコから漏れ出ます。

「もう、ずぶ濡れじゃないか……」

そのことに気が付いた刃さんの指が、私のオマンコをグリグリとまさぐります。

「ひうっ♥ くうん……ふあああつ、は、はひいつ、そんなにグリグリされたらあ、あんつ、ああああんっ♥♥♥」

刃さん限定で淫乱になっちゃう私のオマンコからどんどん溢れてくる助平汁にまみれた指を、私の顔になすり付けます。

羞恥と、それを上回る倒錯的な興奮に顔を熱くしながら、私は誰もいない海で自分から脚を大きく開いて助平なオマンコを刃さんに晒した。

「あはあああ♥ 月の淫乱ど助平マンコを……み、見てください……あうううっ♥♥♥」

大きく開いた脚の付け根に、刃さんの視線を感じます。そして、私も、詠ちゃんにあんなにいつぱい出したのに萎える様子の全くないその太いオチンポに熱い視線を向けながら、オネダリを口にしていました。

「ハア、ハア♥ あああ……どうぞ、入れてください……もう、刃さんの素敵なオチンポを、ハメてほしくてしかたがないんです♥♥♥」

刃さんが、膨らんだ先端を私の下の口に当て、ぐうつと腰を突き出しました。

「入れるぞ、月！」

「は、はううっ♥ あ、うあああ……入ってくるう……ふ、太いッ♥

あつ、ああつ、あひいいい……さ、裂けちやうう♥ あああ……あひ

ああああああ♥♥♥」

……あうん♥♥♥」

何時もと違う刺激に、私の意識はすぐにはつきりと覚醒しました。そして気が付いた時には、私は刃さんの手によつて横向きに寝かせられてしまいました。

さらに私に寄り添うように、刃さんも、船の上で寝そべります。

確か、同士・朱里の持っていたいやらしい本で書いてあつた背面側位でしたっけ？ 二人とも横になつたまま、後ろから貫かれる格好になつています。

「何か敷くモノでも持つてくるべきだったな」

そう言つてから、刃さんは、私の下腹部に突き刺さつたままのあの太いオチンポを、再び動かし始めました。

「あつ、あううつ、あんっ♥ わ、私は大丈夫ですから、いっぱいズンズンしてください……ああん、ああん♥♥♥」

さつきまでみたく、深く奥の奥まで入らないけれど、その分、オマノコの入口近くを刺激されてしまいます。

「あはっ、はああんっ♥ あく、あふあ……き、気持ちいい……気持ちいいですう……あつあつあつ、イイい♥♥♥」

刃さんの腕が前に回されて、私のおっぱいに手の平を重ねました。そして、腰を動かし続けながら、ムニムニと私のおっぱいを揉みしだきます。

「あうっ、ひやうっ、ああああん……ああ、あはああああ♥♥♥ オツパイい……オツパイ感じちやいます♥ はひっ、あん、んああああああ♥♥♥」

私を攻め立てるその指先で、すでに勃起乳首を、おっぱいの中に押し込みます。

そのまま刃さんは指をブルブルと震わせました。すると、その振動でおっぱい全体に甘い痺れが広がります。

「ああああん、んああああああ♥♥♥ あつ、あううっ、気持ちイイです♥ あつ、あああつ、か、体中、気持ち良すぎてえっ、感じすぎちゃう♥ あつ、あひいひいひいひい♥♥♥」

刃さんの舌が、私の首筋をペロペロと舐め回し、ゆっくりと、蛇が

這うように私の耳へと移動して耳たぶをしゃぶり、耳の穴の中にまで侵入してきました。ゾクゾクずる快感に体が震えてしまいます。

「ひううううっ ♥ あっ、あああん……も、もうダメです ♥ また、またイキますっ、あっ、あああっ ♥ ♥ ♥」

「ん？ もうイクのか？」

「ひやうっ、ご、ごめんなさいい……あ、あひいつ ♥ こらえ性の無い身体でごめんなさい ♥ も、もうイキそうになってええっ ♥ ♥ ♥ あっ、あああん ♥」

「我慢するな。ホラ、遠慮なくイケっ」

「あああああああああああッ ♥ ♥ ♥ イク、イクイクイクっ ♥ イクッ、イクううううううううううううううううううううううううッ ♥ ♥ ♥ ♥ ♥ ♥ ♥」

刃さんの許しを得て、私は、呆気なくイってしまいました。

それでも刃さんは、全身を使って、私を愛撫し、オマンコを蹂躪するのを止めません。

「あっ、あああああっ ♥ あひイイイっ ♥ ♥ ♥ ああっ、わ、私ばかりイって、ご、ごめんなさいい……あああッ ♥ ♥ ♥」

私は、立て続けに絶頂を極めながら、自分からも腰を動かしてオマンコで刃さんのオチンポを扱きます。

「あっ、あああっ ♥ イイですか？ 月のオマンコ、気持ちイイですか？」

「ああ、気持ちイイぞっ」

「ああっ、う、嬉しいですよ ♥ 月のスケベマンコに、いっぱい出してください ♥ あ、あああん……あはあッ、あひ、ひうううっ ♥ 次は後ろから、詠ちゃんみたいにしてくださいっ ♥ ♥ ♥」

刃さんは、私の要望に応えるために、逞しいオチンポを、まだ私を貫いたままで、体を起こし、私を四つん這いにさせました。

「ひあああああっ ♥ ♥ ♥ あんっ、んああああ ♥ あん、あんっ ♥ おほおほおほおほ ♥ ♥ ♥」

刃さんが、私のお尻を鷲掴みにして、激しく腰を使います。その時、もう私はイキっぱなしになっていました。

「おおあああ♥♥♥ イク、イクっ、あああ、あひひひひひ♥♥♥
奥、奥に当たってええ…… あっあっあっ♥ オマンコイクうう
ううううううううううううううううううううううう♥♥♥♥♥♥♥♥
♥♥♥」

絶頂に震える私に、刃さんはさらにオチンポを突き出してきます。
「あヒイツ♥ あああ、し、死んじやうっ♥ 気持ちよくて死んじやい
ますうっ♥ ひっ、ひひひひひ……ああああん♥♥♥ お、おかしく
なるううう♥」

まるで動物のような声で叫びながら、私は、両手で船を掻きま
りました。パンパンと激しい音をたてて刃さんの腰と私のお尻がぶつか
り、逞しいオチンポの先端がオマンコの最奥を連続して抉ってきま
す。

「あああああああああっ♥♥♥ もうダメっ、もうダメえ♥ ダメ
えええ♥♥♥ イく、イク、イグううう♥ お、おとおおおっ♥
♥♥♥」

「出すぞッ！」

「ひぐううっ♥♥♥ 来て、来てッ♥ オチンポ汁来てえ♥ オマン
コに、オマンコの奥にくださあい♥ ああああああああ♥♥♥
刃さんのでイかせてえ♥ ああああああああああ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥
あああああああああああああああああ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

オマンコに深く食い込んだオチンポから、大量のお汁が直接オマン
コの奥に注がれました。

私は、断末魔のような絶叫を上げ、今日最高の絶頂に達しました。
頭の中で何度も白い爆発が起こり、理性や意識が根こそぎ吹き飛ば
されました。

私は、ただ、快樂だけの生き物となり、そのまま失神してしま……
「一人だけ抜け駆けして何やってるのよ。月は」
「えっ？」

この場にはいないはずの親友の声に驚いて、顔を向けると、そこには、
船の外からこっちを睨んでいる詠ちゃんがいました。

「詠ちゃんが海に立ってる？ へえう、夢か……」

「夢じゃないわよ。あんたが刃とやりまくるのに夢中になっている間に船が流されて、岸に帰ってきただけよ……」

そんなことよりも、よくも私をのけ者にしてくれたわね……」

六話（愛紗／なし）

〈周倉side〉

さて、バカンスも残すところ、あと一日となった。

月&詠は昨日頑張りすぎて現在、自分たちのコテージでお休み中。美以たちは大量にとってきていた木の実を抱えて北郷のところに
行っており、時々木の実を補充しに戻ってきている。

色々な遊びをして疲れてしまったらしい璃々は、紫苑と桔梗に手
伝ってもらいながら、最後にと、砂浜でお城を作成中。

朱里と雛里は、未だにコテージでダウン中。体力ないんだから、あ
んな無茶なプレイはやめようと言ったのに……

そして、北郷の指揮で開発された浮き輪に納まった愛紗と、それに
捕まっている俺は、二人で一緒に海で漂っていた。

海の状態と陸までの距離には、常に注意を払っているので、帰れな
くなることはない。

ついでに、この浮き輪だが、北郷は元々、朱里や月たちのような小
柄な娘たちを想定して作ったらしく、紫苑と桔梗は上からも下からも
輪つかの中に入れず、朱里たちが絶望した顔をしていたのが印象的
だった。愛紗と恋は上からは無理だが、下からなら輪つかの中に入れ
た。

「フフフ……」

「ご機嫌だな」

「当然だ。やっと、刃と二人つきりになれたのだから、最近じゃ、隊に
いる時は楓が、執務室にいる時は朱里たちや桃香さまが邪魔してく
て、本当に久しぶりなんだぞ」

「そう言えばそうだったなあ、何時も隣にいてくれたから、そんな風
は感じてなかった。

「配慮が足りなかったな。すまん」

「謝ってほしいわけじゃない。おまえを独占できる幸せをかみしめて
いただけだ」

俺は愛紗を抱き寄せて、キスをした。触れるだけのキスで終わらせるつもりだったのだけれど、放れようとした俺の頭を愛紗の手が掴んで放れないように固定し、さらに水の中で愛紗の足が俺の腰に絡みついてきた。愛紗、おまえはいつから、タコになったんだ。

「今、ここなら、誰にも気づかれずにできるぞ♥」

「ダメだ。一度始めたら、愛紗は止まらなくなるからな」

「むう……」

自覚があるからか、愛紗は名残惜しそうにしながらも、俺を開放した。

夕食は、最終日もあつて宴となったが、璃々や軍師コンビとメイドコンビが、早々に疲れて退場。

美以たちは北郷のところに行ったまま。

恋のおかげで食材が無駄になることはなく、食べるモノがなくなると、恋はさつきと寝に行ってしまった。

紫苑と桔梗は、大量の酒と璃々を抱えてコテージに帰っていき、残されたのは俺と愛紗で朱里たちをそれぞれのコテージに連れて行った。

「とりあえず、俺の宿（コテージ）に行くか？」

「ああ……いや、先に行つていてくれ。忘れ物をしてきた」

誘導も終わってそう声をかけると、愛紗は俺の返事も待たずに自分が泊っていたコテージへ行ってしまった。

しょうがないので、俺も自分のコテージへ戻った。

しばらく待っていると、愛紗がやってきたのだが、その手に持っていた忘れ物というのが、何と美以たちがとってきていた木の实だった。

「愛紗、それは……」

「美以たちが持ってきた木の実はだ。飲んでくれ」

「それがどういった物かわかってて言っているのか？」

「当然だ！」

思わず問いかけた俺の言葉に愛紗は自信満々に答えた。

「普段から思っていたのだが、刃は私たちに合わせて自分を抑えているだろうか？」

「は？ いや、そんな答えなくていい。何度も閨を共にしてきた男のことだ、わかっている。おまえはそんなつもりはないかもしれないが、複数で相手をしないとお前が満足しきるまで、できていない。」

お前の女として、一人でお前に満足させられないのが、悔しくてしょうがない。だが、この媚薬を使えば、それができる！ だから、飲め!!」

木の實の汁を杯に移すと、それを俺に押し付けてくる。

仕方なく受け取る。

「美以たちはこれを薄めて飲ませると言っていた。そのまま飲む場合だと強い即効性があるらしい。適度に薄めるとじわじわ効いてくるそうだ」

愛紗の説明を受けながら、受け取った杯をあおる。甘みが強く、若干のとりみがある汁を飲む。

愛紗が、いやらしい笑みを浮かべて迫ってくるが、先に言っておこう。

俺は状態異常を受け付けない身体なので、この媚薬も効果はない。

〈愛紗 side〉

私は床にひざまずき、刃のチンポを取り出す。それは、逞しく上を向いて反り返っていた。

どうやら、あの媚薬の効果は本物のようだな（愛紗に興奮している

だけ)。

「すごい……石みたいにカチカチで……はふう♥」

私は、これから私に徹底的に搾取されることを打ち震えて待つ肉棒に見入ってしまう。

そして、吸い寄せられるように、刃のチンポの先端に、口付けした。

「んちユツ♥　ちゅむむつ、ちゅぷ、ちゅぶぶ……ちゅう……れろ、ちゅぱっ♥」

チンポ全体を私の涎でタツプリと濡らしてから、私は、おっぱいの谷間で刃のチンポを挟み込んだ。

熱く脈打つ肉棒の感触が、私の興奮を高める。私は、両手で自分のおっぱいを真ん中に、よりチンポに密着するように寄せながら、身体を上下に動かす。

「はあん、あはあ……あ、ああん……チンポ、固くてゴリゴリして……あふう……あん♥」

血管の浮かび上がった肉棒をおっぱいで擦る感触に、私は抑えられない喘ぎ声を漏らしてしまう。

刃が、私のおっぱいに手を伸ばしてくる。求められることはうれしいが、今日は私が刃のチンポを搾り取るんだ。だから、刃の手をほらい、おっぱいをさらにチンポに押し付けて抜くと、その先端から透明な先走りの汗が溢れてきた。

「あん、ああん、あ、あふう……あはあ♥　フフ、先っぽが寂しそうだな……あふう……」

「イヤらしい眺めだな」

「もつと眺めてていいんだぞ♥」

私はそう言うと、舌をおっぱいに納まりきらなかった刃のチンポの先に絡めた。

「んちゅつ、ちゅぶぶ♥　ちゅうつ、ぢゅぶ……んん……んちゅつ、ちゅむむつ、ちゅずずう……ちゅぶぶつ♥」

「ツク」

赤黒い先端を口に含み、刃が喜んでいることを教えてくれる汁が漏れ続けている先っぽを舌で押し広げる。刃が小さく快樂の声を上げ

る。

それが、私の心を煽り立て、もつとその声が聴きたくて、私は息を吸い込んでとめどなく漏れる汁を舌ですくい取り、飲む。

「ちゅっ、ちゅぶぶぶ……んふうん……ちゅうちゅう♥ んぐぐ……ゴクリ、ゴクリ……ううん……んふう、……はぶ、うぶぶ、ちゅば別に美味くとは言わない。だが、愛おしい男が自分の奉仕で快感を覚え、その証として出している物だと思うと、その美味くない汁まで、愛おしくもつと欲しいと思ってしまう。

これまでの刃とのまぐあいを経験を総動員して、刃が感じるところを胸で刺激し、先端を咥え、唾まみれにしてジュルジュル吸い上げる。きつと他のみんなも同じようなことを夜な夜なしていたのだろうか、たつぷりと私のモノであると印をつける。

「ちゅッ、ちゅむむっ、ちゅず、ちゅぶぶっ♥ もつと、気持ち良くしてやるから……ああん、チュッ、ちゅぶぶっ、ぢゅずずっ♥♥♥」

チンポから汁を啜る吸引を、さらに強めながら、頭を振って唇で肉竿を擦り、胸と口の両方を使って責め立てる。ほのかに苦い汁が大量に漏れてきた。どうやら限界が近いらしい。

喉が渴いてたまらない。こんなにも唾が溢れてきて、刃のを飲みたくて仕方なくなっている。

「ちゅっ、ちゅずずっ、ちゅぶ、んちゅう……はふう♥ あむ、んむむっ、ちゅずずず……ちゅぶっ、じゅぶぶぶ♥♥♥」
「出るぞっ」

「ちゅぱっ、んんっ♥ 刃、どうしたい？ ああんっ、私におまえのアツいの飲ませたいか？ それとも、ちゅっ、ちゅう……んちゅっ、私にぶっかけたいか？ ちゅっ、ぴちやっ、ぢゅずずずずっ♥♥♥」

「……愛紗、飲めっ！」
「ちゅぶっ、ちゅぶぶ、じゅぶぶ♥ はふうん……だひえ……わたしのくひに、せーえきだひえ……じゅぶ、じゅぶぶ、んじゅ……ちゅぶぶぶぶっ♥♥♥」

先端部分を唇で締めて裏側を舌で舐めてすすり上げ、根本から胸でしごきあげると、口内に熱いモノがどくどくつと放たれた。唾と混ぜ

合わせるのも惜しく感じて、出したばかりの精を飲み込んでいく。

どろどろしていて喉に絡みつく汁を腹の奥に送り込む。断続的に放たれるソレで口の中が一杯になるから、次々飲んでいかないと追いつかない。粘っこくて濃厚な、これが子種の汁か。

出している最中も口は離さず、液をこぼさないようにしつかりと吸い付いていたから、出しながらもなお刺激されて刃が呻く。

私の口と胸でそんなにも気持ちよくなってくれて、嬉しい……だが、いつもとさほど変わっていないような気もする。

「刃、喉が渴いただろう?」

念のために、そう言っただけの木の葉の汁を差し出す。刃は、一瞬だけ眉を顰めるも、何も言わずにそれを飲んだ。

よしよし、今度これで、いつも私たちがさされているようにイキまくらせてやるからな。

刃のチンポをしゃぶっていた時から、私のオマンコは、刃のチンポを求めて濡れていた。早く入れたいという思いをぐっところらせる。

あくまでも余裕があるフリを。

今日は私が、刃にしてやるという姿勢で。

刃のチンポを握り、早く早くと私の意思とは関係なくダラダラと助平汁を垂らす自分のオマンコに押し当てる。

「今度は、ここでたつぷりと搾ってやる♥」

私は、左手を刃の逞しく割れた腹に置き、右手で自らの腰の下にあるチンポを握った。

「あああ♥ピクピクしてる……フフ、そんなに私の中に入りたいのか?」

熱くたぎった肉の大剣の感触にうっとりとしながら、私はすでにグツシヨリと濡れきっているオマンコに、チンポの先端を当て、ゆっくりとお尻を下へと下ろしていく。

「あ、あああつ、あん、く、くるう♥く、食い込んで……ん、んふううっ♥♥♥」

パンパンに張り詰めたチンポが私のオマンコの入り口に浅く潜り込むのを感じ、熱い吐息を吐く。

そして、入り口に当たってた硬いチンポがゆつくりと膣内に入ってきて、私を満たしていく。

「あぐうううう……んあああつ♥♥♥」

ズリズリと膣壁をチンポで擦られる感触に、私は快楽の声を上げ、肉棒の先端が膣奥に到達した瞬間、思わず、体を震わせた。

「うぐつ……あ、あはあ……ああん、刃ので、オマンコがいつぱいい……んひいつ♥」

私の中に納まった刃のチンポの存在感に、何時までも惚けているわけにはいかないと、牝の本能の赴くままに、尻を動かし始めた。

「はっ、はふっ、んああああつ♥♥♥ あ、ああん、刃……くひい、お、重くないか？」

「大丈夫だ」

刃の返事に合わせて体の中でチンポが、もつと動けと催促するようにビクビクつと動いた。

「はううん♥ んっ、ああん……ああああ、あつ、あはあ……んひっ、ああん、あううっ♥」

抑えようにも抑えられない甘い喘ぎ声を上げながら、私はさらに腰を使い、グチュグチュツと卑猥な音が響く。

「あふあ、あん……あああああつ、あはああああ♥ す、すご……ひうっ、あうっ、ああん……あつ、あはあん、ああん♥♥♥」

刃に気持ちよくなってもらわないといけないのにふしだらな私は、腰の動きを少しずつ変化させて、オマンコの中でも感じる場所にチンポを擦り付けて自分の快楽を望んでしまう。

「あううっ、んああああ……あ、あふう……はひいつ♥ あ、あああつ、あふ、あはあ……んっ、んふう……あ、あうう……くひい……はふう♥ あ、あああああああつ♥♥♥」

不意に、刃の肉棒に膣内のある場所を抉られて、襲った快楽に刃の胸板に手を付いて動きを止めた。凄く気持ちよかった。

見つけた……見つけちゃった……凄く気持ちいい場所♥

ダメなのに、刃を気持ちよくしないとイケないから、私ばかり気持ちよくなっちゃいけないのに……

でも、私が気持ちよくなつてオマンコ、キュンキュン締め付けたら、刃もきつと気持ちいいはずだ。気持ち良くなるに決まつてる♥

そう、これは、刃の為、刃の為だから、刃のチンポにオマンコの気持ちいいところをいっぱい擦り付けても仕方ないんだ♥

「ひあああああつ♥♥♥んあつ、あくう♥ あああん……はっ、はうっ、はううん♥ あつ、あはああああああ♥♥♥」

私は、声を上げるを我慢するのをやめた。刃の身体にしがみついて腰だけがまるで私の意思から独立した別の生き物になったみたいに振りたぐる。

「あうっ、あは、あはあん♥ ああああああ……あつ、あひいつ♥

あううっ、あ、あはあん♥ あうううう……い、イク、いつてしま
ううっ♥ あ、あはあん……あうっ、あひいいいいいい♥♥♥」

制御できない快樂に、私は絶頂への階段を一気に駆け上がっていく。

「ひううっ♥んああああ♥♥♥ あああ、ダ、ダメえ……本当にダメっ、あああつ♥ あ、あああッ♥ が、がまんできないいつ♥」
「いいじゃないか、我慢するな。イケ」

刃の声が聞こえた瞬間、チンポが、あの、気持ちいいところを擦り上げて一番奥を突き上げた。

「あひいいいいいいいいいつ♥♥♥い、いいい、イクっ♥ あつ、あああああつ、私、私、いつてしまううう♥ あああああ、い、い、く、いくっ、いくううううううううううううううう♥♥♥♥♥」

ビクビクと全身をおののかせて、私は絶頂に達した。

〈周倉side〉

絶頂に達した愛紗から一旦、チンポを抜いて、抱きしめていた。

正直、じつとしているだけでも、うねる膣内が気持ちいい。さつき

の愛紗が絶頂するときも、もう少しで俺もイクところだったので、小休憩中だ。

「…………この汁は、本当に効果があるのか?」

「あっ」

俺の腕の中で惚けていた愛紗は、そう言うとき木の実ジュースが入った杯を手に取り、その中身を止める間もなく飲んでしまった。

〈愛紗 side〉

身体が、燃えているかのように熱い。それでいて頭の中は、どこかすつきりしていて、何をすればいいのかが、考えるよりも先に動いていた。

抱きしめられているだけでも気持ちいいが、もっと深く密着したいという衝動で、私は、刃の唇に吸い付いた。

「はふうん…………ちゅうう♥、んちゅちゅ、ちゅぶぶ…………あはああ♥♥♥
んちゅず、んんんんん♥♥♥♥♥」

接吻がとんでもなく気持ちいい…………刃に頭の中まで吸われているみたいで、舌を吸われるだけで、頭が痺れ、一気に達してしまう。

いったい、何時間していたのだろうか? それとも、実際は数分くらいしか経っていないのかもしれない。

私の乳房を、刃が揉みしだく。右に左に引っ張られたかと思えば、押し込まれ、擦られる。

何時もならくすぐったいと思ってしまうくらいの力なのに、気持ちいい。

なんだか、ずっと身を預けていたくなるような優しい愛撫だった。絶えず送られてくる快感の波に、私は晒されていた。

全く手が付けられていないオマンコは、助平汁で水浸しになり、太ももを擦り合わせるだけで、気の遠くなるような快感が体中を溶かしていく。

断続的に襲ってくる絶頂の大波に飲み込まれ、おもらしなんてめじやないくらいだらしなく、股を濡らし切っていた。

もう私の準備はとつくに迎えられる状態だというのに、刃は一向にオマンコにチンポを入れないどころか、触れようともしなかった。

私が何度も腰を擦り付けて催促しようとしても、その度にガタイに似合わない身軽さで逃げられる。仕舞いには体中が快感で痺れて力が入らなくなってくる。

「ちゅ、ちゅうう、ちゅば……刃のよだれ、おいしい♥ れろお……おいしい……もつとのませてくれえ♥ もつとほしい……ちゅ、ちゅちゅ♥♥♥」

美味しい、美味しい過ぎる……刃の口の中に舌を伸ばして、口から垂れるよがれを追いかける……あ、また涎零れちゃう……もつと飲まして、もつと出して♥

もつと刃の涎を搾り取ろうと舌を伸ばすけれど、それより早く刃が顔を離れた。どうして？ どうして止めちゃうの、止めないで、もつと涎飲ませてほしい、飲みたいのに……私がかか気に入らないことをしてしまったのだろうか？ ヤダヤダ。刃、嫌いにならないで！

「今度は胸を弄ってやる」

「やあ……やあだあ、ダメ、止めないでえ、もつといっぱいちゅう、ちゅうしてえ♥」

刃が何を言っていたけれど、チュウがしたくてたまらない私は聞き逃してしまった。おっぱいがどうか言っていた気がするけど、それよりもちゅうしてえ……

ドロドロに蕩けた頭で、刃の動きを追う。刃の両手が、乳房の頂点に、恥かしいくらいに大きく勃起した乳首を優しく摘んだ。

その瞬間、ちゅうの事なんて忘れた。

そう言つて、乳首攻めが終わったけど、私はそれを喜ぶ余裕はなかった。

何度も絶頂の大津波に攫われた私の頭は、ものを考えることなどできないほどに惚けていた。

ダラリとだらしなく舌を垂らし、硬く尖った乳首を突き出すだけでなく、愛撫が途切れた後も、膣口からは取り留めなく愛液を垂れ流していた。

刃の大きく固く膨張したチンポが、オマンコにあてがわれる。それだけでゾワつと背筋に快感が駆け抜けた。

一瞬にして、思考が呼び戻され、状況を認識する。認識した瞬間に、オマンコの奥から噴水のように助平汁を吐き出し、ビクビクと腰が痙攣する。

ついに来る。

もし、入れられたら、どれだけのモノかも想像できない。自分が自分でいられる自信はなかった。

でも、恐怖など、微塵も感じてなかった。あるのは、快樂への期待。ただそれだけだった。

くちゆくちゅつと音を立てて、亀頭と膣口が接吻を繰り返す。その度にオマンコの奥の奥が疼き、どんどん欲求が高まっていく。

既に逆らう気持ちはまったくなかった。

度重なる絶頂で、自由の利かない体を動かして、両手を膝の裏に回し、両足を自分の胸にくっつけて左右に開く。

今の自分にできる精一杯の誘惑の体勢。メスとして服従するべきオスへの屈服の証。

「いれて♥ はあはあ……おくまでつつこんで……かき回して、じんのきがすむまでわたしをおかしてくれ♥♥♥」

刃が私に覆いかぶさるように、チンポの向きを合わせる。

ずぶつと擬音が頭に響いた。視線を下げると、亀頭が私の膣口に入っていた。

「あ、あああああ♥♥♥ あ、あああん……はいってくるう……あつ、ああつ、あひうう……ああああん……あああああああああ

ああああああああああああああああああああああああああああああ
♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥

ゆっくりゆっくりと、刃のチンポが私のオマンコの中へと沈没していく。チンポが私の中に入って見えなくなるたび、私の脳裏に火花が散る。

私は、大津波よりも激しい嵐に身を投じた。

※ ※ これより♥♥♥♥で絶頂したと思って読んでください

「おおおう♥ あっ、あああっ、あひいいいいいいいい♥♥♥♥ ああんっ、コ、コスれるうっ♥ なが、なががああ……あぐぐうっ、うああああっ♥♥♥♥」

刃のチンポが膣壁を削り、押し進む。敏感に発情されたオマンコは、一気に絶頂へと昇り詰めた。

「あああん♥♥♥♥ イクう……あっ、あああん♥ も、むりい、もういい♥ ああああっ♥♥♥♥ ひああああああああ♥♥♥♥」

チンポの先端が、私の一番奥を押しつづいたとき、本当の、淫らな、それでいて甘美だな、淫獄の始まりだった。

「んおおおおおお♥♥♥♥ イクっ、イクイク♥ またイクうううっ♥♥♥♥ ダメえ、ダメなのおおっ♥♥♥♥ と、とまれえ、やめてえ♥ もうイキたくな、ひぎいいいい♥♥♥♥ うおおお♥♥♥♥ ま、またあっ、おほおおおお♥♥♥♥」

不規則にチンポだけではなく、刃は己のすべてで私の女を刺激していく。浅く膣の入り口をチンポで突かれたかと思ったら、突然、最奥を勢いよく突かれてイカされる。

時には回すような回転で予想外の刺激でイカされ、時には奥を擦り付けるように突き上げられてイカされ、時にはおっぱいを力強くつかまれてイカされ、時には恥骨を擦り付けて刃の指でお豆さんを押し潰されてイカされる。

「あっ、うああああああっ♥♥♥♥ また、またイクううううっ♥♥♥♥

あひっ、はひいいいいっ♡ イク、イク、イクうううううううっ♡
♡♡ あああああつ、わ、わたしばかりイツ、おあああああつ、イ
クううううううううう♡♡♡」
「ッー」

ドビユツ、ドビユツと、刃が私の中にアツい衝撃を放った。

「あ、あああああああッ♡♡♡ いひいいいいいいいっ♡♡♡ あ、
あ、あああ、イク、だされてイクうううううううううううっ♡♡♡」
灼熱した奔流が体内を満たしていくのを感じながら、私は、さらな
る高みへと押し上げられた。

終わったと思っただが、刃はまったく間をおかずに、体を起こして私
を四つん這いにさせる。

その間も刃の逞しいチンポは、まだ私を貫いたままだった。

「おっ、おひいいいい♡♡♡ そ、そんな……ゆるしてえ……せ、せめ
て、す、すこしだけでもきゆうそくう、やすみをお……おとおおとお
おとおおっ♡♡♡」

私の訴えなど無視し、刃が私のお尻を鷲掴みにして、激しく腰を使
いだす。

「ああああ♡♡♡ イクイクうううううううっ♡♡♡ あああ、あ
ひひひひひ♡♡♡ おくう、おくにあたつてえ♡ すごいのとまら
ないひひひひひ♡♡♡ あっあっあっあっ、イグううううううう
ううううッ♡♡♡」

まるで、自分が刃の性欲を吐き出すためだけの玩具になったような
気がした。そして、そう認識すると、ゾワツと言い表せない快感が、身
体を蝕んだ。

「あひああああああつ♡♡♡ し、しぬうううっ♡ きもちちよす
ぎてしんじやううッ♡♡♡ あひい、ひひひひひひひひひひひひひひひ♡
♡♡ おかあああああ♡♡♡ お、お、おかしくなるううううう
ううう♡♡♡」

まるで動物のような、いや、とつくに性に狂った獣となった私は、声
を上げながら、両手で寝台を掻き筆り、この淫獄から逃れようと無駄
なあがきをする。

パンパンツと激しい音をたてて刃の腰が私のお尻に当たり、逞しいチンポの先端がオマンコを連続して抉る。

「ああああああああっ♡♡♡ も、もうダメえ、もうダメなお♡ ダメええええええ♡♡♡ あっ、ああああああっ♡♡♡ イグ、イグ、イグうううううう♡♡♡ お、おとおおとおおお♡♡♡」

刃の激しい動きに合わせて乳房が揺れ、勃起した乳首が痛いくらいに寝台に擦れてさらに絶頂してしまう。

「あひっ、おひいいいい♡♡♡ しんじやう、しんじやうのおっ♡ あっ、ああああああっ、ころしてえ、いつそ、ころしてええ♡ あヒイイイイイイイ♡♡♡」

もう、私の身体も心も、完全に刃に屈服していた。そんなものは当の昔に至っていたが、蜀軍であいつの上に立つ立場であるという一つだけに縫って保っていた仮面が粉々に砕け散った。

「ああああああっ♡♡♡ じんさまあ、じんさまああああああっ♡♡♡ あひああああ♡♡♡ あ、あいしやは、じんさまのチンポどれいですう♡♡♡ あっ、ああっ、いつちやつたあ、いつちやつたのお♡♡♡ あはああ…いい、いいい、いぐ、いぐっ、いぐうっ、どれいせんげんしていぐうううううううううう♡♡♡」

「なっ、くう…出すぞっ!」
「ひぐううううううっ♡♡♡ きてえ、じんさまのチンポじるきてえ♡♡♡ おまんこに、じんさまいがいしんにゆうきんしのあいしやおまんこにチンポじるください♡♡♡ あああああああ♡♡♡ ドピュドピュチンポじるでイかせてえ♡♡♡ ああああああああッ♡♡♡」

刃さまのチンポが抜けそうなギリギリまで下がり、そこから一番奥へ、いや、その奥を突き抜けて叩き込まれたチンポから、大量のチンポ汁が注がれた。

「イキユウウウウウウウ♡♡♡」

私は、断末魔のような絶叫を上げ、今日最高の絶頂に達した。頭の中で何度も白い爆発が起こり、かけら程度に残っていた理性や

意識が完全に吹き飛ばされ、そのまま失神してしまった。

〈周倉side〉

翌日、当然というべきか、愛紗は完全にダウンしてしまい、とてもではないが、馬に乗れる状態ではなかったため、馬車に揺られての帰還となった。

その様子に、朱里たちに何があったのか聞かれたため、奴隷宣言の事とかをぼかしつつ、木の実ジュース飲んで暴走してイキ狂ったことを説明すると、半数は、その効果に顔を引きつらせ、残り半数は、興味津々といった顔であった。

どうでもいい話だが、北郷も、ダウンしてしまっているらしく、愛紗とは別の馬車に乗っている。まあ、あいつは乗馬なんてできないから、いずれにしても馬車だったんだが……